由井正雪

塚原澁柿園

由井正雪

（一）

「大事ぢやは〳〵。彼騒擾は强訴おざるは。」

「見た人數は百四五十人、一手は今御山御門番が陣屋に寄せて、一手は此處へ推參するげに見え申す。」

七月の炎天、燃るが如き燒砂を蹴立て〳〵物聞の足輕兩人、息も繼ぎあへぬ注進の間もなく沖に轟く土用波の餘響に合せて叭々といふ喚喊、間々に聞ゆる竹螺の音。素破といふ間に、蓑笠に身を固めたる血氣の百姓七八十人は「御願ひ、お願ひ。」「御助け、お助け。」の諸聲の裏に押し來りぬ。

押し來れるは駿州有渡郡大谷村の東端なる、大庄屋なにがしが家、今の足輕が主なる武士の旅館前なり。

奥の方には主なる壯き武士、

「ナニ强訴……寄すると言ふか！」

再囘とは問はず、床に飾れる具足櫃より紺絲の小腹卷取て投げ懸け、綸羅の帷子を其上に套りて、長押に倚せたる九尺柄の槍を小脇にしたる、其人の年紀は廿五か六七なるべし、面の色飽まで白く、鬚青く、脣紅ゐにして、天晴稀代の美男なるが、彌るにも似ず、脊村は偉く、腕の肉硬くして、帶びたる兩刀も寸延の長刃、槍柄も日向樫の把握を太く、鐵具しげく製作せたり、加之も其の意地强く、耐へぬ氣象は、緊束りたる口元、勇氣を持てる眼裏、瘢癖を見せたる眉宇のかゝりにても知られぬ。

此の面貌と、身の道具、人馬の强健さとにて推すれば、此人大家の小姓立にて、嚴の御寵と、其身の器量とに登庸られて、物の頭、奉行ともなりたる仁か？

覩る目は違はず、昨日建てたる此門の新らしき標札を見れば、此人は是れ、紀伊殿御内の牧野兵庫！　もとは金彌とて、大納言殿（頼宣卿）御祕藏の小姓なりしを、目今は安藤三浦並になされて老職の一人に召加へられ、權勢飛鳶を墜すばかりの出頭人なり。

馬率ッ！　といふ言の下に、栗毛の駿足は率立てられぬ、兵庫忙しく其の鞍壺に跨がる時、

「御願ひでおざる。お願ひでおざる。御救助のお願ひ……憐憫のお願ひ……。」喊の叫號ははや門前に迫り來りて、鎖したる門扉を撲敲く聲、板屋の震と凄じきに、家内の男女は疾に逸失せて一個もあらず、殘れるは兵庫主從廿餘人、其餘は御宮（久能山東照宮、御修覆の御用として召伴れたる大工番匠石斲の工、なれど此等は事變の初發より頭を埋め臀を窄めて、只怪我せじと念ずるのみ。「うゝ大門開い！　奴原、推參！」勇める主に飼立てらるゝ家來とて、臆れたるは無かりけり、馬脇の士兩三人ばら〳〵と走り蒐つて大門颯と押開けば、得たりやと大勢、むらむらと入らむとして、但見れば、馬上の兵庫、丹花の脣を一文字にして、黒漆の如き眉を蜂谷の上まで掀昂げたり、手にせる槍は我を芋刺にせむずる擬勢、左右に附隨ふ家來們も、新宮育ち那智生れの死生知らずといふ面魂、闔の中へ其の泥脛一寸とも踏込まば！　と疾視へ詰めたる……。

此の鼻嵐に噴かれて門外なる脚底は漂盪きぬ、「こりやならぬ、迂濶と入るな、後勢を待たうぞ後勢を待たうぞ。」小頭らしき者は走り廻りて制すれば、彼等が中に叫喚く聲連りに發りて、「三四郎べえ呼べ。安居の背兄さ呼べ。」こ

こに此の嗷訴の來由を尋ぬれば、去年、寛永十九年、關東筋大旱魃して、伊勢以東、相模以西は田畑の立毛皆枯れたり、かくて七月の中旬より打翻したる陰霖の降り續けるもの、月を踰ゆれども歇まず、海道の川々悉皆く出水して纔に遺存れる作毛を押し流す、これによりて今年東國大凶饉とは聞えしに、其の翌年（廿年）は又春の季より瘟疫これらの國々に流行れて、人の病み臥すもの其數を知らずといふ。江戸柳營にても此の注進に驚かれて、救恤の使者を派遣し、所在の倉廩を開きて、飢を賑はし、醫藥の施行、さま〴〵の手を盡さるれども、去年を承けたる今年なり、其事意の如くに行はれで、人心自然靜穩ならず。かくてはとの又衆議ありて、普く御領の國々に令し、反別壹升の過米を出させて彼の救恤に費えたる粮米の不足を被充しめらる、饑に疫に憊れたる人民、ひたすら其の難義を訴へたれども、有司は何の警戒むる處かありけむ、斥けて用ひず。然るに當國は、駿河の名におへる富士安倍藁科の川々の洪水に去年は暴され、今年はまた八丈島より潮風に乘りて來といふ疫鬼に祟られて、住民の難澁他所には超えたるに、年貢御免とこそあられね、結句は過米を徵發るゝことたとひ首を召さるゝとも能はじ、といふ數回の愁訴、其が聽れぬ果の、竟に此の嗷訴とはなれるなりき。

（二）

彼等の門内へは討ても入らず、此方も出でゝ蹴散さぬに、閾一つを敵味方の境界にして瞰へ合うたり。と看る〳〵、平松の方よりして同じ蓑笠を身に着けたる、彼等が同類の一人と見ゆるもの、喘ぎ〳〵走せ來れるが、其奴は聲を高くして、「無禮せな、其の御衆べえ手指しては濟まぬぞ。退け〳〵。」

彼等が中に叫聲は發れり、「や、背兄が來た。三四郎が來た。」「己に任せろ、お主等は退けお主等は退け。」言ひも敢へざるに彼は竹笠をかなぐり棄てたり。

看れば其齢三十左右なる、鼻隆く、眼鋭く、一癖ありて見ゆる壯者。蓑の垂を背後へ刎ね除け、一通の折掛狀、表面には御訴と筆太に認したるを青竹の尖に挾みて高く掲げ、さりともと危惧みて、待てろ〳〵と支撐へむと袂を握る許多の手を右左りへ拂ひ斥けつゝ、「やア殿方、聊爾ばし申さぬ。紀伊國樣御家老樣と見申この御願ひ。三十四ケ村數百人の男女に代りましての御願ひ。安居村の三四郎、兵庫樣、御前へ出でゝ申上げまする仔細がおざる。」大音聲の大息切たる、其面には必死を見せたり。

驚破曲者！　遣るな、止めよと牧野が馬脇はむら〳〵と寄る。我が大將の取擒られぬと見て門邊に渦巻たる一揆等は、これを掩護むとどやどやと入る。叢々と混々とは一轉瞬間に衝突して、一場の亂戰、血雨の今や降らむと見る處に、「え、來な〳〵。こゝは已一個！　一個に任せろ。三四郎一人死ねば澤山ぢや！」かの青竹を遮擋にして押し戻す。這の理態を見たる兵庫、「やア汝ら待て。素奴まづ拘け！」

押戻されたる百姓、制止られたる馬脇、心ならずも煞と分れて、寸後の容子什麼と、又かの門閾を境にして疾視み合ひたり。兵庫は聲高く、「其處な三四郎とやらむいふ奴、申すといふ仔細は何事ぢや。」

馬の鼻に額づきたる彼の壯者は、先づ感激の聲を搾りつ、「あ、殿樣、忝じけなうござります。御尋問、有難う存じまする。仔細、私不調法の口から申上げうより愚筆で認めましたる訴狀がござります。何卒これ御覽下されて……」

「むゝ、これへ越せ。」

訴狀は兵庫が手に入りぬ。彼は槍を其馬の平頸に引つけたる儘、表包を捨て、弓手に押開き、彼面を一目、此方を一目、鋭き眼に覽較

べつゝ、驕てする〳〵と讀み了れり。讀了りて兵庫、猶其狀を口裏に誦するやうなりしが、「三四郎、汝は不屆なる奴な。身の難澁の是非なしとは言へ農民の分際として天下の御政事を批判する……剩さへ御禁制の强訴を企つる……汝、御法の重いことを知りをらぬか。」聲色の猶激しきを見るより、馬脇は又も素破と眼を注ぎて手藥煉ひけば、門外は声び吶と喧噪き立てり。三四郎、此彼を一睨して、「存じ居ります。存じをればこそ一命は無いと覺悟してをりまする。」「ふむ、一命は無い？　覺悟した？　汝、それ程の覺悟で何故徒黨を組む？」「いや、三四郎徒黨は組みませぬ。訴狀にも見えたる通り、此の强訴は私一人の發意にござります。三十四ケ村の男女に代りて三四郎一人の致す所爲にござりまする。」馬上の人は耐へずして大喝せり。「やッ甘にすれば乘勢る奴！　紀伊國武士を盲目にするか！　先刻よりの門外の奴、彼等、何者ぢや！」礫と睨られても彼は臆せず、居丈高の毛胸を披きて丁と撲ち、「殿！　彼等は彼等、我等は我等、徒黨も組み申さねば申合せもせぬ、紀伊國樣御家老、御目明と存ずればこそ斯くは申します。」「えッ又しても兒童を騙す……」「いや虚妄ではない。御領は遠へ、駿河の者別しては久能の御山御附の民、大納言樣御一家の御恩忘却のもの尙だ一人もござりませぬ。これに依て此の御郎も、紀伊國御家老たる御身樣の御着を待て申出まいた義にござりまする。」

（三）

紀州の家老、目明といふ謎語も、徒黨を組まずとの辯解も、此男、あの大勢の老若にかはりて身一つを拋げ出したる覺悟の口なるは既に解せたり、其の健氣さも殊勝なるが、さるにても我主なる亞相殿（賴宣卿）駿河遠江の御所知を替られて今の紀州に移らせ玉へるは、はや廿五年の往昔と聞く（賴宣卿、慶長七年の誕生にて、當時襁褓の料にとて駿州久能を賜ふ。慶八年常州水戸に封ぜらる、廿萬石、同き十四年水戸より駿府に移り駿河遠江二國を領せらる、五十萬石。元和五年駿府より紀州和歌山に轉らる、紀伊幷に伊勢にて五十五萬五千石。此の移封元和五年より今年寬永廿年まで廿五年）其の長久き間、彼等が餘澤を忘れずして仰慕し奉つること如是きは、そも什麼なる善政や施し玉へる、民を視ること傷めるが如き御慈悲は現今とても親しう見まゐらするも、是は又た今更なる奇談かなと、「やをれ三四郎、不思議を聞くぞ。汝、大納言樣御一家御芳恩を忘れぬから、猶其の御手にすがりて一同の難義を救はうとか？」問ひ懸くる兵庫の眼裏は、やゝ緩和びぬ。三四郎は語は無くて、首を低れたり。

「むゝ、此事、紀伊國殿御恩といふを、それ程、眞實、忝なく、目今も念ふか？」「存じます。親子一家再生の命の親樣！　寢た間とて忘失ませぬ。」

兵庫甚麼とか思考けむ、持たる槍を愛乎と棄て、彼の訴狀手にしたる儘にして、馬上より鏘然と下り立てば、家來は急ぎ床几を直しぬ。「三四郎近う寄れ。我殿を命の親といふ、其の仔細？　次第によつては兵庫、其方らが後楯となつても取らせうぞ。」夢みし如き面色にて、三四郎は彼の面を瞻仰しが、「いや、心急ぎの場、御禮は後から……。先づ其の仔細。」彼は些しく身刷しつ、語り出づる其次第は、元和三年の秋の事なり。此年伊豆駿河二ケ國は昨年（寬永十九年）に等しき大饑饉して、豆、芋の葉は言ふに及ばず、山には草蘇、海には貝藻の類も搜索盡くしつ、人々は枕を竝べて餓死を待つのみの事となりしに、一日村の行人來りて、家內の者皆出でよといふ。三四郎の父母なるもの驚きて蹶踊ひ出づれば、一艇の女駕に召されたる上﨟、其の駕脇の士して一人宛二升の米

麥を與へられ、恙くして村内殘りなく賑救されて御通りなる。彼方は、そも誰か、神か佛か、と俯拜む傍に村長來りて、お主ら知らざるか、あの御方こそ勿體なくも御領主樣御母親樣養珠院の御方、この程より中將樣（賴宣卿この時參議從三位左近衞中將たり）に御強求ありて、御化粧料二千石を五ケ年が間御廩より御借りなされ、難澁の我々をこの樣に御救恤下さる、今の御米、一粒だも粗末にせば、それこそは御罰が中るぞ！「……」爺樣に觸れて去なれました。其時には親父も母も肇を發げて——子供の私さへ、一所に涕泣まいた。」と語ふ臉には、古を想ふか、今を悲むか、ぼろ〳〵との淚を見たり。兵庫も覺えず感歎の首を傾くれば、馬脇廿餘人も耳を澄して、門外なる大勢も闃然となりぬ。三四郎は猶土に手をつきたる儘、其後間もなく御小屋が懸りて、御賴の御施行となりまする。翌年は御年貢御免。其の翌年は檢見衆が見廻られて半個の上納といふ、其の七月……」門外なる大勢は、此時突如擧へて、「……御知行替になりましたはよ！」三四郎又引取りて、「御跡に渡せられましたは……あの大納言樣」「大納言樣とは、今の將軍家（家ナ公）御弟駿河殿とて世人の讃れし忠長卿なり、此處は我も知る、寬永九年に大逆の罪をもて御身上滅却に及びたる程の御方、聚斂、酷虐、其の徵發の苛重かりしも知れたる事なり、菩薩の後に鬼を得たる彼等が苦惱、そも甚麼ばかりぞ、と兵庫愁然たる眉を皺めて、「何とありしぞ、其の御成敗？」一申す迄もおざりませぬ。なれど其の御時代より猶苛酷いは、今の酒井殿……」「えツ御城代の御支配、非理いとか？」兵庫が未だ言ひ斷らざるに、彼處なる百姓原何物にか驚きたる、群鴉の噪ぐが如くに門内指して動搖き入れり。

（四）

三四郎は呵呀と愕く、兵庫、何事ぞと床几を放ちて門外に走り出でつゝ、但見れば、是れ先刻の注進が、御門番の陣所へ寄せしと云ふ彼等が仲間の人數なるべし、看る〳〵五七十人の百姓原は蓑笠も四度路に、久能の山の岨沿を此方に對ひてさん〳〵に逃げ走る。其後より源氏車の小旗を振りたる一隊の兵、勝鬨いかめしく、突棒刺叉熊手長柄の獲物々々を手々に執りて、兎狩か等のやうに叫き立て捲り立て、一頭も遁さじとの勢もて逐ひ遁る。其の追擊を馬手に看做せし今一隊の人數百人餘は、切火繩の小筒十四五挺を眞先にして、海際の眞砂路を眞一文字の此の大谷村をさして寄する狀なり。「やア、彼は誰が手ぞ？」後に續きて馳せ出でたる三四郎、「山手のは御門番の榊原殿が手、海邊のは今申した酒井殿衆。」「むゝ事は急ぢや。さりとてお事ら……縛らすも可愛い。遁い、遁げい。」三四郎は連忙しく、「滅層な！」「滅層でない。お事ら紀伊國を輒むといふ、紀伊國の牧野兵庫賴まれた。疾う落ちい！」愕然たる兵庫が面を瞻上げ、視下し、「あ、忝けない、御芳志は生々世々！　然りながら落ちたとて迚も遁れませぬ、遁れぬを遁れうとすりや權樣御難義は眼前。其れよりも最初の覺悟通り私が身一個大勢の命に替ります、それ本望ぢや。訴狀は御手、思ひは置かぬ。駿河男兒の意地も覽て下されい。」

什麼其の決心の男らしきよ。其の男らしき決心の什麼彼們主從が胸を擊ちたるよ。彼們は只服裂るばかりに其目を見合せ、洟を啜りて、其臉にはら〳〵と翻せる淚滴を拂ひも敢へざるに、音響は忽諸耳朶近く來れり。「這、奴原、紀伊國殿御家老旅館へ入り替つたぞ……擊て取れ！」頭人らしき士の下知に伴れて、先手の鐵砲はたはたと火蓋を切りぬ。無法に驚く主人より、耐らぬ兵庫が馬脇は叫と叫續ぬ。「やア和忽！紀伊國の士こゝにをりやるぞ。旁、聊爾！」

鉢栗眼、附鬚、大奴頭の角鍔、何さま一揆とは見えざるが躍り出でたるに、寄手は倒ツて呆れたり。「こりや如何ぢや、强訴人と紀伊國衆と一緒になツたは！」叫縷く紛人原が背を搔き分て、現はれ出でたるは頭人なり。「是れは御城代酒井山城守が老黨、根方彌五兵衞。昨日の御案内にて承知いたいた、紀伊殿御家老牧野兵庫どの此家におざるか？」

彼の口誼は禮ありて聞ゆれども、既に是れ個光景なるに些とも油斷せず、其身の周圍には、此方のにも劣らざる偏强の大奴七八人を五の目に立てゝ、乘馬をさへ引つけつ、猶且つ種子島の小銃三挺をも切火繩して持たせたり。兵庫、此體をぎろりと睨、「牧野兵庫は小生ぢや。根方氏彌五兵衞どの御身は何用あツて渡せられた？」「何用と仰せらるゝとは？」「兵庫が旅宿へ其の異體して。」彌五兵衞は、意得たりと逆はず、「支配地の民、測らざるに强訴を企て、御旅館へ推參と、承はツて、御見舞として取敢へずの參上、見申せば大勢の奴原……段々の御無禮は改めて御謝罪の申上ぐる。御座なさる場所の近間で此上の騷動、御氣色も如何と存ずれど兎角は此儘には棄置かれぬ者、一々に繩を打ちて申す。御免なされい。」兵庫それをば後眼にかけて、「いや、御無用ぢや。

拠こそ當時の强者として、江戸にても御心を隔かるゝ紀伊國殿、其の御威勢を肩に被て家老の兵庫すら横に車を推し歩くか、と彌五兵衞は驚きたり。

（五）

紀伊殿、いかに當將軍家の御叔父にましませばとて、其の家老の牧野兵庫、いかに其の御威勢を嵩に被ればとて、現在の犯人を眼前におきて、御城代の老黨たる士、此の横車を其儘には通させ難し、と彌五兵衞少時思案して、「無用とは仰らるれども、御大法の前……其の意趣の分曉ませいでは、捕者いかにも……」「迷惑とか？　これは當方への駈込者ぢやよ。」「えい、駈込者？　這奴原を？」と彌五兵衞は其眼を瞠れば、物の結果を如是と見し彼が伴侶は、いづれも其手に忍の鯉口を寛ろげたり。

主も此勢にや疲憊られたる、俄に其屓屬を丁と張りて、「それで御分は、御貰しやるとか？」「應、駈込者で屢まで貰す。」「駈込者でも苦しうない、這奴らは皆罪犯の者。御渡しやれい。」「一遍るをば冷笑ひて、空嘯きぬ。「紀州には駈込者を出すといふ法は無い。」「それは紀州の法……。公儀御法は？」「それは其方勝手の隨意ぢや。」「呀？　勝手の隨意？　然らば彌……？」兵庫、這回は囘答もせず、首掉を掉れり。「……手籠にしても？」「やア手籠？　大納言殿家老牧野兵庫を手籠にせうな？」

突然たる大喝、風雨の如きに、彌五兵衞は臍を奪れて覺えず二三間を丁歩けば、供も組子も一つに崩潰れて十間餘りを吶と退く。這、口ほどにも無い奴、それで自己等が手籠になるか、と兵庫が馬脇は追うて出づ。なれど彼等は大勢なり、後勢を頼みにして逃げたる足を踏み直し、鐵砲直々と前に進めて、一歩近らば牧野も一揆も只一擊と勢ひ籠む。

それにも怯れで紀州方は躙々と倚る。此距離は五間に近し。時に半空の炎日は火鏡の如くに面上を射て、額に流るゝ膏汗の睫まで合ふ眼に浸入るを、彼も我も拭ふ暇すらなき阿吽の咄嗟。

但見る、兵庫が手の背面よりして躍り出でたる赤漆の大鞘あり、彼は雙方が間に割て入り、大手を廣げつゝ、仁王立に突立ちたりき。「各位御無用。紀州殿御手に駈込だは、斯くいふ安居村の三四郎、强訴の本人なり。さいはひの御城代御手、改めて御訴訟申す。何卒三四郎召伴れられて御鞫問下されい。」これに驚きて城代が隊も、

其銃口を稍空に向くる時。「やア汝三四郎……汝待て！」又もやの叫喚は起りて、續きて馬を躍り出せる、是れ牧野兵庫なり。其れと見るより三四郎は轡面に葬と縋りて、「あッ殿、こゝは……此處は何卒三四めに。三四郎決して殿の御面皮……」「えゝい汝、斯くまでに面を虧せて！　此上に虧く面皮があるか！　汝憎くい！兵庫が刀鈍しをツたな！」執り直したる槍柄も折れよと許りに、彼は憎き此漢子を散々に打擲する、苛杖の下に三四郎は聲を搾りて、「あ、殿、情ない。三四郎心底分曉ませぬか。義理知らずと仰ある、これが殿への義理、面皮を虧すとの御腹立は、大納言様へ眞正の忠義を立たせて遣ぜたい心底ぢや！」「えッ尚だ喋く？　殿への忠義、それを汝に……」とは罵ひたるも、詮も無き犬死はげに不忠なり、自己が躬を城代の手に委せて此場の危急を救はむとする、其心を斟めば我への芳志か、我を賴憑むといふ心の顯て此の動作とはなりたるか。と念へば自然撻つ手も弱るを、彌五兵衞は敏くも見て、ソレといふ下知。意得たる彼が組子はばら〳〵と倚りて、兵庫を隔離て、三四郎を中に包圍み、大濤の退くらむ如くに颯と引く。今まで其處に蠢動きたる百姓原は、既に鐵砲に恐れ、兵庫に憚れ、今又た首領の三四郎を失へるに怖れを爲して、疾く落失て行方を知らず。

（六）

此日强訴人として城内に捕はれたる者、三四郎を初として、其他に十三人、これに三十四ケ村の庄屋名主以下を加へて、都合百六十餘人とは聞えき。其頂本に本人も自ら曰ふ安居村の三四郎なること何れの白狀も紛れはなし、これに依て彼をば重き牢舍を申附け、猶其れが妻孥眷屬一人も殘さず搦め來れとの下知を傳へて、城代は組子を發せしが、彼等は多時して手を空くして歸り來りぬ。其告ふ所を聞けば、曰く、彼は獨身にして、兩親は夙く死したり、殘れるは只一人の妹なるが、此女は曩に家出して在處を知らずと。與力同心ら便ち上司の命令を乞ひて、其女が人相に就き、普く支配地に索めしめたり。

夕づく日の落つる頃には、鄕に逃げ散たる市中の男女も鴉と共に塒に戻りぬ、其中には、盜賊の難に遇へるもあるべく、妻子の行方の猶知れざるに、血眼して噪ぐもあるべく、委しく問はば千樣萬態なるべきも、只此の城下の戰場とならざりしと、火災の無かりしとを歡喜て、此夜は街衢の口々に遠篝火を燒きて見張をす。況て城内をや、三之丸の囚獄には如法き大勢の囚虜あり、門々の守衞また嚴重ならざるべからず、加之ならず或る向よりは、今宵夜討の懸念あり、用意よく仕つりて其場に不覺すな、との沙汰ありたれば、素破といふ物の鼓譟き、人は上帶を些とも弛ゆむる暇なくして狹間を走れば、馬は腹帶を緊束られたる儘にして飼につく、此の最中に、本丸なる廣書院にては、御城代酒井山城守を首座にして、大番頭、御目付、町奉行（何れも駿府在勤のもの）久能御門番たる榊原越中守をも其席に加へて、大事の評議は開かれたりき。原來この强訴といふもの、當時の法としては謀叛反逆に準ずるの大罪、極刑をもて之に當らるゝ定規なれども、さればとて彼の三四郎らが振舞、多寡が窮民の一時を狂へる小事なり、生殺の權柄、既に江戸より當御城代其人の手に委任されたる以上とあれば、一應の糺問を了りて刑名の宣告、何の躊躇かあるべきやう無きに、斯く大勢の職司をつどへて祕密の評議を凝らすといふ、當面る衆議か？　されど見えたる敵も無し、抑何事ぞ、と仔細を尋ぬれば、思ひきや、彼の紀伊殿家老牧野兵庫が身上なりける。

兵庫が當日の擧動、其の奇怪なるは既に衆目の視る處、今更の詮議にも及ばず。而して彼が

其の如是く振舞へるは抑如何。竊に聞く、紀伊殿豫て思し召し立たるゝ趣旨ありて、柳營にても内々御用心ありとかいふ。然らば、或は其の腹心の家老彼の兵庫に密旨を仰せ含められ、御宮御修覆の御用とあるを幸ひ、御舊領たる當國に來りて、人心を煽起ち、彼等がかの過米につき度々の愁訴の聽れずといふを機會としてかゝる珍事を挑發させたるなる歟。さらば彼の三四郎といふ奴、彼は指頭に纏弄ばるゝ木偶にして、其本人は躲れて遠く黒幕の裏に在り。此の黒幕を引めくりて其の妖魅の正體を顯露すべき歟。

扨て斯くあるものと看做て、鞫問のやうを如何にすべき。一通りの强訴と見れば、彼等はや其の罪犯の身に在るを自認したるもの、別に拷問の要も無きが、他に然る仔細ありとすれば、屢まで鞫訊して、其れが口頭より實を得む歟。之を得むは難からず、なれど其實を得て後の結果、これぞ今人々が苦心の處、談合の要も全く是れなり。藪を打つて蛇を見むはもとよりの覺悟なり。されど又それが爲に、柳營の御一運を短縮め、天下の爭亂を速促るとありてはこゝ思案の要るところぞかし、既に先年の島原一揆、あれ程の奴原があれ程の人數を集めて、あれ程の小城一つに籠りてさへ、あれ程の騒動なりし、況てこれは御内高七十萬石に餘れる大名、加之も其の大將は例の御仁、それが御旗とあらむ程には海内の擾亂は如何なるべき、或は倖ひに然なからむも、此事公然となるに於ては、我々の此の微力者が御三家の一家を對手としての訴訟なり、方々も知るあの殿があの御機轉にては、烏もいつか鷺となるべく、宿老達も時の勢を察られては、利分と見ながら非理に落す權宜の裁斷も無しとは言ひ難たし、戰場の討死、殉死の追腹、それらは我等分として辭せざるも、議間の曲者と叫ばれての犬死は口惜しや、これはいづれも再應の分別なうては叶はぬところ歟。

席上の評議は斯く區々なれども、紀州といふ二字に壓されて議論の腰兎角に引立たず。其中に城代の城州のみは、一癖の强者、人を人とも我慢の性質とて、紀伊國とて兵庫とて何條事あらむ、罪あらば引捕へて腹切らせうまで！親疎上下の懸隔を立て、對手の强きに臭き糞に蓋する如きの政道して、かくて天下の御法が立つか！況てあの百姓めら、然る不思議の心底もて嗷訴を企つる、肉も骨も揉ぐるまでに責めて苛窘みて其泥を吐かせでやは、と吼られしが、衆議はひたすら穩便の方に傾きて、渾て江戸表伺の上との事に一決し、此夜御目付の二人は時限りの早追もて駿府を發足ぬ。

（七）

酒井山城守重隆は、備後國福山三萬石を領して、小名なれども幕府に於いては譜代衆の歴々たり（此人、雅樂頭忠世が庶子といふ然れども未詳ず）今年三十五、血氣なほ剛きに、生得の癇癖は、頭の壓人なき駿府御城代といふ權勢によりて、益募りて、輒ともすれば肱近の二尺六寸、祕藏の鬪の孫六に手の懸ることも屢々なりき。如法き荒者なれば、物の仁惡、寃怨などいふことは毫末も知らず、武士は命を惜まぬもの、農民は貢租に努むるもの、武士にして身を庇護ふは沒陰襲の腰抜にして、農民にして貢租に懈たるは鄕黨を害ふ亂民なりとは、彼が座右の銘として、人にも常に告ふところなり、其の座右の銘に反るゝ亂民は今や目前に現はれ來りて、沒陰襲の評議に昨夜の議席に勝利を制しぬ。彼は熱腸の寸斷るゝまでに憤悶せり〃「やア彌五兵衞、今日はあの强訴めら予が面前にて鞫問せうぞ。急げ、用意！」其見脈に恐怖をなせる根方彌五兵衞、急ぎ紙間の白洲を開きて、三四郎を初め、連坐の者一同を拘入るれば、掛りの與力（城代附）同心は既に其の場所にあり。與力は

机により、零摺り流しつ、それが可怖しき凶眼もてじろ〳〵と睥れば、同心は十手を把りて、喝とも言はゞ其乙骨撲拙ぎ與れむとの擬勢もて突這ひたり、白洲の四方十間が間は、城代の足輕にてさし固めたる、手にせる桿棒は羅刹の鐵杖にも似て、睜れる眼は悪虎の如し、傍邊には、擔木、抱石、浮利々々なんど、見るも恐ろしき拷掠具を山と積めるが、猶其器には、いづこの誰が叫喚の記念なるらむ、鮮血の痕黝く印りて、腥臭き氣は八萬の毛孔をして覺えず竦立たしめぬ。身は無きものと覺悟せる三四郎さへ戰慄せり、況て其餘をや、二目とは仰ぎ視ず、首を垂れて死人のごとし。「御城代、御出座ざ。」引聲は長く白洲に響き渡る時、三四郎が左右に控へし獄卒らは、其が袖を牽き、頸を壓して、彼們が額を砂利の上に着けさせぬ。三四郎は其の仰向せる頭の上にさや〳〵との衣服の颯響の停住ると思ふ間もなく。「目安書、讀み上げい！」我が鼓膜を劈ざく如き、尋常とは異りたる甲走れる哄聲、これや其の御城代かと、彼は微しく其頭を擡げむとする突端。「汝ッ！」壓搾板の如き掌は下りて、彼が額を突如に砂利に叩きつけぬ。砂利とはいへど其大さは拳頭より大なり。血肉を包める表皮の此の堅石に撲當られて何かは耐るべき、哀れむべし其額は忽ち破れて、鮮血は傍近を眞紅と染め做せるが、彼は此時いたく臆をや震慄せられし、此の滂沱たる流血の裡に俯伏して、人事を省らざるが如くなりき。

「むゝ、好い態ぢや。其頭を擡げさせい。」城州が下知に、獄卒らは、再び其頸を攫みて凶暴く扯起しぬ。なれど三四郎は猶夢幻の、地なるが、混々と流るゝ血を滿面に浴びたる儘、覺るともなき眼を半分瞼開れり。「ふゝ、好え面ぢや。こりや三四郎、予の面が見ゆるか？……ハヽ生根が無い？　こりや水與れい。」同心の一人はあツと應へて、傍近なる番手桶の水、柄杓ながらに持來り、彼が咬緊めたる齦を振明けて注ぎ入るれば、獄卒は其の脊椎を碎けよと許りに撲てり。無慚なる犧牲は蘇息りぬ。彼は纔かに眼を定着て瞻仰れば、白洲の緣の端近う乘臨れるやうに坐せる一人、これぞ、城代酒井殿其人なるべし、剃立の月代青黛を抹りたる如きに、面の赭紅きこと熟せる柔實かとも疑はれぬ、猪毛生ひたる腕は行短かなる帷子の袖よりぬツと露はれて、甲を出でたる龜の手の如く、腰に帶びたる朱鞘の脇差は普通の刃より寸延て、殻を脫けたる赤繩蛇にも彷彿たり、一文字を書く蚯蚓眉、一徹の氣象を面に呈せば、矩形に曲れる〻の字脣、其の短慮なるを我から見せたり、是を陣を破り敵を屠るの將とする、蓋ふに打應しきものあらむ、貧を恤み窮を賑はす牧民の職に在らしむること、我未だ其の可なるを知らず、と彼は思へり。太息をつく〳〵、三四郎は縛められたる肩を窄むるを、城州は血を逆したる眼に礑と睨めたり。「やア汝其處なる奴、汝此の强訴の張本と自ら名のるが、見た處不審があるぞ。此の一件原來の發意は何所の誰で、何人と其の手筈申合せた？」三四郎は初めて口を開きぬ、「御不審は何と仰せられます？」「分曉ぬか！此の强訴を企てたは、誰人の指揮か白せと問ふぢやは！」城州が聲の荒きに伴れて、三四郎が眉は愈〻顰めり。「御答にも困じますこと、誰人の指揮ぢやなどゝ？……」「吐さぬかツ！　ソレ撻てツ！」吟味も法もあらばこそ、彼は白洲の罪人と謂はむよりも、此殿が泄愼の的となれるが如し。餘りの無法に、彼は棄てたる身ながらも其冤を叫ばむとする折しもあれ、表の方より馳來れる根方彌五兵衞、彼は遽たゞしく城州が耳を扯て、「殿、來まいたぞ〳〵。あの兵庫めが！」

（八）

紀伊國殿家老牧野兵庫！　それが今突然に

襲ひ來れる、言ふまでも無き其目的は、目前なる三四郎等が身上なるべしとは注進の彌五兵衞のみならで、此座に在りと在る者が目と目を見合する面にも知られぬ。我慢の方には天晴れ他に一個と對手なき城州さへ、其の根強きには驚きしが、稍呆然たる色、其色を察て知る彌五兵衞は聲を潛めて、一火急の御逢と申まする。何と返答……？」御用の都合、目下は御對面叶ひがたし、重ねて、とも追儺はむかと暗に諷するが如くなるを、傾慮むけたる城州、「むゝ……いや會はう。」「御別席にて……？」「いや、こ此席へと言へ。」

胸裏の成算ありや否や、斯く言ひ出しては金輪引かぬ主の氣は知りぬ。其は兎も角も、こゝにての對面、或は事の不利なるべきかと虞れるも、時の趨勢是非なきに、彌五兵衞は辛く起て外方へ出でぬ。——と看る間もなく、彼は再びこゝに入り來て、緣側の端に控へさせしは牧野兵庫なり。城州は聳より疾く、「や、其方は兵庫な！　予は山城ぢや。」「扨は御手前樣城州樣？　先づは御機嫌の體……」「いや機嫌は好くないよ。其の好くないはお主も知らう。這奴等所以ぢや。お主が入魂と聞く三四郎めらがする所爲ぢや。」扨は此殿、喧嘩を買はるゝか、もとより喧嘩を賣りに來し我們、面白しと義とあらば、と再び迂濶の口を開かず、其邊じろりと睨め回す其瞳子に忽地映れるは、彼の三四郎が血塗泥なる姿なり、さしもの兵庫、呵呀と叫びて其膝を寄せむとする時。「兵庫、お事は火急の用といふ。何事ぢや、其用？」兵庫、唾を嚥下みて、次で手を支へ、「恐れながら御政道義に就きまして……」「ふむ、政道の義？　ハヽ政道に無私いは斯くいふ山城が豫ての自讃ぢや。紀伊國殿褒詞もあるか。」「いや左樣にもおざりませぬ。此處に居る者共が愁訴の趣意、其の訴狀につきて一應の愚考仕つりましたるに……反別一升の過米と申す。」「……「それが如何した？」「昨年の飢饉に續きて今年の瘟疫、これらは手前申上ぐる迄もおざらぬ。箇樣に疲困れたる窮氓に重々の御徵發、恐れながら御仁政とも……」「慮いと言ふか？　それが氣附か？　ハヽ兵庫、其方も紀伊殿家老、それ程の事心附かぬは近頃の無穿議ぢやぞ。こりや熟う聽けい、過來の徵發は江戸からの御下知ぢや、城代の山城はたゞ一途に江戸の御沙汰を相守るぢやぞ。仁政の不仁政のと意見があらば江戸へと申せ。」「如何にも御沙汰、江戸表へも申まそう。然ながら駿府五十五萬石、其土地につきての利害は御手前樣御手心の裏にござります、例令江戸表御下知とござりませうとも其の土地人民の難義難澁とござあること、御申達の趣意も聞えず、只一偏の御守り、是も近頃の御無穿議かと、憚りながら公儀御代官たる御役目の手前に對して、笑止の義……」言はせも敢へず城州は、其血迸れる眼赫と瞪りて、「扨は我等を木偶と申すか！　今一言、木偶なら木偶！」「いや、木偶とは申ませぬ。但し道理の當る處……」「えゝい道理が當るか、刃鐵が當るか、今一言！　陪臣輩が！　無禮！　無禮！」「陪臣とは仰らるゝも御三家の御一人當將軍家には恐れながら御叔父に當らせらるゝ大納言殿家老、牧野兵庫！」「うゝ其の大納言……納言殿を汝は御叔父……御三家の一人と言ひるか！　幕府御譜代たる予が目からは敵……」言ひ斷らざるに彌五兵衞は飛來りて、主の袂を暴く扯きたり。「枝葉の御事、無益しい御議論、然樣の瑣事に御際取らるゝ……それよりも公儀御敵たるべき彼奴等が譬押人、……白狀さずば只今の拷問なされて。」太息吻いたる城州は、兵庫を後眼にかけたる儘再應は語を交へず、其膝暴かに此方に捩向けて、「やア三四郎！　汝、今訊うた强訴の後桁、疾う言ふまいか！」

（九）

城代が語氣を逆へて其意を推すれば、彼が屢訊ふ、我が愁訴の後援といふは、此座なる兵庫どの、續きては大納言樣！　それが遁れぬ關繋を有ち玉ふ、否眞正の張本！　とは實に意外の！　贈の潰るゝ！　思ひきやの窮極！　と三四郎は愕きたり。

抑〻是れ故意か、誤解か、若くは讒人の其間に在りて有らぬ誣告を巧計たるか？　故意とあらば詮なきも、誤想といひ、讒間とあらば、現犯の本人たる我口より此の證明發揮と立てゝ其の冤き御名を雪がで置くべきか。吁、さるにても其の誤解の原由、讒間の起因といふ、昨日の我が大谷にての振舞か。げにも邪推の眼をもて彼狀を看なば、然りとも見えむか　口惜しや爾うとも知らば最初より彼人(？)の教示に委して、到底死ぬ身を、江戸へ立ち越え、執政への駕訴、將軍家への御直訴も爲奉つらむを！　分別の足らで此の破目に陷る、あら無念や！　憤然として伸上らむとする頂邊に、三四郎、强訴の後楯、白ふまいか！」「申します、申します、申ませいでか！　三四郎が强訴の後楯は斯く申す三四郎！　三四郎が三四郎に强訴をさせたのでござります、其外には誰一人、結厘も、脅し押腰押し、談合した人はござりませぬ。はい、發輝と此義申上げます。」　城州が眼は此時、爛たる鏡の如し。「白はぬな！　汝、可、白ふな、白はずとも白はせておくか！　ソレ撻ッ！」彌五兵衞は且づ暫時と和めつ、「や、三四郎、お主心得が惡しいぞ。尋常ならば我〻式、又は支配の與力衆、吟味とあるべきを、此事大事と思し召せばこそ御城代御自身御訊べともある事ぢや。其方は此の一件、只の强訴と思ふであらうが、其の汝に囑賂を餌うて此の珍事挑發させた本人はな、内々深い巧謀がある。其の巧謀が公儀御耳へ聞えたで、萬一の兵粮の御用意としてあの過米も徵さるゝぢや。な、分解たか。されば其方、其の後援の本人、すなはち謀叛人、こゝにて明白に申立てなば恐れながら江戸上樣にも御滿足、隨ツて禍害の根も失くなれば、此の過米の御沙汰も息む。別しては其方、强訴の張本として磔刑にもなるべき處を、謀叛人訴への功によりて其罪御赦免あるのみならず、出格の御褒美も下さるゝぢや。さ、如何ぢや。其身、政府への御忠節者として、人にも譽られ、御褒美の榮耀に誇るが所好か、又は謀叛人同類として磔木に懸るが所存か今が分別の境目ぢやぞ。有體に白へ。……むゝ白ぬな。これ程に利害を分說ても？」「むゝ彌五兵衞搆け、撻んで白ふか！　鞭て、鞭てツ！」「お、お撻ちなされませ。撻たとて意にも無い御言懸の白狀は三四郎口に出ませぬ。」「呵、言懸け？　えゝいそれツ！」と彌五兵衞も叫びぬ。獄卒は心得たりと彼を俯向に壓伏せて、一人は其の片枷なる足を拉り、白洲の上に倒臥はすれば、同時に桿棒は其背に下りぬ、劉々として風を斬る苛杖は容捨もなく其皮を破りて肉に及べば、臠片は寸斷れて、混々たる鮮血に交る肉の雨四邊に飛散り、被拷者は既に聲失く、たゞ其の肩頭より下腹にかけて盪つ大濤の如き苦息の裏に、冤枉を天に訴ふるに肯たる可怖しき唸呻を發すのみ。凄極、慘極、惡態の目も當られぬに、兵庫、何をがな此一時を救護くる工夫をと、悶ゆる目に發見したるは、此の白洲の定法ならぬといふ一事なり。

「待て。其の拷問暫く待て。やア城州に申す、此の御席に立合の御目付衆は御居やるか、御檢目衆は？」　城州より先に南無三との面せるは彌五兵衞なり、急所を衝かれて覺えず其邊虛呂虛呂するを兵庫得たりと其傍に躙り進みて、「根方氏、大事の罪人の拷問に御目付方の立會あるは御法の表ぢや。此の御席に然る衆も見えぬは何たる事？　其の仔細……や、御返詞ないは

不法と知られてか？　不法と知りつゝ此の拷問なされたか？　や不法！　不法！　不法の白洲ぢや。やア三四郎承はれ、只今の拷問は不法の拷問ぢや。氣を確に持て。兵庫其筋へ申達する！」起坐むとするを、「兵庫其方は何を狼狽ゆる？　目付不在の時は城代これを兼勤する。當所にをる兩人の目付一人は昨夜江戸表へ早打として罷り越す、一人は今朝他所へ出役する、兩人とも不在、仍て城代山城が兼帶する。何の不思議ぢや。」打て變たる城州が沈着顏に、兵庫やゝ二の足を踐るが、「然らば其の横目たる御手前樣が拷問の御指圖……。御目付方でも爾る御指圖なりまするか？」「ハヽ一を知て二を知らぬな。目付はもとより然る指圖はせぬ。是は横目の役。拷問は城代の山城がする。其は職分ぢやは。」「其の一人にして兩役、何年何月幾日の御沙汰に？　兵庫、確と伺ひまする。」「えゝ冗説い。さる穿鑿は右筆に問け。其方手許にも書留はあらう。やア彌五兵衞、右等に構ふな、拷問續けい。まツと撻て。撻て白ずば石を抱せい！」強辯の危殆きを見たる彌五兵衞は、恐る〳〵、「御沙汰にはござりますれど、罪人も餘ほど疲憊て見えまする……抱石の義は明日重ねて。」それとの指圖に、突這へる同心は一聲高く、「一同立ちませい！」

（十）

早打として江戸へ趨ける目付の一人は、中三日して駿府へ復歸りぬ。待兼ねたる一同頭を髣へて其の御下知といふを聽けば、張本たる三四郎は死罪、餘は遠嶋、重輕の追放以下たるべし、兵庫が事は其地にての沙汰に及ばず、是れは追て江戸詰の紀州家重役へ申達せらるゝ品あらむ。但し過來の事、然程までの難義とあらば早檢見の役遣はさるべきが、其以前において猶再應の吟味を遂げ、彼等の强訴、果して私慾の一方に出づるか、將た眞實の力に堪へ難き難澁の餘りかを取調べて、其有無、速かに進達に及ぶべしとの事なりき。

豫想の外なる寬裕の沙汰に、各位は感悦の眉を揚げて、斯有てこそめでたき當御代は萬々歳なれ、有繋は名ある宿老方の御會議は又た格別かな、何さま紀伊國殿云々といふも今日に見えたる義にあらず、猶熟慮へば、大納言殿、然るほどの大事を思し立たれむに墓なき土民ども教唆して强訴させ、其れを機會に鬼角の御手段あらむなんど、考察れば沙汰の限り、餘りに彼の殿を微小く見申したる我々が心底の程も看え透きて羞赧しけれ、これは再應の議にも及ばず、萬事はたゞ御指圖の儘、といふ衆議。

「それとても我等腑には落ち申さぬよ！」と叫べるは城州なり。謀叛反逆强訴の張本は鋸引磔刑の重罪たること、御代々樣御法文の表に照らすも聚かなること日の如し、それを今更ら何人にか憚かられて尋常の死罪なんど、究竟贋仁義の、泣く兒に飴の棒舐らすやうの仕置！然樣の老中心入れなればこそあの百姓めらも驕亢りて、政府を政府とも、法を法とも畏敬れぬござんなれ、御指圖は何とも候へ、山城は山城が城代たるの料見あり、彼の三四郎めをば磔刑、其餘十三人の徒黨共をば斬罪、これは拙者身上に換へても處存の貫て申す、況て兵庫めと彼の徒輩とが同腹、其後の振舞に察るも一分の疑念を介むべきなし、嫩葉にして撮ざれば終に斧を用ふるにいたる、縱し目に見えざる紀伊殿方は是非なくもあれ、眼前なる同類、謀叛人の徒黨めらが見懲しめには嚴までも嚴酷き御取扱、其の荒膽挫ぎつけて與るゝが後日の御爲！　といッかな聽かず。これに驚きたる列座の面々、手を替へ品を換ての勸諭の言はさま〴〵の口より發でたれども、我慢の炎勢は微滑き水の撲滅すべきにあらずして、後日の御咎めは山城が躬一つ、各位には迷惑の相懸け申さぬ、罷り違は

ば御恩の爲の此腹一つ屠るぢやまで、と終局は例の脇差をさへ捻くりての決死眼。日來の氣質は誰も知りぬ、斯う破りかけたる横紙の場に出會したるが我々の不運！　是非なし。然らば上司たる其許の御處存任せ、御咎めとあらば一つ刃、此方も後へは得引き申すまい、と一同も潔よく申し閙る。自他の恐悔しき約束は、往復の議論半日が後に其事と決せり。

安倍の河磧、彌勒の町の西端に、廿間四方なる青竹の柵は此日の夕より翌日の朝にかけて結束られたり、是れ彼の三四郎ら十餘人が刑場なり。

時は七月の下旬、潺湲漸やく冷めたる秋陽は此の朝に影を斂めて其恩恵ある光を下界に與へず、例ならず薄寒きと思ふ龍爪の山颪、木枯の森の病葉づれて悲鳴に似たる聲を立つれば、河口の海はこれに響へて、怒號るが如き波浪の響を轟と送くる。

富士は幾重の雨雲を身にまとひて姿も見せず、つれなしとの名におへる賤機の山松さへ、靄の衣に面を覆ひて嵐に吼ぶ、天地萬物悉く是れ黯澹の境に鎖されて、幽愁の造化の手は巧みにこれら悲酸の景を畫くかと見る中に、忽諸數千の群集の波を排開けて、紅幟は來れり。濕りたる空氣に、力なく飜へる紅幟の後より鬢も萎れて蹣跚と歩ゆむ馬の背に乘せられつ、縛手のまゝに首を前に低れたるは三四郎なり。これに續きて、其の同類と呼ばるゝ十三人。此れも一樣の獄衣を着て、鞍の前後に其の脚を綑げられつゝ、腕は背に、首は前に、獄卒に轡を取られてこゝへと着きぬ。

餘の者とても面色は失きが、猶其れよりも軀の苦惱、馬背にも堪へざるが如くなるは、三四郎なり。呼彼は其後ともに、石を噛み鐵を喫する千百の苛責にや遭へる？

彼等は刑場の入口に來れる時、鞍上より扯下されたり。三四郎は起たむ、起たむと發憤れども、其腰は終に起たざりき。獄卒は其頭を抱りて狗兒の如くに牽摺れり。見物の不平は囂々たり。「其樣にせると罰が當るぞ――」「汝ら腕がへし曲るぞ！」

（十一）

彼等の徒黨の討手を遁れて、今に踪跡知れざるもいと多し、其の一家親族もまた寡少きにあらず、況んや兵庫は眼前の大谷にかくて在るをや、準備寸毫も油斷すべからずとて、柵の内外、河磧の前後は、城代、町方の與力同心、幷に城州が郎黨ら、數十騎、數百人、弓槍鐵砲にて嚴重に鎖し固めぬ。されば彼の三十四ケ村といふ村々の壯者原、内々は爾る手筈ども爲たりし抔とも聞えしも、此の警戒の嚴密なるに怯れてか手指しもせず、痩狗の遠方にて吠らむ如くに只纔に其の不平を惡態にて泄らすのみ。

法場の内には檢使の横目法の如く、床几に踞れり。掛り與力の筆頭たる者三人、蹲踞せたる罪人を一々に面前に牽き出し、刑名を宣告す。これより後は、永眠布、長休水、それ終ると看る間もなく、太刀音！　血烟！　幾個土壇の前に横はれる血髑髏！！　數千の群集もたゞ目を瞬ひてこれを見るに忍びねば、語むに言もなし。

軈て粗薦に包まれたる十三個の沒首領死屍は、土豚の如くに竹柵の根に滾轉されぬ。今や巨魁三四郎が磔柱に上るべき時とはなれり。

「皆樣に御願ひがございます。三四郎にはあの目隱布を御容赦下さるやう願ます。一刑に臨める罪人の情願をば、法令に觸れぬ限りは許容すること國初よりの規定なり。彼が意味あり氣の悃願は立地に聽許されぬ。彼は今其の素面のまゝにして磔柱に縛され、場の中央に押立てられたり。傍邊に倚せたる二本の槍は獄卒の手に執られぬ、彼等は試みの素突一つして軈てに身を構へ、突身となりて丁々と彼が眼前に穗尖を合

せて、やツ！　と叫ふ時。「宮！　お宮ア――」不思議の呼號に獄卒らは其手を住めぬ。三四郎は層に銳く其巨眼赫と睜開き、吭も張裂むずる最期の悲聲振搾りて、「宮、在るかア！　此中にお宮は在るかア！　在るなら今乃公が言ふこと聽て吳れ。乃公は今御法で死ぬ。死ぬは厭はぬが、心懸りは過來の事！　兵庫縣御身の上！　過來の强願は私慾でない、村々の難義見棄て難さぢや。死だ後も乃公が心底繼承いで、此の悃願ばかりは達かいて吳れ。又、兵庫さま……」從前噪々たる叫喚も、此時寂然と鎭まりて、ただ悲涙を啜り、暗涙を呑み、聽耳を傾けて、彼が末期の、心血や凝塊りて成れるかと思ふ此の遺言の一句だも遺漏さじと聽く、群集の中に、編笠を眉深に、面を覆みたる一人の武士あり、左右に伴れたる七八人の大奴等に此時屹と目を咬せ、袴の股立手皷く摑み取りて、大刀の反一反うたせ、刑場目に懸けて驀地に駈入らむとする、其の後面に又た一個の武士ありて、前なる人の刀の鐺堅乎と捉りぬ、低く力有る聲を徐に發して、「こりや、過まるまい。」此方は耐らず、遽てたる聲、「何なさるゝ御身……」「急いでは事を爲損ずる。先づ御待ちやれい。」「いい要らぬ世話！　其處御放しやれ！」「ほう！　紀伊殿御家老ともある仁が、法場を暴らす罪人とお爲りやるか！　やさ、三寶に載るべき其首を獄卒らが手にお懸きやるか！」「呀!!」

前なる武士は、こゝに初て眼を住めて、此の抑止たる未見の武士の態を視れば、是れも富士形の編笠深く頂きて、其面をば露はさぬが、着たる衣服の立派さ、腰にせる雙刀の見事さ、一見して其の尋常の者にあらざるを知るに足る。彼が沈着て、低く、力有る聲音と、供の若黨に蠻槍の杖を持せたるとにて推すれば、其年紀は四十の以上なるべく、笠の間を漏れて見ゆる四方髮の、肩うつばかりなるを看る時は、或は是れ浮世を强拗たる大身の隱居、若くは功名を貨殖に換へたる大富限の浪人か？

此方は覺えず其の威儀に擊たれて、會釋しつ、「扨は御分は、我等を御存知か？」彼方は編笠なりに頷きて、「さらばさ。先づ斯うおりやれ。此處は御身がため、好うない場ぢや。」時に南無阿彌の衆聲は河嶺に響きて、わツといふ悲叫は起りぬ。顧ば、吁、三四郎が刑は既に結了たり！

（十二）

被抑れたる武士は、抑止たる武士の指したる如く、實に牧野兵庫なりき。兵庫たる者の今の遺恨や什麼如何。不意の邂逅に其意氣の投合せるより、彼は賴みつ、我は憑まれつ、其の訴願に、其の生命に、身に換へても思ひつる三四郎をば、眼前酷吏が慘刑の下に斃させたり。彼、其の最期に我を叫べるは、我に對ひて何事をか語らむとせる。彼が眼、半空を睨めるより看れば、我が託せられつる訴狀を等閑にするを憤るか、咬切れる其口より察れば、我が彼の生命を救拯ふことを敢て爲ざりしを嘲けるか。吁、我は附託に背かず、又た救護に及ぶべき力をば盡したり。なれど奈何せむ、暴官の威は暴風より暴にして、我舟を彼岸に達せしめず、凶人の心の凶狼より凶にして、好みて汝が血を啜れり。而も我が身と、名と、職とは、此の信友の爲に、其の凶暴に報ゆるの刃を手にするを得せしめずして、空しく悲涙の汝が不幸を弔ふに止めしむ。嗟乎、遺恨!!

憤涙は瞳然として音あり、怒眼は瞪乎として閃けり、彼は仰編笠の紐、覺えず半ば牽斷りて、耐らず竹柵の根方まで倚らむとするを、始終の容子目も放たで注視りたる此方の武士、「むゝ道理ぢや、無理はおはさぬ。なれど此場は。ただお在れ。委細は此胸にぢや。」涙を攪る手に袖を控へて、隻手には輕く其胸を拍ち、更に

笠越に供なる奴に目を咬せて、群集を出離れぬ。兵庫は嗟歎の歩むにも力なし。

艫て來れるは府中の南方、寺臺院を前にせる江尻町なり。こゝに一構の廣大なる町屋敷ありて、九尺に餘る溢墨の板塀の上には、晒竹の遮欄を間なく釘ちて、裏面には椎樫の常磐樹を枝繁く植ゑたり、其塀の盡くる處に廿五間の長屋あり、武者窓おほく明け、内面よりは簾を懸けて、透見を防げるが、物の體、兵法の道場とも見えぬ。此の長屋と更に對向の長屋との間に冠木門あり、柱いかめしく、扉大いに、花崗石の敷石打水のあと淨し、綠青を塗れる乳銅物青玉の螫けるに異ならず。門内には馬立あり、供待の腰掛ありて、母屋とは六尺の土居、矮松おほく植ゑたるにて限隔れり。

兵庫が供の奴、扨も廣大な御住居や、これは抑も誰殿？と問はむとする時、彼人の供は皆蹲踞ひて、一人、御歸りざうと呼ばれば、鬼をも欺むく八九人、式臺に出迎へて首を下ぐ。

彼の武士は、一廳の會釋の後、さらば主人御案内、とて玄關を上り、更に兵庫に一揖して奥へと入れば、兵庫は客書院へ通されぬ。兵庫、これまでは、憤恚の盈ちたる胸に、言ふべき語も痞塞て發でず。此座に入りても只無言の會釋して、無手とばかりに占座れるが、良有りて風と心づけば、從前は眼に入らざりし座敷の結構、其の善美を盡せるに驚きたり、但見三十疊の青疊！　これに入側の廊をつけたるが、龍蒐の細き表、銅線を編みたる如きに、緣は悉く雲綢の綾なり。正面の床、蠟塗の瓦燈には、殺人劍活人刀の六大字の大幅、宗純の落款もやあらむ、さらば桃山御祕藏の名物か？　青磁の獅爐には眞名鰹の伽羅薫り、古銅の大盤には五葉の大松蟠踞す。緋障子きよらかに建てたる勾欄附の縁より看亙せば、庭には築山泉水あり、築山には松櫻楓、樹形異なるを面白う植ゑたるに、泉水は安倍川の水をや注ける、玉なす清流錚々として、鯉も躍れり。

我も其昔は和歌山の御殿にて御道具をも預りぬ、其後江戸へ出でゝ麹町、赤坂の御館をも見まゐらせしが、其れにも斯う樣の調度、かくまでの數寄は稀れなり、抑御三家の御一人、五十五萬石の御大名にすら有らぬ御品、普請の結構は、此の主人、そも何等の大分限、大貨殖の者にて、箇程にはしつらひたる。往昔の紀一が流か、近世の今井が屬か、何ともあれ窮めたる僧上人かな、と雙眼を凝らす傍に、「爺人、いかう御無禮の仕つツた。」顧れば、向者の會釋して、無手とばかりに占座れるが、良有りて風と心づけば、從前は眼に入らざりし座敷の結構、其の善美を盡せるに驚きたり、但見三十疊の青疊！　これに入側の廊をつけたるが、龍蒐の細き表、銅線を編みたる如きに、緣は悉く雲綢の綾なり。正面の床、蠟塗の瓦燈には、殺人劍活人刀の六大字の大幅、宗純の落款もやあらむ、さらば桃山御祕藏の名物か？　青磁の獅爐には眞名鰹の伽羅薫り、古銅の大盤には五葉の大松蟠踞す。緋障子きよらかに建てたる勾欄附の縁より看亙せば、庭には築山泉水あり、築山には松櫻楓、樹形異なるを面白う植ゑたるに、泉水は安倍川の水をや注ける、玉なす清流錚々として、鯉も躍れり。

我も其昔は和歌山の御殿にて御道具をも預りぬ、其後江戸へ出でゝ麹町、赤坂の御館をも見まゐらせしが、其れにも斯う樣の調度、かくまでの數寄は稀れなり、抑御三家の御一人、五十五萬石の御大名にすら有らぬ御品、普請の結構は、此の主人、そも何等の大分限、大貨殖の者にて、箇程にはしつらひたる。往昔の紀一が流か、近世の今井が屬か、何ともあれ窮めたる僧上人かな、と雙眼を凝らす傍に、「爺人、いかう御無禮の仕つツた。」顧れば、向者の主人なり。主人の風采は、今見しよりも亦一段と高尚れり。

（十三）

看來れば彼が容貌、雪白の顏面、漆黑の鬚髯口は方に大きくして自ら大海の量を含み、鼻は隆く直にして偏に秀峯の群山を壓する趣あり、特に見る其の炯々たる眼は簷下の紫電、人を十歩の外に射て、笑めるも猶偎るべからず、若夫れ其の眦を決して陣頭に飛蹄を躍らせ、大喝叱咤、風生の威をしも見さば、千軍萬馬も爲に辟易せむずらむと覺えて、兵庫も思はずに其席を避けぬ。彼は、白き精好の法眼袴に、黃金の目貫出し鮫の小脇差、生絹の道服に紫色の紐ゆたかに懸けたるを衒れるが、其の對座に徐かに押直りて、「只今は匆卒の際、殊に些と憚かるべき義もおはして拙者名字も申上げず、貴客も御口づから承はらぬが、——それには紀伊國殿御内、當時出頭飛鳥をも落すと聞えし牧野氏、兵庫どのとは見まゐらすが？」一微笑つゝ問ふにも、其聲は此方腹の底にまで響けり。「貴殺の通り、我等は其の兵庫。而て貴方には？」「これは名も無きもの、申たりとも御存知もおはさぬ者。」「いや初對面の——無禮は御免あれ、渾ての御樣子、天晴れ世に聞えたる御

仁？　田舎武士の兵庫、御面見識らぬこそ口惜しうは存ずれ。苦しからずば密と……」「ハ、御詞は恐入れおや。たゞ我等は由井と申す……」「や、由井？」「民部介とは申す形の如き浪人おざるよ。」「扨は正雪老、民部介先生にておはすか？」と彼は遽がはしく瞳子を決めて此の主人を再び瞻つ、俄かに其人が平生に見るべからざる熱心の敬意を表して、「……扨も〳〵豫想外ない、轟ろく如き雷名は南海の盡處なる和歌山にも聞えて豫ていつぞや見參と期し申したを。——但し日來は江戸表にと？」「いや彼地にも、微小なる弟子分教授の道場は持ち申すが、……原來我等は此の府中のもの、仍て當地にも立ち越えて御覽の如き小廬をば營み申した。」

原來兵庫は、容姿も心術も衆に勝れて、それ十五歳の年熊野新宮の坊にて大納言殿御見出しにあひ、和歌山に召されて渥美某の預けとなり、當時の指南役村田左馬助が弟子に附けられたるが、十六歳にははや其れが無念流の中傳の免可を得一、兵法においては關西第一といふ和歌山の殿中にても其面に立つ者なし、されば武邊の一途にかけては假初の事にも人後に立つまじと念じて、福島浪人として召抱へられたる村上彦右衞門兄弟、加納五郎左衞門等の老功の士には常に親しうも交通ひ、又大阪兩度の御陣、墓なき島原の一揆にさへ、其の戰場に出で、槍一つ、首一つの功名もありと聞けば其人をゆかしき者にして、其狀を問ひ聞き、其身が得たる道に比較せて、其奥を明らむるを慣ひとせり。尋常の人にすら爾なり、況して此の正雪に於けるをや、其名は遠く江戸より紀州にまで傳へられて、彼は武藝においては十八般の奥義を極めて當世の泰斗たり、軍法にかけては古の楠公が祕を搜りて、陣立築城、野戰攻城の術、いづれとして凡常に拙でざるは無し、それが贅を執りて此が門に遊ぶ士三千人、國主城主譜代外樣、今の諸侯三百家のうち、屈請教授を乞はざるものは其の什が二三のみ、只憾む、世平かに時謐にして其が功名を成すの地無きを、若し夫れ群雄割據の日に生れ合ひなば、織豐二家が撥亂の功は、或は此の人の手裏にも收めたらむも知るべからず、——とまでの評判は豫ても聞きぬ、あはれ如何ならむ紹介をも求め、時機をも得て、其人に只一目と、仰慕の念は皮肉の奇癢きをも感えたるまでなるに、抑〻天意敷、十年の湯望こゝに癒えて、一朝の會合、彼の人飜りて我に需つもの有るに似たり、其所以たる果是如何？　と兵庫は漫心に怪訝みぬ。

加之も、其の儀表、其の風采、我が豫て想見したるにも倍して膺揚れるに、家の富貴にも亦た心を驚かしぬ、兵庫は宛然師弟に於けるが如き禮を取りて、膝の前に手を措きつ、再回彼が言はむとする語を、愼みて待てり。時に、兩碗の苦茗と一盆の時菓とは出でぬ。主客相譲りて、各〻碧汁綠玉の如きを啜る。腋下の清風、客は心頭の煩熱を頓に忘れつ。

（十四）

主人は徐に碗中の茶を喫し了りて、話頭は漸やく本題に入りぬ。「兵庫どの、今日の御所作はいかに。男の意地か？」「眞個、餘義もござりませいで……」「御年には似合しい。人には依頼まれ、或る者には侮辱められ、存意は徹らず、加之も眼前にて那れ體の仕義。急刺るゝも道理ぢや。」扨は此人、我と三四郎とが事、城州との始末、其の逐一を熟知るか。そは兎も角も、忖度の言、同情の語、眞に知己たるの値に恥ずず、と兵庫は稍面を揚げて、「短慮との御叱斥もおざあるかと存じの外、道理との貴意、感謝に堪へませぬ。」「むゝいや其の御感謝は御無用。道理と申たは貴方の御年紀、廿六七の人に合してはと言ふことぢや。然りながら其は一人一個。貴方は既に紀伊國殿御家老。家老とあれば

殿の御采配をも預かる士、御年は壯くとも御所作は老人風て見えねばならぬ。」「そ、極の御道理。但し紀州の水を飲みたるほどの者、箇樣の場には風として引かれませぬ。」「ほゝう。風として——何故に引かれぬ？」「前申す、男の意地！」「呀、意地？　意地とは何物か！　やア御分、癡呆た事！！」突如として來れる一喝は、宛も是れ晴空の霹靂！　耳を掩ふに遑あらざる兵庫は、愕きて其の持てる扇をも取落せり。主人は遁さず壘み懸けて、「紀伊殿は名君、當代の御分別者。其殿が御内の家士に喧嘩稼業もさせらるべきか？　御分が今領る知行六千石、それも其の馬鹿意地に身を果たす喧嘩料にと與へらるゝか？何を癡呆た！」彼の、叱咤風生を想像せし彼が眼は、看る〳〵百煉の鏡を磨て、炫灼、鬱ひ邇づくべからず。兵庫遽てゝ、「いや然樣の御難題、心外の至極。我等決して喧嘩稼業いたすとは申さぬ。たゞ紀伊國の風……」「紀伊國風が然樣といへば、紀伊國武士は一人として主の先途に立たうとせぬ不覺武士。御分一人のみならで紀州武士を然樣に誣ふ、——こゝな不忠者！！」「やツ不忠？」色を作せり。「不忠であるまいか。主の恥——國の恥——朋輩の恥をも曝らす……」「其れが不忠か？」「不忠も不忠。國の賊ぢやは！！」怒氣心頭に沸騰りて前後の辨も失せたる兵庫、生得の癇癖は麾ふべき口より腕に起りて、忍耐あへず、汝ツ！　と言ひさま肱近の大刀素破と抜き、豫て得たる無念流の眞額碎刀、微塵になれと打下す電光の閃射に先だちて、石火激勢、物ありて我が眼先に遮！　と發つと思ひしが、個は什麼、我が握れる刀柄は柄頭より刎上げられて、七尺餘り彼方に飛べり。ちえツ無念！　と再び脇差の柄に手を懸くる。其肱を丁と抑止て、由井、「牧野兵庫！不忠に不忠を重ぬるな！！」「やツ。」「怯くて此場にて犬死すな。御分最期ももう切迫いは！」抑掣られたる肱は、千斤の搾木をもて壓さるゝ如く、骨橈み、筋肉麻痺れて、我腕ながら腕とも感えぬに、我慢も折れて、力限りの振絞れる苦聲、「な、何と言ふ？」「主の御馬前の討死、御分それ爲では叶るまいが？」兵庫は又更に驚愕きぬ。掘れる刀柄を俄に放して、「和主、ソレ何の事。主君の御大事？」「御大事！　紀州家御滅亡、今年の内！」「御滅亡？　今年？」と彼は暫日して絶叫せり。

（十五）

「殿の御大事とて驚くか。其の御大事を速めたは御身が所爲ぢやは！」正雪は彼が腕を突放して大息しぬ。兵庫は、扨はと其意裏に了解れる面色あり、耐へ難き苦辱を顫はして、「洒井が手か？」「それ程に御知りやるならば、何故に向者の如き眞似お爲やる。知られぬか彼の始末は今早や城代が耳に入たば！」「入たとか？　御身ソレ何として？」「知らいでか、其が爲め我々は彼の後場に人を殘いた。其者今復歸ての注進には、城代町方の手に使役はるゝ日明とかいふ細作ども、御身や我々の蹤跡を蔡うて見え隱れに河積を狙け、其中の一二人は城中を指いて馳せたといふ。手配はな、ハヤ其通ぢや。然る事をとも待設けたる彼の胸臆き役人共が左聞かば何とある？　言ふまでも無い、牧野兵庫、同類の犯人、四郎奪はむとして御法場に闖込み、既に曲事も仕るべき處を此方警固嚴重の爲め、事無くて引取りたり、察するに此も大納言殿御内意か、兎角は御謀叛顯然！　とも注進しをらう。江戸老中は待つに海路と尾に鰭を附け、將軍家へ讒奏申さう。將軍家も固より其の御意ぬ！　吁、最初が强訴の腰押、半途には白洲の議論、其の結局が今日の爲體！　如何もが御身は、紀州御家の滅亡を一年速めた。」

恨むが如くに呪み附られて、兵庫は今更ら嚥むも詮なき後悔の腑を扼せつゝ首を垂れぬ。

その當惑の面を瞶て、此方は例の、いと低く沈める、重々しき語調をもて剴りに剴れり。「如何ぢや、我們が心底殘さぬ！　御身を不忠と罵ふ理由は此通りぢや。腹立は覺悟。堪忍がならぬとあらば存分にお爲やれ。正雪は辭はぬ。意地者の御家老！　紀伊國風を類さぬといふ御家老！　忠臣と名告る御家老！　吁、然るにても、紀伊殿は大晴の好い御家老お持ちやれた！」日常ならば一寸とも近すまじき此の冷罵をも、兵庫は何の屈託する處ありけむ一句も應ぜず、物も無き體をひたすら脫めぬ。主人は猶反復して、「地體が御身は、何の爲に此の駿河に渡せられた？　久能御宮御修覆の御用と聞いたが、それともに强訴の譬押、城代との喧嘩、それ爲いとの御内旨も承けられたか？　御身は右の忠義をもて楯とせらるゝ。定めし紀伊殿思し召に無い事はせられまい。扨は我們が豫て見たる鑑識は誤謬か！　紀伊殿御分別者でもおはさぬか！　御内の家老に茨、皮袴なんどいふ溢者らが爲るやうなる喧嘩稼業させらるゝ。」堪り難ねてや兵庫、手を揚げたり。「ま、先づ貴老、其の愁ふ勿れ。待て下され。」正雪は其れをも聽かず、「……果ては其爲め——否、前以ての江戸表の御疑惑といふ好みて招がせて、御身上の滅却。遠くは大阪の秀頼が御上、近くは當所駿河殿の御成行をも御覽ぜられて！　嗟、然りとては！」「いや其等の事、大納言殿思し召で無い、悉皆我等一存ぢや！　我等が不忠ぢや！」「ふう！　一存？　其の一存で……主家滅却といふ程の大事爲出來て、只、其の不忠で御濟しやるのか？」「いや濟さぬ。江戸より此埒の御不審あつて、果いて御家御大事ともあらむ時には、牧野兵庫、此腹居て陳辯する！」「ふう！　其の不忠の腹居で？　怒られな、御身は活て在られてが六千石。其死腹で五十五萬石、維持る事が能り申さうか？」「や、不思議の事！　我們爲出來いた不埒の段を、我們擔當で、我們が腹居て御謝罪する。原來御存知なき大納言殿、御身になんど……」「いゝや、然で無い！」と正雪は、こゝに初て冷笑せり。「とは何故ぢや？」急き懸る兵庫を後眼にかけて、「牧野兵庫、氣の毒ながら江戸の御眼裏に無い。有るものは御身が主、大納言殿！　大納言殿御腹とあれば其れで事は濟む、百人の牧野兵庫、居腹つてからが此の一埒は納らぬ。」

（十六）

愛に至りて兵庫は一語無く、瞬もせで對手の面を睨み詰めたる、其眼よりは名狀すべからざる一種の可怖しき光を放てり。其凄じきに引反て、正雪は緩りて彼が驚愕を嘲ける如く冷笑ひぬ。「ハ、何も然は驚かるゝ？　其れ程の事お知りやらぬ貴方で無いによ。今も言ふ城代が注進、底意は何事ぢや？　これが紀伊殿家老牧野兵庫一分の義ともあるなりや彼の豪勢の酒井殿、只見て在られうかや、日明も細作も要らぬ、たゞ其場に細縛りて國元へ差立つるぢやまで、手間隙も費ぬを、其を爲ぬは什麼？　此義重大う見るからぢや。重大いとは甚麼？　前申す大納言殿御内旨かとも猜疑ふぢや、すなはち彼殿の御謀叛——國々に一揆を起させ、其虚を覘て御旗とも疑惧るからぢや。倘樣に疑惑は紀伊殿御身一つに集注る。されば百の御身が千の腹居たとて江戸では何の滿足せうぞや、只目指すは大納言殿御首一つ、それ所望なで斯樣煩悶ぐのぢや。」斯う樣に解剖ての分說こそ聞かね、聞耳に礙れる謀叛の二字、自然我に暗刺けたる如き語氣は過般の白洲にて、彌五兵衞めが吻頭より聞きぬ、其際はたゞ我を急刺せて法に執て陷さむとの巧計、淺々しやとも冷笑ひたるが、扨は其は彼等が一時の詐術のみならざりけり、然る僉議の江戸にありて、彼れ主從は其意を承け、家老たる予に藉りて殿の秘密を搜

らむとは爲たるなるか。さりとては遺恨の義かな、大納言殿が御宗家に對せられての御崇敬は實に大方の事にあらず、御謀叛は愚か、假にも柳營御義とあれば些少の御如在をも思し召さぬこと、其は朝夕に奉仕する我等、幷に御手廻りの士、いづれとて存知の義なるを。何者の讒言ぞ、あら無念や、と兵庫、不覺の憤涙を眼瞼に湛へつゝ、「遺恨におぢやる！　柳營の御會議眞實然もあらば、兵庫、彌此腹一つの覺悟して殿樣御證明立てゞは措かぬ。氣も無いものを！」「むむ、いや、然のみも言はれぬよ！」と彼方は意味あり氣の首掉を掉れり。「えヅ御分まで然樣に言ふ？」「遁られな、これは理由ぢや。我們もとより紀州家には御出入もせぬ、御內の樣不案內ぢやが、たゞ家業として世間に廣い、其の廣い世間には仄々の評判も有るげに聞く。なれど其の評判、固よりの雜說ぢや、が、所謂る天に口無しぢや、人の舌に乘る程の事およそは全然と形迹の無いといふもおざらぬぢや。とて、又、風を逐ひ影を捉ふる、市に虎を放らすやうの說、それ一々信くるにはおざらぬも、虛心平氣、これを既往の事實に拠考へ、人情の趨向く方に引援て、按て觀察ば、自然胸臆に會得の行くものでござある樣ぢや。但し是は、最屓の念を去り、親疎の別を棄て、天下の大道を濶歩する大人の心とならねば通曉ぬもの、紀伊國風の、意地のといふ貴方如きの御耳には到底が入らぬぢや。」

兵庫は兎つ逐つの思案に遂うて、容易く其口を開き難れたり、なれど臣たるの情、其主の惡評、聽かざらむも本意なきに、是は又た假初ならぬ御大事なり、若かずこゝは彼に聽て、根も葉もあらぬ雜說たらば可し、然なくば歸國して諫をも納れ、今後の御用意とも爲させ奉つらむには、と纔に其色を和げつゝ、「も、遁き申すまい。其の世評、貴方の料見、仰せ下されい。」「然らば申さう。」

主人は再び威儀を刷ひ、其の綻れたる袴の稜襞を壓直して、彼が方正なる脣を咬ひ濕せしが、俄に茶を呼び、菓子を勸めて、「ま、今一碗を喫されい。而て、其の白刃、まづ鞘へ……」

兵庫、初めて心附て、後邊を見れば、無慘や今方刎られたる刃は飛て、天の逆鉾といふらむ形に迥かなる疊に突立ちぬ。赤面の汗を拭ふ手に把りて手疾く鞘に納れば。「先づ寬がれい。箇樣に心底打明くる上からは、敵意はおろか、無二の友垣ぢや。兎角は腹臂では話はならぬ。さ、まづ菓子喫れ。」

（十七）

頰邊よりかけて頤下に美はしう、伽羅すこし煙き籠めたる鬢髯は彼が左の手に輕く撫でられぬ、半眼に睜きたる眼晴を直地對手の面上に注射て、漆骨の唐扇徐かに膝に突立てたる正雪、低からず高からず下腹より衝發るごとき聲を咽吭に調制て、緩急の間好く語り出でたり。

「御聞きやらう」といふ風說は、過般の白洲で、大方はあの彌五兵衞めが饒舌たておざらう、すなはち先頃畿內南海東海東山の國々へ臨時の過米、——三四郎が愁訴の根本たる其の過米といふを徵されたも全然紀伊殿への御用心、京都所司代、大阪御城代、伏見の大番、奈良、堺、山田（伊勢）の奉行、五條、多羅尾、水口の御代官地、其れ〳〵へ老中よりの內沙汰して大納言殿御動靜を視よとある、此等は申さでも御聞もおはさう。なれどこりや皆世上の雜說で、過米の趣意果いて然うか、御下知が眞實如何か、いづれも世人が推量の外に出でざること。但し其の世間の推量といふ、推量の發る根本はと我們に問はゞ、我們は、紀伊殿御幸運が、此の御不運產み出いたと——斯う申すに拠跼いたさぬ。と申すは、彼の殿が原來の御生得ぢや。申すまでも無い權現樣御末子ではおはしたも、其の御

寵愛は眞に他に超えさせた。是れは彼の殿の御天稟怜悧う、勇武におはして、自然御振舞の御父様に肖させられたからの事とも存ずるが、いや又た御母たる正木氏、養珠院殿の女丈夫の御器量も一つた有る。されば其の御母親様御執成しにか、大阪の節も、御兄の尾州家へは御許可もない七本の皆白の旗、御家の規模として嫡流ならでは叶はせられぬ大中黒の後幕をも下され、其後駿遠兩國へ御移封の砌も、權現様上意として、予の亡い後は秀忠秀忠亡い後は賴宣、自然今の秀忠が男子（竹千代君、家光公）成長して、其もの將軍職を襲ぐとあらば、賴宣へは今の知行駿遠の外に甲府を加へ、都合百萬石として、諸事の格は江戸柳營同様の義たるべしとまで御沙汰なされた。然る程に其頃大が下にあるほどの大小名、第一は大御所様、第二は將軍様、第三は常陸介様（賴宣卿）と、御三所御一體とやうに崇敬申した。實に以て目覺しい御義、察ふに此れが彼の殿の頂上の榮花の御時節、——扨て其の御運の御落日が、元和二年の權現様御他界ぢや！」

兵庫は默して頷きぬ、其眼には遺恨の暗涙あり。正雪も歎息の聲を稍靜まして、「其の御他界の節——御最期の御遺言にも、彼殿の御義、くれ〳〵もの御意ならせたとは、其際、我が膝を御枕にさせ申した今の久能の御門番、榊原越中守の先代からも聞き申した、が、其後にて又聞けば、當時營中の評議といふは、御埋葬の御事よりも右の御遺言、百萬石の義でおざツたと柄！宿老の評議は二派に分裂れて、兎も角も大御所様御遺言、常陸介様に甲府の御領まゐらせらるゝが御死後の御孝道と論ふがあり。いや〳〵彼殿の鋭利い御器量、現今の駿遠五十萬石でさへあの威勢なるを、今五十萬石を增し、加之も江戸近の御要害たるあの甲府を進ぜられること、虎に翼盜に鍵を與ふるに比しとさへ言ふ徒もありて、評定は上聽に立てられた。此時の將軍家は御二代様、篤との御勘考あらせられて、夜中俄に宿老の出頭、土井大炊殿、續いて井伊掃部殿召させられ、內密の御評議おはした。當時の御前の御模様、何とありしか、もとより他の存すべきやうおざらぬも、只、上意御道理、勿論の御義との兩所樣が聞えたとは聞き申したよ。斯くて御遺言は久能へ御埋葬、其の御宮の御經營は常陸介様御一手！　剩も御造營繪圖面は江戸よりといふ……。甚麼と、これが、御遺言百萬石の御返報とは、ま、御分、何と胸算るる？　大阪の金銀散らさう爲にと高野の大塔、東山の大佛、北野の聖廟、御修理の造立のと本多佐州が計較はれた其の祕策、あはれ再び彼殿御身に降り懸ツて、——加之も是れは御指圖は江戸！　其の工事にて少々の覺落もあらば其を執柄として御咎との陷穽！　かゝる詭計を設けての老中が下知と、殿には御知りやツてか、御知りやらぬか、御孝心第一の御生得とて、資財を惜しまず、御苦勞を辭はせず、御自身御草鞋の御采配にて、見られい彼の大伽藍、金銀瑠璃の燦爛たるをあの御山に建てさせた。想へば、當時の御心中、想へば〳〵只涙ぢや！　江戸老中の猜疑、無念といふも餘りがおざる。」

（十八）

「論よりは證據」というたる事實を繩絲として、正雪が舌頭の梭は間斷ず運行れるに、兵庫はたゞ默聽の首を俯けて、回應とては其句切目ごとにする歎息のみなりき。主人は俄に話頭を轉じて「御分、御年齡は？」「廿五おぢやる。」「むむ、然らばお出生は元和の五ぢやな。さらば其等の事、當時の光景はお知りやるまい？……むむ、おろ〳〵と故老に聞いた？　然もおりやらう。出生の以前ぢやもの。而て大納言殿、御口づからの御物語は？……氣も何せられぬ？　吁、有繋は御仁ぢや。御謹愼の深い殿。我們看

立に差はざる、名大将ぢや喃！　其の御口の輕からぬところ、到底が御父様に酷肖ぢや。傳へ承はる、權現様は、平常の御一言をも御腹中に兩三の御思慮あらせて後、扨て御口外ありしとか。されば外見には御舌の吻るやう見えて、御應對は御不束でゐッたといふ、而て御眼力は只一目にて、敵の腹の、其底の底をまでも看破せらるゝ……。今の紀伊殿も同是其流ぢや。右の江戸の下知、必然其策よと其節に御看破きやれたに違ひない。御草鞋穿も其故ぢや、五十萬石の御身上全體を費けて御普請見事にもお出來しやれたも其故ぢや、當時江戸よりの檢分使も、其の結構には目の驚かいて、洵に手持不沙汰、笑止の體であッたといふはや。然る程に、老中輩は、御咎とおもうた手筈は顧慮ふ、御普請は成就する、百萬石の御遺言をば兎角と申し出るものもある。仍て、是非なく、其功を賞し、御遺言の沙汰を減し、殿の御鬱胸やめむが爲に、元和の三年、七月と記憶えた、從前は參議從三位左近衞中將でおはした殿を、中納言に執奏する。是れは言はゞの口塞げぢや。泣兒をすかす飴の棒ぢやよ。斯くて此一埒も先づ濟み方と……見る程もなう、不思議の一大事又出來して、江戸老中に動顏の肝冷させた。此事が抑今日にいたる御不審の根元、御謀叛との疑惑の原由。是非もない御運の末で、紀州家御滅亡といふ端緒ぢや。と申す仔細を言はゞ實に根葉もない、御母親樣養珠院樣の身上からぢや。」兵庫は倍驚きて、其肉を硬うせり。主人の舌根は、飜りて彌鋭利うなりぬ。「言ふまでも無い、御身も存知の、かの御女性は、上總の大多喜正木どの御女で、御土地柄だけ日蓮宗の御信者ぢや。當時甲州身延の住持を日遠といふ。道德の高い聖人で、遠近道俗の信仰も格別おざッたが、女性には彼の僧が安房の小湊誕生寺に留錫の頃よりの御歸依とやらで、身延住持となつてからは御音信も斷せず、上人、折節當地沓谷蓮永寺へ參りの時は、城中へも請せられ、又た身延へ歸山の日は、微行での御參詣もおはしたは我們物心知つての頃親しうも聞き申した。然るに其ころ、久遠寺（身延）本堂が大破に及んだ。もとよりの大檀那、右の修理をと上人悃願申されたに、女性には喜びての御承知にて中納言殿へ御賴み、有渡庵原の山々の材木許多を伐採らせて彼山へと運搬れた。是れが扨て大事の件！　江戸への注進あるが否や老中の仰天は以ての外の態、扨は駿河殿（頼宣卿）甲斐を御手に入られむとて、身延の坊主ども語ひ、本堂の普請に事託せて、彼山に城郭を取立てらるゝごさんなれ、天下の御大事！　と一同肝膽を碎いた末が、折節廣島の福島沒落で、安藝は闕國、其手へ和歌山の淺野どの移うて、扨て駿河殿を其後へ……と斯樣ん評定端的に畢ツて、五年の七月、すなはち御身が生れた年ぢや、五萬五千石の御加封といふを御規模に、南海の果へ哀れ島流とおなりやれた！　無慘の御事喃！　原來木の國といふ程の土地、國は廣いも四方は山ばかり！　既に御宛行の御米にも事缺るゝを、安藤殿（帶刀）より、紀州家御凋殘になさるゝか？　と手詰の、嚴しい訴訟せられたで、大和の吉野を伊勢に替へ、飯野飯高多氣一志で、僅に物の十八萬石、それも同じく山ゝみの土地！　其後再應の御愁訴にて、白子其ほか、一兩所をば下されたも、其の土地は大學殿（藤堂）領分を中間に介みて、都てを手乙甲——手乙甲にとさせらるゝ。是が柳營老中の手段ぢや。手も足もといふ其の趣向ぢや。」

（十九）

「其の趣向——手足も出させぬ居屈の御趣向なりや、宸に刃を藉すに比しい五十萬石の大祿何故に殿に宛行れつらう！　紀州御移封より今日まで廿五年、何故に其間を安閑と棄置れつら

う？」兵庫は不審の口を啓きぬ、主人は其間を待兼れたるものゝ如くして、「ハ、其義ぢや。微妙も問はれた。」「御身は此の不審晴らさるゝ料持たるゝか？」彼は意衷に正雪の論辯を怪異めるなり、何さま紀州御移封の魂膽、然る理由のありしかは知らぬも、萬一爾もあらば、朝夕御傍に奉仕せる我等、雨の間風の隙にもなど其の御不滿を漏さゞせ玉ふ御氣色の覗はれぬといふこと有るべきや、さるに、當に然る御氣觸のおはさぬのみか、朝は必ず卯刻の御日覺にて、御口嗽をまゐり、御袴と仰られて、寢殿の彼方乾の御間なる權現樣御神主に對はせられての御拜あり、次に東方に御向ひにて、遙に將軍家に御禮あらせらる、此は日々の御勤にて今も渝らず、又假初の御話にも、事柳營の御上に及ぶ時は、召されし御頭巾を必ず脫がせ、御袴を外さゞせらるゝこと、我れ十五歲にして御側にまゐれるより今年にいたるまで十年、此の長き年月の間、一回も揩擧たせ玉ひし事なし。爾ほど無情くもてなさるゝ江戸將軍家に、如是き御會釋の能るべきものか。我等も豫て承はる、此の和歌山の御座たる、京攝はもとより、南海咽喉の重鎭として御三家の御一家たる當屋形を重々と居ゑられ、事有る日は尾州越前と相駢びて關西を扞禦め、九州の探題、唐津殿（小笠原）と呼應して日本の西南方を控馭るの御趣意といふ、斯う幕府にも深く賴み思し食すゆゑにこそ、當方にても斯く眞心の御禮意はあるなれ、されば御兩家（幕府、紀州）に御隔心なし、さまざま申すは只物知らぬ世上の愚盲が雜說のみ。其の愚盲が雜說をとりて兎や角といふ、察ふに此の浪人、何事かの宿意ありて斯く虛構ふるか？我が若輩を見侮りて急迫すか？　城代への我が不平を、徑ちに將軍家への御不足と看誤りて詭辯を弄するか？　彼は自家駿河者といへるも、或は恐る、大阪島原への緣もや牽ける？　と兵庫は此時注意けるなりき。

「ほう？　不審とある。扨は今まで陳述たこと、詐言とか？」「詐言とは言ふまいも、大納言殿……」「何となされた？」「島流のなんのといふ。自然御不足、思し召すなんどのやうに……」「呀、其を御不足にも思召さぬと？」「勿論の事！」「ハ、其れを御不足と思召さねば、恐れながら御虛呆ぢや、やさ、腹立無用、御身の安危も御遠慮ない、帳に巢くふ燕と同樣ぢや。いや、大納言殿、それ程の御盲目で無い。疾に御承知。さればこそ御別心！」「や！　御別心。確と言うたな！」兵庫が面色は再回勃發れり、正雪は空嘯きぬ。「言いでかよ！　其の御覺悟あればこそ彼の諸浪人……」「えッ。」「……大崎玄蕃、眞鍋五郎右、水野、河村、藪、三刀谷を初として四國中國奧陸奧までもの名有る侍三十餘人、いづれも本地、又は倍高にして御抱へある。就中あの村上彦右、磯島浪人、他家の渡奉公する新參の士を御家の古參さし置かれて、總事の武者奉行、總旋を御預きやッたは何の所以？　諸人も不審申たが、こりや天下の諸浪人、浮浪徒に、紀州殿は賴もしい御仁、器量さへある者なりや譜代外樣新古參の差別はない、其腕かぎりを御用ひあると、懷づけが爲め！　是れ一つにて其の證據顯著いものおはさぬか？　其外にも御手許、御在所には參らずして、御志の御扶持合力を受くる者、伊勢大和河內和泉、近江山城津の國丹波、中國四國東國にも數知れず。こりや其中には將軍家へ御敵對の龍造寺主膳如きものあるぞ。其餘、高野衆徒を御手懷づけ、叡山に御風呂を御立て、其の薪木の料として年々莫大の金子を遣はさるゝ。言ば更らなり、地侍、大庄屋、出家、山伏、梵論、町人の屬にまでも御入魂なされて、國々の色目、異變の事あれば直ぐ御手許へ內通申す、我們は御身が其の御執次申さるゝ事とのみ存じたに——御知りやらぬ

か？　紀州の土末だ踏だ事はない我儕すら其程の事をば知るに、多年御傍の——加之も御家老？　飛禽も落す威勢の牧野氏兵庫たる御人の御存知ないか？　扨も〳〵ぢや。なれども殿は右に申す、當代無雙の御分別者、或は御身にも御隠匿あるか。其の御遠慮あればこそ今日までも江戸よりは手の附けられぬ。されど形の有る處には影が射す、聲の有る所には響が應ずる、江戸老中とて昔より凝呆もをらぬ。細作は網の目、物聞は壁に耳。甲府御手入とて動顚するも、其の動顚すべき理あつて動顚する。紀州山流も、流さるべき由おはして流さるゝ。但し、流す、流さるゝ、色目を見する、氣にも留めぬ、急迫す、落着く、其間に無量無邊の種様の意味どもあるを、若輩とはいへ御身があの無分別、終に意外の破綻から此方の尻尾を捉へらるゝ如き手を出さず、時機を！　時機をと今日迄に待せられた處の此事聞し食さば何ぼうの御無念！　想察まゐらすにも餘りがある！　なれど既往は追ふも及ばず。只先んずれば人を制すぢや。覺悟召されい！」「覺悟とは？」「ハテ後手に廻らぬ様……とまで申すぢや！」

（二十）

我君を謀叛と誣る憎むべき敵かと見れば、然にても無し。其の御身上の危殆きを救護むとする味方かと見れば、爾うにも非らず。言ふところは歴々として證據あるも、論ずるところは餘りに祕密を纏ち過ぎたり。虚か、實か、善か、惡か。既に其の言語の原由ゝ所以を知らざれば、焉んぞ其人の意嚮の在る地を識らむや。要するに彼は兵法者なり、暗に風雲の際會を冀望ひて、我を干犯すか。又想ふ、彼は聞ゆる軍學者なり、密に反間の苦策を試みて、我を誘導くか。さりとては其の爲體の僭上！　其の人も無氣なる辯論！　憎さに、些と、儕しても……とは思へども、彼が本事は我が及ぶ處にあらず、議論の鋒も亦た我舌も當り難たし、若かず目下はまづ彼が臆意にして、重ねて準備して、と兵庫は覺て其面色を綻べぬ。「高論の趣意はおろおろに會得申した。御助言忝けなう存ずる。なれど此事如法の大事ぢや。一席の座談で到底が斯うと申悪くい。」「勿論の事。但し……」と言龍されて、兵庫、再び彼が面上を儼と視れば、正雪は息を斂めて、「……機を知るは其れ神乎！　彼の雪ふるを見るに先づ集るはあの霰ぢや。幾微の在る所を説くに愚人は其奇に驚けども、これを達人の目から觀れば、甚麼の尋常茶飯の事！　米を研ぎて飯炊ぐを知り、火を燒いて茶を煎ずるを見ると同様ぢや。たゞ御身も靜思せられい。默慮、工夫、熟う天下の色目——別しては隣國の動靜といふ御覽ぜられなば、山を隔てゝ烟を見る、早く其火あるを知る妙機に達せらるゝも難うは無い。ハ、今日の御話もまづは此まで。」其後は、風月の語談、兵法の論議等に主客の笑聲も快よう聞えぬ。

＊　＊　＊

一揆の騒動、安倍川原の磔刑、駿府の風は不淨の濁穢充盈ちたるに、其を憚からで神明の御座所をいろひ奉つらむこと其の恐懼あり、御山の御修覆三七日を御延引御尤も〳〵と、柳原方より神官の申狀を副へて申し來れるに、兵庫もこれに同意して、工を起興ず。爲す事もなき大谷村の旅宿にありて、たゞ城中の消息をのみ覗はせしが、城代も町方も其後の光景は宛然火の滅えたる如くにて、徒黨の穿議も、過米の徵發も、今はまづ沙汰止の姿といふ。さればこそ彼の正雪め、開合たき儘の放言して、人驚かしの滅亡呼はり！　さん〳〵に予を苦辱みつる、憎さも憎くや。大悟めきたる工夫の、工案のと、自個甚麼の得たるところか有る、いで然らば彼を訪ひて、野狐禪とやらむいふ化皮引剝き、宗祖の地定とかの三十棒、其の鼻梁に、

と競ひ立ちつゝ、一夕、大谷を出でゝ府中に來り、其の江尻町なる彼が玄關を音耗へるに、執次の弟子若黨立ち出でゝ、師匠はこの程、處用ありて江戸へと罷りぬ、留守中に牧野殿御來臨あらば、對面は此冬か、來春を期し候ふ、其の場所は思ひ寄らぬ所でこそ候ふべけれ、と儀樣に申して發足候ふ、と言傳す。

でこそ有るべけれ、彼も有繋に世間に面を賣る奴、上庫に其頭を蹂躙られては立つ瀬もあるまじ、面會ぬも道理、と冷笑ひつゝ、立歸る途次も、猶懸念りなる城代が邸邊の光景、いかにや、と漫歩きに託せて大手前なる堀端を過ぐれば、個は什麼、其の表門は十文字の青竹もて緊く鎖されて、有る程の武者窓には粗板の目張嚴重なり。こはそも、こは如何、彼人は何の御咎？　何時よりの閉門？　と敵とはいふも何とやらむ心許なきに兵庫は遽てゝ供を走らせ、近邊につきて仔細を問すれば、閉門は今日の正午ほど、然も御咎は城代一人のみならで、町奉行、御目付、其餘の役人殘らずなり、もとより詳細きは知れざるも、風聞には、此程安倍川にて礫刑に梟げたる其者が吟味進ひ、江戸御下知に外れたる專横の仕置ありたるが故ともいふ、兎角は容易ならぬ大事、とのみにて正確との義も知れず。

彼れ火の滅えたる如しといふこと此故とは推せらるゝも、其の吟味進ひとは何ならむ、自儘の仕置とは何やらむ、三四郎らが上とあれば、其の御煞度の澁汁は或は予にも來るべき歟、可矣來れりとて悔ゆるにも及ばず、是は覺悟の上！　但し其の物の用意は今よりして爲む、先は急げ。と傳馬町なる馬次の役場前にさし懸る端、京方よりして來りぬと覺しき早追の駕二挺あり。視れば、其提灯の印は見覺えある安濃津の藤堂家の徽章なりき。「ハテ大學殿早打、今ほどに——心許ない。」

（二十一）

と看る〳〵、其向側なる梅屋といふ軒燈掲げたる旅店より、閃乎と出でたる一人の武家飛脚あり、彼も此の早駕の提灯を目に懸けてつかつかと走り寄りぬ。駕の戸に面さし附て、「安濃津御衆か？　倘か桑名樣？」駕の内には「應。」といふ聲ありて、「然言ふは誰？」と問ふ語も、幽に兵庫が耳に入りぬ。飛脚は極めたる低き聲、「桑名樣でござりますれば傍倍のこと、私は和泉橋御上屋敷より采女樣御狀持ちまして出ましたる者……」引戸は忽地啓かれて、中なる人は面を出だせり。提灯の燭光に透し視れば、三十左右なる、身裝立派の武士なりき。「いかにも予は其人ぢや。彼方書狀ありとなりやこれへ越せ。」「其外に御口狀もおざりまする。」「むゝ。」と武士は、半分回應て、再び駕に身を躱しぬ。看る〳〵燈と戸の簾に火光の射せば、手蠟燭もて今受取りたる書狀といふを讀むにやあらむ。良少時して、「藤作！」藤作といふは彼の飛脚の名なるべし。彼はあツと傍に寄りぬ。「其の口狀聽かう。次の駕の家來を呼べ。」後なる駕より立ち出づるは此の武士の若黨ならむ、遽たゞしく前進りて首を低れて主の旨を聞き、又た飛脚に會釋して口疾に談合るが、「……前面の梅屋は幸ひ御定宿におざりまする。那家にて……」「うむ。」と武士は起身ぬ。藤作はこれに隨行へり、若黨は其緣に腰懸けて、往來に眼を配りぬ。

此等の體を、目も放たず、耳を澄して偸視ひたる牧野兵庫は、此時暗に思ひたりき。安濃津が內なる桑名といふ、其人は我れ未だ面識ざるも、彼が容貌、彼が身裝、其の年齡によりて推するも大方は用人の頼母なるべし。頼母ならば大阪の御陣に討死したる彌次兵衞が末子、父兄にも優りたる分別者とて、今は國元の仕置一式其身一個に委任さるゝ程の男、其男が今斯う

火急の早打とは至重大事と察せらるゝに、又あの飛脚が江戸屋敷公用人たる藤堂采女が書通窃らして、秘密の口狀まで副へたりといふ、什麼何事ぞや。國の一揆か？　我が和歌山を發途たるは近日の事、其節までには物聞の洋進にも然る條は聞えず、諸國の動亂か？　今の天下に見渡したる處、然る色を立つべき者有りとも覺えず。或は彼の城代の彌五兵衛、正雪らが言へる御家の御謀叛か？　其義ならば第一に聞かで協はぬ此の兵庫が夢にだも知らぬ事なるを、親母ともある武士が、假初の世の風聞にかゝる狼狽たる擧動は得も爲まじ。なれど御家と安濃津とは年來の確執、間もあらば、隙もあらばと相互に睨み合ふ交なるに、彼等の談合抑も甚麼の祕密なるらむ、聽きたき事かな。

要こそあれ、と兵庫は一個、供を遠斥け、忍び足に小蔭を出でゝ、彼の旅店が掲行燈背向に睨つ、其邊を覗へば、其家に裏手へめぐり出づべき一條の路次ありき。天幸のものよと喜びて、我ながら怪しきまでに覺を偸みつゝ、宵闇の暗きも好しと音を掠めつゝ、辛くにして庭口の垣のほとりに辿りつけば、此處に小さき竹編戸あり。是れ、庭の掃除口といふ門なるべし。這、此門も天幸のもの！　と兵庫は手を懸けて悄に壓す、其の壓すまゝに內よりも開く者あるかの如く、するりと明きて、但見る間に、半身を露はす者あり。

豪膽不敵の牧野兵庫も此體には愕けり。覺えず身を披き、屹と視て、聲も發てばと刀の柄に手を懸くる。彼も我をば盜賊とや見紛つる？突如に其處に俛伏して、「あゝあ、もし。」手を戰かす、其聲は正しく若き女子なり。「汝は何者ぢや？」潛めたる聲に力を罩めて、兵庫は問へば、彼女も低聲に、「御免なりませ、私は此家の婢。今急用で大谷まで參りますもの……」「ナニ大谷？　大谷の何處に？」「は、はい。」と口籠る。「大谷の何處にぢや？」一層に力を罩められて、彼女は戰々、「は——はい、紀州樣御家老、ま、牧野樣といふ御方へ……」兵庫は、實に愕然たり。

（二十二）

愕然たりし兵庫は、又條忽にして事の便宜を喜びぬ、されども此の女子の果然何者なるべき歟を疑へり。「お主、其の牧野といふ人！　面識か？」彼は誘導を試みたるなり。「はい。否え。」「其の面識でない人に、何の用？」「それは——其義は申し難ねます。」此の問答の氣觸を悟了たるか、垣の內なる離座敷の障子は披けて、彼の飛脚の藤作男は、其邊目をつけて看回すやうなりしが、闇は黑白なし、此方の姿の眼に入らぬに、尻て又其の障子を閉てぬ。呼吸を凝めたる兵庫は突如に進み寄りて、彼の女子の腕を握れり。女子は如何なる事日にも遇ふらむ歟を怖るゝ如くに、振摸切て叫ばむとするを。「叱!!　此方へ來い。乃公が其の大谷の牧野ぢや！」「えゝッ！」呆れし女子は、星光に彼が容貌を恐る〳〵透し眺むる、其耳に口を倚せて、兵庫、「乃公は確に其の兵庫ぢや。今些と、爾る仔細あつて此處へ竊來だぢや。原來がお主は何者？　乃公に告うとは何の用ぢや。言うて聞かせ。さ、聞いて哭れ。」

色こそ見えね、香やは隱るゝ梅の花、燻きしめたる伽羅の薰も閨ながらに衣に匂へり。一表の人物、立派の雙刀、東西を掠め婦女を姦す盜賊兇人の屬にあらずと彼女も丈に悟りや得たる、身の戰慄もやゝ止りて、「そんなりや貴君が眞實、牧野さま？」「おゝ、乃公が實の兵庫ぢや。ま、此方へ來い。恐るゝな。」女子は拇れて、此處を離るゝこと一町、脚下の蟲の音踏しだきて、露珠冷かなる田畔に來りぬ。

「何よりも聞たいは其の用事ぢやが——其事よりもお主はまづ何者ぢや？　こゝは見る通り聞

く人も無い。 暫まず明せ。」女子は決心の口氣なり。「私は、貴君を、眞實の兵庫様、死だ兄が御恩ある御方と思うて申上げます。萬一私をお偽りの城代町方の御役人なりや御遠慮なくお縛り下されませ。私は此程の强訴の張本、安倍川で磔刑に梟りました安居村の三四郎が妹、宮と申すでござります。」吁！宮か、三四郎が磔柱に梟けられての其最期まで、我と與に其名を忘れざりし其の宮か。豫ては想ひし、彼女をば兄の三四郎が遺圖によりて遠く領外の境へも逃し遣りたらむと思ひしに、近き此邊に匿し置けるか？ 燈臺元暗しとも彼は思へるか？ 然りとては危殆かりし事！ と思ふに附けても、彼が義に勇みて謀を專らとせず、徒爾に其身を棄てたる當時の感慨、自ら胸裏に急迫り來て、兵庫は漫ろ暗涙に暮れたりき、其の氣勢を覗知る宮も、同じ悲恨にや堪へざりけむ、袖を面に、洟を啜れるが、俄に涙聲を儼として、「そんなりや貴君は眞實の兵庫様。其れなりや御禮は後にして目上御身上にかかる大事の件がござりまする。」「其れぢや。お主、牧野兵庫不覺であった。何事ぢや其の火急の用とは？」「一項下、あの梅屋に、津の豪の御飛脚が見えました。」「む、ソレ承知ぢや。乃公も其の飛脚と見て忍んだぢや。」「え、其なりや彼豪の密話、御聞なされて？」「いや、其話緘聞うとする時にお主に遇うたぢや。」乙女は歎息して、身を摺り寄せ、四傍を回顧して聲を潜めぬ。「何をお隱し申しませう、私の兄は此の土地で先生様と申します由井正雪といふ御方の弟子、由井様も私兄をば格別にお引立下さるので兄は彼方を父御のやうに申てゐました。彼の强訴の十日程前、其方はこれから先生様御宅に參ッて御居間の用をする、總ては先生様仰の通りに立振舞ねばならぬぞと申しつけて、江尻町の御家へと伴れました。すると彼の騒動、兄は城代豪御手に遇うたと聞きましてこりや如何なる事と途方に暮れて、泣てばかりの折柄、先生様の仰には、今度の事には大谷村にござる紀州様御家老牧野兵庫といふ御仁の御骨折はいかう有た、なれど其方の兄は些と過まった事爲たで一命は助からぬ、其れは扨て是非ないとして、右の兵庫どの御芳志といふは忘れては濟ぬぞ、其について其方に一大事の義を申し附くる、和歌山にござる紀州殿には此節御謀叛との風聞がある、乃公も駿河の者、紀州家をば餘所外のやうにも思はぬに其様と聞いては棄て置かれぬ。扨て其の風聞の原はと糺せば彼の藤堂家ぢや、有る事無い事安濃津豪の觸れ散らすによつて其の風説も世に廣がる、殊に此節は津の飛脚ども、斷えず此の海道往來するが、何分にも懸念りぢや、就ては幸ひなはあの梅屋、其の主人は乃公が弟子で、其方が兄とも仲睦うした者、其家が津の定宿ぢや。仍て其方を梅屋へ遣る。但し日陽者の其方がこと、餘の客へは出なたゞ津の旅人と見ば武士町人に拘はらず給仕に出でよ、而て其の語氣に意を注けて、聞き出したる事あらば早速告げい、乃公が留守ならば右の大谷の牧野殿へ申せ。此は駿河男女の舊主へ盡す御報恩、一つは其方が兄に替つて兵庫どの御爲にする寸志、と斯う被仰られてあの梅屋へ送られましたは一昨日のこと。」宮は、口疾に告げ來りて一息繼げり。

（二十三）

兵庫は音もせで傾聽せり、宮は猶語を續けぬ。「昨日から安濃津衆はと待てをる處へ見えたは彼の御飛脚でござります。私が日を注てをるとも知らず、京方からの下り駕は未だ見えぬか、桑名様といふ御方は未だ立寄れぬかと切ツて聞きます。御飯喫べる間もきよと〳〵、外方ばかり眺めてをる、所へ問屋場へ卸したはあの駕。提灯の徽章を見るより、すりやと箸を投

げ出して飛で出る、阿呀と思ふ間に、又引返して、あの小座敷で竊々との密談。お茶の給仕に事託せて、私、えいやツと聞き出したは、——もし、御前様、紀州殿様御大事の件！　其の御大事とは、大納言様、彌御庶を和歌山に御立なされて、陸は伊勢路、海路は快船で三州吉田へ御勢を御送りなさるゝと喃。但し其の表向の御沙汰には、伊勢の方は御領分の御鹿狩、海なは、熊野浦に鯨が集たで、御手船して捕らせらるゝ爲とはいへど、合戦の御用意とは誰が目にも紛れは無い、それで津の衆は城々へ人數を籠め、大納言殿いよ〳〵御出馬との注進あらば此方より出向うて討散らさうか、但しは待受けて御城での合戦かと、先達て江戸御屋敷へ御使立てられたが今以て御返詞がなし、それであの御侍が、其れを確に聞く爲にと下向られるに、又飛脚衆は其の御返詞の狀持て恰ど此地にて出遇されたと言ふ様子！」「而て、其の飛脚の返詞聞いたか？」「いや其れは得う聞ませぬ。只前の事聞いて」「刻も疾う御前様に御注進をと……」「むゝ先づは過分ぢや。こりや宮、予を誘導せい。未だ彼等のもの彼家に在らうも知れぬ。乃公自身に竊聞う！」「お、それが可うござります。さア此方へ。」甲斐々々しき處女は閨にも著き白服の、裾端折て先へと立てば、兵庫も袴の股立取りつ、草葉の露に袋音せぬを時の物怪と引返す。

　叮、無念！　此の長談に時や經てる、來て見れば、彼等ははや立去りて影も見えず。人に問へば、二挺の駕は復た元の西方を指して駛せぬといふ。

　兵庫の心は今二路に迷へり。宮といふあの女子、何さま兄が妹ほどありて、其の心の逞ましさ、其言説の確かさ、頗る人の信を幸くに値るものありとは言ふも、素是れ幕なき田舎女なり、爾る者の言を著筆として我が進退を決すべくもあらぬが、さればとて鹿狩といひ、鯨船といふ、彼女が意表より然る言を巧み出すべしとも覺えず、然らば實事か、實事とすれば彼の桑名が江戸へは行かず、急ぎ國元へと引返せる、果して事の急なるか、急ともあらば御宮の御修覆なんど、さる安閑たる御用どもに空しく當處に駐在べうもあらず、と有りて又た復歸れとの御沙汰も無し、其の無きに自儘に此處を立退かむも如何なり、況てや今日見つる城代等が御咎は自然我身に連繫べき條件とも思ふをや、三四郎腰押との御不審にて牧野兵庫其の白洲へも召されなれば、彼等が愁訴を死後に果させて、過來の難澁、我が代りて陳述つべき義務はあり、さらでも兵庫、御咎の辜に聞怯して國許へ逃歸れりなど嗤れむも口惜しや。如何せばや?!

　さるにても御恨めしきは我殿なり、實に然る御思し召立ちあるとならばなど某へも斯くとは仰せ下されざる、若覆の兵庫、軍神の御役には立つまじと思し斷らせ玉ひしか、御譜代ならぬ兵庫、然る隱密の御意をば危ふしと祕し玉へるか、さらば六千石の大祿、何が故に下されし、家老の重職、何が故に補せられつる。情無しや、恨めしや。祐筆勘定のするやうなる御宮御普請の奉行なんどが兵庫には相應と豫ても思し召させけるかや。それとは反りて正雪が心入れ、過日言へる大死すなとの一言こそ兵庫を武士と思へるが嬉しけれ。三四郎が妹を置へる、師弟の情誼頼もしけれ。御家の御舊恩、忘れずといへる、予が寸志に報いよとて斯く迄に彼女を督勵したる、彼は眞正の大丈夫かな！以後は無二の朋友といふ、只假初の言とのみ思へるに、一言の約をも等閑にせざる、彼は眞正の豪傑かな！

　兎つ想ひつゝ、彼は大谷の旅宿へと戻れば、門前に見馴れざる鞍馬嘶けり。扨はと驚きつ内に入れば、江戸家老より差立てたる急使、待

構へて、「大公儀よりの御沙汰におざる。兵庫どの國元にて屹度逼塞めされい。」

（二十四）

當時の安濃津の主を藤堂高次と申しけり、左少將高虎朝臣の男にして、襲に大學頭たりしが、寛永十一年に侍從になされき。されば公然たる場所にては安濃津侍從と申すも、世上にては猶呼慣れたる稱を用ひて、津の大學殿とは言ひけり。

原來、藤堂の家たる、高虎の御父源助虎高の代までは、江北小谷の淺井氏（備前守長政）が手に屬きて、江州犬上に住れたりしが、高虎の時にいたりて織田殿に隨ひ、豐臣家に屬し、關ケ原御合戰以後はひたと家康公御手に在りて、忠勤世に超えたるをもて、幕府にても貳なく賴もしきものに思し召され、御譜代の歷々井伊と竝べて、井伊は關東三十三ケ國の旗頭、藤堂は關西三十三ケ國の旗頭、事有る時は兩家總軍の先鋒たるべしとまで定められたり。されば其の領地も伊賀一國に、伊勢五郡、これに山城大和の内九萬石を併せて、都合して三十餘萬石、勢猛たる大名になされし程に、高虎高次父子二代とも此の御恩に感じて、公儀奉公のほか他事も無かりき。

高虎は寛永十七年に享年七十六歲にして江戸の邸に卒せらる、嫡子高次、引續きて向柳原の邸にあり、國元には藤堂宮内を初として、同く壹岐、桑名賴母以下の士をさし置かれ、國政滯りなく料理せしめられたりしが、元和五年に紀州家和歌山に轉封あり、伊勢四郡を其の御領と定められし時、一志一郡をばこれを二分して兩家知行となされたり、これに依て雙方の溝渠相錯りて年々の水論は水旱ごとに息む時なし、況して其後に御加封ありし河曲郡白子の町をや、同所なる紀州領は、藤堂方の領地を介みて犬牙の如くに錯綜りたれば、此の畔彼の畝の差別もつき難たく、我を侵せし、彼を掠めぬとの爭論の果は劫じて、撲ち合ひ叩き合ふ血を流す珍事さへも尠からず、されば農民は皆、蓑笠の中に凶器を隱して田圃に出で、家中の肝者らは百姓の警護と號して、竊に弓槍鐵砲など携へつゝ野廻りする、其の野等廻り壯者らの出遇ふ時は、小迫合めきたる喧嘩は端的に起りて、郡奉行代官等の早馬を飛ばすことすら折節はあり、此等の意恨の累り積りて、今は紀州衆は津の者を仇、安濃津方は和歌山を敵と罵りて、互ひに間隙あらばと覬ふまでの容易ならぬ狀勢とはなれりける。

かくてある程に、此の七月の初旬なりき。安濃津久居の町々に怪異しき風說の起ち始めて、紀州領なる松坂、田丸、白子の町に和歌山より多勢の人數を向けらるゝと言ひ騷ぐ。不思議の事かな、唯今の人數の催ほし、何等の仔細か、世には彼殿の御上につきさま〴〵の事をば申せど、其れは世間の雜說のみ、當方との確執といふ、それは下々の軋轢なり、此の太平の世中に何の珍事か有るべき歟、なれど事は隣國なり、兎角は其の實證を見てまゐれとて、宮内壹岐賴母の三人、心利たる足輕を撰て彼の三所へと派し遣りたるに、彼等は前後して歸り來りて、——彼の風說は實で候ふ、田丸白子には、其城に、陣屋に、さしたる結構は見えざるも、たゞ和歌山なる歷々の衆七八頭ほど、甲の町乙の村の寺院坊寮に宿陣の札打て候ふ、就中彼の松坂はあの城の普請といふをせらるゝやらむ、材木を運ぶ人夫石瓦を積める車の數夥多しう、町中には紀の字の半被を着たる者道も去りあへず、其等が酒屋へ入り、餅店に立寄りて、物喫ひ、酔とろけて呼號る口裏を聞き候ふにも、今度は天晴れの手柄して一廉の褒美にあり附かむ、目に餘る働きして御感に預からむ、兎かくは當代に二度と無い事、久し振の足手伸し、子供孫

めらが語り草にもせよやと勇み立つ。方々は何を其様に喚はるゝか、此の様子は如何？　と問へば、ハ、猪狩ぢや、珍らしい猪狩ぢや、伊勢一國から、東海道、御江戸へまでの猪狩ぢや、と斯う申す。伊勢一國、東海道、江戸までの猪狩！　何さま要あるべきことゝ簡様存じて馳せ戻ツて候ふ、とは彼等が同音の注進なり。扨は！　といふ三人の驚愕は大方ならず、兎も角も此義江戸上屋敷へと、急ぎ早打の飛脚を立て、猶ほ事急ならぬ先の用心にと宮内は安濃津、頼母は久居、壹岐は上野（伊賀）と三方に立別れて、紀伊殿、別事なき御通行ともあらむには格別、然らずば各其城を枕にして命を限りの一防ぎと談合しつ、有る程の人數を分ちて急ぎ發途つ。これを見たる津の市中の動搖は、何東西も名狀すべからず。

（二十五）

忽く世間の物躁がしきも御耳には入らぬか、大納言殿、七月の中旬過ぐるころ和歌山を御發途ある。御供の人數は僅かに百餘人。紀の川を上りに、名手、麻生津より先づ高野へ御參詣、こゝに五日の御逗留にて一山の靈場殘りなく拜み廻らせらる。それよりして吉野なり、春の錦を裂りにかへたる山の景色も、さすが昔し人のよしとよく見し名所とて、自然他に超えたる眺望日がれずとの御賞翫大方ならず、吉水院を御旅館として、藏王權現へ奉納の連歌の御會もあり。やがて此處を出で立せて、大和と伊勢の國境なる高見峠を踰させらる。「武士の弓矢とる名の高見山、なほいくたびも越えむとぞ思ふ」とあるは此時の御詠とかや。かくて此の街道を躬見、大石、大河内と越えさせて、其名もめでたき千歳の松坂へと着かせらる。此の路次も、故蹟をたづね、名所を訪はせ、犬を奔らせ、鷹を使ひ、山の景色水の流曲の面白き所々にては御野立の御茶などありて、寔に太平無事の御旅、いと悠々たる狀態なりき。

御先供として豫て松坂にまゐれる面々、水野太郎作、村上彦右衞門を頭にして、御城の追手に出でゝ、めでたき御着を祝し申せば、殿には殊に御心地よ氣の體、いづれも大儀、大儀との御詞を下されつゝ、三の丸より二の丸、其れより本丸の御書院にと入り玉ふ。と見るが否、「宗佐、宗佐。」此の宗佐は千利休が曾孫にて、其ころ世に聞えたる茶博士なりける。拜領の黒紗の羽織に水色の帷巾したるが、はツ、はツと御返辭しつゝ御前へ出でたり。「宗佐、豫て申しつけつる數寄屋は？」「御繪圖の通り、御修覆出來にござりまする。」「ほゝう、然樣か。予も其の修理、十分に出來させうとて故意と途中も急がぬぢやツたよ。――炭は？」「忝けなき御意、――支度、總て仕ツてござりまする。」「然らば。」

殿には、御脚袢を解かせしまゝ此の茶博士に案内せさせて、彼の數寄屋へと御座なされぬ。此の數寄屋は、詰の丸の一段下なる、百疊敷の御座敷の東向なる石垣の上にあり。以前は向者の城主古田織部が指圖とて、黒木の柱縁に幽けく、茅の軒端、反古張の壁、蔀戸を旨としたるものなりしを、頼宣卿御覽ぜられて、風流は然もありなむ、なれど武將の茶はかゝる室にて立つべきものならずとて、新たに宗佐して御修理といふを名に、其の結構換へさせたるものなりき、されば此の數寄屋たる、尋常の茶室の風とは日を同じくして語ふべうもあらず、先づ土臺をば、熊野丸太のしたゝかなるをもて井樣の如くに組上げさせ、屋根の野地をば棹鉛にして、銅の厚き板もて其上葺れたり、明り窓には城の塀の狹間を用ひ、庭の茂林は彈避の松を其ものにして、數十丈ある斷崖に臨みて造り棧けさせ玉へるなれば、是を甚麼と言ふべきやらむ、水を品し香を評するの時は、自然なる仙寰として座邊に紅塵の舞ふをゆるさぬも、一旦風雲

怒るの日は、誰か這裏に蹈して盧氏の經を繙く者ぞ？　これを經營せる宗佐の才も、亦三十文の賣茶錢に甘んずるの徒にあらじ。

「御修理、如何でござりまする？」「むゝ、總ては存分ぢや。好う仕ッた。まづ一服せう。」

殿は、彼方此方を隈なう御覽じて、御機嫌も大方ならず。艫て進らす一服を氣味好う召して、「宗佐、汝に褒美取らせう。何なりとも望め。」

宗佐、把りたる茶筅を擱き、遽たゞしく座を退りて、「有難き御意。附きまして宗佐一つの御願ひがござりまする。」「ふゝ、改まッた？　何事か？」「別義にはござりませぬ、久能御山御普請御用として出向はれましたる牧野どの、――内々の御逢をと私へまで切ッての依頼にござりまする。何卒此義……」大納言殿の御氣色は俄に變りぬ、稍御膝を直させて、御聲低う、「奴めは當所にか？」「さらばにござります。現下は御爺の身、御前恐れ多うは存ずるも途中其外にて見聞の狀態、恐れながら殿樣御一大事と有やうにも存ずれば、宗佐内々にて御目通りを、と箇樣に餘義もなう……」「而て、今何處に在る？」「當御城下、龍泉寺に蟄居し罷り在られまする。」殿は鼓舌一打せさせつゝ、「ハテ癡呆た奴！」

（二十六）

癡呆め！　との御意に宗佐は恐入りて差控ふれば、殿も少時く御思案の御面地なり。

「予が大事といふ――聞つるか？」「いや、何とも。」「大方の事情は知る。江戸、駿河、海道の雜説。現は津の者共が周章の體でもあらうが……」と猶御首を傾げさせらる。宗佐は頻りに手を摩みつゝ、「殿樣の御脫落ない、牧野どの見聞せられましたる程の事、疾う御聽にとは存じまするも猶彼方が切ッての御愁訴、是れも忠義を申上げられたいからの義とも存ぜられます。公儀御憚りは表向の御事、然るべくは今夜にても御内々……」「うむ、其義察せぬでもあらぬ。――然らば斯うせい。逼塞の家老牧野兵庫には目通り叶はぬ。其方が弟子分、以前の茶道とあらば遂うて取らせう。」「御機轉恐れ入りましてござりまする。さらば其支度の間。御表へも……」

「いや此室にて待たうよ。燈火持て。」

時は是れ申の下刻なり、御窓より眺望で玉へば、一方は名にしおふ伊勢の海原目もはるかなる、夕風に波さへ見えぬ海の面は遠く外洋の潮につゞきて、空か水かの差別もなし、一方は尾張の智多なる巴豆の岬、野間内海の赭く綠に、蒼きを含める山の色も、それかと見る間に暮れ初めて、紫に黝き濕靄の端手は、倒りて晩霞の名殘の餘光に目炫ゆき黃金の色を見せぬ。變幻百出、這の面白き眼前の景色を、殿は何と御覽じけむ、御歌をや案ぜらるゝ、世塵にや看轉べ玉へる、御傍に御小姓らが燈火もてまゐり、御夕膳進めまゐらすとも御心づきなげに注視り玉ふ御袖の下に、「殿、金彌め參つてござりまする。」金彌といふ聲に驚きて、背邊を屹と顧たまへば、見も馴れざせぬ青入道の、茶道の一人は蹲りぬ。「や、汝は？」「宗佐が弟子、御茶道の金彌にござりまする。」「や、金彌か？」御覽ずればげに其者なりけり。日來なる出仕姿の華美なりしには引反へて、青き綟子の怪しげなる羽織の下に、鼠色なる麻の單衣を着たりける。「汝、其形態は？――は！」御返辭は得うせで、只暗涙なり。「入道か！　ハヽ、好う似合うた。」打笑はせ玉ふ殿の御聲も、異樣に、沈みて聞えぬ。「諸事は、金彌、恐れ入てござりまする。」「むゝ！　壯氣の失措とは言ふべきも、汝、異な振舞しつるものぢや喃！」「寔に金彌も異な振舞してござりまする。なれど又殿樣も、異な御振舞遊ばしたものにござりまする。」彼は悲涙をやゝ斂めて、恨めし氣に殿の御面を瞻仰げたり。殿は、霎時御眼を瞑させて、「金彌、一

大事といふ、其事か？　予の振舞が異りて見ゆるか？」「恐れながら嚴う異りて見上げまする。殿様には江戸表の御会議といふ、あれ御聞にはなりませぬか？」「江戸の会議が何とある？」金彌ははら〳〵と纏す涙を、其の羽織の袖に押へて、「何と〳〵て――恐れながら殿様には御謀叛！」言ふを壓抑て、殿はから〳〵と笑はせ玉へり、「大事といふ。諸國の動亂か、柳營の御不豫か、何ぞかと存ぜしに、相も變らぬ老中どもの評定か。當時の江戸老中は、恐れながら權現様天下を御統治の御腹中といふを知らぬ、ただ人を見れば謀叛人、火を見れば火事といふやうなる淺々しい思慮の者ばかり。されば予が些と物言ふ口持ちたるを鬱憤いものにして、軈もすれば天下に日懸くるの、諸浪人を手懐づくるのと戰々言ふ。賴宣は柳營の一門、當將軍家の御叔父、切ても離れぬ身をもつて何を拔て然様の正無い事せうものぞ。汝も予が家の重職勤むるほどの者、況て予が傍にも多年奉公の身、予が心底をも熟と存知の筈であるべきに、然る無道巧むべき者と思うて言ふか。思ふにも似ぬ。」と後半はいと御不興氣なり。

（二十七）

御心底殘させられぬ殿の御意承はりて、日來の牧野兵庫とあらば感激の涙に嗚咽もしつべきを、今は名も姿も變りたる御茶道の金彌、衣ならで心の色も染め異へやしにけむ、不足らしき眉を攢めて御臺の上を注視つめぬ。殿はやゝ御聲高く、「返答せぬは不審といふか？」「は。」「予が今申聞けたる趣、腑に落ちぬとか？」「恐れながら金彌腑に落ちませぬ。殿様此度の御成らせは何様の御趣意にござりまする？」「ふむ、猪狩ぢや。」「唯今の御猪狩、何の御用どもござりまする？」「異な事をいふ奴。畋獵は武將たる身の……」「……御遊技――いや御暗昧、治に居て亂を忘れざる御本文とも御意ござりませうが、其の御治世を此様に御驕がせある、其れが其の本文の御趣意とも恐れながら御座りますまい。是れは思し召返させらるゝ方に……？」彼は容を正して儼乎言ひぬ。「むゝ、忠言は過分ぢや。が、さらば其方は、予が此狩を謀叛の發途とも猜疑ふか？」彼は臆せず、「さればの御事。御旗上とは直様には申ますまいも、世間の色目、自然其様の義に相成ませうとは存ぜられます。」「ふう。其の仔細？」「我が思ふやうにも有らぬ、餘りなる御白々しさやと、耐らぬ兵庫、いかう急剌たり。「日來にも似合せられぬ。あの津の者の狀態、未だ御耳には入りませぬ與、

彼處の騒動、たゞ籠城の體、其のみか江戸への飛脚、現に用人の田頭某名輩母が早駕にて出府の途中、駿府にて江戸用人の藤堂采女書狀を受取りて直さま國元へ引返せし爲體も、私眼前に見てござります。其節の口狀にも、殿様には御猪狩といふを御名に陸路を御勢路へ押させられ、熊野浦には鯨取といふを口實にして快船數多を纔へさせ、彼處より御人數を三州吉田へ渡さるゝ、事はや急ぢやと申ましたに、又道中での雜說には、公儀より内義の御使者は、吉田の水野殿（驚物忠善）岡崎の本多殿（石見守利長）鳥羽の内藤殿（飛驒守忠政）續いて譜州の丸龜、伊豫の松山、宇和島へも遣はされた！　或る者は又た、江戸にては尾州家、越前家、彦根、桑名、濱松、明石、姫路、岡山の諸家様を御前に召されて、紀伊殿、安濃津へ取懸けられなば、一左右次第、國元人數を出だすべし、討手の大將は尾州殿、副將軍は越前家、と斯う御沙汰にて既や御采配下された――等とも沙汰します。されば私道中も、宿々にては目引き鼻引き、一宿一飯も快うは得仕られませんだ程の仕義。其れ程の世上の騒動、未だ殿様には御存知おざらしやりませぬか。仔細は？　抔と御下問は餘りに餘りに御今かしうござりまする。」言ひ

訖りて、彼は遺恨の涙なるべし、其瞼を袖もて拭ひぬ。殿も有繋に愕かせ玉へるか、暫時は默然たりし御口をやをら啓かせて、「年齢は壯いが、其方も物の目端はやゝ利いつる者。有の濫觴謬ないか？」「何と致して……」「氣にも無いぢやは！　予が心底をば先刻も申しつる。此の猪狩は只尋常の狩、家中の卑者らが足調練の爲め。又た熊野の鯨なんどを快船を出だして捕せしなど、夢にも知らぬ！　其につけても其方が駿府で見たる桑名頼母――異な話ぢやぞ。何さま安濃津久居上野、それらの騒動は聞き及ぶが、これは彼等が常、予が參府入部の砌も、いつも戸候をつけ、人數を配り、事もあらばと狙ふやうなるは今に初めぬ。されば今度の狩といふ、其れ聞くが否、薄の穗にも戰るといふ臆病風の風説に怯氣を立てゝ、宮内は安濃津、壹岐は上野、頼母は久居にと籠つたとは吉野にて既や聞いつるが。其の頼母が――一城を預かる頼母が――加之も分別は些とある素奴が、大事の城を棄て置いて自身の出府、異な話ぢやぞ、況て、江戸柳營の會議、尾張越前をも御前に召さるゝ、然る程の大事とあらば彼方にも老職は居る、用役は居る、彼等より時限の注進も無うては叶はぬに。縱し其等は箱根足柄にて抑留られうも、國々の飛脚も參らう筈ぢやを。――其れも來ぬ。全般が不審ぢやぞ。」燈臺の火を凝視めさせて、御思案は半晌なりき。と看る御眼を不圖轉されて、「や、膳はまゐツて在るか。まづ喫めう。ハ、金彌、茶道の役、給仕せい。」

（二十八）

大納言殿は既に一椀を喫し了られ、今一椀と金彌に仰す。金彌は御椀を受けまゐらせて飯を注ぎ、御臺に載せて進めむとす。其間、何やらむ御箸にて物を畫き玉ふやうの御氣色見えたるが、彼がまゐらす飯椀を御手に取らせざま、「金彌、今憶ひ得たるぞ。あ、其れも奴原の手段ぢやな。――叮、爾うぢやは！」

金彌は驚きて、御椀を取落さむとするを辛くも取留めつ、「奴原とは？」「その安濃津の奴原ぢや。宮内か？」頼母か？　大抵は其名を詐稱せた頼母めが術であらうかや？」彼の新發意の靑道心は、一偈の錯案に、顔の一喝を喫ひたらむが如くに愕きて、御回答もせで只願に目を瞬りぬ。「ハ、驚くな。それは有る術ぢや。珍奇しうもあらぬ策ぢや。奴原の臆病心から世の聞えを太大うして、江戸御聽を驚かし、一つは幕府老中どもから猶狙た加勢ども送らせう爲め、二つには予に外聞の憚からせて、此の鹿狩中止させうが爲め、兩途かけての策略ぢや。ハ、ハ、ゝ確に爾うぢや。」彼の膝は戰えず前めり、「それなりや何故に江戸までは參りませいで……」殿は徐に御汁粟一口啜らせつ、「其れがその、小才覺ある頼母めが所爲とも想ふのぢや。駿府には江戸役人も在る。彼等が耳に入れさへすりや、其後は其者らが手して江戸へ注進して呉るゝ。況んや江戸へまゐるといへば箱根の關所を通過ねばならぬ。後日に此策、自然露顯に及んだ時も、關所破の其科に落ちまいが爲の遠慮とも見た。喃。大抵は此趣は外れまい。」悠く仰せつゝ、殿は猶更の一椀をと御所望ある。金彌は今、我が手に注げる飯ならで、甘々と一杯の手盛をも吃ひしかと思ふ無念さに、匙持てる手も震へて見えぬ。

兎角して御給仕は終了たり。「眞に口惜しうござりまする。金彌、面目も無うござりまする。」殿は御楊枝の御口より、「面目があるとも言へぬが、致した事は諸事詮術が無い。其方は廿五、今が調練の最中ぢや。以後は獲物の猪か鹿かに熟う注意けい。」「はッ。而て此の御狩は？」「何があらう、箇程までに致したもの。たゞ狩らう。」御臺も無氣なる體を彼は見るより、縮むが如くに眉を皺せしが、諫むるに其辭を得ざる如く、

訶り〳〵言ひ出だせり。「申すも恐れ、差出ましたるやうにはござりまするも、――術とは申せ、彼れにも爾許りの用意ども致しをる最中、其を強てとござりませうこと、私何とも心許なう。是は冀くは、右申上げましたる、思し食御止りの義を……」彼は既や、道理とは言ひ得ずして、只其情に、萬一の僥倖を冀へりき。「扨も念無い。それこそ其方が日常の氣質ともあらぬ事。但し予が身の上を案ずる、忠信は過分に思ふが、――予の考慮とはいかう違ふぞ。言ふ迄も無い、彼奴ら然程に事を企まば、當時在江戸の大學（藤堂）より柳營へも、有事無い事種々に譖しをらう。其の最中に、予が當所まで出馬しながら、狩といふ、其事をも爲で、たゞ空しく歸城する。然らば彼等は何と言はう？　扨こそ紀州の殿、狩に事託せて松坂まで出向はれたも、此方の用心堅固の爲め、すご〳〵と歸城せられた、原來が狩なりや狩で、其狩を爲れうずものを徒歸られたは、謀叛の底意、顯然ぢや、謀叛々々、顯然々々と尾に鰭をつけ言ひ噪ぎなば、又あの不穿鑿の江戸老中ども、狼狽た評議に何樣の難義とも言ひ懸けうも知れぬ。或は山陰、四國の端處への土地替か？　乃至は右に聞く熊野の鯨も事實となりて、田邊を削り、新宮を殺ぎ、以前の大和十津川との難題か？　又は松坂、白子を沒して、奥雪津の邊へなど替地といふ、手も足もとの趣向ども爲うも知れぬは！　其れも時の運、柳營御安意の爲とあるなりや是非ないも、只耐〳〵難いは、あの大學めぢや。日常は兎に角と口幅を利かるゝも、見い、紀伊國殿、我等家老が些ばかりの用心したに聞怯ぢやられて、散々に逃戻られた、あれ體で男が立つか？　なんども言はれなば予もはや其れ限ぢや。喃。されば此狩は、聞くが樣では大事のもの、迂可とは中止られぬ。合點が行たか？！　なれど又其方が忠言、無下には棄てぬ。熟う考慮へう。――先づは退れ。」

御燈火を御手づから出居へと押向け玉ふに、金彌は是非なく御次へ退りぬ。二の丸より三の丸、追手を出でゝ、世を忍ぶ身の人無き方をと、堀端を迂回つ、鎭守の八幡の葦表際を過る時、「兵庫どの。」呼ぶ聲あるに驚きて顧眄れば、一個の旅裝せる梵論字ありて、御神水の叢際に佇立めり。

（二十九）

金彌の兵庫は、呼懸られて思はずに立住りしが、いや〳〵我は木茅にも心を隔くといふ現下の身なり、喚れしとて迂可と返答すべきかは、と後眼に睨て行過むとす。「御待ちやれ牧野どの。怪しうもあらぬ……」彼は冠りし天蓋に手を懸けつゝ、進み倚りて袖を控へぬ。斯く爲られては振切らむも流石なり、「と言ふは？」何者、と兵庫其身を振向くる時、笠は早くも取棄てられぬ。「我們ぢや。はゝ、正雪ぢや。」「呀、由井殿か！」「扨も久濶しや、御變りもおざらいで――と言ひたいが、兵庫！　いかう變られた喃。」例の詼謔、はゝと嘲笑はれて、此方は面目もなき圓頂を撫でたり。「看て御與りやれ、此の醜態ぢや。家老の兵庫、今は茶道の金彌と化けた。」「化けたは同一ぢや。我們も此の行裝ぢや。」「さればよ、其の梵論打裝、」と兵庫は左右視つ、「……甚麼の趣向ぢや？　最明寺殿。」正雪は微笑ひつ、應ぜり。「源左衞門常世を見繼がが爲め！」「や！」「彌、鎌倉の御大事ぢや。早打旁々、一言の末を貰うが爲ぢや。」「扨は江戸表は大事ぢやか？！」兵庫は、彼が江戸より來りしと想へるなり。正雪は其氣色を推知て遽しく頷きぬ。「如何にも大事ぢや。が、我們は江戸へ得う行かぬ。箱根から引返した。」兵庫は胸を磕と拍ちて、「關所がか？」「おう、其關所を鎖められた。下りは三島まで、上りは小田原まで、――領主の刎形持たぬ者は箱根の通行

は如何底が能はぬ。それで我們も引返した。」是れにて解めたり、先刻殿の御不審ありし江戸屋形より注進の來らぬといふ、果然第根足柄の兩關所にて抑留られつるか。扨は愈藤堂が讒誣に陷させて、殿は御謀叛と決りつるかや。無念や！　と兵庫は身を震はしぬ。正雪も洪歎して、「今更ら萬々は我們は言はぬ。なれど先頃御身に語うた、紀伊殿御大事今年の內というたは其驗がおざらるがや。兎角は人も身の末の運となれば、弱り目に來る祟り目とやらむ、此回の御大事も、殿が不時の御鹿狩といふ是れ一つ、御身が强訴の腰押といふ其れ二つ、此の二派の壓力が一條に合うて、それで和歌山五十五萬石の田圃を押流す。無念の事ぢやが。——然りながら御身も好う途中の危難を脫けられたな。何か、道中から其態も名も變へられたか？」兵庫は又も呆れ果てたり、其身の滑稽、國元にての謹愼といふ、追ては何樣の裁許の品あるべしとは覺悟の前なるも、路次の危難！　這は什麼何事ぞや、餘りに物も覺えぬ事、と星光の瞰氣ながらに彼が面を疾視たりき。此方は不審氣に、「回答のお爲やらぬは我們推量違うたか？」彼は戈に息を出だせり。「違ふ！　途中の危難とは氣にも知らぬこと。」「知らぬとな？　嗟乎、知らぬが佛かや！　さりながら御身の忠信を其の佛神の冥護られたか？　然りとては……」「いや、貴老、其の危難とは何事ぢや？　兵庫以後の心得ぢや。仔細語いて。」急かれて正雪は、躊躇りて些と躊躇へるが、「何樣にも、爾う、以後の心得ぢや。話さうが……」言ひつゝ彼は徐に四邊を回顧しぬ、「餘りの往來ぢや。夜陰とは言へ。——此方へおはせ、恰好場所がある。」正雪は笠を手にして先に進てば、兵庫は藁草履しよ〳〵と心許なげに後に續けり。彼等はやがて華表を入りて石階を拾歩ふこと三十餘級、椎樫の下枝を分けつ、朱の珠籬を左右に見て、禰宜がさゝげし社殿の神燈の下まで行きつると見る間もなく、弓手に蟾立し大楠の影にいたりて、其姿は忽然と消えたり。

（三十）

此の大楠は、鎭守の八幡の神木として、其の一枝を折るも神罰ありとて土地の民も畏敬れて近づかず、十圍にも餘りたるべき根方に注目縄引わたし埒を結ひて、猶其の木精を鎭祭れるにやあらむ、大山祇の小祠を置けるが、此祠は蒲生殿代、初めて此城を築ける時より領主持として、三年に一回其の修理をなす、修理の時は必らず夜を用ひて、これに關はる大工番匠は重き齋戒、普請の中は神境の四方に張番を置きて、絕て雜人濁穢の者の入るを許さず、檢使の役人は晝夜に見張りて、祭祀の日には又た神祕の祭式ありといふ。されば此宮を、宵寐の森、鎭守の壇內より松坂の城にかけて其古へは一帶の森林なりし、此森を宵寐、又は四五百などいへるよし古歌にも見えたりと云ふ。の夜延の宮と土地の者はいふとなむ、總ての事の仔細は知らぬも、何さま由緒あるべき祠ぞとて、落葉掃く宮丁すらも其筈目をこゝに入れねば、半ば土と朽ちたる葉は既に石とも化るべき根の洞に堆丘をなして、下方には何物のあるやらむ見れども見えず、或は軍用金の埋め場所？　等とも世には噂ふめり。

正雪と兵庫とは、實に此の夜延の小祠の許にいたりて、忽然として消えたるなり。看れば、小祠の八重鎚は開かれて、牀板は剝除られたる其の下方は方二間餘なる、底居も知れぬ洞穴なりき。彼等は今、實に、此の洞穴の中段、石甃の上に對向ひて在り。其の對座の中央には、軍用は紙燭といふ、正雪が工夫の早蠟燭を置けり。千歲日月の光を見ぬ洞中の氣は、森々として、一呼吸の幽微なるだも耳に響きつ、紙燭の影は黯澹たる暈を帶びて、鼻を衝く異臭さく、

覺えずして突立つ肌膚は、麵麭の手して摩づるゝが如き感觸せり。爰にいたりて豪膽物に怕ぢざる兵庫も、俯して洞を覗つ、仰ぎて四邊の狀を視つ、安からざる胸の不審を堪へ難たる眉宇に露して、自然聲を潛めぬ。「由井殿、此處は什麼……此洞は……」彼は、或は、此の日前なる這人を、豪盜の張本かとも思へる氣なり。對手は含笑めり、「はゝ、紀州殿御家老樣が、其の御領分の大事の御要害御知りやらぬのか？」「弥不審なり、兵庫が目は徒灼輝きぬ。「眞實御知りやらぬか？　え？　はゝこりや扨も〳〵ぢや。此洞は蒲生殿此の松坂の城を築かれた時、太閤殿下の御助言もあり、自身も亦た工夫せられて、城の本丸、百疊敷の西方、大杉の樹の根元より外郭の石垣の下を透貫して此處へと穿られた拔穴ぢや。此の石甃を下りること三間にして平地となる、其處を北方へと進むこと五町、又東方へと進むこと一町、此處にて道は三條となる、これは萬一の敵を誘導く用心で、一方は行留り、二方はあらぬ方に通じて其終端は一緒に合ふ。眞正の本道は、東手の半途に大石の蓋を天井にして置かるゝ所ぢや。我們も最初は、其の有らぬ方に迷行うて、二日を送つた。ハヽハヽヽヽ。軍學の修行といふも難辛い物なう！」扨は其の、軍學といふ、其の修行にか？何さま彼が、地理に詳しく、國々の風土に通じ、人情を知り、其の領地地頭どもの軍備の厚薄を諳記すること、幾ど神の如きものあり、又其の高足の弟子分に、城攻の法を敎ふるには、徒に口舌の末を以てせず、其れが工夫の、國々に現在せる城の起し繪圖といふを用ひて、塀柵の高さ、堀空壕の深さ、水手、河道、飯米の土質、石性までをも說き聞かせ、扨て其の仕寄、攻口の方につき、互ひに攻備を戰はさすと聞きつるも實に眞實なるべし、想ふに此男の其眼中には、天下に、城も、要害も、物の備も、山も、川も無きならむ、彼にして或る土地を有ち、人數を持ち、機會を待ちて事を擧げなば、如何なる大事をか爲むずらむ、恐怖しき事かな、と兵庫は再び、以前の崇敬の念を反覆して、更に驚歎の瞻を寒うしぬ。正雪は灑りて、然る氣勢もなし、愈其の笑顏と語詞とを續けつ、「餘事は措きて、肝要なは御身が上ぢやよ。扨は御身、あの駿府城代はじめ町奉行日付ら、御咎の閉門といふ、御存知ないな？」「いや其義は知る。其夜に我們逼塞と申付られて……」「直ぐ發足れたか？」鋭く叫ぶに、「如何にも。」と釣込るゝ如くに應じぬ。「あ、危殆いこと！　直ぐ其後ぢや。久能の神原殿に御內書が來て、紀伊殿家老牧野兵庫を捕込めい。直ぐ樣江戶表へ差遣れ！　との事ぢやつたはよ！　吁、危險いこと。今一足で貴方との此の對面も、現世では叶はぬぢやつたに！」彼は其額に手を加へて、其の無事を祝すると與に、間一髮なりし危難の遁れる樣を告げぬ。聽く兵庫の舌尖も同じく戰慄へき。

（三十一）

兵庫が面色を變ずるを見て、正雪は其額なる手を胸に當てたり。自家も聲音を戰かしつゝ、「彼の手に御過やらば、我們今生の對面も、實に、那時限りであツつらう喃！　江戶役人が拷掠の無慈悲なは、御身も大かた駿府で目前に爲られつらう？　全體が彼體ぢや。理非曲直、悉皆が沙法の限りぢや。況て御身かは三四郎ごとき末々の者でない。名にしおふ紀伊國出頭の御家老、大納言殿御謀叛も御身らが勸誘に究竟因由かとの御猜疑もある。爾らば其の拷訊、熱鐵であらうか？　烈火であらうか？　肉を剝ぎ、骨を削る、……吁、今ごろは其の憂目に御遇やらう最中ぢやに！」

鬼を談ずるを聞て、其可怖しきに驚く者は、親しく鬼に遇へるものなり、拷掠の恐るべきは、兵庫も實に當面にせり。彼は正雪の語るを

聽て、醜しきまで戰々と震慄へき。「貴老……それ實に然もあらば……兵庫、あの汚辱には遇ひたう無い。寧そは自殺う！」「自殺うと被仰る……？」と正雪は、其首を稍斜めにして、「……何故に又、其の、自害なんどゝ被仰るやら？」彼は、獨語く如くに語ひぬ。「何故にとて、其拷訊は實に理由も沒い拷訊！　其の沒理由い理由を陳はうとすりや只鞭撻の責苦に遇ふ。是れは我們眼前に目擊た。牧野兵庫、箇樣の恥辱見たう無い！」「ふう！　沒理由い？　眞實然うか？」「然うかとは？」「大納言殿御謀叛は、眞實無い！　と御寸は言ふか？」眞實の文字を主眼とせられては、此の返答は至難的なり。何者、殿の御謀叛、眞實無し！　とは我も斷言るに自然舌の澁る如きもの有ればなり。「御見やれさ、ソレ、御身の殿最屓。善惡只殿、殿、とばかりの御身が口にも、大納言殿、御謀叛の思し召立毛頭無し！　とは得も言ひ斷りやるまい。此の大勢の御猪狩は何事ぢや？　彼の御茶屋の御普請は何由ぢや？　隣國邊境を形の如くに御警がせありて、他人は、城よ、塀よ、兵粮よと犇めくを、目にも懸けず、耳にも入れず、野くれ山くれ、遙々の道を御座なされての御遊技とは、こりや平常の御遠慮專一といふ彼の殿の御擧動か？　御身は第一、此の御猪狩の御趣向を甚麼とか念ふ？　又た海道宿驛の雜說をも甚麼と聞かれた？」其事は我も、方纔殿の御聽を驚かし、それに就て利害の存る處を陳さむとして、纔りて些の御不興を蒙むりたる其的なり、既に御心底殘されずとは仰せられしも、猶何とやらむ御斷の端し、眞實を白へば、隱なしとも承はられぬをや、其を倒りて、甚麼と念ふ？　甚麼と聞く？　と問はれては、我も御身と同腹中よと膺ふるより外の言もなし。と兵庫は心羞しき首を俛れぬ。

「ソレそれぢや。凡そ世中に日のあり、耳のあり、江戸の東方と京都の西方とを知る程の者、殿の此の御猪狩を御旗上の御首途と言はぬものあるべきか。縱しや眞正の御旗上と無きにもせよ、此の御城を一步東方へ御座なさるれば、直ぐ其れが其の御旗上のものとなる。御身は口には何とも言れぬも御分ほどの怜悧の胸、忠義の心に、其の前途の看破られぬといふ法は無い。御分、もし、眞實、殿に、然る御心の無いと知らば、何故に此狩、御無用！　と諫められぬ？　これが泛々の外樣輕輩ともある事か、御國の重責に任ずる御家老！　何故に身を以て諫められぬ？　其の自殺もせうといふ身を以て！」一疊みに懸けられて兵庫は耐らず、其戰顫したる脣より、震慄きたる聲を發だせり。「諫、諫めたゝ何を隱さう、有り樣此麥に形を變へて、御逢の願うて諫めを上げた。今が其の歸途ぢや。」前半は突として發でたれども、後半は寂として、終末の一句は口に籠りぬ。

正雪は透さず其掌を扇にして扇ぎ立てたり。「天晴れぢや、御分、見上げた者ぢや！　卽座に御聽納なされつらう喃？」「……」「無いか？　え？　御聽納。……御聽容おはさぬか？」「おはさぬぢやツたよ！」「え？　おはさぬ？」憂愁を攢めし眉の下より、兵庫が面を沁々と視たるが、突如に正雪は決然として、「兵庫！　覺悟せい！　如何にも死ぬね！！」「えツ？」此方は今更に愕きたり。「死ね！　死ね！　天晴れ天下の謀叛人となツて死ね！！　我們先日駿府でいうた、殿が御謀叛の御旗の前で見事に死れ！！」「死ぬは厭とはぬ。然りながら……殿樣の御謀叛といふ、其れ果然てか？」猶ほ信疑の半ばせる首を傾ぐるを、「えい、今更ら何の疑惑、御身の胸で視て、腹に御聞きやれ。……なれど此處はいかう大事ぢや。其の殿に御胸の泥を吐かさいて上げ申さすか。」正雪は、腕を拱きて、思案の眼を瞑ぢぬ。只其の脣邊には微笑ありき。

（三十二）

「御胸の泥？」彼が其語の意味を解し難ねたる如き面色を見て、正雪は哈々と嘲笑ひぬ。「其の、御胸の泥。曉解らぬか？　さればこそ田舎人は話が遅いぢや。」兵庫も怜悧者、直ちに對手が裏を掻きて、「いや、御胸裏の祕密を打明けさせ申すとは疾に聞いたも、思案は、其の打明けさす此方の手段ぢや。」「ほゝ爾うか。手段を問ふか。——手段は、今もいふ、大事のものぢや。」正雪は、苦笑の口を鎖ぢて、復び考慮ふること多時。やをら其の氣息を整理つ、「此義は、容易い事のやうの、難義の所爲。まづ覺悟が第一ぢやな。」「覺悟も要るまい。彼方に其の御心もあらぬものを、附け申す、其れにこそ。既に——御身が言ふ——其の思し召立ある處へ此方からして云々と言ふ。腫物の膿潰たるを針で刺くやうのもの、孔は端的に開からもの……」「ハ、若輩い！　其れを其の我們がいふ。御身は全般に其樣の一途の料見有たるゝから、此程やうの爲損じもある、物の謀叛もする程の人、然樣の淺々しい考案で叫はうかい。今にして思へば、殿が、昔日からの御寵愛竝ぶ方ない、現下は出頭飛鳥も落すといふ國の重臣、牧野兵庫、御身樣に、此の祕密を御明しやらぬも御道理——と斯うも思ふぞ。武道の夜話にも聞かれつらう、明智光秀があの本能寺の大事思ひ立つ時、其の前夜まで、股肱の腹心、左馬助儀太夫四方田兄弟らにさへ祕し隱してたゞ內藏介一人にのみ談合うたといふ、今の殿と光秀とは、思慮の淺深、智慧の高下、天と地との差違がある。それに御身が其の分別では、內藏介は扨置き、左馬助儀太夫らにも適か及ばぬ。是れは究竟が能はぬ事か喃！」進みかゝりし話說は途切れて、主も默すれば、客も默しぬ。中央に置かれたる紙燭のみ、あはれ此の不興氣なる二人の面を遠慮なく照らせり。

良有りて、正雪は、紙燭の燼心を些と撮去て、「……とありて依然に在られうならば、御身、又彼の恥辱に遇はうも知れぬ。それも最傷い。到底が亡い身ぢや！　御手討に遇ふ覺悟で、遣て御見やれ！」「御手討な？」「應よ。說しても御祕密あらば、强ても勸むる。一命を懸けての御身が心底と御覽ぜば、或は其事、御明しあらうも知れぬ。——御明しなくば御手討ぢや！　其れが覺悟ぢや！」兵庫が目は鋭く灼耀きて、睨み消すばかりに紙燭を疾視めり。正雪は復た嗟歎せり。「英雄の主を持つ身はそれが艱辛いよ。英雄は我が慾の爲には他の生命をも何とも思はぬ。人質を敵に與れて其の約束を破り、其者が流いた血を盃にうけて、勝軍の酒宴するなど、珍異しうも有らぬこと！　其れとは異なれ、殿も世間の色目によりては、出た杭を俛俯と、大逆の名を御身に負はすか。或は公儀御使に御身を渡して、駿府一義は毛頭以て御存知ない、紀伊國の忠義は此通り、江戸表の御沙汰とあれば祕藏の家老とて一言を申さぬなど陽言るゝか。恁くして敵に油斷さすか。後日の旗上の口實を造らるゝか。兎角は英雄の心事、到底が凡庸の我々には測量り難いも……ただ哀れといふべきは、其の犧牲——御供にあがる其者の身上ぢや。なれど其れも年來の報恩、臣たるの分とすれば斷念も成る。御身が忠義の心からはゆめ御恨みとも思はれまいが、只我們、紀伊殿に恩德も無い由井某の目からしては、朋友の牧野兵庫が生命を奪殺ばるゝを嬉しうも思はぬよ。……が、總ては今日の現塞、繰言も詮ない。主の御手か？　獄卒の苛杖か？　但しは御身に武運あらば、あの安濃津久居、言ふも愚かや名古屋より岡崎、東海道を眞平地に押下して、江戸御城の大手の橋に屍を曝すか？　其の三つ一つぢや。えい！　思案が要らうか？　當ツて碎けよぢや！　骨は我們が拾うて進ぜう

は！」

（三十三）

此夜城中には、水野太郎作村上彦右衛門以下、歴々の士を召されて、大納言殿、内々の御評議ありしとは聞えしかども、もとより隠密の義、御前伺候のものゝ外は絶てこれを知る由もなし。只宗佐のみ御茶の給仕に事託せて、密に其の御模様をば覗ひたりける。

夜も明くれば、城中城外の物の色目、昨日とは太く異れり。其は誰言ふとも無く、安濃津攻、久居攻、との風説、いたる處に喧噪しく、四五日以前まで藤堂が城下の士民の狼狽周章ぐを、狐に魅まれし、通り魔にや罹れしと嘲笑ひたる者、今は倒々く血眼となりつゝ、妻孥をば那處に遁さむ、資財をば何方に搬ばむ多氣の山中か、度會の神領か、船にや積む、車にや載すると犇めき合ふ。と看る〳〵、追手の御櫓に、太守の御旗、馬印、吹上ぐる濱風に翩翻として、御供の諸士が馬揃、今日午の刻！　と觸られたり。

あはれ事は大事となれり。馬揃＝＝武者押＝＝城攻？　事は愈大事となれり！　龍泉寺に澤みたる牧野兵庫は、此の光景に且つ驚き、且つ恨み、且つ憤懣りて、今は只言甲斐なしと見られたる此腹一つ、御前に掻屠き、白き血が出るか、赤き血が出るか、未だ腐敗れぬ臓腸、鮮々しき處を御覧に入れて、素性は卑賤しきも、氏は無きも、紀伊國家老の魂の入れ所、性根の在り所、斯の如しと、最期の御恨言を後日の記念に思し召知らせまゐらせてむ！　とは息巻たりき。彼は、御咎中なる身をも忘れて、供揃！　と若黨に命令たり。御茶道の役を返上して、以前の家老の職に復れり。女々しき金彌の名を廢めて、牧野兵庫紀長虎！　今日唯今、最期の出仕！

出仕の衣服は特に際立ちて打裝ちたり。下には白きこと雪の如き汗衫に、綸羅麻の無紋の帷子、紙衾をも有紋にしたれども、霰の粒細小くして、外見には無地かと思ふばかりの雙麻の折目高なるを撰てぞ着たりける。黄金作の雙刀、これは拝領の刀、下緒には師より允可の薄紫を曙に組たるを故らに附けたりき。黎毛馬の優れて逞ましきに、銀覆輪の鞍置きて打乗りぬ。鬼の如き供若黨廿餘人、一様の褐染の帷子に、一様の萌黄柄の大角鍔、一様に脊を七の椎まで端折らせて、一様の毛脚に一様の三里隠させたるを左右に立たせ、往来に餘て登城する。道々に馳參する馬揃の若殿原、華麗をつくして打裝てるも彼等が風采には蹴落されて、いづれも〳〵手轅を控へ、大道を譲りて眺めたり。

間なく彼は追手に着きぬ。瞻仰ぐれば、金の御幣の御馬印、七本の皆白の旗、渡櫓の塀の上に立てられて、自然勝色見せたる、濱嵐をふくみて婆娑たり。彼は雙眼に熱涙をうかめて、佇立りつゝ、拝せしが、やがて本丸の玄關に入りぬ。「宗佐や在る？」

牧野兵庫の登城と聞きて、宗佐は驚きて馳せ來れり。出遇ひ頭に兵庫、「やア、宗佐！　彼が姿の、昨夜とは全然異れると、其の聲色の平ならざるとに、宗佐は太く又愕きたり、「これは御手前様……何の、御出仕？　「何のといふか？　汝、あれ程、御前の模様をと頼み置きつるに……」「其義にござります。昨夜は丑の刻過ぐる迄の御評定。」「其の御評定、何故知らせぬ？　儀程の大事を。」「はッ。」「御合戦か？」「いや、只、御馬揃。」「御馬揃を其方に聞かうか？　御馬揃は勢揃、其の勢揃なされてから殿は何日、何處へ御取懸なさるゝ？　と其方に問ふぢやは！」「然様の御義、毛頭以て……」「祕隠すか？　えい！」「滅層の事。それは御手前様御邪推。豫ての御觸みはござりましたも此は和歌山でも折々見まする御馬揃、何も別段の

不思議の義とも存じませいで、それで御不沙汰。況て御合戦の御評議など……」

御前の評議は實に斯くありし。兵庫より豫て頼まれたる宗佐は只其見し儘を語ふなれども、奈何、彼は只顧隠匿すと惟へり、我が御咎の身を疎外すとも偏に想ひぬ、昨日より、昨夜より、今朝より、胸に餘んの悶々、腸へ切ざる憤怒、痛憾、憎悪、嫉妬！　這奴らにさへ侮蔑らるゝか？　と念ひ傷めたる無念の業火は一時に堪忍の嚢の緒を燒斷りて、爆發せる鬱勃の氣は右手の拳に洪濤の如くに漲り來れり、「汝ッ！」と叫びさま、閃めかす腕を彼は敏くも推知りたるが、身を跳らし、踵を繞して御廊を彼方へと遁れ去る。「逝さうものか！」と齒を咬切りて、此方は追ふ。

鬱躁の聲は、耳近く聞えぬ。耳聾ひたる如き兵庫は猶ほ狂奔ぬ。狂奔て進むこと二三間。「金彌、其狀は？！」突如として、長廊に響く、凛たる聲は、氣逆せたる彼が腦にも金針を刺たるゝ如く激と感えて、兵庫、瞳子を決めて前面を視れば、個は什麼、其人は、大納言頼宣卿！

（三十四）

兵庫は殿と見奉りて、平伏もやすると思ひの外、つか〳〵と御側に寄りぬ。「殿様！　御恨めしう存じまする。」殿も日常に、彼が一徹の氣象をば知り玉へり、昨夜陳したる此の御狩を中止との義、其後御前の評議によりて更に決行し玉はむとの御沙汰の趣に歸したれば、其事をや聞て恨むなるらむ、恨めしと言ふは慮外なれども此も亦た自己が主なる仁の爲をおもふ、臣たるの至誠、憎きも可愛きぞや、と故らに御面色を和らげさせて、「然様申すな。此狩の廢止がたい義、大學との意地、又た江戸表手前の事等は昨夜も那れ程に申しつる。其方が忠義の心底は好う斟み得つるも、これは是非ない。卿言を申すな。」「其れ程に心底御斟酌なりや、何故に御明下されませぬ？　先以て今日の御馬揃……」

「ハ、馬揃、それを沙汰せぬを左右申すか。是れは其方も其身でなくば今日の第一にも注すべきもの。なれど其の現下の身分ぢや、御咎の最中ぢや。遺恨であろが列に漏るゝを餘義ないと諦念めい。」殿との腹は合ひ難ねたり。兵庫、益外様待遇にせらるゝ事の口惜くて、遺恨の涙堰き敢ず。「も、も、何も申ませぬ。其れ程に御祕匿あらば……。も、何も申上げませぬ！」御前に俛仆して、號聲を放てり。玆に至りて殿も初めて驚怪かせぬ。「兵庫、甚麼と言ふ？　予が祕匿むと？　全般の事の體、——汝、狂氣ばし爲つる歟？！」彼は突然身を起して、其の御答は口を衝て發でぬ。「兵庫狂氣も爲て候ふ。如是體狂氣せぬ家來といふものござあるべいか！　三世と頼む——抜日來は死出三途も御一所と盟ひし殿に——筒様に見棄てられ——御疎外の御沙汰蒙むりては……」彼は復び、潸然たり。殿は、實に、其の意外の爲體に、幾ど御當惑の態見えたり。「汝は、實に不思議の奴！　目下の宗佐への擧動といひ——其の潸然たる體。やア兵庫、汝屹度承はれ！　其の淺はかなる心底で、汝、紀伊國の重職が勤まるか！　不處存の奴！！」「如何にも重職は勤まりませぬ。殿様御心底を存ぜぬ者が一日とも家老の職に在られませうかや。但し此の兵庫めを、筒様の不處存の——言甲斐なき狂氣者に爲せられた——誰が御所爲？！」彼は磯乎と、殿を睨めたり殿の御手は、此時御胸に直と當りぬ、彼が眼光、彼が動靜、其の言句、其の語調を熟々と注視り玉へるが、やがて何をか領かせて、從前の稍暴やかなりし御辭色を和らげさせつゝ、「兵庫、其方は、何事か予に隔意のある喃？　或は他に——何者にか遇ひつる喃？　其者が言ふところを眞實と信けて、予を疑ふ喃？　其方は祕匿む、つゝむと言へど、予は祕匿ぬ。予

も祕匿ねば其方も祕匿むな。言ふことあらば言へ。聽くべき事あらば聽う。今は巳の刻、予が出座には尚ほ間もある。寛々と氣の沈着て、徐々地に申せ。」打て變へたる莞爾との御笑顏に、此の所由有りげなる狂客を慰諭し玉へり。緩和の劑は、這の病者に適當の方なりき。彼は此の鎭降の一飮に亢進りたる心氣も頓に下りつ、遺恨の涙は感謝の滴露といつか變りて、御前に平伏したりき。

彼が乞ひ申すによりて、殿は傍邊なる御書院に入らせぬ。もとよりの御人拂、御背後には神文の御小姓一人のほか、近習の士は皆遠く斥けられたり。殿は上段の御牀近う御褥に御座なされて、「兵庫、何事ぢや？」「はッ。」とは言ひしが、御威光の凄じきに今更ら臆して自然口籠るを、彼の負じ魂なる唯一東西に策勵られて、正雪に昨夜說かれたる覺悟の臍を纔に決着ぬ。「別義でもござりませぬ、今日の御馬揃。其の御催しの御心底——奥の奥なる御趣意と申すを、祕匿まず御明されの程願はしう存じ上げまする。」「ふう？」「右は昨夜も心底殘さず、私料見のほど申上げましてござりまする。大學領分へ只の一步御踏入にござりますれば、直さま其れが合戰の端緒——其端緒開けますれば有無もない殿樣は御謀叛に陷ちまする。其義千百御承知とござりまするに、今日の期う急遽なる御馬揃。概略の御心底恐れながら兵庫愚察はいたしまするも、猶ほ殿樣御口づからの御一言、期うぞとあるを承はりて、到底世に存立れぬ身の、死後を心易う致したう——此のみ私今生の願望にござりまする。」言ひ畢りて、彼は唾を嚥みつ、殿の御口吻瞳も放たず凝視へり。

（三十五）

世に存在れぬ身、死後を易う、今生の願望、といふ抑も何事ぞ、と殿は怪訝に堪へ玉はず、御膝も覺えず進みぬ。「合點の行かぬ事。仔細と申すは？」「言上も恐悚。すなはち私が此の剃髮の原因。駿府にて强訴の張本、安居村の三四郎と申すに連繫の義よりいたして大公儀御疑惑を受け、此の兵庫唯今は御搜索の者同樣の狀、現下にも公儀御手入ともござりませうなりや。私は拷訊の責材に斃れまするか、然なくば自殺！　到底が久しく殿樣御奉公もなり難ねまする。折柄に儕倖なるは此の御猪狩、別しては今日の御馬揃。殿樣の其の御一言にて、右の犬死せで叶りませぬ兵庫も天晴れ本意の忠死といふが遂られまする。」「何が忠死ぢや？　予に解せぬが？」御眉を皺め玉ふを、「いや、其の御心底の御一言！」「一言とは？」兵庫は又もや急ッたる、眼中は看る看る血奔れり。「えゝッ御祕匿しある。御一言とは其の——御旗上！　御出馬！　との御一言にござりまする。」「な、何ぢや、予が謀叛となな?!」狂人とて容赦まじとの御面色、御小姓に執らさせたる二尺三寸、分部志津の御佩刀に手を懸け玉ふを、彼は見るも聽せざりき。「御謀叛！　御謀叛！　箇樣なりますれば——此程までに申ましても御祕匿とござりますれば兵庫遮つて申上げます。如何にも殿樣御謀叛と見上げまする。御恨しう存じまする殿樣！　此の御心知の兵庫に何故の御隱し立て、御心底今更御恨に存じまするぞ。安濃津領へ御馬が入りますれば直ぐ御合戰、其の御合戰は卽ち殿樣御謀叛とは現の今方言上しまいた。其れは言上までも無く殿樣にも疾う御承知の筈。其の御承知ありながらの御馬揃は誰が御謀叛！　御族上で無いとは申さう？　これは私一人の推量とは御聽せあるな。現に御城下の庶民、今朝より資財を負ひ、妻孥を扶け、多氣度會へと逃遁まする。上下一般、皆斯くの體。大略は昨夜の御評議、其れも其の御義とは存じまするに牧野兵庫只一人のみ何故に御疎

外？　其れ程に言甲斐なき者と御覽じてか？　但しは變心、裏切もすべき者と御懸念か？　御情無うござりまする殿！　私は其れとは存ぜず、只今言上の三四郎めも固より緣も由緒もなき者、其れですら殿樣御恩を存ずる者、御慈悲を慕ふ者、三十四ケ村の男女、紀州の庇陰に立ち、過米の雜義を遁れたい、賴む！　と申せば、身を棄てゝ、城代の士供とも楯合ひまするを。……其程の兵庫、御國の汚辱を存ずる兵庫、何とて穢ない——殿樣に御貳心など持ませうかや。箇程申して猶御意に濟ませずば、御手討！　忝けなき仕合に存じまする。なれど猶ほ冀くは、其の御手討延べられて、汝兵庫、予は思ひ立つ事あるぞ、汝にあの安濃津攻の先陣の申付くる、敵に遇うて潔よく死ね！　屍を曝らせ！　箇樣にも仰せられなば、兵庫それこそ御目に餘る合戰して御覽に入れまする。華々しき討死して御心を安うして差上げまする。是れが兵庫一代の御願望！　殿樣！　何卒、其の御一言、兵庫今生の御芳恩に下されたう願ひ上げまする。」殿は、彼が長々しき訴訟、其れが臉に溢るゝ熱涙を、甚麼とか御覽じ、甚麼とか聽かせ玉ひにけむ、御佩刀に懸させたる手を其儘に、突と起上らせ、「唯今の聽聞中より予は氣分の惡しうなつた。今日の馬揃延引と、然樣に申せ。」御小姓に仰せ遣て、兵庫への御回答は何とも無くて、其まゝ奥へ入らせらる。兵庫は猶ほ、只一個、口惜し涙に暮れゐたり。

（三十六）

空には星光の爛たるあるも、心は黑白なき如法の闇なり、目に面白き行水、耳になつかしき蟲の聲、肌膚に涼しき濱風も、其れが胸中萬斛の懊惱を解くに由なきか、龍泉寺の客殿。一間なる緣端に蒲團座して、孤座冗然、枯禪の態を見せたる兵庫は折節に天に睨みつ、繞くが如き洪歎を漏らせり。嗟、可憐、彼が前途は今漠々たる哉、雲霧は眼前に横はりて、岐路は脚下に派れたる哉、彼の意馬は西すべきか、心猿は東すべきか、蓋ふに彼は前後に彷徨し、左右に踟躕して、其の立脚地の究竟皆非なるを看出だしたるらむ。爰に到りて彼の撰ぶべき路は、只夫れ一の死歟。

彼は獰て、自ら起て、料紙硯を持ち來りぬ。絹燈の火影をやゝ明くして、紙を展べ、筆を染めぬ。眼には暗涙あり、手は震戰へたり、輒もすれば墨の薄うにじみがてなるを兎角して書き納めて、表封を緊かとし、更にこれを懷中に入れむとする時。「ハヽ、死にやるか喃。」思ひも懸けぬ頭上に微笑を泄らす聲あるに、兵庫、阿呀と瞻上ぐれば、欄間の上にいつか人あり。「死神に魅れられたお侍、自滅も可からうず！」空嘯く聲は確に記憶あり、「由井殿か？」彼は飜然と下り立ちぬ。「如是畜生發菩提心！　逆緣ながら引導申さう。さ、御褄ひなく御腹を屠され。」兵庫は赤面の聲を顫はして、只一語、「さ、察してお呉りやれ！」「ふゝ、察せいと？　何を察する？　我等は未だ死神といふものを朋友に持たぬ。近附のない死神の意衷を察する——由來申さぬな。」飜弄られて兵庫は急きぬ、「我等とて猶樣の犬死甚麼爲たからう？　犬死と知る〳〵死なでならぬ心中を察してお呉りやれと斯う言ふぢやは。貴老とも無い！」「腹立か？　ハヽ氣毒な。然りながら何故に又た其の無理な犬死、爲らるゝのやら？」「爲でなるまいがな！　主には棄てられ、身の恥辱は逼る。其内一つでも死ぬべい生命……」正雪は半分を聽かず、庭の面に一つ唾して、其愚を嘲笑へり。「到底もが緣無き衆生か？　其程に好かるゝ自滅は御身の隨意に爲らるゝが可い。但し御身は肝ふ見ゆるが、其實は老人な？　然なくば健忘といふ病でも病まれたか？」彼に眉根を顰せられて、兵庫は驚きて眼を瞬れり。正雪は其面を後眄

に視て、「其の業病にも罹られずば斯う言甲斐の無い筈はない。お主、大死爲な〳〵と我們が言うたは什麼一廉か、再廉か？　駿府の初對面、前夜の再度の會、遇ふ毎に云々とお主に告ふを、空耳に聞き奔らすか、然らずば忘失るゝか、世諺にいふ豆腐に鍼、いかう結束の無い始末ぢや。御身は嘗て我們に言はれた、紀州士は意地が楯ぢや、紀伊國の水飲んだ程のもの、一旦思ひ立た事は必らず貫徹すと、其の意地も楯も同是右の健忘で忘失られたかや？」冷評熱罵、愈出でゝ愈奇なるに、此方は回廬を發だし難れたり、徒其の圓滑なる口吻にのみ瞳子を注ぎて、更に其の意義の蘊奥を打聽せむとする如きを、彼は見ぬ、見ざるの間に視て、愈其の舌鋒を研ぎぬ。「到底が其の意地忘られた？　と我們は見るぢや。が、其楯といふもの片端でも倘だ胸裏に御持ちやらば、——こりや熟う聽かれい。先刻の、御謀叛！　御謀叛！　兵庫、御謀叛と見上げまする！　と斯う言れた口狀、何故に眞正の御謀叛として進ぜ申さぬ？　やさ、一旦男兒が斯うと斷見て口外した言語、何故に其の貫正として御目に懸けられぬ？　意地といひ楯といふ、主親の前にも其の意地、其の楯ぢや。況て殿が、御身の言ふこと御聽納ともあらばこそ、あの通りの無情い御仕向、御佩刀にまで御手を懸られたあの御心、言はゞ主從の緣彼時に斷れたといふものぢや。內心に滿々たる謀叛を御持ちやれて、他人が言へば、何ぢや？　予を謀叛とか？　なんどゝ被仰る、其れが抑も水魚といふ君臣の交情か。や、兵庫、氣の確にせい。惡くもあらばお主は其の、血祭にも拘れうぞや！」兵庫は、其說の不可思議なるに驚くよりも、御人拂といふ殿中の問答を、一も遺さず二も餘さぬ手際の鋭さに呆れ果てたり。

（三十七）

良有りて兵庫、「始終を御聞きやらば我等更めて言ふまでも無い。あの仕義ぢや。大事の殿を謀叛と申て御佩刀には御手が懸る。此上公儀より御使者もあらば、牧野兵庫、繩附にもならう。無益の死とお言やれど、存在て縛首打たれうよりは責てもでは有まいか。——但し其の……」彼は言ひ難ねて聲を呑みたり。正雪は屹と顧向て、「但し其の……其の後向は？」「貴老なりや、甚麼と爲らるゝ？」「ハ、分別か？　御身には分解ぬ。健忘の耳には到底理解ぬ。」「理解ぬものに、何故左は言はれた？」「老耄の性根も些と發揮うかと思うて見たも、やはり無益ぢや。猫に小判ぢや。」兵庫は其の蒼白たる面色を屢の色まで變らせて、震怒れり。と見たる正雪は哈々と微笑ひぬ。「其れでも御身、猫と嘲はれて無念な程の氣力は有つか、其の意地あらば些とは話せる。いや今言うたる意地の講釋、分曉うもの。」彼は答へず、其鼻息のみ暴かりき。「分曉た筈ぢや。理解ねば叶らぬ道理ぢや。君臣の情誼を棄てゝ御身を謀叛の血祭までにせうとする人、……第一が現下立つ腹を、何故に其人に向うて御立ちやらぬ？　抑も御身に、此の大死の覺悟せさせた、こりや誰が所業ぢや？　其の大死せで協はぬやうの羽目に陷した、其りや誰が所爲ぢや？」彼は、甚麼とか感じけむ、身を戰慄かせり。「ソレ、其れが其の意地の覺悟の臍、楯の意趣ぢやぞ。鐘も撞木の當り柄、他吾に艱ければ吾亦他に辛らしとは此邊を言ふぞ。有り樣斯うぢや。今は我們も根こそぎ語うて得心させう。御身未だ知りやるまい。昨夜、御身に別れてから我們は復び穴に忍んで、今朝までも殿中に居申した。其の昨夜の評議といふは弁づ御樣ぢや。御前に出でたは、水野太郎作、村上彥右衞門、渡邊大學、久野三郎左衞門以下七八人。殿はまづ其の御意出されて、江戸表でも大義の計略ついて、兎角を申すぢや、這甲にても云々と罵ひ嗤ぐと兵庫

めが來て言ひをるは、只今の機會は何とであらう？　銘々が意見は、と斯う仰しやれた。首座にをる水野太郎作、到底もが御合戰は遁れぬ羽目、一日後るれば一日だけ敵に用意が成る、やはり此の機會を外されず……と言うた時、彦右衞門、例の鬚を撫廻いで、言ふ迄もおりやらぬ、此程の人數を集めて獲物なしに御歸城といふことと有るべいか、殊に今の御話では、尾張殿、越前殿、討手の大將、江戸で仰せ蒙られたげな、されど江戸から尾張までは六十里、福井までは百三十里、五日十日では大將御國へ着れまい、此方は其れが、と指を繰て、明日中に安濃津、久居を攻落せば、蒲野龜山も其日の中に埒が明く、桑名は白子の御先鋒御人數に攻させて、殿樣は當處より直に海路を、熱田蟹江にも御座なされい、すれば名古屋へ御討入、これも三日が問。其うち熊野の鯨舩も吉田へは着き申さう。さらば東海道はまづ御手裏の物。京都にては例の衆徒、大阪も御存知の衆、尼が崎まで御手に入るは十日前後。はゝ何の御躊躇。とあの大口叩つるはよ！　殿も其時御心地好げに兩人の申し條道理ぢや、大納言（尾州）幸相（越前）たとひ在國でからが其の手竝は知れたるもの、彼等が采配何が有らう、況て留守中の防矢、予が家中の鎧に立つか、然らば明日先づ馬揃して津の奴輩に目を見せう、大概は其の擬勢で一攻にも及ぶまじいを、との御詭と聞えたぞ。何と兵庫、其の御詭と、あの先刻の白々しい御顏、熟う心の眼で看較べて見い！　其れでも其の大事の殿か？　お主、忠義が……」「立つる立てぬは此方の事。其程の思し召立あるとなりや御人數も要る。兵庫、祿は六千石、國元にも飼立てた奴二三百人、現下供に連れたる奴も雜人を加ふれば三十餘人、これらは皆一廉の者、殿樣にも御存知。何故其れを御袖になされたか？　あれ程御先手と願うたものを？」正雪は、こゝに初て數息して、兵庫が面を正眼に視ぬ。「それぢやよ。先刻から言ふ血祭ぢや。御見は謀叛人の謀叛人！　殿は間者と御覽なさるは！」

（三十八）

間者とは！　間者とは!!　思ひも懸けぬ我を間者と御覽ずるとは!!!　兵庫は實に目も眩めくばかりに愕きたりき。「而て、誰が然樣に申し做したか？」「大學ぢや。」「渡邊か？」「應よ、其の渡邊よ！」渡邊大學は、我と同じき小姓立にて、當時は殿が御側の御用何くれと取賄ふ權家たり、往昔我は金彌、彼は長三郎と呼ばれし頃より、殿は兩人を梅櫻とも、花紅葉とも御覽ぜられて、御寵愛の二人若衆とも言はれしもの、其後に我は宿世の幸優りてか、番頭より家老の重職に任ぜられ、祿高も六千石、彼はなほ千五百石の中士に置かる、なれど交誼は以前のまゝ、共に御衾の揚げ卸し申せし頃に變らずして、氏は異なれ、父母は別なれ、事へまゐらする主君は一個なり、兄弟とも思へ、思はむ、事有らば一所に死なむ、事無くば生涯を契らむと言ひつることは、此程の駿府への發途の夜さりにも反復せしに、扨は其の腹と口とは別なりしかや、嫉妬か？　偏執か？　然りとては彼が日常の氣質、さる表裏ありとも見えざるに、と彼は疑惑の胸を前めぬ。「大學が何と讒うたか？」正雪は、一層の打沈めたる聲を、其の擡てる胸より發だして、低く咳嗽つ、「斯くて評議も御馬揃に事の決して、人の口も途切れたころ、前刻より其吻をむぐ〳〵とした大學、御身が上を言ひ出いた。兵庫が心中、御沙汰の趣では何とも濟ぬこと、と斯う發言した。彦右は聞き兼めて、屹と視たれば。彼は駿府にて桑名賴母と江戸飛脚との密議を聞いたと斯う申す、什麼その密議は如何樣にして、如何なる方便で聽いつるやらむ、凡そ我々としたるでからが然樣の大事、迂可と他人の傍聽べき場所でむざと

口外するやうもおざらぬ、其れを然様仔細にと申すこと、不審の一つ、又た第二には、これ程の思召立ち彼として存ぜぬ事あるまじきに、切りに道中宿驛の雜説といふを口實として、御出馬御無用と異存を申す、意趣敵も不審と存ずるに、又た彼が駿府の土地立退のこと、其の頼母が密話竊聞たる夜さりにて、いと遽たゞしう狼狽たる態、何とやらむ意味あり氣なる……察するに彼は安濃津の囑略をうけて、殿様を威嚇し申し、彼城の一時の難義を免べむ爲に無い事を有る様に、味方の銳氣を殺ぐ様に、只管御狩御無用と申すでは候はぬか、然あらば忠義顔する大悪人、獅子心中の蟲、飼ふ主の手を咬まむとする畜生、想へば彼が素性、當人さへさま〴〵に申すにて得知れぬが、或は最初より、間者、細作の役を持ちて安濃津邊より囘し越したるでは候はぬ歟、我們豫て其意を以て親しく交通ひ、折々誘導いては見候ふも、兎角は油斷のならぬ曲者……と斯う述べ立てたはよ。實にも善う喃！　巧んだもの！」此方は、あはれ血眼なり。「而、而て、殿は？」「熟く〳〵と聽かせられたが、然ればよ、との御意ばかり。良少時して、彼めを近附けたは頼宣一生の失措か、大阪の石田、御家にての大賀彌四郎、其の比儔か、今にして想へば、彼に眞實を明さんぢやッたは物怪であッた、但し先づは其儘に爲い、毒を以て毒を制する、良醫の手段ぢや、たゞ追附け見知らせて……と御評議は其れで訖ッて、扨て今朝ぢや。我們、得も御身が登城！　とは心附いで油斷をしたに、出仕と聞いて實驚ろいた。扨は繩目か、討手かと手藥煙引いたに、曩まで御身を侮視られた殿は通常の御逢ぢや。これは然も有るべいこと、殿は名立たる居物切の御名人、放し討も手に入られたもの、兵庫、御身が二人三人御手元に廻ッたとて這ふ蟲とも思はれぬ、處で御身があの口狀、善う演られた。先づ御急所の近うを衝かれた、で、殿も御急きやッた。御手討との色見えた。が、さすがにも其の以前の御情誼を思し出されてか、半途に御色も和らいだ、我們御障子の隙から窺て吻といふ大息、吐き申たよ。が、御心は到底が解ぬ。明日か明後日に血祭ぢや。血祭と事が決まらば——其前に自滅も可からうかや！」

（三十九）

心緒を討ねて仔細に想見れば、着々として我が胸裏に思ひ當る事のみなりけり。我が此の御狩を抑止め申して云々と言ひつる時は、安濃津への意地に託へて事の中慶べからざる理由を仰せ玉へり、又た道中の雜説とも申せし折には、日常にも似ず我口を信け玉はざるやう見まゐらせき。駿府にての頼母を代の者が術なるべしと疑ひ玉へる、獲物の鹿か猪かを熟う意して言へと苦々しうも仰せられつる、思へば那時よりはや既に我を誘導かむ、窘苦めむとの御心にや？否此の御謀叛といふ大事の御狩を思し召立ちながらに、我には知らせず、遠く久能の御修覆御用にと遣はされたる、御心の薄愛きさまは此男が言ふなるところと恰も其符を合すが如し、念無や、扨も今までは、此君の御爲ならば火にも水にもと思ひ執りて、一昨年の御病惱にもあの四十餘日間、物の半刻と目睡みもせず、飯の一椀とも快喫うせず、寢殿の御病牀を戰場の御馬前と心得て御看護申上げたる、什麼それが間者の、細作の、御仇ともあり御敵ともある者の能るべき事か、御爲を存ぜぬものならば其折に兎も角も爲奉つるは枯たるを挫き、朽たるを倒さむより易からむを、其の精神をも事實をも思し召辨へずして大學輩が中傷の言に！　無念なり、思し迷はさせ玉ひつること。抑もこれらをや言ふ？　終天の怨恨！　畢生の仇寃！

想へば愚なり、かゝる主に忠義立する！　御手討とまでも覺悟せる、咄！　甚麼たる意志な

りしぞ。今はは や此殿の爲に一寸の毛髪だも惜し。世をや遁れむ？　雲水にや出でむ？　左右に紀州の飯喫ふのは否なり。ふつ〳〵否なり。「貴老、厚意は忝けない。然りながら芳志もこれまでぢや。牧野兵庫、武士を廢めう。」「ほゝう。而て何者になる？」彼は憤涙の瞼に溢るゝを瞬きつゝ「坊主になる！」「なると言いでも最う變容てをる。ハヽ早手廻しな。」

彼は、此の形容を變へたる事も、今の恨めしき主の爲なりしを想起てか、抓髻るばかりに手を頂上に擧ぬ。「ハヽ彌以て如是畜生ぢやな。雖然菩提心は覺束ない。菩提の爲にもあらぬ出家、——それで安心の往生なるか？　未來は其の畜生道ぢや。」兵庫は既に、問答にも堪へざる如し。「畜生も可矣！　犬と罵はれた身の果ぢや！」「ふむ。可かは知らぬ。なれど武士は、來世を修羅道と願うてこそぢや。畜生とは無情い。」「其の修羅道の緣も斷えたよ！」「え！　斷緣ぢや！　えツ言甲斐ない。よツ弱蟲！　武士の風上にも置けぬ奴！　お主、其の這頭撲曲られても默ツて通すか？　其の這面、唾を吐きかけられても諦念てすツ込むか？　こりや右にいうた意地と術、又其の健忘で失くしたか？　え、こりや！　其の發心、何故修羅道へと飜念さぬ？」「……」「えい、兵庫！　蝮蛇に咬まるれば壯士自ら其腕を斫く。物の決心一つぢやぞ。一念歸着の嚮ふ所は鬼神とて其鋭を遮くるぞ。何故決定せぬ？　あ復仇と、——何故決定せぬ？」一決定は爲たい。なれど蟷螂が斧……」「え？　蟷螂が斧？　其の譬喩をお主も知るか？！　知て決心の踏切れぬは、其の小蟲の蟷螂——いや蟲にも劣ツたる魂ぢやぞ。彼蟲が其斧を揚げて隆車に對抗ふ、縱し攀き殺されて死でからが勇者たるの本意に慚ぢぬ。況て萬物の靈たる人間、其の人間の長たる武士、其の武士の手本たるべき紀伊國の家老として！　やア兵庫、御身、駿府で三四郎に一言を賴まれて城代の奴原が銃口に敵うた時、其根性は甚麼とであツた？　安倍川原で彼が磔刑に梟ツたを助けうとした魂は如何お爲やれた？　其の蟷螂が斧を承知で、勇義の爲に身を棄られたでは無ツたが？！　さ、其時の料見聞かう！」

風雨殺到、雷電霹擊、腦を劈き、膽を碎くが如き舌椎に揉ぎ附られて、兵庫は其度を失へる口裏より、才に一句を呻き出だせり。「謀……叛……か……よ！」石火の如くに彼は應ぜり。「謀叛其の！　謀叛！　天晴言うた。只そのお主も男兒、憎い仇、恨めしい敵の首を見る——此程の心地好いこと他有ると思ふか？！」「思ひはせうも……御身に其の手段？」正雪は、其間には應へず、指頭もて我が面上を指せり。「御分。此の正雪を何者とか覽る？」

（四十）

「むゝ、貴老。賴まれうとか？」兵庫が聲音の稍緊確となれるを見て、正雪は其の論鋒を弛べつゝ、只願彼が其臍を固むるに勗めぬ。「勿論ぢや。賴まれうとてこそ斯うは言へ。然も無うて甚麼のあの無禮の言が……全體は御免あれ、これも一旦の友垣を棄てぬ愚老が生得の信實ぢや。とばかりでは安心もなるまい。いでや我們が素性から意衷、分限の程をも申す。熟う聽いて此の正雪を、天にも地にもの賴もしい者に思さる。原來が愚老、民間に人となりて、民素性もない土民の群とも思さうが、眞實は、申すも言語に餘る、南朝の忠臣、攝河泉三州の太守、廷尉橘正成朝臣が嫡流ぢや、廷尉の孫某、足利に世を狹められて駿河の國に落ち下り、庵原郡由井の村に居所を構へて、今川に屬し、氏親の代に美作守に任官して老職の一個となりたる由井正信はかく申す正雪が七代の祖ぢや。其頃より家に傳はる祕鑑がある。これは世に有觸たる先祖の廷尉が兵庫之卷なんどいふ書

とは異りて、太公が三略にも倍したる祕本、其を讀み明らむれば實に廷尉の指導を親からせらるゝと同一いで、百王の理亂、萬民の休戚、戰陣の進退、兵法の極意、宛然中天の月を盆にうつして手下に觀る心地のする。不肖ぢやが我們、家門の榮として其書を讀誦すること二十年、今はなか〳〵諳記じて其奥の奥までを得た。扨て、其の奥意の得て、倩思へば無念なは世態ぢや。後醍醐院、武家の專横を震怒玉ひて元弘の御事ありしも建武に破れて其れより後は復た武士の世の中！　織田氏は其を反してやゝ王室を尊崇せられたも中途にして斃れ、豐臣氏これに續いだも自個が功名と驕奢とに一代を費して、扨て當代の御世とはなつた。なれど公家の御有樣は、建武正平の往日に異らぬ。普天率土の主たるべき禁裏御領は僅に十萬石、所司代は公卿諸司の横目として只管武權を逞しうする、其の傍若無人の體。我們、廷尉の遠孫としてゝ——南朝忠死の靈に對して、徒爾には觀て在られぬ。哀れ今一度、王代の古に復してと、思ひ立ち申たは去る年の事！」爰に到りて、彼れは感奮の情に堪へざるか、堰り來る涙を袖にうけて、其聲を戰かしたり。斯て戰ける其聲を更に沈めつ、「されど、所領の一所も有たぬ浪人の墓なさは、思ふのみにて其事も捗ゆき申さぬ。さらば同志をと看亙いたが、幕府の天下も今が三代、基礎は磐石とゆり居ゑて、法令は天飛ぶ鳧、地を潛る蟲すらも其目に遁れぬ。なまじひの事しては……と幾回か纔念さうとしても纔念させぬは、生憎の此日の憤涙ぢや。其の憤涙の間、不圖心に憶ひ得たは、御身が事！　こりや、御身は隱されな、御分が母は越前の一向寺の女、所緣によりて京都へ上りてなにがしの公卿御家に官仕し、其折に妊りして歸國して、間もなく產聲あげられたが、御身ぢやろが？……や、驚くな、正雪、日指した人の身上、それ程の事は知る。其の公卿のお種の御身が、御三家の隨一、加之内々の思し召立ある紀伊殿が出頭の御家老！　津頭に渡舟ぢや！　海路に日和ぢや！　腹心の弟子をつけて御身が振舞に目の狙けさせたが、扨て此年にお似やらぬ天晴れの人體！　正雪が欣喜は恰も旱天の豪雨を獲たぢや。然らば猶自身親近て懇親の結ばう、御身を紹介に殿の見參にも入り申さうと、陰に日向に狙け廻した其結果が、あの安倍川原の面會ぢや。打つけに餘りの親しさ、御身は異樣にも思はれつらうが此方には豫て覺悟のある事ぢや。扨て其後の萬々は要らぬ。とあつての其の進行が今日ぢや。が、全體を頼もしう思はれい。殿の御勘氣、甚麼が有べい！　見られい殿も幕府の御一門、我們目から見れば同一い敵ぢや。殿に便らうと思うたも一時の方便。其の方便が外れたりや只一括めて江戸も紀州も討取るぢやまで。而て御身は藤氏の流裔、天晴れ官軍の總大將に相應しい。我們は楠氏の末、朝家御守護の武臣とならう。兩人心を合せなば大事は成就る。其の準備は、少分ともいへ、我們有金五萬兩、現米が八萬石、いづれも要所に貯蓄へてある。人數の高は今言ふまいも、大約の見積は——十三萬か晴？」十三萬！　といふ聲の巨大なるに兵庫は呆れたり。「而て、其の人數は、御身が手下にか？」「ハ、其精算は重ねて言はう。たゞ目下は、御身は其臍堅固にして、愚老が申す旨に就かれい。紀伊殿とて今こそ然樣なれ、又我們が掌裏に圓むる手段はある。たゞ狼狽るな。官軍の總大將たる牧野殿。重々としてござなされい。」

（四十一）

追手の御櫓に御旗御馬印までも立ちたる馬揃の、斯うにはかに御延引と仰せ出されつる、果然殿樣御不例か、何ぞかの御手段か、と城中城外騷りて不安の眉を攢めて足を空に奔り歩

く、雲の如き風説は種様なりしも此日の晩には漸く消えて、伊勢の夕風やゝ靜穩なる狀態とはなりぬ。其の翌日も取り留めざる沙汰の中に暮れて、第三日の午時といふ、燠くが如き炎天を汗馬に鞭を擧げたる一騎、松坂の城の追手に乘り附けたり。何事ぞ、あの早打、江戸よりか、道中よりか、いかにと見れば、是れぞ安濃津との領境なる雲出の川端に出されたる物見の士なり。彼は堀際に馬を乘り棄てゝ、事有り〳〵と叫びつゝ御玄關に奔り入る。扨こそ大事！蘇堂の逆寄か？　公儀の討手か？

村上彦右衞門逸早く出で迎へて仔細を問ふ、斥候は息續の冷水一口喫みて、「大事でおざる。何とも得知れぬ紀伊國衆と名のりたる騎馬一騎、徒歩の兵三十餘人、久居の陣屋に押寄せて今が合戰の最中おざる。」紀伊國衆と聞て村上も、魂消るまでに愕きたりき。「而て御内には誰と見たるぞ？」「いや其れが誰とも知れませぬ。大將は法師武者、手の兵は究強の奴。」「えい法師武者ぢ！」彦右衞門は二言と問はず御奥を指して走り參れるが、倏忽にして、牧野兵庫、久居攻！　との沙汰、殿中をゆすりて響き亙れり。

其の響き亙ると同時に、又た不思議の風評は城下に起りぬ。兵庫どのが合戰は私の宿意でなし、內々は殿樣御密意よ、されば此軍に出合ひたりとも後日の御咎なきのみか功あらば御恩賞もあるべきぞ。然なきも紀州衆といふ彼人が不覺もせば彼人のみの汚辱ならず、出合へ、見繼げ、といふ聲は誰言ふとなく人々の口に出で、耳に入りて、扨は然樣か、然も有るべき事、兎角は出頭の兵庫どのが手に附ての合戰、働きの程御目に懸けなば後日の批判惡しうもあらじ、さらぬも憎い安濃津の士共、此折に一鹽點けては、と勇みつ繼きつ思ひ〳〵に後れじと馳せ出づる。城下の街衢は人馬の烟渦巻き騰りて、混亂鼎の沸くが如し。

來て見れば、既や合戰や終りたる？　雲出の川岸四五町が間は、青田の稻葉泥に塗れて、安濃津領なる農民の家七八軒は兵燹の爲にやあらむ甍なく燒ぬ。なれど手負の武者もなく、死人といふものも四邊には見えず、牧野どの本意やせられつる、北るを逐うて安濃津へも參られしか、然らば疾く御後を詰めよといふもあり。老功なるは此體に不審をなして、泥田こそ揑ねたれ、民家こそ燒けたれ、見たる處合戰ありしといふ體も見えず、方々も御存知の、此の陣屋には桑名賴母といふ分別者の纏りたり、兵庫どのの如何に擬勢を見めさるゝとも、人一人も討せず殺さずして陣屋を奪ることも奪らるゝこともえ得う爲まじきぞや。察するに敵や素引ける？　全體は不審なり、先づ斥候を敵地に遣はして熟く其樣を見てこそ、といふに同意して、此所に馳せ集へる百餘人は其中より物見三人を撰り出だす。撰られたる三人、騎りたる馬に轡をかけて川中の淺瀨を見すまし、水烟さツと押渡さむと乘り入るゝ——其時遲！　對岸の葦の叢中より擊ち出だす鐵砲に馬の太腹射貫かせて、主は堪らず摏と落つ。「や、扨は敵ぢやは！」

（四十二）

敵は此處よと叫ぶ間もなく、對岸なる蘆葦の叢茂より四五梃の小銃の響、再び摏々と轟き出でたり。されど此所は川幅濶くして七十間にも餘りたるに、此方には遮水堤高くして、加之堤の外方、河原の表面には杞柳の太きに交れる漢竹の叢生すき間もなし。人は皆ひた〳〵と馬より下りて此堤を楯にしぬ。擊ち出せる鐵砲の彈はこれに障へられて空とはなれり。「えい、これ程の足輕鐵砲何程の事！　たゞ驅けう。」「道理！」と若き人々は再び馬の鞍に手を懸けぬ。「いや、待て。」と老功の四五人は伸上りて、一右に言ふ此の合戰は不審が多い。牧野どの手といふもの看亙すところ一人も見えぬに、敵は却り

て此處に出向ふ。察する處、此方御馬揃の延引といふを懸念して頼母めが一手段したでは無き歟。さらば蒐るな。今見い、此方に人數が嵩まば敵は見怯れて引退くべいぞ。討たば其處を討て。機會が早い。」計らふ語も道理あり、兎やせむ、斯くや、と紀伊國方は槍を引つけ、陣笠の緒を固め、敵を睨みて其の機會、其の機會をと待つほどに果して十人、二十人と逐かけ引かけ走せ集まる勢は既にして三百餘騎なり、此勢にては不足なし、あれ程の奴原を何時迄か瞻上げてあるべきや、たゞ蒐れ、鯨波を颺よ、といふ衆議は幾ほど一致せり、老功共も其を無下にとも制し難ねて、さらば先づ鯨波を……といふ。言の下に鯨波は颺れり。先陣後陣と二手に分れて眞平地に河原面へ押下せば、久居方も亦た徐々と川端に人數を出だして、籠手をあげて我を招ぐ。其の言ふ處を聞けば、此瀬は淺し、疾く渉せ。勝負せよ。といふなりけり。殊勝の奴かな、見逃げにもすべしと思ひの外、楯合ふかや、瀬は淺からむも深からむも厭はず、只一當に捲りつけよ、と馬強の若殿原七八騎、あはや其鐙の鼻は川波を蹴立てむとする瞬間なりき、忽ち見る松坂の方よりして扇を揚げ、宙を飛ばして馳せ來れる一騎の武士あり。「御沙汰ぞ。遖まるな。村上彦右衞門其所へまゐるぞ。御詫ぞ!」紀州の風として、殿の御下知といふを聞ては、鬼も小兒の如くとなるなり。遖りに遖れる先陣も村上彦右衞門御使者とあるに、搔繰れる手綱を引締め、嘶く馬の前脚に砂を爬せて控ふほど、彦右衞門義清、端的に乘り附けたりき。「ヤア人々粗忽! これは什麼何たる事? 殿の御氣色以ての外ぞや!」老功の一人、坂部佐衞門、進み出でたり。「以ての外と申す御氣色? 而て如何なる御氣色?」「御氣色も御氣色、以ての外ぢやは! 彼の者共は抑も誰が下知で僞樣の粗忽振舞ふぞ。狼狽者! 急ぎ引返せ。返さずば一々其場に首斬て棄いと被仰るは! 原來が御身達、甚麼の意趣で斯樣に噪ぐか?」「えい意趣とて……たゞ兵庫どの見繼うが爲め。」「其の兵庫の催促うけたか?」「いや、只、牧野どの、久居攻お爲やるといふで……」「其の久居攻、御分は目撃か?」「いや見申さぬ。眞實はそれにつき不審の評議——若殿原の遖るのを抑止おきまいたが今はや制し切れいで……」村上彦右衞門、大音聲にて、「此の合戰せうといふ者、殿へ御謀叛同樣ぢやぞ。見繼ぐといふ牧野兵庫は松坂に寺籠りぢやぞ。狼狽るな!!」

（四十三）

吶喊は銃聲に交りて起れり。寄手たる紀州方は急遽の事變とて、騎馬の槍は多けれども鐵砲とては一挺も無かりけり、久居方は又た足輕を繰出だして再度の寄手の埋伏をさせたるなれば、鐵砲はあまたなるも槍は寡なし、退くを追ひ悶れたるは三百餘騎なり。牧野兵庫、大人しう松坂に寺籠り? 其の寺籠を久居攻とは誰が言ひ出しつる? 念無や通り魔か、書狐にや魅かされしか? さらばあの見えたる敵も貉の同類か? 或は彼等も我と同じく其の變化にや魅まれたる? 馬鹿々々しや面目なや、と張れる肩肱の力も脫けて河原の面を再び堤上へと引揚ぐる。其體を甚麼とか見たる? 川向の久居勢二百餘人は、看る〳〵勝鬨を颺りかけて川水颯々と押し亂しつゝ、足輕鐵砲二三十挺容赦もなく連發てば、生命までには及ばぬも腿を打たれ、脇を削られて、矢庭に薄疵淺疵を負ふ者七八人。

此の追擊にさしもの村上も圈々とは退き難ねて、是非なく馬を引反せり。況て諸士をや、大濤の淘湧つ如くに打囘して、大河を半ば涉せる敵の人數を左右より圍繞むとす。扨こそ眞正の合戰の開緒! 兩軍の勝負や什麼?

蒐けて揚口の勝利をと目指しつるもの、今は齟齬りて大返しに返されて川中に圍繞まれむとす、此方の陣に入れ立ては大事なり、此處を撃て、彼處を堰れ、と此隊の大將、親母が甥なる桑名彌二郎、八方に眼を配りて暫間なく下知すれども、日來の遺恨、今日の鬱憤、此時をと期したる紀伊國勢は呼笠を傾け、馬の障泥を楯にして纔きつ叫びつ進み蒐れば、防戰ほと〳〵難義にして河原を東方へあはや崩潰むとする折柄なりき。但見る、香良須濱の方より此の川筋を沿ひて、旅輿七八梃を急がせつゝ戰場を指して來る者あり。其の同勢の眞先なる一騎は栗毛の太く逞ましき乘馬、其れより稍後れたるは宿次の駄馬を裸背にして早速の細手綱をかい繰りたる武士五六人、其の御合戰暫く〳〵、我們申すべき事の候ふ、暫く〳〵と喚はりつゝ、川水へひたひたと馬を騎り入れ、疾くも敵方の中央なる槍合の場所を截斷りたりき。叫ぶ語は、必死と撃ちかくる銃聲、先途と雄叫ぶ吶喊とに撲滅されて聞えざりしが、兎角は異形の人物の、異形なる打裝して、兩陣が間へ割て入れるに雙方は驚きたりき。なれども桑名は好き圖へ好き考と思ひたり、村上も交綏には好き機會と考へたり。兩將の意表は一つに各其の射方を制して、「發銃な、其の旅人に怪我さすな！」「蒐くべからず、合戰は重ねてぢや。」交互に吶と勝鬨して東西の岸へと別るれば、此奇異なる仲裁の騎馬の武士は、彼方へ三人、此方へ三人、半數に立ち別れて各其の合戰の意趣を問ふ。此時、急がせたる旅輿は同じく此の河原に集ひて、其中一梃の、殊に勝れて巨大かに鮮麗しきを、列を離ちて西の洲の端に押居ゑぬ。輿の背後には槍あり、挟箱あり、合羽籠あり、引戸の傍邊には鷹を据ゑ、犬を牽せて、鬼の子の如き倔強の供若黨、草履持、杖持、傘持、總じては十四五人も蹲踞したりき。猶其の後邊に雜人小物宿次の雇夫、柳の蔭藪の根方に日影を辿りつゝ眞黒に塊りたる、數多しき懶日も醒るばかりに見えぬ。

此時に、彼方へ趨き、此方へ來り、一々に彼の輿の中なる人の下知を領て奔走する六人の使者、雲出の川を幾回か涉しつ越えたるが、應て其の輿の主人は兩陣の大將へ見參との義となりて、西方よりは村上彦右衞門、東方よりは桑名彌二郎、騎馬いかめしく此處に集合ひぬ。彼們が將兒に跼るを見て、輿の戸は明きたり、中より出づるは年四十左右の四方髮、病氣とはいへど面の色光澤しきが、彼の若黨四五人に腕を扶けさせ腰を押させ、然も重々しき爲體して立てたる將兒にかゝりたりき。其人は別人ならず、民部介橘正雪、隱卽、一昨日までも旅の禁論として松坂わたりを徘徊しつる、其の正雪！

爾く其人は異ならねども、其の行裝は宛然別人の如くなりき。彼は前日の汗に腐れし鼠色の帷子とは引反て、今日は繻羅を卵黄に染めたる浮き單衣の襟高う引立てたりき、黒紋紗の胴服、紫の色殊に鮮美なるを寛濶に套りて白の精好の法眼袴に白茶の絞取りたるを穿き下せりき、黄金作りの伊達をつくしたる小刀、前下りに指し反らして、黒漆の眞に金洗める中啓馬手に把り、三鐵輪の一角なる地位に裕に坐を占めて、鷹揚たる一揖を兩人に施したる後、彼は其の威儀ある口を徐々開きたり。「それは初度の對面。我們は今使者口狀して申し進ぜた由井民部介、屬者病氣保養の最中にて趨迎も得う仕つらぬ、無禮は御免。」

由井が聲名は我們が耳朶にも熟せるところなり、村上も桑名も相應の名對面して、扨て其口誼の了る處、桑名彌二郎突然として聲を放ちぬ。「正雪御老、今日の此の始末は眞正に思ひも寄らぬ仕義、委細は唯今御使者へまで申し通

じた。仔細御合點のおはしつらう哦？」「如何にも其の合點。」と正雪は中啓を笏に執り直しぬ。

（四十四）

「たゞ案外とよりはおざらぬ。」正雪が打傾けるを見て、彌二郎は詰め寄せたりき。「いかにも案外！　此の靜謐の天下、御置目等すべて殘り無い世間に、誰あらう御三家の御一人、紀伊大納言殿の御家老牧野兵庫ともある御仁が强盜山賊の爲るやうなる白晝の燒働き――眞實に案外とよりはござらぬ。なれど此は案外とのみで濟み申さぬ。正雪御老、貴所も名ある仁、此場の始末親しう御覽じたとあるが儀倖ぢや。仲裁も賴み申そが、――諺人になツてお異りやれ。」

「勿論、證人、なれど、愚老が案外と申したは、御言の意味とも些と差違ひ申すよ。」彌二郎、不肖、貴命誤斷り申たか？　さらば今一度！」

村上彦右衞門、喙を容れたり、「桑名どの、御疑惑も道理ぢや。が、只今の御沙汰、當家家中牧野兵庫が狼藉仕ツたるとあるは物の齟齬、右の兵庫は氣も存ぜぬこと。正雪の然申さるゝも大方は其等でがな？」

言せも果てず桑名彌二郎、大音聲！　「不具者にお爲やるか!?」「呀？」「さ、安濃津の士、耳も目も無いものにお爲やるかと言ふ事よ。知られぬか、今曉明何處よりとも知れぬ勢三四十人、久居の陣屋の逍手に押寄せて鯨波を作り矢を放ち、無二無三に攻入らうずる擬勢、待設けたる我等、狹間を開いて散々に防ぎ戰ふ。其時此の我等、來れる者は野武士か山賊か、名告れといへば、其の眞先に立つたる騎馬の法師武者、これは紀伊國殿御內の牧野兵庫よ、些と存ずる仔細あツて此の陣屋を借るぞ、異議なく明けい、然らずば今に大軍を以て堀も塀も蹈潰さうぞ、後悔すな、落ちよといふ。默れ汝ら、此の陣屋は江戶公儀より御預りのもの、紀伊殿御所望とて自儘に借すべいか、攻めよ、奪らば力にて奪れといへば。憎い奴と叫ぶ聲のして又一頻り矢の放いたが然のみは攻めず、二の見を待て〳〵とていつか此路を引て退く、其の途中、民家に放火し、青田を刈り、卑怯無慙の振舞して逃吠の置土產して往に申した。其等の體は日來の誰やらに好う似てもをり、別しては二の見といふ其兵と其許を見て、渡津の頭端をちと擊ち申した。……が、扨は其の兵庫どのに御身達は未だ遇はれぬな？　先陣の大將逃路を失なうて度に迷はれたか？　其れにしては善う其の松坂に寺籠りしてお居やるとの事御存じな？　敗軍の寺入り？　ハ、奇異しうもおりやらぬ事。而て其の寺は何といふ寺院でおざるな？」散々の嘲弄、彼に有る限りの毒舌を敲かれたれども、此方は只、然にあらず、物の謬謬、兵庫に於て記憶なき事と陳疏に止まりて、勝色見せたる只今の合戰も此の雌手口なる議論の爲には、紀州方、或は全敗とならざる可らず、時の不祥、是非なしとは言へ、反證の確たるを有たぬ彦右衞門は、今や彼に與して協はざる返答の一つにて、哂笑はれて男を龍むるか、但しは理不盡に組で落つるか、二途の一途を撰擇ばでは叶はずして、寧ろ憖ひの陣辭を煩はさむより副刀の勝負に理非を決する、其の早手廻しなる方を取るべきまでの運とはなれり。彼は急き立ちぬ。目色も漸變りて見ゆるを、「桑名どの、曲なうおぢやる。」正雪は、笏にせし中啓を執り直して、更に我喙に緩々地なる拍子を取りつ、「斯くては愚老が仲裁の意義、詮もおりやらぬ。先づ熟う慮うても御覽ぜ、村上どのも廣島以來、今の紀州家にては歷々の衆、其の御仁が先刻よりも口を捺めて、初度の城攻は彼方に於て毛頭も御存知ない事、再度の合戰は只往還りの駈合、紀州において安濃津衆に別心なしと我們使者にもそれ程に申された。さらば御

身にも其の言信けられて、此所は只無事、物の不思議と御覽じて退かるゝとも外聞怪しうもあらぬお仕義ぢや。又第一が、其の紀州御家老の牧野兵庫、あの大身で、其の御陣屋攻めらるゝに軍勢が僅か三四十人！　沒道理說話な？況て攻め懸けた城を其儘に徒引返す、悉皆狂人の所爲、……眞實を申せば御身の說話からして雲の如きもの。喃。されば此は御分仰せの、眞正は山賊强盜の所業、其の狼藉の後に紀州衆不時に通り合してかゝる不祥の目に遇はれたのぢや。不審はおざらぬ。正雪は必然と其を申し斷る。御分も武士、先づ御身の心頭に較べて諸事判斷を下されい。」

（四十五）

彌二郎は斯くても領諾はぬ面色、「貴老、そりや偏頗ぢや。最屓にも墮つる……」「何と被仰る？一正雪は穩靜ならぬ色を眉に見せたり。此方は屆せず。一然では貴老は、牧野兵庫を此の一件に關繫なきものとお爲やる。斯る偏頗の仲裁――仲裁の要がおざらぬ。彌二郎不承知ぢや。」と言ふを半ば聽ずして、正雪は空嘯きぬ。「關繫なき者を關繫なき者とする。不思議もおざるまい。」彌二郎は大に叫べり、「いや證據がある。當方には！」「や、牧野兵庫、其の犯人といふ證據やある？」「有る、有る。彼が口から確に名告ツた！」「其の、證據でか？」「應、其の堀際で名告ツた時、彌二郎、面體をも確に視た！」「而て御身は、兵庫とは面識か？」「むむ、いや、面識とは無けれども其の年齡、恰好、況て彼が昨今の剃髮、犬納言殿前を損じて松坂の城下愛宕町なる龍泉寺に蟄居する、其趣をも確に聞く、又其の召伴れたる供廻も雜人を合せて三十餘人、其も仔細あツて疾くに存知ぢや。斯く其此の符合する上、今方の注進、卽ち街道に狙ひ置いたる斥候の士の早打にも、牧野兵庫、譴責かの密意の承けて先陣として久居へ立ち越えた、それにつき彼の城下、上下切ツて鼎の沸く如き騷動とは確に申した。現の證據は當方で無い、紀伊國方にも正確に有る！」千引の盤は動かすべきも、此の證據のみはいかな、いかな、手力雄の御神なりとも搖りもさすまじとやうに彌二郎は勢込たりき。なれども正雪は、含笑みたる頰の髯を摩擦づるのみ、感服の色もなし。「證據は其れか？　むゝ貴方、貴方は武勇はお得意ぢやらうも、公事はお下手ぢやな？」

驚きたるは彌二郎のみならで、彦右衞門も正雪の面を凝視たり。正雪は愈其の微笑を續けつ、「證據、證據と事々しうお言やれども、其の證據、一個も現の證據におりやらぬ。其の名告たが果いで兵庫か？　其の法師武者が果いて牧野か？　夜目遠目笠の內！　黎明の薄暗い、加之間遠く隔てたる櫓と堀際、よも御身、望遠鏡など持たれたでもおはすまい。其の恰好が人傳の聞いたるに似たればとて、其の聲柄が復傳の噂のものに其儘なればとて、其れが兵庫か？　況て御身は其人に面識もなし、縱し有りたればとて其者を捕へぬ以上は甚麼と確認さう？　悉皆雲を捉むの空議！　水掛の論！其の斥候の注進など、只是れ市中の雜說を申すに過ぎぬ。例へば道中宿驛にても紀伊殿の此の御鹿狩、それにつきて種樣に言ふ、されど紀伊殿、此の靜謐の天下、幕府外補の御身柄として然樣の事あるべきものか、是れは御身とて、然無しとは確に申されう。今日の事も其れぢや。いかに兵庫と名告ればとて本人は松坂を動かぬ。生口の一人もある事か、其れも御手に無し。只何者かの兵庫名を騙れると、取留ぬ早打の風說とを眞に信けられて、他領境に勢を伏せ、其處に來かゝる他家の人數に合戰を挑まる、我們奉行として裁斷の下さば、或は御身を其の謀叛の思立ち、不思議の企圖、我と手に

無き證據を僞作て他に誣る骨頂の罪人として檢斷を爲うも知れぬは。ハ、驕がれな、此は譬喩ぢや。さればぢや御身も、風說の信ぜられぬ、彼の紀伊殿を云々と申すにも徵せられて兵庫の疑念を解かれ、又粗忽の合戰めされた身の過失をも些は悔い、理のあるも申張られぬ溫順しき紀州衆手前をも憚かられて、こゝは愚老が仲裁につかれい。惡しうは申さぬ。御身が御爲ぢや。」彼は諄々と言ひ畢りて、其の中唇の蟹目を弓手の爪甲の上に走らせつゝ、此方の面上を注視めぬ。憎くきは這奴の强辯なり、然りともあれ謀叛の證據は、我兵を損ぜられても兎角を爭はぬ村上が斟酌にても知らるゝものを、其の負門を追詰め衝詰め、突入らば、彼奴ら果して馬脚をや露はさむ、遁辭窮りて胄をも脫ぐべきかと、彌二郎、胸には泛びたれども、遺恨はたゞ兵庫にかゝる彼が手兵一人だも捕へぬにあり、彼の言ふ水掛論はげに當方の不利、口先の爭論は我が此の古狐に企及ばぬ處、縱し一時を遲綴うするとも此件の此場にて立消たるにては無し、罟を設け、餌にて釣らば、變化の正體見顯はさぬ事のあるべきかと飜念しつ、是非なき彌二郎は、沙汰は迫て、委曲は當方が使者の口狀に、と辭を殘して立ち歸る。後に、村上は正雪の手を執りぬ。「正雪老、御芳志は一代ぢや！」

（四十六）

運命是非なく、腹屠るか、男を廢るか、其場に耦耕へて結果るかまで覺悟せる村上彦右衞門、助くる神の正雪に面目を拾はれて、人數さへ損ぜず、主命をも虛しうせず、合戰の勝利と論判の利運との獎を擔ひて引返す、彼、這の恩人に對する心中の感謝や如何ならむ、路次は正雪の輿を中央に立てゝ、彼方の同勢と此方の人數とにて警衞せる、宛然大賓を得たるが如くにして、松坂へは着きぬ。正雪が此の旅行は、昨年より今年へ懸けて必死の重病に侵されたるを、伊勢皇太神宮へ祈誓し奉つりたる甲斐ありて不思議に平癒しぬ、これに依りて御禮の報賽の參詣といふ。さらば急がるゝ道中にては無し、寬々當城下に御保養ありて名所の見物ともあられ候へ、旅宿萬端御馳走申さむ、いでいでとて、彦右衞門、先づ此の主從を城下隨一の大寺、淸光寺に案內せさせ、自家は途中より引別れて只一人、大納言殿御前へ出でぬ。

一彦右衞門、甚麼とありしぞ？」御病氣の御披露とて、殿は薄羅の御衾に凭かゝらせ、小姓半ば下ろさせたる薄晴き御寢所の內に御座なさる、兒小姓兩人、團扇もて御背を扇げり、大學（渡邊）も侍座せり。彦右衞門頓首して、「先づ無難に。」「人數は？」「雙方一人も損じませぬ。」「此方の士、大學（藤堂）が領へと越しつるか？」「私參りて引纏めまする際、久居の兵附絆ひまするやうなるを追返して、川中過ぐるまで追込み、其儘引揚てござりまする。」大納言殿、御氣色いと麗はしく、「扨は失敗は被られぬな？　好う仕ッた。現下の際會、雙方に人命の損傷あり、又た紀伊國の士、大學領へ押入ツたとありては後來の都合、面白からぬに、川中までで追棄てゝ人馬に過失させなんだこと、全く其方の功績ぢや。善う見切た。——然りながら彼奴原も猶ほ東方の岸に在らう。手當は何とした？」彦右衞門は先づ殿の御諚を謝して、躊躇せず此間に應へ申せり。「……右には年長しき士百五十餘人、三隊に殘いて、後度の手答をさせまいたが。——猶仲裁の仁おざツて、當座の和談も成り申した。其の和談も先づ、當家、存分のものにおざりまする。」聞くより殿は、御肱なる御枕押斥らせて、「や、和談？　其の仲裁とは如何樣の仁？」故に御面色を正させ玉ふを、彼は猶何心もなう、「それは殿にも名は豫て御存知の者、由井民部と申す兵法者……」「呼！

其者が仲裁人？　而て、其は大學士、頼んだか？　得も其方から？」　爰に至りて彦右衛門も、初めて仲裁其人を得ざりし過失に憶得たり。彼は疊に摺着たる額を又擡げて、「叶、殿。彦右衛門一代の不覺！　嗟、殘念！」「心付いたか汝、——扨も〳〵ぢや！　が、其の發端が心許ない。仔細う申せ。」

彦右衛門はしと〳〵滴る額の膏汗を拭ひ敢へずして委細を陳しぬ。殿は此間、御目を瞑ぢつ、御耳を傾けさせつ、無言の裏に千萬の計畫を御胸に凝らさせ玉ふやうなりしが、彼が言上を聽果てさせて、「……何と申すも詮方が無い。其方が身の過失、知る以上は別にも言ふまいが、——こりや大學（渡邊）其方は年壯の者、以後の心得にもなる事ぢや、熟う聞けい。凡そ物の仲裁——就中弓矢にかゝる仲裁は大事のものぢやぞ。予は今從二位大納言、家格は三家の一人、其れが仲裁を賴まう者は、尾張、水戸、越前、其外には見も當らぬを。彦右は老功の武者、然ですらも箇樣に不意の過失のする、其方らは若輩の士、萬事に目を配らぬと予が面に泥も抹けうぞ。」仰せ棄てゝ又左右の御思案ある。彦右衛門、あはれ今は絕體の羽目とはなれり。渡邊に仰せて御詮は一々我耳に御聽せある御折檻、其れも外樣の役目もなき士ともある事か、御眼鏡もて總軍の御采幣をさへ預けさせ玉ふ身を此儘に甚慶汚目々々と在るべきや、想へば身の譽たる正雪討て、後日の口を塞がむか、自己切腹して此の恥辱を亡屍の上にて陳疏むか、其れも拙なし、此も無念、兎やすべきと心一つに悶念らふ、眼中も自ら血迸りて見えぬ。

（四十七）

「只今の大學へ御意、彦右衛門慚愧の耳に一々徹して覺えまする。箇樣の不束仕つるべき者とは我ながら今迄は存じも懸けず、總軍の御采幣、御辭退も申さで下さるゝ隨に御預り申上げたる、千萬の不覺。右は改めて今日三拜、返上の仕つります。猶一つは、彦右衛門、身の御暇を下されたう、御許容ひとへに願はしう存じまする。」「ふう！　不思議を申す。身の暇を乞うて甚麼と爲る？」彼は遺恨の涙を拭ひて、「其後の事は又私料見。——只今は唯何とも濟めませぬ。」殿は其には應へさせず、徐ら大學が方を顧眄らせて、「其方、現下の彦右存分を何とか思ふ？」彼は只顱恐惶して、徒、は、はとのみ言へり。「いや、萬一、其方、彦右在る處の羽目に陷たりや甚麼とする？」「何とも濟めませぬ。大方？　退身の仕つりませう。」「退身のして甚麼と爲る？」大學は益窮せり。「は。これは其身々々の身分にも依りまする事、兎角は御難題……」「難題で無い。主の奉公爲る程の士は平生より然るほどの覺悟は有るべきもの。……大方其方が料見などでは、切腹して陳疏するか、事に託へて正雪と耦刺ふか、自個が手の兵を引伴て舊の戰場に立ち越え、再び津の兵と合戰して切死の意地を立つるか、先づは其等で有ろ？」彦右衛門は、撐へたる手の隻方を膝に上せて、驚けるが如くに屹と面を揚げぬ。「眞箇に御推量、寸分も差ひませぬ。切腹も無益、正雪と結果るも無道、津の奴原と討死仕つるも狂人の沙汰とは存じますれど、然りとて其他には殿への御陳疏、爲む樣もござりませぬ。たゞ其も御當家御内とござりませで、浪人の村上彦右衛門、一分の意趣を果たす、それ責てもと御覽じ下されて……」「むゝ、心底、先づは過分ぢや。が、其れは唯其方一分の事。予の身には只恥辱が殘るぢや。粗忽の家來持たといふ汚名が添加るぢや。」彦右衛門は再と一句も無かりき。首を俛れ、額を病せ、胸を碎き、腸を搾る、無量の苦悶も終に這の寬容海の如き主君の御慈悲に報ゆるの方便を得ずして、前路の方向、其の東西と南北とに迷ひぬ。彼は苦吟

の膝を叩きて、「甚麼とか爲申さう？　身を立つれば殿様が御立ちなされぬ。其の殿様を立て申す——思案といふが礙と着かぬ！　大學、善い智慧は？」　大學も唸きつ、應へぬ。「我們とて……。なれど彦右どの、御身は既や軀を棄てたと御申しやる。棄てた其軀を殿様の御隨意にして、恐れながら其の御分別、御智慧を願ひ申されては？」何さま！　と彼は横手を拍て、再び殿の御前に首を下げたり。「右の通りにござりまする。何卒御慈悲……」殿は哈々と笑はせ玉ひて、目をもて其れと見し玉へば、御背に參れる二人の兒小姓は御次へ立ちぬ。「近う寄れ。其方らも目は見えぬな。予が此の恥辱かいつるは誰が所爲ぢや？」は、と兩人は惶まりぬ。實に意外の御問たりしなり。兩人は只目を交視せぬ。「いやとよ、予が敵——此の紀伊國を危殆うせうと企圖む敵は、何處にあると申すのぢやは。」　益解し難ねたる兩人のうち、大學は恐る恐る、「安濃津の士？」「はゝ枝葉な！」彦右衞門も、捻りたる首に、眉を皺めて、「江戸、老中衆？」「遠いは、火は！」と再び呵々と笑はせ玉ふ。兩人はやゝ憤氣となれり、覺えず暗合の口を揃へて、「扨は、今曉の兵庫名を騙りし賊？」「殿は、吽との微なる笑を漏らさせつゝ、「而て其の仔細は？　憶ひ得つるか？」兩人は憶ひ得ぬなり、眞實はたゞ出放題なる、闇に放てる鐵砲の思はざる的を創れるなりき。「憶ひ得つるか？」「は。」喝と塞りて、彦右衞門は眞面目に筋張れり。大學は些しく忸怩て、御氣色を覗ひたりき。

（四十八）

彦右衞門は堪らぬ態なり、膝を前めて、「然御意ある、殿には御存知か？」「予とても知らぬ……」兩人は眼を斜にして、御自身さへも其通り御存知あらぬを、我等を筒様に御責なさるる、これは御無理と申すもの、との面地するを、殿は猶打笑はせて、「……が、烟を望みて火あるを知り、角を瞰て牛あるを知る、譬喩も今更らぢや。お主らは彼の正雪を何者とか想察ふ？」御聲の潛やかなるに、大學も愕けば、彦右衞門は特別て仰天したりき。

我が、剛纔、彼と組で結果むとしたるは、彼は名を街ひて江湖に賣り歩く浪人、何さま殿の御意通り、寛永の廿年七月の某の日、我が伊勢參宮の節雲出の川にて紀伊國衆と安濃津衆と挑戰ひ、殊に紀州衆は難義と見えたるを、我れ由井民部介橘正雪、見るに氣の毒と其場に仲裁して其隊の頭人村上彦右衞門某といふを助けたり、かゝれば和歌山五十五萬石、安濃津三十五萬石の今日に現存は、全く我等が肝煎の庇陰よ、なんどゝ言はど、義清一分の面目は措くも、殿様、否、御子孫の末代、紀州家在らむ限りの御恥辱なり、然れば一旦の恩誼はあるも、其日を杜ぎ、其瞞を摩り、是非なき彼をこゝに討ちて後日の口を閉鎖むと只念ふ一途なるを、思ひきや、彼が其の紀州家に寇する——此の一埒の張本のやうにも仰するは怎麼たる意趣ぞ。大人の心算もとより量り易からざるも是れは又た餘りなる御目の的けやう哉、彼の不祥も餘りなる哉、と彦右衞門は悶れしなりき。

「領受れぬ面色と見ゆるが、——彼を何者とも豫察はぬか？」「御沙汰にはござりまするが、彼めは只一個の兵法者、浪人の時を得ましたる者……」「むゝ、それは彦右言ふ通りの者、……扨て其方達は、あの道中の雜説、江戸表にての風説、予が身に懼る批評ども聞いつるか？」「いかにも其れは。」と言ひ罷して、大學の眼は目躱しげなり。「其の批評の流布の原、雜説の起因は、甚麼と胸算む？」其話頭は寔に大事となれり、彦右衞門、精神の有る限を雙の眼に攢めるが如くして、「それは唯殿様御智勇、御拔群に渡らせられて、加之恐れながら權現様御愛子、

例の百萬石の御遺言などござりまする。其等原因と相成りまして右申す江戸老中衆が……」「其義もあらう。なれど、右は元和五年の當所國替前後の事で、今よりは廿四五年——二紀も既往の義ぢや。其間には御當代樣御代替（三代將軍家代替）前將軍家の御薨去、九年（寛永）には駿河の騒動（忠長卿こと）十四年には島原の亂、其他にも天下の色目動きさうなる義も少小うあらぬ。其節にはそれ然もなうて去年の關東の飢饉から、過米を徴すの、所司代（京都）城代、大阪當所山田の奉行への奉書の下るの、兎角は予にかゝる批評の多い其上に、又候ふや今回の騒動。予の鹿狩も一つた右等の意味もあるが、道中宿驛大變との事兵庫口から聞いつる時は案外との念も爲た。最初は例の大學（藤堂）めが繰出かとも想うたが、熟く察れば然も有らぬやう。何さま此の二三年、不思議の曲者世中に徘徊して非望を企圖つる者ありと覺ゆるぞ。而て其の非望の的になつたは予か？　とも想ふぞ。」御聲は愈〻粛瑟なり。大學は傾聽ほと〳〵感に堪へざる首を正して、「さては、右の曲者を——彼めとも？」「いや、未だ……」「偖それ、其の御懸念ござりませうなりや彦右どの迄もなし。大學、罷り向ひまいて！」「遣くな、彼等ほどの者。況て其程の大事とあらば彼奴一分の義ともあるまい。外に其の大將たるべき——然るべき者？」大學は其功を建てむとするに急なるか、其の勢込める腕を扼り敢へず。「とはござりませうも御家を狙ふ曲者、天下に仇をなす逆賊とござりましては大學、片時も棄て置けませぬ。縦し然で無いに致してから浪人の兵法者、其れが爲體の僭上、大名高家の眞似仕つりまするは兎角は世の賣主の流。打殺しまするは天下の御爲！」「ハ、其の汝が若輩の其腕で……。爲損ぜば誰が面皮ぢや。可矣、予が遇はう。遇うてそと試いて與れう。彦右、其方は善う饗應せ今は猶ほ其方には恩分の者、氣にも悪しい面色するな。穩便ぢや。諸事は予が指圖の待て。」

（四十九）

正雪が眼に映ずる、當時天下の英雄と稱すべきもの兩個あり、其一個は、備前の新太郎少將（光政朝臣）にして、他の一個は隨即、紀伊大納言殿におはしき。這兩個は與に彼が仰慕し、畏敬し、且つ恐怖するところなりき。雖然、彼の少將殿は、學を好みて、文を尚び、民の休養を專らとして、風俗の美を庠序の中より發さむと爲たまへり、廢れたるを興し、荒れたるを復すの善政、頗る見るに足るべきもの多しと雖も、諸事儒者臭味して、濶達豪放の氣に乏し、加之ならず、其性の事物に拘關り玉ふこと多きよりして權現樣御外孫とあるを此上もなき榮譽として、只幕府への忠勤、將軍家御爲とあるより外は西も東もあらぬやうなるが口惜き。其れとは反りて紀伊國殿は、天晴れ稀代の豪傑にまします哉、我が鑒たる眼にして過たずば、此殿は是れ、豐太閤が智略に、東照公の勇武を兼ね、猶ほ安土殿の機警を一緒にして、餘りありとも見え玉ふぞや、其の洋々として亘海の如く百川を收容て漏らさゞる寛懐、揚れども波たゝず、抑ふれども滯らざる大江の如き雅量、時ありてか輕飄颻發、其疾きこと風の如き、時ありてか沈重空闊、其靜なること林の如き、古に謂ゆる神龍の變幻窮極なきもの歟、然も此の神龍、今や蟄して九淵の底に在り、果して風雲相會の日を待つには非る歟？　風雲なる哉！　風雲なる哉!!　彼の龍にして果然其物を待つとあらば、我は其の浪を鼓う雲を行るの風ともならむ。電擊めき雷跳るの雲ともならむ。況んや看來れば彼の神龍、此機を逃せむと欲すれども未だ得ず、田にあり野にありては蟻蟻の爲に苦められ、淵にありては魚鼈の

爲に窘められゝ如きものあるをや、欝勃の感、磅礴の氣、宛然日これを視て、耳これを聽くが如きあり。吁！　誰か此の神物をして天に御するの日あらしむる？　今の時にあたりて我を除にして其れ誰ぞや!?　正雪は、實に如是く想念へるなりき。彼の筒は、確に此殿の胸臆に跳る怪物の眞直中を射徹し得たりと想念へるなりき。彼の中國なる狻猊はこれに狎れ呢づくべからざるも、南海なる鯨鯢はこれを補佐誘掖すべしと想念たり。或はこれを網裏の獲物として我が掌上に弄ぶべしとも想念たり。蓋し同氣相求め、同臭相倚る、倖ひにして一旦其面前に咫尺するを得ば、相見ることの太だ遲かりしを恨む、面白き御詫をも承はり得べしと彼は想念へるなり。

從前に彼が計畫るところは、一々其の候的を差謬らずして、着々と其の會見の歩を進めたり。これが爲には或る一人をも礫刑に梟げたり。或る一人をば主に叛くの逆賊ともせり。或る者には其腹を屠せむともしぬ。或る者には其男を腐させむともしぬ。雜說もこれが爲に湧き、騒動もこれが爲に起りぬ。なれども正雪の眼には此等を見ること、淵の爲に魚を驅る獵が癡呆たる所爲とも見えて、其の衆々が叫喚、苦悩、煩悶を聞く、猛虎を釣るの餌とせる痩狗の悲み吠ゆるほどにも感えざりき。此の無情なる大膽は、果然恁麼處より生れ來れる？　王政の古に復して其の祖先？　の英靈を天上に慰めむとするか？　幕府の秕政を矯正して萬民の鼓腹を晝るものか？　抑狼戻の野心を逞うして、非望の途に奔馳するか？

善惡、忠奸の分別は姑く措きて、彼の得意今方に窮まれる正雪は、又た渡頭舟を迎ふるの歡ばしき使に遇へり。其使節は彼の村上彦右衞門、其事は明日の會見！「先刻の一埒、主人御耳へ立てまいたが、貴方扱ひ萬端殘る處なしとの御意おざる。就ては病中、大儀とは存ぜらるゝも親しくおはして御逢なされたきとの御事、御返辭は何とおざらうか？」

故意と驚きたる正雪は、一應の辭退を申して、再應の勸告には餘義なげに承諾したりき。此夜、彼が旅館のうちは、衣服調度の撰擇、供揃の支度に夜半の鐘の鳴るころまで犇めきたるが、其れも過ぎて、正雪が居間なる處には腹心の面のみ揃ひたり。

折柄、外の方より立ち歸る師の面を見て、上座の一人は祕かに問ひぬ。「別條おはさぬか？」「うむ、無事ぢや、明日の見參は、本意あらうな？」其の衣服の常に異れる、赤土の泥に塗れたる痕あるを見れば、彼は竊に彼穴より城中に忍びて、其の用心の有無如何を認たるにやあらむ。有形の準備は如是く探り得ぬ、無形の心地は、嗟、果然如何。

（五十）

翌くれば寛永の廿年八月朔日。此日は彼正雪が此の大望の前途の運命を卜すべき其日にして、彼が平生の膽力、機智、辯舌、其れが軍學の奥旨といふも、兵法の極意といふも、此期を外にしては亦た殆ど其妙を用ふるに處無かるべき程の其日なり。

彼は此日、巳の半刻の登城といふなるに、日高うなるまで臥房を出でず。日常は曉天未だ明けざるに先ちて必ず起きて、弟子們が禮を受け、其日の業を課するが例なるに、今朝に限りての朝寢、心得ずなんど呟ふもありしが、兎角は師の爲す隨意にして驚かさず、衆は皆今日を晴れなる供立の準備せり。

彼は鰭て起き出でゝ、面を盥ひ、口を嗽ぎ、徐に庭に下り立ちて、城中の森の樹梢を遥望ること多時して、やがて引入りて朝餉を喫めぬ。其間腹心の弟子、金井半兵衞、松田彌五七、鵜野九郎左衞門等出で來りて對面したれども、抔々

しう詞も懸けず、只、然る方より密使は無き歟、とばかりにて、只煩思案に沈める氣色。其の思慮の什麼大事のものなりけむ、箸に觸れたる飯粒の膝に落つるをも知らざる態なりき。

金井半兵衞席を進めて御氣分の例におはさぬ歟、御氣色何とやらむ心許なう、と序を開けば、松田、鵜野も、昨夜とは樣異りて御見え候ふ、今日は如法の大事の日、御氣分の進まぬところを强てとては勿體なし、何の苦しう候ふべき、豫ての御所勞再發の御屆、御使は我等、と言ふ。

いや、さる程の體にても無し、些と物を深う案じて方々に怪しめられたること羞恥しけれ、聽したりとは覺玉ふな、油斷は大敵ぞ、と繰りて笑ふ。其の深う案ぜらるゝこそ大事とは見て候へ、敵も敵に因り候ふ、轉びて後の御後悔には千本の杖も詮なく候ふ、たゞ今日を御延へにて容子をも搜らせ、我等とも膝ともの御談合あらばや、と半兵衞重ねて抑止むるをも正雪は聽かず、萬事は委されよ、其場にて樣惡しくば、と打笑ひつ、其後は元氣を復して屈託の面色もなし。斯くて風呂に浴り、身を潔めて、聽て衣服を更めぬ。今日は八朔の御禮日といふなればや、彼は白帷子に打裝てり、例の胴服に、法眼袴、黃金作りの鞘方、目覺むるばかりの行粧して、其の旅館清光寺を出で立てるは巳の上刻に近かりき。

城中にての準備は什麼？是れは大納言殿御料見にて別段の御用意とても無し。只、御不例も今日は癒らせぬ、旅中ながらも當日の御祝儀を受けさせらるべしと觸られたれば、家老水野太郎作、奉行村上彦右衞門を初として、御供なる近習外樣數百人、彼の本丸なる百疊敷の廣書院に祗候して拜謁す。

諸士の御禮相濟みて後、正雪への御對面とは豫ての御沙汰なり。龍侗として端涯も知られぬ長廊を引續き、追續き、群叢ちつゝ引退り來る諸士の肩と摩擊に、傍眼も觸らず、御廊の中央を彼の宗佐に案內せさせて、御廣間を目に懸けつゝ行く人、其の骨相の凡ならず高尚りて、射出だす眼光の面を向くべきやうも無きに、あれや！と衆皆も步を避けて、「誰人か？」「正雪よ！」然りとては可怖しのあの眼光や、殿樣の御眼中も忻節は炬火のやうにも輝やくが、是は又た擊電ぞや、彼の目と目と會はじ什麼ならむ奇觀にあらむ、御執次する大學は鋭光に射られて盲目にやならむ、兎角は珍事出來のほどを持ちぬ。御疊の目を波と見れば、廣々たる海の如き御座敷に主客五人。言ふ聲音は一々四壁に響きて奇異しき翳翳を耳底に反射せり。

（五十一）

正雪は、其支へたる手を大學に向けぬ。「民部介、測らざる御目見、冥加至極の仕合に存じつ、後影を凝望むる、いづれも視線の裏に彼が影ははや御書院の襖に入りぬ。

「由井民部介、御目見にござりまする。」とは渡邊が披露なりき。正雪は此の披露につきて末座に恭しく首を下げつ、未だ一言をも言はざるに、上段の方に凜然たる御聲ありて、「正雪か。近う進め。」「御意におざるぞ、民部、御近う進まれい。」これは聞熟れたる彦右衞門が聲音なり。彼は此の會釋に隨きて毫も惡怯れず、御疊十疊がほどを膝行て、大學が一咳を暗號に、再び其處に着席しぬ。首を擡ぐれば、我は既や御前御間近の地にありて、御面は鮮明に視られたり。

御側には、右方に水野太郎作あり、左方に村上彦右衞門あり、渡邊大學は我と殿との中間になりて、是れは執奏の役と見えたり。御背面には年十四五なる兒小姓兩人、蠟塗に紫銅の鍔うちたる御刀と、白練の服紗もて包みたる函とを持ちぬ。御疊の目を波と見れば、廣々たる海の如き御座敷に主客五人。言ふ聲音は一々四壁に響きて奇異しき翳翳を耳底に反射せり。

正雪は、其支へたる手を大學に向けぬ。「民部介、測らざる御目見、冥加至極の仕合に存

じ上げまする。」「むゝ、民部、予も其方名を聞くは久しいぢや。今日の對面、本意に思ふぞ。別しては昨日の雲出川一埒、肝煎過分ぢやぞ。」「は、忝けなき御意。」と首を下げしが、再び仰ぎて、屹と御面を瞻上げたり。彼は、瞻仰は瞻上げたれども、宛も是れ壁立千仞、啻に攀づ可らず、揺かす可らざる山嶽の御儀表のみならず、此時碌と瞰下し玉へる、其威稜々、白日闇を破るが如き御眼の光灼は我が肉身を透して肺腑に徹する如きもの有るを感えて、正目にとは覷ひ得ず、直と面を伏せたりき。

彼は、實に案外の想したりけるなり。彼は此殿が御前にとては眞に今日が初度なれども、其れが得意る或る手段によりて、物陰よりの偸視は從前も數回したりき。御智慧こそ勝れ玉へれ、御武勇こそ優り玉へれ、恁くまでの威嚴、是の如き氣力を有ち玉ふべしとは實に現今の現下までに豫想も懸けざりき。或る時は實に此殿を、我が藥籠中の一物、使役たゞ我が隨意とも想ひしなり。然るを今は、善うせずば、我は怖ろしき彼眼の爲に此の御座に睨み殺されなむず。過たば、我が年來の祕望も一喝の下に粉齏と碎かれなむず。我は只狗兒の如くに頸に繩をつけられて牽回されむずとも想ひたりき。とは思ふも、然りとては口惜しや、正雪從前かゝる無念の目に遇ひたること無きを、殿とて豪物とて！何條事!!　と一身の勇威を其臍下より奮ひ起きむ、振ひ興さむとは急剌れども、我が膽、我が力は何處へか脫けつる？　只磐石を其背に頸に壓し重ねらるゝやう覺えて我と我躬を怪異むまでに、頭は下り、肉は硬う、心戰きて畏縮みたりき。但有る時、彼は忽然として大悟しぬ。我は過矣！　此殿は實に我には右際勝りの角力にておはしけり、手の優れる角力には勝たむとは無るべからず、負けじと組むべしとは斯道の祕訓なりけるものを。眞實を言へば、今朝、枕頭に深く考慮ひて、猶ほ庭にて城内の森の樹梢を望つる折に、不圖眼裏に映えたるものありしが、此れが前兆かや。但し負けじと無むほどには此角力は持なるべし、持の角力は贏りて後日の花を開かせむ其の地盤ともなるべき歟?!　恁く感悟して、彼は只顧肉の凝塊を去れり。搏たむとする氣を抑へて彼が蹶むとする隙を狙へり、無口の禪に定じて衲が說法の破綻を待てり。燃犀の明は、疾くも水怪が胸中の祕を御覽じ知りたるが如くなりき。殿も少時彼が面上を睨め玉へるまゝ再應の御沙汰とても無かりき。

御心に念ひ玉ふやう、剛强なる奴かな、今の頼も、然りとては口惜しや、正雪從前かゝる無念の目に遇ひたること無きを、殿とて豪物とて！何條事!!　と一身の勇威を其臍下より奮ひ起きむ、振ひ興さむとは急剌れども、我が膽、我が力は何處へか脫けつる？　只磐石を其背に頸に壓し重ねらるゝやう覺えて我と我躬を怪異むまでに、頭は下り、肉は硬う、心戰きて畏縮みたりき。但有る時、彼は忽然として大悟しぬ。我は過矣！　此殿は實に我には右際勝りの角力にておはしけり、手の優れる角力には勝たむとは無るべからず、負けじと組むべしとは斯道の祕訓なりけるものを。眞實を言へば、今朝、枕頭に深く考慮ひて、猶ほ庭にて城内の森の樹梢を望つる折に、不圖眼裏に映えたるものありしが、此れが前兆かや。但し負けじと無むほどには此角力は持なるべし、持の角力は贏りて後日の花を開かせむ其の地盤ともなるべき歟?!　恁く感悟して、彼は只顧肉の凝塊を去れり。搏たむとする氣を抑へて彼が蹶むとする隙を狙へり、無口の禪に定じて衲が說法の破綻を待てり。燃犀の明は、疾くも水怪が胸中の祕を御覽じ知りたるが如くなりき。殿も少時彼が面上を睨め玉へるまゝ再應の御沙汰とても無かりき。

御心に念ひ玉ふやう、剛强なる奴かな、今の頼宣が面を覷つる眼光の骨肉に徹りて銳尖さよ。誠とや這者、古の楠延尉が末葉とて、正雪と名のり、其れが祕鑑を傳へて、諸家に出入りし、其の弟子たる者の數も三千には餘ると聞く、分限の富裕、起居の尊大、當代に餘りたる僭上と聞きつるが、何さまにも素奴が容態、天下に望をも懸け難ねまじき然る曲者とは覺ゆるぞや。一條索では縛くまじきに、恁慶様にして陷さむ、迂濶と物言て脚をも捉れなば大事ぞ。甚慶とや問はむ、什麼にや發語せむ？　御思案の區々なる御眼は頻りに灼爍て、只顧彼が動靜に注がせたりき。正に是れ鵺を負ふ猛虎を覷ふ潭底の龍、洞に潛む毒蛇を搏たむとする巖頭の鷲、其爪を磨ぎ、其翼を刷ふ、呼吸は甲乙相迫りて、今や電激し、雷發むとするの形狀！

愕きたるは水野、村上、渡邊なりき、彼等は此の奇觀と謂はむよりも凄景、凄景と謂はむよりも素破の惡勢！　危急！　御大事！　咄嗟、瞬間、彈指の間に逼り來らむとするを見るより、脇差の柄に目を注ぎ、御意の聲に耳を淸して、更に正雪が呼吸如何に心を配る時、御聲は倏然起れり、一民部、其方には聞き置くべき事も多くある。なれど斯う改まりたる席では意中に盡くせまい。大學、時分ぢや。湯漬の用意。

彼にも其の相伴させい。」

（五十二）

御席は彼の新御茶屋へ移されたり、太郎作、彦右衛門、大學を侍座に、宗佐を御給仕に、御膳も終れば、嬶て又た御茶を下されぬ。畢りて宗佐退席すれば、後は復た主客五人となれり。今は殿もいと御寛らぎの體、御目の灼光もいつか融解て、又以前の溫容掬すべき紀伊大納言賴宣の卿、御服も先刻の正服を更められて、水淺黃に替の御紋を染め出せし奈良晒布の御帷子、葛布の御袴、御自身蒲團扇に水うちたるを徐々地に使はせながらに、「民部、其方は、國々の地理山川を善う研究めてをると豫ては聞く。なにか？兵法修行とでもありし際にか？」これが御話の發端なりき。

御問は無意義なり、なれど其の無意義なるだけに胸に一物の此方が耳には、什麼なる特趣の埋藏されたるもの有るやらむとも怪みたりき。正雪は心を小て、猶ほ奏者たる大學へまで、「いかにも若年のころ、國々の山川、少分がほど……」「いや、此處は休息の席ぢや。執次に及ばぬ。直接に申せ。」「は、然らば御直に。……歷遊りましてござりまする。」「若年か？予は近年までと聞いたが。而て、何方の邊を多く歩いた？」「畿内、中國……」「九州には大分長く、足を駐めたと聞いつるが？」「御意の通り、小倉表に……」「いや、肥前より肥後。島原より天草あたりに？」「はツ！」とは言ひしが、彼は遽に面色を變へたり。仔細は知らず、此のよツ引れし御詭の箭は、彼が致命の急所にと的れる如し。良少時、押鎭めて、「……一應巡歷してござりまする。」「うむ然うか。」と殿は二の箭をも番げ玉はず。倏忽にして、「其方が覽及んだ國の風景、何處が好いな？」風景談なり。憎くき殿が御白化や、然らば我もと正雪は、膝些し前進めて、「我國の風景は、古へより、宮島、松島、橋立とやうにござりまする。なれど右は、誰人の選擇にござりまするやら、民部、面白うも眺めませぬ。」舌端は俳綻けぬ、殿は莞爾と微笑せて、「ほう！其の仔細？一々申せ。」「されば。先づ宮島は、八間の大華表、千疊敷の廣間、紅葉谷の紅葉、櫻が茶屋の花、結構の壯觀、名所の風流、看るべきもの多いのみではござりませぬ、此所は彼の陽毛利が古戰場、自然我國ごときの心ひく方の無いにはおざらぬも、さればとて周圍八里にも足らぬ小島、土地は山陽の脚部にあり、風景として多寡の知れたるもの。松島は何さま陸奥第一の名所、千賀の鹽竈、雄ケ島、その景色のおもしろさは嚮が諺曲にも些と見えてはおざりまするも、此れも名さへみ。ちのおくと申す國の盡處、あの天下を領り損ねたる片踏漢（政宗）が隱居所の慰みの小庭には、相應にござりませうも、殿なんどが御賞美あるべきではござりませぬ。況て天の橋立とござりまするは、北海の邊鄙、其の白沙とやらむ、青松とやらむ、詩歌嘲弄ぶ公卿衆などの目にこそは愛たうも見え申さうが、我等式俗眼には、雪深い不自由のみで、興も眺望も一向のもの、看るにも足りませぬ。」彼は、怱く言ひ訖りて、此の迷語を、乍麼解みたまへるやを偸視ひぬ。殿は呵々と笑ひ玉へり、「兵法者として、軍法の師範たる其方が見た上には何さま然る意味もあらう。なれど、其の花も紅葉も、浦も島も眺望に入らぬとは、いかう無風流の沙汰。さらば其方には如何やうなる景色が目にも駐まり、心にも浸むな？」「御詭にござりまする、民部介眼裏には……」發語さむとして少しく躊躇ひ、更に御前を睥乎と看回せり。

（五十三）

彼は何故にか躊躇ひたる？こゝ此の角力の大事の場にして、我が進退を賭ぬべき迫戸なればなり。我が九州に遨きたるは、今を距る七年前

なり、便ち寛永の十四年なり、卽ち島原の亂の際なり。此時は我れ實に然る不思議の擧動したりき。設ひ其表面は土民百姓の一揆とはいへ、内々には關ケ原大阪以來の冤恨を飮み、憤志を蝕みて、こゝを死花と思ひ斷たる御古兵も多く在り、加之尋常の苛稅に苦しみ、聚斂に憊れたる窮民の僞なるものとは樣變りて、一つには宗旨の上なる軍と聞けば、或は外國の後援といふも有るべき與、然らば事萬一敗れむ時は、彼の蠻船にも飛乘、瑪港、臺灣にも航りて、往日の八幡船（明時代にいふ倭寇の船には舳先に八幡大菩薩の名號を認せし旗を建てたり、仍て八幡船といふ）の大將とならむも易し、と思ひて、眞實は其際、城中へも入りたるが、豫想ふにも似ぬ彼等皆烏合の衆にて、頼憑みたる異國の加勢といふも無し、到底大事の成るべからざるを斷見りて逸早く其處をば出でたるが、此事、我が腹心の弟子三四人がほかには漏說さゞりしに、殿は却りて何時仕慶にして聞出だし玉ひにけむ、其の委曲を御存知あるやうなるが恐ろしや。然る程の大事を疾くに知らせながらに、我を一揆の餘黨とは御存知ながらに、其の刺針の如き御意をば下されながらに、鞫問もせられず、縛繩も打たれず、虛知らぬ顏にて、慇懃に親しう打解けたる御待遇？　あの御微笑の裏なる御刃の切味、凄まじう、沛ろしきは言ふも更らなるが、然りとては其の空眼つかはせらるゝ御中心の無銘か否かは鑑定申すに難からぬぞや。果然殿は、爾る思し食ちありけるなり、仍て我れを一方の任とは賴憑ませ玉ふなり、暗に局量の大を見して不言の默契をば約ばせたるなり、と見るは僻目か？　よも過錯たじ！　卻や此殿が、我に國々の風景を語らせて歌枕の料にともなさるゝ殿か！　想へば其の御苦心の程も好笑しや。されば此の不思議なる風景談！

今の、如何やうなる景色が目に駐まるかとの御誥に對して、某の存ずる日本第一の絕景は、江戸御城、富士見の臺なる御天守の眺望にござ候ふ、此櫓に御座まし〳〵て、日本六十餘州の海山村里、目の下に御覽ぜられむは什麼ならむ須磨も明石も物かはと申上げむか、大方は御意にも入り、御話說も早う、埒も隙も明くべきが。或は恐る、箇樣に御心深うましますと殿の。他人は知らず御心知りと自身は言ふなる兵庫にさへも御心底御打明あらぬ程の殿。こゝなる水野村上輩には定めし何事もの仰合されは無きならむ。其の仰せ合されなき端に、箇樣の大事迂濶と申さば、人々の手前、惜しきながらも此の正雪を安憩には置かせ玉はじ。されば殿も御納得、我も無事、此の人々にも自然其方に感悟する如くにして、扨て此の御座敷のよろしからむやうの御答、甚麼とか有らむ？　と、彼は躊躇ひて、看廻したるなり。彼は思考する一遍、屹と心に憶ひ得たりき。「其の、私目に駐まりまする、其の景色は、先づ第一に御在所和歌の浦繪いて大阪、尼が崎、別しては御舊領なる駿州の淸水、薩陲山、天龍、大井、富士川の五月雨の眺望も上の空には看過しも得なりませぬ。なれど、更に其の胸臆に沁むは、富士の雪より、田子の波より、府中、高田、福井、廣島、熊本などの古城の月！　其の人世の無常き興廢の迹を映しまするが、不風雅と仰せの眼にも自然暗涙さし灑むまでに感えまする。」「ほゝう、古城の月？　何さま歌にも、月は世々の記念ともいふ。感慨の情も然ることぢやが、其の駿府福井高田などの月影が、何故わきて心に沁むな？」「國敗山河在！　堀櫓は依然なれど、舊主はおはしませぬ。月のみはたゞ昔しの影！」彼は言ひ罷して、其月中の滴露とも見る淚の球を、其の瞼毛に置きたりき。殿は其れをば御覽じつけざる如くにて、「其方は異な事をいふ。月のみの昔しの影ならば其等の城にも限るまい。當

松坂とて、初代が氏郷、次が一忠（服部）次が古田、斯ういふ予は四代の主ぢや。其の氏郷も一忠も織部（古田）も今は現存ぬ。其方は此處の月影にも、其の懐舊の涙とやらむを飜すかな？」「飜さぬにも限りませぬ。恐れながら殿樣が現今の御立場、好うも右し駿河殿、越前殿、越後殿、又た福島、加藤等が身上に似させらるれば……」「あ、這は什麼なこと、暫く！」と水野は制しぬ。村上も渡邊も、此と同時に遽がはしく眼を働かして、一方は殿の御氣色、一方は彼が口吻に意を注れり。

（五十四）

此時の殿は、正雪が詭怪の論に御耳を傾け玉へるか、又差して水野が制止を禁めむともし玉はざりき。水野は再び口を續けて、「民部には此の御座敷を何樣に心得らるゝ？　容易ならぬ言上、不祥の御事、何やらむ呪詛がましうも聞えて、忌々しう、初度の見參には甚だ其意を得申さぬ。」彼は苦々しく難じたりき。正雪は、然ればこそとの顏色、「はゝ、呪詛とまでの御懸念、なりや、も、某は何事も申さぬ。なれど元朝元三に祝ふ七百歲の祝言も口ばかりで、誰一人然樣の長命した者もおざらぬ。我れ們は殿に、千歲の坂と言祝ぎ申す杖よりも、轉ばぬ先の御杖と申すを差上げたが、結句は御身の爲、御家門繁昌の基と存じて……」と瞼に見するは冷かなる微笑、眼に覷ふは殿の御氣色。殿は苦もなく引取らせて、「さればぢや、民部、其方が申すは至極の道理ぢや。物忌ひは婦女子のする所爲。なれど又た主家の武運長久と祈るも家來たるの分、惡しうは聞くな。たゞ予は厭はぬぞ。其の仔細は？」物ともし玉はぬ御口風に、彼は飜りて先を打たれて、扨も〳〵とばかりに、底氣味惡う、口を緘默て瞻上げたりき。「これは甚麼とある？　民部とも覺えぬ。忠言は古へしより耳に逆ふ。諫言はもとより不祥の事、めでたいとは好う言はぬものぢや。只其の不祥を不祥として取棄つれば殘るは皆吉祥ぢや。予が行狀に忠長（駿河殿）一伯（越前忠直卿）正則（福島）忠廣（加藤）にも似たるやうの所あるかや？　有らば言うて呉れ。申して呉りやれ。」一面は正雪に仰せ、一面は水野村上渡邊等に惰と御目を配せ玉へば、彼等は其れと心附きてや、苦りし面を赧うしぬ、憎さも數の知れざる殿、怖ろしきも數の知れざる殿、慕はしさも數の知れざる殿！　其數の知れざる底を叩きて此殿の本來の意を吐き發させ申さむには、從前の蒐り口は不利かりしぞや。善く攻むる者は九天の上に動く！　九天は無形なり、無形に居して有形を制す、何と戰うてか勝たざらむ、とは我が居常にも言ふことなるを、忘れて危機を踏みける事の愚かさよ、と彼は其の鋒鋩を直地に更めぬ。「御行狀とは如何で申さう。私は只御立場の——と申上げましたる迄のこと。」「ふむ。其の立場とは？」「殿樣には、只今の御身上を、先づ何樣と御覽ぜられます？」「ン、賴宣は三家の一人、柳營の肉親……」正雪は、故意に此の問答の間を隔きて、御面を瞻つ、「忠長卿、忠輝卿、忠直卿は？」「言ふにも及ばぬ、將軍家御親族。」「其の、駿府、高田、福井の御沒收は？」「申す迄も無い、將軍家御思し食に協はせられぬからの事。」「何樣の義がおはしまして、其の、御思し食には協はせられませぬ？」「大逆無道、謀叛、驕慢との趣ぢや。」彼は突如、眉を顰めぬ。「其の、大逆無道とは緊束ませぬ御罪名、驕慢と仰せられまするも、是れも一事に附きましてはあらぬ御名。只其の御謀叛。右は確に其の御結構ござりましてか？」殿も些しく蹴飜ひ玉へり。「其れは、正確には存ぜぬも、老中の僉議、然樣申すぢや。」と仰せつゝ、一寸御思案ありて、「大學、茶を一つ。」正雪は其の御猶豫をも與へ申さず、驀直に鑽入り

ぬ。「恐れながら其の執政衆の御僉議――道理を盡されましたるものと御覽じまするか？」殿は、御茶を啜らせながらに、「兎にも角にも御眼鏡をもて、天下の成敗を料理する程のもの。粗忽の僉議いたすべき筈もない。」「然らば、殿様にも右の僉議に御同意とござりまする喃？」「應、天下太平の計ひとある程に、同意致した。」「天下太平の御計ひ……？」彼は怱く口裏に呟きつゝ、從前息込める脫兎の勢もやゝ脫て、悵然たりき。

（五十五）

彼は力無き唸聲を發むると與に、對手なき啷言を一座に詫れり。「嗟！　如何にも天下太平の御計畫。些少にても世に圭角たる御振舞ある方をば大逆とやらむ、謀叛とやらむ、驕慢とやらむ罪名附せられて、御身上御取潰し、何さま其れが天下太平の御計畫？　民部ゝ何様の申さう義もおざらぬ。但し唐土の口諺にも申す、飛鳥盡きて良弓隱れ、狡兎死して獵狗煮らる！　其の煮る、隱す方は自ら又た其道理のおはさうも、隱さるゝ、煮らるゝ狗や弓は、いかな無念？　其の心底斟み申せば、晴れたる月も陰りまする。」此の感慨の其機に投れるか、人々の面色は稍搖き初めぬ。殿は何とも御意無かりき、正雪は重ねて其の歎息を續けたり。「是れは殿様には恐れ。民部たゞ心中に存ずる所を各位方へまで申す。御取捨は存慮の隨意。倩先蹤を考へ申すに、源平藤橘、四姓の中に源氏ほど猜疑の深い姓はおざらぬ。源右府の蒲殿、判官殿、又た木曾殿御父子における。賴家と實朝、公曉。一條、平賀、安田が流。或は上下相剋し、父子兄弟叔姪相賊して一人として其終を全うした者もおざらぬ。其の血流を相繼でか、室町にては御先祖の尊氏、直義、義詮、直冬、基氏の御有様。東山殿と今出川殿。義植、義澄、義晴の御確執。誠に御一家御親族と申すは名のみにて其の嫉妬偏執。五に我有を奪はれじか、掠れじかと睚む狀態、只是れ餓狗の肉を爭ふにも似たる醜態！　それと一緒に申さむは憚りの義ではおざるも、御家にても清康様、廣忠様御代には、内膳殿（信定）藏人殿（信孝）御事あり。又た現には信康様（岡崎三郎殿）の御不幸、引續いて忠輝様、忠直様、忠長様の御變事。こりや各々には右を什麼と御覽ぜらるゝか？　御女子は視置き、殿様、御男子御兄弟十人のうち、萬千代松千代仙千代様御三方は御早世、殘らせての七人の中、御兄の岡崎様、高田様は、御身、又た御兄秀康様の御嫡にて、加之御二代様最愛の御姫君勝姫様御緣附かれた忠直様、すなはち殿様第一の御甥なり御姪婿なりに當らせらるゝ越前様は、同じく右の大逆の謀叛に陷ちさせて御滅亡。忠長様も御甥ご様。福島家の滅却は我等申すまでもあらぬ村上どのは其の故主の義。又た殿様御籠中様御實家方なる加藤家（熊本）の御取潰しも水野どの渡邊どのは熟う御存知の筈。斯様に、殿様、御籠中様、各位方にも遁れぬ御緣故の諸家方の滅亡御覽じて、各位には恁麼様の感念の發されたか？　其れともに、其の大逆、謀叛、驕慢といふ、漠然たる老中衆の御僉議に任しやれて、胸の覺悟、臍の分別も別段にお決きやらぬか？　但しは右に天下の太平お謳歌やるか？　嗟！　こりや、兎死すれば狐悲む、其類を失へばなりと申すもおりやるぞ。是れは其類如きにあらぬ當面での御肉親、御血を分けさせたる御兄弟。猛火は既に頭上にかゝるを未だ其の焰烟は御目に入らぬか？　九寸五分の居腹刀は三尺の眼先に迫れるを三寶に御意注かれぬか？　水野どのは又不祥――呪詛とも御言やるか知り申さぬが、某はたゞ右申す是れが轉ばぬ先の御杖！　先づ試みに此杖にて殿様御地位、各位方立場、叩いて御覽

ぜ、其響は昨日の雲田の鯨波、彈音にも反射申さうに？」一句は一句と逼り來りて、宛然快刀腸を抉るが如き辯論に、悚然として毛髪を立つるものあり、慄然として其唇を戰かすもあり、兵庫が面たりに見、親しう耳に聞けりといふ宿驛の雜說、江戶表の風評、當家御謀叛といふことの今更ら我が耳根に囁語き、叫喚き、罵詈る如き者あるやうにも感えて、酔るが如く、口を噤みて、只顧彼が面をのみ凝視たりき。

殿は？　と顧へば、これは又た案外なる御氣色なりき、何さま彼が舌頭には御耳を傾けさせたるがやう見ゆるも、さして御色も渝させず、御膝邊に飛び來る蠅を、折節は御團扇もてはたり！　正雪も剛膽者なりけり。殿が此の御容態を見るも猶ほ見ざる爲して、御前をば背向に、今や再び三人が方へ膝おし向けたり。

（五十六）

「大逆といふは果然甚麼か？　君を弑し、父母を賊し、神明を畏れず、佛陀を敬はず、國の法令を蔑如にする、是れを古へより五逆の罪として無道の惡といふ。忠輝忠直忠長の卿、加藤福島其餘の諸家、公沒となれるもの、御取潰しとなれる仁、果いて右等の五逆大惡を犯されし。御知りやらぬか彼の忠輝卿は元和元年の夏御陣の折り、駿州藤枝にて御旗本の士衆と物喧嘩し、其等が無禮を憤らせて其場に御成敗ありたると、五月六日の道明寺口の合戰に政宗衆に路次を障へられ、捗々しき御功名のおはさなんだが御勘當の意趣といふ。なれど熟う御聞あれ、彼の御方は大將軍家の御連枝、御官位は從四位上總介、江戶御旗本の士ともあれ申さば御家來同樣のもの、其の士共が無禮を咎めさせ、御手成敗ありたりとて甚麼の御曲事？結句は御壯年に似合しい御勇武のほどを御褒賞ありても然るべきぢやと我們は思ふ。又道明寺口の合戰といふも殿には大和口の總大將、旗本衆容體におはします。されば御手配も、一番は水野衆（勝成）二番は本多衆（忠政）三番は下總殿衆（松平忠明）四番は右の政宗衆、殿は五番にて最後におはした。凡そ軍陣の慣例、組々隊々の順序を正して軍目附、使番を置き、押前に用心せられてさへ兎角は拔駈忍押に亂雜とはなり勝てのもの、況て其の大本を締括らゝ總大將が自身の功名にのみ目を奧れられて、番手を守らず、先駈とおはさば甚麼とあらう？　誰が旗本の采配を見て進退いたさう？　但し是れは時と場合、一樣には申されぬも、此の御軍など、天下の大軍で裸城一つを攻らゝ際なんどは別して右の約束が肝要ぢや。恁れば殿に御脫落はない！　加之も此軍には、殿が進まうとなされたを樣々に故障申して御意の儘にさせ申さんだ輩もあり、旁々ぢやを、其等一應の御穿議もなく現に朝熊（伊勢）に御配流の御身、剩さへ大逆無道、御驕慢とは、此りやそも甚麼たる理不盡ぢや！　其の合戰に後れたが御遺氣なりや、此の御陣に追首一級お取りやれなんだ尾張殿は甚麼？　又た其の尾州と御一所におはした當殿は？！」突如として高めたる彼が一調子は、殿が御耳に何とか響きけむ、殿は其の蠅打の身を停めて屹と御眼を凝らさせき。

抑や此の御陣に、御心ならぬ後陣におはして、合戰の手に過はせざりしは一代の御恨事として、今に折々、事物に託ては、御無念の御意あるをば承はれり。其れをば知らでか、但しは故意にか、御座をも憚からぬ素浪人の放言、結句は御恥辱を表露すもの！　御内意の旨趣はあるも今は容赦せず、引立てむか？　但しは御成敗？　と三人の二人は御面を視て、一人は正雪を睨詰れば、殿は、看る〳〵御面を和柔げさせて、一言の御意だも無し。正雪はと視れば、此れも鼻をも蠢かさず。平然たる彼正雪は、猶

も其の抑揚自在なる舌を弄せり。「……なれど、殿様には御勘當どころかや、年々の御加增、御昇進、從二位の亞相にまでも成り昇らせて、御繁昌思し召すが隨意なるは、何故ぢや？同是御手配の御法善う守らせられて其節我意の御振舞なきからぢや。さらば柳營にも前後敍列の御法はある。其の御法はあるものゝ、御一個は御罰、御一人は御賞。其の賞罰の根本、何う處にあるやらむ皆暮れ分解らぬはこりや我們不肖の所以でない、執政衆の盲目ゆゑぢや。否、眞正は依怙ゆゑぢや。愛憎からまゐる贔屓の沙汰ぢや。贔屓の沙汰の可怖しき、愛憎の依頼まれぬは我們申す迄もない各位にも御存知のもの。恐れながら殿様には、其の以前は權現様御愛子、駿府御在城の其砌は御威勢旭日の昇るが如く、既に甲府——百萬石の御身代とまで御沙汰あらせたを、元和二の御他界以後は甚麼ならせた？江戸表の御待遇はすきと變らせて其後は久能御宮御普請をはじめ、五年の御所知替、總ては御無體の難題ばかり！すりや其の寵に婿び申したさもしい贔屓が手を飜す裏と出て、今は箸の轉んだことまで目扱ら立つる。早魃する——これも紀州殿御所爲、飢饉がある——それも大納言殿御處作！御身上御取潰し、御配流、御切腹！あらゆる惡事と御殃害とは恐れながら御身の周圍を圍繞き申すぞ。前申した、猛火。九寸五分。甚麼と各位が頭上、眼前にひろめき居ると……こりや我們憂定違へか？民部、虛妄は得申さぬ、有の儘ぢやは。」彼が辯論や、盡きたるを御覽じて、殿は徐々地に脣を綻させぬ、「心底は先づ聽き置くぞ。轉ばぬ先の杖、屠腹刀、品々の進物過分におもふが、日下は不用ぢや。且づ返却す。火事も、地震も、遠流も、配所も、柳營沙汰とあれば予は辭はぬ。天下の靜謐は予の所望ぢや。喃、民部！」

（五十七）

繼穗もなき殿の御說は、疾風土を捲くの猛勢もて逼り來れる彼が辯論に大頓挫を與へぬ。彼は重來の勇あるも、其の再襲の手段を得ざりき。御座敷に虛しく平伏しつれども、盡際なき睨み競に、たゞ其場の白けに白け亙るのみなるに困じて、御暇を乞ひ奉つりぬ。悸くて少時して、正雪が帙々たる下城の姿を見たり。

其夜、更闌け、人定りて後、兵庫が閉居せる龍泉寺の奥の間に、僧俗二人の耦語ふあり。

俗なる方は低聲喃々、切に說く所あるが如くなれども、僧なる方は、頭を垂れ、息を斂めて、其の思慮を心中に描くものゝ如し。

彼等は什麼話ぞ？言ふにも及ばず、俗といふは正雪にして、僧形なるは新入道の兵庫なり。兵庫の眼は頻りに灼耀きて今や一大事の羽目に瀕める如くと見えたり。「喃、兵庫、到底も彼の殿は我們が大事の前途を妨害らるゝ茨垣ぢや。大道を履まむとする其の障碍たる茨垣なりや、根を斷て葉を枯らす、こりや是非とても無いではないか？！」「是非ないと言はるゝは、——扨は其の、彼の殿をか？！」兵庫の聲は太く戰慄へぬ。「我們は、眞實、此義は是非ない事ぢやと念ふ。原來暗殺、毒害なんどの武士としての面目にあらぬ事は我們も知る。なれどこりや是非も無い。今日の御座敷のやう、到底が此方力なんどに動搖さるべき人で無い。人で無ければ目上の癌、又た彼れに越す人は無い。たゞ是非も無い。お決行れさ！」と正雪は扇もて空中を斫る容態をしぬ。其呼吸は極めて暴かりき。愕くべきは此の結構なり。彼は、實に、此の腹心の黨與を指嗾して、其れが大恩の主君の御命を短縮させむとしつるなり。

正雪は實に念ひぬ、世に畏憚るべきは今日見參の彼の殿なり。其の心中に思し食立つ事の有りや無しやは知らざるも、兎に角我が大事の爲

に邪魔たるべき者は彼の殿なり。假令に、殿を、我が一胸襟の人として、其の心腹を委ねむか、彼の器量、彼の氣力にては我は只犬骨折るのみの事にして、獲物はいつか鷹に奪らるゝ癡呆なる日に遇ふべきは方今より推知たり。加之其の大事成就の日に、我はなほ功狗としての一臠の肉の分配に與かるべき歟、否、猶言はゞ、我が此の首領すら滿足に保たるべきか？　越王の大夫鍾、源右府の判官、先蹤は和漢に歴々たるをや。なれど其は猶事遠し、若し夫れ然なくて、實に今日の御沙汰の如く、只管幕府への忠勤、他事なしとあらば其れぞ殃害は目前なり。那程の事を申て彼の人々の耳朶に入れつる、搦縛られての江戸表差下しは火を睹るよりも明瞭ならむ、斯う言ふ此際も、猶我が旅館の案ぜらるる心地するぞや！　兎角は正雪が此眼に觸るる程の人、其心の智愚善惡、胸裏に企圖の有りや無しや、宛然目に覩て指すが如く、自身秦鏡の明をもて誇りしものが彼の殿にのみ皆翳れにけり。面を接すること半日、語を交ふること數千言、其れにても竟に甚麼の看破せるところ有らざりき。兎角は斯る人、活け置き申さむは禍害の基？　と有りて又た、これを僵すに我と手を下さむは策の得ざるもの！　若かず、耀を敵に藉り、毒を制せむには!!　と彼は可怖しくも其肚を決めつるなり。

彼が爲の毒となり、耀となれる兵庫が分別は今甚麼とかある？　彼が殿を恨める胸、其友を憎める眼にも有繋に此の大惡の決行には舌を震ひき。本心の善は猶豫なく彼に首掉を掉らせぬ。「そりや叶らぬ。無道ぢや。假初にも我が主と名のつく仁……！」「主?!」と正雪は氣色を變へたり、「……御身は王室の忠臣、官軍の大將、賊徒追討をもて任とする仁では無き歟。既や心には江戸幕府、それに絆がる一家一門、紀州とも尾張とも水戸ともあれ、叛賊の徒黨、古への尊氏が族類ともお見やる人では無き歟。今の『主』とは誰を指す！」「言はるれば其樣なもの……。なれど大恩の殿樣……我等が手して。」「討たれぬとか？　節刀を賜はる官軍の大將、賊徒の首が斬られぬか？　斬られねばお主も賊ぢやが！」「それは無體ぢや。戰陣の上なりや兎も角も……方今の時節……」彼は愈首垂れて、氣息死せむとするが如し。

（五十八）

死せむとする氣息、燃えむとする怒眼、此の兩間に介まれたる一穗の孤燈は兩者の姿勢を壁上に描きて、首山に對する案山の如き墨影を映せり。

案山と首垂れたる兵庫は、呼吸の迫れる歎聲を微に漏らして、「貴老、左思右考が無體ぢやよ。近世阪崎出羽が家老が其主を討ツて出いた時、世人は惡慶と言うたか。當人は勿論、主を討てと內意した執政衆をも人で非いやうに罵うたで無いか。況て我們の、堂々たる王師の御魁をもせうずる士が……」「能らぬか？　不忠とか！」引取りたる正雪の聲色は風雨の如し、「……えい、天に二日無し、國に二王無し、普天の下、率土の濱、論ふも陳いが、不忠とは、一天萬乘の君に背き奉つる——其れが不忠！　其の君を窘苦むる幕府の一類を誅伐するに不義も不忠も甚麼が有らうか。王事鹽いこと無し。昔しの義朝は、現在の父をすら斬つるは！」「呀！　其父を斬つるが忠臣か？」「はゝゝゝゝ。人の言ふ、大義親を滅するぢや。甚麼の怪しいこと。阪崎が家來の主を討つと、御身が殿を亡うするとは道理が違ふ。」「なんの違はう、彼も我も家子ぢや。」「やさ、其の家子、——主が扶持の恩といふ、迷の基ぢや。二千年來撫御の御恩と、五年か十年扶持の恩と……扶持の恩とて、恩では無いか？」正雪は冷笑せり。「其恩、それ程に念ふほどなりや先づ其身

の根本を探尋ねい。御身を現世に産み出いて下されたは父母の恩。其の両親の一人といふ父ごは誰人ぢや？　武命にも應ぜず、幕府にも憑らず、現に朝廷の御恩の下に立つ、三位の卿——其方ではおはさぬか。彼の卿は王室の忠臣、藤氏の流裔、其血を現在賦られた御身が賊臣頼宣に最屓を持つ。こりや君への御不忠のみならず、父ごに對しても大不孝！　不孝の子、不忠の臣、——墜つるか墜ちぬかは今の間ぢやぞや。日來の意地は恁麼爲された？」語句を徐かに、呼吸を弛べず、辯論流水の如くなる間に、斷續鋭く我が眉間を射る亘眼の光は、腦蓋も爲に鑽貫されやせむずると、あはれ兵庫は堪らぬ顔を壓へたりき。可憫、可憫、彼れ兵庫は、前念に思考ひ、後慮に攻案ふるも、彼の殿をばいかで我手して——忠といひ義と言むも、失ひ奉つることのなるべきかと思ひ惱みぬ。惶こき御上は申すも畏し。たゞ父は彼が言ふごとく朝廷の公卿たり。其の產みの恩は深し、子としての孝は忘失るにあらず、なれども其父が果然爾る思し食立あるべきか、我は生れて廿五年、未だ一回の御顔をすら見ず、又彼とても甲斐の卿、乙某の君に面りの內命蒙りたりと言ふにも非ず。果然朝廷の賊臣として彼の殿を討ち奉つるが忠か？！　其れには引反へ、我が殿が我れへの御慈愛、想へば海山も啻ならぬぞや。產みたるは父なれども、我を人に爲されしは誰か？！　此程の謀叛と言へるも、我が當の敵と見るは大學のみ。大學は討つべし、我を間者の細作のと讒ひたる奴！　彼の首見むは兵庫命に替てもと望むなれども、其を聽受せしのみの殿——殿をばいかで。——其讒を信受れ玉ひつる御恨こそ確とは申さめ、御命までとは、爭奈！　加之で、其の讒誣といへるさへ、我の耳に緊と聽けるにも非ざるものを。天にも地にも我を憑めと言ふ彼が言とて、恁る大事を、什麼むさとは決行せむ。然る事の又た能るべき義理か！　彼は實に、其の千心萬考の思案に昏れて、彼の疚しき額をのみ屢へたり、「如何も能らぬかな？　能らぬとあれば是非も無いぢやが、後悔は又眼前ぢや。豫ても解ふ血祭、昨日其の戰端も啓いつるが……」兵庫は聞くより、俄に其色を新たにせり。「や、其事、それ先づ聞かう。昨日の朝の兵庫が影武者はあれや誰人ぢや？」「はゝ、其れは其の殺る者ぢや。是れは世にも祕藏のこと。只正雪が爲る事は全般彼れ程の手際、天下の事謀るとして行ふとして一個も隨意ならぬといふは無い。お主も稠額憑れて、什麼ぢやな、今の大事、お決行る氣は無いか？」兵庫は復も口を噤みき。時に鐘聲五更を告げて、金星東の天に白し。

（五十九）

暴風雨といふまでにはあらざるも、有警八朔の昨日たるを見する雨の氣色は、午過るほどより尚に知られぬ。一時の南風は反りて北風となれる、寒溫の激變にや擊れたまへる、大納言殿は今朝方より風邪の御心地とてうち伏し玉ふ。勿論然ばかりの事にはおはさぬも、御旅中と申し、別しては內外の事變多き折柄なり、吳々も御大切とて、醫師は御療治に油斷なし。今日は或る向の事、然る筋々へも申し附て或る樣にせむなどの御概略あり、强ても御表へ御出と仰するを、水野を初め、重職の者ども禁めまゐらせて御寢所にての物頭以上會合とは觸られぬ。折節、江戸御館よりの早打の飛脚參着す、持て參れるは詰家老水野對馬より御直宛の書啓なりき。

如何なる大事をか認めたりけむ、御座敷の密議は此時より愈凝りて、空なる雨雲にも似たりき、俄地との風をも通さず、御紙襖は礎と閉切られて、颯と降り來る雨脚の音さへ此所には微かなり。

殿が御允許を得て、彼の狀は人々が扇面の上に繰られぬ。一打書の箇條十四五ある中に、彼の駿府城代酒井山城が一件の沙汰も載せたりと覺えて、村上彦右衞門は密に呻きぬ。「城代が惡うありては？」渡邊大學も眉を顰せたり。「兵庫が身上も甚麼と有らうな！」殿も微に御覧太息を漏らさせて、「眞個に君臣の大不幸、何とか勘考せでなるまいか！」

御太息もげに可然事なり、彼れ城代酒井城州は、江戸表の御下知、强訴の張本安居村の三四郎を尋常の死刑に處すべしとあるを私に計ひて、安倍河原にて磔刑に行ひたること、無道至極、上命を輕如すとの叱議嚴しくして、其の城地備後國福山三萬石を沒せられ、本人は切腹とも、流罪とも申し沙汰す、其れに連坐の町奉行、目附、自餘の役人衆、山城守御咎と同時に、大概は改易、家名斷絶たるべき歟といふにあり、されば此件とは遁れぬ條理の兵庫が身上は、强訴一味との落着にもなるべき歟、然らば其の御處刑を切腹以上、斬罪以下のもの、格別の御憐愍の沙汰加へらるゝも、遠流？重追放とまでには如何か。姑く其の一命助け置かるゝものと見るも、斯る罪人を御家の重職より出さるゝこと、公儀への恐入、諸家への御外聞、猶言はゞ御官位の汚濟ともなるべきものたり。況てや其他の條々にも容易ならぬ取沙汰、實に江戸市中に傳へられて、麹町、赤坂、兩御館の上下、安き心も無しとあるをや、駭り目に祟り目、泣面を猶ほ虻の螫すてふ俚諺にも似たる今日の羽目、かゝる事より又た御國替、御減知なんどの埒あらば甚麼と物の方覺せむ。寧そは目下此所にて、公儀御沙汰に先ちて、兵庫に腹切らせ、扨て田邊なる帶刀殿（安藤）して江戸表の御内端を調繕はすといふに爲むか。彼とても其根元を鞫せば、紀州を顚むとの一言にて彼の强訴人の腰押も爲つるもの、其の心術を想へば可憫も、兎に角に身より出せし錆！其錆が殿樣御身を蝕ふとありては背に腹は換へ難きぞや。是れは各位が肝要なる分別所、と水野さへ言へば、衆皆も額を惱して御座敷は只靄りに靄れり。

兎角はなほ明日も明後日もあることなり、御不例の折柄の長談、御氣色も如何とあるに人々も漸くに御前を退りぬ。後は寂しき秋の暮、颱然たる軒の松風横殴く雨をさそひて、御座所もいとゞ昏うなれば、御燈火もまゐりて、夜とはなれり。殿も談合の御疲勞にや昏々と目睡みたまふ、大學は御次に伺候して、爲す事もなく夜を護れり。初夜も過ぎぬ、殿は猶熟睡したまふか、御鼾息の聲幽かに聞こゆ。

軒の點滴疎らなる拍子を取りて、後夜に近き遠寺の鍾、沖遠き海鳴と與に朧ろなる響を送りつ、甚麼とも得知れざる心地のうちに、吾にもあらで大學は睡り轉げぬ、仰れむとして不圖其眼を睜く時。「曲者ッ!!」御聲は確に殿なり。阿呀と愕きて眼を瞶れば、此ぞ其の曲者なるべし、黑打裝せる一人の漢子は、凶行の爲損じたるに惑ひにけむ、百疊敷の御緣を疾風の如くに沿ひて逃ると見しが、天へや騰れる、地にや潛みし、其まゝ搔暮れて影も留めず。

（六十）

見失ひたる曲者を猶追懸けむと、大學は押取刀にはら〳〵と追ひ出づる、其の咄嗟「大學、待て。追ふな。可い。」

何さま殿の御身上も、と大學又た取て返せば、殿は坦然として御衾の上にあり。「靜かにせい。」「はゝ。御怪我もう」「何も無い。」

これより先き、又降り出せし雨の脚、篠つく如く、軒の銅樋に溢れて落つる雷の音は瀑をなして、物の聲も耳に聞えず。漸くにして此の騷動を聞き出したる近習、御小姓、御廣間の士、二人三人群をなして馳せ參る。參れる士

は、殿の御氣色の事も無くておはしますに、安堵の胸をば稍撫でつれども、猶ほ大學が血眼なるに心もいとど心ならで、四邊に眼を配りつ畏まる。

「騒ぐな。只今雨戸の吹放たれつるやうの響音したで大學を召したのぢや。物も無い。大學、其方は其邊一遍巡視て……な、やがて言上せ。表方へは知らせな。衆皆も意得い。」

夢幻の如く、謎語の如き御沙汰なるも、事有りし際にはいつも箇樣の御意あるが此殿の御恆なり、又其の御意に隨ふ時は、何時も事好く納りて、後の過失無しといふも從前の例なれば、人々は只靜まりて御前に控へぬ。風さへも時に加はりたればや、雨戸にあたる雨の音、煎豆の鍋に爆ぬるが如し。

紙燭して只一個出でたる大學、少時て濡鼠の如くとなりて復歸りぬ。「大儀。……ぢや歟？」と御首を傾け玉へば、「……でござりまする。」と彼は其意を見せ奉つりき。「むゝ。諸士次間へ。」

和尚と沙彌が問答めきたる應對の裏に、諸士は皆御次へと退出れば、御寢所の中には、膝を交へたる君臣のみ。「果然て、彼の抜穴か？」「御推量通り彼の抜穴……現に足痕も印いてござりまする。就ては當御城の案内、委細うも熟知たる奴、何とも心の濟ませぬ。御許可とござりませうなりや其の足痕を蹤跡へ、人知れず討果すか、搦め捕らうとも存じまするが……」彼の血色はいと急きて、可矣とも何せば直地此の御座よりとも言ふ氣色。殿は纔りて御思案の色。「むゝ、いや……明日に爲い。」「明日とはござりまするも、今晩の大雨。直下蹤を狙けませいでは其の足痕も？　出口は例のあの森にござりまする、落葉の泥痕を洗はれまいては……」

「いや、……然程にもあるまいよ。曲者をば良看認めた。」「え！　御認識にござりまするか。而て惣摩樣の奴？」「むゝ。先づ、僧形の奴。」「や。僧形？　其の年齡は？」「されば。……廿五六か晦。」「什麼なる面體？」「爾樣ぢや。色白く、眼涼しく、春は尋常より些し偉大か。」大學は、御面を直地と注視て、仰せの容貌を口裏に反復すこと一遍。俄に心許なき眉を顰めて、「御沙汰のやうでは、……些と骨た者も有る樣にござりまするが？」殿も徐かに頷かせて、「其れぢやでの、明日でも可いと……。」大學は覺えず叫べり。「扨は兵庫……」殿は、叱！　と、傍邊を屹と疾視せて、「狼狽者！　誰が彼者と申した、大事の義を！　予は不德ぢやが、未だ家來に寢首狙はるゝほどの呆漢で無い。周章るな！」何時になき御叱斥に、大學はッと氣著きて、邊に其口をば噤みたれども、其の心中の驚愕と忿怒と疑惑との爲めに目も昏みて、身も戰慄と顫へたりき。「先づ穩便にせい。箇樣の時は遽つるな。予に分別がある。」其の御分別とは果して甚麼？　御鞠問か、御手討か、切腹か、と他人の上とも思はれざる大學は一向に呼吸を呑みたり。

（六十一）

彼の曲者、果然兵庫なるべき歟、將た否らざるべき歟は、當面たる第一の疑問なり。良確かには御覽じつれども、猶ほ夜目遠目なる、加之咄嗟の、急遽の際なり。擧止、恰好、面體まで、姑且く其者とは假定るも、扨て其の兵庫が、何故に今、惣くまでの大惡事を爲出でむとは企圖たる？　或は、此日の、彼に屠腹せむとの衆議を漏聞て、恐怖まの餘りに發狂やしつる？　なれども彼の談合の席には、もとより外樣等の士を交へず、水野村上を初めとして皆是れ譜代、重職の者、廿一枚の誓紙に權現（熊野）の荒靈を驚かして、牛王の寶印に肉身の血を濺げる者！其主を彼に見換へて彼の密議を漏泄すなんどの不覺者あるべしとも覺えぬに。猶言はゞ、怪異

むべきは、彼が面體を予に認せつるなり、其の打裝はいかめしくて、隙間なく鎧ひぬとは見えたるに、面をば包まず、法師頭を其儘に露はしたることの不思議さよ。賴宣の一太刀は彼ならば記憶あらむ、又其の醒敏きも知るところなり、暗刺るゝとも聲をば聽くべきを、傍邊に宿直も無きかのやうに、日來の面にて來つること、然りとては意外ぞ。冑たる者は多くあり、賴宣の身に寢せむと企つる奴も寡からず。聞く樣にては、久居の事變も彼が名を騙り、面を似せたる曲者の所爲ぞと言ふ。然も其の曲者は、彦右衞門手して搜索さすれども何方に影を潛めしやらむ、踪跡も知れず。或は其奴か？　猶ほ想へば、不審なるは民部めぞ。彼の折にも既に然うとは思へるが、彼の日に彼の場所に出遇たるさへ不思議なるに、甚麼の要にか其の合戰に仲裁して、危殆き生命を的に懸けつる？　紅伊國と安濃津との和議を我手して計ひたりと衒はむが意衷とも思へるが、對面の彼が口頭にては、何樣にもしたゝかなる奴、心中の彼が計畫はや其臉にも見えたるぞや。なれど、又彼が部兵とすれば、彼とて得も此の祕藏の隧路をば偵知まじきを。爾すれば兵庫か？　若し夫れ兵庫としたらむには、其れぞ賴宣が運命の窮極。飼狗に手を咬まれむとするさへ有るに、又其の狂狗の荷擔人して祕密の談合を漏らす等の獅子心中の蟲としも言ふべき奴あらば、我が和歌山五十五萬石を甚麼として踏占ふべき。なれど又、世間の雜說、江戶市中の取沙汰、直披の內書もて對馬よりあれ程に言ひ越しつる事、予が目指しつる民部めが黨のみの所爲とは單には得言じ。或は家中に謀叛の奴あるか？　流言衆を惑はす者あるか？　すなはち兵庫か？　彼奴が予に旗上をと再應までも勸めつる、何者にか誑惑されつらむと思へるが然はあらで、或は自己が爲にする處ある口實をも作爲らむとか？　然りともあれ、彼は爾程の膽略は無き奴、一途の奴、愛憎の深き奴。但しは其の一途と愛憎とに魅入られて、有らぬ意志も著けられし歟、木偶にやなれる歟。而して其の木偶を使役むとする傀儡師は誰人？　或は彼の剛膽漢の、民部彼奴には非ざる歟？　民部も駿河、三四郎とやらむも駿河、彼の全般を爲出來したるも駿河。三四郎——民部——兵庫　恐らくは予が推量通り歟。此の推量外れなば公私の幸なるも、的中なば、偖、什麼?!

殿は、彼の大學をば、爾く制し玉へるも、心中の御苦惱は實に恁の如きものありしなり。其の分別と仰せしも、眞とは是非の御配慮にも迷はさせ玉ひしなり。域外の警報、今や胸裏に警鐘を撞ける端にあたりて、禍また蕭牆より發らむとす、神に非ず、佛にも非ざる如是凡夫の賴宣卿、然ばかりの御智慧の日にも一寸先を辿り難れて、五里霧中の闇に御杖の立て所を幾ど失ひ玉へりき。

御沙汰をと待てる大學も、餘りに深う思ひ入り玉へる御氣色に憚かりて、御前を退りぬ。其れをさへ殿は知らでおはしき。癪て心づき見玉へば、御傍に人も無し。孤燈は炯々たり、蘭麝は馥郁たり、其等が風に瞬き、雨に濕りて、夜更の寂寞さを告ぐるのみ。「民部めを召さうか喃？　兵庫めを鞫さうか喃？」聞きつけたる大學は御次より、「召されましてか？」「いや、はは、今のは予が獨語ぢやよ。」御苦笑の面を瞻上げて、御前に畏まれる大學は手持もなし。

（六十二）

車軸を流すといふ可怖しき暴雨の氣色に慴伏れてか、鷄さへも鳴かぬ此曉の闇を撈ぐり撈ぐり、甍を竊みて、彼の正雪が旅館、淸光寺の客殿の雨戶をほと〳〵と叩く者あり。內にては其れと聞つけたりけむ、用心口といふ樞戶を密と開きて、「三郎か？」吁、と應へて外な

る者は、軀に被ひたる筵薦を抛棄て、會釋もせで、座敷に入る。入るが否や、内なる人聲は闇底に俄頃に躁ぎて、龕燈といふ提灯の火、一時に潑と明うなりしが、其火も撲地と倏忽滅えて、今見たる人の面も再び舊の黒漫々裏に沒せられぬ。爾く、此の明暗一剎那の瞬間なれども、這裏に瞥見られたる人々の面は、確に七八個、十個もやあるらむ、其の床間を背後にして正面に座を占たるは正雪、右なるは金井、鵜野、左なるは松田、岡村、其中にて今來れる三郎といふ壯俊は、僧形にして衣服は黒色の忍打裝、其の面體の牧野兵庫と瓜二つとは未可のこと、其者を其儘に見るやうなるは——扨は彼の曲者か？

怎く奇怪なる大勢を籠めたる座敷は、又奇怪なる沈默の裏に閉鎖されて、織塵一片だも搖かぬ氣勢、闃然たる戸外には、風雨の愈暴れに暴るゝのみ。但見る處に、低めたる壯重しき聲は座上に起りぬ、是れ疑ひもなき正雪なり。「熊谷、首尾は？」扨は此の三郎とは、正雪が股肱の一人、美男の譽世に高き熊谷三郎兵衞其者か？「先づ……」「太刀は撃けたか？」彼は遽かに舌顫ひせる氣色なり。「何として、太刀なんど？」此方は其言を首肯くごとし。「む、然もあらう。彼の殿には實、我ら共ですら太刀打は覺束ない。況して其方が伎倆、慾ひな所爲して爲損ぜうより無事に歸來たは手柄ぢや。が、面は見せたか？」「如何にも。面は屹と見合せて、曲者ツ？　との詞を聞いて……。」「逃げ戻ツたか。」と言ふ聲は、鵜野に似たり。其主は更に冷笑の氣を見せて、「……什麼物の恐怖しからうと言はゞ宿鳥を鏑すでは無いか。忍び寄て只一撃！　自家ならば羽搏きもさせ申さぬを。お主、忍術に未だ鈍いな。」「えゝ。」と熊谷は目を瞬れる容、「自個とても其の一撃と思はいでかや。大事の手柄、殿の御首をと日指いたも、御威風は扨て可怖しいもの、自然と身は竦む、脚は震へる、其うちに音でも立てたか、疊廊の三間といふ所で不圖御眼覺されて、枕刀を執るより早く、曲者ツ!!　其の御聲の恐ろしさ、雷とも石火矢とも、又其の御眼は、電光とも光怪とも、既に腰の拔けうとしたを踏ん張て、一散に馳せ戻ツて來た。今想うても此胸の跳悸るほどなを、お主が陰辨慶の亘燵水練、叶らば手柄ぢや、遣てお見やれ。先生すらも彼樣仰せらるゝ程のものを。」と其胸を拍つなるべし、響音は一打せり。金井らしき聲は其を慰めて、「三郎衞の言はるゝ悉皆道理ぢや。其の古へ入鹿の大臣誅伐の時、討手の令旨蒙むられた朝廷を守護の勇士ですらも、一睨みの威に懾伏れて覺えず身體の縮んだといふ、當時は加之も大勢、只今は唯の一人、彼方は官人、此方は地下、況て入鹿と彼の殿との威風と武勇は日を同じうして語るべうもあらぬ天地の相違ぢや。三郎衞が今夜の出來は先生も御稱美の最上のもの。但し先生の只今仰せの、殿との太刀打心許ない？　とかあツたるは、ありや御謙下ぢや。憚りながら紀伊國殿とて先生の御太刀先に御向やツたりや、は其れは、長老が前の沙彌同然ぢや。御一拳にも足るまい。それは牛兵衞老が保證申す。扨て右等の枝葉は擱きて、此より以後の御分別は？」彼が其所に問ふなる如き其聲の斷るゝと與に、一座は再び寂として呼吸だに無し、良有りて、正雪が聲、其聲は考慮に深く沈めり。「臨機……たゞ臨機ぢやな?!　但し彼の殿が、正雪を召さるゝか、兵庫を召さるゝか、いづれが先ぢやか？　倘し兵庫が先ならば直地發途て。某は神宮領、半兵衞は安濃津領、二方に別れて紀州の息のかゝらぬ地へ疾う退かう、又某が先ならば各位は緩く遊興べ、心配は無い。たゞ其の見星は懈たるな。油斷もあるまいが、大敵ぢやぞ。」

（六十三）

夜も明くれば雨風も寢みぬ、うち晴れたる日は高く昇りて巳刻も過ぎ午刻には近づけども、城内よりは、民部召すとも、正雪まゐれとも言ひ來ずと。兵庫はと搜索すれば、これも事無くて寓に在りといふ。鵜野松田らは、それとは無しに師が吩咐なる出立の用意して、一左右次第と手藥煉をば引きたるも、餘りに物の穩便なるに拍子拔けして、此日は此寺の所化寺男どもが、昨日の暴風雨に倒れたる塀垣を起し、芋豆を踏むなんどの手傳ひしつ、扨て暮しぬ。

此際、獨り肝膽を碎けるは正雪なりき。油斷のならぬ敵の軍配、抑甚麼とかあらむ、何かは措きて今日は必らず兵庫方への沙汰無くてはと想へるに、風の吹けるも雨の降れるも慮知らぬ顏なるが心憎しや。城中の模樣は如何？從來ならば彼の隧道より忍び行きて偵察はむも容易きなれど、今ははや其事も危殆し。兵庫に會ひて物の樣を問はむかなれども、亦た彼が未だ死地に陷らざるに先ちて右左を言はむは、智慧無き兒童に智慧を附くるといふ俚諺にも似て、或は大事を矢錯つの根本たるべし、臨機も其の機先を發見さでは神妙の算も得難たきに、我たゞ彼が爲す隨意を恁の如くにして死視をらば、或は爲に一着を先んぜられむか？要するに、昨夜の手段たる、九華の樞に鍼するものなり、死活の決を此の一鍼もて斷ずるものなり、兵庫にして斃れずんば隨便殿を遣さむものなり。兵庫の我言を肯かざるも憎くけれども、然りとては又殿が、あれ程に知れ切たる底意を祕匿して、天下の御爲の、柳營の思し食すが儘のなんど、表邊の、看透ける、贋忠義の垣を築き、可惜我が口に風を引かされしこそ面憎くけれ。可矣々々何程も正雪に肝をお煎らせあれ、其代には、今、脫け出づるほどの目に物を見せ申さむ。御待ちやれ、殿！

思案に彼は此夜を寢ねざりき。然りともあれ明日は、といふ其の二日目も亦た沙汰の無し。此日、たゞ耳立てる風說といふは、殿の御氣色今に捗々しうましまさず、これに依て今回の御狩は御延引、當冬か、來春、重ねて——といふなりける。げにも然あるべし、鹿狩の延引とは道理のこと、但し箇樣の紛際こそ目下の我們には可怖しきもの、人脚の如何に動くか、動かぬか、又其が動かば西か、東か、疾う視て來よ。とて出だし遣りたる鵜野松田等がまだ歸りも來ぬに、旅館の門前鞍馬にはかに躁がしくて、城内よりの御使は來れり。

使者は彼の波邊大學なり。金井半兵衞先づ出でゝ其旨を問へば、大納言殿御所勞によりて明日にもか和歌山へ御歸駕あるべし、就ては今宵御名殘の御茶あるべきなり、民部どのにも其の一客として請待との御沙汰なれば異議なき御請は某にも望むところ、此旨御取次といふにあり。先づは忝けなき御意、折ふし民部所勞には候へども御名殘とござ候はむには力めても祇候ふべし、但し今は發熱の氣味にて休息候ふ、折返して御禮の使者まゐらせむ時、全癒は貴方まで御意得申さむとは、半兵衞が卽座の返答なり。此の不思議なる取次の口狀を、不思議ともせぬ不思議の使者は、さらば後刻との詞を殘して歸り行きぬ。使者の役目に外れたる其の不思議の擧動は、自ら今宵の不思議を意味せるには非ざる歟、と不思議を怖れたる不思議の評定は、正雪が居間に區々なりき。斯る處へ鵜野、松田は歸來りぬ、其の密告に據れば、先隊の駄馬は何さま當地より西方へ、紀州街道を大石、弼見とさして押す氣なり、又白子よりも先發の人數の引返すか、參宮の街道を當所へ來る氣勢あり。其等馬次の用意にか、城下の入口、又た中の町の驛役場の前後には人夫數多あり、役人らしきものも見ゆといふ。其の人夫ら

しきが果然人夫か？　役人らしきが馬次を扱ふものか？　何さま是れも或は其の不思議の手配といふものゝ一つには有らぬ歟と、思ひ難ねたる眉を正雪も顰せぬ。なれど、其の不思議といふは！　と彼は直地に想ひ飜せり。單是れ局面の變れるなり、局面の變るといふも、只急遽に御發駕といふのみなり、人數の來る、人夫の躁ぐ、もとより有りぬべき程のもの、此を不思議とは抑も甚麼をか言ふ？　況んやあの使者、若輩の使者、役目の粗忽何か有らむ、想ふに今夜の御茶といふ、或は是れ前に判ぜる、殿の思し召返させて、正雪が胸臆を再び聞し食さむとの吉祥の會ならざる歟、されば故らに夜陰といふを撰ばれたる歟、其れも知れぬを臆せるが如きは我ながら女々し。往哉、往哉、彼の驪龍頷下の珠、或は今宵の天日の裏よりして出でなむを！「半兵衛、大儀ぢやが民部今宵參上との旨、大學許まで通じて呉りやれ。」

金井が出で去りたる後、多時して、豫て龍泉寺下に狙け置きたる岡村は遽たゞしう來れり、「先生、今夜兵庫も御召になりまいたぞ！」

（六十四）

根に有つ御謀叛を甚麼が所以にか我には祕し隱しにし玉ふ御心は恨めしきも、然りとて正雪が唆ふ如くに、我は官軍の大將、殿は賊師の一門、漢賊の兩立せざる其刃を御胸に刺して、御命を短縮むなどゝは兵庫が懸けても想はざる所なり。其の肚裏に竄入りて、潛く其の胸臆を搜索れば、彼は實に如是く思念るなり。抑殿が此の御謀叛たる、頭初より其れが御思し食の在る所には非ずして、たゞ彼の狹量の、嫉妬の、猜疑に深き、我慢に募れる、驗府の城代酒井が同臭味と看做すべき、江戸老中が激成に因由るものなり。往古より謀叛といひ、反逆といふ、天慶の將門純友、平治の信頼義朝、近き世の三好松永明智が黨にいたるまで、皆是れ利の爲に非ざれば、慾の爲にす、祖我が殿は否らず、我が殿は仁義の君なり。忠誠を旨として、苟も恥辱に遠ざからむことを念とし玉ふ。只其の事の爰に及べるは、眞個御據ころなき所由にして、言はゞ我が頭に湧く蜂を拂はむとし玉ふものなり。寇の打蒐くる刃を奪ひて其の讐を斃さむとし玉ふものなり。かゝれば我が殿に御罪は無し。罪は全然其の蜂たり寇たる江戸老中にあり。其の老中が、憎き耳、無情き日に、凶器を見せ、警音を聞かせむは、同じ憂目に遇ふ我が一代の所望、君辱められれば臣死する紀州武士が意地。百萬石の御遵約、和歌山の御移封、粮米の徴發、諸家諸司への内旨、我が疚からぬ肚を穿鑿て、殿の御胸に釘を擊ちたる彼等への返報！　其の返報を朝命のあるものに混淆して、王師を關東にさし下す……其れは又た或る權謀の一つとしては論ふべきも、正雪が言ふ如き玉石共に燬く、殿が御上をも其の賊臣の一個といふに至りては否なり。父は兎もあれ、我は紀伊國の者、紀伊國に成長りて、紀伊國の殿に仕へ、其の御恩に懲りて、其祿を食めり。されば官軍の一將として日月の御旗の前に立たむよりも、願くは紀伊國の一騎として、皆白の旗の下に青の緒を締めむ。否、倘し彼が言ふ如くに、自然は官軍、我が紀州に下向との運にも遭はゞ、我は寧ろ賊醜の一人として殿と一所に此首を獄門の木にも梟けられむ、生死は只君命の一つ。進退は只仰せの儘！　たゞ翼望ふところは、殿の思し食立を層に公儀のものとして、正雪が申し勸むる旨趣に就き、古への新田が如くにして、更に御本意あらむ事なり。彼は楠の裔とは稱へど、其の實否を我は知らず、此は義貞の流として世に紛れもおはさぬをや。縱し、其の有無は姑く擱くも、彼も如法き剛健者なり、彼と殿と一緒にならば、建武の再興、覩るところ難うもあらぬをや。

其れにつけても憎きは大學なり、邪魔なるは素奴なり、殿の御前途をも或は過錯せ申すべきは彼奴なり。彼奴、他を安濃津の細作といふ。自己が心に引當てゝ人は物言ふものとすれば、奴め、或は江戸の間者か？　道中の風聞も、諸國の雜説も、江戸の坂沙汰も、或は彼奴の肚裏より出づる姦謀には非ざる歟。正雪は彼夜はじめて我を讒せる如くには言へるも、殿が全般の御仕向を想見ば、奴め、豫てより我を誣て、我を疎んじ、我を遠斥け、我を御傍にさし置かせ玉はざるやう殿に獻めまゐらせたるものならむ。さればこそ御鹿狩御延引、明日か明後日に御歸駕あるべしとの今日にさへ、我には何も、物の一つの御沙汰も無し。渡邊はかくて有らむも、日來は隔心なく申し交せる水野、村上、彼らさへ素奴が讒口に中てられけるかや。頼憑れぬは人の情、あの御智慧の殿さへも怪くあるを想へば、自餘の太郎作、彦右衞門輩の然あらむをば深う論ふにも足らぬかや。

歎息つゝ〳〵緣に出づれば、暮れ方の空に星一つ見えて、四日の月影、何をおもひに蕨痩れけむ、心細き光の線を幽かに引きぬ。露も、涙も飜るゝは此ごろなり、軒にすがゝく笹蟹の蜘のふるまひ、物待つといふ今の身にもあらぬを

と眺むる時、——其れか、それか、かねて知るしも！　其の驗しか？　殿の御使は端なく來れり。是れ、今宵御名殘の御茶賜はるべしとの御沙汰のものなりき。驚喜交臻れる兵庫は、御案内の時刻には些し早きも、疾く參りて懷かしき御左右の様を、と慌忙しく衣服を改め、供を急がし、立出でむとする玄關の鼻に、「率爾ながら御手前様、牧野殿？」看れば、立派の武士、加之一癖ある面魂！「いかにも兵庫。貴所は何方より？」「我們は金井半兵衞といふ……。」「呀、金井どの？」金井が名は、兵庫も豫て正雪より熟聞ところなり。其の半兵衞が急用とも見ゆる口狀の振。此方は其胸を先づ轟かしぬ。

（六十五）

倉卒ながらに主客の座、定まりぬ、兵庫は先づ其の來意を問はむとせり、金井は其に先んじて、「御家來はいづれも腹心の衆。然りながら些と大事とおざるが……？」扨はと思ふ兵庫は眼を瞑廻して座邊を視れば、茶の給仕に出でたる近侍らは皆其影を次室に潛めぬ。「大事とは何事おざる？」半兵衞は猶ほ飼を嚙む鳥の如くに四傍を顧眄て、「御身様は今夜御登城な？」「いかにも只今出仕の端。」「さらば御茶の？」

「御家來はいづれも腹心の衆。然りながら些と大事とおざるが……？」扨はと思ふ兵庫は眼を瞑廻して座邊を視れば、茶の給仕に出でたる近侍らは皆其影を次室に潛めぬ。「大事とは何事おざる？」半兵衞は猶ほ飼を嚙む鳥の如くに四傍を顧眄て、「御身様は今夜御登城な？」

回應をするも待遠しと彼は只首肯ぬ。半兵衞は突如に其眉を顰せたり。「それは餘りの御大膽？　師の正雪も同じく只今登城の際に、萬一と其をのみ御案じ申されて。」と言ふ意味の此方には解み得ざりき。甚麼ぢや？　金井殿。」意不意る狀態を、」甚麼とは？」と反問しぬ。「解し得申さぬ。」「御隱しあるな。」と金井は無情く苦笑ひせり。「いや實に我們甚麼も存ぜぬ。但し兵庫身に讒人のあるは存知ぢや。其奴また御前を左右言ひ拵めたか。兎角は我們身に關る義とあらば告うて下され、覆藏なう……。」怎く乞はれても彼方は猶ほ躊躇へる面色、更に鞫問の語勢を取りて、「然らば、一昨日の夜陰の事、御存知ないとか？」「夜陰とは？」「御身が御寢所へ忍ばれた事？」客は聲を潛むるを、主は飜りて大いに叫べり。「我們が御寢間へ？　し——し——忍び申したと？！」看る〳〵面色烈火の如くに、口は吃り息は喘ぎて、眼中も血迸り來れる、其膝を乘し顫る拳に詰寄せて、「……忍んで我們何事を致した？　さ、甚麼事を爲申した其れを我等が何で知らう。只今朝の風説には……。」「風説が甚麼と申した？」「殿の御首を狙はれたを、殿が疾く御目醒で、御辇を顫させられたに喫驚いて、遁去られた……。」「えい

其は誰が？」「御身様が！」「此の兵庫が？！」と餘りの思ひ懸なさに、彼は急迫たる氣力も脫て、只顧に惘れに呆れぬ。其面を右視左覗て、「兵庫殿、先づ御心を鎭めておはせ。右につき半兵衛は使者に參つた。抑や其の風説を聞かれてより師匠心痛は大方のものでおざらぬぞ。兵庫に限つては決して然る兇行せらるべき仁で無い、其れは我が確實に見屆けた、然るをかゝる風説は眞個に以て心外の至極、察する處御前間近に爾る曲者ありて兵庫身上危殆めむとする結構か？　我們ははや彼の殿に用は無い、今宵の御茶も、所勞ではあり、有り樣御辭退申さむが勝手なれども、只朋友の兵庫、右樣の横難に罹られたを看過すで無い、依て登城して實否を諦白め、其の寃罪たるを發見さば身を捨てゝも證明を立てう。但し人心は旦に夕を測られぬもの、兵庫實に然る振舞したりとあらば、御沙汰を待たで切腹させい、某介錯と思ふなれど、其暇も有るまい、半兵衛其方代官の爲い。又若し兵庫彌以ての無實とあらば、今夜は强勸て登城さすな、一埒は我に御託ありて安心してござなされと申傳へよ。事に寄らば組手をも伏せ、不意に起つて有無もなき理不盡の擧動もあるべきに。——と箇樣申して去れましたは、されば委細の事情は存ぜず、たゞ目下のところ、師匠忠告にお任せありて今宵は御辭退の事、御尤も爾。無禮ながら只今の御口上にて寃罪との御義は某とても見上げ申す。只此上は御身が御大切。遥まりての御後悔は臍を噬れても其詮はおりやりますまい。」

彼は諄々として師命を告げぬ。稍其心緒の沈着たる兵庫は、其の面色を覗れば、誠意（？）は溢れたり、其の言ふ處を聽けば、道理は貫ぬけり、只其の事實、其れが奈何は知るべからざるも、斯う突忽なる御歸駕、其れにつけての思ひも懸ぬ御茶！　熟慮へば、我は是れ今や御處刑にも遇ひぬべき謹愼の身分なり、其の謹愼の臣下へ御遊醴の御相伴。想へば此れには所由なくてやは！　辭哉、辭哉、彼が言ふ隨につきて、今宵の御茶は御謝絶の使者、進らせむ哉！　とは想ふも亦、今宵參らずば、膓に疝有つからにこそと大擧めに謀せられむ、殿も亦果して然か御覽じ玉はなむ、正雪が證明といふも此方に反證のあるに非ず、彼が歸口も猜疑の耳には駕馬の嘶鳴に均しかるべし。さらば今宵參向ざらむは、結句は寇に刃を藉すもの歟？　淺瀨を得むとして深淵を履むものには非ざる歟？　思ひ難ねたる彼は、其の烈火の色もいつか褪去て、面上は蒼白く、脣邊は戰けり。

（六十六）

一暴風過ぎての後は、暖國といふ南伊勢も秋意の靄蘿たるものありて、海の音、松の響も自然平ならず、肌膚を摩づる夜寒の手は重帷の裏にも滯り入りて、淺猿しきまで腌臢しかりし綿入の衣も、肩に重きを感えぬまでになりつ。桐火桶に御手を夥させ、竹製の風流なる三脚に長燈心末尾ながら垂れたるを斜向にして、御物語のいと打解けて見え玉ふは紀伊殿なり。御前には正雪只一個、他には侍坐の士もなし。扨は御茶も畢み、懷石も了りて、今や御餘談の折と見ゆ。「民部、喃、この程は、面白き風景談を予に話て聞かせつる。然りながら那麼樣な話說は、風雅の志無きものにむざといたしては聞かせぬものぢや。山には谷神あり水には潭靈あり、其の響音が不圖餘所に漏れたりや、俗人の耳を驚かいて、山靈水異の迷惑にもならうかや。喃、其れ故今宵は對向ぢや。遠慮いたすな。」驚くべき御說！　自然我が機先を制せられたる如くに感えたる正雪は、從前の舌も縮みて礒と御返辭に差塞へぬ、殿は微笑せて、「遠慮いたすな。但し其の、風景に託へての談話なんどは未だ馴染も淺い時節。恁う入魂の以上、殊に他

を交へざる今宵の如きは、然、迂遠な手段も要らぬ。打明て申せ。其方、十分の肚裏が聞きたい。」「は。」彼が猶ほ動かぬを、殿は再び笑はせて、「はゝ、詩歌の達者も題を得いでは詩吟れぬとやら。さらば予が題の出さう、其れについての意見を申せ。此程も其方が申した、一門には忠輝、忠直、忠長など、又た他門には其の福島、加藤、蒲生を初め、御取潰しの大小名は数も算へぬほどである。特には當將軍家（三代家光公）の御代知らせてから格別て御沙汰の嚴しいやうぢや。右は其方の見る所、柳營御擧きが御道理か？　但しは御非道か？　御非道ともあれ筒樣なうては天下靜謐あるまじきか？　御政道も行はれぬか？　其れにつきて國々の大小名は甚麼とある？　恨むか？　憚伏るか？　其身上持耐ふるのみを御恩として忝けなく存ずるか？　又た其れにも、譜代、外樣、國主、城主、其の祿の高下と、家柄の殊別なるによつて氣分の差違ふか？　予は我が封疆の内の義は仔細に知るも其外には目の達かぬ。是れは詳悉う其方の指南をうけたいぢや。」

御底意を其れと知ればこそ、此の御問訊も深遠きやうには思へ、然もなうては此殿には不似合の問條、又實に恁程の事情、知らせ玉はずとあらむには呆れたる御虛氣。凡そは我が門下に入る程の士、中材といふも一年にして斯程の事實は說き諭らむべし、況んや高足の材におけるをや。世に聞えたる紀伊國殿として、又た我正雪としてかゝる問答は不足かな、と彼は想ひぬ。なれど又た、恁る既知たる事も未知として、猶ほ其奧を問ひ玉ふが名君か。否、或は、人に物問はむとならば先づ我が知れる事を問へとある廷尉が祕胸を得玉へるか。さらば或は此の御問には縷りて注意すべきもの歟？　否、此の御問の正雪が心を率試たまふべきものなるは其の御詞の末に顯白れたり。予は封疆の内をば知るも、其他には目の達かずとある。其餘に眼光の達かぬ殿、封疆の内なる人が、好くも〳〵我が島原の祕事を知らせつる！　其人が、はゝ、百も二百も甚麼事も御承知ある其の老狼が!!　但し我は、目下其の穽にも陷るべし。山川の未の樣ならぬも身を棄てゝこそ浮む瀨もあれ。念ず驪龍頷下の珠！　其珠に今我が指頭の觸まむとするをや。彼の調子はいと壯重しかりき。「是れは大事の御下問。いかにも私右につきては些と講究の愚案――仕つりましたること無いにはおざらぬも微賤の者の憚るべき義……。」「はゝ、甚麼ぢや、其方。前日は那程放言て、今日は蒼嚥むか。予の頭に火粉の被ぶる、眼前に腹の小刀がある！　それ程に注意て與りやれた其方が、右ほどの指南を辭ふ。予は不合點ぢや。」又一つ先を越されぬ。

（六十七）

「いや御辭退申上ぐる――甚麼と然樣の義がござりませうか。さらば私年來の記憶と、愚存の儘とを只當座の御談話までに申上げまする。ゆめ御指南など……」彼は猶ほ只管謙下して、漸くに扇を膝に執り上げぬ。殿は御火桶の火筋に雙掌を撐へさせて、頷き〳〵、御餘念もあらぬ體。「廢頭、何よりをか？　それ！〳〵御問につきて諸家滅亡の概略より申上げうず。」彼は首を俛けて數回其指を屈伸めしが、「御當家樣御代知召したる最初は、申す迄もなく慶長五年の關ケ原御一戰にござりまする。なれど此れは尙ほ征夷府の宣旨を仰せ蒙られざる以前、續いて同じき八年に大將軍家の宣下ござりましたるも猶ほ此時は大阪と申すものゝござりまする。申すも恐悚にござりまするが、故老の談には、當時天下の者、御當家樣は將軍家、大阪は關白家と儀樣申して、自然海内に二人の執政者ある如くにも申し做したと承はりまする。されば元和元年までは御一統の御代、幕

府御治世とも申し難き歟、勿論それ迄とも、慶長七年の筑前黄門秀秋卿、同じき十三年の筒井伊賀侍從定次、伯州の中村（忠一）越後の堀（忠俊）伊賀の富田（信高）安房の里見（忠義）其餘廿餘家、除邑滅亡とはござりましたも、此等は大方家主の早世、家臣の訴訟、狂亂自殺、謀叛露顯、すべて世の聞も人の手前も是非なき義どもにござりまする。斯くて元年に大阪も落着、翌二年に故御所樣御他界、當時の宿將老臣らも追々に老衰死亡仕つられましてからの除邑と申すは、實に只今御沙汰の如く、眞個夥多しい義にござりまする。其れも猶ほ御二代樣御代には、元和二以來、御治世七年が其間、滅亡の大名六家、小名六家（當時猶十萬石以上を大名といひ、其以下を小名と稱べるが如し）合せて十二家にござりましたが、當御代樣にいたりましては目覺しとも愚か、物凄じい程の義と見上げまする。卽ち寬永元年御政治の御初より當年にいたりて二十年間、大名小名御取潰し都合して三十三家、此の總高四百十九萬六千餘石。更に元和二年より當寬永二十年まで廿八年、此間の右絕家を算へますれば四十五家、此內御一門三家、御譜代十五家、外樣廿七家、大小を合しての總高は七百三十二萬八千五百三十餘石とは聞えまする。」御餘念無げに見えたる殿も、玆にいたりて御氣色はやゝ動き初めたり。絕家浪邑の大小名四十餘家、とまでは其以前に御承知なるも、其が年歷、其が石高、御代を分別てまでの算當は從前實に遊ばしたる事無かりき。況んや些う委細なる調査を諳記じて、斯う明白に記憶より申さむもの、恐らく柳營の右筆、御記錄の役といふとも絕て無くして稀に有るべきものなるをや、抑彼由井民部胡爲者ぞ、一個市井の浪人として、其術を賣り、其口を餬ふ者ならずや、執何の暇、甚麼なる時に彼は些く迄の舊記を討ねて、其心胸に祕藏たる、想へば可怖しき奴かな、と御舌も不覺に顫はれぬ。誰か知らむ、這們の事は彼が尋常の茶飯なるを、彼は恆に其の弟子を敎授る手段として、國の分限を熟知せ、家の興廢を諳記せしめ、其家が軍用の多寡、士氣の强弱、民心の向背上下の意嚮といふに就きて、攻城野戰防守等の成敗利鈍を宛然實地に臨む如くに講究せしめき、されば此の御回應は平常講述する或る東西の或る一部を纔に御耳に入れたるなり、彼れに取りては妙法蓮華經の序品第一たりしなり。「委細好う存知たものぢや。而て其の四十五家の家士、これは其の七百三十餘萬石に割當たりや直地員數も明了らうが、其等につきての當時の浪人、未だ諸家の扶持に有り附ぬ者の數、何程ぢやら嘸？」此れをこそ我が言ふべき處と、正雪は膝を進めぬ。「其義も些少愚考仕ツてござりまする。先づ此の浪人、右一萬石につき五十人と見積りまして、當今猶ほ浪々の生業を得ませぬ者、大約は三萬七千人……四萬人ともおざりませう歟？」「其ればかりか嘸？」「いや、右の外に猶大分ござりまする。」正雪は含笑む、殿は切りに御耳を傾けさせたり。

（六十八）

「大分と申す、其の大分の者は何浪人ぢやな？」「さればにござりまする、一方には大阪の浪人……又其の他方には。」「島原か嘸？」殿の御目は閃耀と晃りぬ。正雪は其れにも臆せず、「如何にも其の島原の殘黨にござりまする。」「而て、其の大阪の浪人。右は何程と見積つたか？」正雪は、これには容易く應へざりき、御面をやゝ凝視て、「私儀は戊の歲にて慶長十五年の誕生、夏御陣の節はまだ六歲の小兒にござりまする。殿樣には其時たしか御十四にて親しう戰場にも臨ませられたる御義。當時城に籠りましたる者の數、大約は何程との御推算にござりましたか？」「さればぢや、予とても同一少年の

事、詳細うは知らぬであッたが、其際に聞いたは十五萬人。後に聽いたは八萬餘……？」彼は些と首を斜めにして、「甚麼人が然様には申上げました？」「むゝ、其れは、其の――或る者ぢや。」「承はりまする旨に據れば、御家には、彼の城中の事、餘程詳細う存知の士もこれ有る歟のやう……。」其眼をば眇むる如く、其聲をば竊むが如く、其語氣は詰責るが如くして、彼は密と問ひまゐらせぬ。其の問意の什麼なる旨趣か、其士の果然那麼者かは知らざるも、殿は俄頃に御笑を粧はせて、「はゝ、世間では然様申すか。予の家來も多い。末々には城中の奴共の二人三人在らうも知れぬ……。但し其の員數は違ふかの？」「えい！」と彼は目を瞬りぬ。彼は島原の返報を見事目下爲損じたるなり。殿は追擊に疊み懸させて、「員數は什麼ぢやの？」「私、胸算によりますれば、五萬五千より六萬。」彼は澁々に應へぬ。「むゝ。すれば諸家の首帳の載する處一萬三千五百餘級、但し此内には雜人百姓町人もあらう、又た彼の如き厮殺の合戰には味方討も多くあらう、假に城中の士分以上の討死の數、其の首數の五分が一とすれば二千七百ぢや。總勢五萬五千人より其を控除けば、殘つて五萬二千三百人。其中扶持方有り附の者、又た病死の者、島原の一亂に管係つて討死處刑の者を一萬人と見積るも、大概は尙だ四萬内外の者は在るな。其れには其子、其弟、其の甥、徒兄弟、從者の類、一亂以後に生れた者までを算へなば此れも寡少からぬ員數であらう、其等を合算すれば、假定七萬か嘸？其上に彼の島原が餘黨、これが四方に散漫たもの大約一萬と見ても違算はあるまい。それに其方如き浪人を立つる者。主人手前不首尾等にて退身の輩、乃至逐電駈落の者。何さま其等全體を合せなば凡そは十二萬?!　呼、民部、此等諸國に漂零ひをる諸浪人を鳩合なば！　一旗飜がる喃！」殿は御火桶を挑斥させて一膝倚らせぬ。正雪が胸裏は、此の御意の下に覺えずして淘汹ちたりき。「素破こそ!!　御思し食立御尤も、疾う！」と言はむと吻端へまでは出でたるも、否々と又た一歩を退却けたり。兎角は可怖しき此殿の御心底、今些し其の確實なるを看究めでは、――駟馬も追ふべからざる口の過失。迂可とは奈何。とは思ふも此期を外しては又何時の日をか待たむ、從前の苦心も只這れ個一事のみ、崑崙の玉を見ながら其に指を着けざるの愚、こゝにして意衷を盡くさずば今日の危殆を冒して此處に來れるも甚麼の要。俚諺の當りてや碎けむ歟?!

（六十九）

正雪は覺えず聽耳聳立つるを、殿は然り氣もなき御容態、「甚麼事もあるまい、肚者共が出立の用意でもあろ。……那麼ぢや、民部、其の右の諸浪人、鳩合る工夫は？」彌御膝を進ませらる。「御沙汰にござりまする。其の工夫――無いとのみにも涯りますまい。殿樣御名前ともござりましたりや……。」殿は事も無げなる語調をもて、「予の名が何用か。其等の輩、皆是れ世を恨み人を恚り、死花の機會もあらば、思ひ出の時節もあらばと錆槍の柄を枕に、戰場の夢を現に見る奴、其等血腥さい風の臭を否！　未可々々。今宵の御茶に我一人の御招きとならむには然も有らむ、現在兵庫をも召させられしを。殊には殿が目下の御地位たる、御旗揚の御意どころかは、御身邊の御用心專一として他に御遑もあらざるべきを。慥う侍坐の一個もなき對向の御座敷すらも不思議であるに況て斯う樣の沙汰、藏主に化けたる老狐を釣むとての掛罟か？　否なり〳〵、誰か其の一喫の燒餅に頰を傷かむ。慥くは想へど彼は猶其の執着の羈絆を斷ち得ずして、風雲の會といひ、水波の交といふ、千思未盡萬考斷續る折柄なり、遙かなる御廊に、平ならざる衆人の叫喚！「呀？」

いよとも嗅かば、蒼蝿の如くに群がり起つて其の久しう喝らした喉を馳走の肉羹に沾らさうと飛び集まらう。工夫といふは只其の飯羹を調製るまでのこと。若し夫れ豪傑の士は文王無しと雖も亦た起るぢや。是時に當りて從二位大納言賴宣の名が何用をなさうか、由井民部で澤山ぢや。」あはゝゝゝゝと御笑ひある。風雲の機は一歩一歩と迫れり、正雪も突きたる手を再膝に揚げて、「何さま其れは民部名にても……なれど江漢流力を假せましたりや其水の奔勢は甚麼大のもの？」言ひ懸て彼は甚麼とかせし？笑一笑ひぬ、「はゝゝゝゝ是れは御座興に身の入りまいて、怪しからぬ御話說。」「はゝ座興……然りながら小唄戯謔も思ひの果、其方が過般の忠告も尋常一遍の賴宣が身を案ずるとでも有るまい。病症を診察てゝ藥劑を投らぬ醫師もあらぬもの、予が目下の藥養は甚麼といたすか？身に罹る病痾を避けて天然の壽を保つ、然やうの神藥の方どもあらば教へて呉りやれよ。」殿も煩悶きか、仰せつゝ額の汗を拭はせ玉ふ。「いかにも其の天壽保元の方、仙丹神藥、私ずんど心得て居りまする。なれども右は、其の醫師に信を御取りなされねば……。」「信をも取らう、行をも脩さう、甚麼事も其方が申す隨意。」「然らば先づ……御身の内何處か苦悶しうましますか、御外邪の氣は何所を冒しまゐらすか、其の御容體熟と御沙汰下されて。それにつきて又た御療治も種様にござりまする。」殿はこれにも惱み玉へり。「難かしい。其事は醫師が診察の隨意ぢや。腫物なりや切て棄つるか、灸治で癒すか、内臓なりや服藥するか、素人たる予は只醫師一任ぢや。」吁、我決矣！什麼や此殿が恁くまでに仰する上は、誰か是を眞實本心の御沙汰ならずと謂はむ、此上に狐疑を介みて踟躕はゞ、それぞ大丈夫の面目を自家より失ふものにして、翻りて殿に女々しき者、思ひしにも似ぬ臆病の奴かなと哂笑れ申さむ、那の自ら守るにのみ忙はしくして利運の到來を知らざる者を、菩提を妨ぐる小智、とも廷尉の誡め置かれつる、或は這們的か？想へば、從二位大納言、柳營御三家の御一人たる殿が、賴宣思ひ立つ事あり、民部荷擔人仕つれ、とは、未だ御勦染も薄き我們に對して有繋にも仰せ難かるべし、其れを我們が申し出でずば此の御心深き殿、其儘にして御沙汰も休まむ。何ぼうの無念、正雪一代の不覺。爰許目下ぞ大事の成る成らぬの機！只是れ斷。我は決矣、唯一の斷！彼は恁く一心に決意めて、隻手の膝に隻手を揚げたり、兩眼を瞠開き、呼吸を斂めて、「御謀叛!!」と發語でむとする其の刹那、御次間の障子紙襖はばたゝゝと倒れて、苦乎と叫ぶ人聲！正雪も愕きて、斜向に開きて居合腰に屹と睨れば、殿も御膝を立させて、「誰ぞ？甚麼事ぞ！」由來好事に魔障多し、殿が半日の御苦心もあはれや爰に一爆水上の泡とは消え訖んぬ。

此の魔たる者、抑是れ那個者ぞ？三面六臂の鬼相にはあらざるも、猶是れ寃を銜み血を含む牧野兵庫！

（七十）

但見る、圓頂にして盛服せる壯佼の大脇指抜き持てる其の背後より、社衲の肩は脫れて腰ばかりなる一個の壯士、雙の手を腋下よりして髑頭に回して羽翅搏といふにしたるが、搏られたる壯佼の脊力や優れる、搏めたる壯士は御廊を今牽引られつゝ行くめり。

言ふにも及ばず、拔刀狼藉の壯者は兵庫にして、其を組留めむとして組留め得ず、危殆き絃索の奔牛を繫がむとするにも似たるは大學なり。大學は、薄傷二三ケ所負ひたれども屈せず、力を窮め、曳聲發して、只顧彼を御奥へ入れ立てじと角力たり、兵庫はは乳狼の狂せるが如くにて、眉は漲起り、眼は逆吊り、口角火を噴

さむばかりにして罵り狂へり。最初より兩人が爭論を仲裁せむとしたりし諸士も、兵庫が斯くまでの氣遁さとは思ひ懸けず、刃の光に一時澁と退きたるが、再び叢々と盛り返し來て大學に力を戮せて此の狼藉を取り鎭むとす。なれど其の場所は狹隘し、兵庫が刀影は前後左右に石火の如くに閃めけり、臆するとにはあらざるも容易く其手を下だし難ねて只纔に一寸の鬱際もあらばと覬へりき。

時に疾風の如き的あり、人か物か、其影も分かざる間に飛び來りて、兵庫が腕に觸るゝよと見えたるが、紫電の光は驀直はらりと地に墜ちて大學もろ共、人は諸膝折て伏しぬ。物的は兵庫が眉頭を壓し竦めて、「狼藉！　由井民部はや鎭めておざるぞ。各位疾う渡邊どの負傷の手當。」扨は物的は、御前に見えたる正雪か。是れが聞ゆる其の正雪が本事か。殿樣ならで殿中に手に立つもの無しといふ兵庫どのを那程に挫伏ぎたる伎倆の銳利き、人間業とは覺えぬぞや、目凄しや、と舌震ひしつゝ大學を先づ退けむとする、前面の御紙襖さツと開けて、「民部、大儀。大學、振舞は先づ神妙ぢやぞ。藥を與らせ。」仰するは大納言殿。殿は御腰提の藥籠を取らせて兒小姓に遞與し玉へり。見るより兵庫は、當の敵を討損じたる無念の面を直地と擡げて、切れる齒を戰慄せつゝ、「殿、と、殿ツ！」とり、此聲の主を睨ませぬ。其の御面には、終に從前見上げ奉つれることの無き御無念の色を見たりき。「殿ツ!!」彼も甚麼ぞの寃あるか、後句をば言ひ得ず、彼の印籠と殿の御顏を一目に睨みてはら〳〵と血迸る怒恨の淚を流したりき。「こツ、こゝな不處存者！」御聲は雷と鳴れり。「不處存とはござりませうも是は武士の意地。殿！　是は意趣討にござりまする。」「意趣とあらば何故汝予が裁許を得ぬ。汝、予が、予が面に泥を抹る！」「そ、其御愃みは只私、御場所を辨へませぬ迄の事。大學め討損じましたる迄の事。切腹仕つりませぬ迄の事。殿樣御面を瀆しましたる不埒兵庫未だ仕つりませぬ。喧嘩兩成敗にござります。大學めのみの御片贔屓、兵庫御恨みに存じまする。」彼は藥籠にのみ眼を注げり。不幸なる君臣の牌は、爰に全然其の歸處を異にしたりき。彼は只我殿の、讒口簧の如きを容させられて我が意趣でふをば毫かも御採入けなきものと思ひたり。殿は又た、彼れ其の膃に疵持つから、最初に予が招きの茶會を辭ひ、後には復た甚麼と分別を爲直してかゝゝに來りて、此の重要の曲事を行す、憎き奴、獅子心中の蟲、飼ふ主の手を咬む狗！　と只管に御忽怒あらせしなりき。猶言へば、殿が今宵、彼兵庫を召させられしも、前に正雪が兵庫の出仕を抑止たると簽書る處は同一なりき、便ち殿は、此の兩人を一所に坐きて、其の言語を察、應對を御覽じて、扨て其上に或る別樣の御手段をも行はせ玉はむの御概略ありしなり、さらば兵庫の參らずして最初の心算は狂へるも、猶ほ其れが木偶の傀儡なるべき彼を問落さむとては、苦悶しき汗をも搔き玉へるなり、其れが功、今や一簀に成らむとして忽諸破れぬ、而も其の前夜の光景を其儘なる小賊頭は、飜りて其の大賊頭とも看做すべき漢子の爲に捉はれぬ。彼か此か、此か彼か？　さしもの殿も此の疑惑と、驚異と、御遺恨の是非なき御胸とに迷はせて、其の御擧止もやゝ平日の沈着とは異りて見えき。

（七十一）

御藥籠を凝睨めたる兵庫は再び其眦を御面に轉して叫びぬ。「殿ツ、此の大學めは讒人にござりまする。彼が申すこと一切御採上御無用にござりまする。彼は惡人にござりまする！」「甚麼をツ！」

大學は耐へず突と寄るを。「いや、御無用。兵庫は尙ほ餘ほど逆上ても見え申す。かゝる際

の亂言、縱ひ何事を申されうとも只御聞流し。：：兎角は御前への恐れ。兵庫起たれい。」正雪は渡邊を障へつゝ、兵庫を拘て起たむとす。突如たる大喝は殿の御口を衝て發でたり。「待ツ!!」正雪は此の御聲を甚麼とか聞ける、はツと慌遽て覺えず其處に手を撐きたりき。其れを御覽ぜず、「大學、疵は淺い、此育うちて其處に坐れ。やア兵庫、汝は此の大學を讒人といふ、甚麼たる意趣、心底疾う言へ。」

時に御小姓のまゐらする御褥を御座にして、殿は人々が面色を眞晝の如く燭火の影に睥睨と御覽じつゝ、何事かの御意あるべき御氣勢。これを見て近習の武士は、御左右にひた〳〵と人垣結ひて、御沙汰如何と息を凝れば、御廣間の中は兵庫が袖を緊しう扼へて、身だも動かさばと眼を張れり。これが爲に正雪も阻隔てられて兵庫とが間四五尺を離れぬ。「疾う申せ!」その御聲の懸る毎に、人知れぬ正雪が胸は大濤狂瀾、たゞ湧きと湧き立つ如し。

彼は今、其の得意の能辯にも言表はし得ざるべき失敗の感を懷きたり。是れ、彼の兵庫を一突に突殺さずして、其れが口より今や大事の暴露れむとする其の恐慌の一事なり。彼は、曩に、殿の御前に在りし時、人聲の俄かに騷がしくて、兵庫が聲さへ微々と耳に入るに、扨はと事の容易ならぬを疾くも悟りしが、其れが倏忽にして刃傷、忽諸にして鞠問隣屋の火は飛んで阿呼我が頭上の炎焔とならむとするに、有繋に慌遽てたり。此程の大事とならむと知らば那程の間隙、這奴が既に我が掌裏の的たりし時に兎も角も爲べかりしをと悔みても今は爲術ぞ無き。然るにても我も同じく血迷ひしか、其臍は今千回噬みたりとも返らぬが、只讒人の穿議、其の讒口の證人は誰? とあらむ時、彼が一言の善惡によりて我が一代の業冦に罷矣捕拿の身となるべきも乍麼せむ。只一條の活路とあるは殿が御謀叛、我を其の謀主とも賴み玉はむが御氣色なるも、其れ將た御壯裏は然るやらむ、否らざるやらむ不定なり。斯くとも知らばと悔まむも今は甲斐なし。可矣、扨て、此場に甚麼とかならむ、我が巧企たる穽に陷ちて飜りて身を結果す、什麼ぞの約束か? はゝ不可思議の因緣か? 先づは其折の見苦しからぬやう、我膽を好う据ゑて。と有繋に彼は周章いたる體は見せぬも猶兵庫が眼中に、其の凄き眼瞬は通ひて見えき。と看るも兵庫は何と思ひにけむ、彼が方には一瞥だも與へずして、三たび叫びぬ。「讒人の御穿議、私身に取り忝けなう、委細逐一申上げます。這奴は實に友を賣り、君を掠むる逆賊、私儀を女濃津の細作、間者など誣ふる佞人、全般は兵庫を御傍近う置き申さるやうに巧む曲者、寸々に扯裂いて其肉を啖はむも鬱らざる奴にござりまする。大學は實に、其言の餘りに奇異なるに呆れたり、殿は猶ほ何とも仰せず、兵庫は只管獻恥げたり。「：：彼が筒樣に私を忌みまするも一つは、其の、武士にあるまじき嫉妬故とは存じまする。其以前より彼と私は同じ御側の御奉公申上げました。然るに私は殿樣の御眼鏡をもちまして六千石の重職、彼の知行は其の半額にも足りませいで身分も纔かに物頭役の竝、其等の物の嫉妬しさが斷えませいでか先づ最初に私御傍を遠斥けましたは久能御俯覆、あの物も無い御用の出役にござりまする。而て其後にて斯う急遽なる御鹿狩、結句は私男役の勤まりませぬ者のやう申做したか、但しは右の隣國の間者細作など有らぬ——口惜しい汚名つけて殿樣御耳を掠めましたる其所以の義と私確實に存じまする、殿樣も御恨めしう存じまする、私年來の御奉公振、陰日向も仕つりませぬ心底のほど、御存知ありながら、然程の淺々しい讒言に：：何故御迷ひなされましたか?! 」潸然との落涙、咽び

入る彼が語句と斷續せるは、遙かなる御茶間の釜の煮沸のみ。

（七十二）

「兵庫、其事のみか？」殿の御聲は彼が耳根も裂むずばかり！「いや其事のみでござりませぬ、勿體ない、私を、殿を殺する、殿樣御命を短縮めまする、其の反逆、謀叛人と彼は私を讒誣ました！」殿は遽かに大學を屹と睨ませたり。「大學。其方彼に然樣の義を申したか？」「いや甚麼と然樣の義を……。只彼は先刻登城いたしまいて坊主して面會の義を申し入れました。何事かと參つて見ますれば唯今のやうなる大事の誣告、一言二言と累ねまする際不意の刃傷。大學一圓其の合點のまゐりませぬ。」彼は御前を憚りてやいと溫順しく述べぬ、其場の容子を知れる者は皆是れに同意を表せり。殿は頷かせて、「兵庫、誰が然樣の義を申し聞せた？其れともに其方身に覺えの有るか。原來今日の茶會を所勞なりとて辭退ながら、何と存じて今ごろ登城した？」「えい、其れは意趣討！今宵を遁せぬと覺悟しまいて……。」「其の意趣討と迄の覺悟をば誰がさせた？」「天に口無し、人を以て言はしむる。……大學讒言、御城下に隱れおざらぬ！」彼は氣激昂せり、殿も御氣色漸く暴やかに、「言ふな、汝。然らば何故最初の召を辭退ろうたか？」

「御辭退申上げましたるは所勞。然りながら其の御辭退は益彼めが讒口增長の端と存じて、出仕しまいた。」「其れは汝が一分の開解め。其の聞隣をさせつる者、卽ち汝に讒言の證を擧示つる者、何處の誰か？確と名を指せ！」動きの取れぬ鎚は緊と彼が頂門に一注せられぬ。此の證明を拒否むか、彼は大學を誣告するか、殿の御聽を掠むるか、但しは其の自身反逆といふ兇行の當犯たるか、三個が一の罪名に墮ちざるを得ず。然らば擧證せむ！其の擧證の結果は什麼？

我に忠告を試み與れたる正雪其人を徒爾に連繫するなり。然して讒人たる當の讐大學めは、無異ならむのみ。抑大學めが讒言の實あるは、凡眼ある程の者の明白に覩得るものならむ、日來は一顰一笑をも苟もせざる殿の此程なる御片贔屓、我は意趣討の喧嘩といふに、其の喧嘩の對手たる彼に御手からの御藥籠を賜はする、況んや彼が申す程の言、二言と無く御採用ある、宛然として御意討の罪人を討負せたる手柄の士に御恩賞ある如き觀あるをや。此程の耳辣ひたる殿、無情き主に對ひて甚麼を言はむ。只我の急遽りたる、目下の意恨は、明日まで待て、途中の喧嘩に執做して、意地討に討果さゞりし事、我が彼に組れし際、我と刃を腹に刺して、もろ共に刺貫いれて、彼を冥途の露拂ひとせざりし事、其事のみなり。許ずる處、到底が亡き身、今更ら女々しう證人立して、他人に憂い目を見せむかは！「指す名はおりやらぬ。證人は前申す御城下御家中の總中。其れよりも其の私を反逆ごか讒ふ、本人の大學めに聞かせませ。」傲慢無禮の其の舌根、これが重恩身に餘れる殿に對して叩かれつる理の由か、御意もやある、此御座に其の頤骨を、と一同は腕を扼る、其態を御覽ずるより殿は飜りて御色を靜穩に、「然樣に申すな。事を祕匿まぬは今日の其身の利益。後暗う思はすは不爲ぢやぞ。」「後暗いは私より殿樣御身！御手前、御後暗いと兵庫は存じます。」呆れたる事を云ふ奴と、殿は浸々彼が面を注視せしが、「其方は氣が狂うたか。自己箇程の曲事を犯しながら倒りて他を然樣には言ふ。鎭めて申せ。」「殿樣こそ鎭めて仰せ。殿樣聞もなされぬ暗撃とかを兵庫まざ〳〵致したるかの樣に御意なされます、其れが抑御後暗からぬ御所行か。推測にて判斷なさるが公平の御裁斷か。大學片言に

て曲事の謀叛のと仰するこそ餘ほど逆上ては見上げまする。殿樣こそ鎭めて仰せ！」彼は傍邊に嘯きたり。「怪しい奴。其の暗撃の刺客といふは、大學のみか、予が第一に睹つるぢやぞ！」此時の御眼光は、特に兵庫が面上のみならで、御座敷に隈もなう閃乎と晃れり。「殿樣御覽になりましたると？」彼は目眩しき眼を揚げて、不審げに忙しう問ひぬ。

（七十三）

「いかにも予が確實に睹た。」「而て其者は甚麼樣の奴？」「僧形の、黑き衣服に、武者草鞋したる者。」「年齡は？」「廿五六。」「面體は？」殿は此時一段と御聲高く、「其方に酷う肖てをツたぞ！」兵庫は聞くより直地と其首を垂れたり。其心に謂へらく、あはれ從前事の全般を、大學めが讒言とのみ念ひしが、念無や扨は、殿の讒りて我を擠陷さむと爲玉ふなりけり、法師頭の、廿五六の、面體の我に酷肖たりと仰せある、卽ち其の曲者は此の兵庫也と仰するに齊しからずや、昔より瓜を二つの、卽身卽是のと言ふなるも、御家中は扨置き、兵庫從來人を多く見つる中には面體恰好然る程に酷肖たるといふを見たる事なし、況んや僧形の、年紀まで似せて我殿を討たむと巧む、かゝる者の世に有るべき道理かは！癡呆たる御誣言やな！耳聾ひたりと思ひし殿は、御目さへも盲ひたる殿なり、其の御雙眼は鋭う晃れるも、御心の眼は盲ひたる殿なり、臣下が忠否も得鑒別たまはざる瞽目の殿なり。耳の聾せる者、目の盲せる者には聲と色とを論ふべからず、心の憒せる者、怎麼ぞ物の事理を解し得む、餓鬼は水を見て其を火と怖るとやらむ、我が忠義と思ひし事も或は此殿には不忠と見えつるか？唐土には日を見て吠ゆる犬も、有りとかいふ、尋常人には然も無きものも此殿には太う奇怪と見え玉ふか？瞽者は聲に驚き、聾者は色に愕く、或は我が心頭にも留めざるものを殿には甚く猜疑ひ思して、終局はかゝる兒戲にも似たる御企巧をさへなされしやらむ？要するに、彼の大事といふ、思召し立せ玉ひし後は、木茅にも御心の隔て有らぬ人には變化玉ひしなり、其の御配慮の一つの種なる牧野兵庫、首召さるゝなり、腹屠らせらるゝなり只思し食す隨に委せむ。然りながら此の返報をば、生死ともに、屹と爲て見せ申さうぞ！「はゝ、扨は其の曲者は某でもおざつらうよ？陳謝も甚麼も爲せぬ。只殿樣、思し召す隨意。あツはゝゝゝ！」彼は其の頭を擡げ、怒眼を回轉して、憎さげに一つ嘲笑へるが、再び面を低れ、口を鎖て、死默せり。

人々は扨こそと乘勢むが中に、大學は倒りて驚きて、殿の御顏を正目に、正雪が面を偸むが如くにして覷へり。其れと、屹と目を瞞合せ玉へる殿は、何やらむ頷かせて、「兵庫！其方が白狀……急度然樣か？」「……。」「こりや心得て白せ。寃罪とあらば仔細を言へ。」「……。」彼の決心は金輪奈落不言に在り。大學は耐り難れて、「兵庫、兎角は御返答。今の白狀は言語甚だ濶つて聞ゆるぞ、淸しう申せ。」「甚麼の汝が、同穴の……。御首を狙ふと仰せば、狙うたまで！」睚むが如くに言ひ放ちて、復た目を鎖ぢぬ。其の、手も觸られぬを殿は猶摩する如くに、「言はゞ其れ迄とは合點の行かぬ。こりや兵庫、過日の久居での騷動、彼の折に其方名を騙りたる者ありつるが、……其等熟う勘考して見い。其奴も僧形の、廿五六の肥者とは聞えたぞ。」其事は我も知了たる事なり、是非なき御謀叛に殿を瞰し申さむとて我と正雪と談合して爲つるなり、猶其上にも正雪は、其身の大望の邪魔として殿を殺せと我にも勸告たり、我が固く執て肯かざるに彼も本意なく其場は歇みたるが、仰すれば何さま——扨は其の正雪か？彼が所爲か？と兵庫に有

心着きて彼が方に目を注ぎぬ。

（七十四）

視れば、正雪は忽然たりき。或は忿り、或は歎し、或は和め、或は嘯す、剛柔変化窮極りなき殿が鞠問の其結局は、竟に此地まで将来たさでは休むまじきといふを彼は悟了れり。其れに應ずる手段といふも既に獲たり。故に彼は自若たりき。其の自若たる顔色を見て兵庫は又た思ひ惑ひぬ。彼正雪、什麼膽大斗の如くなりとも、其身果して此の暗撃の大悪事を行へりとせば、此際に瀕みて些の神戦き氣沮むといふの色莫からずや、其之れ無きは彼果然此事を知らざる歟。久居の事は我も彼も一胸襟たり、其の結果は左も右もあれ、慮るところは偏に殿の御爲を念ふ。心に於て毫末も疚しきものなし、其を此際に甚麼の意地弱う、陳謝がましう、我と御聽に入るべきや。又其の我名を名告れる者も果して僞形か、廿五六か、面體の我に肖たる歟、否らざる歟、ノ名さへも知らざるものを什麼と指すべき。たゞ其の殿を弑害むといふ、正しく彼が主張せるもの、なれど其も亦た我が說を納れて當時に其の初念を飜轉したりとせば、其れ迄の事、甚麼の要にか今更に其の前事を追究せむ。猶熟く想へば、今の御說も、例の手段の御誘惑か、有らぬ方にも咎を張りて意外の獲物をとの御方略か、思へば兵庫が目下の場合たる、言ふも非なり、言はざるも亦非なり、其の同」非に墮つるとならば寧ろ不言して世の胡盧とならざるに若かず。甚麼の無用の舌根を叩かむ。「久居の騒動、其の私名を騙れる者、右はいづれも私存慮の外の事、別に勘考いたさう様もござりませぬ。」「むゝ、悉皆右は知らぬといふ是非も無い。が、兵庫、予は其方に問ふ事がある。主と友と、其方は孰れを大事に思ふ？」兵庫は再び鮮血の滴れむ許りなる眼を壁に注下て、撐いたる手を其眉頭より戰かせり。「や、兵庫、其方は孰れを大事と念ふ？」「主も主に由りまする。友も友に由りまする？」彼の語氣は實に決心の的なりき。「十五の年より十年以上召仕ひて、譜代にもあらぬ者を譜代の上席に列き、六千石の祿を食ませて家の重職にも擢でつつる其主と、一年半歳交つたる其友と、汝は抑、何れをか撰ばうとは爲る？」秋霜烈日も翅ならざる御氣勢は、直地に彼が肺腑を砭せり。なれど彼の一輩一途なる心肝は此の規鐵をも受用ざりき。「十年の御恩も一朝の御恨には、兵庫、換へ難う存じまする！！」

可憫、可憫、此の一句に爛麗れて、殿もあツと

は惻れ玉へり、正雪さへも愕きたり、げにも彼が此の一語は、不見不識の三四郎に只顧むとの一言を託せられて、水火の裏に身を投ぜむと過りたる其的なりけり、想へば可怖くも、可傷くも、賴憑しくもある心根かな、と正雪は覺えず其眼に暗涙を泛べぬ。耐らぬは大學なりき、彼は手を戰にして詰め寄せたり、「兵庫ッ！汝、其の一言、本心かッ？！」「……。」殿、這奴、只今の一言にて其の本心の所在も察せられます。那く迄の逆賊、右さぞとて白させで置きませうか！　何卒拷問……拷問の義を御允許、偏に願はしう存じまする。」「そ、ハ、汝、拷問か？！」兵庫は其悲裂むとする眼角を大學に直注て、扼れたる袂を振捥らむとす。拿住れる士は起せじと角力り。大學は目を瞋して、「拷問に甚麼があらう。汝は殿に御敵對ふ如形き大逆賊！　武士とは見ぬぞ！」「待て。」と殿は御膝を打一打せぬ。「大學申しは然る事ぢや、何さま兵庫め仔細は措きて憎むべき奴。但し只今は彼、公儀御沙汰中の奴、家來とて手成敗は其の憚りもあらうか。先づは牢舍？　然樣にも計ひ置けい。」

（七十五）

大納言殿は其の翌日松坂を出立たせぬ。豫て

は此の御狩には、物頭奉行らが采幣の採り方、家中の壯士らが進退の風體、平生の心懸をも御覽ずべく、今後の覺悟をも御沙汰あるべく、兼ては隣國への威風を見せ、御領の農商へも御弓矢の味を知らしめて、猶且つ外樣輕輩に潛める異能奇材の士を御發見もなさるべきとの御概略、其餘にも其事よ彼事よと、御胸に餘んの結構は千種萬樣にもおはしつらむを、事は全然御心と差ひて、家老總中にも仰せられぬ此の臨時の御催しは、測らざる兵庫が御恨みの種子となり、それよりして雲出の合戰、城下の騷動、剩つさへ刺客の大變出來して、終局は刃傷の珍事も見せぬ、樣度の濁き、御智慧の深き、伊勢の海にも比較つべき殿の御胸も、風雲躁ぎて御氣色自ら平穩ならず、御遺恨を果ぬる、其の御遺恨の最も堪へ難う思し食すは正雪が事なりき。兵庫は固より最愛の御家臣、其の器量の程も見處多く思し召せる士、其れが箇樣なる情態となれるは、果然彼れ民部といふ惡魔の爲に深うも魅せられつるものならむ、然らでも素奴は島原の殘黨にして、猶恐ろしき其の非望を天下にも懸くべき者、我家の仇といひ、天下の賊といひ、討ても棄つべき奴なれども、惜むべし其の確正なる證とすべきもの尙ほ有らず、證無きに討て棄てむは、天下の御法、自ら憚かるべき處あるに、又た我が思慮の未熟なるにも似、且うは彼奴もあれ程の名有る奴なるを、暗撃の如くにせむも武夫の意地として可愛し、詮つて擒取り、拷問に懸むかとも思へるも彼の辯口、剛腰、機智、なまじひ責めたりとて、誘惑きたりとて、其術にてたやすく白狀ぬべき奴輩ならず、只彼に其口より自ら言はせてと計畫みつる、其れもあの馬鹿者の爲に破られて、百日の萱も虛とはなれり、なれど其の馬鹿者も馬鹿とおもへば可憫きにと、昨夜なほ、彼が入魂なる彦右衞門して再應の利害を說せつるにも、目下の身となりて甚麼をか言はむ、只速かに御處刑を、といひて實情を白はず、さらば民部を責ては和歌山まで率て、緩々地穿鑿らむと思へるも、彼は辭して、兎角は參宮を終りての後ならでは言ふ、虻をも捕らず、蜂をも拿らず、翻りて其蜂に泣面を螫されしといふ予が無念、あら遣る方も無や、とある御鬱胸、其の大概を察しまゐらすは御傍の大學と、今一人は、其の正雪か？

正雪は、此日も朝夙く、城下盡處の松列木ある所に出でゝ、御駕の來るを待てり。纔て已刻過ぐるころ、水野太郎作を御前驅に、同勢百七十人、御駕を掩護みて來るを、彼は御傍なる渡邊大學につきて御禮の披露を賴みぬ。御駕は駐れり。「民部か、此回は不慮なる義どもで本意なうあつた。參宮終らば、下向を待ちをるぞ。」「忝けなき御意。必らず祇候仕つりまする。」「滿足ぢや。再會を必ず待つぞ。」重ね重ねの御詞を殘させて御駕は過ぎぬ。彼は懇々として暗涙に咽びつゝ、低回顧望、其地を去る能はざるもの〻如くに見えき。

獨り憐れを停めしは兵庫なりけり。彼は松坂の城中、一室なる所を假の牢獄として其中に投られぬ。警固は村上彦右衞門、是れけ猶ほ彼を說諭して其實を白はしむべく、兼ては雲出一埒の事、兵庫名を騙れる曲者の穿議、其れ此れ共に油斷なく奉行すべしとの義によりて殘されたるなり。なれども其後久居よりは、何事も言ひ來らず、曲者の踪迹も雲を的なり、折ふしに兵庫が一室を音訪れては、殿の御仁惠、其の思す御心のやうをも說き聞かせ、彼が正雪との交情、大學を恨める仔細、暗殺の顚末など、我よりも語り、彼にも問ひ、種樣に事の端緒を得むものと勗めたれども、彼の片意地の頑強なる、餘の談話には快よく物語れども事其件に及ぶ時は、口を箝み、頭を低て、枯たる骸の氣息

すら沒きに彷彿たり。其の執念きには彦右衞門も恐れて、近ごろは其の訪問も稀々なる、八月も過ぎ、九月も經ちて、十月も中旬といふ、或る日の事なりき、和歌山より御用の狀彦右衞門所に到來しぬ、披き見れば、駿府城代酒井山城守、江戸御下知違犯の罪により備後福山三萬石の所知を沒せられ、備中松山水谷彌七郎へ御預けの上、切腹。連坐の町奉行目附、諸役人とも悉皆改易との趣なり、就ては兵庫身上にも何樣かの公儀御沙汰あるべきか、當人一身構へて異變の事なき樣、念入れ警固尤も、との事なりき。

（七十六）

昨日今日は神無月の空、時雨初めて、軒にさす薄日の影も物淋しう、落葉を弄ぶ風の手は、障子紙襖に簌々と音立てゝはやく三冬の來れりと告ぐ屈指れば此室に籠められてより既や三月なり、世の中の狀態は甚麼となりけむ、近き頃まで人も來つるが、其れ將た、此方の問はむとする事には答へで、翻りて聞きたうも無き身の寃罪を穿鑿するゝが可厭さに、四五度沒義道に待遇ひたれば懲りてや再回とは訪ひも來ず、峯の嵐谷の音、一心三觀の龐士が扃にはあらざるも、兀坐悄然、語合ふべき友も無ければ、言はむとするに辭をも得ず、外見には這個六尺の長大身、決めて枯木死灰の如くに見ゆらむも、嗔恚の業火は二六時中間斷もなく其の苦惱しき臭骸を燬きて、身已にすら淺猿しき無念の涕涙の垢膩ける袖に拂はるゝは、あはれ兵庫が現下の軀なりき。僧形なりしも莽じきまでに髮は生ひぬ、剃痕の青う鮮美しかりし鬢も藻屑と紊れぬ、日の光見ぬ顏面は白きが上に蒼味を加へて、紅色なる脣も中々に凄愴し。雙眼を閉ぢて太息を噓き、痩せたる腕を胸に拱みて、頤骨の露はなる腮を襟の裏深うさし入れたる、其肩頭を悄と叩きて、「兵庫、彦右ぢや、彦右が參つた。」

叩かれたる人は面を扛げぬ、其眼瞼は紅う脹れたり、脹れたる底より凄き眼光を射出だして、「甚麼と思うて？」再び其眼を閉むとするを。「や、兵庫。今日の彦右は、御身を警固の村上では無うて以前の朋友の彦右衞門ぢや。一種を持參した。快よく喫まう。御身も隔意なう……。」笑ひて座に着くを、彼は再び眼を側てゝ左視つ右視しが、自然其意に悟了れるものあるかの如くに頷きて、色さへ柔げぬ。「芳志ぢや。甚麼にも思ひ出の酒盃受けう。」「思ひ出？　又た邪推すか！」「はゝゝゝゝ棄てた身ぢや。氣も推さぬ。邪推す、肝の煎る、皆現世に存在たいからぢや。我們が甚麼の……！」言ひ罷して莞爾と含笑ぬ。

彦右衞門は此言を、鳥の將に死なむとする鳴聲の如くに傾聽りき、物をも應へず、首肯き首肯き、袱みたる服紗の中より一升も容るべき大瓠と、取肴二三種を取り出だして、自家先づ盞とりて泛々と喫み試み、いざとて指せば、彼も辭はず其盞を把りぬ。徐くて獻酬二三度せり。「彦右、扨て、處用は甚麼ぢや？　邪推では無いが最後なりや其事というて聞せ。其の支度もある。」問ふ口を押へて彦右衞門は更に一酬しつ、「未だぢや。が、有り樣程遠うもあるまいよ。」「えッ!!」有繋に其面色は鼓躁て見えたり、「……御沙汰もあッたか？」「いや……。」と彼は言はむとしつゝ其語の着端に迷へる如し。「扨は執念くも拷問か？！」兵庫の懸念るは切腹にあらずして拷問に在り、其二六時中、夢寐の間も胸に忘れで、口惜くも、情無くも、無念にも、遺恨にも堪へざるは、大學が拷問と言ひ、我を武士と見ぬと言ひ、殿の其言に御同意ありて御氣色の動きたるが如き其事なり。單に其の無念、遺恨のみならで、又た眞實に、毛髮も悚立て可怖しきは、其の拷問なり。現に其の

目撃つる駿府にての三四郎が慘狀！　獄卒らに頭を蹈まれ、肩を蹈られ、背を撲たれ、腋を蹴られて、然も一言も其冤を訴ふるを得ず、死に優る汚辱を暴露して、無慈悲、無法度、無廉恥、無得心なる小吏輩が嘲笑を買ふ、其の冤苦胡笑ぞ綿々盡くる期有るべきやと念ふにつけても、遺恨骨髓に徹りて、死するも猶且つ忘失ざるべきは、其の羞辱を我に加へむと言ひつゝ爲つる、大學と我殿なり。若し夫れ眞に其汚辱の身に罹らむとあるを知らば、贏れたりとも此腕もて此の囚獄を扯破り、市原野なる鬼童とやらむに身を扮しても殿と大學めを恨まむものなり。什麼や？　と彼は遽忙しく問ひ懸けて、對向へる人の面上を視れば。「眞實は江戸からの御沙汰とある、駿府の一埒ぢや。彼件が落着しまいたて喃……？」兵庫は息込みたる腰も挫れたり。「はア、彼の一事か！　而て酒井殿其餘の衆は？」「山城どのは切腹、其餘は改易、と斯う御沙汰なツたといふほよ。」

（七十七）

酒井山城守切腹と聞きて、兵庫も目を瞬きぬ。「切腹か！　彼の殿は我們に好う辛く當ツた仁。然りながら切腹と聞けば最傷くもあり、且は羨ましいやうにも思ふ。」「甚麼と言ふ、羨ましい？」彦右衞門は驚きたるなり、敵ともあれ其者の最期と聞ては一掬の涙を濺ぐべきこと、武夫の意地として然も有るべきが、其の切腹の羨ましとは、抑什麼。爾は酒天の身の罪惡を悔て死を急ぐか、數月の閉居に神氣鬱して發狂せるか、否らずば醉たる酒上の戯言か、兎角は奇怪の言、と彼は其意を解し得ずして驚けるなり。兵庫の意氣は憮然たりき。「羨ましいでは有るまいか、切腹は士の作法。拷問に懸られうといふ宿世薄い者も有る中に。」初めて讀めたり、彼は拷問と切腹とを天秤に衡けて、其の最期を擇べるなりと、彦右衞門は頷けり。一膝進めて、「案じ事お爲やるな、彼夜大學が拷問というたも一時の事ぢや。但し三界は唯一心とか、御身が心の有ち方のみで天上人間餓鬼畜生、有象無象は目前に出現せうぞや。すりや御身が、彼の節の殿の問席に一々答へて、御寢間へ忍び込うだは御身ならねばならぬで可し、大學讒言と聞たるならば、其は又た聞たるにて可し。久居の一埒も知らぬなりや知らぬで可いが、其の御寢間の珍事、久居の變事、いづれも其者の御身に有て、加之御身が名を騙れる者、設令其者の誰なるかを知らいでおはさうも、其を騙らせ、忍ばせたる發頭の曲者、張本人を、全然知らである御身ともあるまい。いや大抵は存知の管と我等は思ふ。なれど、其は、眞正の冤罪、兵庫かつふつ心の外と、斯う申されなば其れ迄で有る樣なるものゝ、大學讒言の一時においては、存ぜぬでは通らぬぞや。況んや其事は御前の事、御人拂ともありて祕密の席、抑も甚麼人が其を繙聞て御身に傳へた。天に口無し人を以て言はしむるの、其の密告人は御城下の衆、誰と名を指すやうも無い、なんど言ふ辯解では承知のならぬ。其を強ての隱し立、殿の御爲を存ぜぬとあらば、何さま、こりや、武士として見られまい。大學が言ふ拷問も是非なからうか。喃、其の恥辱に遇はるゝも遭はれぬも、右にいふ唯一心ぢや。地獄かな、極樂かな、決心は奈何お着きやるな？」此の一埒に對する兵庫が無言は、此時も亦た反復されたり、彼は例に因りて其眼を瞑れるのみ。「……然りとては決斷の善うも無い。生前は兎も角も、死後の美名を百代に傳ふるといふ氣は無いか。有繋は兵庫ぢや、友へも一旦の義理は立て、殿には三代の恩を報ずる、有爲所業ぢや、と恁う言うて褒めらるゝ、其は現下おざるぞ、それによ、其の、御身は、切腹の沙汰、本望と言やるか知らねど、駿府一條の御祭度は到底も遁れぬ。然

らば孰方にも亡い體、亡い體となりや潔よう仔細を申して、殿の御胸を安んじ申し、紀伊國を安泰にもせい。友への義理も好い程ぢや。」兵庫は突如叫び出だせり。「殿も、和主も、友も、友とはいふ。友とは誰？　誰をか指す！」「言はれなよ、正雪を、お主知らぬか。」「それは知る。面識人ぢやが——甚麼とした？」彦右衞門は冷かに笑へる面を横向に捧れり、「いや、面識人とは一樣の事。お主と正雪とは刎頸の友、猶言はば……。」兵庫の膝は覺えず前みて前なる盃を飜倒しぬ、其の流るゝ泗の泉に膝頭を浸して、猶進みに進めつゝ、「甚麼ぢやツと？」「……一味の黨！」「た、誰が言うた？　誰が然は言うた？」「正雪が……！」其人を指さずしては道すまじき彼が氣色に、愿じたりとにはあらぬも彦右衞門は怯く、思はず發言り。兵庫が憤怒は烈火の如し。「ナニ正雪が?!」

老練なる彦右衞門は、我が此の不意の口過と、彼が火の如き忿恚とを勿怪の倖にして、屢くまで功を收めむとせり。「おう、正雪は一々白した。牧野兵庫は我等一味の黨。久居の事も某が部下の所業……。」「え!!」愕然たる兵庫が千頭の未だ縋緩の解けざるに、一人の廣間役は慌忙しく此室に入り來て、「村上殿へ申しまする、由井民部介使者金井半兵衞久居の城下を騷がせましたる盜賊を生捕て召連れたりとて町奉行へ訴へ出まいた。右は何樣の御計ひ？」

（七十八）

聞くが否や彦右衞門は、盃も指し棄て、物も言ひ棄て、呆れたる兵庫を其場に置き棄て、放下し棄て、鼠の舞ふ如くに此室を出でたり。げにも彼は、怯くも爲では協はぬならむ、什麼なる表裏にか口の跳躍みて、今しも久居の騷動の張本と自白せる如くに語へる正雪の、其の使者は、突如として現はれ來りて、加之其者が、其の、彼の折の盜賊てふ奴を搦め取りて參りとは！　彼は我が從義の上なる歡喜よりも、目前なる兵庫の手前、武士にあるまじき虛言の面目なさに只理由もなく、我をさへ知らで一散に躲避たるなりき。廣間の者は喘ぎ喘ぎ追ひ來りて、「如何計ひます！」漸く落居たる彦右衞門、「然樣ぢや其の使者、盜賊ともゝ〳〵城中へと言へ。」

* * * * *

間もなく、町奉行同道にて來れるは金井半兵衞、案内の坊主に導かれて表書院へと打通る。いと倉卒の間にはありけれども、雲出の際には先づ久濶の情を敍して、晤談ははやく要件に入れり。彼れ半兵衞の言ふ處を聞けば、其師なる正雪、兵庫とはかの三四郎が一埒に依りて駿府以來の面識たり、然るに彼の夜さり、餘義なき羽目の是非なさに、其人を自身手して拿へたるを、一代遺恨、友甲斐もなきやうに自己ですら存ぜらるゝに、又其れよりして久居の事、御寢所の事、すべて彼の人の身に連繫して思ひの外の御勘當さへ被られつる、怨嗟詞にも盡し難くして、悲歎腸を斷つばかりなり然りともあれ紀伊國殿は名君、寃罪と知りて其人を咎め玉ふ如き事はあらじ、只此上は正雪身の面晴れとして其久居の兵庫名を騙れる奴、幷に其御寢所の曲者と云ふをも捕拿へて彼の御家にまゐらせむか、但し予は猶ほ病蓐にある身、其の方師たる我に代りて此の事を好うはたせ、其れ若しさもなき者なれば正雪再び恥ある武士として世の中にはたゝるべからず、究竟予が一期の瀨戸ぞ、樽へて身も命も惜むな、御樣捉てゝ候らひし。もとより師が申す處は義理の極所、我等も然ありたきは望むところ、乃ち附屬られつる朋輩十餘人と乞丐に身を窶扮し伊賀伊勢より尾張參濃三河までの海上陸路、由河村里曠野の末までをも穿鑿れるに、近頃伊勢近江の境なる御在

所が獄の岩窟に怪異き者の棲むといふ、此由を傳へ聞ける我等、さもやと彼の高峯に躋りて山中隈なく渉獵たりしに、果せる哉三瀧川の上流、兎ある岩洞の奥なる所に廿餘人の山賊らしきが潜み息るを發見たり。ござんなれ逃すなと我等十餘人、穴の前後を押取り圍めつゝ、紀伊國殿御用！　紀州家御用！　と呼はツて切ツて入れるに彼等眞正の緝捕使とや懾れたりけむ、一支もせず其の奥なる活路より遁むとするを、追懸け、追詰め、其の内七八人は切伏せたるが、壯佼の念無き、皆悉く深手を負せて其場にて息絶させ候ひき、然るに玆に最幸ありと覺ゆるは生捕の一人なり、素奴引捕へて面を視れば、兵庫どのに生擒し、加之頭さへ剃り毀ちたり、散々に鞭虐みて候へば、彼最初は白はざりしが終局には堪へで、いかにも其の久居にて紀伊殿御内の名を騙稱り、城を攻め、民家を焼きて、其の資財を掠奪れるは我が驍伴なり、然も我は其の面の肯たるといふより兵庫どのに假裝たり、其事の味好くまぬれるが面白さに、次回は大納言殿御寝所に忍びたり、然りながら其回は不造化に甚麼東西も得盜らで候ひき、かゝれば久居領にては悪事しつれども紀伊國御領にては何事もせず、偏に御たすけ〳〵といふ。助くるも助けぬも奉行衆の御心、兎角は大人しく引かれよとて、素奴なだめつ誘しつして只今當所まで召伴れては候ひし、いでや一應御檢分と始終を語る半兵衛が狀態、いと氣色ばみても見えたり。彦右衛門は扇を揚て扇ぎ立てゝ、「半兵衛殿、芳志過分ぢや。骨折といひ、お手柄といひ、申さう樣もおはさぬぢや。いでや其の盜賊を。」半兵衛は式代しつゝ、「箇程の小功、御過稱は恐入りておざる。但し紀伊殿御用と申した僭越の罪は幾重にも御容赦、後日に自然御沙汰ともござらうならば‥‥」「なんの〳〵、甚麼の苦しいことござらうかい。倘か兎角の義あつたる節は某指圖で紀州名前を名告たりと申されい。其れは先さし置て、右の奴を疾う坪に拘かれい、彦右衛門檢分せう。」

（七十九）

步め！　叱！　出ませい！　との叱咤に追はれて蹌踉々々おづ〳〵と書院の坪に入るものは、彼の捕拿の盜賊なりき。看れば高手小手に絪縛られて、軀には荒梼の褞袍をまとひ其の面及手足にはかの緝捕の際の負傷なるべし、赫く、黝く、彩れるがごとき痕ありて、見るも可厭きが、何さま頭は坊主轉の毬栗と云ふものにして、脊の恰好さへ兵庫に酷肖たり。但し此奴猶其頤を襟にうづめて面を揚げず。緣の正面には村上彦右衛門、其次には當所町奉行、それと對面て金井半兵衛竝びに今座敷に入れる正雪が弟子十餘人あり、盜賊をつくばはせたる背面には繩取の獄卒、其左右には町奉行附の足輕、革袴の立段いかめしく、樫木の棹棒こゝを先途と突き立てゝぬ。

村上彦右衛門、威儀嚴重に扇笏に把り、引据ゑられたる賊が額を磕と睨みて、「其處な奴、面揚げい。」彼は、其の擡げたる面を看一看しが、忽諸呵呀と呆れたりき。實にも〳〵、今半兵衛が語へる、兵庫に肖たりとは事も愚かや、其の眼其の鼻、其顏色の蒼白き、面の容額際、年齡の甲乙迄、只是れ其人を其儘なる、寸分は切措きて厘毛の差違だも無きが如くなるに呆れたりき。扇を衝き、肩を反らして、むゝと一息、彼は覺えず感歎の聲を呻き出だしき。かく彦右衛門に驚異の歎を發せしめたる其者は言はでも知る、彼の熊谷三郎兵衛。

彦右衛門は良少時く其面を注視て、更に其眼を瞑り、甚麼にかあらむ其の胸に一思案の、小膝を一打ち丁と拍ちて、「こりや其方は、生國は何地ぢや？　名は何と稱ふ？」賊？　は初めて聲を出だしぬ其の聲さへ此方の耳には其の人

かと怪異まれぬ。「私は、生國は存じませぬも生育ましたは當國の白子在、綾篠村、名は虎松あの仲間にいりましてから虎丸と人が呼びました。」其の目のみ働きて、其耳の機能の鈍れるが如き彦右衞門は、纔に白子在と云ふに注意て、「ふむ白子とか。然らば御領ぢやな。御領の民が殿へ對して勿體い事をしたものぢや。爾る程の兇事を爲る奴、定めて强盜姦淫、放火、人命を損傷したも寡少はあるまい。兎角は大罪の犯人、一席二席の白洲にて落着すべきとも覺えぬ奴、況んや其の徒黨もあり。奉行衆三の曲輪の牢獄へ繋ぎて、嚴重嚴重に御沙汰なされい。但し素奴が夥伴の賊の奪ひ還すべき恐怖もある、旁往來をば深編笠冠らせて其の面を見せぬ手當が肝要ぢや。先づ當席は是れまで。」縱令曩に、半兵衞が口狀にありとするも、此賊に對して一應の鞫問、其の同類多寡、犯罪趣意、目的、討漏らされたる奴原の棲息るべき地、其等仔細に糺し訊ひて討手の手當等あるべきが當然なるに甚麼の理由もなう牢舍とは不思議かな、什麼なる事、と町奉行は異しみたれども此場にて其を兎かう論はず樣なし彼等は只唯々としてて彼賊を拘き立て縄尻うち冠せて三の曲輪の牢獄へと行く。半兵衞も廳て其席を立むとするを。「や、金井どの、彦右衞門些と申し談じたい義がおりやる。少時此座に。坊主ども方々へ膳部の支度せい。」言ひ置きて彦右衞門は去りぬ。間もなくして膳は出でぬ、中酒さへ添たるに人人は皆歡喜びて打喫へども、獨り半兵衞のみ深うも喫べず、自然物案じ氣なる容貌。誰か知らむ其胸中には、目前の料理もあらず、美酒もあらず、只彼の鐵鎖鐵繩の毫落めきわたる三の曲輪の牢獄の光景のみならむとは。

是れと同時に、彦右衞門も、不思議の考案を胸裏に描きぬ。其の不思議とは果して甚麼ぞ。彼は原來兵庫とは交睫りしなり、其の牢舍の頭初よりして、汚辱を棄てゝも身を全うさせむとは思はざりしも、天晴れ命活くべき方あらばと念ぜしなり、雖然彼は其の不思議なる口の過より不意き殿の御忿恚を招きたるさへあるに、亦例の頑强より其を謝び奉つらむとも其の御疑惑を解き申さむともせず、物言へば牙を鳴らして人を威嚇す、俗に謂ふ手も觸られぬ手負猪の狂へるが如くとなりしに、今測らずして彼は其の猜疑の檻を脫出たり、これによりて彦右衞門は其の不思議といふ一片の趣向を案ぜるなり。

（八十）

書院にての膳も終りぬ。金井どの此方へ、とあるに半兵衞導かれて奥へ通れば、彦右衞門は一間なる小室にありて、「さ先づずツと此方へずツと此方へ。」

小坊主が持て出づる薄茶一服を互ひに啜りて彦右衞門は要有り氣に、「金井どの。」「は。」彼は俄に其聲を潛めつ、「我等近ごろ無心が有る。」「はゝ、これは又た改まりましたる、御無心とは甚麼樣の事？」と金井は坐容を良正しぬ。「いや、然樣に改容られては我等倒りて申し惡いが……究竟は恁樣ぢや。御身彼の賊を追捕の功で御褒美ともありたいか喃？」何とやらむ面白からぬ、胸に一物有る如き問條と、半兵衞は其返答に躊躇へり。村上は然もこそと、いや甚麼と不審はあらぬ、彦右衞門曲折てお話し申すが、金銀とも御所望なりや、涯分我等手許より進じ申そが……」半兵衞些しく氣色を變へぬ。「異な仰せ。我們は只師の吟味にて兵庫どの身の冤罪を雪がうと存ずるばかり。金銀の御褒美のと然樣の念慮、毛頭最初よりおざらぬよ。」無情く言はれて彼は赤面もやすると思ひの外、彌其膝を近う前めて、「然樣の心底存じの上にて彦右衞門實は然申したぢや。無心といふは別義でおはさぬ。兵庫身の爲め然ほど御計畫りやる所存とあらば彼の盜賊、我等には賜らぬか。」半兵衞其の

意を得ざりき、眉を顰めつゝ「とは又た甚麼樣の事？　既に彼の賊、御手前御手にござある以上は……。」「さ其事ぢや。意餘りて詞が足らぬが。其の、彼の賊なる奴、御身等が手して拿捕つる事、無い物にして欲しいと言ふぢや……いや其の不審道理ぢや。有り樣、是れは、其の兵庫を助命たい某が苦肉の策ぢや。」苦肉の策とは？　面を注視て聳立つる、半兵衞が身側に坐倚りつゝ、彼が囁語く其の心中の祕を聞けば、實にも然は銘のる程なる驚くべき謀なりけり。

半兵衞等が功績によりて、久居を騷がし、御寢所を覗へる其曲者は捉へつゝ、兵庫、身の證明は既に完全く立ちたれども、其れにも管らず彼が一命是非なきは彼の駿府にての一事なり。剛下切腹とあるをば太く懽喜て武士の本意たる如くには言ひつれども、且生暮死の蜉蝣とやらむいふ細蟲さへ其命をば惜むときく然るを五十年の定命、未だ半期にも到らざる彼れ兵庫が餘義なき義理とはいへ、甚麼と好みて其の可惜き腹を屠らせたう無きものなり、苟にも紀州武士の意地を見せて義理手本となれる兵庫の惜き腹腑の血、むざ〳〵流させたうなきものなり。雖然、公命一回降る以上は其れを拒まむ術あるべからず、殿といへども大公儀御仕置の前には御命も御知行も無きものと仰するを、況て彼れをや。叵不幸なる哉兵庫！　今其雪冤の功を得たる疑獄の方ならば、那麼樣殿に詫び奉りても其の救護の方便もあるべきが、駿府の一事にいたりては、亡矣、亡矣、全然亡矣。其の之れ有るは只苦肉といふ、彼れが代命兒たるべき者を索むるの一事のみ。然るに、天も彼が義死を愛惜むか、測らざるに其の恰好なる兒を我に獲させぬ。其の兒とは誰？　瓜二分といふも啻のみならざる彼の新捕の賊！　なれども此の祕中の祕を術なく行さむには、更に一件の要項あり。甚麼ぞや？　曰く、金井等が領得なり。其の領得とは、彼等が御在所獄なる功を衒はずして捕賊の事を世に知らしめざる、其れにて足れり。其も此の功勞に酬ゆべき金銀、錢帛、其等の如きは我が能く之を辦じて、猶且つ前途を賴まれつべき約束とせむ、師の正雪へは我より內書して其の仔細を告げむ。

只這個一大事、殿が耳に入れずして我が私に計らはむこと其罪遁るべからざるが如くなるも、紀州は遠し、往復に日を費やさむうち此事世間に知られなば、徒勞ならむのみ、仍てこゝは我が一分の腹に收めて時宜を繕ひ、扨後日に云々と申上ぐべき心底ぞ。若し夫れ是を僭越の罪として御氣色蒙らば其れ迄の事、一人の義士を助けての御勘當、彦右衞門、男の意地として甘きこと蜜の如けむ。我が心は既に決せり。御身も亦好く此の切なる意衷を斟酌め。

彼は此の胸臆を祕まずして金井に語りぬ。金井は甚麼と感ひにけむ、事の意外に愕ける面地して遽かには返答もせず。

（八十一）

半兵衞は實に其意外ざりしに愕けるなり、彼の意はもとより彼の賊へ？　たる三郎兵衞を棄つるに非ず、兵庫をも拯ひ、熊谷をも奪うて遠く其の影を埋沒むとするにあり、頭初より此締の、一條索の危ふき鬱たるは知るも、竿頭更に一步を進むる師の妙謀を領けて、事大抵は成るべしと想へるものゝ其の變算を來せしに愕けるなり、雖然這の場合、返答の跼蹐を容さず、彼は綽くに胸を決えたり。故意に感歎の態を假裝ひて、「然りとては御心底甚麼と申さうやうも無い、事こそ違へ兵庫御命を救ふは一途、彼人の御爲とあらうこと師匠承つてからが否を申さう理由もおりやらぬ。但し彼の賊を贋者の兵庫に打扮す御趣向は什麼？」此問ぞ目下の緊急第一義なり、然りとは知らぬ彦右衞門は甚麼の意も無く、「其は難義ともおざらぬよ、面體恰好、是

れは目撃するとほりの的、只其の懸念は言語の眞ならぬこと、其は又我等考案がある。」「とは？」と半兵衞は意ならず。「水銀を呑すか、漆汁を飼ふか、兎角は素奴を瘖瘂にするまで。」

半兵衞は、彼の賊ならで、我既や其瘖瘂になりたらむ如くに聲を呑めり、什麼後來の望を屬けつる兵庫其者の爲とは言へ、我が貳なき友の同志の一人熊谷三郎兵衞といふ武士を不具の癈疾と我から爲すに忍びむや。「御趣向はげに然もおはさうが、さりとては彼の賊なる奴、此方が大事の用に立てらるゝ其以上に瘖瘂までにさるゝ夥りの不憫にはおざらぬか。」已を得ずして彼は其情に訴へぬ、此上は冥の應報を說出むず氣色。なれども此說法は放屁一發の價もせざりき。「何の狀しい事のおざらう、到底も首を斬らるゝ奴、其者が粧假にも立派なる武士に爲られて、城中に住ひ、美衣を着、美食に肬て、終局は作法の切腹に死花を咲かす、甚麼の不憫も最傷しいもおざらうかや。」「げに其れも然う……」と彼は更に頭を傾げて、「……但し、其の兵庫どの切腹は、何時の日？」「いや夫れは未だ事定とも。」此方は勢息やゝ出でたり。「事定ともあらぬものなりや然迄の御急とも及ぶまい、彼の虎松め御召伴るゝ途中も溫順しう白狀も素直にして、賊ながらも最傷氣な奴におざる。」「と、御言やツても賊は賊、世に申す狼子野心況んや小の蟲に大の蟲ぢや、懋ひの慈悲心立は結句大事を錯誤る基、のみならず、愈切腹との沙汰あれば聲固は倍す、出入も增す、或は其沙汰の直ぐ其の日其場といふ、間隔とては僅に沐浴食膳の猶豫ほどのもの歟とも存ずるに、旁氣の急いて、先刻の鞠問も辛忽々々彼に話を多く言はせず、又其面をも見せぬやうに計ひまいた、是れも皆行を急ぎ、事を祕するからの事、祕事の緩慢いは酒爛の微溫いよりも尙ほ惡るいと人も申すぢや。喃、はゝ、金井どの。」是れも敗れぬ。なれども彼は猶屈せずして、三たび其師を起せり、「如何にも、御道理、とは申せ兵庫切腹、果然やう御沙汰のおざらうか。城代酒井殿切腹はこりや御下知の違犯。言ふ迄もなく御下知違犯の罪は反逆に準ぜらるゝに、況て輕罪を重罪に執り行ふは大逆無道の名を以て御憎惡も格別とか、酒井どのは其罪。此方は又た、本人の三四郎さへ江戸御下知は尋常の死罪。從はすべて首よりも二等を減ずるが例なれば兵庫一命は或は別條あるまいか、と我等は存ずる。さらば左樣に事を遽てゝ……。」說く時、再度追蒐の和歌山よりの急狀は着きぬ、彦右衞門急ぎ披見すれば、曰く、兵庫切腹！猶家老中の添書に云ふ、兵庫身上、當表において心許なき沙汰有之につき、此狀着候はゞ直に腹切らせ首のみ檢使に見せ申さるべく……。嗟乎、事は罷矣。

（八十二）

兵庫が死首を檢使に視せよとまで急せられる大納言殿の御胸裏は果然奈何、彼への御愛は猶有し後も猶變らせられずして、久居、御預所、兩所の曲者の其者かあらぬかを好く探れよとて、彦右衞門へは度々の御催促ありつゝも、猶此の疑獄の故をもて其れが首を召さむとはし玉はず、只彼の駿府の强訴の一事は有繋の殿にも御法の前、御陳謝の辭もあらずして、只管に思ひ惱ませたる、折柄に、城代の酒井城州切腹との江戸早打あり、追續けて來れる早馬、其の家老牧野兵庫、强訴人一味の科其罪輕からざるに依て、急度も仰付らるべき所、格別の御憐憫を以て切腹、との御沙汰、江戸詰家老へ達せられたりとの注進を聞かせて、今更のやうに悔み、歎き、思召せしが、此上は餘義なし、只彼めに華やかなる切腹せさせ責ては亡骸の死花をと思はせつゝ、態に其の御沙汰あらむとして忽然に又た否々と思召し飜へさせしは、正雪が

事なりけり。正雪もとより世間を廣う、聞耳の鋭敏き奴、彼目下何處に在りぞとは知ろし召さねど、若し夫れ兵庫最期との事を聞き出だせば如何ならむ方便ともして或は彼を奪ひ去らむとも巧計みやせむ、槍取てこそ彦右衛門も然るものなれ、智慧の競爭には彼が敵手には足るべうも覺えぬを、懋ひなる行儀沙汰は倒りて彼等に礙障を覩はるゝ端とやならむ、然らば遁れぬ兵庫が一命を可愛きながらも一刻も疾う短縮て、正雪等が先を制け、只顧紀伊國の面目に玷損られざらむことを專とすべき歟、爾らば追達の狀書け、この仰を畏こみ、故と家老總中の連署として死首云々との火急の内書を添へたるなりき。

箇樣に透間もなき御手筈なるをも、知らぬは是非も無き彦右衛門は、豫て思ひ設けしよりも層に煞急の御沙汰なるに一回は愕きたりしが、否や〳〵我が計畫の上には檢使も無く、死首とあるが中々に便り好けれ、さらば水銀も漆汁も要らず、たゞ今夜子剋といふに引出して人知れず彼の賊の首を刎む、金井どのには其の以前兵庫を具して落ちられよ、但し此の策略の仔細の義は有繋に預りの頭人たる我が口頭よりは告げ難たし、其等は御身より然るべき傳達を賴みまゐらすぞ、只兵庫、此城を落ちてより後多時は、其迹を沒め、其名を匿み、江戸へも趨きて由井殿が居所にでも在よかし、然あらば我等、此事の餘熱の冷めたる頃を見計らひ、殿への密啓好き樣にして再び新に御召し抱とあるやうにも肝煎らむ全般はよしなに〳〵と云ふ主客の密談漸やく果てゝ、彦右衛門はいざとて起坐ば、半兵衛も辭して其の旅宿へ入る。既に酒に飽きて、腹の張れると閑談の長きとに、欠仲と睡氣に苦悶める彼の十餘人も、同じく其後に引添ひたりき。

* * * * *

「火事ぢや。火事ぢや！」「火元は何處ぢや？」「三の丸　牢獄ぢや！」言ふひまに城中にては火急の太鼓を連打つる城下にては版木拍子木籠を摺りつ變事を報ぐる。と看る〳〵、火光は忽諸闇を照らして、黒烟の渦巻く間より大蛇の舌に像たる炎焔は、閃々として天を舐め、地を掠めたり。

阿呀と愕けるは彦右衛門なり、剛下兵庫を金井に託與して搦手の石垣より落し遣りつ、此よりは彼の賊を手本に牽き、代命の首を打たむと構へたる其牢獄より火出でぬと聞たるなれば、目も眩めくばかりに慌忙て驟ぎつ、馬牽けッと呼はりさま、陣羽織片手に投げ懸け纔然と打騎り、驀地に駿せ着けたるが、什麼其火の旋り方の迅かりしぞ、巨大なる角材を縱橫に組みて、猶且つ其の所々に黒鐵の厚板を裝ひ、擊つとも挫けず、燃すとも容易に燃えまじき牢獄の圍は、此時疾く一面の猛火となりて、其の外圍の右左方に建竝べたる番卒の小屋、四戸が四戸ながらに既や燒崩れ、人は死したるや活たるや、傍邊に見えず。牢獄の中には彼の賊を併せて三人の囚徒ありしが、其れも遁れたりや、將た燒けたりや、叫聲も聞えず。

然ばかりの彦右衛門も此の光景には只一乎として、面ひ近づくべからざる炎焔を瞋みつ、茫立たる折しも、山風些しく吹荒ぶよと見えたるが、其風に此火や飛びたる、二の丸の高き棟頭より火の光微々と顯はれたり。阿破と衆皆の慌遽る呼聲に、喫驚に錯愕を累ねたる彦右衛門、馬に鞭ち、一散に取て返して、あれ消留よ、水を持て梯子をと叫きつ號べど、虹蜺を摸せる御殿にわたせる梁は高し、箱棟は峭立てり、人の力も水の力も此の高處の火を撲滅むるには不足して、無慘やな、さしもに三葉四葉の榮えと建列ねたる殿造り、高樓巍閣も只紫色に黒色を交へたる渦巻く烟焔、紅色に丹色を彩れる

炎火の中に掩包れて、多時して滅理々々〳〵摧乎と桁木の落ち、屋瓦の頽るゝ轟響のみ、嗟呼是れ果然、天意か、人爲か、百疊敷の御座敷も、彼の宗佐して修理せしめられつる御茶室も、此城の名物として遠く海上の目標となれる五重の天守も、哀れ半夜の一炬の爲に白茫々として黒斑々たる瓦礫場、一堆の灰燼となりて失せ訖んぬ。

（八十三）

松坂の沖近く、四五百石積とも見ゆる一艘の繋泊船あり、船は今出帆の順風を待つにやあらむ、水夫らは既に錨を揚げ、滑車に脊さし綱を把り、帆を整へ、而後の纜艫に水を與へて、天空に爛たる星光を仰ぎつゝ、片唾を呑む整然たる其準備は宛として見る唐詩の意、令嚴夜寂寥！　胴の間には、此の船の客と見えたる四十左右の四方髪あり、酒枕劃籠少々を引き散したる其の周圍には、彼が從者にや、旅出立せる四五人の壯佼と、其容儕とも俗とも分解ぬ一人の男とあるが、彼は身に什麼に堪へ難き憂患かある、彼の四方髪の切りに言を語ひかくるにも應へで、只さし俯向きつゝ、太息のみせり。彼等は改めて紹介するの要も無かるべし、便ち、正雪、兵庫及び由井が門弟の甲乙にして、猶此船は、正雪が所有船の一隻なる駿河丸なり。

「兵庫、さ今後は隨意の天地ぢや、上に君無く下に臣なし、有るものは生死の友、人生の快樂此上の事有らうかや、さ久し振の一盞、心よう領けて御酬しやれ。」正雪は有合ふ小盃氣味好く喫して與ふれども兵庫は取る手も力無げなり。「天地も隨意、人も同志、何さま快樂は快樂ぢやらうが、又た我等身になつても御見やれ、十年の星霜を經た故國の土地を去る、敝屣を脫ぐとあるやうにも無い。」一滴の涙珠は、彼が情熱燃るばかりの臉に落ぬ。「はゝゝゝゝ然りとては心弱い、其樣の涙滴とあらば些は我等方にも飜いてお呉りやれ。こりや兵庫、今日の這事爲ようとての我等方の苦心、大抵や大方の事ではおざらぬぞ。第一金井は、彼の御寢所の曲者といふを捕拿へて、御身が助命を彦右衞門所へ愁訴と出で立つ、引續いて我們は又た、御身に管る江戸の一左右待たうが爲に、三州吉田に繋泊りして日を送る、かくて其の飛脚一昨日の朝彼處へ着いたで、直さま出船して今日の晝程當所へ着く、金井を尋ねて手筈する、彼者が愁訴聽き容れられずば例の洞穴から忍び込うで當番の士を切散らし御身を奪うて其も敵はずば切死と、——こりや我等一類は皆水盃で關つた所爲は、正雪が所有船の一隻なる駿河丸なり。

「兵庫、さ今後は隨意の天地ぢや、上に君無く下に臣なし、有るものは生死の友、人生の快樂此上の事有らうかや、さ久し振の一盞、心よう領けて御酬しやれ。」正雪は有合ふ小盃氣味好く喫して與ふれども兵庫は取る手も力無げなり。「天地も隨意、人も同志、何さま快樂は快樂ぢやらうが、又た我等身になつても御見やれ、十年の星霜を經た故國の土地を去る、敝屣を脫ぐとあるやうにも無い。」一滴の涙珠は、彼が情熱燃るばかりの臉に落ぬ。「はゝゝゝゝ然りとては心弱い、其樣の涙滴とあらば些は我等方にも飜いてお呉りやれ。こりや兵庫、今日の這事爲ようとての我等方の苦心、大抵や大方の事ではおざらぬぞ。第一金井は、彼の御寢所の曲者といふを捕拿へて、御身が助命を彦右衞門所へ愁訴と出で立つ、引續いて我們は又た、御身に管る江戸の一左右待たうが爲に、三州吉田に繋泊りして日を送る、かくて其の飛脚一昨日の朝彼處へ着いたで、直さま出船して今日の晝程當所へ着く、金井を尋ねて手筈する、彼者が愁訴聽き容れられずば例の洞穴から忍び込うで當番の士を切散らし御身を奪うて其も敵はずば切死と、——こりや我等一類は皆水盃で關つた所爲は、正雪が所有船の一隻なる駿河丸なり。

「兵庫、さ今後は隨意の天地ぢや、上に君無く下に臣なし、有るものは生死の友、人生の快樂此上の事有らうかや、さ久し振の一盞、心よう領けて御酬しやれ。」正雪は有合ふ小盃氣味好く喫して與ふれども兵庫は取る手も力無げなり。「天地も隨意、人も同志、何さま快樂は快樂ぢやらうが、又た我等身になつても御見やれ、十年の星霜を經た故國の土地を去る、敝屣を脫ぐとあるやうにも無い。」一滴の涙珠は、彼が情熱燃るばかりの臉に落ぬ。「はゝゝゝゝ然りとては心弱い、其樣の涙滴とあらば些は我等方にも飜いてお呉りやれ。こりや兵庫、今日の這事爲ようとての我等方の苦心、大抵や大方の事ではおざらぬぞ。第一金井は、彼の御寢所の曲者といふを捕拿へて、御身が助命を彦右衞門所へ愁訴と出で立つ、引續いて我們は又た、御身に管る江戸の一左右待たうが爲に、三州吉田に繋泊りして日を送る、かくて其の飛脚一昨日の朝彼處へ着いたで、直さま出船して今日の晝程當所へ着く、金井を尋ねて手筈する、彼者が愁訴聽き容れられずば例の洞穴から忍び込うで當番の士を切散らし御身を奪うて其も敵はずば切死と、——こりや我等一類は皆水盃で關つた所爲

ぢやよ、恩には被せまい、ぢやが些は察してお呉りやれ。これも何所以？　一つた彼の義擧の爲、二つには彼の夜さり我們への好意の返報、三つには殿が今回の御指圖とある非道の成敗、御身が死後までの恥辱を見せたう無いで……。」「え？」と彼は其語を抑止ぬ、感激の面を不審の色にして、「……非道？　御指圖の非道の成敗とは？」「や、未だ金井が話さいでか？」「聞かぬ半兵衞は只、當城に在ては我等武士の面皮が缺虧る、彼處に由井殿が居る、委細は會うて聽け、當城を脫くるは彦右衞門も承知ぢや？　斯う聞いたまで。」「然にて可し。實に其の武士の面皮！　否、其の面皮どころで無い、御身は殿に、犬猫の虐遇もされかゝつたぞ！」兵庫は不審を、奮激耐ふべからざる面色とせり、眉を昂げ、拳を握りつゝ、所由什麼と詰り懸る時、陸上の物音俄然に躁ぎて、看る〳〵彼の牢獄の火は起れり。耳に驚きつゝ、今又目に驚ける彼は、阿呀と叫びつゝ、方纔の奮激も忘れてか、或は猶我が故國の地なる眼前の災厄を救ふに急なるか、突と起て舷に駈り出づるを、彼が驚きより猶層に愕きたる正雪は、蒼忙しく追縋きて、「兵庫、甚麼！」彼は其よりも猶急遽たる聲、「小船お借しやれ、彼火を見ては此船に在

られぬ。「馬鹿！　彼の火はお主が仇となる虎狼の巣窟を焼く炎焔ぢやは！」「えい、虎狼の巣窟？」と益〻愕く。

（八十四）

兵庫は逃がしぬ、賊は失ひぬ、剰さへ其の預かれる城は燒燬て、村上彦右衛門、世に陳謝の術もなきにや一通の上書を遺して、其夜松坂を立退きぬ。

大納言殿には此の大變の注進を聞かせて、内内はいかに驚き思し召けむも、例の遽てぬ御本性、表面には猶ほ然り氣もなう振舞せて、生者必滅の世の道理、彼の城の燒けたりとて何に驚く事あらむ、只彦右衛門が進退、其の所存のほど、意を得ざるものあれども、先づは暫く其儘に置け、兵庫が生死不明との趣なるも、公儀へは假に燒死との披露をせよ、燒拔の普請は急ぐべからず、世は塞翁が馬なり、或は此の一所の要害を失ひつること、飜りて彼の世間なる種々の雜說撰滅さむが爲には物怪の倚倖ともなりなむか、知る可らず、兎角は鎭めて善く物の樣を見よ、騷ぐな、と仰せつ、何氣も無き容態しておはします。なれど猶ほ御心許なきふしあるか、當和歌山城下の版籍といふを熟う調査て、往來にても宿泊にても、他所より入り込みたらむ者をば、處用を問ひ、前途を討ねて、諸般につきて意を注けよ、然りとて暴う立つな、臨機の計らひは其方が例の手心次第たるべし、と町奉行吉見喜太郎を召して仰せ含めらる。

此の喜太郎、以前三人扶持の足輕より目下七百石に登庸られて、物に意得たる老練士なり其の機轉は彼の御脫落なき殿の舌をも卷せまゐらすること屢〻ありて、當時和歌山の名物男の一個として名を知らる、名下虛流なし、其れが町奉行たりし以來、三千人の人家、夜戸を鎖さず、路に遺たるを拾はず。

「其樣に引摺らしやらなくても可くおざるやア。私、胡亂な女ではおざんねえ。私、生國駿河だやア。」怎く順禮の小娘は應へぬ。此所は和歌山の城下を南に端盡るゝこと一里餘り、吹上の濱邊とて松古く、砂細かく、風强く、波暴らき如法邊鄙の荒磯なり。こゝに一宇の辻堂あり土地の民は吹上の觀音とは喚做せるが、其の新普の藁稈屋根も、幾回の暴風にか剝されて野地あらはなる、慈眼の雨露は佛身にも普及く、圓通の月影は龕前の燈明とも看るべくして、二六時中の潮の梵音、勝彼世間音ならずとも他には聞くべきものも無し、怎樣に淺ましう、凄愴なる場所なるをも猶風をいたみ、霜に苦しむ野の撫子の、樹下石上よりは優しげとや彼の順禮は此の佛の御膝の下に身を悉せて、唾りゐたるを、人有りて扯起し、猶且つ其の鄕貫をも訊へるなりき。問へる人は武士なりき、覆面の頭巾といふに面を包み、其れが手にせる龍燈の提灯と、骸骨の肋骨めきたる桁木の間を漏りて射す月の光とに、彼女が可愛き眉のかゝり、二重瞼の嫣柔しき、眼中の怜悧しき、擧止の物に臆れぬ、全般の容態を沁々と視て取りつ、其の話訛と故鄕の駿河といふに窮めて意を注きたらむやう見えたるが、「むう、駿河か。駿河は何處ぢや？」「駿河は有渡でおこさるにやア。」「郡は有渡か、村名は甚麼とぢや？」彼女は不審げに頭巾の中を覗き込みつゝ、「お前樣は一體、甚麼人だアえ。可怖ねえ眼色して他の面さア睨さツしやる。斯う順禮にさ出るほどの身であるけえ、親兄弟も無し家も無し殘金も無し村名も忘れて了ツただよう。」彼は此の少女の年齡にも似ず、其言の不敵なるに驚きつ、益〻其の怪訝を倍せるが如し。「爾うは言はさぬ……」言ひ罷けて、些しく首を傾けしが、「……其方には當夏ごろまで、兄が一個あッたであらう。而て其頃まで確に自宅に在ッたと見ゆる。」彼女は呀と愕きしが、俄頃に其れを笑顏に飜しつ、「は

ア汝やア占者けえ？　盗人では無えのけえ？」盗賊と看られた武士は、一聲高く哄笑ひて彼の覆面を掻ぐり棄つれば、年紀は五十四五、半白みたる頭髪、幾條か刻める額の皺にも、其の分別の練れたると、悪人ならざる容貌を見めしぬ。「はゝゝゝゝ盗人でも無い、占者でも無い、乃公は當紀伊國家中で然る筋の役を勤むる吉見喜太郎といふ士ぢや。こりや女子、其方の居村は久能の安居、兄をば三四郎と言うたらうがや？」

（八十五）

彼女は有繋に愕きて言句に寒りき、只其の鈴の如き眼を眤々とさせつゝ、頻りに背後を顧視るは、曩もあらば遁れむとするにや有らむ。彼女は實に安居村の三四郎が妹、かの駿府の梅屋が許に預けられたる宮なりき。彼女生得て女子に似氣なく心術の雄々しき上に、猶ほ正雪に取り飼はれて劍法、柔術の一通りは教授せられつゝ、夜は兵學の講義の席末に列かれて、門弟らが討論をも傍聽しめられしが、彼女は其兄の、膽力と、膂力とを受領へにけむ、處女に不相應なる腕節はあり、身材は巨大し、思慮さへも其れに伴れて尋常なる十四五の少女の比にあらず、物の道理の心に通悟れて、世間の是非の辨別の着くが隨に、兄が死狀を只管に懐慨て暗に城代に復讐せむずの志あり、正雪亦た爾る理由の事を或る方に説き曲て、愈其意を固うせし程に彼女は其の師なり主なる正雪が爲なる事を、我が宿執を霽らすが爲に行し呉るゝ歟のやうにも心得て、先は我が身の生死の寃家たる柳營の一門、味方とあらば此上なう輭憑しきも、敵とありては又第一に可怖べき紀伊國殿の容子偵察來れとの命令を領承き、存觸れたる順禮姿に身を假裝して、一本の柄杓、一領の笈衣、松坂までを半兵衛に送られて、彼の事變の後は膽大くも紀州街道を獨り辿りつ、故意と尾鷲より那智にかゝり、紀三井寺より粉河に詣るものとして、今此の吹上には來れるなりけり。

かゝる剛健なる少女なれど、剽賊山家と思ひ侮れる我が目的はからりと外れて、紀州殿家士吉見喜太郎、加之其人が一癖あるべき立派の武士、我が額に書きてあるかを讀むかの如くに直地と我が居村、兄、自己が身上まで指されたるには愕きたり、餘りの可怖しさに思慮も失せて彼女は實路を奪うて逃避むとしたるなり。誰か知るべき、吉見も眞實は其の案外なるに喫驚たらむとは。彼は其の平生より得意とせる、罪人を操縦る誘導でふ方便を纔かに用ひしに無意にして掛けたる罟は、偶然吾に其の獲物を獲させむとせり。彼は益〻畳み懸けて、「女子、什麼ぢや。其れに相違は有るまいな！」猶彼女が奔りもすべき氣勢と視て、其の利腕を無手と捉りたり。捉へたるは二の腕の急所なり、女子は其の捉所の法に協ひたるに等閑の敵に非ずと了悟れるか、但しは鬱隙を覘ふか、身動きも爲で月明に此方の眼睛をじろ〳〵と覷つ、「殿様、妾を縛るのけえ？」「いや綱縛はせぬ。又た綱縛らぬとも限らぬ。其もじ、我們が問ふことに善う回應て、有體に物を言はゞ那麼で綱縛るか。なれど然も無くば……。」馬手にて捕縄の端を微と見せたり。「妾はア縛られる因緣は無からすやア！」「因緣は無くとも、此方にて胡亂の者と看認れば容赦は無いぞ！　汝は其の、今の、有渡郡安居村の三四郎が妹で有るか、又無いか、有體に匿まず發揮と曰へ。斯ういふ吉見喜太郎は、和歌山が家中の町奉行ぢやぞ！」彼は語氣を稍暴くして、彼女が面を磴と睨めたり、月光を浴びて飽まで白かりし處女の色は俄時に漸蒼味を帶びぬ。「白はなきやア縛ると言ひなさる。白ても大方縛りなさろ。妾の兄様御咎で死だ其の妹だから……！」恁くと聞くより吉見は忽然眼を瞑りて、言下に誤破すべき興の體なり

しが、又俄頃に其の氣色を換へて、「其の心配はすべて無用ぢや、其も兄の御爲になつたは駿河の事、當紀伊國では毛頭以て差構は無い、いや構への無いどころかや、其方も存知ぢやらう當家中の牧野兵庫、其もじが兄の腰押の科で、此ほど松坂で切腹した。其の兵庫は殿の御愛臣。兵庫最期の際、呉々も其方が事を申し遺いて、萬一三四郎が妹と名のる女、我儕を尋ねて和歌山へも來ば善う見繕で遣はされい、彼女は駿河に在らうと思ふが其後は便りも聞かず、定めて活計にも困るであらう、自然參らば何卒其者が一生を見棄てずに……と斯う申して相果てた、因て殿にも、右の次第で萬一其方が見えたらば、と有難い御意なされて、我々も其れとなく配慮いたした最中ぢや。處へ、其のお主が容貌の三四郎面體に酷う肖てをツたで、倘やと箇樣に訊うたのが不思議にも的中たぢや。喃。されば怖い事も恐ろしい事も甚麼も無い。結句は殿より御扶持米澤くやうな結構な身にならうも知れぬ。疑念にも及ばぬ。愈然樣ならば身と輿に城下へ參れ。」話の中より處女は瀧然と泣出だしぬ。其の滂泣の仔細を問へば、彼女も眞は兵庫を便りて當所へ來りしに、其れが既や世に亡き人とは力も身も落ちたりとの事……

（八十六）

「彼女は怜悧しき奴ぢやの。」と殿は仰せぬ。「いかにも怜悧しき、憎き程の奴でござりまする。」と喜太郎は應へぬ。「はゝ、憎いとは申すな。彼女が少齡で、獨歩敵地へ入る、思へば那麼ほどに悲傷しい事か？　吁有爲奴ぢや。可愛い奴ぢや。」殿は感涙の御瞼を暗に瞬かせつゝ、稍うち傾首け玉ひしが、「毒を藥に使役ふといふは、醫師の良ぢや。然やうの奴は騙使方で、案外の役に立つもの喜太郎其方、自宅に養きて愛憐りて取らせ。さるにても……予も看よう。」「御覽ぜられまするは御尤も。然りながら、御油斷はなりませぬぞ。」と彼は危惧むもの、如し。「いや、其方は、いかう心底畏怖たものぢや。はゝゝゝ案ずるな、然る程の小女郎、多寡がぢや、多寡がぢや……」殿は同じ言を反復させて、御嘲笑の氣に見えぬ。「いや其れが其の……」と又申すを。「ま、可いは。召伴れ參れ。但し衣服も昨夜のまゝ。其姿なるが所望ぢやぞ。」

＊　＊　＊　＊

彼は、彼女を女駕にうち乘て御廣敷通りを御奥に入れつるなり。大納言殿御常間は、五十五萬石の格に比して、然のみ美麗といふにはあらねども然りとて紀伊國の太守、御三家の御一家、黄金の砂子を播き懸けたる御紙襖には、金滅金の御引具、紫色の厚總はそれに垂下れり、雲繪、綱縁の御疊板もて張れるやうなるに、御紋散しの御手箪笥、料紙硯、御曲彔。御刀懸は御斜後にありて見えねども、それも同じき御品なるべし。但見る一間、十餘疊の天地、金光の燦として、銀彩の爛たる中に、殿は白綾の無垢衣に、唐織の胴服を召させ白き厚綿の御褥の上に御座なされつ、御膝には大形ならぬ銀の手爐と云ふ物を安かせて、徐かに御掌を焙らせらる。御年齡四十一二、只今は御燕居の時とて然ばかりの威嚴は侈はせ玉はぬも、天然に領得させ玉へる相貌は堂々威風凜々、設ひ什麼ならむ膽壯く、魂健かなる客なりとも、這個御容儀に對して、狎れ呢づきまゐらすべき樣は見えざりき。

窺より出されたる宮は、今此の靈悋しき御前に在り。喜太郎に叱、叱と注告れ、拋げ出す如くに其處に叩乎と平坐れるが、怯めず臆せず、瞬もせで、銀燭の目眩しきまで灼ける耀光の下に殿の御面を穴の明くまで注視りつ、「はア御前樣は殿樣かアえ？　妾、お初に御目に懸りやす。妾、駿河の有渡濱の、久能下の安居ちふ村の宮といふ女でおざるがやア。」

甚麼さま此の小女郎、一條索にて繋がるまじき強口馬なるかなと、殿も暗に、其の心中に驚き玉へり。なれど又た、其眞玉を延べたらむやうなる臉、手脚の、從前見も馴れ玉はざる順禮の、笈衣とやらむいふ奇異しう汚穢う淺ましき衣に包まれたるが、一層愛らしくも、珍奇うも御覽ぜられて自然の御笑顏、「ほゝ其方が三四郎の妹といふか。名は宮か。年齡は幾歲ぢや？」「十四だがやア。」「今まで何處に在た？」「兄が安部川で磔殺されて、妾も首さ斬られるかも知れんげえ、疾く逃避ろ、其にやア兄の冥途の苦患も助かるけえ、順禮になつて觀音樣拜んで歩けと村の衆も言はしやるけえ、それで方方の村所を打つて歩いただよう。」彼女は今まで經歷せる世路の艱難を訴ふるにや、打萎れて、其の紅玉の如き眼瞼を茜木綿の手巾の手にて摺り紅めつ、「…殿樣の御國でも、那智の漁師に虐待られましッけよう！」「其れは憎い奴。然し其の那智に來る前に松坂といふ市街は通つたか？」「はア妾、通行たよう。」「其城に其方が知てる牧野兵庫といふ士が在たが尋問たか？」彼女は目を圓くして、「いゝんね。はアすんなら兵庫樣ア彼の御城に在らしッたかやア。嗟、すんなら設問るだツけに！」

（八十七）

遺憾げにと見ゆる彼女が面を御覽じて、大納言殿、「果ては兵庫も、其方が身上をば遺言たぞ。」彼女は涙含るにやあらむ、御返詞はせで、首を俛れたり。「いや兵庫もあらうなれど其人よりも最多と其方を可愛うした者が有る筈ぢや。」と喜太郎は喙を容みぬ。宮はふり仰向て、「松坂にけえ？」「いや、駿河に！」「兄貴けえ？」「兄の他にも…」「ンむ、庄屋樣の老婆か！」頻く端を、殿は突如に、「正雪よ！」其の御辭にや喫驚きけむ、「阿呀可怖！　魂消るよう、汝、あの婆さまは其樣な名ではあらアずやア。」喜太郎は其悶々に堪ずして蠢らるゝ的と知る知る說明せり。「由井の先生！」彼女は初て首肯きぬ、語調を可笑しく、「あゝ先生。先生樣けえ？　可疎しい人てやア！…。」此方は驀直に竄入れり。「可疎しいとは、甚麼が然樣ぢや？」「あの先生樣、妾が兄樣、殺しただやア。兄貴を呼附ては、强訴せずかあアて、とう〳〵那樣に磔殺せて了ッただよう。だから今回も、自己が宅へ來ず〳〵ッて、世話して遣んべえちふ言はしッけえ、妾怕うてやア、其故で那家へは行アずやア。」彼女は其の正雪との關繫を簡單に言說了たりき。然も其一絲も紊れず、秩然として條理ある彼女が僻說には、彼の喜太郎すら再び窮訊るべき辭柄を得ずして只手持無氣に兀坐れり。殿は含笑せて、「憐れいものぢや、然樣怜悧くば、物の道理も分曉るであらう。其方は世間に、復讐といふ事がある、存知かや？」彼女は猶豫はず、「はア、知てるやア。あの曾我兄弟の…荒人神社の…？」「然樣ぢや、其の讐討ぢや。すべて讐討は、親兄夫伯父叔母等の目上の族親の橫死について、其の子弟妹妻甥姪などの目下の者の爲で協はぬ義務ぢや。其方も兄を橫死させたが、其の冤家を討つ處存は無いか。」御戲談のやうに仰せられしも、御眼光は些しく冴えたり。喜太郎は、はゝアと感じぬ、小膝を拍たむとする其手を飜して、彼は額を摩一摩ぬ。宮は浮と御衞に魅れりき、一有る段かやア！　妾やア彼の兄樣の刺殺いた人…」とまでは言ひしが、俄頃に氣注てか、其口を噤み、坐りたる牀の踵を照れ隱しといふに摩弄りぬ。殿は首を否と掉らせて、「其れは見當の太く違ふぞ。槍を着けたるは獄卒とて、刑人を刑すが役ぢや。甚麼の其者に冤苦があらう、予の申すは、其兄を、其の獄卒の手に懸けさせて、磔殺させた其奴ぢや。」然すれば、城代、井に其の用役の彌五兵衞、總て彼の

一埒に關障りたる吟味の與力同心等其者なり。其者等の寃家たるよしは我も知了り、なれど我師は、猶其等を怨敵の末類として、其の寃家の根本たるは、江戸將軍家、及び執政の老中、就中松平伊豆守、阿部豊後守此の二人こそ必死の仇敵、其肉を醢にし、其骨を齏粉くとも和女が身には天足らぬ者、とまで宣はせしが、其の江戸老中の味方たるべき此殿が、恁くまでに頼もしう、我が復讐の隻腕ともなりて賜はさむ如くに仰するは抑什麼？　思ひ得たり、其れは果して我師の宣ふ、此殿に御謀叛の御意あるか。其の御意より江戸老中をも憎き者に覺玉ふか。其等より我を師の細作と御覧じつゝも歯様に親しうは仰するか。雖然、師の豫て誡令め玉ひし縦ひ什麼様なる甘口に遇はむも、決して其の本心を漏泄べからず、漏泄ば其れが大望の破綻、たゞ汝は和歌山に行き、其の城下の動靜を察、時宜によりては松坂に同一しき或る大事を決行へとある、其の御教訓の第一は、疾くも此身に降り懸れるをや、恐ろしや、言ふまじ！　言ふまじ骨が命利に化るとも言ふまじ！　但し其の此れ程の思し召ある殿が、何故にあの兵庫どのをば苛酷うも爲玉ひし、此れ一條が不審なるが猶其は御談の緒を牽きて、釣りても見ばや、と此の可怖しき少女は、外見可愛き胸の裏に意ひ占めたり。

（八十八）

「其の獄卒の手に懸さいて、妾が兄様を磔殺したちふは、讒人だやア？」と彼女は虚問ひぬ。殿は御眼を直地と注がせて、「嘘解らぬか？」「暁解りましねえ。」「其の讐敵の本人、其方が兄を殺した者は、正雪ぢやぞ!!」磯とばかりに睨めた玉ふに、宮は呵呀と、「ま、途方も無え！」「途方も無き事があるものか。現在、其方も、今、三四郎を殺せし者は正雪……と斯う言うたでなきか、强訴を强勸めたが正雪で、其の强訴の爲め三四郎死せしとすれば、實にも其方が言ふ通り正雪は兄の讐敵。自身として手こそ下さね、其の兄が胸に槍を刺たは正雪ぢや。」彼女は呆れて眼のみ瞪れり。喜太郎は其傍より、「御理解、悟了たか？」「はア。」「合點は行た哺？」「はア。」「合點が行たりや、正雪を寃家と狙ふか？」「はア。」「狙ふとあらば、此の喜太郎が後見しても取らせうか？」彼女は稍思考じて、「はア。いゝんね。要りましねえ。」這處ぞと此方は膝を進めぬ。「要らぬとは何故ぢや？　甚麼とした？　正雪が怖いか！　兄の讐、口惜しう無いか？　其ともに、寃家とされぬ仔細もあるか？」勢込まれて、處女は獨語けり、「あゝんのはア、怖氣ねえ事ア無えけんど……。」「怖くも無くば、何故疾う頼むと言はぬ！」宮は忽地冷然として一笑せり。「頼みたくてもやア、先生様ア妾が兄貴の師匠様。兄貴の師匠様なら妾にも師匠様。兄弟は一身と言ふけえ……。」喜太郎は不審せり。彼女は更に吻々と嘲笑て、「汝、未だ不了解かやア。師匠様ア父母と同一だ。父母と同一の師匠様、寃家と狙ふ法はおさんねえ。ソレとも紀州には子が親を討つ、其様な敵撃もおざるかやア？」さしもの喜太郎もはツと語塞りぬ。背負たる兒に漫瀬にあらぬ、牡牛に腹を突れたる無念さに拳を握れど、道理の前には其の拳の遣る方もなきを奈何せむ。彼は冷汗を額に流して齶めたる眼を俛目となしき。「はゝゝゝゝ善く申した、宮。流石は其方も教育柄ぢや。十四の少女が予が面前へ出て、然様の言が言はれたものか！　有爲奴ぢや。さ褒美に此物を取らせう。其座にて喫べい。」御手箪笥の食籠より、饅頭のいと巨大なるを御自身に箸出でさせ、美麗き有平糖と一つに、小奉書の御鼻紙に載せて、いでとて賜はす。蓋し異數の恩賜なり。此の異數の寵遇を被けたる奇異なる少女は、纔かに頭を下げたるのみ

にして、深くも謝せず、切りに其の御菓子を注視りて念ふ態ありたるが、軈て無作法に摑攫みてむしやく〳〵喫ひつ、「殿様、お茶一杯。」「はゝ次の釜前にて、獨服にせい。」「え。」「もう廢止やれ其の駭河訛り、田舎行儀、見たうも無い、以前の民部が傍婢の宮になれ。」「あんだツて？」「甚麼とは未だか。汝は故意に田舎女を假裝ひ、無禮を、無禮をと振舞ふが、其の今の饅頭の給べ様を見い、附けて取らせた楊枝も四片に割り、扨て摑攫みて打喫ふ、農家の小女郎が左様の物の喫ひ方するか。されば獨服で喫茶えと申すぢや。然りながら宮、其の苦心も悉皆徒勞ぢやぞ。正雪めが行爲すところは皆天理に逆うて居る。人を陷し、人を苦め、人を損傷ひ、世を攪亂す、いづれも天道の與せぬ所ぢや。其の順逆の理は追々に予も說て聞せうが、先づは喜太郎に在りて人間の履むべき常道といふを聽け。今日は是れにて退れ。然りながら、あゝ有爲奴ぢや。」此の御意の半より、彼女は拋出だしたる足を斂め、窘したる膝を改めて俄頃に其容鞠躬如たりき。肅敬みて手を支へ、頭を下げたる、口狀も爽朗に、「では御暇を仕つりまする。喜太郎様、御前宜しう……。」今更ながら喜太郎は直地と悄れつ、此の化性の女を睨めたりけり。

（八十九）

寛永二十年は暮れて、廿一年（此年十二月正保と改元）の春とはなりぬ。去年の暮より雨寡くして西北の風多く吹きたるが、江戸にては咽喉の脹れ塞がる病疫流行れて、爲に死する者夥多し。將軍家にも此病に罹らせて、奥表の御醫師等、種〻様の御治療を申し上れどもはかばかしき御氣色なし、結句は御大切なんどの沙汰、世間に聞えしほどに、麹町の御館なる江戸詰の家老水野對馬は驚きて、取敢へず其の趣を御國元に注進す。此使夜を日に繼ぎて和歌山に參着し、委細を披露したりし程に、殿には以ての外の御仰天にて、恁くては當所に安閑として在るべきに非ず、此の三月は參府の期なり其を二月早めて急ぎ出府すべきもの歟、其れ前の御他界とあらむには是非なきも、萬一御存命の間に合はゞ御病床にての御目見、御遺言の様をも承はるべしと思ふは如何、との御諚なり。重職の人士口を揃へて、げにも此の御義、御尤もと伺ひ奉つる、若君様（竹千代君、是れ四代將軍家綱公なり）既に御誕生ありしとは申せども、是れは一昨々年の八月（寛永十八年）にて、未だ御丸にも入らせられず、當年纔に御四歳なり然らば其の御後見の義、當御家か、尾水兩家の中たるべし、其の節には御在府と候はざらむも如何、其の餘にも仰含められの數にも候ふべく、然なきも天下の御大事、殿様ましまさでは宿老中にて決し難き義もござあるべし、是れは火急の御出府、といふ衆議は一同決せり。然らば右の伺の急使をまゐらせよ、誰彼と言はむよりも大學參れ、との御意によりて、波邊大學、其座より宿所にも歸らず、御判の物頂戴して打ち立つ是れ正月の廿日なりき。和歌山より江戸までは、百四十六里餘なり、一日五十里を走るとして、三日にして着府なるべし柳營にての僉議一日、卽日彼地を發つとすれば、遲くも當月の晦日までには其の左右のあるべきものと人々の待つ其日は遙ぎたれども大學は勿論、飛脚も來ず。什麼にやしつらむ、此の冬淵に川留とても有るまじきを、其とともに大學自身の病氣か、或は將軍家眞正の御大切（薨去の事）とならせられて執政衆物も手に着かぬなる歟、兎角は途中までの追懸の早打を出だせといふ其の評議は二月の二日なり。

朝より雪は萬字と飛び、巴と卷けり、衣に落つる梅花にあらで我魁といふ壯士等はいで

と言ひつゝ馬牽き立つる、其の突端へ紛々として降り頻る粉雪を早打の呼息に嘘き散らして、追手の橋に駕を卸てさせ、慌忙しく出迎ふる介抱の士の肩に懸りて立出づるは大學なりき。彼は實に息も絶なむ體なりき、眼は血逆りて吻く呼吸は炎焔の如し。彼は一昨日の夜江戸發途て一日二夜にして和歌山へは馳せ着るなり。恁有る急劇の注進は、果して是れ甚麼の變事ぞ？將軍家の他界か、紀州家の一大事か其の齎らす處果して甚麼！

彼は蹌踉くを扶持せられて御前に出でぬ。但見る其年紀廿五六なる小姓立の美男子、眼眦も昂上がる許りに頭髻を緊締めて、其紅ぬの脣を蒼白うしたるに、頭より肩までも雪粉を浴びたる、目醒しきまで凄愴しき狀態は、列坐る人々に先づ其の胸を戰慄しめぬ。

「大學、甚麼とぢや。心を鎭めて……。」四下も響く大音聲もて叱るが如くに殿は宣へり。「はッ。」「汝ともある士が、甲斐無う見ゆるぞ！」「はッ。」「將軍家、御他界か？」「いや。御別條ござりませぬ！」殿すらも驚き玉へり。大樹薨去ともあらむにこそ、恁う慌遽しう注進もせめ、然も無くして此の一命を賭けたる早打、抑那麼事ぞ？と御氣色も變りて見え玉へば、大學、「と、殿、御大事！委細は此狀に……」領に懸けたる黑革の狀函を指さすに、近習の士は急ぎ取りて、「此れへ？」との御意の隨に進らせる。綱げたる紐を解く手遲しと引披きて覽なはすれば、一通の折懸狀！其の表包の一行の文字を御覽ずるより呀！！看る〳〵御眼に、言ふべからざる可怖しき光燁は射したり。

（九十）

狀の表包に認めしは抑甚麼樣の文字にして、沈重自ら持し玉ふ殿の、恁く迄には愕かせたるか？上には、紀伊大納言殿御謀叛并に御國政非分之諫狀、との十九字ありて、下には一行の署書あり！

曰く、元大納言殿家來、當時浪人、牧野兵庫御面の色の愈〻凄愴うなりもて行く中に、内なる狀を引抜きて御覽すれば、第一に、御領内鹿狩の事。久居狼藉、雲出川合戰の事。松坂城御茶屋御修理の事、和歌山御城堀浚の事。同く土居塀附替の事、水道埋替の事、諸國浪人御扶助の事。大阪浪人召抱の事、比叡山御風呂場御取立、并に過分の薪木料御寄附の事、高野衆徒御手懸けの事。諸國寺院御普請の事。松坂城御茶屋御修理の事、和歌山御城堀浚の事。同く土居塀附替の事、水道埋替の事、諸國浪人御扶助の事。大阪浪人召抱の事、比叡山御風呂場御取立、并に過分の薪木料御寄附の事、高野衆徒御手懸けの事。諸國寺院御普請の事、熊野浦鯨舟大船御打立の事、海道筋斥候として七里役所御置きの事又彼自身が上に關りては非道の拷問に懸けられたる事。檢使なくして切腹の事、此等を目安の個條として、紀伊國の國政、并に平日の御行作、有る程の事、又た絶て無き事をも取り交ぜて、總じて三十七ケ條、これに各條理由を太も詳細に堅紙凡七尋餘りに書認めたりき、何さま是れは、此國の仕置に深く管係りて、其事情の蘊奥を熟う知れる者、乃至殿が御左右に年來奉仕して、親しう御意をも承はりたる者ならでは、恁くは詳密に、且は巧妙に、物せらるまじきものにして、名判の如く、訴人の兵庫奴たるよしは一見疑ひも無きものなり但し、眞箇、恁うやうの批判に遇ひては予すらも頗ぶる其陳謝に苦しむものありて、惡うもあらば、重職の士一兩人の切腹か？斯くして予は隱居。祿高も半知、當地を去りて四國若くは九州の盡處にも土地替？如是き判決は、昨今新就の吟味役とても其の鬱案に躊躇ざる所ならむ、殿は想念せぬ。軈て、彼の寫取の狀いと靜穩に卷き收めて御膝の上に磊と措かせ、御目を瞑ぢて、多時は仰せ出さるゝ旨も無かりき。左有何候の面々は、殿も仰せず大學も言はず愈〻間の御遊とも見る沈鬱たる御座敷に、只陰結せる殺氣のみ充ち盈てるに、眼を睜り、息を凝て、爾よりして出づる御意の、善か惡か疾か徐か、いづれにも尋常には踰えたる事項とは見ま

ゐらするも、其件の大か小か、緩か急か、といふに胸を悩めつ只管御膝なる彼の長文の狀なるものに瞳睛を注ぎぬ。殿は良有りて、「大學、扨も意外の義ぢや。此狀は柳營老中共より渡したか！」はら〳〵と釀せし憤涙を掻き拂ひて、大學は應へぬ。「御沙汰通り、憎くい奴！　其狀は伊豆殿（御老中松平伊豆守）御下渡とて、其の公用人奥村手より……。」「訴人自身が持參つたとか？」「いや其れは封狀に、飛脚持參、右公用人奥村方へ達したるもの。其の飛脚は名古屋の三度屋（飛脚屋）京屋が夫と申しまする。されば此狀は、もとより以て出所不定、表立ての御取上には相成らぬ物、且つ毎事公儀を重んぜらるゝ紀伊國殿御所作として有るまじき義とは存ずれど、たゞ其の、此のほど松坂にて燒死せしとの御申立ある牧野兵庫が猶世に存りてかゝる曲事を行ふといふ、奇怪の至り、且つ右の狀中にある事項の上に於ても、當方些少か聞込みの義と符合するかの事あるにも存ぜらる。旁以て然るべき衆一人を急々に差上せられ、目安き處實、伊豆守目前にて眞直の御申開き、御尤も歟……と右の奥村、傳達にござりまする。」「むう。而て伊豆守、同列にも相談とか……上聽にも達せしとか……いふ如き氣觸も見せつるか！」「いや。然樣にも。……なれども奥村が口氣、好意、好意と申すうちにも自然威喝がましう、天晴れの御大事ともござあるやうにも聞えまいた。」「むゝ、扨て參府の義は？」「上樣御不例、追々御平常のやうに渡らせらるゝに仍て只今御急ぎの御出府は……」「無用とかむゝ！」殿は御胸に掌を中てさせ、御苦悶の體斜めならずに見え玉ひしが、「こりや、誰ぞ。老爺を喚べ。」老爺とあるは、田邊に在る、安藤帶刀直次なり。

（九十一）

安藤帶刀直次は、前名を彦四郎、又は彦兵衞といふ天正十二年四月、尾州長久手の合戰に池田勝入父子を目身槍下に討つたるを初として、其前には姉川、長篠、遠州の犬居、其後には大阪冬夏の兩陣にいたるまで一代の武功數も知られず、故御所樣（家康公）にも殊に御心易き交ではあり、其の武勇を稱せられて御愛子常陸介殿（賴宣卿）の御保傅となされしより爾降、外に對ひては紀州男が面を磨き、内に在りては是非賞罰を明瞭かにして、其君と治を籌ること三十餘年、今は行年纔りて七十八歲、昔日の元氣は喪ねども、流石に老病に身を冒されて和歌山へも出仕せず、其の居城牟婁郡田邊にありて餘年を樂しむ。

爾く、年老い、身癒れたれども、今も猶ほ紀伊國五十五萬石を鎭定うる要石として、上下の重望は其の肉落ち骨露はなる雙肩に懸れり。されば殿が時ありて、老爺を召す、其の老爺とある御沙汰の中には、自然國家の大事てふ意味を含めて、帶刀どの出仕とあれば城中城外、農商の諸民、田家山伏方外の輩にいたるまで、先づ其の件の甚麼なるべき大事ならむと、此の老て忠なる人の方寸に賴て術好く落着らむを疑はずして、安堵の胸を撫るてふ。想ふに、這個老將が鐵の如き冷然なる眼光を彼等は視て拔苦與樂、慈惠圓滿なる彌陀の白毫とも拜むならむ。

此日の、老爺を！　も亦形の如き大事なりき。なれども和歌山より田邊までは二十里にして遠し、此方よりの御使は明早までには到着くべきも、彼老の參着は疾きも猶三日の後たるべし、目下に差懸れる急變とにはあらざるも猶一刻も疾う御對面をと思し食す殿の御氣色を、水野は覗ひて、「兎角は往返の日程、御待遠に渡らせらるゝ。偖か其の御狀、私持參仕りまして帶刀意見を聞き、右を一々早馬の書通にて啓上とござりましては……？」甚麼さま、

とはあるも猶其の勘考の御首を傾けたまふ時、御近習の一人は遽たゞしく走せ來りぬ。其者が手を支へ、何事をか言上といふ隙も有らせず御紙燭瓦落々々と引明させて、突然たる哄聲、「や、殿、帶刀こと熊野の靈夢を蒙つて參上しまいたぞ。聞けば大學、只今の下着さうな。訴狀についての評定は甚麼とでおざツた、あはゝゝゝ餘りに殿が自個怜悧う振舞はせらるゝから箇樣の失措も果には起る。偶には些の灸おめさるゝも好い鍼砥ぢやろ。はゝゝゝゝ」彼は其の離肉ばかりの口腔を脹喎めかしつゝ死なでは休まぬといふ名負の諧口を繕き立て、殿中御免の杖に腰を伸し、えいやとばかりに殿の御傍に座を占めて、「あゝ好い氣味ぢや。前途は長遠い。今から懲りるも遲うは無い、善くおざらうよ、あツはツは。」憎きは憎きも猶ほ懷かしきは甚敵と、談合の敵とかや。況て今の此の老爺が驚かるゝ迄なる不思議の參着は、甚麼さま其の靈夢といふ權現の影向のやうにも御覽ぜられて、彼の戲謔をば苦笑ひし玉ひながらに、殿、「久濶しや、老爺、此雪にも負けいで健勝は重疊ぢや。什麼にも今ほど…然るにても、權現の靈夢とは？」彼は痩眩を二つ三つ撲きて、「那麼の雪！是ればかりの小雪！遠州の犬居の陣には廿日間、丈に餘る大雪の中に埋ツて、四郎（武田勝頼）が勢と白眼競した直次ぢや。負るのなんの！」太郎作は其獄びの口狀の執合しぬ。「やと、老人の御元氣は今に初ぬ。眞實は、其の、右について只今拙者、御分在所へ推參と致さうと存じたところ、折柄の靈夢は何寄りぢや。但し其の靈夢如何やうの神告？仔細疾う。」帶刀は啞然として大笑せる面を轉して、「あツはゝゝ、仔細も無い神の御告。いでや殿へまで…。や。こりや人々、乃爺が神託を聞かうものは、殿と太郎作と、疲勞は爲つらうが大學ぢや。自餘は皆退いた〳〵。」我鳴られて諸士は皆御次へ遠慮しぬ。殘れるは中奥の御廣書院に主從只四個。其中に得々たるは獨り此の奇異を銜へる老※にて、他の三人は思ひ難ねたる其の眉を比しく顰めつゝ、彼が訴狀の顚末を知れる理由と、不思議の神託といふ吉凶の什麼に唾を呑みぬ。

（九十二）

「殿、神託の本意は江戸にぢや。」「江戸とは？關東とは？」と水野は驚きぬ、大學は其の疾速に呆れぬ、殿のみは然もこそとの稍御合點はまゐれる樣なるも、猶疑訝の御色は露れで其面を注視せ玉へば、帶刀は頷きて、「豐後からぢや、內實は阿部豐後の手許からぢや、豫て箇樣の事變もあらばと囑託で置いたが…那者は律義の奴！故々と家來を早打にして危急を告げた。」老人が目を瞋るを、殿はさればとの御笑顏、「でも在らうかや。然もとも思うたが…。で神託か。神託とは好い。」老人は其の御口を睨つけて、「直ぐ又た然樣の事を仰しやる！これは神託。眞實以て熊野權現の神託ぢやは。便ち、權現は豐後の口を籍りて宣せらるゝ此の老夫は又其の託宣を夢の中に承はる其の道理ぢやは。殿は日來に佛神を崇敬々々と言はせらるゝも、表面の虛信心、眞實の御心が無い。其故に箇樣の時も神明の冥護を被られぬ帶刀は口には言はね、誠意に權現を信仰する。ぢやに依て斯樣の御加護とある理由ぢや。諸事自個怜悧う思し召す、甚麼のそれが凡夫の料見！誤謬の頂邊ぢやは！」頭顱粉韲に毆擊けて苦笑ともせぬ老骨の硬さにはさしも上手の殿が御手にも自然餘りて見えぬ。水野は其れを執做し顏に、「御老人、それは枝葉ぢや。御折檻は後事、只今の此の訴狀について…。」「いや。」と彼は頭を掉れり、「…其の料見御改悛しやらねば、諸事が無駄ぢやよ。今の言ふ自個怜悧うに振舞れては、事を爲損じ、其の爲損ずる度每に、ソレや、內實は阿部豐後の手許からぢや、豫て箇樣の事變もあらばと囑託で置いたが…那者は律義の奴！故々と家來を早打にして危急を告げた。」老人が目を瞋るを、殿はさればとの御笑顏、「でも在らうかや。然もとも思うたが…。で神託か。神託とは好い。」老人は其の御口を睨つけて、「直ぐ又た然樣の事を仰しやる！これは神託。眞實以て熊野權現の神託ぢやは。便ち、權現は豐後の口を籍りて宣せらるゝ此の老夫は又其の託宣を夢の中に承はる其の道理ぢやは。殿は日來に佛神を崇敬々々と言はせらるゝも、表面の虛信心、眞實の御心が無い。其故に箇樣の時も神明の冥護を被られぬ帶刀は口には言はね、誠意に權現を信仰する。ぢやに依て斯樣の御加護とある理由ぢや。諸事自個怜悧う思し召す、甚麼のそれが凡夫の料見！誤謬の頂邊ぢやは！」頭顱粉韲に毆擊けて苦笑ともせぬ老骨の硬さにはさしも上手の殿が御手にも自然餘りて見えぬ。水野は其れを執做し顏に、「御老人、それは枝葉ぢや。御折檻は後事、只今の此の訴狀について…。」「いや。」と彼は頭を掉れり、「…其の料見御改悛しやらねば、諸事が無駄ぢやよ。今の言ふ自個怜悧うに振舞れては、事を爲損じ、其の爲損ずる度每に、ソレ

老爺！　ヤレ老爺！　襁褓の御世話をさせらるる。成る程此の老爺は保傳ぢや、其の尿糞の世話するが本人の殿の爲ばかりで無い、故御所様御爲とも存ずるで、爲るは敢て不足は言はぬが、我等當年七十八、何時まで、の餘命とおもふ！其の我等亡い後に又其の花やりの料見で爲損ぜられて、ソレ老爺と召されてからが冥途からの出仕となるまい。それで紀州の御家滅却！其折に滅却なりや今爲たとて同一いぢや。肝煎るも馬鹿々々しい。」頻りに强擔られて、殿の御手も已むを得ず額に加りぬ。「道理ぢや。赦せ。追想ば予の爲損じも大分ある……有るやうぢや。」「有るやうぢやかえ？　御覽ぜられ、兵庫訴狀は皆尤もぢや。三十七ケ條、一々道理ぢや。帶刀が老中ともありや、彼の一二ケ條でも殿を平穩は措き申さぬ。但し其の根元はといへば殿ばかりで無い、第一が御母親樣（養珠院殿）其れが不覺悟で渡せらるゝに故御所樣も宜しくない。たゞ殿を末子の、血の餘りの甘癡嬌放題の、樣貌一途に育てられて、——それが可く無い。」「いや、謝び入るよ。もう申すなよ。父上、母者御事など言うて哭りやるなよ。悉皆予が不肖ぢや。」彼が首は强情にも掉り止まず。「と言はるれば、殊勝に聞え申すが、いや中々油斷がならぬ、第一が、其の御身の口頭の甘が苛い御痛ぢや。微々聞けば、御身は、故織田殿の敏警さ、太閤の膽の太さ、故御所樣の御武略とを一緒にして、攢めて有たるゝなど、或る馬鹿者の阿諛たことを眞に受けられてか、御自身も然思はるゝなど評ふ者もある。これ實ならば以ての外、沙汰の限りぢや、織田殿と太閤とは我等傍近う在らねば知らぬが、故御所樣と御身、比較も！　事も愚かや結局は父と子ほどに差違ふ！　故御所樣は御機轉染みたること竟ぞ何時しか仰せられぬ。御身は其の機轉を鼻尖に懸けらるゝ。是れが天下取と和歌山の領主との天然の差違、是非も無いのぢや。天下の大將は御口不調法も一つの藝、他に奥行を見られぬが何寄りの德、さればこそ太閤在世には、二代の天下は前田殿（利家）と誰も人も皆思念で、江戸殿といふものも無い。あの目敏快い蒲生（氏鄕）すらも、なんの彼の三河の吃口殿、何事を爲得らるゝかと嘲笑うた程の事ぢや！　其れが何時か、人の見ぬ間に、身上を肥太されて、世間の目の注くころには木挺でも動かぬ大將と御成りなされた。御身樣は其事が什麼か？　小刀利の小細工好ぢやで、何一つ色立つた事なされぬ中から、ソレ謀叛の、ヤレ旗上のと、目抉ら立てらるゝ。手扯足械八重縄を身に繫られて何事が成就る？　現の證據が、あの領内の鹿狩をお爲やる、直樣隣國の安濃津では籠城の支度する、これで甚麼の大望か？　はゝ及びも……思ひも寄らぬこと。と言うて其の生得は變改されぬ今更ら其の御所樣の吃言の眞似などなさらうと思ぼすなよ。贋物は總てが駄目ぢや。たゞ天然の本分を守つて身に着いた和歌山五十五萬石を大事に懸けて浪人ぜせりなど以後は爲られず、江戸の御爲を眞實無妄に存ぜらるゝなりや、我們、這回の一埒を什麼にか擔當けう。然なくば否ぢや。公儀御煮度までも無い、帶刀、此場から浪人する。」

（九十三）

今は四十二の可老爺になり玉へる殿が、尙だ了簡可愛ゆう、ちよこ〳〵走りの五六歲の頃よりして、御側にまゐりて、和子さまと申せば、彦四やと仰する、君臣よりも兄弟、否叔姪、後には寧ろ父子の如き御待遇なる久しき交の帶刀とは申せ、然りとては語ひたき隨、繕きたき儘の惡口、餘りなる無禮、過言、と水野と渡邊も最初こそは目も瞋らしつれ、終局には自己さへ背に冷汗の浸み來る、耳痛き傍杖打たれて、太郎作、肩を竦むれば大學も頷を縮めつ、其の鬱際に殿

はと覗へば、頼める殿さへ、此爺にかく悖戻られては辯解も無駄、分疏も無益、たゞ其れが思ふ儘を心の行く限りに喋かせて、自然なる物の鎮靜を待てやとばかりなる御投首、誰人ぞや詠み得て好き。苦しくも降り來る雨か三輪が崎、佐野の渡に家もあらなくに！　げにも老人が此叱言を驟雨と見れば、曉き野中に笠宿りする樹陰さへあらぬ人々の形態。

漸くにして、口角微しく風風ぎて、雷と轟ろきし彼が呶鳴も鳴り歇みぬ。雨も稍蘇息でたる心地。目を見合すれば、殿は飜りて御眞顏なりき。御太息を稍多時吐かせて、「大望といふ！　其方すらも然言ふは遺恨に堪へぬが、これも右にいふ予が不肖ぢや。——が、案じ事すな、予は以前の常陸介ぢや。上樣の御爲を存じて柳營の御代萬歳を祈るよりほか別心も無い。其の萬歳を祈らうが爲め、上樣御爲を慮らうが爲に些少武備をと心懸けたが結局今日の迷惑ぢや。此義は其方熟う心得て然意得て、萬事好なに善う頼む。」彼は俄頃に唸き出だしぬ、「頼むとあれば……それは心得て頼まれも爲申そがの、只前以て關わるは、訴狀の反證！　其れが見事に立つか、乍麼ぢや？」殿も、有繋に此時は、眞實に其驚愕の色見えたりき。御側なる兩個は、今更ら恨めしき、甚麼の汝が其の二の足で那程の惡題、ようも他には吐た義理と恚惱むを、彼は顧盼もせず其の澁面を盆擧めて、「仔細はぢや。彼の豐後が口狀の意衷を熟う味ふと、兎角は此事容易ならぬ……。彼の狀、實は老中同列の評議にかゝつて、猶ほ掃部へ井伊直孝、此時大老たり）が耳にも入つて、剩さへ上聽にも達したらしいぢや。處が、當家謀叛といふは、其前よりして江戸市中、海道諸國の評判にも上つたもの、謂はゞ彼の狀は其の評判に、實事の注釋を加たもの。於是御前の評議といふも種樣の差あつたと思ふが、結局は斯う落着したらしい。第一が當家重職の一兩人を召し上せて嚴重の鞫問して、實を白狀す。其れに依て煞度の事あらせうといふ、是れ一つ、第二が、訴人の兵庫を召捕て、吟味を遂げ、品に寄ては當方者と突合せの白洲をも開かうとある、是れ一つ。先づは此二ケ條らしい。さ、其處にてぢや、將軍はもとより剛健の御氣象、御身が前ぢやが和歌山の謀叛ぐらゐを甚麼とも思さぬ、事有らば太平の代の恰好目覺し、御一代の弓矢の根締、とも御覽ぜられう歸部に讃岐（酒井忠勝）是れは御身樣と御入魂、思し食の腑も合點の筈、豐後は又た我等子分當家においても甚と御面目無氣の體なりき。

（九十四）

此の訴狀たる、木偶たる奴が傀儡なる者に使役はれての所爲とは早や御推量ありたるも、其の木偶の兵庫たる奴、彼抑甚麼理由に、從前異別の條ないは此の老爺より日來熟う申してある。殘つてが長四郎……あの伊豆ぢや。是れも御身見るやうな小刀利ぢやが、いや油斷のならぬ曲者。彼の百萬石の御違約から兎角に當家を懸恨いものにして、何ぞは、角ぞはと目を注くる、其れには又御身が、彼の壺に嵌るやうの事御仕出來しやる。で、旁、鷄の目鷹の目ぢや、其の鷄鷹の日を見ぬきをツてか彼の兵庫めも他所へは遣らず、伊豆が許へと與れたと見ゆる。是れ一つ、當方が苛い難義ぢや。なれど其は又た我等の使ふ方便の筐がある、伊豆め、毫も我等目からは畏怖ぬが、窮るはあの馬鹿者の兵庫ぢやよ。それが今後の成行で、彼奴め自身に出頭で物を饒舌るが、一條二條なりや睨め殺すといふ法もあらうが、三十七ケ條是れには我等も違却しつるよ。元來が、又た、甚麼とて然樣に許多の失策は造られつらう？　彼ほどの氣に召された者に、恁麼とて然は恨まゝ樣の事御爲やツたか？」帶刀が根葉葉鑒の間に殿も甚と御面目無氣の體なりき。

の御恩を餘所に、御仁恵を仇に、恁う執念くも、怨恨、忿恚、祟りまゐらす賊といふをば、神ならぬ殿の知ろし玉はで、御自身すらも物の御不審に堪へざりき。殿は已むを得で、彼が駿河にての一埒より、公儀御咎め、其れが松坂に徴行び來りて御謀叛を强勸申せし事、續き久居雲出の事、正雪の出現、其の仲裁、謁見の始末、問答の概略、扨て御寢所にての變事、其の曲者の兵庫に肯たりし事、彼と正雪との關繫、其の親しう、御覽ぜむとての御茶の會、其夜における彼が狼藉等までを、詞短かに要を摘みて語らせつ猶且つ、彼が切腹との治定の際、或は正雪めに欺騙らるゝ事もやとて云々の旨、密に彦右衛門へまで仰せ遣はされしが、其夜測らざる松坂の燒亡、然も其の火災のやう、御合點のまゐらぬ事のみなるに、當和歌山もと、吉見喜太郎して城下を警戒せしめられしに、思ひも懸けぬ正雪が者、宮といふ少女を獲たまへる事、それらの全般を一わたり御意なさるれば、太郎作も大學も、御辭の遣ちたるを拾ひて、缺げたるをばおろ〳〵に補ひぬ。殿は恁くして、「されば喃、彼奴が心底、予にも解せぬよ。倘くば其の松坂を燒いつる奴、其夜に彼を奪取る奴の中途の讒構かとも想ふなれど、是れとても證は無し。甚麼と手の着けやうも無いには礎と困却るよ。」「いや、其の御手の着け方、屹と案じ出いてござりまする。恐れながら、右につき、私に永の御暇、下されたう存じまする。」思ひ切たる體をもて言ひ出づるは大學なりき、彼は這回御大事も、自然我と兵庫との確執に起因るかのやうに感えて、身を棄てゝ其の所志を果さむと決意せるなり殿は驚かせて、「而て其方は甚麼と爲る？」彼は愽然として其腕を摩り、「君辱めらるれば臣死する！　已むを得ませぬ。唯今の御諚、私分として其儘には伺はれませぬ察するに兵庫め、正雪許へも躱れて在りませう。先づ其れを屹と探索し、品にも寄らば正雪をも召捕り、訴狀の虚妄、讒人の根元、江戸役人中の耳にも立てうかと……」帶刀は俄に遮止りて、又彼の皺頭を大地震の如くゆらゆらと掉りぬ。「ならぬ〳〵。志は殊勝なも、若い〳〵。手段は知らぬが大抵其許なは、正雪が屋敷へも押蒐て膝詰の談判でも爲るのであろ。未可い〳〵。兵庫の出頭ぬは前にも言ふ、當方の僥倖。正雪を今せゝるは、恰ど蜂の巢を殿つやうのもの徒爾に敵のみを倍す、不可らぬ趣向！　こゝらは其許如きの肚者では行かぬ。此の老夫が往懸の駄賃、先づ溫順しう見て後來の話柄ともさツしやれや。」彼の手段は、果然其の談判にもありつるか、赤面せる如くして大學は默しぬ。雖然心許なきは、其の獨り嘿下める老人の趣向といふなり、往昔は然こそ有りつらめ、駑驥も老てはな現下は七十八の老翁、口頭のみは達者と見ゆるも、其肚裏に入らば昏耄もしつべし、かゝる爺に此の一大事を委任せ措きて、一旦過失たらば甚麼とかせむ、世の胡盧のみにて罷了ことに非ずと水野は良膝を寄せつ、「後日の話柄は又其れとして、御手段といふ、甚麼樣の妙案におざるやら。我等重職の分として一應は承はりたい。」殿にも此需には御同意との御氣色なりき。老人の眼光は、端無くも睥睨と晃りぬ、「我們に言へとや？」「は。」「殿の我們を御喚なされたは、只其の談合を御爲やる爲か、但しは此の老爺を其役に御使役もなさらう爲か？」殿は、失敗ぬ！　との御色を忙しく、「いや、其方を賴まう爲め、今言ふ全般を一任さう爲ぢや、紀伊國の存亡は只其方の方寸一つ、手段は問はぬ。」「ンむ、然もおざらう。凡そ此の御使者、見た處此の老夫に優らう適當仁のあらうとも覺えぬ。又た手段は敵に由て轉化すぢや、疊水練の傍目評定甚麼にかならう。其の手段を强て此所で言へとありぬ。此の老夫が往懸の駄賃、先づ溫順しう見て

や、此の老夫に爲損じて、腹切れと言はぬばかりぢや。何故と申しやれ帶刀も男兒、一旦此座で口外た言は金輪變へぬ、されば案外の敵に遇うたりや討死する迄のこと、四郎が長篠の無理戰を再演るぢや。」「然樣の事は廢止て欲しい。」上見ぬといふ鷲鼻を、嘲笑む中に蠢かしつゝ、彼は傲然として其邊睨めたりしが、「では有るが、一方の方略は和殿らにも見せる。殿、其の正雪が者の小女郎喚で下され。」

（九十五）

雪は閑みぬ、潼溟たる雲は濱風にいつか吹拂はれて、瑠璃を流せし如き夕暮の虛空には、金色の光を甚と爽汐に瞬、かする星の影、六つ七つ、五つばかりも見めきぬ。御庭の築山、常磐木の茂れるわたりは、枝毎に被る綿帽子の姿、清げに、羞恥を含めらむ如きが面白く落葉せる方の森には、たまらぬ枝にまた風情を見せて其の千百の叉なる所に纔かに殘れるが、些し融けて、又氷柱となれる、昔し誰が捲ける球籠の記念かと可懷かし。今までは聲も無かりし御池のあなたに、瀧の音の潺湲と既や響初めたる、さすが唐國の下溶の早きも知られて、中洲の島をば倚た眞白に包被みたる鴛鴦の床へ白練の帛きせつるやと見られて好笑し。

「此處は御庭ぢやぞ、平人の拜むことも叶はぬ御場所の上に今夜はまた珍らしい此の雪景ぢや。熟う拜見せい。」彼處の池、此處の樹立と指示しつ、案內顏に進み行く老人の迹より、「ほんに御見事や、清水の港の雪景色を、久能寺の觀音山から眺るやうでござります。」幽淡に回應つ、蹴蹌と附添へる娘あり、頭髮は、此ころ江戶より渡來ぬとて、和歌山の家中の娘が持囃やす、砌とやらむいふ人品好き島田に結ひて、前髮の端をば長う、髷と髻との間に引けり其の髮飾とては白銀の打延の簪只一根。其の飾らぬは兎ひ事太く修飾れるにも優して、彼女の豐肥かに、可愛ゆう、凜々し氣なる若衆顏といふ瓜核の面に善く相應りつ、身には紫色の曙染の振袖、それを合品でふ下襲の上に被て、黑き織物の帶を背高う結びぬ。彼女の面色は今見る蒼空の淸きより淨くして、其眼は其空なる夕星の影よりも冴かりき。

彼女は宮なりき。彼女は去歲の暮、殿の命として彼の吉見喜太郎が方に預けられしが、今は既や三月も經ちて、年齡も亦一歲を加りぬ。去年ですら齡よりは太と大人て長大う見えしもの、今年はする〳〵と背材の延て、手脚肉肥き顏色整調ひて、其美は更に幾層をか倍したり。家中擧りての評判娘、なれど當人も素性を匿み喜太郎また彼の夜の事を人に言はねば、或は吉見が隱兒なりといひ、又た迫ては彼が嬖妾にする、其を今飼ひ馴らす最中なんど不思議の評をさへ立てたるが、什麼にして又何處よりか漏れけむ、殿が御前にての事、其折の御待遇のいと御懇切なりし樣など微々とほのめく程に、拙は然る貴人の世を忍びもおはすなるか與、實にも彼の氣高き御有樣、尋常とは見えざりしが、大阪の！　御落胤か？　但しは浮田殿、八丈島にて設けられつる其の姬君か？　兎角はあの眼中は、など此の奇異なる人に附たる奇怪の評は城の內外に隱れなく傳播られつ、有爲轉變の世態を嘲つ老人がさし連む淚、瓊桃木瑤の巧をといきたる壯年が評議の涎は思ひ〳〵に流されき。

閑話休題として、彼女は今夜御前に召されたり、今は娘と喚び、父と呼ばるゝ喜太郎も差添として出頭ぬ。毎もの御密議とおぼしくて、其の御場所は築山の御茶屋なりとあるに、御庭口より相伴ひて入る彼們は今其の途中なりき。池を回ること一遭、老人と處女ははやく御茶屋の入口にあり。

「おゝ宮か。好う參つたぞ、おゝ去年より又

一層成長うなつたな。」いと御心易う、杉の苗でも譽め玉ふかのやうに仰するは殿なり。其の御次には豫て見知れる水野太郎作、これは仔細なし。たゞ其れが前面に在る、殿と斜方の御對座と見えたる老人が眼光の鋭嚴さ、宮が身には毛髪悚立て感えぬ。言ふ迄もなく、是れは安藤帶刀にて、大學には休息の暇を與へ、太郎作と二人、殿の御供して御書院より此の御茶屋へと今がた來つるなり。老人は此の處女に先づ鋭尖しき一瞥を與へつ、喜太郎を顧りて、「吉見、什麼ぢやな。お手前も最う六十か、我們は八十おや、斯う年を老ると不可ぬな。廿年前の冬陣には尚だ元氣ぢやツたが喃。」喜太郎は會釋せる面を打げて、「何さま、廿年！　雖然其際と今日と御元氣に御變りは無いやに見上げまする。」「いや我們より、御身は……何が未だ元氣な事ぢやの。其の若い娘など持たれて。あはゝゝゝは。」此時に、宮が心に、染々不好ぬ爺さま！との不快究まれる感を起しぬ。

（九十六）

不快の色を見はせる宮が面を、彼の不好ぬ爺さまは又た睥々と凝望て、「何さま是女は見事な容貌ぢや。其方は喜太郎が娘かや！」宮は無遠慮なり、「いえ妾は駿州の生立、紀州者なんどではござりませぬ。」彼女が語は、此の心も憎く面も悪き爺樣の頂邊に一根の探針を刺れたるなりき。とも知らでか驚きたるは喜太郎なり、殿の御前、國老が手前、彼女が無作法はそれを預かる偏に我が落度と、突如に袖を扯き眉を顰めて低聲に叱々と警誡むるを、殿は、例の可怖しき眼を彼女に與れつ、「紀州者なんどか喃！　然言ふお事は、駿河者かな？」此の不思議なる問の意を、彼女は容易く解し難ねて首を傾げき。「……眞實の駿河者なりや、當家の事を、然樣には偽蔑ぬ筈ぢやが！」と爺樣は嘯きぬ。哎呀！　駿河者。甚麼さま駿河者。其の駿河といふ中にも別て我は久能の者。其昔しの大儀瀧には此殿の御母親樣養珠院の御方とやらむに一村の生命を救はれまゐらせて、人種の盡滅のざるを得たりし者、其れが御陰に父母も幾年の壽命をか生延び玉ひて、兄にも成育ち、我も現世の人とはなりしもの、甚麼樣其の駿河者！　寢るにも紀州へ脚を向けては濟まぬ義理なる駿河の者！　げに我は然樣の御由緣の者なりしを。と今更にや悟れる、處女は權然たる眼を瞳上げて彼を視つ、又俛して我事罷ぬる、緋の如き太息したりき。

（九十七）

「然りながら駿河者にも多種ある。久能の山下がものゝやうに當家舊恩を目今も忘れで、只顧紀伊殿々々と慕ふもあれば、又其ほかには、自己が梟惡い巧計のために當殿を讐敵と狙うて種樣と調略する輩もある。一概には言へぬが嘯……。」と其の可厭なる眼を斜向にして爺樣は再び此方を睥めぬ。處女は其れを視むともせず、禁々の呪に遇へらむ如くに舌を緊繃て、疊の表皮も對撤さむばかりに其膝の前に眼光を凝注き。「……が、駿河者は一樣に義理固い、故御所樣が、彼國を御座所と御決めなされて、又た御愛子の當殿を其の御領主に御仕据なされたも其故ぢや。な、其の賴もしい氣分といふを御存知からぢや。其方が其の妙齡で、この老爺に何ぢややら楯突くやうのことするも同是其の氣分であらう。面白い。」何やらむ得體の知れぬ老人が說法に侍座したる水野太郎作の心許なさは限りも無し。心竊かに以爲らく、此の調子もて大事の江戸の御使に立たむといふ、其れが其の老耄の老耄たる所以にして、他には筒はず、自己のみ獨り合點顏する例の頑癖にはあらずやと、其面を凝望すれば、起初より事の情も知らで控へし喜太郎は、分別に倦ねて、疑惧の眼

を只虚呂つかせぬ。老人は其等に些少の頓着をも與れずして、「けれども喃、其の氣分も喃、善い方に向くれば至極善いがの、凶い方に役ふと又た木挺にも行ぬ。那の去年の夏であつたが、不條理ぬ徴發の行懸りから城代の奴等と爭論もうて、有渡濱あたりの馬鹿者めらが騒ぎ立てた。其の頂本の奴は、あゝ何たら言ふな、一分健氣には聞えたが、死なでもの事に身を果いて、當家に迄も迷惑かけて、——あゝ其奴の名を、お主は知らぬかや？」耐へ難ねたる處女が舌は遽に動きて、「其れは安居村の三四郎。其様に訇うて下されまするな、妾の實の兄でござります。」瞻仰る瞼には、懐舊か、將た當座の遺恨か、睫毛に藏き餘れる露漏の痕あり。「おゝう然様かや？」と老人は今めかしう小膝を拍きつ、「はゝあお主が其の三四郎が妹かや。其の兄が處刑の時、磔柱の上から遺言を受けたといふ其の妹の宮ぢやツたか？」事々しげに彼は此方の面を注視し、其眼を又上座へ轉けて、「殿、不思議の女を御扶持めさるな？　喜太郎、其方は此の宮の預人か？」此の不思議なる狂言の邪魔すまじとや、御回答もなくて殿は只首肯き玉ふ。喜太郎はあツと頭を下げたるのみ。「御扶持なさるも善し、御預りも不承は言はぬが、喜太郎、其方が日來の養育、然で無いとは相見ゆるぞ。目下の一言、紀州者なんどといふ。右の久能、三四郎が妹の口狀として耳に觸るぞ何故に然様の耳立つ口狀言ふやうには待遇うたか？」思ひも寄らぬ激汗の、日ごろ父とも見る其人の躬に懸れるに宮は狼狽ぬ、「あ、申し、然様のお叱言。右は妾、只當座の申し誤り。殿様の御慈悲と申し、喜太郎さまの御慈愛といひ、なんの〳〵不足がなんど……」「いゝや言はせぬ。一時の申し誤りとて心に無いことは得言はぬものぢや。殿の慈悲、喜太郎が慈愛が然る程なりや、是れには又別の仔細——然言ふ意趣の無うては叶はぬ。汝諦う聽け。汝が兄の理由ない頼みで、當家では、大事の家老牧野兵庫といふ一人を失はれた。其上にも江戸よりの御祭度、殿をはじめ一同が寢食を忘れて心痛するも皆こりや汝が兄の所爲ぢや。其れ程の事見えぬ汝ともあるまいに儕様の事を言ふ男子ともあらば帶刀平は措かぬ奴ぢやが！　汝は其の少女。但し汝は何者にか唆路を餌はれて紀州を惡しざまに、當家を善からぬもの様にも言はれしな？　大抵は然であらう。然もなうては汝が然言ふ奴で無い。さ、誰が然は言はせた？」曲折れかゝる問訊に遇うて、處女が面は看る〳〵颯と發紅めるが、又た遽かに其を冷笑に轉して、「仰られますれば、いかにも、然る人が然様に妾には申させました。」

（九十八）

瓶水倒建たる彼女が一句は一座の耳根を驚かしたり。其の彼女に怨く言はしめたる然る者とは問ふにも及ばぬ正雪其奴なるべきか、扨其の正雪が何故かく迄には當家を狙ふぞ、其蔓を捜りて其の根に及ぼさば事情は或は知られむも、然りとては又此の小女郎の徒前の猛々しさよ。其の手に乗らぬ死太き牝駒に轡を銜げつる老人の伎倆も凄まじきが、又た儕様に手もなく落ちる、怜悧う見えてもやはり兒女か。縦し其れは甚麼ともあれ兎角は老人の手柄、と喜太郎も太郎作も膝を進むる、其を後眼にかけて得々たるは帶刀なりき、「誰ぢやな、其の本人は？　隠さず申せ。當方にも大抵の標的はあるぞ。」彼女は憎きまで可愛き片靨に微笑を見せて、「申しませう。妾に申せと御教へになりました其人は……」「むゝ其人は。」吻々たる笑聲を彼女は漏らしつ、「第一が殿様。次が然仰せられます帶刀どの、貴老でござります。」

呀、這の業者、又其の網器を脱けつるな！設ひ心に甚麼様の意趣あらむも御前を憚からぬ

無禮、惡題、重々の過言、爾は預人の此の喜太郎に日來の恩を仇もて報いて、無念の腹屠らせて、家名斷絶さする處存か、憎くい奴、疾う下れ、と吉見喜太郎、さしも老練の名物男も差當る殿の御瑕瑾、其の躬が身上の一大事といふに勘辨の胸もや沸ける。黑烟も立むばかりに息巻き猛りつ彼女が長き振の袂を掻攫み、斷切れよと粗暴く引立つる。「あゝ待て、然は手暴うすな。」殿の御聲は遽かに懸りぬ。「ではござりませうとも到底這奴御用には立ちませぬ。筒樣と存ぜば先度の松原で斬ても棄つべき奴。殊に只今は御家の御模樣御要害の樞略、大抵見聞も仕つりましたると存じまするに、御憐愍の御沙汰は結局盜に鑰の比喩。這奴一分の義は何とぞ喜太郎めに御委任のほど……」「いや。然は申すな、今宵の此の召は帶刀所望ぢや。諸事は老人胸にあらう。先づ控え。」

御諚を聞きても老人がへの字口は俄に開くべう見えざりき、其の銅鐵の如き額に大濤めく皺を見せて、默視すること多時、率然として、「やア小女郎、何故殿が然迄の不足を爾ほどの奴に買はせられた？　又帶刀が腸、爾何とて然樣に見た？」雷霆を欺むく大喝、掣電を厭する眼光、天魔鬼神も面を向くべき樣あらぬ叱咤も、身を亡きものにしたる少女は微笑もて之を迎へぬ。「ほゝ其の可怖い顏、何ぢやとて其やうには御叱りなされます。殿樣も御前樣も御自分から紀州者の汚穢しい根性。」「え、汚穢しい？　爾確乎と其證あるか。あらずば其顏桁、これ、此刀ぢやぞ。」老人は其小刀の柄、掴れる拳もてしゞ叩けり。「なんの駿河者、其の今の御詞の義理固い駿河者、女子ぢやとて讒は吐きませぬ。其の讒吐かぬ駿河者へ紀州者の皆さまが虛言を仰せられます。それが其の見下げた根性。證據は何程もござります。」「聞き事ぢや。む、聽かう殿は扨て置き第一に此爺が不足から言へ。」皺腺のしゝと押進むるを。「然樣になさらいでも申します。先づ手迄いは！只今の其の御口狀、兄の三四郎御贔屓の爲め御家老の兵庫どの御果なされた、續いて江戸からの御沙汰もあつた、殿樣はじめ皆樣が寢食も忘れて御心痛ある。——こりや御本心の御詞か御誓言にて今一度妾へ仰せられたうござりまする。」牧野兵庫が松坂にて腹切たり、世に亡き人になれりとは殿も曩日には宣へりき、是れは一種意味の御詭計にて、彼女が果然駿河より來つるか、又た松坂に潛伏ゐるか、其れが容子を其の口裏にて誘引き見むとの結構にはありつるが、其事を詐謀と强ひて申さば何さま御欺謀に相違なし、況んや今の帶刀が言はゞ彼女が兄なる者の爲に紀伊國の難義を牽起せしを事過大く言ひもて聞せて、扨て云々に說落さむと計りたる、一時の口狀の表裏なるべきを、惣う柄を執られては什麼ぞや、と心も心ならざる一座は只老人の返答を其面に了得むと焦燥ちつ、握れる手掌に我知らぬ浸潤との滑を感えき。

（九十九）

什麼にや返答はと見る咄嗟！「喞くなツ——爾。其の兵庫の果ざるといふ仔細誰から聞いた！　思ひも寄らぬ老人が反問に裏を掻かれて、覺悟の宮もはツと狼狽ぬ、其を猶眞向より疊み懸て、「問ふに落いで語るに墮つる、爾此の野狐、正體見すまいか！」睨み着けたる眼光は、彼照魔鏡の水を出でゝ世界の魍魎を照らすにも彷彿りけり。宮は盆色を失ひて其眼のみ凝視ぬ。「察するに爾は近く其の兵庫に遇うたで有らう？　さ、其の會うたるは松坂か、名古屋か、先づ其の土地から白へ。」物の光景、時分好しとや御覽じむ殿は徐かに御扇ぬき出させ、唾みかゝる老人を暫くと遮斷り、俛向ける宮が前なる御牀をはた〳〵と打鳴らさせて、「宮、もう可いは。箇程までに當家君臣を窘責んだりや民部

への義理といふも十分ぢやろ。喃、此れよりは其意を翻へして其方が親兄の心になり、當紀伊國を可傷と思うて當面る難義の爲に一分の力を盡くして呉れ。予が頼むぞ。」「いゝや殿。と老人は憎さ氣なる目を轉せり、「又御身が其の慈悲立の甘騙し、然様な術で行く女郎かえ——まづ見ておざれ。さ、小女郎、兵庫とは何國で會うた。其折り甚麼様の談合した？」「ではあらうが喃、爺、然までにはすな、此程の女子、謂はば敵中へ身を投げ出して來るほどの者、白へとても白ふまい。又予は其事を聞かうとも爲ぬ。こりや宮、其方が紀州者の根性と今言うたが喃、何さまこりや予が悪かッた。兵庫は松坂で腹も切らぬぢや、切らぬのみかは何故か當家を仇として、予を謀叛と誣ひて、三十七ケ條といふ長文の訴狀を江戸老中へ差出した。もとより其狀の讒誣なるは言ふに及ばぬ、辯疏ば證明の立つは瞬間時ぢやが、然りとては予も遺恨ぢや、彼れ兵庫めを當面り視て、其の意趣をも問ひ、物の實否を明白にして公儀へ申解も爲たいと思ふ。今爺が言ふ、紀伊國君臣寢食を忘れて心痛すも其事ぢや。就ては其方に……」と帶刀が方を密と覗たまへば、彼は猶不興氣なる怒聲、「此の御家も御身が所有、此の小女郎も亦た御身が扶持の者、起すも倒すも殺すも活すも皆御身が御意任せ、此爺は兎角う言ふまいが、慈悲を施れば屈放るゝは現今の世の人情、況してこの狡黠しい野狐、恩も情も得知らうかや。其れともに斯う訶はるゝが口惜しうて、我等は江戸へ行く、這奴は其の一方の御用擔任て御身が役に立ともあらば、重疊のみか、其れが其の義理と意地を知る駿河者の本性、天晴れ御身が御母親の這奴が亡い親達を救はれたる御餘光も立つといふもの、ぢやが……はゝ覺束ない。やはり正雪めが方人して、不義の狗たる兵庫めらと一味して、盜賊の提灯を持つゝと云ふ程の所作が相應ぢやろ。喃、小女郎！」散々に罵倒れて、宮は戰々と身を顫はせたる口惜涙を嗚咽り上げたるが、此度容姿を換へ、「殿様へ申し上げます。今宵の御召は右の兵庫どの所在申せ、妾が正雪の方人たる其理由を白せとの御用とは承はります。其義ならば何故に早うは仰せられませぬ。父母の命兄の臆押、其れが最後の所望と申す過米の御徴發、御公儀の御免除となりましたるも一つは御當家御助勢ゆゑと豫て喜太郎どのからも承はりをりまするに、此回は斯う〳〵の難義がある其方身を棄てゝ一働きせいと御意あらば、正雪どの身につきましたる事のほか、宮が生命の有らむ限りは如何様の御奉公でもいたしまする。其れを何やら御邪推を廻されまして……」「やア言ふな、其の甘い口。其れ程に當家恩分を知るものが何故に紀州者なんどと言うた？」老人は猶俄鳴りつくるを。「それは物の行懸り。其の行懸りは御身様の爲され方の悪しいから……」「然らば何故正雪めに使役れて、當紀州の犬となツたか？」「其んなりや御身は當殿様の御謀叛とあらう時、討手の軍に加つて和歌山を御攻めなさるか？　御家老の御詞とも覺えませぬ。」「ふむ、先づは殊勝ぢや。然らば殿の御用勤むるか？」「殿様の御用となりや……。なれど御身が手に附くのは否ぢや。」「えい乃爺もぢやは……。さらば乃爺は江戸へ行くに、爾は何方なと勝手に失せい。やア殿後事は一任せ申すぞ。爾、小女郎、」起座ながら礒乎と睨めて、「此の御用は帶刀と其方と兩人ぢやぞ。張合の軍、張り負くるな！」

（四）

柳櫻をこき交ぜて、春の錦といふ其候には尚だ日の遠けれど、さすが都は人の心も寸延て、冬の日暮も餘所よりは長閑く見えぬ。況て鐺鉄の利を爭ひて朝三の計を營むとにも非ず、汗水浸と絞りて暮四の助を得むと急逐る人

にもあらざる此家の、晨には北山の雪をながめて、炭焼く翁が寒さを想ひ、暮には行水の氷るを聞きて鴨川の千鳥の鳴く音をしのぶ優にやさしきを家職として、哀れに強からぬを心とすなる其の主人をや、師走の此ころも、人の口にのみ世の忙しきを知りて、身は歌膝の足許に春の近づくを楽しむといふ、阿呆果報の中間に處りて、織らず又耕さず、富むにはあらねど貧しからず、世にはよしや世の中の穀潰しと哂笑るるも、來飯の糊のつぐめける笏一本に生涯を託して、願うても叶はざる其多を顧みざるは、太平の逸民か、清世の隠士か、抑雲上近くして位山に棲とし言へば、塵芥に棄てたる仙客の群にやあらむ。

憩くいふ其人とは什麼誰ぞ。京の今出川に、廣からぬも殿造いみじう立てゝ、多からぬも七百石の祿を食み位は三位にして、時めかぬも亦た其の氏人の長老として崇敬はるゝ織澤の康章卿にてぞありける。卿今年は五十七八、世の煩累を厭ひ玉ふ御性質とて、常は下鴨の別業にのみおはしゝが、此程より珍奇しき客人の東の方より詣う登りしとて、今出川の館に在り。今日も日暮より其を饗應の用意にとて、晝のほど錦の棚へ御使の立ちたるが、やがて、魚籠に恭しう納れもて戻る其蓋を開れば丈三寸ほどなる赤目鯛只三枚、此を三片に割下して頭の方をば汁にせよ、尾の肉は膾に截りて胴をば煮に、煎酒を多く物すな、醤油こちたう費すな、膾は大根を好う盛りて肉をば上に竝列ぶるものぞ注意せよ、なんどゝ家司の少尉某召して御身自嚴かに誡てさす。箇程の綿密なる御容態にて世事の煩厭はしとは、手術波の違へる、判の詞の不審重々とや人の言ふらむ、あら心得ずや。

物の目は儉約きも、景色の目には饒高なりけり、館の御庭には鴨川の水の堰き入られて、築山のあなたより玉なす流れは珊々と颯々き落つめり。松楓櫻なんどの面白きも流石振好う所所に植ゑられて、霜に枯れ殘る御池の草に自然の澳灣を見せたる、いと巧なり。此の景色春ならましかば。否夏ならましかば、などいと奥まりたる亭の内に靡のして水に映ろふ花の笑容も嚥かしな、輕漾激して影脣を動かすとも見るべきに、と戯るればされば彼の水草に一つ二つの背光も見えば、蚊蝱水喧うして簷に夜を知るとも歌はましを、とこれに應ふ。いや其の春夏より秋こそは觀物で候らへ、御手近の明り障子よりそと外を御覽ぜよ、眞向ひに見ゆる如意嶽の大文字の火、其れが七月十五日の夜は、黄綱纈の林は寒うして葉有との朗詠もおのづから打誦せらるべく見え候ふぞ。と取合して誰が明けたるか緣端の障子をさと開らける、座敷の内には三人の者なむ居たる。

其の一人は四方髪、一人は一束切といふらむ如き茶筅髪、一人は總髪の男にて、これは家司の左近衛少尉としかつめらしく名のる前渡の某、扨前なる餘の兩人は、別人ならぬ正雪と兵庫となりき。偖は知る、彼等はかの松坂より船に乘りて吉田へや着き大阪へや赴ける、兵庫が實の父といふなる此の織澤の三位卿を便りつゝ、此の今出川の館にとは來れるならむ。然も其の來つる意趣は、今は天下に隠れ家もなき兵庫が一時の笠宿りにとか、將た彼等が大望の何事かの手蔓にもとか。其は未だ主人の卿にさへ語らぬ氣なれば、餘所人の知るらむやうなし。

景色の語談に餘念なき折り、主人の卿は出で玉へり。白練の無垢、朽葉の御袴、なれど其白練も十年餘りの昔しの白色にて、御襟は油膩に烏帽子の緣塗の色見せつ、御袴は色の朽葉より地の朽破たりき。色白う、小形に含み玉へる鐵漿のみけばゝしう、門齒の一つ脱けたる

迹さやかにも見せ玉へる爺様。いと愛想好く、「嘸退屈でおりやらう喃、折から冬枯で華洛として観る物も無い珍奇しからぬが一種調じた。それ少尉、此座へ持て。」彼の鯛やらむ大根やらむの御饗は出づるなりけり。

（百一）

此卿の世を煩累しとて、別荘籠りし玉ふなるは、一條には客を愛し玉はぬなり、便ち世人に交際ひ玉へば思ひの外なる入費かゝりて、辛やなる金錢をも費はで協はせ玉はざる所以なりけり。然りや、卿る卿の甚麼散に正雪等をば駐め玉へる。流石に兵庫との父子の恩情は、失費を厭ふ心も壓して、可愛きものとして將た珍奇きものとして、奔走もし玉へる歟爲に綾錦、鬪まく惜しき財嚢の緒を裁ちて、錦の棚なる小鯛三枚を惜し氣も無う調し玉へる歟。なれど、得て箇様の翁は、疑惑の念深きものなり、我財を損ぜしと思ふ念より、他の言ふをも容易くは信けぬものなり、子とはいへども其の母なる女に音信不通との契約して、其れが故郷へ還し玉へるより既や二十五年、二紀の日を音信一つもせで歴ぬるものに、甚麼を明證に、甚麼を目的に、父子の對面をやし玉へる。加之形の如くに、甚麼を所得に大根膾の饗應までもや、爲玉へる。雖然記憶せよ、此類なる鄙吝の人は、我子とは言はずもあれ、親族とは名告ずもあれ、凡そ錢ある者といへば、××、××、宇留麻、承古利の外客とあらむも、我心の誠の有る限りを傾注け盡して、其の眞正の妻孥よりも親昵うもし、又親孥うせられむとも努むるものなるを。卿も亦其れに同一じ。況て其者等よりはしかすがに懐かしかるべき我子、殊には既や還暦の類齢にも邇かるべき御身におはすも、兒育といふもの乏しうて、其後に娶へ玉へる御臺盤様の御腹に二人の公達、一柱の姫君は產せ玉へるも、凡の御男子は七歳といふ年に失せ玉ひ、姫君はそれより先に、襁褓の衷に永き訣別を仰せぬ口にて家尊家内の御許へ告げ玉ひぬ、目下殘れるは末の御子の、今年十歳にもたらぬのなり。母君も此の御子産み玉へるより血の氣とて打臥し玉へるが、二年餘り、去る年の秋風に吹かれて、一葉より先に脆くも散りて、人の悲歎を墳塋の底に心強うも安らかに聞きたまふ。かゝる容に、さしもの卿も、躋り惱しき老の坂のいと〻艱くて、御腰もめきめきと歪み、御齒もほろ〳〵と脫て、行末の賴みの綱を、竹馬の手轡に遊ぶ幼稚き御子に藉け玉ふ、輭竹の御心細う、河竹のかは誰と物の懐かしき御際なり、見ればや立派の武士、主は未だ取らねど音に聞ゆる由井民部介が高弟として五千六千の高祿にも召抱へむとある諸侯の口は、網の目の數限りも無しとかいふ織澤左門。我等殿の御子なり、久しう越前の故郷には候ひしが後江戸に出でゝ、兵法軍學の修行に年を積め、既昔の事は定めし御心に御記憶もましますらむ、好き序によりて詣う上りて候ふぞ、いかで御目見を賜はらばや、と玄關より賺り込めるに、最初は恂然として玉へるも彼が見參の禮物といふ白銀百枚、叅帛十卷、紡綿、白髪苧、柳樽、干鰯、鰹魚節まで相添て白木の臺を遠侍に山とばかりに積み累ねたる、此れに又御胸の潰れて、先づは取敢へずの對面を賜はせたりしが、此折り御次に隙見させつる老女なり、いかにもいかにも彼の左門といふ壯佼こそ御胤に紛れ候はね、御目許口元は母ごにも酷う肖て、頗の邊り額つき御前様に丸模しなり、況て其の同伴なる由井民部は前波の少尉が江戸に見たる正雪其の者で正確に侍ると申すをや、彼の正雪は殿も聞かせ玉ふらむ、今日本に一人と算へて二人となき大貨殖の兵法者、家の活計は十萬石の分限に侍るとやらむ、げにも其供立、馬鞍の美々しさ、箇様のものゝ御館にまゐるは、福

の神の影向とも拝ませ玉へ、何の怪しう侍るべき、和子様の好き御後見、御前様の御談合敵、旁、御父子の御名告、内々なりとも遊ばされむが御尤も、と此頃に侍づきまゐらする此の老女とて、笹紅の唇も剝げむばかりに苦悶に勘す告め申しぬ、後にて聞けば、此局の計、前波が方へも白銀廿枚、巻物幾反かは疾う廻れる、口車の骨、滑かなりしも所由ありけりと覺えて好笑し。

箇様の順序にて、兵庫の左門へ卿より改めての御盃、品好う済みて、正雪への御會釋も殘る方無かりき。家狹隘ければ、供までは難かしからむも、東の亭は見晴しも好し、正雪は左門と一所におはせ、貧乏といふ我黨に饗應御身らが上には然こそは不足勝なるべきも、金錢ならぬ身上の談合とならば麿も乘らうぞ、民部介を少輔にもするか、其等の義ならば渥分に肝煎らうよ、なぞ早や有難き御意、下座にも置かれず。「いや、なに、苦しう無い、其儘々々、其儘おりやれ。内々の席、甚麼の遠慮！」と正雪が下りむとする裾を押へて、卿は今強て客の座に彼を上させぬ。折から少尉と彼の長女とは煤氣たる三寶に銚子、土器、禮儀は恭々しう持て出でたりき。

（四二）

卿はもとより其の家の人にまします、其れが敷島の歌物語は、異しき經濟の談とは違ひて耳を傾くべき新説も多かるべく、正雪も亦た所好の道とて、此の御話には餘念も無ければ重ぬとも無く三獻より五獻、七獻より九獻と盃の數も既や累なりつ、更に今一度の銚子を換へにと酌に侍せる少尉の御次と退かる時、正雪も無禮を謝びて用事にと立つと見えしが、暫時して再び入り來て、這回は又た國々の名所故蹟の歌枕の物語にと移りぬ、彼は今めかしうも、新たなる會釋を施して、「箇様の風雅の御物語へ、繼穗もなき金銀の御話を交へまする、異な事との御恐れはござりまするも、亦此物は世寶の第一、其れ無くては上下立行も得成りませぬ。就ましては微少の不審。」と扇を膝に引つくる繼穗もなき金銀の談といふさへ實に異な事との御恐れはおはすに、彼が面色の稍改まれる如きを御覽じて、卿は覺えず、いとけた無くも御胸を跳らせつ、「何事ぢや？　不審とは。な何ぢやな？」「はゝ、いや別義でもござりませぬ。萬葉にか見えましたる家持卿の御歌。」「え、其歌が甚麼ぢやと言ふな？」「いや、何も御懸念の事……陸奥山に黄金花さくと申す御歌が……」「それは萬葉の十八にある長歌の反歌、皇の御代榮えむといふ歌ぢや。其歌が如何した？」卿は、甚麼に事託せて、金錢の無心を言はるゝにやと只顧に慎れ玉へるなりき。正雪は御推測の疾きに些しく呆れつゝ、「いや、私、申様が足いでがなおざりましたか、私は只其の花さくと有る陸奥山の場所の不審御家の御傳授など、或はこれ有るかとも存じ做しまして。」「おゝ爾様かや。然様の事か。麿は又た……はゝゝゝゝゝ。」御胸の漸く下り居たるにや、冷たる汁を一口ちゆうと吸ひ玉ふ。我父ながら見まゐらすると氣の毒の様と、兵庫の左門は庭なる方へ面を向けつ、正雪は忍び敢へぬ冷笑を辛く咳嗽に紛らして、「不審はたゞ其義。其の花さいたる陸奥山を、おろ〳〵古書にて見すれば小田郡とござりまする。なれど當今は陸奥一國に右の郡名は見えませぬ。地名の變遷は古今珍らしからぬこと、天平の古の小田が今の遠田か、若くは牡鹿か、それらの仔細。」御意得顔に卿は幾回か頷き〳〵、「はゝ、然様かや、何の其等の事、家傳も祕授もあらうかや。其の小田は今其の牡鹿で陸奥山は御事も知りやらう金華山の事。むゝ、何かや、其の陸奥山の故蹟を討求て、その御身が鑛穴でも掘らうとてか唷？　何さま御身ら

が武邊手柄も金銀無うては無らぬ事。いや。然様の尊門なりや尚た餘所にもある、大和の金峯山、これを黄金の御山といひて、此の御山にある黄金の藏王權現の御物たるは、盛衰記にも、增鏡にも名文がある、又駿河の庵原郡多胡の濱に砂金を得て獻じた事も續日本紀に明證がある。いやまだ〳〵、古來歌にも詠む那須の淘金、あゝ何とやら？　おゝそれ〳〵、歌枕名寄にか、下野の那須のゆり金七はかり、七夜はかり逢はぬ君かな。逢ふことは那須の淘金いつまでか、くだけて戀に沈み果つべき……とは見えたと思ふ。此歌の本據、淘金の事は八雲御抄かな？　否、待ちやれ〳〵。」卿はいと樂し氣に、いと誇らし氣に、其の御心に得たる所有るかの如くに御首を掉らせつゝ、又遽はし氣に御次間の闥の際に控へたる局を御覽じて、「あ、こや、麿が常間の文車の南の二に續日本後記といふがある、其を三卷四卷……と、又東の一に式——延喜式——。いや、これは大部ぢやで其方に鑒別がむづかしい。可矣々々。其の後記の方のみで好い。扨て民部、其の淘金とは喃、砂金を水に浸して淘り分るぢや、小ゆるぎの磯なんども濱砂の潮水に淘らるゝからぢや。今は無本の胡亂記憶ぢやがの、其の那須の淘金は、民部式に、下野國砂金百五十兩、錬金八十四兩などもあたか喃。現今の佐渡、駿河——むゝ其の猪川、梅が島のよ、又伊豆から出づる額に比較せては瑣細のやうなも倘も是れが麿らが所有なりや、いや中々過分ぢや喃。はゝゝゝゝゝ。」折ふし徵されし後記は來れり。卿は猶夢中に饒舌り立てらるゝ其袖を牽れて、「おゝ參つたか。むゝ可し〳〵。むゝと、承和と。えゝ其りや此處ぢや！　其の證文、熟うお聞きやれや。承和二年二月戊戌、下野國武茂神奉授二從五位下一、此神座下採二沙金之山一」なんと如何ぢやえ？　御國の正史に箇樣に明白に記いてある。え！　如何ぢやな？　これが山金を掘鑿のぢやなりやぢやが、此處のは砂金ぢや鍬一梃と布一反ありや、何程に寡少うても一年五百日以上の金量は獲らるゝ。如何ぢやいな、お身、此の談合は？　金方さへ御身が爲るなりや、名目は宮なり、門跡なり、我が味好う計らうが喃！」

（四三）

坐ながらに知る名所とあらむも其の强記と博覽と、今一つは其の御慾の淺からぬとに正雪も只管感じて、竊かに目を數瞬かして兵庫が方を覗へば、彼は、在るにもある可らざる父が仰せに、朋友の手前も羞慚しとや、苦れる面に赧紅を潮しても猶堪へず、庭に向けたる眼を、再び池より山、樹立より築地の外へと成る限り遠く放ちぬ。とも知らせぬ卿が膝は愈進みて、笑容嘻々たる御面色もいと冴々しう、其の計畫の端緒をも既や獲玉ひたらむがやうの御入興にて、怪しからず激りたる御鼻息に、奇しう凄じき御眼の光輝さへ射し添りつ。「喃。如何ぢやな う、其日論見は？」と御膝を丁と拍ち玉ふ、正雪は笑顏をもて是を迎へて、「扨も〳〵御脫落の無い。民部、其の銀方仕つりまするは何より容易いこと。」「え、容易とか。擔當てお呉りやるとか。あ、然あらば此麿もぢや、はゝゝゝゝ其庇蔭で浮み上るぢや。有り樣は此態で在ツては年增に肉が減るのぢや。役でも勤むれば又た少々の所得もあるが、非役では御宛行の祿高切りというて其役に有り附うには又夫れ〳〵の人情も費る。扨それも此年齡してと、諸事目を瞑つて、無い運と斷念て、山棲の氣になつて、總ては世の事を投下し措いたが、これは誠に福德の三年目ぢや。」ほた〳〵との御喜悅を、「いかにも其の福德の……ではござりませうも、其出額が其れ計りでは何程の御餘德にも……」「いや遁ぎやんな〳〵、などと口實て逃げうでの？　卑怯ぢやぞや〳〵。」卿の御眼は、身外し

たる雉子を追ふらむ獵夫の瞳の如くに、いと狼狽てゝ見えたり。「いや、何の、避げますなどと……。只申すは一年の出額が其の些少の六七百目、其れ程の額に宮家の門跡の、鍬の粮のと騒ぎましては御餘徳が甚麼程？　いづれの頭へも引足りますまいと申すこと。其れよりも猶ほ巨多い福德……」と彼は、語尾を暈して御氣色を視まゐらすれば遺憾さは山々の、尾上を隔てて花の盛りを遠望め玉ふの御風情、無情き御太息さへ交れり。「はゝ、其樣の御力落し。何の殿、其の砂金お欲しいとも思し召すなりや、民部今此の御座敷へ取寄せても差上げませう。」戯言も事にぞ寄るべき、小兒騙といふよりも激しき座興と卿は堪へ難き不快の色もて回應さへ爲たまはず。「いや、殿、これは御座興ではござりませぬ。民部、像々も或る法術を鍛錬して不思議を施すを會得してをりまする。例へば夏天に雪を降らし、紅爐に蒲華を開かせまする、其等は俗に謂ふ朝餉前の點心、舌にも載りませぬ。なんの其の那須の砂金、此の御座敷へ喚びますなんど、はゝゝゝゝゝ。」大口開いて打笑ふの態の、傍人無きが若くなるに、卿は醜りて惘れさせて、今更に彼が面を浸々と御覽ずれば、げにも凡庸ならぬ面魂、童顔仙骨、日表月華などいふらむも恁有る相貌か、此者果して仙か、魔か、古への役の優婆塞、久米の仙人、弘法、守敏の聖などこそ不思議の法を施こして、雲に駕り、霧を歩み火を滅し、水を黙くる等の奇特を現はし玉ひしと聞きつるが、此者も其法徒か。但しは音に聞く伴天連か、飯縄使者か。正法に奇特なしとは言ふなるも、日本の神の御國は又た然は一椀にも詑破まじきが。兎にも角にも喚て見せむといふ其の金を喚せて、欲しとならば與れむといふ物を貰はざらむも愚かに似たり、老後の觀物、敢の錢も費らぬに、と稍含笑せて、「何やらむ夢のやうなる話ぢやが、由井民部とも有らう士が僞言も言はれまい、其の砂金、喚るゝなりや喚でお見しやれ。但し京都から那須までは。」「甚麼の遠路？　多寡が二百餘里。某が法術では龍宮の黄金とも候らへ、崑崙の珠玉ともおぎれ、手を拍けば直ぐ參りまする。いでや其驗！」彼は咳嗽高やかに、庭に下り立ちて、東方に向ひて印を結び、呪文事々しく誦へて、扨て手を扛て招くこと三度。「はゝ、參りました、參りました。最うそりや其御座へ參りましたぞ。」「何ゝ〳〵。」と看回し玉ふ御眼先に、個は不思議！　甚麼やらむ見乎と異光を放つ東西あり。

（百四）

彼の耀光は思ひも懸けぬ砂金なりけり。其砂金は今少尉が持て來し銚子を、正雪の執て卿の御前なる土器に注ぎたる、其嘴より出現たるなり。「ひえッ！」と叫喚せたる卿は、口を張り、目を瞠りて、今宣へる夢中に夢を辿るらむ如くに見えたり。兵庫さへ其の手の疾きに愕きて、正雪が面を見たり。耐へ難ねたる局は、「これは〳〵。まア〳〵。」と顫聲して、刻み腰に、躄り出でつゝ、見事さに惘れて、恐る〳〵遠方より其の中を覗き込みたりき。

泥にも變らず、砂にも化らず、酒に洗はれて愈其妍美さを增せる黄金は、靜かなる池水に滿月の影を宿せる如くに、金波といふ其色の波を燦爛と漂はせつゝ、霎時は、呆れて眺望る人々の面を射ぬ。憎きまで爲得顏せるは彼が手品を幇けたる少尉なりき、主が弓手の御脇より躙り出でつゝ、「殿、由井どのが修せは大晴のものでござりまするな。御氣色とござりまするなりや何とか御沙汰を。」「む、少尉か、麿は魂消た。麿此齡まで儕樣の不思議は未だ見も聞もせぬ。や、民部、恐れ入つたよ。麿、閉口ぢや。」正雪はいと鷹揚に、「いや、其ればかりの黄金、御機嫌とござりませうなりや倘だ何程なと取寄せて

差上げませう。これも觀物の役、願くは其の御流盃、侍坐の衆へも下されまして。」「むゝ、いや、其れも然る事ぢやが喃、此は末代の奇特、此の銚子は家の寶として此儘に祕藏び置かうよ。あ、尊とや。」と彼の土器の緣なる酒をそと無名指に浸させて、御額に點ぜさせらる。苦笑ひせる少尉よりも局は女氣の、泣かぬ許りの色見せて恨めし氣に主の御面を疾視げたりき。「はゝ父上、然樣にはなされぬもの。民部が奇術では其の銚子に五杯七杯の黃金ども直き取寄せて進ぜませう。兩人へは勿論、其の御流盃御内の男女總中へも遣はさせ。尙た其の巨大い御福分が……。喃、民部どの。」兵庫は、見るに堪へ難ねたると、正雪が後談の緒を啓く爲との、二途かけて怎く言出でたり。此方は直地に其を引取て、「いかにもぢや、未だ其の那須のが其の在りや手近い場所で金峯山、田子の浦、續いて追々と其の陸奥山の鑛穴をも掘鑿いて皇の御代の御榮えをいたしまする。いや、其の迂遠い、舊穴の下地の黑金を招びませうより幸ひ江戸にて御手入の其の伊豆駿河佐渡の黃金、其の掘出いて灰吹にも懸けましたるを何程なと取寄せても進ぜませうか。や。其れよりも喃、左門どの、我等が奇術、殿にして愈御信仰なりや、日本國中津々浦々に有る程の金銀、皆其の御藏入ともならせうこと手掌を飜すよりも容易いぢや喃！　然は思さぬか？」哈々と笑へば、「勿論の事。其れは師匠の御心にある。なにと父上、只今聞し召す通りの義ぢや。御家の爲天下の爲、由井宗の信者とは御爲りなされぬか。御子孫の御爲ぢやが。」兵庫の言ふ由井宗とは何者かは知らざるも、現在當面なる宗祖の正雪が言ふところを聞けば我宗の信者とならば、日本國中津々浦々の金銀までも皆吸引て、此家の藏入にせむと言ふ、小夜の中山無間の鐘の故事には似たるやうなるも、これには覿面の靈驗を見ぬ、八萬尺落の底に墮ちて後世には蛭責に遇ふべきも、血を搾るやうなる世間に欲しきは目下の金銀ぞかし。とは有るも此の眼前なる銚子の中、確に十兩には餘りて見えたるを。

彼等にむざ〳〵と、と分別の峠に迷はす父の卿が御足元を見るより疾く、「何事のおさらう、此程の砂金。それ兩個の者父の賜はすぞ。疾く持て去ね。内の男女誰彼にも分配せよ。好う致せ。」兵庫は突と起て、重げに提げたる彼の銚子を少尉に遞與せば、喉を鳴らせし男女の者は、鼠の如くに舞うて去りぬ。折から怱音を長く送る暮の鐘あり。卿の耳にはかねといふ文字の通ひも恨めしきに、會者定離の理を目のあたりに見せつけられたる、寂滅爲樂の其響を何とは聞し召し玉ひにけむ、御首を頭垂て、「あ、無常は迅速ぢやな！」

（百五）

「無常迅速？　はゝ甚麼が無常でおはさう。世間は然樣な墓ない物でおはさぬ。あツはゝゝ。」と正雪に笑はれても卿の御氣色は太だ引立たずいと力無くて見えたり。「ではござりますが、喃、又其の世間を無常と御覽なされまするも可うござりませう。人間の軀命も無常、物の積散も無常、全般の世事無常と觀ますれば、天下の權柄の所在も亦無常いものでがなござりませう。卽ち王朝の古、これは申すも恐悚にござります、續いて藤氏の專横、朝政を己が隨意にして卯月の虐けたることも無しと歌ひましたるも無常、平氏の暴虐、人主を自家が手の者やうに虐遇ひましたるも無常、鎌倉も無常、北條も無常、建武の中興も同じく無常、九五の尊を犯しましたる足利の無道も亦無常、織田の無常は一代の中に熾はれまして、豐臣の無常は二代の後に、殿も御存知の墓ない有樣にござります。扨て其れに代りましたる只今の柳

聲、殿は其を甚麼樣に御覽ぜられまする？」彼の聲は愈〻低まりて、と看る〳〵其眼には、一種異樣の光輝を帶びぬ。驚かせたるは卿なり、只管に身の大事と思し坂せて、御胸も籟々と鳴動つ、御面色も赫と逆上せて、御手の措處さへ無くて見えき。と聲るより彼は忽諸其面を和らげぬ、「はゝゝゝ、殿、右は座談、一時の心無い御物語にござりまする。畢然、萬事は只無常、盛者必衰と浮屠氏の說てござりまするなりや、某は又た、衰者復盛とも申さう歟。天運は循りて環の如し、春行けば夏到り、暑去れば寒來る、これを人事に見ますれば吉吝凶悔、生老病死、すりや天の四時運行、世の盛衰禍福と甚麼の差違のござりませうか、王朝御式微とならせてより既や六七百年、大鵬の厄こゝに竭て盛旺のお萌芽今が勃興らう時と存じまする、殿はもとより和漢の御博識、異朝にも其の六七百年、一姓もて續きましたる長久い天下はござりまするか嘻？一卿の御慮は溢々なりき。「いや其樣なはないと稀有ぢやよ。周王の盛德ですらが西東併せて八百年、其餘は五十年百年、乃至百五十年、三百年と續いたは幾ど無い。但し其は皆號を建て、國を立て、其君は帝王として萬乘の尊位におはすぢや。御事の間ふなるは……」「人臣とも仰するか？　否、私は一國の權柄を握れるもの、其定むる所は律となり、其命ずる所は令となる、死生與奪只其の已が好む隨意に仕つりまする者。是れを國王とは申ます。又た其の一姓と申しましたは藤半氏は姑措て、鎌倉以後は只一樣の武家天下、これを公家御成敗の天下に對稱て一姓の僭位執權者とは申しまする。忌く論じますれば、恐れながら王朝は……」彼は忽く說き來りて、其悲憤に堪ざる如く、卒爾に首を俛れて、颯然として淚に咽べり。然も其の口は吶りて、再び言ふ能はざるが如くなり。時に猛然として虎の如くに哮る者あり。是れ兵庫の左門なり。彼は手を戟にして面前なる膳を礪と撲ちぬ。「父上！　御聽きやらぬか師の言ふゝこと。由井どのは浪人、王臣と名告る人にはおざらねども、朝廷の目下の、此の淺猿しい狀景慨かれては箇樣に悲涙も飜さるゝ。父者は其の縉紳の華族とやらむ稱はるゝ仁、朝廷と其の休戚を共になされでは協はぬ仁、其れが斯くまで冷膽なる心を持たれて、隣家の火事を見る程にも思はれぬは、甚麼たる所以ぢや。今の其の、師の申された、王朝はとの三字の後には、甚麼と云ふ字を尾けて御覽じやる！」

（百六）

「待て吳れ。まゝゝゝゝ待て吳れ。」と留め玉ふ卿が御手は、今や織澤家の重寶たるべき堆朱の椀を空さまに搔攫みて、微塵と碎破かむと振擧げたる兵庫が腕を、綿の如くに押玉止めふなりけり。「な、何と爲るぢやよ、此椀が何事も知りはせぬのに！　と言うて予ぢやとて何事も知らぬに。」壁訴といふ口畫き玉ふ、兵庫は然もこそと纔に其怒を和めつ、「然りとては御謂甲斐ない、御身が然樣に御卑怯にござらしやれては我等師に對して合せう面目も無い。我等は既に由井宗の一人、朝家の御爲に關東へ弓……」といふ口を快く抑へて、「あゝゝゝ滅、滅、滅層な！一卿の御色は疾く喪せて、抑へたる御手さへ戰慄き、今少尉らが退りたる出居の方、御庭の彼方にさへ竊聞く人もやあるとやうに御腰を伸させて、覺束なげに御覽じつゝも、蟇蛙の如き聲、「……滅層な、其方、然樣な大事を其の哄聲で。知らぬかや所司代が鵜鷹の目を！　そりや予とても京都の御衰微を慨かぬでは無い、が然ればとて嚙めばとて、俗に謂ふ田作の切齒ぢや。何樣にならう？　痩公家どもが。」宣ふ御眼のみ圓かりき。正雪は其の打濕りたる瞼を徐ら拭ひて、「然樣に仰せらるゝ殿の御位階は三位、中

納言に中将をも兼させて、其昔ならば節度の大将ともおはさうものを！　然りながら現今の時代其の御述懐御無理ともおはさぬ。とは申さうも好う聞し召せ、是も俗の諺の播かぬ種は生ませぬ。我等が申すは何も其の殿の御首に、御兜を召させ、御肩に御鎧まゐらせよと申すでは無い、合戦とならば其りや皆武士に命するぢやが、只殿は其前に其の……を退治の種子、喃、其の諸國に播かせらるゝ。第一に、其の好機に、な、某等が禽哀、密と殿下になと仰せ上らるゝ……。」「では何ぢやな、麿は其の婢妬ぢやな。婢妬！　とはあらうも、倘か其事露顯とならば、元弘の資朝、俊基。これは巨大い大役ぢやな！」御震慄はやゝ止れるも、先づ胸に泛ぶ前途の艱難を想像せて、頻りに小首のみ傾げ玉ふ、煮え切れぬと看て取れる正雪は、兵庫を偸視て暗號の咳嗽一つしぬ。「父者ツ！」と叫ふ彼が呼息は復た粗暴かり、「何事の御考慮！　遅い〳〵。甚麼様に案ぜられてからが御身はもう我等が黨ぢや。えい何故ぢやとて江戸の置目は謀叛は其の三族まで！……。御身が我等と父子の名告りせられた時に其の御首には最う繩が附いてある。えい卑怯！　是よりは只、其の縛繩、切り解いて敵に懸くるか、但しは運盡きて絞らるゝか、二つ一つぢや。甚麼の女々しい、先例を其の日野殿なんどに御取りなさるゝ。こりや此座なる我等が師匠はな、其の元弘創業の忠臣楠判官正成が末葉おざるぞ。往昔の正成は如何ぢや知らぬが此の由井殿は當代獨歩の一人、加之も判官は河内の赤坂で五百騎の分限たら書に見えたが、是れなる師には死生を契つた弟子分三千人、其外諸家諸侯の方人とては數も知れぬぢや。若し夫れ然る方の御沙汰とも得て思ひ立ち召されうならば、御本意は眼前。なんの其の御懸念の事！」我を死の囚獄に投れたる其鑰は彼が手に在り、扨は我既や其の謀叛の黨類となりけるかや、甘き物喰うて油斷すなの俚諺は今將た思ひ當れるも、舘も舌に及ばざる父子の名告は甚麼とすべきぞ。然るにても父の頸に繩を附けしを手柄顏なる我子の心こそ、聞たけれ、抑も我は如何なる宿世ぞ、持たる子も持たる子も、或は病痢し、或は失せ、偶に壯健なるはかゝる有らぬ非望を我に强て、年老れる麿を惱ますぞや、親は然は思はぬを、子の心ほど淺ましきは無かりけり、あら憂情や、と燒野の雉子の聲ならでほろ〳〵といふは卿の鰄なる御瞼に墮る悲涙なり。瓦多々々と引尻動かして、倏ち聞ゆる紙襖の外に濁たる聲、「これは扨て目出たき御事、少尉只今其れへ參りて委細を申上げ候はむ。」

（百七）

軈て明け懸たる紙襖の陰より其臉を半分さし出して正雪が面を見遣れるは、彼の少尉なりき。彼が莞爾と打笑める面を、愕かせたる卿は穉と睨させて、「聞いたか、其方は？」「いや怪しうもござりますまい。前波どの此座へ。」と招く、何時の程にか正雪に彼や語はれたる、少尉はする〳〵と躙り出でつゝ、「殿、扨も目出たい御義、甚麼の御疑惑？　これは私の御宿意ともござりませぬ、只今左門様御申しの天下の御爲、御家の御爲、御子孫の御爲でござりまする、御一味の御誓文只疾う。」と彼は其鬚頤を突き出しつゝ殿と正雪とが面を等分に睥睨べたる、何時變りて其太々しき面桙は何さま其古へ江戸三界を股に懸けたる渡り徒士の、鮓にも和にも喰はれざる虎鷹者の本性を善くも見せたり。無情さつとものの味方と頼ませたる少尉すら如是の體なるに、卿は四面楚歌の聲に圍まれ玉へる御心地、世を墓なめる從前の遺恨の御涙は引反りて、這回は恐怖の御泣聲も出でやしぬべき、堪らで御座を起たむとし玉ふを、「殿これは何方へ？　少尉遮つて申上げます。眞に

これは御諚の禍徳の三年目、由井殿御意哀、勤王の大義は既や御會得とおはしつらうに、何故の御躊躇、第一が朝廷へ對せられまして御不忠至極とは存じまするぞ。殊に此程の大事を人に語らせて只今の御中座、由井殿とてやはか‥‥さ恐れながら少尉、牛王を此れに持參しまいた。御用事とあらば先づ其を遊ばされてからになされませ。」御袴の裾を無手と捉りて、彼は眼を瞋らせたりき。其毒焔紛々當る可らざる毒蛇の擬勢に、魅入られたる蟇の如き卿は眞正の御泣聲を擧げさせつゝ、「麿は死ぬはや！」「いや箇樣の祝義の御席に然樣の忌はしい！　只一寸と御書遊ばさるれば事濟むこと、さ、さ、此紙へ。」彼は手疾く懐裏より、牛王の宸璽を捺せる神紙撈ぐり出だせば正雪は御床の脇なる棚より硯箱取卸して墨摺り流し、物をば言はで押し遣りつ。我躬で我躬の我たるをも既に知らせ玉はぬ卿は、牛頭やらむ馬頭やらむ地獄の鬼に比しき彼に其筆を我手に持添へさせられつ、夢の如くに可恐しき神文認めたる其後へ御名、御判据ゑさせ玉はむとせる刹那なりき。御庭より駈入れる一人の者、「まゝ勿體ない、此の御判、お主等が手で‥‥」突如に御筆を掻ぐり奪り御庭へ棄て、猶も牛王へ手を翳むとする、其腕を押へて、

少尉、「や！　爾は局ぢやな?!」彼女は殿を背後に圍ひて一座を屹と睨向したる、冬の月にも譬へつる老女の化粧も此時に初て其凄愴を知りぬ、兵庫の眼は眞實に血迸れり、「長女、爾は！」彼女は其の必死の聲を震はしぬ、なれど猶傍邊をば憚りたりき。「左門樣と申さう事が、貴方はな〳〵、父ご樣を御捉へなされて、阿闍世王の御不孝もよも此には！　況て汝少尉、汝は何時其大惡無道の畜生には化り下りやツた？　由井殿も由井殿、此勿體ない御巧圖なさるゝのみか、此方の御温順い殿樣を其可怖しい黨類なんどに牽入れようと手剛なされて。さ、疾う此の御座を御退りなされ。御館には協ひませぬ。」可憫凜然たる彼女が氣勢も、猛風に捲かるゝ孤燈の如くに其力は此窮阨を撐へべうあらず見えたり。正雪は只微笑ひぬ、兵庫は疾視へぬ、少尉は嘲りたる吻頭を尖らして、「馬鹿め。お主も由井殿が御恩の配分受けながら、こりや其の野暮な氣をかツ拋棄け。」「えい此畜生！　由井殿が恩など言ふ、銀子の十枚巻物の幾反、汝其れ程の事で年來の殿に刃向ふか？」「いや阿呆！　乃公がのは其樣な些事で無い、京都に大軍を驅り催ほして關東を征伐ある其の大義のぢや。其を今殿に勤告むる處を、爾らが分際で甚麼を知らう？　すッ込め〳〵。」「や、口幅たい、官軍が傍腹痛いぞ。汝等が爲る事は山賊豪盜、海賊らが振舞ひぢやは！」此問答を聞かぬが如くに空嘯ける正雪は、此時にやゝと喚懸けて其膝を局へ向けぬ。

（百八）

膝を押向けたる正雪は、感歎幾と堪へざる如くに局の面を仰つ視下して、「少尉、まづ待ちやれ。あ、長女どの、御身は忠臣、女子として世に稀れなるべき忠義の御仁ぢや。が、惜しや大義に暗い。凡そ我等が黨身を捨て財を棄て、國内の諸所を奔走して義徒を鳩むるも甚麼の爲め？　只王室の御衰微を復して、關東の我が儘を抑壓へう爲めぢや。御身とても其の王臣たる當家の長女、よもや京都の此の淺ましい狀樣に滿足もされまい、名のみの朝臣が所司代以下の武士の臀後に這突ばうて見る影も無いを本望とも思ぼすまい。で此の殿を擁立て申して、其の大義の棟梁とすりや、殿は卽ち中興の功臣、事成らば御恩賞の他に拙んづべきは言ふ迄もなし、況てや其の金銀なんど、前に申した其の國中のもの、たゞ思し召すまゝに御手許へ寄りもせう歟。箇樣に功名と富貴といふを一つに握らせて、大國、二三ケ國の領主とも御成りや

わうなりや、織澤の此の御家に取りて此程のめでたい義は有るまいが？　誠に三千歳に實るてふ桃の御運の花の開くる只今ぢやを、其様に拒へ申さるゝ、志は然る事ぢやらうも、無躾ながら其れは女子の到らぬぢや。」彼女はもとより然る程の忠義の女子にはあらぬなり、慾をも知れり、得をも知れり、最初は少尉が口頭を信じて、得も知れぬ兵庫の左門に父子の御名告り遊ばせと殿へも勸告めたる程の女なり、なれども其は皆織澤の御家好かれ、續きて其身にも幸福多かれと念ふが一途にて、今の此擧動も、大事の殿を有らぬ匪徒の方人として、御身、御家、事さへ無くば御曹の裔までと變異ることなかるべき七百石の祿を併せて、失はせ申さむことの恐ろしくてなりき。然るを、怎様に木に餅の實るらむやうに又說かれて、彼女は些しく途惑ひたり、「大國の御領主ともなられまする、其れは什麼も目出たい御義とは存じまするが……其の大義とやらが必然に成功ませうか。又其の御企圖、何程の御味方がござりまする歟。」此問に對せる正雪が答へ、彼女は去就の卜筮と見て待たりき。要らぬ少尉は喙を容せり、「馬鹿念な！　なるのならぬの御籠木にて桃栗の樹を撻つやうな。味方なんどゝ、事も愚かや、西は九州薩摩潟、東は蝦夷の千闇が沖、總ては普天の下率土の濱ぢや。怪癡を附くるな。」局は死ぬばかりの憎き眼をもて彼を睨めぬ、正雪は之を制して、「其の入念は道理ぢや、成功不成功は其れは知らぬが、味方は大勢ぢや。」「大勢と申さるゝも、天下を敵手の御軍にござりまする。先づ大名の首立ちたるは？」「紀伊國殿！」正雪の應は澁み無かりき。彼女は呆れしが、猶執念く、「紀伊國殿？　而て其の御判は？」「え、判とは？」「只今殿を御責めなされた、其のやうな御判の物、定めし牛王へ御自筆のがござりませう。其れを何卒……。」「見せいとか？」「いかにも、殿様幷に妾も決心の爲め。目下此座にて。」安宅の辨慶と迫られたる正雪は、微しく窮せり。戲言に執做して、「なれとな、其物は、我黨の本尊ぢや。はゝゝゝゝゝ開帳は濫りに出來ぬ。」「でも、妾も既や御荷擔の一人、拜見の協らぬとあるは何やら御心もじの僻けぬやうな。殊には御口で承はるも、正物を拜見しまするも同一事、目で見まするも耳で聞きますも同じく後へは存りませぬ。」京女腐の燕口に喙り立られて、然ばかりの正雪、今は敢なき受太刀とはなり訖んぬ、平生の手練の甲斐なき口許も四度路六度路に、「はゝいや然様に申されては心外ぢやが喃、有り樣只今は持ち合さぬ。只我等が申すことを信けられい。」「むゝ、御持參が……？　さらば江戸にでも？」「さればぢや、其の江戸に。」「えゝ？　其の江戸に？　江戸には甚麼の御用どもにて拋棄された。其の御判は今も仰せの此の御大義の本尊ではおはさぬか。本尊たる大事の御判を何故に其の本願たる御身様が御手離された？　然様な迂濶な民部どのともござりますまい。又瀾然迂濶なりや此の御大義が何とて成功う。甚麼としてゝ其様な御人の手に此方殿様御判なんどが……思ひも寄りませぬ。」怎くまで手苛く窘責られて、いかに千枚の皮もて張れる堪忍袋も破裂やすると思ひの外、彼は猶善う打鎭めて、「然までに御論やれば詮方がない。實は此の左門殿、此れが紀伊國の御判の代物ぢや。」此言下に、兵庫が面色は太く變れり。

（百九）

松坂以來の兵庫は、有りし程の人とは異りて彼が稟性なる銳敏き感情は愈其の狂發を佳め敢へぬまでなるも、殊勝らしき涙の泉は胸に涸れて、只善く疑ひ、善く恨み、善く怒る、三毒の業火の炎焰に斷えず身を燬るゝ魔とはなりぬ。彼は身に負へる怨恨を晴さむとては、天

下の罪人たるも顧みぬなり、其方便を濟さむとては實の父をも憐まぬなり、況んや其他をや。彼の憎き局などをや。彼女と正雪との問答を聞きて、彼が狼毒の念はあはれ今張裂る如くに膨脹せり、一心たゞ正雪が處置の緩漫きを、慚ぢ、悔い、恨みて、（我代りて素奴が咽吭を一挫ぎと拳は握れるも、其の手指すべき折のなくてじり〳〵と齒を咬めりし時、機會は來れり、我は紀伊國殿御判の代者との一句を聞くや、彼は突然として躍り出でぬ、其面色は既に決せり。「局、聽け！　予は師の御言やる紀伊國名代ぢやぞ。予が一言大納言殿口狀として聞け！」正雪は間も透さず、「いかにも、是れは從二位大納言殿御諚。方々も其式代にて……。」座を退りて自己先づ手を支ふれば、何かは知らせず殿も慌忙てゝ御手を下さむと爲玉ふを、「あゝ殿樣、これは如何なこと。只今其の御手下されましては御家が斷絶いたしまする。是れは皆狂言。さ、僞樣な場所には！　這奴らには御構なう。」殿の手を取り、走り去らむとする局が足許へ正雪が手より閃燦き出でたる一道の白光ありて、其の裾を縫止めたり。縫はれて耐らず伏轉ぶ頭上に。「擊ツ!!」一緊張る緒を斷截るが如き兵庫が叫喚を、方纔彼女に死ぬばかりの眼して白眼られたる少局は奇癡き腕に得たりや應！　彼は手を腰に懸くると見えし、起上らむとする局が白頭首は無慘や飛びて、「わッ!!」と絶叫けるは其血を頭より浴び玉へる殿なりき。「殿、さ、此小刀、熟う御覽ぜられ。王師の首途に血祭となりましたる不忠の血、そりや斯うたら〳〵と流れまするぞ。」血刀を眼前に突つけたる彼は、否とも仰せば殿ともと言へる血相。其を御覽ぜる卿はあはれ御舌は上顎へ、御腰は疊に粘着て、物も仰せず御身も動かれず、瘖瘂と蹙足と中風とを兼て病めるにも似たる無慘の老翁、ただ御目をのみ虛呂々々と働かせて、頻りに御首を肯かせらる、蓋し一味に異議なしとの御意にやあらむ。「それ孫八、殿へ御冷水、一口喫させたりや其の神文を、善は急げぢや。はゝ殿、箇樣なりまいたりや早や御隱匿も申さぬ。此の少局は其の以前、我等家塾に舍き申して諸家の徒士奉公させまいたる者、御隱し兒の兵庫素性を聞き出さうが爲め豫て當地へ入り込せ置きましたるが、僞樣の役に立ち申した、いや、兵庫では御合點もまゐるまい、さ、左門どの御身が牧野兵庫たる其の來歷も包まず父ごへ。」兵庫は正雪が言ふが隨意、紀伊國へ出身の起初より今回退身の終局までを、好き程に、單簡う語り申せば、其尾に跟きて少局の孫八も豫て正雪が密意を領けて、當家に來り、今討たる局が口より越前の一向寺が僧の娘の腹に殿の御胤あるよしを探り得て、師に通じ、師は又た其を基本に、種樣の手段を運らして今日の此位置に到れるよしを具に告げ、「怎くまでに魅られたるも宿世にやおはすらむ、其の宿世も悪しきにあらで、天晴れ福の神どの御結緣、微妙じき御果報にて候ふものを、御媒妁たる少局に御禮の一言もあらせ玉へ。」と彼は猶憎々しう言ひぬ。何から何までなる正雪が計圖は、忝なしとや言はむ、怖ろしとや仰すべき、感謝の極みか、怖畏の至れるか、只戰々と震へ玉ふ御手に再び筆を宛行れつゝ是非なき殿は彼の道風樣に、文字も亂次に、行も分かず、御名、御判を辛々に、神文に遊ばし玉ふ。其を口惜しとか、此方を磁と疾視るやうなるは、兵庫の羽織を綾に被ひたる、其裾より、瞑りも敢へぬ怨恨の眼眦を猶開張ける血塗れの老媼が死首なりき。

（百十）

京の煦閑さとて、冬の暮の寂寥さとて、公卿町の蕭索さとて、人一個の殺さるゝとふ騷動を傍邊の邸にても知らぬか、音も立てず。母屋の庖廚も間遠く隔てし事とて二人在る端婢の其の

一人は、かゝる珍事の亭にありとも知らぬ顔に、五器の音鏡々と膳を洗ひ、今一人は燈下に、春着をねだる郷家への文にや、巻紙を巻纏しつゝ一心に筆を走らすを徒然に堪へ玉はぬ御曹子の和子も、面白きもの御覧ずる様に餘念もなう凝視め玉へり。庖厨さへ慥くてあるを、門に竝べる小者が部屋には、此ほど貰ひし零銀の贏れるを酒に賑へて、三人團欒の小宴、舌鼓うち興じたる鼻唄の颯々ざに、餘所には風の吹くやらむ、雨の降るやらむも知らず、此等の爲體を確乎と見澄したる少尉は、何處よりか擔げ來りけむ柄細の鍬もて、やがて築山の陰、陽光の達かぬ隈をはかりて戞々と掘り初めぬ。其傍には兵庫ありて、彼は、山梔の圓蓋に作りたる其根方に、怪しう蒼白く、萎縮びたる老媼の足の星光に物凄う微露れたるを斷えず睨めつ、隧乎との音にも素破との氣勢して、彼の怒眼を配れり。座敷はと看れば、卿は幾と赤裸の、御下着一つ被はせたるのみなりき、寒さと怕さとに齒根も合はで、うち戰慄てのみおはすを、正雪は片隅に蹲踞申しつ、自已は下緒の襷懸に、殿の御衣、局が褶褄、兵庫が羽織、少尉が袴、すべての鮮血に抹れたるを押圓めては疊に粘ける血を拭ひ、御池の水に濯ぎ出だして、又搾りては又拭ふ、然くすること七八度。晝ならば五六枚がほどの疊に塗れる血淋漓の、什麼に可怖しかりけむよ、四方髪せる大の漢子の此業したる、什麼奇異しう見られむよと思ふにも、燈火も無き暮夜の座敷は結句に諸事の都合好くて、「さ、御座敷も出來申したは、はゝゝゝゝ苛い骨折なり。」彼が笑ひつゝ坐する時、事爲果てか、少尉も兵庫と共に此座に入り來て、徐ら御次より、燈臺を取り出で、腰に着けたる燧袋を撈くりて燈を點じぬ。明かうなれるに、卿もおづ〳〵、其邊這ひ出で玉へるが、見るに淺ましさ、口惜しさは、寧ろ此世の無くもがな、此座敷の闇黒にてもあるべきに、物の目も見えぬ盲目ともならましかばなど思し食す程なりき。此御館の重寶たる彼の堆朱の椀は、御祕藏の根來折敷、年來召し馴れたる高坏と與にあはれ打破りてか棄てられけむ、十年このかたの可懐しき白練の御衣は剝脆なんどに遭へらむやうに剝り奪られて、暫時嬉しと御覽ぜし土器の砂金は、行方も知らず、朝夕厭かず見たまへる土佐の某が丹青の紙襖の繪は、最もなう剝げ落されて、總ての御座敷、御調度、野分の旦、地震の後とも掻擾されつ、殘れるは可怖しき血痕と、腥ぐさう、胸も溷らぬ不祥の氣のみなり。此らを見玉ふにも悲しきは彼の長女なり、甚麼とあらむも彼女は予が爲には忠義の女なりけるを、其の亡屍にも善智識の一句をも與へで彼處らの隅に、這處らの鬼徒が手して痲めさせつる、妄執の一念凝りて、或は雨の夜風の夕に其の亡魂の啾きもし叫びもし、或は鴉の孳り犬の發きて、自然に事の發露れもせば恁麼と爲べきぞ否其迄もなき、今宵の事を他の聞きて所司代の耳へも達れば、明朝をも待たせじ。縱し又た然は無からむも、此の羅刹にも比しき奴原の何時までか予を逗し置くべき。と有りて自首せむも神文は彼が手に在り、況て眞正の兒ならむには、惡徒ともあれ左門といふ兵庫を、實親の口より刑罰に遭せむも可哀き歟。到底諫めむにも力及ばず、拒へむにも勢の足らざる予は、只空しく此等盜賊謀叛人らが夥伴に墮て、刀鋸の頭に落つらむを待のみなるか。繼澤の家の破滅を麿が代に期するのみなるか。と悄然として燈火の小暗き方に身を潛め玉へる卿の御耳に、聞きたうもなき彼等が匪謀は釘を打つやうに斷えず響きぬ。「……然らば紀伊國元御家來たる兵庫との御名をもて、目安を郵送りて、詰腹にても可し、否應なき御謀叛にても可し、兎角は彼殿を陷し申す歟？」「然樣ぢや。然もせば父ごが殿下へ此義を說かれうにも根據が

有るといふものぢや。案文は正雪なされい。」「尺を枉げて尋を直うす、大義の爲には爾る謀計も是非無いかや！」

（百十一）

三位の卿は其翌朝より感冒の御心地とてうち臥し玉へるに、御藥をも進らすべき長女の局は前夜俄に其影を隱したり。檢れば、由井が旅荷物は攪攫されて、用度の金銀も多く紛失ぬ抔は彼局あらぬ慾に眼眩みて、奥なる御酒宴の其間に、邪曲き所爲して逐電しつるにや、御館の結束する局ともあらむ彼女が、憎しや、など少尉は獨り烏巻て、三日四日其處此處と穿鑿り歩き、賣卜の神圖のと騒ぎたりしが、其等も些の手懸りなしとて漸やく歇みぬ。御内の男女は、只事の有り得べからざるやう覺えて、途に迷へるのみ。醫師の藥方も驗なくて、卿の御熱は日に増すのみなり。折々は怪しき譫言なんどして、鬼に魘はるゝ如き態し玉ふに、此事他に漏れては父上の御恥、家の不面目、子たる我分として忍ばるべきに非ずとて、兵庫は家中の者を近づけず、晝夜御枕に附添ひて看護をす。かゝる狀況なれば、年立ちかへる元三、七種、御藏開の御祝ひも此館には總て無くて、世は花鳥の春となれるも、こゝのみは荒涼じき冬の光景なり。其のみかは、太も可恐怖しき風説の何時かと近傍に立ちて、今出川の妖怪屋敷なんどとも誰とは無く言ふに、二人在りし端婢の一人も怖れて逃げぬ、三個なりし小者も一個となれり。結句は其れも可しとて、正雪は我供のうち心利たるを三五人呼取りて、朝夕の諸事を賄はす。日常の事にかくても濟むべし、只心許なきは卿の御身なり、凡そ鬼祟めきたるには、醫師の藥劑よりも靈社の祈禱などこそ可けれ、尾張なる熱田の宮は日本無雙の靈威なる御神にまします、少尉、御身殿の御爲に、病難退除の御守といふを乞ひ來らずや、と正雪が勸告るに、彼は心得て卒忽々々に發途ぬ。是れ正月の中旬なり。

二月の但有る朝、彼は蒼皇と歸り來れるが、神宮の御札といふは什麼にせし、持ても來ず、只正雪と兵庫に對ひて慌忙しう甚麼事をか囁くやう見えたるが、其の夜の間に正雪は供士催少を將て、消ゆるが如くに忽然として京を去りぬ。其の前途は熊谷松田の大將分たる士すらも知らざりき。「すりや師匠は御發ちやれた。」「嬉しや水、其水も是からは我等が自由ぢや。あツはゝゝ。」正雪が此の發途を、天に歡び地に喜びて、躍るばかりに狂へるは彼等なり。戀とも言はず、情とも言はず、行くを見送る袖の上に一滴の露を濺がむは尋常の人の別離とても然なるを、これは什麼、師の首途に其嬉しげなる笑顏と、知らざる人は奇異まむが、彼等に取りては亦其所以なきにしも非らざるべし。

起因を討ぬるに、原來彼等十幾人は、其の京着の前、竊に師に謀れし旨ありき。今の所司代周防殿（板倉重宗）は父（伊賀守勝重）にも勝りて可怕き人ぞ、其事ぞと指しては言ふべからぬも、我が擧動には自ら其眼を狙くると覺しきに御身等此地にて自然の爭論ども牽出だされば或は其等より年來の祕事の露顯もしぬべきぞ凡往昔より大事といふを蹉跌つもの、酒と色とに過ぎたるは無し、就中酒は我黨の大事の爲には大敵なり、我を怖とも思ひ、此の宿望の成就をも願はゞ、御身達、京に在る間は酒を飲まれな、如何にや此義は、と正雪は言ふ。甚麼の異議の候ふべき、師の命とあらむ程には、我等此地に在るが間、一切斷盃!!

かく誓詞は弓矢八幡、摩利支天の二柱を證人に、潔よくは言放たれしが、扨て辛艱きは其の後なり、二條寺町なるさる寺院の奥の間に押籠られてより玆に四十日、師が監督の眼の恐ろしきと、さすが誓詞の表に慚てか、酒のさの字を唖と與に嚥下て、男子の辛抱、性根場と耐

へしが、堪り難ねたる一人、如何ぢやお主ら未だ息はある奥、と問へば、えゝ情無い忘れて年を経しものを、ぢやが見やれ、頬肉も五寸がほど減たであろがと、打嘲つ。

道理ぢや、然るにても斯う勇氣の疲れては萬一の大事に得意の二尺八寸も振られまい、師も醉狂ひに事の露顯を氣支はれてなれ、養生の爲にする藥の水なりや、三盃を限ッて、内々……と耳語く内評議に矢も楯も堪らぬ面々、既や色めいて立つ足もなく崩れかゝるを哀れを知らぬ下戸黨が爲に毎も否々と盛返されて、口惜しき蟲酸を忌々しき舌鼓に迸らす折なり、斯う遽ただしき師の發途は彼等が爲には鞭鮪が大江の水を得たる思ひ、顎も、咽も一所に愚卑々々と動かして、熊谷松田を謀叛の張本に、「いで喫う！」「勿論ぢや。」

（百十二）

久旱の豪雨を得たらむが如き彼等の腸は、喫めども饜かず、浴れども足ることを知らず、飲みて飲みて飲潰れて、其夜は止みたるが、其れよりは夜待に飲む。飲めば瀾醉て倒るゝまで必ず喫む。なれど、飲み而、醉ひ而、眠る而已にては、隴を得て本だ蜀を望まぬなり。忽諸にして議は起りぬ。「島原とやらは如何ぢやろ喃！！」

伏見の粟染、清水の五條坂、それらは古く世に聞こえたる遊所なれども、東の吉原を目のあたり見たる眼にては、汚穢くして屑かずならず、眞や其の島原は、去る年の亂（寛永十四年の天草亂）の折り、始めて朱雀野の露をわきて、戀草の種を播き初めしより、其の根ざし年々に蔓延り行きて、今は大阪の新町にも劣らず、かの吉原と竝列て、三都隨一の遊里とはいふなる、げに其の一見も妙なるべく、些有るを殘さむも本意なかるべし。傳へ聞く、建久の昔しの和田酒盛にも、虎といひ、少將といふ遊君を請じてこそ、末世の今日にも其風流に好客の感涙をば流さすれ、彼の老人の義盛すらも其の一番盃を爭そひては、齢も人前も忘れしものぞ、況て此所なる若殿原の遠慮は不沙汰、謹愼も時によりては臆病の嘲笑に墮つべきぞや、いさられ方方！　熊谷松田を佐々木梶原にして、先陣を爭そふ壯佼們は、其の朱雀野の露の浪に、鎧にあらぬ後朝の袖を絞り初めてき。あはれ鬼の留守なる洗濯てふ蠢愚なる彼等が念頭には、其鬼よりも可怖しき魔てふ怪物の既に魅したりとは知らぬなるべし。

＊　＊　＊　＊

なに喧嘩とか？　爺さまの順禮を壯き武士が撲つとか？　何處の赤鰯か叩いてござせ、救うて遣れ、と犇めき合ふ俠客が惡題も、さすが京とて物氣勃ましうは聞えねど。着衣汚されじと奔り躱るゝ素兒の類波には今を盛りの彌生の夜櫻も慌らで散るめり。揚屋が店頭には、上框に毛顫鋪せ、銀燭萬燈と點けさせたる中に、寛々たる寛濶風の見事なる大盡、此廓ばかりには御免とかいふ淡婆姑の喜世留てふもの裾いと短かゝりけるを腰に卷きて、雙刀のまゝに大胡坐かけるが在り、彼は左右を顧眄りて、酔聲暴かに、「緩怠なる老耄奴。まッと撲て、撲て！」引据ゑられたる老人は廻國の順禮と見えたり、雨霰と降る無法の鐵拳を彼は捩ぐに力無きか、軀を大道に投仆して、其の着たる負摺といふも散々に扯破られぬ。御免されて、と其れが謝ぶる聲もいと細きに、動搖みに紛れつ。猶も撲たむと立懸る暴漢等が拳頭は、仲居らが辛々に遮止め得たるも、其の濁聲をば尚ほ歇めず。「爾は何者ぢや？　むゝ、四國の札所うつ順禮ぢやと。其態ならば御様でもあらう。が、其の眞正の順禮ならば何故手の内を乞うとはせで那處なる御仁……否、大盡の御顔のみ視る、何故沁々視る。やい！　こりや察するに爾は犬ぢやな？」了簡に肩を撲たせたる彼の大

忽は、聞くより無手と其膝を押向けぬ、「むゝ、檜木善う察た。甚麼さま犬ぢや。えいこゝな太い犬めが、硼原来何物を然う喚き歩るくぞ、魚の骨、握飯の缺片なりや此邊より河原へ行ね。こりや各位、疾うこれな犬めが首頸へ繩さお附きやれ、我等其邊へ伴れ行んで水雑炊なと喫はせう。」「えゝ滅膚な！　私が犬なと。」河原へと聞きて周章狼狽ける老夫は、扼まれたる頷の手を振摸切て遁むとす。どこへと立塞がれる一人は追縋りさま其場に引伏せて、「犬と聞いて慌忙てゝ逃ぐるは眞正の犬ぢや。」大盡も居合腰せり、「犬、犬、紛れも無い那處がの犬！憎くい奴ぢや。見懲しに花木が今手に懸けう。」花木と廓名せる此の大盡は說く迄もなき彼の熊谷にて、彼は此順禮を、疎て師の警誡め置きつる所司代の做公人とは想へるなり。なれど此の老人も、所司代が手にこそ無けれ中らぬまでも外れざりける紀伊國の吉見喜太郎！　吉見は彼を兵庫と想ひて狙けたるなり。彼が兵庫と瓜二つなる容貌は不意き大厄を此の老人に牽けり。

（回十三）

喜太郎の順禮は、目指せる者の其者ならざるに驚きて、其場を衝好く避けむとしたれども、彼等は又た我が素振を怪しみて、捉へて放つべくもあらず、果は細作の犬なりと見て河原へ牽もて行かむと言ふ。毆たるゝ拳は忍ぶべきも、大事の命の瀬戸とありては其れぞ俗に謂ふ百年目なり、彼等に先を制せられぬ前に、彼の花木とか喚へる奴を一蹴に蹋仆し、其腰にせるを奪ひて、寄せ合す奴原片端より撫切にせむか、老たりとも吉見喜太郎！　然計りの腕は有るべきを。と迄は念ひしが、否、待て暫時なり、犬と見て驚く奴は、這も尋常の嬪鶏にては有るまじ盜賊か？　若くは浮浪の匪謀する輩か！兎角は今些し飜弄て、其の本性見届けて、と彼は膽太き頭を頷りに地に下げつ、其手を摩りつゝ、「待て。あゝもし此れ待て下され。私を犬なんどとは御無體な。爺でも私とは人間でござります。其の人間の首に其様な恐ろしい繩を附くる……そりや御無體ぢや。」「途惚くるな、犬、駑畜生めが。犬無けらにや何故に大盡の御迹を狙けた？」彼は始めて聞えし所爲して、「え、大盡さま？　勿體なや御大盡さま、無躾は御免させませ。貴方の御姿拝みましたは其の……え、其の……その只今の御顔が爺めが殺した倅めに生模しでおざらしやれますからの事。……はい、それでつい、御懐しさに御傍へ寄りまして……。」「甚麼ぢや、大盡に倅が肖た？馬鹿吐くな。」「いや、馬鹿でおざらぬ、眞に瓜二つ、酷う肖しやれて……其れで其つい……御無禮のところは貴郎方から何卒や好い様に御謝びなされて……。あゝ想へば墓ない事、活て在れば恰ど大盡の御齢、此爺めも樂を爲ませうを、その只一個の、杖柱の奴に死なれてそれで唯此様な廻國にも出ますこと！　念へばあゝ無情い！」彼は遽におい〳〵と號哭せり。泣かれて彼等もさすが可憫と面を見合すを、檜木と喚ばせし松田彌五七は突如に呵々と哂ひ出でしが、其眼に瞟て膓と睨めて、「陳腐い！　や、古手は措け。見たくでもない其吠面。甚麼と陳ふとも爾は凡庸の奴で無い。可矣、此所では花木どの遊興の妨碍、全般は委任されい。人間なりや人間、犬なりや犬、あの河原で拷掠いて、皮剝ぐか、水溺はすか我等が適宜にせう。やア皆の衆、甚麼を凝望て……其の馬鹿面はよ！」闖まされて彼等は又た叢々と集りぬ、其の面上には、設令錯誤うてからが順禮一疋、見遁して其の後腹を疾せむよりは、との色見せたり。爰に到りて喜太郎も其の覺悟の臍を決めぬ。彼よりの手指や待つ、我よりか先んぜむ歟と、其の呼吸を謀れる一刹那、前に躾げたるは又立復り、後に來

れるは覆重りて、餌を爭そふ雜魚の如くに立閉めたる見物の、袖の下を拔けつ、潛りつ、此紛騷の場の內に駭入れる處女あり。彼女は愕きたる聲を絞りて、「父さま、ま！」透さず突と寄て喜太郎が前なる一人を突飛ばし、老人を背後に圍ふ、其面を見て、父なる人より花木の熊谷は疾く聲を懸けたり。「宮では無いか？」喚れて再び愕ける處女は、其人を熟と視て、「や、貴方は……。」言ふな、と彼は目を喫せて、卽座に聞へり、「其爺はお主が父か？」此騷動の原因は知らざれども、怜悧なる宮が胸には、若くは此老人を紀伊國の吉見喜太郎、兵庫を穿鑿る其人と知りての喧嘩かとも疑惧れたり、然らば今喚べる一言の過錯すら旣に趁ひ難きに、再び父と何どか言ふべき、蓋ふに此處にては此老人を餘りに親しからず、疎からざる間に置くこそ、倒々自他の爲ならめと彼女は快くも想ひたりき。「いゝや只の……。」「只の老父か？」「いや同行ぢや。貴郎も御存じの、妾には父はありもせぬもの。」「いや怪しいぞ。」傍聽せる松田は叫びたり。

（百十四）

喜太郎は彼等が問答を傍聽して肚裏に微笑ぬ、扨は這奴等は正雪が黨類よな、人を犬とも恐怖れしも宜なり、但し彼等にして此邊に在らば、正雪も此地に在らむ、正雪在らば兵庫も居るべし、機關の緒は偖も面白う操られしかな、只宮は、今朝東山より伏見街道へと出でたるものゝ什麼にして今此邊へは？　と思へるが、其等は此所にて問ふべくもあらざるに、彼れは只顧首を縮めて其耳をのみ引立てぬ。此方には檜木の風に煽られて、花木の花も狂ひぬ。「何さま怪異いぞ、宮。お主此老夫を何處から拾うた？」「伊勢の山中で……。」「伊勢の鈴鹿では馬が物言ふぞ。其馬は、お主がのは讀ぢやと語うたが！」觀物の大勢は、彼の一癖あるべき嫖客と、此の艷美しき順禮の娘との相對せるさへ旣に奇なるに、又其の廳答の怪を窮むるに驚きて益動搖けり。宮の面色は微しく變りぬ、「御身は此廓で其樣な譫語いうて居られても可いのかや？」「甚麼の洒落臭い、爾こそ此の土地など迂路ついて其れで濟むのか。何の用で京都へは失せた？」爛醉ともあれ熊谷が遠慮なき、師命の秘事をも發口り難ねまじき景色なるに松田は驚きぬ、彼は五分の正氣尙存るに、獨り首頷き、透さず問へと割て入れり、「待た兩個。これは甚麼さま宮どのゝ言ふ方が道理ぢや。何事と思はうぢやが喃、長々の滯京、機關しいに今日風と申し合したは東山の花見物ぢや。何が扨て、酒には醉ふ、日は暮るゝ、折角の興を徒歸るも本意ないとて、折から假裝た此廓の夜櫻と鳴り込うだぢや。次第は怎樣、今のその我等や花木の突いた譫語、皆其の洒の言はする所爲、心にも無いぞや。但し其もじには聞きたい事も言ひたい事も山々ある。なれど此所では如何も叶らぬ。一寸と廓外へ往ね。あ、方々、一兩人には當所に殘つて餘は皆我等とござれ、儕樣な場所に壯年者の在るもので無い。さゝ疾う〳〵や、花木もやがて歸宿れや。」言ひつゝ契はする其れが眼光の異樣なるを、處女の背後に蹲みゐたる老人は瞥と見るより快くも彼女が脚を爪捻りき。「往もせう。然し此な同行衆は歸しますぞや。」「否、其りや協らぬ。其爺めには言分がある。」「そんなりや甚麼と？」「應、其奴めは拘引いて行く。」「拘引て怎應なさる！」松田は、這奴、彌〻？　と踟乎と倚りたり。「扨は、庇護ふか？」「庇護ひます。同行ぢやもの！」「爾も犬か？」「え？」「犬になつたか？」彼は磊と睨まへしが、其毛腕を搴れるのみにて容易には撲たざりき、彼は彼女の輕侮るべからざる本事あるを知ればなり。雖然多寡が一個の小女郎、寄

せ合せて撃たむにはと、虚聲喝けて躬方の氣を颯ましぬ。陣酒桶の如くに圍める見物は、再び此擬勢に懾れて獰の嶽れたらむが如くに一度に逃げたり。なれど亦、處女と老夫の安否を氣支ひて去りも得ぬあり、宮が臆せぬ勇氣に呆れて膽を消すあり、喝采るあり、危惧むあり、武士等が意氣地なきを咽ひて嘲笑すあり、詭罵るあり、石瓦の投礫なんども追々に交る中に。婆さん危ない、あの喧嘩の間へ入つて何樣する、傍杖ぢや、退いた〳〵、と抑止る腰をも牽く袖をも振摸切て、「途方もねえ、彼の衆らに彼女を渡して、手籠にさして。」と齒も拔き離堤に腹立しげに獨語きつゝ、突く杖齷齪と走り寄る一人の婆あり。婆は突如に嚙着く如くに、「こりや此方衆は有らう事かい、其の馬のやうな頭體して、この最傷坊の娘子を調弄かして、何うする氣だえ？　此の宮どのは私が村での大事な人だ。今日測アずも途中で遇て、案内頼んで此里さ來たのを、今此方衆に此所で傷でも負られちや私はア村へ何の面で歸られべい。爭論の對手なら私爲りやすべい。其れとも婆で否だといふなら、娘さ呼出して進ぜますべい。私はア此體でも、娘さア、當時此の島原で全盛の、奥州屋の信夫といふ太夫でおざるは！」

（百十五）

老婆の出現しにさへ驚きたるに、猶聞けば、彼媼は、奥州屋の信夫太夫が實母といふ。抑や此の太夫といふは、近ごろ花木の熊谷が有頂天の其の上にも昇り窮めつゝ、既に寡少からぬ遊蕩の金銀をも拋てたるに、猶ほ巨多の身料を賠償うて宿の妻になど言ひ騒ぐ妓なりける。其妓が實母、すなはち大將にも頓ては母者たるべき此の狂媼を、苟にも手籠むとしたる我等、返報の眼球は？　と恐る〳〵戯ふ壯者らを見て、有繋に熊谷は何とも言はず、苦笑の面を背けて再び了寥に、「こりや肩まねれ。」彼は猶ほ照れ隠しに恁くてもあらむ、武者苦き腹の我獨り遣る瀬も無きは哀れ彼の松田なり、彼は全般の、馬鹿の目見たる、忌々しさの八方當敵に其邊た〻闘々と睨め廻しつゝ、沒理由紛擾で酔も醒めたは、こゝに見えた臂も宮も、爺も媼も、花木、悉皆其方に委託くるぞ、皆來よ〳〵、彼方へ往て酒ぢや〳〵。と怒叫きつゝ入る後に跟きて、好潮得たる蝦雜魚の輩は皆ぞろ〳〵と奥へと立つ。其聲を、獲たりと視たる、宮は喜太郎に目を咬すれば彼も疾くより其心なり、顚路柔々々と回踵りしつ、嬶て見物の間隙ある陰を目に懸けて突然に躍り入らむとする、其狀に始めて意注きたりけむ彼の老婆は、「えら！　嘉助どんで無えけえ？」言ふよりも疾く、彼媼は彼爺が笈摺の裾を攫みぬ。嘉助とは彼が足輕より其の小頭となれる時の名なりき。思ひも懸けぬ我が舊名を喚ばれしと、躱むとせる端を抑止られしに、阿呀と叫びつゝ彼は屹と顧れば、あな無慘、げにも其女ぞと見憶えのある、駿州有度濱の安居村なる六兵衛が後家、おさめと言へる果なりけり。彼女は太くも裏枯にけり、既往、今より廿四五年の以前は、眉目好といふにはあらぬも、赤た醜陋とにもあらず、喜腹しう、豐肥々々と肥りて、偉大ながら愛嬌もある年增女なりしが、今見れば有りしが程の面影も留めで、薄といふも可恐しき穴目々々、辛都婆負ひたる骸骨の如し。彼女には我も、些と逢ひては不味きところあり、況て此場をや、と有繋の喜太郎頭を抱へつゝ、愈其身を遁れむとするを、媼は忽ち泣聲して、「主、そりや薄情ちふもんだよう。此方も此所へ來さしツたは娘に逢ひにだろ。其娘へ逢ひもせないで逃るちふは……。」突梯の一言、喜太郎は仰天せり、宮も呆れたり、熊谷も驚きたり、見物は益其の珍事の重要なるにわや〳〵と笑呼けり。「此方と不圖懇情したは、あの殿樣が紀州へ移封しやれぬ以前の事、

其時乃媼がおツ孕んで出來いた兒は今私がいふ太夫だよう。此方も其事何處で聞いて故々逢ひに來さしツただろ。其娘にも得う逢はねえで乃媼來たまて逃るちふは怎麼たら怪事だえ？宮どの疾や呼ンで逢さツしやろよ！」彼媼は纏事の轡るが如き泣聲を擧げて、傍下も管はず、且つ怨じ、且つ號びたり。之を、逆退其據を失ふと謂はむ歟、手足の措を知らずと謂はむ歟、喜太郎が眉下の、驚愕、周章、狼狽、奇異、不可思議の感は、恐らく千百の形容を以てするも善く盡さじ。彼は實に茫然として自失せり。何さま念へば其昔我も祿薄く、家も貧しく、妻も無き寂寥さの出來心に、不圖此のおさめ後家に語合ひ寄りて、其れが腹に懷孕せしよしも聞きたるが、其の子の其れが其の今の太夫ならむとは、實に思ひも懸けざりしなり、個は什麼！此は〳〵、唯許りにして彼は當面る面目なさにや躬を僂まして頭より其笈摺を被れり。

狂言にとて見る可らぬ此の好笑さに、彼の猿眼せる姿を外にして、宮も笑へば熊谷も微笑ぬ、況て見物は吶と囃せる、其背後の方に、忽地、「さ、往來ぢや、往來ぢや、退かしやれ〳〵。」梓棒持もたる前拂の男の制止聲いかめしきが跡より、插鬘傘の影は見えたり。是れ道中といふ事すなる此廓の太夫の來れるなり。

（百十六）

人の山のぱツと崩れて、一條の大路啓くる處、穠郁たる蘭麝の香は夜風の隨に〳〵先づ左右に垣と竝列べる見物の鼻を撲てり。續いて來るは箱提灯にして、其次に見ゆるは插鬘傘なり、傘の下には悠然たる慈救の擧容、遠方ながらも威儀氣高う拜まれて、白地の手巾もて覆面せる白象の如き若者の背に、普賢のやうにも乘り玉ふ五人の遊君あり、是れぞ當時此廓にて五軒とか名告る其大家の太夫なるべく、信夫も蓋た這中に在らむと、此場なる男女も心々に、或は其息を凝め、又は其の眼尻を垂下るもありき。宮は豫て、おさめ婆の途惑ひして、有らぬ人に粗忽せむことを惧れて注意けたり。御身が娘のお道女、今の其の太夫どのは、妾も昔日の友達の舊知間なり、それがおはさば悄と袖牽きて通知すべきに、其れ迄は胡亂に高聲など擧げたまふな、駈出でゝ綁るなんど勿論禁制たるべしと捉てたるを、彼婆も納得して、彼の情無しの嘉助どんを一心に番せり。

遲矣と待つ衆人が心も知らぬ顏に、一步を半步と邊りに邏る行列も漸次に近づきぬらし、留木の薫は愈〳〵氣爽かに、提灯の紋も定着となれり。其眞先なるは一輪の梅花に、莟二つ三つをあしらひたるもの、浪華屋の梅が枝の君！と傍邊は一樣に動搖き立ちぬ。宮は、今が妙齡の、加之これ程のめでたき眉目持ちながらも、從前髮化粧磨琢きに意を須ひたる事もなし、況て他人の容姿の美き醜き、衣服の色目模樣の流行廢止など、目にも停めず、耳にも懸けざるが、これは流石京女郎といふ、其都の粹を盡せし島原の遊君達なり、抑も什麼なる靚裝にてやあるらむ、其人は淸水の御堂の天上なる天人のやうにてか、と竊に眼を凝らしたる、其睛裏に先づ入れるは彼の梅が枝なりき。魁の名におへる彼女は、其齡も若木の容姿も〳〵し、風鬟雪鬢も甚麼かはといへる苦界てふを、屑ずともせぬ顏色凜として、張ある日許、瀟洒たる風采はげに此里の名物なるべく、髮は、洗ひ立てたるをすべらかして、素き髻一つを懸けたり、白紗綾に銀の摺箔せる裲襠を被れる、人は皆喝采と稱揚れども、宮は、たゞ其の贏形に物寥しきが哀憫ましう、兵學に曰ふ、糧道絕て、日に其釜を減ずといふ如きものあるを傷めり。怎くして梅は過ぎぬ。次に來れるは奈良屋の櫻木。これはまた八重なる花の濃艷せる扮裝、瞼

豐滿に紅ゐを潮して、今が開くべき蒼の露を含める眼は、此上もなう愛狂ほしう、けふ九重に其名の匂へる全盛の遊君とは見えて見物はただ現を拔かすが、彼女には彼の兵法に忌む、虛形のみありて實勢無き、浮太刀てふ太刀筋の心地せられて懷かしからず。三番目なるは、住吉屋の常磐、松の位は十分ながら、餘りに高尙りて些憎き方もあり。四番目に打てるは龍田屋の秋色、二月の花よりも紅なる、其の眉目は勝れたれども、散る急ぐ、前途の日脚の、やゝ短きがやうなるぞ齡の瑾なる。

見ゆるもく〳〵其人ならぬに、老婆ははや泣顏なり、「宮どのよう、此人でも無え。でも此人達も傍輩だらうに汝問訊て呉れさツしやろよう、奥州屋の太夫ちふツて。」「まあ急迫しない、其樣に言はしやらいでも、それ道どのは那處に：：それも其處にぢや。」「え、何處に？」氣を奪られて婆は覺えず其手を弛うせり。鬼一口の大難を逭るゝは此時と、脫兎の如き逸勢もて喜太郎は其の轡牲の俎板を蹶ね出でぬ、あツと叫べる婆は追縋る。見物は又た鯨波を揚げたり。「爺さまが惡い、薄情爺ぢや、逃がすな、捉まへて遣れ、見物は皆婆さまの味方ぢや。」哀れ白龍の魚服せる彼は、和歌山の町奉行吉見喜太郎として迎へられずして、順禮の嘉助として遇せられたり。躱れむとする隙間は皆故意なる彼等が爲に閉塞がれて、氣の逸きは竹槍の如き拳固さへ出すに、宮は遽てゝ婆を和め、爺を圍ひ、見物を防ぐ、思ひの外なる騷動の際に、最後の、嚴なる、太夫は來れり。是れ奥州屋の信夫なり。

倉遽しき折とて其人は未だ熟く見ざれども、宮は快くも其紋章の忍草を認けて婆に指示しぬ。「婆さま那的ぢや。」百に餘れる素見の口も、一齊に彼婆に氣勢を加けたり。「今度のがお的ぢや、太夫ぢや、婆さま緊確り……顚倒るな。其の元氣で遣れ。」

（百十七）

お道といふ女兒の有度濱切ての好標致なりしことは我も片心に記憶あるが、今視れば、其の荒磯の潮風に吹かれし折とは事異りて、名にしおふ都の水に洗ひ磨げたる、面は眞玉の瑩徹るばかり淨潔中の涼しさ、昔し忍ぶの其名を聞きても其人ぞとはいかで想ひ得べきと思ふばかりなる美容、此の下萌の小草のためには今を盛りの梅も櫻も、見る影もなきまでに壓倒れたるに、宮も憫れぬ。況て嫉見の見物をや、黃口の喧擾にて、西より東より南より北よりせる、其囂しきこと雷の如く、六種震動、雨曼陀羅華の奇瑞、末法の今日にも只當面こゝにのみ、と見る中に、獨り得意の鼻尖蠢めかして、俄然に廣大にせる我は顏より目尻の垂下ること六由旬と見えたるは、彼の熊谷の花木なりき。其の以前より待受けゐたる仲居了簀十幾人、かくと見るより一齊往來へ趨り出でゝ、「お早う。」「此方へ。」一樣に會釋すれば、太夫は只其を鷹揚に見遣れるのみ、軈て此の圍繞せる羅漢の如きに手を執らせつゝ、如來は其の寶蓮の座にあらぬ若者の肩より下りぬ。揚屋の女房はさし心得て、斂きたる氈の塵うち拂ひ、いざとて勸むるを、これには悄と手を延べて式代し、徐ら其手を褊襟に、唯懸けたると見る間に濺と披きて彼の大盡の上座に坐れり。神やらむ、佛やらむ、其の光景の只微妙じう、赫灼ばかりなるに、衆人は皆、眼睛の目にあるも、魂の軀にあるも忘了て恍惚如たりき。彼の今までは、逸りに逸りて、其人の來ば飛も着くべう怪慌まれたる母の媼すら茫々焉として其の昵近くべからず、胃潰すべからざる威嚴に恐縮たるのみ。女房は更に心得て、彼の煙草てふものを烟管に裝ひて、火を點じて、「もし、太夫さま。」彼女は

織手にこれを接て、喫一喫きて徐に遡し更に今一服を與ふるを、一喫して、「あい。」太夫は此烟を與へたるなり。彼の花木に遣りたるなり。此の千金にも値ひすべき一烟を獲たる彼は蓋ふに其烟より先に其魂や消めらむ。此を見るより、「罰中奴！」其聲は、彼の艶美、唾液の其頤に滂沱たる見物の中にあらずして、思ひも寄らぬ奥間を隔ての唆簷の内にあり。女房は、「え！」と驚視る其端へ、其を推排てのさ〳〵と出で來るは彼の檜木といふ松田彌五七！　彼は其の靡名の如くに枝節曲頑しう、太夫と花木とが間へ無手と坐りて、「あゝ醉うた〳〵。こりや太夫、醉覺の水でない其の烟草とやら、一服所望ぢや。」彼は酒上もいと酬きに、先刻來の面白からぬは醉ふに隨ひて益〻其の面白からず、今も奥間にて、酌に立てる婢女、我が部下の乙弟子原を散々に窘責み着けて、不平の鳴を其盃の破るゝ響にも漏したるが、辛くの神輿は上りて醉覺と此所に來て見れば、猶更に面白からぬ此醜態、其の見たくでも無き此醜態、武士とも有るまじき此醜態！　といふに法界とやらの悋氣か、否ぬ輿、沸きたる業腹は愈煮えぬ。「えい一服所望といふに！」女房は透さず、「檜さまとある事がえゝ御安い御用。申し花木ま、一寸と其の御烟管お借しなされて。」彼女は花木が先に衝きたるを乞取りて、愛想と烟草を等分に、「あい。」「えい老婆、無禮な奴！　誰が爾が半喫のもの所望というた？　馬鹿者めッ！」彼は突如に遮撲り奪て上框に磕と當てたり、可恐、此所にては其祟り烟管に加りて、神罰覿面、羅宇は兩斷に、雁首は前にぞ飛だりける。此方の熊谷も酒氣十分なり、稟性の癇癖むらむらと發りて、額上の青筋如繩と現でしが、良轉氣して、「太夫其の所望……。」不好たらしい奴なるも其人の吩咐と、太夫是非なく喫着て、「あい。」此のあいは前とは異りて、斜めならず神慮に叶へり、三度頂戴して彼はすッぱと吸ひたるが、酒には醉ひたり、喫熟けぬ烟草なり、什麼強くも吸息たりけむ忽然に烟管抛げ出だし、胸を抱へて、「えッへッへ、えッへッへ！」往來は吶と囃笑せり其の中に獨り困ぜるは彼の婆を抱へし宮なり、彼女は出づべき機會の無きに切りに其心を惱めたり。

（百十八）

酒興ともあれ、罰中奴と呼び、戀中を隔て、女房を叱り、烟管を折る、面當がましき振舞は花木が腹にも十分徹へぬ、其奴が今強奪の烟草に中てられてえへ〳〵と咽逆る態の朋友ながらも小氣味好き、且は可笑き、自己が振廻はす神輿にも菩薩の御罰の矢の中るといふを些しは意へよ、と彼が微笑むを、「呀、お主は？」苦悶涙を才に爬き拭へる檜木は、忽地看取て其の三角の眼を六角にせり、「お主は〳〵！　朋友の災難を見て哂笑ふな。衆人の面前に恥辱かいたるを面白しと見るな？」未だ咽吭の惱しくてや、彼が平常の破鐘聲の嗄れて、火の用心の鬱子引くにも似たりとて仲居らは笑ふめり。花木は又、其人の手前、其れが心を傷めむも最情しう、且は這醉漢に取合ふ隙には後刻の苦舌の種子にても考案ふるが優しといふ如き風情して、神妙なりき。其神妙が猶此方の小癪には障るなり。「やい、花！　甚麼を和主は密笑するぞ、や、汝抔は今太夫に其の目授しをツたやうぢやが、抔は何かの巧計して其の烟草に乃公を咽逆さしたな？……否、咽逆さした！」ま、途方も無い難題と、了簡は眼を圓うしぬ。時に見物の中に聲あり、「爾うぢや、其の色の生白めが咽逆さした。」「恥面の赤面奴！　腰が弱いぞ！」「刀の手前、殿打せ〳〵、殿打いて其の生白奴を烟草煮にせろ！」

喉客の口風は、益〻募るに、これに檜木の火の手を煽動しては華麗盡めの店の内も落花微塵、

こりや叶らぬ、と溜らぬ亭主は奥よりして飛で出でたり。「こりや 此方衆は、見る物で無い、疾と通らしやれ。これ嚊々、何故此方は其の迂疎りと……なぜ早う其の奥へ御伴せぬかい。こな迂濶奴！」「えゝ迂濶てゝ、太夫さま御出入りには式作法もある、其様に此方が言ふやうに……。」「言ふやうにて、此騒擾目に入らぬかい！　尾の無い馬が驟ねまはる。駒が驟げば花が散るぢやい。此盲目爺！」「なンの盲目ぢや？」「おゝ商賣に盲目ぢやで！」「言はすれば此鴉婆！」悠長き京も此廓はさすが競勢の土地なりき、亭主は氣逸く此婆に攫みかゝるを、傍所の喧嘩に枝の支きたる高砂の松の爭論、これはまゝ如何た事と人々に押分られて亭主、今更ら面目もなし。「えい鈍臭い雑木婆が！　いや何ぢやてゝ此廓の花は此の太夫さま。さ、太夫さま、疾と御奥へ。」「えい又しても!!」雷撃の如き一喝の下、電火の鐵拳は疾くも飛びて哀れ老爺が藥罐頭は頑とばかりに喫はされぬ。「こりや、ま度苛い！」抱頭る亭主を檜木は睨着て、「くわ！　爾めが。太夫は身が抑止た！」「奈何と言ふ!!」猛然たる叫喚は起りて、喧嘩は綟れり、花木は血相を變へたるなり。「むゝ、太夫に意趣を聞く。」花木は大いに嘲笑へり、「烟草に咽逆たのか？」「むゝ、いや其で無い。厭草を異れたは客待遇ぢや。其の意趣を聞きたいぢや。」花木は愕きたり。「檜木、其方は狂うたか？　や發狂したか？」「何の氣の狂ふべい、ずんと正氣ぢや。」「正氣の奴が其様の事言はれた義理か？　此女は身が……。」「宿の妻か？　でも未だ無からう。はゝ御身は客、太夫は傾城、一夜妻！　賣物ぢや。其の賣物を金で買ふ。やさ乃公が其金！　揚代出いて買ふといふに御身が甚麼も、要らぬ世話ぢやは、あッははゝ。」憎々しくも彼が言ひ放てる一言は、酒興か、故意か、彼が此揚屋に來る毎に、酒をば喫めども徒笑うてのみ歸れるは如是き底心ありての所以與、固より一座せる客に相見えぬは此廓にての掟なれども、扨て此の仕埒を太夫は什麼明け玉ふ、と一座只其の痛心の聲を呑める傷心の眼晴を其人の身邊に注げる時、突如として伽羅の香の芬として席を撲つあり。唯見れば、太夫の其座を起てるなり。「待た！」檜木が其裾を捺ふると同時に。「お道よう！」泣くが如き聲は店外にあり。

（百十九）

「待た。」の叫聲「お道。」との泣聲と恰も三角をなして、「汝つ!!」との雄叫は花木が口を衝て發でぬ。此聲は、檜木が從前に聞ける的の中にて最大的異常なるものなりき。彼は隙眼ながらも猶善く其を働かして之を視れば、阿呀！　一條の紫電は我が頭上に飛べり。物々し！　と言ひも敢へず飜然と身を退けば、其刀は空を斫りて彼が控へたる太夫の裾を素破と斷ちぬ。往かむとするを扯止られたる彼女はこれに身の自由は得しも、牽きたる力に吾と餘されて纖腰の堪らず踉々と倒るゝを「やれはア負傷れたか?!」目前の急に起かむと焦躁る老婆は、危殆しと禁止る宮が手を爬掻むばかりに掻除けて、上框に飛び上れり。此方には、初太刀を計損ぜし花木の、拔合せし檜木が大脇差を丁と拂ひて背燦に苛燥つ、今一太刀といふ其太刀の下、忽諸目に入るは老婆が姿、耳に聞くは其者が絶叫！「禰々、自己が太夫の讐敵！」一喜太郎も我が血を分けたる其女兒の危急とあるを傍に觀ては在られぬなり、「宮續け！」と叫びさま、石火の如くに躍り入りて彼女が着たる裲襠を手快く脫がせ、切結べる太刀の上に投懸て、紲る太夫を小脇に引抱き、奥を目がけて突と入る。「讐敵！」といふ老婆が叫喚は血迷うたる彼等が耳にも煩砲の如くに響けり。扨は太夫に怪我あらせしか、彼女は負傷しつる歟？　と思はず猶豫へる兩人が

拳の上に、何物とは知らず颯と懸りぬ。其物を便りに、其躬を壓石にして緊乎と引敷かるゝに、彼等は脆くも小膝を跼ぬ。引敷きたるは宮なりき。然ばかりに廣濶かる店内も、衆は皆此の騒擾に殘りなく其影を躲して、萬燈と耀れる銀燭の下に今在るは、此の四人のみなりき。看得たり、其の一人は、頭巾も脱げて、若白き面に血迸れる眼を瞋らせたり。一人は、鈍剌といふ奴頭に、團栗といふ眼を晃らせたり。一人は、濕紙の面に歯も沒き口腔を呆開と明きつゝ、後さまに反り仰りて、悶れて魂消たり。殘れる他の一人は、語ふにしも辭の足らず、見るに目覺るまでなりき。看得たり、彼女は、身も羸るばかりに燃き籠めたる唐繊の直無地に金銀の絲と箔をもて忍草を繡ひもし押しもしたる、其紅裏も燃るやうなる裲襠に躬を蔽かけつゝ、異しう、垢膩ける笈摺てふ順禮の着衣を千草染の布子の表に被れるが、身形に似ぬ容姿の花は微妙にして、其の島田髷の解れて、一本插したる銀紙の薄の磬に擾れたるも可愛う、力味ある眉に、愛の滴下るばかりの目色、凛しき口、素直に透れる鼻、白き微紅ゐを帯したる肥ず亦た痩せざる頬！　それさへ有るに、夜風に吹かれて六片七片舞ひくる花の、意有りてか戦げる鬢にちら〳〵と懸れるが又得も言はず艶に、つき〴〵しう、其鮮麗さの幾層をか加へたる！　其が容顔、此が風情、眞個に綿にも筆にも及ばぬ、彼の語ふに辭も足らぬ、見るに日覺るばかりになむ見えき。

飜來れば、前なる佳人は、猶桃李の媚を銜へる色界の魔女たるに過ぎざりき。今なるは天眞の素地を露はして毫も脂粉の汚膩たるを碎らざる、宛然兜利の天女たるが如き觀念あり。加之此の美人の、膽力、伎倆、力藝、男子も幾ど及ばざるべき如きものあるに、黒山と圍める見物の老若、男女貴賤、一は其美に看惚れ、一は其勇氣に呆れ、且感じ、且歎じて、少時は其聲をさへ作さで潜めるが、聽て山の頽るゝ如くに、海の湧く如くに、河の決する如くに、一齊に喝采せり。「頼むぞう、自己がなウ！」「太夫さんより艶麗ぞウ！」「天下一の大明神さまア！」「其手を放すなア！　いつ迄も見せて呉れえ！」前代未聞の此の景色は、げに觀るにも饜かじ吉野初瀬の花紅葉の一時ならで、常盤の松か、礫石の其巖か、千引の石の引かれぬ喧嘩を此の鳥原の有らむ限り、此所に斯くて在れとは、彼等が一種の冀望なるらし。傍目の見物すら既に怎く憫れしを、況て其局に當りて膽の潰るゝまでに愕きたる彼の兩人は、辛くに聲を出だせり。

「宮、汝甚麼ぢやとて？」「武士の意地張に邪魔するな！」彼女が花の脣は初めて搖けり、「ほほ何ぢやとえ？　其事が意地ぢやとえ？」

（百二十）

其れが意地かと詰問られて、物に狂せる如き熊谷も有繋に其囘廊に塞れり。強情なる松田は怎くても猶擒まずして其口を暗かむとするを。「これ程の不檢束しても、御身は尚だ何か言ふ氣かえ？」宮は窘責むるごとくに睨めぬ。「えゝい洒落臭い。汝、ンむ、其の小女郎の……。」と彼は掙札つ、焦躁つすれども、厘住られたる刀も脱れず、又其の返答の語句をも得ずして口にも腕にも不覺を取れり。「小女郎のなんぞと言はれた義理かえ、他を犬の畜生のと先刻には旬はしやれたが、妾から見れば僧等の方が餘ほど畜狗ぢや。一人の女子を二人して奪合て啀み廻る、怎麼たら醜事ぢやえ。殊に此の喧嘩の根も樞木、御身さまぢや。」「言ふな、胡亂言。まづ這處放せ。」「いや放しませぬ。妾は此兩刀をこの儘持て行て師匠様に言告る、さ、師匠の御在らしやる場所は何處ぢや。」見物の喚聲は疾風際雨も啻のみならざるに、宮が脊力は益加はりて刀は磐石もて壓れし如し太夫が身上も心に懸れり、我が面皮も如是の際に曝したうな

し、と有りて此儘躱避むも流石なり、自ら作せる瓢なる羽目に我から陥たる熊谷は、酒狂も憤怒も今は醒覚て、只管に困じ果てたる顔色を蒼く、「こりや宮、もう可いは。可いは、措け、放せ。」「可かおざん無え。此人達は他人の女兒に負傷させて可も無えもんだ。宮どのまツと歴へて呉さろ、自己敵べえ撃つ！」勢込める老婆も昔し把りたる鍬柄の掌に唾せり。此の見脈に喫驚たるは彼等なり、彼等は此の名も無き敵に組れては屍の上の恥辱と慌忙たり、就中當の敵と目指されたる熊谷は、其先祖の猛者が一谷の一二の駈を反對にして、廓名の花木の落花微塵と揉ふつて逃むとす、遁さじと此方は追縋る、其機勢に彼が脚後なる燭臺を撲地と踢飜せば、莫慘、百目に近き大蠟燭は燃えたる儘に刎上りて一方に唸ける松田が小鬢に爆と着く。火に縁のある檜木とて不動の護摩木と身を做しては甚麼堪るべき、「あツ〳〵！」力任せに拂ひ去けたる其蠟燭は再び飛びて傍邊の暖簾に包裹りぬ。只見る間に閃々と燃え上がれり。素破喧嘩は火事に化れり。白刃の怕きも鐵拳の怖ろしさも、今は論うて在られざる亭主は阿呀と叫びざま、駈上れり、女房も跟けり、仲居も續きたり、了鬟は號泣り、犬は驚吠たり、見物も鯨波をつくりて一度に動揺々々と賑入りぬ。是より先き、奥の間に酒呑みゐたる花木と檜木が一群の壯者輩は、彼の喧嘩と聞て得物押取り逸早く廊下の口まで出でたれども、日頃より大盡面する熊谷、今方自己らに散々に祟けたる檜木めが弱りつ呻きつ顔色も無き迄に宮に退治らるゝ其態の好笑きに、取支へむともせず、小氣味好き哂笑を縦びて潜語き合たるが、是等も大事と見て躍り出でたり。固よりの不平は滿々たる、腕節は夜に日に鳴れり、何をがな事がなと待構へたる彼等の動作は實に天狗の如くなりき。看るが間に彼の萬燈と耀やける燭臺は悉く撲滅されて、有り合ふ障子、紙襖、衝立、子遺なく扯破られつ、果は奥間に取て返して酒器、膳椀、花瓶、香具、衣桁も枕も夜具も、當るを幸ひ、觸るるを獲たりと、取ては抛げ、攫みては棄て、引出だし、投散らす、彼等が其狀景は又旋颶の舞入れるが如くなりき。

仰天せるは又亭主夫婦なり、「こりや、如何ぢや、撲毀ぢや。貴郎方は、こりや、ま、土臺：：：。」「えゝ火事の手傳ぢや。邪魔するな。退け〳〵。」「いや火事は疾の昔に。」「消たらば又た已達が出來いて遣るは。」興？寧ろ勢に乗れる彼等は、拒ふる亭主泣號く女房を突退け、踏止めして、又、火鉢、炭壺、竈の灰、手に當るが隨に抛散らす、此に撲たれたる見物、目潰を喫へる徒輩は、腹立紛れ、意趣返し、一つには亭主が急を拯はむとて、遮みて戰ふあり、退いて急を報るあり、適も味方も暗中竿を揉むが如くに、又豆を煎る如くに、亂鬪、混戰、看撃、斷殺！既に喧嘩に接ける刃傷、刃傷に續ける失火、其に繼ける亂暴、狼藉、珍事、重要に愕ける廓會所の番人は、此時町方の出張を得て、突棒、刺叉、階子、捕縄を手々に、肩に、擔ひつ、擦げつ、がちやくりんと押し出しぬ。其先頭なる高張提灯の影を遙に見るより、「や、奉行所ぢや！　捕吏ぢや！」一聲は萬響を一時に鎖歴たり。今迄の繻いつ、叫びつ、組づ、綻れつの彼等は、只瞰子を散らす如くに、潮の退く如くに、風の過ぐる如くに、聲も音も、影も形も一度に斂めつ。あはれ跡には夜櫻のちらりほらりと、朧夜の月影に散るがあるのみ。

（回二十一）

今出川の館にては三位の卿の御病惱やゝ癒りて、かの物怪の氣といふも薄らぎつ、御食なども折節は喰まるに、兵庫の左門が御看護の間も出來ぬ。とはあるも、其面は世間に公然晴れは出されぬもの、彌生のこのごろの麗閑さにも、

飛ぶ蝶の羽のいそがはしきに花の盛りを想像りて、祇園清水の賑はしき、只人傳に聞くのみ。閉籠めたる室の中に晝夜心頭を惱むは、曩に出せし江戸表への目安、抑も其成行は如何やらむ。之に對する紀伊國の處置は又如何と有ることやらむ、田邊なる帶刀の二月の初旬に參府との事は聞きたるが、其後の彼が消息は未だ得ず、然も由井が書通といふも其以來は無し。彼人、今は何國に在る歟言ひ遺るべき事、照會すべき件も多くあるに彼の二條寺町なる松田熊谷らが旅宿には便宜も有る歟、孫は、訊て來よ、とて彼の少尉を出だし遣れる前の島原が騷動の中一日隔ての夜なりき。間も無く少尉は復歸れるが、彼の眼は圓く、呼吸も暴かりけり、「若殿、や、扨も〳〵ぢや、彼の鬚子めらが稀代の珍事爲出來しまいて喃……。」苦々しげの面は、例の無人相に、不平の色の上塗をせり、兎角は平事ならずと見たる兵庫、其膝を近う、仔細什麼と自家も遽つるを。「いや、其の仔細、其本人たる奴の口頭から聞さしめ。我等が申すより興がおざらう。」彼は言ひ棄てゝ次へと立ちたるが、少時して一人を伴れ來りぬ。伴られたるは彼の松田彌五七なりき。視れば、彼は、其の片臉より小鬢に懸けて、痣にやあらむ、傷にやあらむ、地體の褐色を紫赤に變て、一臉裏に水膿といふを有たせぬなれど彼は疼うも無きか、又其疼痛にも換られざる身に過失あるか、只顧に額をもて疊を摺れる、泥に潛むとする鱣のごとし。兵庫は彌其心も心ならぬなり、「見えたは御身一人か。熊谷は？」「其義でおざる。三郎兵衞は逐電しまいた。」えゝ！　と叫喚て、此方は反顚らぬばかりに仰天しぬ。大事の訴人か　と疑惧しなりき。彼は極て面目なげなり。「他人の不覺。自身の罪過は、今申すも面無うおざるが喃、何を匿さう、師が豫ての命令に違背して二人が發起で、鬱散の酒盃を把り申した。」兵庫は直地に、「では其の酒興の口論の劫じてな？」「いや。ま、聽せられ。其實は、醉うての餘りに衆皆の魂が浮羅めき出いて、誰が發議となく、島原の廓通ひとなりまいた。」兵庫は直と呆れしなり。何樣にも孫八が罵へる這の鬱子めら！目下の現態、師は師として、友は友とて、危ふき瀨も潛り、恐ろしき灘をも航りて、只顧此の大事を、大事をと、夜間の夢すら易うは結ばぬを、何事の面白うてか酒飮みて、醉狂ひて、果は島原通ひして、逐電までも爲る！　言語道斷、沙汰の涯限、我黨の風上にも置くまじき奴、如何して與るべき！　と息巻たるが、猶有繫に討果すと迄は無くて、睨に睨めたり。「然、腹立も御道理、はや何と辯疏の爲むやうも實おざらぬが喃、眞は我等も只一時の興、當座の花やるとのみの心得で三四度は同伴まいたに、有らう事かや、那の熊谷めが、其の對手の女郎に恍惚で、預けられた師の金銀を湯水と使うて、終は一人で我等にも隱いて、通ひをる、扨も苦々しい、怪しかるとは思うたなれど、其初發は我等も同類、强うは異見もならぬもの、と有りて此遽行では、と心底好い程に諫めたなれど、彼奴め聽かぬ。中々に聽き申さぬ、のみならず盆奉つて、其の女郎めを落籍せうといふ……」「落籍？　み落籍！」聞くに堪らでや、兵庫は、其膝頭に疊を蹴て、嚇と傍に唾吐けり。「や、若殿、まゝ御道理ぢやが且づ待せられ。然りとては又三郎兵衞も苛い陷りな。其の女郎は太夫が端か？何屋の誰といふ？」少尉が眞切立て問ふに、彌五七は頭を爬きぬ、「奥州屋の信夫といふ……。」「ンむ、あの太夫か？　や、彼女は評判の艷麗的ぢや。むう、あの信夫を喃？」馬鹿と笑つた其の馬鹿の一人で有るらしき、彼の口氣。謝言の席は惣氣の會ともなり氣なり。

（百二十二）

憤遽る兵庫は其面を烈火にして、「默れ孫八、

甚麼の醜美的、松田、其の熊谷めは何様にして逐電した？」「眞に申すも面目無う……。」「面目無いは言はでもぢやは！　仔細疾う言やれ。」「逐電の様によつては由井殿へ急使馳せではなるまいが。而て何時其の逐電した？」「昨夜、昨夜のその子刻過ぎ。」「其の今の落籍とやら爲た後か？」「いや其の落籍までは未だ爲まいと存ます、……が、預りの金をば悉皆掻攫うて……。」「えい悉皆と？　其額は？」「大約は五百兩！」兵庫は又層に呆れ果てゝ、遣る方も無き遺恨を其の歎息に長く吻けり。少刻も同じく其舌を吐けるが、彼なるは彼の罪惡を憎めるか、將た其の大金を思ふ儘に使用へるを羨むか、「苛い事爲て退けた喃！　さらば遊興も華麗ぢやッたろ？」苦笑ひせる彌五七は爲う事なげに頷きぬ。「でも有らうよ。彼奴はもう大盡氣取て、花木たらの廓名とかを喚ばせて喃……」「ふう！　苛い保養しをツた喃、而てその彼里での喧嘩とかは其の前晩かや？」彼は遽に其の小鬢の傷を撫でつゝ、「前晩、一昨日の晩。此傷が其の彼奴めが行懸の駄賃の記念。あ、また疼い。」兵庫は重疊なる聳懼の面色して鞠問はむとするを、彼は却りて膝を前めて、舌舐摺りの委細を語りぬ。

「ま、御聞きやれ、殿、實は其の一昨日の晩、我等、三郎衞と彼廓で爭論して見らるゝ通り此の片小鬢へ此傷を負ひまいた。すなはち右の放蕩の異見、何うしても聽かぬので、是れは寧う彼の太夫といふ女郎の面前で懷裏を破て、是非なくば彼奴に恥面掻いてもと斯う思うて、彼廓へ出向いた。折柄が夜櫻の盛り。彼奴め、右の大盡姿で揚屋とやらの店先で、道中たらいふ爲して來たかの、太夫を引着て、仲居了鬢らを侍して、花を眺めて、大道を前に馬鹿面しての酒宴。處へ我等破て入りて、其方の此濫行は何事ぞ、今は師匠懸りの修行最中の軀ではないか、太夫聞かしやれ、こゝな男の金は悉皆師匠の預りの金、其金を斯う濫費さして貰うては終局には此大盡、首縊るか、身を投るか其外は無い、此男可愛いとおぼさば何卒此夜限り呼んでも客にしても下さるな、と事理言うたりや、彼の太夫は感心な女、然いふ次第なりや斷縁うといふ處が彼奴めは男子にも似ぬ未練で、斷縁るとは誓詞は虚言か、起請は反古かと、やも耳にも堪らぬ程の愚癡の數々。焦躁て烟管を折る、火鉢を蹴飜す、果は面色まで變へをつて刀の柄に手を懸くる。驚いて抑むる亭主と女房、仲居了鬢らを撲斥くる、踏込めす、其亂暴はいや發狂の沙汰！　見ても居られず引縛つてと起向ふ我等に燭臺を抛附て此通りの傷を負はせ、何やら角やら泣く號くの夢のやうなる騒動を起しまいたが、其れも辛々取鎭めて、駕に乘せ、連れ戻つて、扨て醉の醒させて見れば、萎れた態して何と陳疏も無いといふ。以後は？　と推せば、弗つりと誓言する。彼奴とても武士、よも虚謊はと氣の弛いたが我等の過錯、昨夜、人々の寢定まつた子刻過ぎに右の五百兩、我等も知ての萬一の用意にと師の發途るゝ折、封金の儘で渡されたと、其他に些許りある日用の賄ひの代まで攫ツて、臀喰へぢや……で跡に殘された十幾人は陸に揚られた河虎の體、喫うにも喰うにも其の飯米の料すら無い。據ろなう所有物少少竇拂うたが、扨此上は甚麼とせう！　如何せう？　といふ稟句が、兎角は御身に談合して一時の御扶助を、と斯う言ふ折り、孫八の見えられたで幸ひの參上ぢやが、甚麼と此が武士の所爲か。此方も阿呆ぢやが彼奴の人非人。御察して下され。」彼は、且つ悔み、且つ恨み、且つ憤りて、果には其の眼瞼さへ拭ふを。這奴が告ふ事、一々其の眞實としも覺えねど、兎角は敵手の熊谷といふ者なきに、鞠訊の術もなし、といふ如き額して兵庫聽き居たり。此際、獨り其の暗笑を鼻尖に漏らせる如きは彼の少尉

なりき。彼は我は顔に座を進めぬ。

（百二十三）

「何さまこりや度苛い。や、若殿、此の處置を如何とお附なさるゝ？　こりや疾う手を廻されぬと師匠の一大事となりませうぞや、昔にも有る痴ぢや、色と慾とに目が眩んで、夥伴を賣て、其の身の罪惡を塗抹す。こりや的切り爾うぢや。因で我等が料見には……」少尉は言ひつつ座を看廻して、「……彼奴は今、島原か、所司代か。ぢやが其の大抵は島原と想ふは如何ぢや？」一座は聲を呑みて其語に目をのみ注げり。彼は猶、「……到底が其の贓金は落籍が目的ぢや。我等が身にも記憶あること、一旦其女に惑溺ふとなれば一寸先の闇といふが一分先の闇となる、其の情婦といふ其奴の顔見れば譬も落着かぬ、座にも堪らぬ、大事も忘却るゝ、主親朋友の分別も失くなる、全然物の發狂ぢや。されば彼奴も其の發狂の眞中、彼大事の訴人よりも先づ其の居ても起ても女子の根引して、煩悩を仆めて、投て後段の所作とも懸らうが、すれば今頃は……いや違うたりや其の昨夜の中に落籍結了て去んだも知れぬ。あ、恁う言ふ間も最う遅いか？　喃、松田！」彼は小膝を丁と拍てぐる〳〵と眼を瞪りぬ。げにも言へば然も有るらむ、然ありては、彌五七麿も待たで兵庫は急きぬ。「孫は、さらば此を何とする？」「追人ぢや！　彌ぢや！　彼女を奴めに伴出さいては、おゝ然うぢや。」遽かに狼狽たる彌五七は頷く如く、獨語く如く卒爾たる面色をもて其席を起むとするを、「いや遁まるまい。追人ぢやとて此方が世間に公然の面出さるゝ軀でも無し、究竟は山賊の罪科を海賊が糺明す、惡しう振舞はゞ彼も我もぢや。當向たところ心配なは所司代が方、彌五七御身は其の所司代と町奉行が方へ行て其動靜を篤と探りやれ、我等はこれより島原へ忍んで彼の太夫が在るか在らぬか、彼奴めが立廻つたか廻らぬかを熟う檢よう。趣向は其れからぢや。」孫八は獨り頷得り、彌五七は悶かし氣の譬さへも既や坐ぬなり、「げに爾、其れも爾う、さらば御身は其の所司代へ、我等は其の那里へ。」彼は冷笑つゝ、其の手を掉りつつ、「いや不可ぬ、貴公は一昨夜の不始末もある、行でからが甚麼が檢られう、倖ひの面體識られぬに其方へお行にやれ。」「いや我等は所用もある。」兵庫は直地に聞答めて其面を屹と視れば、「いや、其の物ぢや。えい其の一昨夜の諸拂もある。」「うゝ幸ひぢや、拂金なりや我等預からう。」彼は忽地目を苛げたり、「なんの汝、

（百二十四）

や、殿、這奴油斷がなり申さぬぞ。其の島原へ行なうといふは此事を物怪に蓋た自己が花やらうでか？」「喃、お主！」と目は張開しが、彼が遽かに吶れるが、「いや不屈な。此方如き御國の大事を抱へた者に！　や、汝こそ、先刻から聞けば汝が非を棚にして熊谷一人に其の罪惡を塗着くる。若殿、聞かれい、這奴が島原々々と強て望むは、其の太夫、信夫とやらに執心して、それで其の一昨夜の喧嘩といふも起つたと聞き申すぞりや其の五百兩の金たらいふも熊谷が持出いたか、這奴が鼻棒で費消うたか得知れ申さぬ。昨夜熊谷の遂電といふも裏面には那樣な機關があるか、縱し無いにせろ、今迄は這奴も同穴の貉。汝こそ油斷も間隙もぢや！」「え、えゝゝ、なゝ甚麼ぢやと！」譬を破られし彌五七は立懸れる堪らぬ膝を詰寄て、居合腰の只一擊と礎と睨るを、孫八も負けぬ氣の睨め返せり。「えゝい汝等、憎くい奴等、それで其の由井殿が大事に立つか。えゝい情無い奴！　汝等如き奴はもう頼まぬ。嗟、由井殿も……」兵庫は、此の貸に、頼み甲斐なき徒輩の爲に其の一身の大事を謬錯れむとするを悲るか、正雪の前途を想ひて悔恨に堪へざるか、忿れる眦に悲憤の涙をはらはらと流して、其金を持て遊興ばうでが喃！　や、殿、這奴油

唯みかゝる彼等を睨み居るつゝ拳を握りぬ。

（百二十四）

本意無しとも本意無かりしは彼夜の宮なりき、彼女は折角に其目的の蔓として探求むとせし熊谷と松田の影を、不意き行懸りの騒動に失ひて、多時は彼方此方と渉獵りたれども終に獲ず、是非なくお道の信夫がもとを訊ぬれば、彼女は其實母のおさめ婆と相擁きて不思議の邂逅に唯泣くのみ。喜太郎もはやく此の一席には在れども、彼は猶ほ足輕小頭の嘉助なり、太夫の無事を賀ぶと、狼藉の始末を告ると、茶を勸むると、盃を侑むるとの出入る男子はいと多きに、我が語ふべき筋は憚りあり、況て太夫といふ其女の肚意も知れ難きに迂濶と此人を和歌山の町奉行吉見喜太郎として表明すべくもあらず、只其座の體を見繕ひつゝある程に、何事を言ふべき機會も無くて其夜は歇ぬ。

抑も當時の宮は、眞實無二の紀伊國方となりたる歟、心底太だ知り難きものあるなり、其は彼女が和歌山を發途たるは、彼の憎ましき帶刀の老爺に一つは張合を懸けられたるなり。勿論、其後に、殿、又は喜太郎よりして、兵庫が反逆の罪人たること、現在の敵主を死地に陷さむとする惡徒たること、其の不義、其の無道の逐一を擧げて、深く、這の人面にして獸心なる狗畜にも劣りたる匪奴の成敗の助力をとは賴憑れつれども、猶彼女が胸裏には其師たる正雪が身上をば忘失れざるなり。然ればこそ彼女は明言つれ、「其方身を棄てゝ一働きせいとの御意あらば、正雪どの身につきましたる事のほか、宮が生命の有らむ限りは如何樣の御奉公でもいたしまする。」彼女は大膽にも恁く言ひたるなり。雖然、這は彼女の言損ねにはあらざる歟、兵庫は既に正雪が無二の股肱たり、其の股肱たる兵庫を遺して然も師の爲に惡しうせじとは、其衣を剝ぎて其軀を凍寒さじと言ふに似たらずや、淡き女子の其處までには思ひ到らざりし歟、到れりとするも當座の羽目にて言の爰には逮べる歟、什麼彼女は佛菩薩の妙智力にも及ばざるべき這の二途の難關に瀕みて、果然如何なる方便をもて、其を透過し得むとするか。彼女は他無かりき、師の此大事を擧行はむとするに、浩る不義無道の罪人を其黨中に援かむは設令其事の成就る日にも、太甚しき士道の不面目にして、其身亦た其の不義無道の奴輩たることを免かれざるべきを感ぜしなり。されば彼女は又帶刀の難詰に應へて、「さらば御身は、當殿樣の御謀叛とあらう時、討手の軍に加つて和歌山を御攻めなさるか？」と反問せり。彼女は不斷に其心なりしなり、縱令其主は什麼あらむと一度君臣の約を結びては其心を變ずまじきもの也と確く念へるなり。故に彼女は、躬ら主の身に刃を剌して、其首に繩を繫がむとする如き彼が擧作を見て、太くも憎めるなり。彼女は師を愛す、所以に兵庫を除かむとせり。彼女は紀州の舊恩を思ひて、君臣が眼前の窮蹙を見るに忍びず、所以に兵庫を僵さむとせり。這の二個の因由相合し彼女は兵庫を我が讐敵の如く疾みたりき。

噫、去年の秋なりし兵庫は、彼女に產土神の如くに拜まれたりき今年の今なる兵庫は、彼女に餓鬼、畜生の如くに憎惡まれぬ、嗟胡爲ぞ人生愛惡の常無きや。而して此の愛惡の地換させつるもの、果して是れ誰が處爲ぞや。吁不幸なる彼よ！人は又た彼が爲に一掬の淚無きことを得じ。如是くにして宮は京都に來し、不思議の際會とて彼女は熊谷と松田に遇へり、師の居所を仔細く問むとしつれども、彼等が餘りに馬鹿氣たる擧動は彼女に其を訊はする機を得せしめず、彼女は紛擾の間に相諍ひて、混亂の際に其影を矢ひき、本意なし本意なし、本意無きは涯りなく本意なかりしかども、猶ほ彼女は彼等の逸早く逃去りたるに安堵の胸をば撫でた

りき。自個も疾く其姿を躲して、拠て奥州屋に來りて、彼の者共が宿はと問へど誰も熟く知らず、只上京の方よりと言ふ。知らざらば知らぬも可なり、江戸を十にして其の一二つよりは無き狭隘き京都、探さばなど捜し當てざるべきと其の思ふ旨を喜太郎にも私に語りつ、其の翌日は一日三條より北方を尋ねぬ。捜索しても捜索しても些許りの手懸りもなきに、今日も倦厭て島原のへと立戻る二日目の夜なりき。春とはいへど風猶ほ寒き朱雀野の夜路を、戀てふ熱の暖かきもの身に持たるか、流行唄勢ひよく唄ひ連れつゝ、叫喚き行く嫖客の中に、編笠深く面を匿みてこれも足疾う歩む一人の武士ありけり。宮は不圖視たり。彼の武士も、唯目を駐めつ、

「宮では無きか？」

（四二十五）

われも不圖視つ、彼も唯見つる編笠越に、不意ずも我名を喚ばれて宮は喫驚きたり。ちよこ〳〵と趨り寄りて、朧夜の月光に透かして下より覗けば、肯たりとは想へるも流石に其れとは思ひも懸ざりし彼は其人なり、夜目にも紛れぬ我が捜索る其人なり。呵、彼は實に兵庫なりけり。其人と見るより彼女は躓ける如くに走り蒐りて突如に其袖を攫みたりき。迺さじと爲るなる奥、猥索たるに圖らずも遇へるを歓べる奥、大事を目下奥、捕拿むと奥、刺むと奥、兎角に彼女は目も眩暈くばかりに覺えて、其手も戦慄き、其口も塞るを、彼は再び、「宮やッたか！」二度喚名れしに、彼女は漸唖も唄吃に通りぬ。「兵庫さま、ま如何なされて？」危ふしとも危ふき彼は、此の鮮麗しき處女の懐裏に可怖しき刃有りとは未だ知らざるなりき、彼女が我袖を捉へつゝ震慄しは其の可懐さにと想へるなりき、駿河以來會縁たることは四五度なれども其兄との淺からぬ縁もあるに、我が實妹とも可愛くおもふ其の宮なり、彼は攫まれたる袖包みに其れが手を覚と握りて、「無事ぢやッたかよ。而て何時當地へ？」「あい。は半月ほど前……。」彼女の氣息は猶喘めり。「何用で？」「あ唯。其の用事はな……あの貴君に御聞き申したりや分明ませうが師匠様はえ？」「あの御人か、其れも去月初旬紀州へ往れたが。」「え！　和歌山へ？」彼女は、其の紀伊國へと聞て、他の身上より其身の大事と愕きたり。彼の神變を得たる如き師が彼處へ行きて、城下隈なく探索られなば、得も我身と吉見が上を聞出されぬといふこと有らじ、聞かれなば此の兵庫へ内通無しと言ふも有らじ、這漢の悉く何氣なき、寧ろ親呢き、氣味惡きまでの打解顔粧ふは或は大に爲す有らむ奥、我を誘惑して吉見が上をも確知て一所に討て取らむと奥、これを想へば一昨夜の夜に那の松田らが、犬よ細作と此方の身上を怪訝めるは、其の意味奥、酔て機密を漏らしたる奥、然もあらば此處にて迂可と手を……否々迂まらば過錯の基。と膕に瘢ある身は暗に脚下の進退を測りつゝ心におそろしき此目前なる敵を凝視れり。雖然、其眼にも、面にも、異むべき色も光輝もなかりき。「お主も確か和歌山ぢやろ。遇いでか？」「會ひませぬ。會いでから遇ひたうて當地へ來ました。」彼が面色は初めて動きぬ、此方は素破と覺悟せり、事急ならば先んぜむ奥、と視れば猶然もあらで、「宮、まづ此方へ來よ、些と聞きたい。」這處はもとより朱雀大路の、京の薄昏を呼びまはりて山崎へ歸る油賣あり、内野の商ひに荷を空にして壬生へ戻る前栽賣あり、それに交りて、月に啼き花に叫く嬰鴉といふ黒羽織の尻尾の短かき、目ばかりを圓う明けたる奇特頭巾の、一名を梟とよべるが虚呂つく眼も、羽ばたきも間斷なきに、大事を決行ふべき場所にはあらず、いづれへ行くにやと宮は視れば彼は西方なる野原の、去年のまゝなる枯草を踏しだきつゝ進み入ること四五町にして、但有る

石の平坦なるに目を注けつゝ、軈て其笠を取りて泥塵を拂ひ、掻乎と坐したり、此奴は、外見るところも筋太く、骨逞まし、幼稚き頃よりあの殿に飼立てられて和歌山にても名譽の劍客なりと聞く、遮莫一個と一個の勝負せむに何程の事かあらむ、師の一の太刀の心は私に胸にも覺えあるものを、と今や彼の剛健なる膽に反れる宮は毫も臆めで、只其の眼睛の動作き方にのみ目を注むるを。「はゝ怪訝むな。箇樣な場所へ伴れて來たとて其方に何も無體は言はぬ。又た言はれてからが驚くやうな其方でも無い。聞きたいのは其和歌山の形勢ぢや。」其の想ひ懸なきに彼女は我と我を嘲笑りき。何事でござります、其樣な事に……」「箇樣な場所を撰たといふか、馬鹿な、其事が乃公の身上ぢやは。」

（百二十六）

彼女は凝に意注ける如くに聲を潛めぬ。「爾うぢや、和歌山は……。いや彼方は大騷動でぢや。妾、其事を師匠樣に告はうとて來ましたの。」「騷動と？　而て何樣に騷動する？」「え、では未だ師匠樣から……？」書通はと、襄問へば、「無い。」と彼は首を掉りぬ。宮は猶其尾に接きて、「而て、目下何方に在られますぢやろ？」「其事が知れぬぢや。予も其れで當惑の最中ぢや。」虚談も有らぬべき彼が額に顰する皺の、月影に明白と見ゆるに、彼女も今半分其心の落着て、覺束な氣なりし語尾もやゝ確乎となりぬ。なれど猶油斷はせぬなり、「でも那程の騷動を……？」再び彼が面上を覗れば。「えい騷動とて何樣な騷擾ぢや。心の急く、疾う聞かせ。」「御家老の安藤どの、和歌山から火の燃くやうな御出府！　其れ御承知か？」最初に彼女は實事をもて問ひたるなり。彼は果然其事を知れりき。「其れは存知ぢや。」「誰から聞かしやれた？　え、え？」彼女が眼は覺えず灼爍きたるべしと彼女すら想ひぬ、されど是れが白晝ならましかば、薄月夜の影を負へる彼女が面は暗くして、僥倖に其れとも看咎められざりき。兵庫は猶然り氣もなう、「それは彼の御人から！　和歌山からぢや、が、其限りに音信も無い。」「では、水野どの名古屋へ御出なされた事は？……御城下の人改めの嚴密い事は？」「いや知らぬ、知らぬ。甚麼ぢやとて其樣には爲る？」彼が誘引を眞に信けたるに、彼女は再び我が狼狽しを肚裏に嘲笑へりき、今は心易しと思へば一ばいに其手を廣げぬ。「それは妾も熟う知りませぬが、追ては江戸から御使も越されるとやら、其の御上使は殿樣が御腹居らしやる御檢使とやら、何やら角やら御城が上がるとか、御領地が沒れるとか、御家中が分散とか、もう種樣の風說ばかりで誰も物も手に附きませぬ。檢査は嚴しくなる、妾等も寺の門番借りてゐたを追立てられる、御飯も給べられず、水も飮まれず、狼狽へたりや捉へて斬られもせうか、兎も角も師匠樣に此體を報告せて又好い分別の指圖も受けてとそれで逃げて辛々に當地へ來ました。え、もう其の騷動たらお話にも何もなりませぬ。」彼女は思ふさまに其眼を閉げて、其の恐怖るべき光景を手勢もても語りぬ。誰か知るべき、此の可愛く仇氣なく又可懷しき花做す脣、露と見る眼のうちに、浩る太逞しき機關のあらむとは、兵庫は閒惚れて自身にさへも禁め敢へぬ得意の笑顏に餘念なかりき。何さま此處女の言ふ如くに城下にては然る騷動も爲つゝあらむ、水野が名古屋へ走きたりとは、江戸への御陳謝を尾張殿の手しても賴む興、然らずば彼の目安を彼地より誂へて出さしたれば其等の穿議、後走に爲るにや有らむ。其れは扨て何樣にも隨意にせよ、只あの帶刀が强辯も尾州が仲裁も、我が訴狀の三十七ケ條を全潰とはいかで爲得べき、縱し四五ケ條は言開かむも其半分にして陳すべき口の無くば今の話しの殿の御切腹、城地の沒收、家中の離散、其

はもとより然有るべき理由、然無うては又叶はぬ結局にて、誰も物の手につかで烏路々々と狼狽つといふも目前に見るやうに覚ゆるぞや。然る程の好き耳を彼人はまた何故に我許には疾う告げ越されぬにや、或は其の騒擾を聞きて城下へまでは行れざりし歟、其れにても風聞だけの消息とては有るべきものを。可し〳〵其れも今は要なし、此程の確実なること此女が口より聞きつれば。兎角は心地好し、今ほどは那れ迄に情無かりし我への御仕向を後悔やおはさむ歟、餘りに祟禍の厳しきに魂消てやましまさむ歟、はゝ面白し、恁う申す兵庫が腕の罰利生些とは御覧ぜ！「もし何言はしやります、独語……」「え、独語？　予がいうたか。あツはツはゝ、出来いた宮！」「小氣味の悪りい。其れよりも御前様今何処にござらしやる？」

（百二十七）

「予は目下上京の喃、」乗勢める彼は恁く言ひ懸けしが、急に傍邊を看回して、「壁にも耳ぢや。其れ又重ね言はうそれよりもお主今何処に居る？」「妾はいつでも野宿します。昨夜もな、あの清水の御堂へ寝てぢやが夜半からのあの風で、寒うて眠られず、凍死ぬやうな難義しました。」宮は其同情を幸かむとしてか、只管其鼻を酸りて見せぬ。彼は数回頷けるのみ。「むゝ、而て今夜は何方へ往ぬ？」胸算の齟齬へる彼女は投首して、「あ、島原へでも。」「え、島原の其方は島原の案内知つてか？」其問の甚だ其意を得ざるに宮は只首肯けり。「其の奥州屋たらいふを其方は知つてか？」扨ては一昨日の夜の事を、熊谷らが彼に語りしなと想へば彼女は今更に胸躁がれたりき。「其家の大夫に信夫といふが有るさうなが、其女を知らぬ歟。」宮は彌口を閉ぢたり。「知りやらぬ歟。」彼女は突如として、「お孀妓かえ？」兵庫は卒ち其頬を膨まして眉を顰げたり、「馬鹿！　なんの予が其の傾城買！」「でも好う行かしやる御人が有るやうぢや。」「や、すんなりや熊谷や松田に脅うたか？」「唯！」「何時？」「一昨日の夜。」兵庫は覺えず其膝を前めて、月より外に聞く者も無しと見る前後を憚なく顧視りぬ。「宮、其の一昨日の夜に彼奴らは何か不思議の筆論したさうなが、其れは且づ言はでも可しとして、眞は其れより熊谷めの氣が狂うてな、昨夜由井どのから預かつた用金攫うて逐電しをツたぢや、え、其の五百両といふ大金持てよ。其れも大方あの太夫を落籍せうとて此里へ失せたかと恁う言ふで喃、身が今其れを穿議せうとて出向いたぢや。が、彼廊の爲體は今まで見聞した事も無い、實は其の當惑の折柄ぢや。御主其の案内知るなりや其の信夫たら太夫のをる家を教へて、今一つ彼の太夫が根引されたか、熊谷めが今も猶其處に在るか、又は何方へ落ちたかといふも捜索て呉りやらぬか。金銀もぢやが、猶其れよりも彼人の大事を訴人しはせぬかとも想ふでから喃。」聞くうちより宮は且つ呆れ、且つ驚き、且つ惑へりき、熊谷が振舞の馬鹿々々しきは只呆るゝの外なきが、又其れが師の大事を訴ふべしといふ人々が心配も一理あり、其れよりも差當る處置を如何つ着くべきかに當惑するは、此の兵庫が奥州屋へ案内せよといふ一事なり彼の家には喜太郎あり、其れと面を合さしては全般は事罷矣なるが、さればとて今急に彼に意を得さすべきやうも無し、兎してや可らむ、如何でも這奴を今彼處へ遣りては、と肚裏たゞ煩悶たる間に、「それぢやで予も心が急く、お主疾う案内しやれ。」彼は袴の塵うち拂ひて既や起むとす。「あ、ま、爾う急れでも。」「え、急て何故不可ぬ。」「いや何匿しまいう其の信夫どのは妾が呢友！」「えい呢友？　猶更らぢや。疾う〳〵せい。」「いや其ぢやから急いでも可い。妾が此から熱う捜索て熊谷どの在やしやる歟、太夫が落籍れた歟、其の

否や通知せませう。」「いや其様な！　既に斯う談話の間にも奴に先を制られぬかと氣が氣で無い。其方が去んで又引返して乃公が又行く、其隙に途ならば三里も走くは。」彼女は猶ほ煮え切れぬを、「さア疾うせい。師の大事ぢやぞ。訴人されて如何なる歟。お主が平生の氣象とも無い。」我袖を捉へて無理に押立て、編笠を月に翳して彼は驅て大路へ出でぬ。刺さば如何程も刺すべけれども、惡人ともあれ油斷を擊つは！況て其れが討手の正使は彼處に在るをやと逸るを鎭めつ、彼女はおめ〳〵として拘れ行けり。

（百二十八）

今がた炷きたる煉香の烟、長う曳きて、其終末は引方なう消ゆるところ、釣舟の花瓶に山櫻のあはれなるが插られて、其の花片のおぼつかなく散るあたり、古き物語の卷、小唄の草紙、二三册ひきちらされて、料紙にむだ書の跡も媚めきたるに、折からの薄月夜を眺めむとか、小蔀すこし明け殘して燈火をわざと衣桁の陰にかくしたる、中々に心憎くしや銚子、盃、撮みすてたる取肴、枕、夜衾、彈きさしたる三味線、序次も無う、妻戀ひつかれて睡る猫の傍に、ほいやりとさし向へる男女二個、座頭も居ねば、禿もをらず。これは島原の遊廓、奥州屋が奥なる信夫の座敷にて女は言はでもの太夫、男は例の花木の熊谷なりき。花木はいかう退屈ぬ顏なり、「昨夜からので酒も飽いた、三味も厭さし、あの仲居のかや呼んで又た毎もの若盛りの舊情話でも聞かうかや。」彼は傍邊の枕を引寄してごろりとなれり、「あれ、ま、臥さしやるなりや其枕よりも此方のにさんせ。」嬌然として微笑る太夫は、彼が頭を我が膝にうつし、亂箱なる鬢櫛を取らむとすれど手の達かぬに、「さゞれや。」さゞれとは蓋し禿の名なるべし。喚べども應へぬに、「何とした喃？」「何ぢや、用事は。」「あい、其櫛を。」彼はやをら其手を伸して彼の箱を撮き寄せ、「此物かや。」「お憚りさま。」彼女は嬉し氣に其手に受けたり。「今は人が見で可いがの、女房に使役はるゝ亭主の鼻毛はいかう延て見醜いものぢや。」「なんのいの、餘り亭主を大事に懸くる女房の器量も劣りて見ゆるもの。些とは邪見も可いというてぢや。」「え、邪見？　女子は如何でも蛇身なから歟。」「ほゝほゝゝ、なりや男のは料見かいな。いや其笑ひ事ぢや無い、此方其の料見、早う決めて下されや。さらぬと妾や外家へ嫁かねばならぬ。嫁けば妾や生存てはゐぬ。」手に把れる櫛を取上げて、彼女は男の鬢の毛を梳てむとしたるが、水ならで一滴の雫を膝なりし頰の上にはらりと落下せり。「落籍のか？」「唯！」といふ彼女が應聲は暈れるながらも力有りき。「分曉らぬよ、其の討手が。」「分解いでもぢや、落籍は落籍ぢや。妾の身を退せて伴れて往なうと恁う言ふのぢや。誰に遣されてが此方のに離れる味は一つぢや。」彼女は堪へ難ねてか彼涙の面を、彼が頰に押着たりき。忍び音ながらもよゝと泣きたり、男は只、疊に棄てたりし手を胸に扛げて、其雙眼を鎖せるのみ。押着けたる面を彼女は猶依然にて、「それも今日か明日かといふ、殊に寄らば今宵が此方のと其の別時ぢや。此額を見るも此限りぢや。」言ひ了りて再び其聲も無かりき。男の耳に聞ゆるは、唯、其人が可愛ゆき胸間に飜騰へる涙の濤音と、躬に徹ふるは、頰に熱き情熱の蒸氣とのみ。

素見の雜鬧きは、蕭りたる此室に、遙に盈潮の如くに聞えて、雨氣を含める大佛の鐘は、東風に吹れて尾聲を長く、夜半過ぎたらむやうに響けり。雖然、這は甲夜の酉刻の梵音なり。蹶然として彼は危坐せり、而して其の眼を瞑れり、「其の田舍客とか言ふ、其もじは識る人か？」泣仆れし彼女は首掉を掉れり。「識らぬとな！　然らば會ぬの歟？……え、初手から？……。然

ば只親方の、只話し奴？　えい緊確とせい。次第によッては此花木にも覺悟が有る！」彼は幸爾に扯起して其人が口より其顚末を聞得たりき、其身受の客といへるは只の一回も會はぬ人、唯道中の艷麗なる姿を一日視て根引して其家に伴むと言ふこと、加之其談判は今朝起初りて、其の身價三百兩の手附金百兩を今夜にも授與さむと焦躁れること、全般其の處置の奇怪にして、自ら魂膽の這裏に有るべきことを聽き得たりき。彼は一回は奮然として腕を扼れるが、又俄頃に萎然として身を慄はしたり。俛くして深く思案に沈めり。

（百二十九）

色てふ敵に囚虜にせられて、戀の奴と身を做せる熊谷は、既に彼も曰へるが如く、昨夜よりして此の奥州屋の奥座敷なる太夫が許に入り浸れるなり。一昨夜の夜の不意の喧嘩は、彼と松田とが間に大方ならぬ不快といふなる漩渦を釀ち得たりき。彼の場所より四散八落に逃げ戻りたる落合ふ穴は、同是一つの寺町なる旅宿なれども、彼等は互に其の意地を緣先に流るゝ鴨川の水に去てむともせで、翌朝の朝餐にも摺れ合ふ膝のがたりびしやりと角をば除らざりき、赤鬚ぬく毛抜の手も撓きばかりの長々しき此の彌生の永の日を、鏡の中に睨まへ合ふ背中合せの白眼競に睨み暮して、燭火と與に毎とは團欒の座中に出づる銚子も今宵は放下されて片隅にあり、喉は鳴らせど誰も憚りて其れぞとも呼ばぬ盃の手持不沙汰に、夜食の湯漬さら〳〵と不滿なく了へば、「もう寢べい！」臥床には入れるも、夢は扨て置き、瞼も合はず、痛き木枕に耳根あちこちと翻轉して、猶強て眼を閉づれば、彼が目は又更に昨夜の光景を眼前に有り有りと見せて、腹立たしさ、口惜しさは涯限も無し。涙さへ指含るゝ遺恨の毗を赫と睜きて其邊畔はしつゝ熟思へば、天井の棧は忽然として我に語れり。昨夜の松田が擧作は酒興ではあらぬぞ。和主と太夫が戀中を隔離る嫉妬の意趣ぞ。法界の悋氣ぞ、油斷すな、横奪さるゝぞ。然矣！　固より我も然は念ふなり、腕づくにても金づくにても、男振にても素奴に負くべしとは思はねど、兎角は彼奴も言ふ、賣物買物！彼女はまた河竹の無理なる水にも塵かねばならぬ流の身！　と思へば又た心も心ならぬなり、身は此處に在るにも在られぬなり、疾く逢ひて彼女にも其意を得させたや、其胸をも問ひたや、根をも推究たや、戀しや、床しや、悲しや、辛らや、見たや、逢ひたや、と何やらむ角やらむ漫心の煩悶せる彼が胸は先づ魂を彼處に輸りつ、更に其の肢脫の殼なる六尺の軀に宙を飛ばせて、其女が許へは送れるなるが、思ひも寄らぬ田舍客の身受といふに、其胸は先づ潰れ、魂は消え、軀は更に戀の重荷の擔ふにも得堪へずして、途方にも仕覺にも昏れたるなり。

世には往々有る例とか聞く、親元の故障とやらむいふを種子に此の切迫れる焦眉の急を、彼の老父母の口を藉りて、一時を緩寛むる工夫は、と問試めるが、道理の理解る父なる人は今朝國元より飛脚の來て、大事の病者ありとか言ひて發足たれば間に合はず、殘れる母さんは、此話を聞いてより物も手に着しやれぬほどの歡喜、故障どころかは、言うたらば狂者にも做られませうと彼女の泣くに、其れも甲斐なし。思案もなくば寧そ妾が身を棄てゝ、といふ面色は、げにも剃刀を手に爲難ねまじき氣色なり。噫、可愛や、不憫の婦や、然る程の眞實を仇にも見ば、八幡！摩利支天！　花木が武士は廢つた！

他に根引せらるゝも廢るなり、我が落籍するも廢らせ方に自ら分別の無からずや。然矣、分別は有るなり、時の用には鼻をも殺ぐなり、面皮といふも雙刀を腰にして、恥辱の吟味といふ桎梏に束縛るゝ中の事なり、既に其鼻を殺ぎ、

耳を剝ぎ　廉恥といふ武士の面目を脈はずとならば、那麼か有らむ！　而して彼女が眞實は、予が今の其の面皮にも換へ難きなり。殺がむ、殺がむ、我鼻も耳も殺がむ！　其の殺がむといふ、時の用なる目的物は？　他に非ず、彼が師より預かり置ける封金の五百兩なり。彼は怎く思ひ決めつゝも、猶一回は悚然として懼れたりしが、現に目前なる彼の泣濺、獻欷、嗚咽、慟哭は、或は我心に鞭撻を加ふるが如く、或は我肉に熱鐵を注ぐが如く、其の決心に撃たれ、其の面色に壓まされて、彼は三回にして斷乎として臍を決めたり、未來の痛苦は、此の現在の苛責に換へ難しと。

彼は竟に親方に談じて、彼女が身受を我が方にて爲べき由を言ひつゝ、拜まるゝ島原を後にして、睨むが如き寺町の旅宿へ歸れり。視れば憎き松田は在らず、此も何彼の都合好しと、我が行李の鍵を開きつ、更に中なる其金包を出さむとして胴卷を捜れるが、忽諸血も迸らむ許りの叫聲して、「阿呀!!」

（百三十）

斯うしては在られぬ軀、兵庫が先へ制らいでは我が罪惡の破綻、と身も辛破々々と起坐むとする彌五七が袴の裾を、待たと捉へて放さぬは孫八なり。彼は、蝦蟇を嵌入れたる蟒蛇の如くに眼球を灼燿して、喝とも言はず一呑といふ氣勢せり。「に劣るな、彌五七、まア下に居れ。」一方は既や問答も無益と、太刀を折りたる三保谷の如くに遒れむとす。「こ――れさ　爾う引張ては裾が斷るゝは。斷れたとて腰の骨の强さと譽るもあるべいか。其の腰骨より觜性骨の太さを見抜れた乃公には、はや兜の脱いで降參せい。や、あツはゝゝゝ。」嗤笑れて彌五七は屹と回頭りぬ。「降參ぢやや？　汝こそ屁でも景清ぢや。こゝ放せ、遲うなる。」「遲いが苦か。遠う往たきや疾や分前與せ！」「呀！」彼は驚きて立竦みとなれるを、此方は委ぞと剜り懸れり。「あはゝゝゝゝ、匿すなよ。爾は、三郎衞めを結果いた喃？」「なに、乃公が？」「はゝゝゝは、狼狽なよ、然ういふ面上に證據がある。縱し其の奴めは結果さいでも其五百兩。……其金は確に着服した喃？」彼は愈喫驚きて其眼をのみ瞬れり。「えツこりや如何ぢや、眼通しの法印ぢやるが？　お主が其の今追人と騙いだは、此の法印樣見たところでは、萬一奴めに彼の太夫、連れて逃られうかと慌てたので有ろ。又其の一昨夜の諸拂と吐いたは、はゝ其の遊興の借金では無うて、盜した贓金で身受の相談？は孫八なり。彼は、蝦蟇を嵌入れたる蟒蛇の如くに眼球を灼燿して、喝とも言はず一呑といふ氣勢せり。「に劣るな、彌五七、まア下に居れ。」一方は既や問答も無益と、太刀を折りたる三保谷の如くに遒れむとす。「こ――れさ　爾う引張ては裾が斷るゝは。斷れたとて腰の骨の强さと譽るもあるべいか。其の腰骨より觜性骨の太さを見抜れた乃公には、はや兜の脱いで降參せい。や、あツはゝゝゝ。」嗤笑れて彌五七は屹と回頭りぬ。「降參ぢやや？　汝こそ屁でも景清ぢや。こゝ放せ、遲うなる。」「遲いが苦か。遠う往たきや疾や分前與せ！」「呀！」彼は驚きて立竦みとなれるを、此方は委ぞと剜り懸れり。「あはゝゝゝゝ、匿すなよ。爾は、三郎衞めを結果いた喃？」「なに、乃公が？」「はゝゝゝは、狼狽なよ、然ういふ面上に證據がある。縱し其の奴めは結果さいでも其五百兩。……其金は確に着服した喃？」彼は愈喫驚きて其眼をのみ瞬れり。「えツこりや如何ぢや、眼通しの法印ぢやるが？　お主が其の今追人と騙いだは、此の法印樣見たところでは、萬一奴めに彼の太夫、連れて逃られうかと慌てたので有ろ。又其の一昨夜の諸拂と吐いたは、はゝ其の遊興の借金では無うて、盜した贓金で身受の相談？

悪事は與にせう。例へば、三郎衞は愚か、兵庫どの討てとならば渥分其脱を借しもせう。な、これ程の己がが心中ぢや。憎うは有るまい。いや憎いどころかや、頼もしうも思やらう。然思や其の分前を與せ。それも其の澤山は要らぬ。」語りつゝ、抜きつゝ、彼は其毎に其の憎き頤自慢げに突き反らして、其の門齒もて抜鬚の尖なる膩肉を咬へり。說れ其道理？　にや服せる、彌五七は得心の膝を丁と拍て、やゝ俛首たる頭を擡げつ、「解得た、いかにも其の盜金の遽分せう。然し乃公も、もう隱さぬが、其の、那廓での要用もある。澤山は與られぬが……少額で可くば。」「勿論ぢや。多額は要らぬ。」「而て幾許か喃？」孫八は驟然と冷笑て、「半分與せ。山分ぢや。」「え！」「面倒で無くて可えぢやろ、其山分ぶ。」「甚麼吐かすぞい！」「ほう、其面色は？不承知か、な？」彌五七が面は、實に今其の海老色より烈火となれるなり、「誰が――己に――其半分……」「與れずば慶すさ。己も其同類にならぬぢやまで。」「同類になりをらずば？」「ハテ知れた事、お主を此處で引縛る！」

（百三十一）

孫八の少尉が其の太々しき面、其の油斷無き眼、其の小氣味惡ろう沈着きたる擧動は、敵手の氣勢を未だ嘗はざるに先ちて挫きしが、彌五七は急きたる靡を遽に鎭め、其胸を摩でて、「お主、眞實己を縛る氣か？」彼は毛抜の手を休て、輕く應へぬ、「何もが其方の料見ぢや。」「所望を聞かば其れで可ぢやな？」猶彼は頤を喰ひ反らし、其掌底に鬚の抜痕を撫で廻しつゝ、「まづ其樣なもの。」「其樣なもの？　こりや氣の沒い返詞を爲なよ。お主、眞實其の味方になつて呉るなりや、所望通りの山分せう。」彼は初て眞面に向けり、「聽くか？　所望を！　聽かば最う兄弟ぢや、味方どころか。」「過分ぢや、頼まう。」「頼まるゝ、其金は？」「此處に在る。」「早う、疾う見せ。」「はゝ、忙しない奴。」彌五七は、語ひつゝ、撚りつ、其懷中をもぢ〳〵さして聽て手繰り出だす胴卷を、對手の眼前にづしりと置けり。金を孕みて凹凸たる胴卷は、紺緞子の二重なるも、猶其の堆高と重量とに堪へずして潑裂れなむ許りなるを孫八は覗つゝ、其眼を再び晃耀かせしが、其光は前の輝々たる灯鐵の如きとは異りて、鎔融けたる鉛の正體なき樣にも見えたる。彌五七は徐ら其の結目を解きて、金包を一つ〳〵に排列はじめぬ。排列たる數は都合五個！　彼は先づ其の二個を、垂液のはや滴れて流れて傳はるまでなる孫八が膝前に突つけつゝ更に其の二個を我前に置き、殘れる一個の封緘を今や切むとせり。切むとして彼は些と躊躇へるが、忽地飜念せる體にて、はらりと斷れり。彼の燦たる光耀は映る燈火になほ美色を增して、山吹の花散り亂るといふ如くに座に溢れり。孫八は覺えず其の散りぼへるを爬き聚めぬ。彼れ猶記憶せる歟、此の座數は兵庫の室なるの東の亭にして、今より僅か一月の前なる其夜には、彼れ正雪が砂金の手術の稗助をこゝに爲つ、其の終局には彼の長女の局を無慘の刃に我が討果したる其の場所なるを。今や再び黃金の光は同じ所に晃めきたり、其れと同じき白刃の光は閃くまじきか？　嬉れしさに既や心の憧れて、目も鼻も耳も、用心も無う、飜れたるを掻き集ふる孫八が頭上に、「覺えたか？！」一聲の叫喚の耳根を劈くと同時に、彼は左方の肩頭より乳の際まで破り附られぬ。然ばかりの惡黨なれども此の重傷に堪ずして吁と俯伏るを。「覺えたか！　汝、覺えたか！」彌五七は更に二刀斫り附て、三太刀目に其の鬢首丁と打落し、「むゝ脆い奴！」猶手足を蠕動かすを脚蹴に踢轉して、急遽しく彼金を取り、再び胴卷に捻入れむとする其の刹那。「盜人!!」大喝は彼の庭口の雨戸を蹴開く響と與に發りて、旋颶の如く

に衝入れる一人を、誰と愕きて目を注げば、熊谷なり。「や、三郎衛、汝何しに。」「何もあるか此の盗人！　そ其金……呀、汝孫八までもな！」既や其問答は要らぬなり、熊谷は只彼金を奪はむとす、松田は其を奪ひ回されじとす、手中の刃は早く其主が慾を扶けて互に鎬を削り合へる、其の物音を聞附けたる表方の壮佼輩は鬼角は珍事と走り寄る、曲合頭に、三郎衛めが亂暴ぢや、計て取れ！」叫び棄てゝ馳せ出づる鍋五七が後より、「其の盗人、疾う捉へい！　一縷いで追ひ續くは其の三郎衛なり。亂拳といひ盗人といふ、孰れを其れとも分き難きに、兩人とも凶刃は持ちたり、彼等が本事は日頃より孰う知れり、悪しう敵對はゞ我が一命、と彼等は等しく悶着する間に、兩個は鴨川の河原を下りに、奔り去る見えたる儘影も留めず。

（圖三十二）

今出川の館なる騒動のおこりを僕指れば、兵庫が宮の手を拉たてゝ島原の大門潜れる、宛も其の時刻なりき。宮の心緒は今推往引來なり、彼女は一面には、此の日前なる人を這處まで伴れたるを、我が方人に疾く告知らすべき大役あり、又其の一面には、其人が身邊に附纏ひて其の宿所を突留むべき重任あり、宮の外に今一個の宮の欲しきなり、あはれ師が豫て言へる、分身てふ奇術を習ひも浮めたらましかば恁有る時の用に、など煩瑣なる案言を其胸に繰り返しつゝ、辛くにして奥州屋の門に來れば、「宮どのけえ？」不意なく喚ぶが有り。戦兢ぬ心に瀧と驚きて、屹と視れば、おさめの婆なりき。彼媼は誰人を待つにやあらむ、店前に其頭を鶴くしたり、「えら遅かつたねえ、主に渡す手紙が有るけえ。今朝嘉助どん、國元へさ歸らしつての……」此の消息は宮が耳に鐵槌を加てたる如し。「え、嘉助どの歸國しつたと？　如何して、え？　如何してね？」「置手紙があるだよ。急病人さ出來たとツてね。」婆は其帯を捻りて、八重封せる手紙を出だせり、病人とは？　急病人とは？　彼女は心に如何ならむ苦痛をか懐きたりけむよ。手も戦くばかりに見たきなり。なれど其の手紙は見られぬなり。見られぬのみかは嘉助てふ名を怪しみて萬一は氣取られぬらむ歟と、彼方を偸視ば、編笠越ながら彼は幸に騒ぎたる氣も無きやうたりき。善悪は知らず當座の難を先づ遁れしに、彼女は亘驚の隈を竊み得たる小兎の如き心地しつ、手紙は手快く其袖裏に引隠して、「お母さん、太夫どの、部屋にかえ？」太夫と聞くより彼媼は面を頽れむばかりに笑片曲げゐ、額き〳〵、「宮どのよ、聞いて呉れせえ、彼女はア今夜か身受されるで、私はア何だか嬉しくツてよ！」急病人に愕ける宮は、又此の落籍に魂消たり。扨は瞞々？　扨も扨も！　と旦つ歎じ、旦つ呆れて、急ぎ此方へ走り寄る、其れより疾く、「宮、果然てぉやな！　えゝい人畜生！　然りながら其者は……宮、三郎兵衛か、問へ。」兵庫は既や彼等が前に在り。宮は潭ず、「爾うぢや、其人は……もし母さん、其御客は花木どのかえ？」「おうよ、其の花木さまに、倘た其の一個有らしやる。宮どのよ、私はア兩手に花、貧僧の重齋、何だからもう其の嬉しくツての、今其の左右を……」彼媼は手を掘り、肩を捻かし、目も口も一様の皺にして歓喜ぶ間に、不圖編笠を見入れたりしが、魂切るばかりの叫聲を揚げたり、「そーりや皆の衆、御大盡様ござらしつたぞ！　やアはアこりや御出迎へに、何故こりや。えゝ宮どの、老婆の氣も知らねえで戯謔めしての！　花木どのかえ？　那麼ちふ事だ！　はア、これもし御大盡様、太夫べえ先刻から首べえ長くして。まア、さア此方へ。」彼媼は突如に袖を捉へ、袴に縋りて、老が感泣の涙聲、傍邊も簡はず纏き立つるに、喫驚きたる兵庫は不意を撃たれて、何か

は知らず、我にもあらで、四五間を退却たり。宮も遽てゝ取支へむとする其時遅かりき、枌染なる曖簾の内より月代の痕青き若者四五人、婆が叫喚にはら〳〵と現れ出でゝ、「これは〳〵御物醜、へゝ御醜態、さゝ先づ彼方へ、太夫様お待兼ね、御用意萬端整うてござります。」と彼等は不作法にも笠を覗きつゝ、詔笑ひつゝ、腰を屈めつゝ、手を揉みつゝ、老婆を帮けて其れが前後と左右とを押取籠めぬ。不審さは勿論ながら、亦其の好笑さに堪へざるは宮なりき、彼女は可愛き掌に胸を抱へて、「あツはゝゝこれいのう皆の衆、其りや人違ひぢや。これ母さん、其れや花木でも、あツはゝゝ身受の大盡でも在りやしやらぬに。」「えゝ又してもだ。私女は黙つて、えゝ此老婆に肝煎らせるべえ面白えのか。こりや御大盡様、此の老女が泣面べえ見えましねえか。拝むのさア目に入らしやらねえか。」婆は怒る、泣く、叫く。兵庫は驚く、呆るゝ、處置に困ずる。宮は笑ふ、轉くる、腹を抱へる。若者はまご〳〵、見物はわい〳〵。人面の垣は漸くに築かれ來るに、兵庫も竟に得堪ずして、且づ其の曖簾の内へと入れり。

（回三十三）

千重萬馬の湖と湧き山と頽れ來らむも、瞬きもすまじき兵庫なれども、此の不意なる光景には吃驚きて、彼は奥州屋の奥なる座敷に突と入り苦々しき面に大息吐きて只顧其邊を睨め回しぬ。其の編笠を脱りたるを見れば、其れが濃眉の一文字を瞼しく畫ける、雙の眼の二星を隠けたらむがやうに見るも涼しき、脣の朱く緊縮れる、色の凄きまで蒼白き、頬の稍痩せたる、黒漆なす髪を短かく一束茶筅といふ髻に切りたる彼の大盡の花木と同腹の兄弟、寧ろ攣兒とも見ゆほど酷肖たれども猶何さま熟う視れば、今方歸りて又後刻にと約しつる其人ならぬ差違とても那處やらにか有り、更に這處なるは品格の高尚りて、加之目下痼癖紛れなる威風は目覺しきまで傍邊を拂へるに、繍眼兒の如くに押合ひたる若者らは、恐れ、愕き、縮み上りて、一人逃げ、二人脱げ、終末にはツと起つ鳥の影をも留めず、取殘されたる老婆は、今は可怖しき手討にも遇ふかの如き震へ聲して、「こりやはア飛でも無え御無禮しやしたよう。宮どのよう、好う主からよう。」泣くばかりなる態なるを、「まア好うござります、御謝は妾から、心配せいで彼方へござんせ。」宮は逐斥りつ。折柄一個の小女郎ありて、銚子盃を持て出でたるが、兵庫に睨められて、棄るが如くに其處に放下して逃入れるを、彼女は目送りつゝ、自身把りて、「ほゝゝゝゝ其様な怖い顔まア歇て、さ、ま御一盃。」彼が憤怒は尚鎮まらぬなり。「否ぢや。擱け。」「でもさ、折角ぢや。お一盃だけも。」「えい否ぢや。此厮へ來て其様なる盃手に把らば彼の畜生奴と甚麼と相違？　墮落は那奴めが好手本ぢや。兵庫、然程まで未だ武士は腐らせぬ。擱つ！」宮は微笑ひぬ。「然ては此家が氣の毒ぢや。」「氣の毒は此方が餘計して在るはは！」「座敷に困らう？」「其料の金子は與らすは！」彼女は微しく首を傾げて、「それでは太夫に逢しやらぬかえ？」「逢いでも可え！　身受の奴が熊谷と決まればもう澤山ぢや。汚穢はしい、賣婢なんどの醜面さ見て！」彼は生唾を一つ吐けり。宮は更に調諂ふ如くに、「でも、艶麗うござんすがや。」「えゝい申すな。兵庫は武士ぢや！　此れより彼の大門とかへ行て奴めを來らば引捉ふる。萬一又た外方から來ば、其方、内通せい、何事も師の御為ぢやぞ。得う濟るな。」彼は恁く言ひ棄てゝ編笠再び引冠り、小判二片見送る若者が遺面に叩きつけて、回顧もせず戸外へ出でたり。

＊　＊　＊　＊

待ちても來ぬなり、其奴かと覺しき者すらも

見えぬなり、彼は大門の塀に立ち、石に腰懸け、草臥れては東さまに行き、西さまに歩みつゝ、編笠越の目を皿にして出入る者の一個をも見落さじと心を注むれど、武士、町人、百姓、出家、按摩肩引卸駕の夫、老たる若き、貴き賤しき、女子も男子も其數は算へ盡されぬまでに繁かるも、竟に彼奴は見え來ざりき。物の忙しき際なりければ、其者の我とは入れ違へに、這里を去りて、今程に又た、と緊く約ひつる其の顚末をば彼店にて聞かざりき。ほうど厭倦て、斯くては今宵は來らぬにや、我とても物の包ましき身上となるに忍して此處に何時までか在らむ、先づは宮に心得さして、其の一左右も重ねて出向くとの事にもせむ與、兎角今一度彼女に逢ひて、と庫は再び其の歩を廓内にしつ、今宵ぞ盛りの眞中なるべき夜櫻の、凝れる雲、匂へる雪と見る樹下をゆらり〳〵と以前來し路へ引返せば、折柄行途に鳴といふ動搖みは起りぬ。喧嘩にてもやと傍邊なる人に問へば、否々あれこそ此廓第一の名物、京都の花の其花といふ太夫の道中をすなりと答ふ。げにも大勢の群集はあり、かゝる中にぞ素奴もや有らむ、虚にやは、看過すべからずと彼は猶笠を引側め、ひしと結べる人の垣を押し破り、撞と寄する人の浪を押分けつゝ目を配り、意を注けて進みつ行けば、彼の插懸傘の艶粧美々しう、留木の鬢りを四邊に薫ぜる、道中といふものに磁と會ひたり、雖然、彼は其を見るに心は無きなり、爾く心は無しといへども、衆の歡びて見る程のもの又人の目を牽むとて恁る行粧するもの、其の艶美しう華麗やかなるに、彼が其の無心き眼もいつしかと其れに移りつ、自らに凝視られたりき。

（圖三十四）

丘庫は、彼の道中といふを見つゝ、何とは無しに今や又た裏州屋が門に來にけり。彼家の門口にて寢く其の歩は停りつれども、彼はかの宮を喚出さむとにも非ず、又熊谷の消息を問究さむとにも非ずして、今は其の何が所以に這處に來しかをも忘了しやうなりき。彼は、狂蝶の香を慕ふ如くに、物とも無しに嘸れ〳〵て、心も空に或る者の跡を逐ひつゝ竟に再び此の門には來つるなるか、目下は其家の、剛纔訪へる裏州屋といふも知らざる如く、茫然として只突立ちたりき。其の或る者とは、何女なるか、彼は未だ知らざるなり。只其の甚慶やらむ目醒むばかりなる色好き美衣を着て、插懸けたる傘の下にありしを見れば、蓋た其の太夫といふものなるべし。とは想ふも、未だ其名をも知らぬなり。

唯彼は、夢の如くに、我心の異しきをも猶異しとは想ひ到らで、何事を念ふとも何だ意注かず、其の身の何處に在りしとも辨へぬ氣に、躬も忘れ、魂も忘れ、場所も忘れて、只忘れ得ぬ其人の面影を、編笠越に直地と凝望めつ、其女が入りたる門の内を唯可懷しう、將た恨めしう、瞬もせで覷入るなりき、咄、彼は何物にや化れる。石にや、木にや？　否々、牧野丘庫なんど！　立派なる名は名乘れども、田舍武士の悲しさ、感情に生死せる一轍し氣風の哀れさは、膵の緒切ての最初なる此の美觀さと、彼の妖艶さとに擊たれて、彼は木乃伊取の木乃伊とは化れるなり、盡未來際と願へる菩薩の尊容も、紫雲にあらぬ柿曖簾の裏に隱れて、乙女の姿しばしと歎ける天人の面影も、虚空にあらぬ丹の格子の門に沒せぬ。烟の中に亡姫の幻容を失へる漢帝の恨を彼は今身に占めたるも、愛妃の在家を仙宮に訪せし唐皇の手段に未だ考へ及ばでか、蠟ては彼は快々として這家を去りぬ。去りしかと見れば、彼は再び取返して、又彼の店の門に立ちたり。なれど這回は稍物の羞恥しき心の附きたるにや、近くへは寄らず、遠方より凝望めたり。凝望ても人は無きなり。彼は曖簾の文字を視たり、蓋し此時、初て其眼には入れるならむ。

む。奥州屋と筆太に染抜ける三字は、彼れに什麼なる掾懼をか與へけむ、看る〳〵其笠の動揺くやう見えたるが、彼は遽に踵を回して、追はるゝ如くに、半町を趨りて、但有る花の樹の眞盛りなる陰に倚りぬ。

天上の月も、猶忍ぶところ有るか、彼も同じく暈を被て、花越に其影を地に敷きぬ。彼は此影を眺めつ、仰ざて其光を瞻つ、顧みて我姿を視て、慊々として歎息せり。世の中に羞恥といふもの無くば、身に負へる大望といふもの無くば、宮なる女に嗤笑るゝといふ艱辛なくば、彼れとも彼は想へるか、或は彼女との温かなるべき今宵の夢を、我が歸寓ての孤衾の寥しきに想像りてか、彼の歎息は一度ならず、二度三度も漏れたりき。低回顧望、多時は去るに忍びざる體なりしが、辛くに纏念せしか、彼は此の花を棄て、月に送られて歩を移しぬ。なれど回顧り勝なりき。其の回顧れる眼の中には、蓋し又前とは異なる或女の影を見たりしならむ、されど今の彼には其を看認め得ざりき、心茲に在らざればならむ。狗の尾を〻履みたるべし、往來の人にも觸犯たるべし、然れども彼は其を顧視も、心附きもせざるなり。前むにもあらず、却くにもあらず、歩むにもあらず、停るにもあらずして彼はいつしか大門を出で、大路に沿うて、北に行くこと十餘町。何物にか醒されたりけむ、不圖佇立りて、「呀、已は！」呆然として四邊を眄たり。

（四三十五）

此等の光景をば、其の夢に夢見し如き其人よりも、寧ろ確實に熟う視たるは宮なるべし。彼女は兵庫が奥州屋の門を出づると斉て、其の笈擔姿を尋常の端姿様の形に變へて、或は遠く、或は近く、着きつ、離れつ、見え隠れと其迹を狙けたりき。夜目遠日笠の内なる彼がかの太夫の道中、就中其の信夫の艶姿を見つるより、漸く魂の身を脱出でたらむ如くとなりて、足許も四度路六度路に、笠の形も動揺々々と、人には行當り、籬には突觸り、跡を逐ひ、影を慕ひて、旋り〳〵て又以前の奥州屋の門に來りて、酔へるが如く立竦める態を見し時は、個は什麼と可笑しきよりも呆れて魂消たり。低くて辛くに去りぬと見れば、又來り、歩むかと見れば、又佇立む、其度に我も同じく、歩みつ頽みつ、往きつ、來つ、狂人を趁ふ不狂人の馬鹿々々しさに、且は厭倦ねつ、且は腹立ちつ、疲勞れもしたれど、此際に懐中なる彼の喜太郎が置手紙は讀み果てぬ。

呵呀と驚かれぬるは、其病者なり、病者は思ひも懸けざりける大納言殿にまし〳〵き。年來の御辛勞の發出でたるにや、假初の御熱邪と見まゐらせしもの俄に重りて、今はほとほと頼み寡うも見えさせぬといふ、一刻の猶豫もなり難きに御身には面のあたりの暇をも申さで發途つなり、彼者の上は濡り有るまじき其計の穿鑿に任せまゐらすぞ、但し、縦し其を認究めたりとも危ふき所爲をば爲たまふな、彼も然る者なり、遥りて大事を遑ちなば、主君の御恥、我等の恥辱、後悔も其詮有るべからず、懲へて〳〵諸事は我等が歸り來る日を待ちて、云々と書きたりけり。口惜しや、折も折なり、只半日の離齬にて恁くあることの無念さよ。那の放心たる態した物生擒むるは我が手一つてに難かしかるべきも、刺むには掌裏の物なるべきを。刺む歟、討む歟。想へば這奴も倘だ壮盛りの、病痾氣も無きやうこれは今暴かに死もせじ。否、とは言ふも、熊谷を逋捕ふといふ大事は持ちたり、然なり熊谷も剛健者なり、然もあらむには得も汚目汚日と拿捕れもせじ、萬一に彼奴めに返り討れて此の當の者を他手にも懸けさせなば……。

えい、刺む！

恁く決斷めたる場所は、大門を出でゝ、朱雀

を北に行くこと十餘町、三條の大路に既や近きところなり。眼を決めて屹と視やれば、彼の猶飄揺たる影は、朧ながらも空なる月に照らされて、手に取るごとし。小褄掻取り、懐裏なる刃抜側めて、走り蒐むとは爲たりしが、否々と纔念せる如くに、彼女は突如に小礫を拾り、はたと投ちたり、是れ彼の實に放心したりしや否やを試みむとての爲なるべし。投礫は飛んで、彼が歩める傍邊なる小溝に落ちぬ。水音ありき。彼は果然停立れり。而して甚慶やらむ獨語ちたり。

唯見む沂柄、大宮を横鬪に、逸足にむら〳〵と來れる大勢ありき。彼等は兵庫が佇立めるを見るより、「や、若殿！」其め慌忙てたる聲は宮の耳にすら荒涼じう聞えぬ。若殿とは？　あの叫聲は？　と彼女は小啼き方に躬を倚せつ、忍び足に近づきて再び彼等が告ぐるを聽けば、愕くべし、彼が留守中の騒動！　熊谷は家司の少尉といふ討ちて、松田を迫ひ、河原面に出でたるまゝ生死も行方も知れずといひ、猶其場所には、四百兩に餘れる金の散り亂されて、胴巻すらありといふ、其の注進はいづれも目を皿にして我一句、彼一句と兵庫を圍繞つて叫めきたりき。往來を隔てゝ、彼も我も只魂消ぬ。兵庫は突忽袴の股立高く挙りて、駈出だせり、大勢も續けり、宮も同じく其後より、小陰を迴りて。

＊　＊　＊　＊

月、天心より傾きて西山の高峯に懸る處、建仁寺の百八鐘白う響きて、曉の霜又寒の夢に寒き時、四條の磧に肅然と立てる女子あり、是れ彼の甲夜に、小陰を迴りて今出川へ赴ける其女なりき。彼女は、宵なりし鬼氣もなく蠱の亂れ、瞼は霑りて、霜を吹く河風に身も不堪ぬ氣に見えたり。彼女は一根の木片を手にして、其邊なる石塊を除け、辛く一所の瓦穴を穿ちたりしが、纔て一個の或る東西を扛げ起して其處に瘞め、更に上より大きなる小さき石をもて緊と盛て、砂を盛りたる土饅頭樣のものを作り出せりき、猶甚麼をするやらむと視れば、彼女は河瀬の杭に繋れる樗やうの樹枝を拾ひ來つ、それに手向て、「南無、幽靈頓生菩提。俗名、熊谷三郎兵衛！」一噫、彼女宮は、我が師の爲に、又た友の爲に昔の好誼を棄さると、後難を避るとの意をもて、彼が最後の亡屍を埋葬せしならむ。恁くして彼女は、猶其の眼瞼の露を拭ひつ、回向に時を移したりき。

（百三十六）

彌五七が死骸は、彼の夜の中に二條の河原近き所にて發見したれば、兵庫は人々に指圖して人知れぬ中にも我が邸に取入れさせぬ。聽て又彼の築山の陰といふに鋤鍬の音したるは其の亡屍の、少尉が骸と共に、前の主なる局が骨と一所に永眠さるゝにやあらむ、恩怨不二、親讐一如、不思議なりける宿世にこそ。其の迷夢も頓に醒めぬ、此變事を他の身上とも思はぬ迄に心に悩れ、且つ戰慄けるは兵庫なりき。人前には然り氣もなう、此れ程の大事に荷擔して一方の大將たる任を承けつる者が、酒に亂れ、色に狂ひて恁有る事爲出したる、口惜しやなど言へるも、其の昨夜の我心といふを、今朝の我胸に敲けば、彼は實に其額に汗するを覺えぬものありき。什麼何たる虚栄ぞや、恁くては我はあの熊谷にと輪を加けたる蠶漢なりし、それにつけても此心の咎を由井どのに謝ぶる其の面晴には、彼の金を盜み、友を害し、其身逐電して命を窮む熊谷めを拿へ來りて、一つには彌五七孫八が寃を報い、二つには北大事の露顯の端緒を斷つ、其れが外なる手段もなしとは急躁れるも、然りとては自然に恒悩ある心の疚しく、又可恐しく、再び彼廓に向ひて彼を搜索むとの勇氣も出でず、さらば宮に消息してと、其夕人を遣りて彼の乙女を訊ねさせつるが、彼女は昨

夜家を出でしまゝ今日も歸り來らずといふ。太く望みは失ひたれども彼は扨て止むべきに非ずとして竊に人を狙け、朱雀の大路、大門の邊を徘徊させぬ。

十日餘りを經つれども、些の手懸りをも得ざりき。心憂や、設令彼奴、其盜める金は我家に棄て行きたりとも、那れ程に惑溺へる心、腐れし根性には彼女の色香を忘れ得で、必ず彼の廓邊に立廻りもすべきものを、看認得ぬとは這奴らも亦た素叫つ狂興つ、自己らが娯樂にのみ耽るにや、兎角は人記みほど物の捗の行かぬは無し、是非なし今は我躬ら出向ひて、と彼は心の苛立つ儘に、一夕、再び彼の大門を潛れり。七日といふ其裡の盛りも既や過ぎて、枝なりし錦繍は今は地上の泥土に朽ちぬ。無常迅速は獨り人の身上のみにはあらざりけり、然るにても彼の孫八彌五七が變事は、此前に來つる其の夜なりしを。

惜しや吾、彼夜這里をうろつかで家にも在らば其場に彼奴めを討て棄てゝ、胸も安く、心にもあの如き汚穢を宿さざらましを、其れも皆我が此の眼の各與、頼まれぬ心の罪與、と想へば、異しき哉、其の眼の咎といふ道中の華麗なりし處、其の心の罪といふ彼女の艶美なりし姿の何とは無う胸應に泛び來つ、と一時に四邊なる床しげなる絃聲、媚めける人語と俄に我が耳を鼓ちて、漲るばかりに胸は躍れり。個は淺猿し、我ながら甚麼たる事、我は既や彼の事は忘れしものを、直地と忘了しを！　今更想起ず、絃音なんどに誘惑るゝなど、えい、我は然る言甲斐なき士では無し！　一たび悔て又其罪過を再びする如き奴では無し！　憎くい奴、えい、心!!　えゝ憎く！

彼は蒼忙て、我と我心を叱咤つくれど、生憎や其處とも分かで來る留木の轡り、有りしとも見ゆる人の面影、其の家、其の門、其の夜の光景を依然にて、覺束なう、怪しう、心悸くか吾と吾を今は制止め難ぬるやうなるに、彼は耐らで、疾く此の魔境を去でむと眼前なる大門を望みて、驀直に、脚をば前めしも、後髪は既や何者にか捉られて、彼は竟に其の一歩をだも遷し得ざりき。自ら苦み、自ら悶えて彼は夢に魘はるゝ如く摸捉きつ、喘ぎつ、叱りつ、罵ましつしたれども、磁石に吸はるゝ塵の如くに、いつしかするゝと其方にのみ牽かれ行きて、心とも無く、物とも無く、渦流に巻かるゝ木葉の如くに、彼の柿染の暖簾の内に、くるゝと彼は巻込れたり。同時に人の聲は聞えぬ、「好う入らせ。」

「宮は在るか？」　其後は店外の動搖きに紛れて聞えず。

（圖三十七）

奥州屋の表座敷に、老若の男女の二人さし向へるがありけり。男は今來し兵庫なるが、女はかの太夫が母なる婆なりき、婆はいつもの元氣もなく、只哀れに憔悴て、一向其の眼をのみ拭ひたり。「宮どの御尋ねなさる、この宮も彼の晩げから何方へ往んだか、歸ツて呉れませず、今申す身受は夢の樣、人は來ず、的は外れる、私らもはアさつぱり氣抜しましたに、娘は其れさ苦に病で、三日目からばツたり寢まつて、今に臥牀に着いた儘。……一度でも御目に懸つて宮どのと御親呢の貴君さが顏見せて下されたは那程かの心丈夫におざります。それにさ、娘もさ。何卒、ま、汚穢うても奥へおざツて、彼兒をも見舞うて遣らしやれて……。」涙の間は沁々との語なり。虚僞も有るまじげなる此の愁歎を熟讐て、今や微しく其心の定着りたる兵庫は再び思案しぬ、怎ては眞實に熊谷も來らぬと見ゆ、彼奴果して如何ならむ土地にか身を藏しけむ、又宮といふ奴の粗笨なる、さりとては人の依囑もうち放下して何處へか奔れる。其は且づ其れとして、今日前に見たるところ此婆の

態こそ哀れなれ、其娘の太夫といふも可愛けれ。其も扨て其れとして、其の女兒のといふが、抑〻彼女——彼の君か？　然にてもあらじ、如何に鳶が鷹といふ俗諺はあるにもせよ、此の皺苦茶婆の彼の玉のやうなる人をいかにして産出すべき。さらば此の太夫と彼君とは傍輩歟。傍輩の其の太夫に逢て餘所ながらに彼君の態をも聞く。可らむ歟。否々其れも煩惱の種子。とは言ふも此處まで來しものを。否、然らば、其の消息も姑く且づ其れとして、虛僞を旨とする遊女の習ひ、其者が母たる此の老婆、熊谷めに依頼れて他人には恁く言ふ歟彼奴め身受せむには金の無し逢たさに戀しさに、此家へ忍びて、太夫といふも、去しとも無さに、放しとも無さに病癒と亦た詐はる歟、其れも知るべからずと道理を附くれば、我が此の太夫に會ふといふは誰が聞きたりとも怪しいとは得う言はむや。然矣、此も由井どのの爲なり。大事の爲なり。影護さの良心を強て彼は種様の道理を担造りぬ。老婆は涙の手を扛げて彼方へと勸めぬ。小判二枚を此以前に抛附けられたる若者らは、交る〳〵出で來りて奥へと請じぬ。仲居といひ、禿といひ、いづれも手を取り腰を押して、「さア、一寸とまア彼方へ。」「太夫さんも逢ひたいと待てゐやしやります。」取られて、押されて、請ぜられて、勸められて、加之自ら其の一時の良心を壓服くべき道理をさへ捏造り得たるも、猶かの前夜に宮に言ひたる、我は武士なり、墮落はせぬ、熊谷めが好手本、此の涸はしき場所、賣女の面。加之ならず、生唾、席を蹴立てし！　なんどの擧動の、言質の、我を刺し、我を罵り、我を恥しむるやう此際にも目にも見え、耳にも聞えて、猶且つ宮が我を嘲笑り、正雪が我を怒る面影さへ、幻にしも顯くに、彼を怕れ、此を慮へ、且つ慚ぢ、且つ悔い、且つ自ら責て、彼が決心の臍も今更に飄搖とゆらめく腰を頓と突れて、「さ、まア此座にござりませ。申し太夫さま、ほゝ彼の御方を。」「こりや道よ、あの花木どのに肖てござる御方さ連れ申したよ。」

但見る、九尺間なる床の前に、緋綴子の夜衾三つ四つを重ねて、素き練帛の鉢巻しつ、色絲もて括れる唐織の枕に身を撓げに凭せる美人あり、是れぞ彼の太夫なるべし、涙に窶れて愈其の白う、痩りたる頬を徐らふり向て、嫣然としつ、「皆さん、お辱けなうござんすえ。」兵庫は、只、其の呆れに惘れたり。驚くべし、彼女は前夜の其君なりき。最初には天女と惑ひ、次後には惡魔と怖れたる其君なりき。天女か、惡魔か、菩薩か、其は知らず、たゞ目下の彼が身は、天上へや昇れる、魔界にや陷れる、淨土へや生れたる、兎角は從前の人間界ならぬやう彼は想へり。

宵燈のほの〳〵と薫れる、衣服夜衾の鮮美しき、假初の調度器物も媚かしう、目に熟れぬ、彼は只全體に心の跳るのみなりき。況て其君の艶容をや、近優りして嫋娜しき其面は、病に痩せたるに一層の情趣を加へて、今の嫣然たる一笑は、身を爬拷らる〻如く感えぬ。嗟乎彼は、既に其躬も、其心も忘失むとせり。況んや正雪をや、宮をや、熊谷をや。

（四十八）

此夜の移り香は、いかに浸々と其の後影の別れの袖に留りにけむ、其翌日より兵庫は又た有らぬ態の人となりけり、去年、彼の松坂を出でし後、狼戻甦る無き人と化れるは、彼が爲に悼むべく、將た悲むべき涯限なれども、其れは猶彼の是非なき意地なるものにて、偏僻ともいへ、頑陋ともあれ、一方より言はゞ頓悪しき條はありしならむを、今や否らず、其の一轍翻すべからざる意地、邁往沮むべからざる氣力、雙刀に懸くるといふ氣質、死をもて誓へる大望、其等を負へる身も魂も何處にか放下し棄てつ、只行方なき戀てふ風に吹かれ〳〵て、浮破々々

と上の空なる、其の虚空に浮遊るゝ沙盆球の如くとなれりき。

座頭が浮瑠璃もうろ記憶ながら口吟まれて、禿への諫口もやゝ言ひ習へる此頃は、面白うもなき庭の池は鯉鮒を眺めて、いつも同一の景色なる東山の青葉の緒を一日の友とせらるべきには非ず。今朝の太夫が涙の面の今もなほ目に隠映くに、仲居とが約束も果さでは心の済まず、其れよりも猶心の済めぬは昨夜の口舌なり。我を何ゆゑ斯うは傷しうしやるぞと問ひたれば、妾が先の情夫に肖てといふ。其の情夫とは邸誰？　と詰問れるに、彼女は泣て、今ははや世に亡き人、妾を棄てゝ冥途へといふ。扨は其人に心の遺るか、あら頼もしからずやと僻口れるに。たとひ其人が世に存ればとて御身を棄てて如何なるべき、御身の爲には山礪河帯の誓約はものかは、指にても髪にても、たゞ思ぼすが儘といふ。猶其を押してと思ふうちに夜の明けたるが、想ふに其の情夫とは熊谷か、彼奴めの死しとは耳新らしき話なるが、眞個然らば自ら我が責任も了める妾にて、殊には今は妻敵なる心も安し。紀州といへば彼の形勢、訴訟一通に殿の御腹をも居し玉はじ座頭の借銀を誉女が拂うて呉るゝなり、正雪が旗上といふ其旗も、大概は五月幟に武者人形見る程の事にて終らむ歟。さらば彌の彼女が心を今宵は見抜て、起請の面涼しうもあらば、彼の金にて！然なり、半分は消費したれども猶根引が額はあるべし、總て浮世の野暮をば歇て、七百石の半額貰ひて、親父が加茂の別荘へ彼女めを伴れて、當分は隠居！　其事か、其事か。

今の兵庫が肚底は、大略は此邊なるべし。衣服美々しう、流石に其物までは未だ忘れぬ細身の大小腰にして、出でむとする、其端へ、「若殿、江戸からの御客ゞ丸橋どの見えられておざります。」丸橋とは、豫て正雪が話に聞ける江戸の大将、姓法の暴漢、忠彌其人か。今は扨て何の用？　いや何の用なりとて遇ふ要も無し、不要の無きのみならで會うては不味し、と彼は竊に鼻を皺めつゝ、首を掉りて、「予は不在ぬと言へ。」「いや、御在宿の旨申してござります。」「えゝい差出た。さらば不快！　重ねてと言へ。」取次の若黨は叱られて、其の膠らせし面を紙襖の陰へ引入れむとする、其れより疾し、「不快ぢやとて面談の叶らぬ程にもあるまい。忠彌其座へ推參する、免されい。」銅鑼を叩くが如き聲は一室に起りて、ぬツと出でたる其人を見れば、背材は六尺に餘りて、其の總髪なる髻は鳴居へも觸れむばかりなりき。銅鐵の額、猪毛生ひたる腕、虎髯左右に戰かして、朱鞘の大刀攫めるまゝ無手と兵庫が對座に坐したり。「初めて御意得る、御分が其の兵庫どのか。」しかすがに心疚しき兵庫は、天狗鳴動といふらむ如き其の羽風に搏れて、身も長縮むやう覺えき、「いかにも我等、其の兵庫ぢや。貴方は丸橋どの。而て由井殿は？」「ゝゝ由井といふ名苗字、御分は未だ忘却である歟。」吾は縦し故の吾ならぬも、初對面の會釋も了まぬに恁く横事を押懸られては素直には通せぬなり。「不思議をお言やる。兵庫、由井殿を忘失るゝほど未だ老耄はせぬ。」「老耄おしやらぬものが何故大事を忘却た？　大事を忘却たは卽ち正雪を遺忘たぢや！」今の兵庫は、却りて他を欺惘むとする巧舌を有てるなり、「靜まりやれ忠彌、御身こそ其大事を忘失たぢや。其の憚からぬ高聲は？」「甚麼を言ふ！」「壁にも耳。傍聽人あらば如何おぢやる。三思して行へ。京の者とて皆聾者にて痴者にてもおりやらぬ。」彼は苦笑ながらも微笑ひぬ。

（百三十九）

意外の來客、忠彌といふ名聞ける時より、既や我が近日の擧動を寺町なる旅宿の者より聞

知りて如何ならむ難題をか持懸くるならむと想ふ差はず、初面識の口誼も未だ終らぬに、大上段の眞二つと眞額より挫ぎ附られて、我はや微塵になりたるかと狼狽しが、倖ひにも、敵にも些少の破綻あるを疾くも見出して兵庫は辛くも受留めたりき、受留は留めたれども、我心に病癒あると、彼が見脈の荒涼じきとに既や神餞えて、二の太刀に切反すべき氣力も無し、只僅に彼が呼吸を覘ひて自身の防禦に早速の進退を謀るのみなり。敵手は猶野猪の如くに突懸れり、「聾耳でも痴者でも無い者の面前に、身をも忘れて何故其の遊所狂してお見しやる。其れが三思して行へか。」「これは扨て近頃の難題。我等遊所狂するといふこと……」「えゝッ無いとか？　無いと言ふか。誓言立てゝ斷言めされる奴。」「それは其の物でおぢやるよ。遊所へは參つたこと得う無いとは申さぬが。なれど其の狂ふなんど……。」斷無とも言はゞと忠彌、其刀に手を懸けたるが、彼が猶其の良心に慚てか、或は我が擬勢に懾れてか、其の實情を自白し懸けたるに其の苛げたる眼を和めぬ。「むゝ、遊所へは行れたとな。むゝ、而て何用あつて參られた？」卑劣なる兵庫は、彼の氣色の緩和れるを瞥て、再び身の罪惡を欺瞞むとせり。自ら慌忙しく其の膝を進めて、「聞れぬか彼の珍事、松田熊谷併せて我が方の前波が刃傷、横死といふを。」「いかにも聞いた。聞き申たが其事が何と？」「其事である、其れでおりやるで。其の刃傷の起初、横死の根本と申すも由井殿の誡められた飲酒を破つて、興に乘して島原の惡所へ浸つて熊谷めが其の馴染の太夫信夫といふを根引せうとしたからの事、果に三人口論して松田と前波は其の場に討れ、熊谷めは影を隱いて今に其所在を知らぬ。それで其の我等等案ずるに、女子の髮俠にて綰れる綱に大象の猛きも繫がれ、其の足駄もて造れる笛には秋の鹿も寄るとやら、彼奴めたとひ何樣に身を匿さうも其の太夫といふ許へは必ず折節に忍ぶであらう、其れを捕へて一つには松田前波が仇、二つには此の大事の破れるを防ぐ。儀樣の思案で島原へは、何さま參りは參つた、が其の狂ふの何のといふ、氣もおざらぬ事。」「ふう、而て御分は、其の熊谷が所在を探知れたか？」「いゝや未だ……。」「市中をも歩かるゝか？」「歩くとは？」彼は危惧めり、近日は人目に懸るも慥憂きに、彼處へ通ふも只興をのみ雇へばなり。一寺町の者が參るも何れぬとか、物の間には當家に附け置く只今の若者らをば喚るゝか時？」彼は此にも答へ得ぬなり、明暮は只太夫が事のみなれば、臍膩き彼等をば身邊へも寄せぬなり、況んや其者との晤談をや。「人をも寄せず、市中をも歩かれず、初終島原に入浸りて……。原來が何事を探聞るゝ？　こりや兵庫、其の熊谷めはな、死骸になつて四條の河原に埋れて居たぞ。」「呀？」「此の七八日前、大雨の後、土地の者がそれを發見いて既や町方の檢視も受けたぞ。初は誰とも知れいで有たを其の島原の奥州屋とやらむの若者が通り合せて、未だ腐れである彼奴が死面熟と視て、花木たらいふ廓名の客と申し出いたで其實名知るゝまでと、三條の大橋に捨札となつて立てられたぞ。お主が今言ふ盲目聾耳。原來が誰を言うた？　然言ふ、汝が其者では無き奴。其のみかは其の熊谷めが奪出いたといふ五百兩の用金、松田らが死骸の傍に棄てあつた金、何と爲た？　先づ其金見せい。」猛然として彼が起せる叱咤の聲は百雷の轟くといはむも今更なる、兵庫が耳根は碎けて飛るかとばかりに思はれき。一々に急所を提れての鞠問に、彼は再回甚慶と反すべき言も無く、虎の前なる鼠の如くに只慴伏して見えたり。

（二四十）

忠彌は猶嵩に懸れり。「さ、其金見せい。見せ

をれツ！　返辞の無いは其金もはや遣ひ棄てたな！」彼の眼は今其敵を睨み殺さむばかりなり。「紀州の家老牧野兵庫、今は公家の落胤の織澤左門、脱も心も剛健の壮者、大事の時は京大阪の大将、立派に采幣も預けらるゝと由井の言はれたに、今回も疾う會うて何かの相談と来て見れば、此の醜態！　あの熊谷らの馬鹿者に輪を加けた其の醜態！　盗賊にも劣つた虚業！　原来が由井の眼が老耄したか、其方の性根が俄に腐つたか。えツ、も、老耄でも腐つた筒はぬ、我黨の風上にも置けぬ畜生！　恥といふこと、罪過といふこと、人に面向のならぬといふこと指頭許りも知らば腹を切れ。其の耳鼻ひツ殺いで由井に見せて、彼者にも恥の面掻かせで置かぬ。切れ！　切れ！」兵庫は實に、我腹一つ切り得ぬまでに堕落したるか、彼に斯くまで詬罵られても、只、平伏したるまゝ其首をも擧げざりき。「切ぬか！　切ずばツ！」はや抜むとせる大刀に手の懸れる刹那なり、「これ客人、まゝ待て、待て下され。驚き見る彼方の座敷の帳臺の陰よりして、轉び出でたる老人あり、是れ此館の御主なる三位の卿なりき。卿が、彼の物怪めきたる、狂ほしき御病は此程にいたりて稍痊り方とはなりたれども、例の纖弱き御心とて内に外にの御配慮、過去将來の御懊惱に胸塞がる時の多ければや、御邪熱は冷めたるも夜も熟くは眠られず、御食も快よくは食し玉はず、御病氣い來めつきりと御年の老りて、眼は斷ずの御涕涙、頭の霜は雪と變りて、御手脚も顫々と、見たる處御衣にも得堪へ玉はぬが如くなり。憫れなる此殿はべつたりと其處に手を衝せて、「客人、御身は正雪老から豫て聞いた丸橋どの麿は當家の主、三位、三位ぢや。此の左門が父ぢや、父ぢや。」頻りに御首を下げ玉ふ御態の傷らしきに、忠彌が怒憤の底も脱けて、何とやらむ手持不沙汰の、刀をも其處に放下しぬ。「仔細は聞きました。不躾ぢやが彼處に竊聞して熟う聽ました。其れは皆貴方のが道理ぢや。眞に言語道斷の振舞、殺ながらも呆れ果た憎くい奴。況て貴方の心では其首を斬る！　斬てもが饜足るまい。耳鼻を殺ぐ！　殺いでもが滿足されまいが、其處ぢやてや、何辛その其處どころを喃、ならぬ堪忍をならしやれて、命丈けをな、これ此通り年老た此の麿が斯う掌を合せて拜みます。これ此通りぢや。あ、憎うても子は子でござる、況て多くも有ることか二人限、唯の兩個ぢや。此者が兄、次が弟、其の弟も未だ十歳にも足らぬ頑是無し、麿が依頼にも何にもならぬ。なるは此の左門限り。其者を今御身に斬られて麿が明日から如何なりませうぞ。な、其處どころを熟う斟酌れてな、麿が心にも些はなつてな、其の出來悪い勘辨をもな。あ、麿も、承知か知らぬが此程よりの病氣、やれ嬉しや此病で憂世の苦勞も助かると思ふには似で、まだ業も滅せぬのやら彌陀の御迎も受けませず、又候や此の憂目を見ます、然し前途も長うはござらぬ。其の麿が目を瞑る其れ迄の間を喃、何辛助命て。」骨も露はに肉も落たる、枯柴を皮嚢に裹めるが如き手を合せつゝ、咳嗽るを堪へ、嗚咽ぶを忍びて、呼吸も絶え〳〵に掻口説く玉ふ老の繰言を熟々と聽て、不思議や彼は日に、數滴の露を泛べぬ。忠彌には母の有り、彼は其母に孝行なりき。忠彌には兒子あり、彼は其子に慈愛ありき。彼は人を信ずること厚かりき。仁恕も深き方なり。怒る時は獰猛當るべからざれども、一旦其心の融解るに及びては、再び其痕迹を留めざること春の氷の如くなりき。母に孝行なる彼、子に慈愛ある彼、人を信ずること厚き彼、仁恕なる彼は、此の老父の可哀れなる態を視、可悲き涙を視、親の子を思ふて玉ふ至情中の至切なる言を聽て、其心を動かさざらむと欲するも得ざるなり。彼は突忽其母を想起せり、我身萬一人

に斬れむとすること有る時、其が悲歎や忿何ならむと。彼は又其子に想及ぼせり、人有りて萬一彼を殺さむとしたる時、我が驚愕と悲哀とは忿何ならむと。竟に彼は愀然として首を俛れ、其腕を拱きたりき。

（百四十一）

丸橋が闕蹕へる面色は、突然卿の御膝に三寸を前ませぬ。「我は麿が頼みといふこと聽納て下さるな？」「否と申すではおざらぬが。」「金か、金かや？　金ならば麿が如何とも爲ます。白銀も黄金も玉も何せむに、勝れる寶子に若めやもぢや。麿も勝手は見らるゝ通りの不如意ぢやが、知行もあります、知己も無いでも無いぢや、出入の町人用達の者から借受けても其金は何樣にもする。したが、其金さへ進ぜたりや、今後は緣切にもして下さるかや？」忠彌は目を瞪れり、「緣切とは？」「緣切とはな、あの可怖しい……」言罷て、左右を窺む如く顧玉へり、「……企圖な。あの方の肩拔さして貰ひたいのぢや。私もな、今些し齡でも若くば又何か其の働き方もあらうけれどな、此通り半死の病翁ぢや。連中に加つてゐてからが足手絆ぢやろ。又た左門もな、斯う見えても近來は病惱勝ちや。正雪老との約束は、一旦は何樣にいたしたか知らぬけどな、其れも其の是迄の事と諦念てな、何卒その仲間拔してな。」此一言は、忠彌が有てる逸癖の耳に何とは驚きけむ、看る〳〵彼が毛蟲眉は勃起々々と蠕動き戰けしが、又俄に斷念しか、空嘯きて、「如何となされ。」「いや其樣に情無う言れては此方が氣の毒ぢや、別かるゝにも快よう暇呉。」彼の耐らぬ大喝に其口を衝て發でたり。「金銀で約束が買はるゝか！」「呀！」「況て其金は誰が金か。其の誰が金を誰が消費うた幾。知れ切たる事！　我等は御身らが懷中の金一錢たりとも與れよとは言はぬ。由井が金を見せいと言ふぢや。」彼等は默せり、落雷の後なる小禽の如くに、忠彌は仰ぎて、更に長太息を滿らしつゝ、「由井めが老耄！　あ、恨めしいは正雪が眼の腐敗ぢや。箇樣の奴等を味方として大義の軍を起さうなど！　今更に言ふも無益しい、恥辱の恥辱を曝らすぢやも。責て汝ら、其の人間らしい料見もあらば耳の底に留めて置け。我黨は實にお主等父子を賴憑んだぞ。されば汝に彼の狀を書せて、由井は直さま和歌山に立ち越て、彼處の樣子を如何ぢやと搜聞れば、帶刀の老人が俄に江戸に出向くといふ。取る物も取り敢ず其の跡を追ひ、江戸へ着いて、種樣の手に手を盡いて、扨て殿中の模樣は

と聞けば、老人が例の剛氣で執政共を怒鳴り捲いて、お主が三十七ケ條、其の大概は穿議の手にも懸らぬといふ。由井は驚いて、怎くては我黨の殿に謀叛起さす與、腹を切らす與、執方の道にか爲いではならぬ、其れには今一度兵庫をと、斯う言ふで、由井は進退に間隙の無し、金井は在らず、餘人は使役ず、それで乃方が自ら望んで、談合なり、手筈なり、迎へなりに來たのぢやはよ！　來て、寺町の旅宿へ着て、彼奴らの話を聞けば此の醜態！！　えゝいもう後は言ふまい。原來なりやお主が其の素首、胴へ附け置くべい物で無いなれど父の愁歎が不憫さに……えゝい言へば言ふ程の口の汚穢、肩擔なり仲間拔なり勝手にせい。吁嗟、頼まれぬは人間。義理知らず、恥知らずの畜生、人面にして獸心の奴等！」散々に罵り棄てゝ彼は大刀杖にして座を起むとす、卿は慌忙て、「金は？　か金は？」忠彌は冷かに回顧りて、「御身に進ぜるは！」「言詞の事も序に喃？」「人をお越しやれ。何時でも返却す。」卿は滿面に笑を湛へつゝ、掌を合して、「丸橋どの、辱けない。拜ぢや〳〵。これで死でも往くところへ往生ます。」仰するをば再び看回らず、席を蹴立てゝ去らむとする時、今迄は死せしか

と見し兵庫は忽諸面を擡げて、「忠彌どの、一言告ひたい。」忠彌は猶目をも與れぬなり。「忠彌、然りとては、一語言ひたい！」卿は狼狽て其を取拒へむとし玉ふを、彼は爬退けて、「父者、先づ……兵庫直と發心しまいた！」

（回四十二）

「發心とは、如何發心した？」「發心なんてゝ、ま何様な發心して？」足を駐むる忠彌、心許なさに聲を戰はす卿、一個の疑惑は二様の語氣と態度とをもて兵庫が前後より逼れり。彼は卿の御前に先づ手を支へぬ。「兵庫身を庇護うて下さるゝ御志、父上、辱けなうござります。なれど我等發心しまいた。何卒、兵庫御目に懸らぬ前と諦念て下され。」「えい何ぢや？諦念い？其方は此の父を棄つる氣か？己は然様は待遇はぬ。待遇はぬ。何が不足ぢや。こりや不足あらば何事なりとも言へ。」御軀は顫へて、御詞も斷續なりき。兵庫は不覺の涙に嗚咽べり、「も勿體ない不孝の兒を、不足なんどゝ……只、此儘此處に在ますれば、不孝に不孝を重ねまする。」「分斛ぬよ言ふことが。此の老齢た父を棄てゝ他所どもへ去ぬといふ其れが不孝ぢや。此家に在て不孝といふ其様な道理がありますか。こりや有りますか？」腹立しげに卿は疊をさへ叩き玉へり。兵庫は涙を徐くに收めぬ。「其の道理と申まする、其れは士の義理、父者には御不案内……」「不案内ではありませぬ。熟う合點ぢや。士でも公卿でも父子は父子、父たる者に孝行する其れは人間たるものゝ務、其の人間の務の上に士と公家の差別がありますか？　父在す時は遠く遊ばず、遊ぶ必ず方あり。孝行の第一は其父の心を養ふを以て第一とす、曾子曹晳を食ふ必ず酒肉あり……」豈辯を好まむや、我已むを得ざる場合に迫れる卿の心事を察すれば、げに哀れならざるには有らぬなり、然れども這處は彼の發心てふ兵庫に氣勢を附ずしては終に江戸なる手都合に大方ならぬ齟齬を爲出すべき歟、這般の大事を行はむ者、詎ぞ拘々たる婦人の仁を事とせむ、時としては亦其心に忍ぶ處無からざる可からずと、忠彌は其胸を摩りぬ。「殿の仰せらるゝ、げに然る事ぢやが、又其の子息が、人間の人間たる其の人間の義理を立てうといふを、強て御抑止なさるゝも異な様ぢや。原來が兵庫心底、其の發心とは甚麼様の事？我黨への陣謝に坊主にもなる歟、或は其痛い腹強ても切る歟、いづれもが其邊ぢやろ。……坊主かな？」彼は故意なる冷かなる微笑を含めて、直地と敵手の面を覗ぬ。「情無い。士の義理といふた口牀、耳には入らぬ歟。」「其の義理にも種様ある。坊主になるも一個の義理。腹を切るも一個の義理。」「えい、江戸へ往ぬ！」一裂裟衣着て本願寺詣りにか。」「隨意にも言へ。正雪が許へ參るは！」「何を爲に？」「切腹に！」卿は呵呀と御心も空なる容態もて彼が袂に縋り玉ふ、戰慄く拳に、御自身のか、兵庫のか、熱き涙は降り灑げり。彼は一方には御手を握りつゝ、一方には忠彌を脱つ、「忠彌、迷の夢の醒めた兵庫は又舊の牧野兵庫！　人の面した畜生では最う無いぞ。從前の雜言、我が腹切た其亡屍の上に陳謝さして見せう。記憶てゐをれ！」「ほう、天晴れぢや。而て如何腹を屠る？」「伊豆殿へ出て紀州が謀叛の段々を言ひ立てゝ見事白洲で腹を切る！　松坂を出た際の意地、こゝにて立つる！　父上、箇様ぢや。忠彌に言はれた畜生……畜生との遺恨、晴さいて下され。我が畜生なりや御身までも畜生ぢや。不孝を重ぬるとは此處、閊分て下され。」彼が聲音は彌震戰て、脣の色まで變れる。忠彌は其を想察りてか再びは言はず。卿はと見れば、哀れや既や死入り玉へるごとし。

（回四十三）

來るを待つ如く、去るを追ふ如ク、嚢中の鼠

を捜るが如く、倉裏の盗を瞰るが如く、彼の島原なる奥州屋の表裏に赤總の十手を閃し有てる捕吏十餘人、其邊徘徊して内外の様子に目を配るが中に、頭と見ゆる武士一人あり、是れ吉見喜太郎なり。彼は今、其の裏庭の籬際にあり、傍邊を覗ひて咳嗽一つすれば、内より竊足に出で來る者、思ひきや彼の宮なりき。見るより喜太郎は、「如何ぢや彼奴は？」「今洒事でござります、が、此程も御前で仰せの、彼人は生擒るまでも無い、死首にしても可いのぢやな？」「勿論ぢや。江戸表は上首尾で落着も近い、其處へ彼奴さへ出ぬければ其れで可いのぢや。今更ら生命を要る、其れにも及ばぬ……處かは倒つて面倒が。其氣で遣れ。」此の問答にて其大概は知らるべきか、猶熟く聞けば、宮が彼夜より島原へ還らざりしは全く和歌山へ奔れるなり。彼女は夜をもて晨に繼て彼地へ着き、先着の喜太郎もて、兵庫が所在を探知めたること、其餘寺町の旅宿のこと、熊谷松田らが刃傷の始終をも聞え上げたるに、殿の御欣喜大方ならで早速に御病間に召されぬ。此處には御看護として籠中の御方も在しけり。宮、謹みて見まねらすれば、御容體は吉見が置手紙にて見けむやうにも非ずして、御藥湯、御菓子、諸寺諸山の御祈禱の札、御枕邊には所狹く排列べられたれども、御本人の御色澤はいと光澤々々と、籠中と併せて在たまふ以所か、去る頃よりも翻りて壯々と見え玉へり。これも所由ある事なるべしと宮は强ても問ひ奉つらず、今朝に變れる自己が振袖形好笑う突居るを、近うと召させて、いつに變らぬ其方が氣働きの神妙さ、お主ならでは誰か忽く遽かにかゝる功績を奏はし得む、但し喜太郎より聞くところにては、彼奴め目下の隱棲とするは公卿の邸とか、又た其の寺町の旅宿といふにも十餘人の荒者ありといふ、旅宿の荒者は憂ふるにも足らぬが、只其の公卿の家といふが悒鬱せけれ、其方は未だ知るまじきが、現今は然る所以ありて武家に公卿は禁物なり（當今の英明に渡らせらるゝ抔の御意味か）現にあの所司代すらも成るべく手を退きて公家には抵觸らぬ態ぞといふ、されば其方、此事好う爲課せむには十分に撈針を須れて、彼が他出の折を見て漏らさずに搦めて捕れ、萬一手に餘らば討棄にせむも苦しうは無し、其には心利たる組子ら三十人を撰びて其の補翼とせむ、大儀なりき、先づ退がれとて喜太郎が家に歸され、御料理、御菓子、卷絹なんど數多を賜はせしが、其より半月は猶悠くて在りき。彼女は心苛立つ儘に喜太郎を疾く〳〵と促せば、老人は聲を潛めて、其處らに御脫落ある殿と思ふか、組子原はやや疾くに發途して彼奴が蹤には鐵鎖の附きたり、只其の我等の發足の後るゝは、生擒にすべき歟、死首にすべき歟、彼が身につきて自ら思食の有ればなりといふ。扨は什麼にと彼女は問へば。愚なり、江戸の御模樣悪しからば、是非とも彼を生捕にして其の目安の誣告たる由を白はしむる要有るに非ずや、若し倖ひに帶刀殿の首尾好くば、たゞ彼を討て後日の讒口を防がむも可し、又た生擒て衆人の見懲しとせむも可なり、此等の御進退ある故といふ。其の御計畫の深く且つ遠きに、宮は舌を巻きたりき。かくて和歌山に在ること一月、或る日帶刀の進らせたる江戸よりの早打來れるが、其の書狀には、殿の首無難、の五文字を、大きなる紙に小兒の書きたらむ様の筆して認れりき。なれども此の五文字は餘の千萬言にも彌増て尊きなり、御傍は早く城中に傳へぬ、城中はまた城外に播らせぬ。殿の御身は御無難、紀伊國の御家は御安泰、千秋萬歲、めでたやと謳ふ聲は其日より和歌山の市中に充塞たり。かくてぞ喜太郎は宮と與に發途るなり、御暇の折の賚物も數々あり て、彼等は和歌山の城を立ちぬ。其が京都へ着

せる日は、即ち兵庫が江戸へ立たむとする其日なりき。噫、此の一日！　若し此の一日を錯たば、彼幸は竟に千歳の遺恨を呑んで、更に百年の悲愁を免かれたらむ歟？　知らず、什麼。宮は闇夜の手捺りに聲を竊みつゝ、到底も今夜ぢやが、子刻に此處を發つて大阪から船にせうといふらしい。但し萬々は妾が胸にぢや。手暴な事構へてなさるなや。」彼女は言ひつゝ尋思せり。時に油雲のぽつりと雨點を漏らすあり。明朝の出船ははや延引と彼等は含笑ぬ。

（百四十四）

彼の宮が聞き得し如く、兵庫は今夜子刻に京を發途て、大阪に越え、川口に繋泊せたる正雪が手船に乘りて江戸へ行むとなり。今は既や戌刻なる、此の僅の間際を竊みて、彼は悲しくも永き訣別を信夫が許に告げむとて來つる歟。迷の夢の既に醒めたりと言へる彼は、口と心と表裏なる、猶其の太夫が白無垢の肌着に魂を袂まれて、小唄に唄ふ出口の柳に後髪を牽るゝ與、女々しや偬程の謂甲斐なき心にて、と他は嗤笑むも、請ふ且く聽け、彼と信夫とが恩情たる、相呢るゝ日は淺きも纏綿として尋常のものならずなむ有ることを。彼は起初は此女子の艶色をのみ愛でゝ、又無き美人と想ひたるが、逢うての後に捉て熱く其れが擧止を觀れば、起くるも伏すも只其日の水の心といふ河竹の墓なき身上にも似ず、又た毅然として折れず撓まざる心に賴憑しき節のあり。此の一節を物に、事に、看得たる時ぞ嬲て彼が韓竹の心の空虚となれる日なるべき、其れよりは只寢ても寤ても、現にも夢にも彼人のみの上なりける。

想へば想はるゝとは誰が言ひ初めむ、信夫も亦た其最初は、只我が情夫の熊谷の花木に酷う肖し人の來しといふに、繇ふなんどの心はあらねど唯其の面影の如何ばかりか肖たると言ふを見まく欲しさの念無きにしもあらざりき、されど此は熊谷が根引を領承て歸りし夜なり、其儘に思ひ忘られて只彼人の來るや何時と待詫びたりしに、其人は什麼かしけむ、花の木の花は何處の仇風にや吹れて散りぬる、其夜をはじめて、翌る日も、又其の翌る日も待つに甲斐なきそよとの香をも輸り來らず、悲しうもあり、戀しうもあり、腹立しうもあり、廓の評判、主人の不機嫌、傍輩の譏口聞けば聞腹の禿らが來て告ねば、母親は其度に怒りつ泣きつす。泣たきは人より我なり、抑や根引の棄放下しは後朝の寢こゝろいしを喫ひしにも勝りて世に存在雖ねまじきまで口惜しう思ふ事なるを、其等に搗てたる内外の沙汰は、あはれ信夫がしのぶに餘る涙の種にて、それよりは氣病てふ、長引かば松の太夫も終の薪となりぬべき病痾となれり。見つ聞つせる母親の心配はまた大方ならざりき。今は空花の恨めしさも言うてをられぬ花木どの、どうでも元木の杪に復して枯木となるべき此方の枝に今一度の花を咲せて貰はではと、娘が竊に聞き置けるを便りに、二條寺町の旅宿といへるへ彼媼は由向けるが、此處は今は彼の恐ろしき鬼共の棲處なり、花木ぢやの梅木ぢやの言ふ其樣な者は此方には在らぬ、我々は杉木を友達の天狗共ぢや、早う去なんと腕足引抜て生肝も取て喫ふぺいぞと嚇されて、彼媼は命辛々に逃歸れるが、扨てこれぢやはア花木どんが花も賞も、賴みの綱も切れ果てたアよ、責ては彼女が彼の樣に戀しがる彼人の名代べえも見附てえが、それには日外宮どのが伴て見えて无意義忽りもて歸つた彼の人だ、彼なら似合の恰好が、それもあの兒があれ限り寄附てくれねえでから爲方も無い、こんげな時にや神佛さの力より外には、と彼媼は其れより一日二日は洛中有る程の神佛に參詣して祈念を凝らせう、其後二日か三日しての夜なりけり、佛神の擁護もやまたざるか、兵庫が護摩壇の烟の如く、くる〳〵と渦

巻て、柿暖簾の内へ巻込れしは。

何さま見れば見る程に、花木の其花と見し面影とは一つ花臺の排べる花瓣とも見ゆるなるが、白馬の白も白石の白も其白たるに於て異なる處無かるべしとは古人の窮辭にて、牡丹の紅は紅木瓜の紅と自ら其紅を同じくせず、大小のため附、衣紋の竝、坐作進退總て是れ鷹揚にして品位あり、なれども猶彼女は、其人の眉目の肖たるをのみ不思議の事として、只我が戀人の、活て動く寫畫とも見て眺めたるに、一回會ひ、二回會ひ、三回四回と其の會ふことの重なる儘に、彼が心入の淺からぬも知られつ、又其の高尚れる品柄の、愈氣高きに思ひも沁みつ、彼の想へば想はれ、想はるれば又想ひて、今は中々彼方より此方の棄て難き想あり。なれど其の棄て難き想をして隨意ならしめざるもの一つありき。花木との起請なり。其の起請の主、花木の花は、四條の河原の砂に埋れて既に全然黄泉の根に還れるものと知れぬ。彼女は一時は其後を追てまでもと突詰めたる悲歎を辛々に斡念して、此よりは今なる人を其の植繼の花木とせむと想ひぬ。其想は又外れたり、彼は今宵京を立て江戸に赴き、久しく歸り來ざるべしと語げぬ。然らばこれが一生の御別離か、と驚きて問ば。とも有るまじきが先づは、と應ふる血色も平ならず。醉を役ひて頻りに其の苦惱を忘れむとする、其面影も哀れなり。時に、道やアと呼ぶ聲は障子の外にあり、母に從順なる彼女はかゝる際にも辭み得ずして曇時と暇を乞ひつゝ出でぬ。

（百四十五）

母屋とは小庭一つを隔てたる茶室様なる小座敷の中に、太夫は其の疊る紙を面にあてゝさめざめと泣けば、母の老婆も鼻酸らせたる聲を潛めて、詫るが如くに語れり。「其處だでよう、汝、熟う胸さ落着て分別のさつせえよ。汝にも可愛え客衆たんで、私にも大事の婿さまのやうにも想はれるけえ、其様だ目に遇はしたく無えは山々だけんど、身から出た錆ちふもんなら爲方が無え。の、道よう、此處を救う一つ考へて、嘉助どんの手柄に成らアやう、汝も其の御褒美さ紀州様から頂戴アやう肝煎てよう。」言はでも知れたる丘庫捕拿の手引といふを、信夫に爲よと迫れるなり、其の迫れる姿が肚とて、丘庫憎しといふにもあらず、只悋くもせば、自然紀伊の殿様御落懸り(?)とも言ふ如き條由なんどもて、苦海の潮に足濕ふことの叶るべきやなど、お婆相應なる目算を建てたる、其れも是れも只我お道の可愛しと思ふ遣る瀬なき心の一つなりける。「折角のお頼みぢやけれど、妾には其様な事は出來ませぬ。」彼女は單悋く應へぬ、其聲も彼の疊う紙を纔に漏れて出づるなれば、耳遠く、然も稍周章たる老婆には善く聽取れざる程なりき、「如何爲たら出來ると斯ういぶけえ？　何も角もねえずらやア、彼の人の腰にべえ爲てる大小隱いて、まつと御酒をいかく喫して、恰好今雨も降て來たけえ、今夜の發足は見合せなさろと、好工合にも言てもよう。」「いゝえな、妾には其様な事出來ませぬ……と悋う言ひますの。」「否だちふ奴。」老婆は口を尖らし、眼を圓くして、繪に畫ける蛸の入道の牝雌ともいふらむ面したり、歎口氣を長く引きつゝ、「ほーんね、ほんね、汝ちふものも慾べえ知らねえ遲鈍兒だア。汝の其の艶顏さに惚れて海鼠のやうべえ化ちよる彼の人を、手玉に拋ツて天井の逆這さしてからが否だちふめえのを、其の大小此方へおこしやろ、お酒を浴びめさろ、今夜ゆツくり眠ツてお行きやろといふに、甚麼がへえ趣意さ問くべえ。其の極些の芝居さ演てば、ありや紀伊の殿様から御褒美は出る、よしか其の褌も着ず に濟むか、否だ〳〵ちふツて毎もへえ泣面べえして出る道中も不爲でも好か、極

微べえ其の心疚を辛防すれば門外には七福神が數珠玉のやうにならツて汝の部屋へ來ようとツて待てゐめさる。其れに斯う己が肝煎るのも他でねえ、己ちくとべえ不埒して、家も田地も捨てた時、未だ其の足らず前ちふ催促にせがまれて、汝を賣て……彼媼は突ちに獻欷嗚咽して口言ふ能はず、其の腰にせる手巾を把りて、目と鼻と一度に拭ひ、更に齒も無き齦堤に嚙み絞めつ、「……已、汝に申し譯ねえ慚しいのと、明暮の身を案じるので、涙の干くひまもねえ。汝れやれ十兩の金、其金返辨して汝の身を引取てと齒ぎしみしても無えものは無え、其れでも會ひたさが溜らねえで此方へ來ただが、……汝、え、汝せえ一つうむといへば已、其の來ただけの效能は見附ただよ。汝、未だ知るめえがあの嘉助どんさア今は苛ち立身してなう、大層な御士さアに成ただよう。汝、こゝで一つうむと氣張て、老爺どんの手柄にさなるやうに爲て呉れせえすりや、已屹度汝が身隨になるやうに强求り出すよう。こりや汝が身上ばかりでもあらアずに、已も死身だよう。汝を此儘斯う爲置いちやア已、死んでも死切れねえでね。」咯はすに利を以てするの嬢は縦しこれ有らむも、彼媼が恩愛の至情は、其の纊を挾むが如き煦かなる言語の中に呈はれたり。況んや孝順彼女が如きをや、兵庫とが山河の誓も此の無上の神力ある一樋の爲には破碎せられ了れる歟、と見れば、思ひきや、「母さん、も其お語は罷にして。」小棱かい取り、彼女は情無くも起むとせり。

（百四十六）

起むとするは、彼處なる人に內通も爲むと歟と老婆は愕きたり。「汝これ何處へ往ぐ。成んねえぞ。此處さ起つこと已不承知だ。」今の憐れとも憫れむべき信夫が身は、彼の地獄變相の繪てふものにある、針の山に追登げられたる亡者が慘狀にも似たりけり。前後左右は阿房羅刹の鬼共にて取圍まれしに、上よりは業障の烏來りて眼を抉らむとし、其れを避むとして逃る足下には瞋恚の犬ありて、肉を嚙む。既に我が情夫の捕拿れむといふにさへ物狂ほしう虛空ともなるべき我心に、亦た其の捕方として向うたるは我父といふ耳をさへ聞されぬ、此事にて既や進退の作略とてもあらざるべきを、剩さへ我に其事の幇助せよ、然して彼の殿より褒美を得よ、如是して身隨にもなれといふ、我が親ながら餘りの胴慾に憎らしく、恨めしく、其に附ても彼の緣の敢なく、墓なき悲しさに席にも得堪ずして躱むとすれば、看る〳〵此座の可怖しき眼は、彼の烏にや犬にや鬼にや、鏡の如き光りを放ちて、こゝ一寸もと疾視へらる。なれど、其の睨めらるゝも、我を憎しとて意地惡うせらるゝにあらぬ事は我も熟う知れり。さらば恨めしの、腹立しのと言ふべき理由にはあらざるも、然りとては〳〵些は此方の氣になつて見られても好からむを、田舍人の無面目か、老人の我慾か、已が言ひたき事ばかり、怨う言うては惡いか知らねど父樣といふ嘉助どのこそ紀州家に御恩はあれ、なんの妾共が、其の由緣も無い人の爲に此方が大事の情夫を棄てる、否やの〳〵。況て此方のが盜賊放火のさもしい所爲でもされたとあらうにぢや、其樣な淺ましい料見持たれぬは其れは妾が眼で鑑抜いてある。倘か其の、遁れぬ意地で人討て立退れたと歟、主に暇與れて退身られたと歟、然ういふ羽目ならば幇助かは、妾は此方のが肩を持たう。言ひたい儘の母さんでも、此理由を言はゞ條理も解得らう。ああ一寸と此事をあの座敷に密告したや……其れにも此の母さんを味方に附いでは。と彼女は微妙くも其臍を決めぬ。隨卽、一時の苦艱の遣る方なさに、彼女は彼の烏やらむ犬やらむを役ひて、飜りて周圍なる羅刹に當らむとせるなりき。「母さん、御前其樣に肩袒いで言はしやん

す、其の、此方のが罪科といふはえ？」「罪科だ？　已あんで其様こと得う知るべい。只嘉助どん、彼の客さ悪黨だ、捉めえなきや公乃殿様さへ濟ねえツて……」彼女は故意に沈着たる笑顔して、「御前も、ま好い程に狼狽てゝござんせ、假令それが父様の言はしやる事ぢやてゝ人一人の生命に關る……其様な事迂可としてなるものかいの。」冷笑はれて老婆は遽に周章へしが、頓にして大悟せる如くに手を拍てり、「うーむ然うだ。已脈落たよう。ほゝいんね人一人の生命に管はる……ほんねこりや然様だよう。負んだ子に淺瀬だ。待ろ、已一番去て聞て來うずらに。」彼媼は辻角力でも角るらむ如くに手唾して、梶引端折て出でむとす。「待たしやんせ、それにも及ばぬ。妾は何様な事があらうと彼の此方のを咎人に爲るのは否ぢや。倘し強てとありや、生存てはゐぬ。」「呀ア！」「お前が其様に騒ぎなんすも娘の妾が可愛いのであろ。其の可愛い娘が其爲に死ますりや、枝を撓して樹を枯らす、同じ道理ぢや。それとも御前は此の妾が可愛う無いかえ？」彼媼は閉くさへをも厭ふが如く、「あゝにはア汝の可愛う無いこと有んべいかい。可愛いけりやこそ此様に肝煎るだよ。」「そんなりや、父様と妾とはえ？」「嘉助どんけえ？　逢て見りやだが……あゝにがへえ、他に嬰兒を産して置きながら廿年の其餘べえ不沙汰にして、茄子の礫の見舞も與れねえ人だもの！　已が爲に現在の苦患の見てえる汝に比較べて……甚麼あンべいかい！」「妾の方が可愛いとえ？　え、え？」彼女の口は笑みたるも、眼には必死の異色ありき。「だアよ。汝を掴いちやア御飼主さまも將軍様も無え。汝が死にや已だツてもおツ死ぬよう！」「嬉しや母さん其言が眞なりや、妾が味方して下さんせ。」「味方ちふツて？」「あの、此方のを當處から逃す、お前其の帮助して下さんせ。」「えゝッ！」「何を不埒な。兩人とも動くな！」荒涼じき聲は紙襖を引明くる音と同一に響きて、其姿を現す者あり。是れ吉見なり。

（五四十七）

想ひも寄らぬ喜太郎に出られて、老婆ははやべツたりと腰うち拔しぬ。信夫も覺悟の胸を居ゑたり。何さま、視れば、曩日の廻國の笈商姿とは打て變へたる、白茶緞子の踏込の袴に、黒き毛織の背割羽織、見るから其の打裝の四邊を拂へるに、猶且つ水磨の十手を逆まにして凝視ゑたる面色の凄じさ。物に驚かぬを素養の一として、父親ともあれ男子を見ること奴隷の如くせよとある太夫が身にも、一つには其餘りなる變化の激甚と、二つには獰猛ごと虎の如くなる彼が勢威とに慌惑て、覺えず其面を伏し目にせり。「太夫もぢやが、其よりも憎くいは此婆め。事終るまで儘様にする。動くな。」弓手に繰出だす腰の早繩口に素扱て、馬手には其者が痩腕を捩ぐる。これに恐怖て呵呀と叫ぶ彼媼が口へ、叫喚くか汝、と猿轡さへ厭むとするに、「待しやんせ、父さん、其人はお前には女房ぢやらうが妾にも母さんぢや。無慈悲の折檻、妾が不承知ぢや。」堪らで隔つるを、後目に懸けて、「不承知ぢや？　然言はゞ汝にも此繩與れうぞ。」「ほゝ父さん、お前見事此の妾を縛らしやるかえ？　此の妾は昔の有度濱の道では無うて、今は京都島原の奥州屋の太夫の信夫ぢや。事と術では金出して買うてござる親方さんの命令をも聞いで可い身ぢや。」烈々たる彼女が氣焔は、蓋し此繩に遇うて發せるならむ、彼女や今にして身の自由を失はゞ、彼人に就て施さむとするの方便、竟に其所由有るまじければなり。雖然其の防禦は無效なりき。「馬鹿者め！　太夫であらうと局であらうと、犬が猫でも父持たぬもの世間に有る賊。其父が不孝の兒を折檻する、繩與れうといふが何の非分か。事は急く。先づ此處に斯くして居をれ。」更に其隻

手を伸して我女の襟を無手と引寄せ、母親の婆と一つにして縛めむとする、彼女は今絶體絶命なりき。「父さま、無慈悲…」「無慈悲で無い、これが慈悲ぢやは！　其場へひろめいて怪我などさしては……こ――りや尋常……」「尋常てゝ、趣意も言いで。」「えい言いでか、那程告うたに。」「聞きませぬ。其の罪科の何事ぢやといふを。」「や、罪科？　其れ聞て何にする？」「と罪科……其罪科の次第によつては私もお前の加勢しませう。」「え、加勢？」「加勢しまする、罪科の次第で……！」「ふう、相違は無い歟？」「誓文ぢや。」「いや、遊女の空誓文、當にはならぬ。何ぞと言うて時刻を延いて其中に奴め遁さうでがな？　やはり綁縛いて邪魔させぬが……」「無道理！　父さん、誰が其の空誓文する口惜しい遊女には爲らせたぢや。趣意も言いで其様な事なされると聲立てますぞ。」彼女が柳眉は瞋恚の炎焔に煽られて逆立てりき。「聲なと立てば！　立ても見い、一撃ぢやぞ！」此方は飜りて其低聲に、四下を憚る力を籠めぬ。「覺悟ぢや、手撃。すツぽりと討て下され。」喜太郎も實に案外なりき、日頃より柔順の性質、召使ふ女にも好う目を懸て、逢ふ客にも情あり、我等申す程のこと毎も善う聽て呉れまする、眞に此の奥州屋の金函、貴老方にも好いお女を持たれて、と先頃も亭主の言へる、譽らるゝのやらむ、辱めらるゝのやらむ自身判斷も附き難きに、只腋下の冷汗のみを拭へるが、兎に角にかく無慈悲の親をも親として數日の少間ながら孝行の成る程を盡しくれたる優しき兒、それが縦ひ我客なりとも我が依嘱とあらむには、否も應もあるまじとは思ひの外なる、手強しとも〳〵、命一つを我乃の前に投出しての覺悟といふに、且つ驚き且つ呆れたり。なれども彼が例の機轉は、其の憤怒を立地に哄笑に飜して、「はゝゝゝゝ心底見えた。其の一命惜まぬ程の覺悟で無うては難まれぬ。善し、話さう。」彼は悠然たる態度を假粧ひて、座に就く時、彼方の座敷、すなはち我が部屋の方にても突如喧嘩しき聲は聞えぬ。聽けば上庫の何事をか爲るなりけり。信夫はこゝ在るにも在られず、只心中に念ぜらるゝは彼の觀音の力なりき。

（百四十八）

哀れ單一個、太夫が部屋に取遣されて爲す事もならぬ兵庫は、前途を想ひつゝ、有合ふ銚子を自ら酌みつゝ、尋思の首と盃とを幾回か傾け盡して待ちたれども、其人は歸り來らで不意き雨は却りて音づれぬ。個は何慶、かくては明日の船出といふ、心許なさよ、抑も此雨も、日來にてあらましかば太夫が膝を枕に聽かむこと、いかに物の薫瑟に、樂しかるべきを、今は恁うと決念めたる身の中々に心焦れなる。然るにても彼人、何處へ往きし歟、遲くとも亥刻までには家に歸らでならぬ身と知らでか、毎に似ぬ待遇の然で無さよ。など其れぞとも無く耳聳立つれば、怪しや此室とは小庭一つの前面なる小座敷の内に平ならぬ物の音、忍音ながらに泣く聲と爭論ふ聲も聞えて、然も其聲の中には此室なりし人のも間雜る様なり。彼は其を自家が身上に關る大事とは流石に未だ知らで在りけり。彼女の母が呼べりし様子、内の論判の斯く長時間、加之ならで泣きもし怒る、萬一は彼の曩に聞きたる田舍人の根引などいふ其の談合の再び發れる歟、昨日迄の我ならば、土臭き奴の儕上過ぎたる、太夫引くより汝等には大根なと引けとも叱斥て嚇さむも、倩々思へば其の落緒た、今の我には倒々に心易き歟、若し我先づ其の論判の所由を聞きて、倘し然もあらば理解をもし、彼女が生涯を安穩の地に置きて與らせむには、と恁る際にも親切は隈無かりけり、彼は鼠路栗と起ちて鼠路栗と明くる、間の紙襖の出遇頭に「兵庫さま。」彼は其の思ひ懸なさに、えツと一

歩、後へと踏みしが、彼眼睛を疾く働かして、「宮ぢやッた奴？」「あい、妾で。でいもま御前さま好う御無事で……」「無事では無いは。散々の事になツて喃。」「如何にも散々な。それで此屋が其のお隠棲所？」「いや此方は其の隠匿るの、微行のと。あの熊谷めよ。」「え、そんなりや御話は熊谷どのゝ……？」「甚麼を言ふ、お主は又誰人のを爲る。」「誰人のとて？　御存知なしかえ？」彼女の我を驚く如きに、我も亦た彼女の喫驚に驚けり。「知らぬは何事も。何事か聞出たか？」「では未だ江戸からは沙汰無しぢやえ？」「沙汰は有た、由井どの名代に丸橋が來た。其は扨ておき主聞いたは何事ぢや？　予が身上か？」「身上とは愚か、お前は今御主への謀叛人として公儀からも、紀州からも、草を分ての穿議の人ぢや。」其は固よりの覺悟なり、なれど只其の大公儀より謀叛の名をもて嚴重の穿議とある、其のみ微しく耳觸なり。「お主は其事を何處にて聞いた？」「和歌山で。」「えッ扨は彼時から紀州へ往たか？」「往て、今復歸たの。」兵庫が膝は覺えずして前むこと一尺なりき。「聞せい。仔細疾う聞せい。先づ其方、何しに彼處へ往た奴？」「師匠樣に逢ひたうて。」「むゝ、其りや其れで可し。而て彼處の江戸の沙汰は？」「其事ぢや、今告うたのは。」「江戸では何と？　帶刀の早打でも來た奴？」「來た段か、來てから和歌山は祭祀のやうぢや。お前の出された目安とやらが江戸殿中で悉皆敗潰れて、帶刀どの大手柄。其れでお前は自己が主を謀叛人と讒言する反逆人、紀州はもとより江戸公儀でも棄て置れない惡人ぢやてゝ草を分ての御穿議ぢや。今頃はもう海道筋には人相書の出たも知れぬ。それで妾がお前の顏見て魂消た其上に、……もし兵庫さま。」彼女は左右を回顧つゝ、再び告ぐる處有らむとしつれども、此時彼は憤るが如く、慙くが如く、恨むが如く、惜むが如く、長歎、低息、呑噬、呻吟して、我の吾たるをも知らで在る體なりき。

彼は天をも怨みたるべし、亦人をも尤めたるべし、猶其の事の齟齬せるを恚りては、我身の世に存る甲斐無さを歎き、穿議の緊急きを想像りては、前途の縲紲の辱めを惧れて、江戸に切後れし此腹を、此京にて屠らむ奴とも我から思へり。雖然其の最後の決着の臍を齧ぜるは猶少時の後にありき、曰く悋はぬ迄も殿を刺む！

（百四十九）

「無念ぢや、遲れたか？」と彼は徐くに呻き出だしぬ。宮は傍より、「もし、未だ遲れはしませぬぞえ、恁ういふ間なりや……」「いゝや遲れた。あ、無念ぢや。今半月速からうなら！」「半月の速いより半時の遲れが今の御身の大難ぢや。遲れぬ内に疾う爲され。」奇異なる乙女の、此の奇異なる語は、顰ひたる如き兵庫の耳にも纔に通れり。彼は不圖眼を注射けて、「遲れぬとは？　宮。」「腹切らしやると言ふであろ？　其れならば……」「むゝ。いや。」と彼が頭は、苦笑の戴て、横さまに掉られぬ、「奴原の手に遇はぬ先に、切腹とも思うたが喃、思案し禁た。兵庫命は滅多に棄てぬ。」恁くては、と宮は血相變て、其膝を稍詰寄せたりき。此時の彼女が衷情に曰く、紀伊國殿の御武威めでたく、此の逆賊は既に檻内の獸として取籠められぬ。然りともあれ、彼も亦た牧野兵庫、些は人に知られし武士、これを尋常の無宿非人の盜竊欺騙したるかのやうに强制に、情無う遇はむも可憐い奴。況て其を獅子心中の蟲とも御覽じて、罪をも人をも憎惡ませ玉ふべき彼殿さへ、成るべく事を穩便にして彼が面皮ある如くに計らへとも仰するをや、生來未だ微の私寃とては無うして、翻りて服るべき愚分はある安居村の三四郎が妹の宮が、其を故意に、沒義道にせむ要の甚麼かあるべき。加之にも、此所へ來て、あの姿さまよ

り聞て驚き入りたる太夫との交際、将來は如何やら夫妻ともあるべき約束、其人の面上にめでても此人の亡屍に死花といふ葬なき花も責ては咲せて遣りたやとは思ふなるに、然りとては心にも似ぬ、思案は替ぬ、漫りには此腹切り難しなど、今言ふことの憂情やな。とありて此の虎口、殿の爲にも、吉見の爲にも、師の爲にも、一寸とて緩弛むべからず。所詮は只、彼が身の利害、事と正邪を明白に說破て、否應なき詰腹か、然らずば是非なし、引寄せて刺殺す歟。併ながら是も亦た我が報恩の寸志、俗に謂ふ慈悲の殺生か。「棄てぬといふ其命を、如何なされます？」「はゝ、如何もせぬ。暫時は大事に保つ。」「保たれた以上に？」「所望を貫徹す。」「とはえ？」彼は四邊を睨回して、「汝は腹心の女、匿まず告うが。……此の鬱憤、如何あつても已み難い、此儘で已まば、兵庫また武士で無い。」と、聲に誓うた口狀、近く忠彌に矢へた約束、旁以て。……兵庫單一個、此回こそ實に御座所へ忍び入て。喃！」流石の宮も、其決心の剛健なるに呆れたり、彼女は其口いと忙しく、「大それた！」と、弓手に敵を拂へ、馬手に其の心元を刺貫ぬける摸形談を猶依然に、「甚へ去なしやる。」「何處へでも可え、乃公が足の向く方へ行く。」宮が眉には忽地黯然たる悲愁の色を露したりき。「兵庫どの先刻から告う〳〵と言ふ。敵も敵、必死の敵！　縱し其れは姑く措くも、お主が師正雪も同じく天下の主といふ、其人に弓引うで無き歟。」「いや違ふ。師匠樣は浪人、誰人からも麥一粒貰うては居やしやらぬ。江戸ぢやらうが紀州ぢやらうが、尾張でも水戸でも我心に合うたは味方、其胸の協はぬは敵、其を擊うと斃さうと只其の思はしやる隨のこと。お前は違ふ、今日でこそあれ昨日までは紀伊國六千石の御家老衆、諸事は扱て置き二つ無い其の一命すら殿へ上さしやれた人では無い歟。其れが其の假初の恨みとか根に持て、重々の惡事、殿を苦しめ、人を泣かせ、剩さへ其の御恩の君を果には手して弑さうとは、計ましやる。其れでも武士？　武士の意地とは其樣なもの？　さ、兵庫どの、武士は舊い御恩といふを遺失まうても好い者歟。如何でござります。」

（四五十）

這の小魔洒落れたる小女郎、甚麼をか云ふと如くに、兵庫は其可怖しき眼を宮に注ぎつゝ、緩みたる帶を搾り直して、「宮、太夫を喚べ。」「遇うて如何さしやる？」「別離を告ぐる。」「何處へ去なしやる。」「何處でも可え、乃公が足の向く方へ行く。」宮が眉には忽地黯然たる悲愁の色を露したりき。「兵庫どの先刻から告う〳〵と言ふ。敵も敵、必死の敵！　縱し其れは姑く措くも、お主が師正雪も同じく天下の主といふ、其人に弓引うで無き歟。」「いや違ふ。師匠樣は浪人、誰人からも麥一粒貰うては居やしやらぬ。江戸ぢやらうが紀州ぢやらうが、尾張でも水戸でも我心に合うたは味方、其胸の協はぬは敵、其を擊うと斃さうと只其の思はしやる隨のこと。お前は違ふ、今日でこそあれ昨日までは紀伊國六千石の御家老衆、諸事は扱て置き二つ無い其の一命すら殿へ上さしやれた人では無い歟。其れが其の假初の恨みとか根に持て、重々の惡事、殿を苦しめ、人を泣かせ、剩さへ其の御恩の君を果には手して弑さうとは、計ましやる。其れでも武士？　武士の意地とは其樣なもの？　さ、兵庫どの、武士は舊い御恩といふを遺失まうても好い者歟。如何でござります。」

（四五十）

這の小魔洒落れたる小女郎、甚麼をか云ふと如くに、兵庫は其可怖しき眼を宮に注ぎつゝ、緩みたる帶を搾り直して、「宮、太夫を喚べ。」「遇うて如何さしやる？」「別離を告ぐる。」「何處へ去なしやる。」「何處でも可え、乃公が足の向く方へ行く。」宮が眉には忽地黯然たる悲愁の色を露したりき。「兵庫どの先刻から告う〳〵と言ふ。敵も敵、必死の敵！　縱し其れは姑く措くも、お主が師正雪も同じく天下の主といふ、其人に弓引うで無き歟。」「いや違ふ。師匠樣は浪人、誰人からも麥一粒貰うては居やしやらぬ。江戸ぢやらうが紀州ぢやらうが、尾張でも水戸でも我心に合うたは味方、其胸の協はぬは敵、其を擊うと斃さうと只其の思はしやる隨のこと。お前は違ふ、今日でこそあれ昨日までは紀伊國六千石の御家老衆、諸事は扱て置き二つ無い其の一命すら殿へ上さしやれた人では無い歟。其れが其の假初の恨みとか根に持て、重々の惡事、殿を苦しめ、人を泣かせ、剩さへ其の御恩の君を果には手して弑さうとは、計ましやる。其れでも武士？　武士の意地とは其樣なもの？　さ、兵庫どの、武士は舊い御恩といふを遺失まうても好い者歟。如何でござります。」

せぬ、斷念らしやれ。」當道の大善智識が一偈にも劣るまじき此一句も、猶其の口喘ぎ、息急みて、其心神の臍下に在らぬ彼が耳底には熟う入らざりき。「其れは協らぬ。如何にも其の紀州の人、其を一太刀恨まうまでは兵庫生命はいつかな棄てぬ。釋迦が說法でも此事は斷念さぬ。況てお主等が……唯兵庫、此の太刀の切たか切れぬか熟う視置いて後日に由井殿が耳に入れい。なんの和歌山の——然りとては誰か向うたか？」流石に彼なりき、思ひ切ては中々、腰なりし二尺八寸するりと拔て、すはり〳〵と鬢の毛に當て、燭火に照ざして其の燒刃を檢る。陰々たる殺氣は座に充塞たれども人は醳りて其脣を緊結びて、吐く息の外は物語もなき一室の內。降りしきる宵よりの雨は此時やゝ小歇となりて、軒の點滴の間遠に落つる音、彼の小庭を隔てたる小座敷の話の文に、句讀の點を批つやうなりき。

默過少時。彼の耳は不圖此聲に惻きぬ。「あの聲は？」げにも彼にも記憶あるべし、其聲は云ひ聞かす處なり。彼の力强く韻ある聲——其の剛健なる聲音は、此の闇夜の、折柄なる寂寥を透して、手に取る如く其說話を此座に輸りぬ。

「な、聞えたか。其方が甚麼と謝ふとも彼の兵庫は右の遁されぬ罪人。それは固より竊盜の放火のと武士に有るまじき卑汚しい所行したとは無けれども、名にし負ふ反逆といふ、主の御軀をも危ぶめうとした大罪人ぢや。な但し其方が其心……彼を本夫といふ其の料見では、到底が父の己が手引して彼の者捕拿へさせようとは云ふまい。又た己も其事を囑まぬ。想へば此れも何かの宿世ぢや、其方に本夫なりや己にも堵ぢや。堵舅の情誼、それを公の私にして、己も踏込での情無い目をば見すまい。が右にいふ彼をば一足も戶外へは出させぬ。出さば早や所司代ぢや。紀州の彼を和歌山の己が向うて、其れを所司代に捕拿へさせては、吉見喜太郎一つの腹を三斷に切ても追附かぬ。な、それで其の其方は今、予が好意を彼に傳達て——切腹させい。腐つても牧野兵庫、恁う云はば欣んで腹を切りやらう。萬一それ斯う云つても引潰らば早や是非が無い、其時は武士としては遇はれぬ。其方も其の一世の瀨戶ぢやぞ、大事の本夫を武士にする興、非人にする興。死後に憂名を流さす興、然も無い興、分別は今の程ぢやぞ。此れが脫げ得るものならばぢやが、其れが協はぬ、此家の四方二町は予が手して取り圍む。其外が所司代の手、其又た外方が町奉行の手、伏見にも淀八幡にも手當は十分ぢや。切死なりや狗死ぢやが、雜人の棒づくめに捕へられて可情ら武士に繩目の辱、拷問の責苦にも遇はす、堵とも想へば己も最傷しい。其れよりも見事の切腹——然う爲せたいが喃。」これに續きて聞ゆるは、哀れなる太夫が嗚咽ぶ聲なり。

（百五十一）

兵庫は拔いたる太刀の柄を膝頭に突立てゝ、思案に昏れしが如くなり。可憫、可憐、既に檻中の獸たる彼が、目下の分別は拵て什麼？ 切破りても脫れむと思ふ其の前路は、疾や彼等に塞がれたるに、又た喜太郎が云ふ如く、一步を過ば繩目の辱なり、然も其の汚辱を受けたる以上は、想ふにさへも可悚しき彼の拷問といふ獄卒が鞭撻の下に跼蹐ざるべからずして、恁くて活み殺しみの生命を甄弄ばれたる其果は、河積にての磔刑なり。敢なや彼の三四郎が血泥、慘影を我が此後の實形にして、××の錆槍に剉はれし亡骸を無緣の墓穴に瘞めらるゝ興。縱し其の死後は甚麼とあらむも、生前の侮辱、苦痛、是は竟に忍べからず、其の恥辱を拯ひ、苦痛を庇護はむといふ彼れ喜太郎は果して我に翁堵の情誼を存する興、然るにても不思議なりける

宿世と謂はむは、我と太夫、太夫と彼とが關繋かな。敵同士の夫妻、血をもて終始すべき父子、抑も恁くまでに无情き目を我們に見する天道は、果然人の圓滿なる幸福といふを厭むの鄭。將た從前の予が行爲を罪して其の餘殃を彼等にまでも擾く鄭。但しは信夫が其母に盡せる孝心を賞めて、恁る場合もて前途の好運といふをも誘ふ鄭。想ふに我が此首一つをば、和歌山なる人は千金に換へても見たきなるべし。其の見たき心を利して、我は沽らむ哉。既に江戸の白洲にてと思へるも時後れたり、と有りて他の金銀を私し、有るまじき色に溺れて、彼の大事を餘所にしたる身の、汚目々々とは再び正雪にも會ひ難たし。兎ても角ても棄つべき身とならば、我は信夫が爲に沽らむ。彼女が其の切なる好意は、日來もぞあれ、今とても其父が手引といふを拒否める如きにても知らる。瓊瑤とやらむ、木桃とやらむ、彼女の至情に酬ゆるは我が此の首一つなり、此首一つを彼女に與へて其の恩賞を彼女に獲させむ、恁くせば彼の喜太郎が隱ながらに我を庇護へる其の厚誼にも自然相報ゆるに當るべきをや。我は信夫の爲に死なむ！「宮！」「あい。」と應ふる隙も彼女は些とも油斷せざりき、間合を計りて、「聞かしやれたかえ？」「むゝ聽いた。甚麼とか思ふ？」「お前は先づ！　何う思はしやる？」「道理の樣にも思ふ。」「樣にもぢや無い、今の話說は一々御身の爲め、堀舅とある其の親實ぢや。ほんに〳〵其の棒づくめ、階子づくめ、袖搦刺叉で捩られて、引据ゑられ、犬追物の犬見るやうに其頸に繩附けて引立られては舅ごの身としても何と見てをられうかやう。腹切れと太夫さんして勸めらるゝ、是れは至極ぢや。」「予も然は思ふ。就ては其方に賴囑がある。」「え、扨は見事腹切らしやるかえ？　其の疊怙、天晴となされたかえ？　あ、お前も……兵庫さま！」心は猛きも女子なりけり、彼女は今死すべきといふ其人の、心を善道に回向したることの嬉きか、將た其永訣の悲しきか、兄の三四郎が當時を追懷るか、其恩を恩とせずして飜りて仇もて報ゆる如きを恨めるか、其膝に綁り着きてよゝと泣けり。「泣くは未練ぢや。たゞ其のお主に賴う事は、由井殿への遺言、兵庫、是非ない羽目に陷ちたと、今一つは、予が死首を信夫へ取らす。な、其の太夫と喜太郎へ云はうには、牧野兵庫、百萬騎の大敵に圍まれたりとも汚目々々と腹切る士で無い、死人は山を築て見せう其腦は確に覺えがある。が、其れを働かさず、人賴る手して自己が腹切つること、只彼女が我等に盡す好意に愛でて其の前途を好かれかしと思ふが所以。されば大敵の兵庫を討たは信夫が功、御家の人數も損ぜずて本意遂られたは道が手柄、其邊の穿議爲とありて其の恩賞は必ず彼女に遣はされい、と斯う云うて哭れ。嗟、念へば夢幻！　いでさらば出離生死の大道に邪魔得道の入ぬうち！」斷念ては潔よき紀州育の牧野兵庫、熊野の御山の深雪と見る白き肌膚を扣袒ぎて、無手と座を占め、抜き設けたる太刀の切尖ずばと疊に突立てゝ、胸よりしていと徐に撫で下す、と看る時彼は突如嘲笑るが如き聲せり。「和歌山の殿。兵庫、死出とかにて待ち申さうぞ、やア宮、其太刀にて介錯を！」

（百五十二）

床なる香壚の埋火の灰かきおこして有合ふ留木をしづかに燻らせつゝ、衣桁の白無垢とり卸して其人の座に敷せつゝ、後にも恥かしかるまじき最期の準備心遽たゞしき中にも遺失なくして、今は涙をも揩拂ひつゝ屹然となれる宮、「心得ました。さ、稱名徐かになされて……」「應、何から何までぢや。然らば賴むぞ！」宮が背向に、南無と唱ふる其聲を聞棄てゝ哀れ兵庫は、其切尖を、其の弓手の脇腹一寸が程に突入れたり。

歯を切りてきり〳〵と引廻さむとする其の刹那——彼方の小座敷にて、「あゝ道よ、——」狼狽たる迂路々々聲せるは母の婆なり。「失敗したり、自害せでもを！」遺恨の腹を鬪つ如きは喜太郎なり。愕きたる宮は、太刀執たる手を捺へて其方を視れば、手負も疾く聞附けてや、「宮、太、太夫は？」彼女は涙の聲を搾れり、「お前と一所と見えまする——」「無念ぢや、宮！　已、已は犬死となつたかやい!!」彼は引廻さむとする其手を停め、傷口を雙手に壓へて跟々と起上らむとす。さしもの宮も此體には慌てに忙てぬ、「これ！　あゝ何の犬死、何の其れが犬死ぢやらう。今死損られては其れが却つて犬死ぢや。迷はずに……コレ迷はしやらいで！」「迷ふて無い、道をも殺し、已をも死す、恨めしいは殿と喜太郎。責て其喜太郎に一太刀恨んで。宮、お主も……お主も……」嘶咽れたる聲悽愴く、無念と急れど大事の重傷ははや進退の自由をも得せしめずして、彼は尻居に撞と倒れつ、切に宮の援助を乞へり。其言の無道理なる、其體の血迷へる、其の苦痛、其煩悶、寧ろ最期の一太刀といふ、其れが慈悲の殺生なるべく、煩惱を斷つ彌陀の利劍、と思へども亦た流石に、此儘に頑迷を執らせて後生の善所を得せしめざらむも最惜しく、永劫き怨恨を人の身に牽せむも悲しと、兎つ逐つの宮は、刀の當處にも眼の暮れて再び泣けり。一轍なる彼が氣象は此期に及びても猶一途なりき、「此宮、喜太郎を喚べ。此首、喜太郎で無くては渡さぬ。喜太郎！　吉見喜太郎！」聲に應じて次なる紙襖は披けたり、「兵庫、吉見喜太郎參つたぞ。御分は好も鬪念たな、斯くてこそ女が本意も貫け、又殿が御意の旨に立つるは。」云ひつゝ出づる其人の姿は昏眩める眼にはや見えぬが、涙に濕める其れが聲をば纔に聞き意てや、彼は這寄らむ、寄らむと急る。其傷口より流るゝ鮮血は滝をなせり。頻に無念の吻を蠢動して、「み、宮——み、や。」喜太郎は懼れず、其身傍に突と倚りて、「其心なればこそぢやぞ。こりや兵庫。喜太郎を仇なんどゝは門違の沙汰。況て殿を恨み申すは狂人の……」脣も手指も戰く鬪末間にも、耳は猶微にや動機く、彼は否と其首を掉る如きを、「いゝや熟う聽け。殿は汝に最初より御別心をば持せられぬぞ。汝が殿を恨み申すは或る者の讒訴を信けての所以。さればこそ汝が松坂を出でたる後も追人の御沙汰にも及ばれず、汝が目安を公儀に出だして扨後にこそ召捕の僉議ともなつたるは。それにも猶御不憫の加へられて、假令召捕るとも手暴うすな、國元へ差下さば相當の仕置も爲でならむに、成るべくは其の場所にて腹を切らせよ、さらば予が爲、彼にも爲ぞ、と斯うまでの御意あつたぞ。されば其意を女にも云ひ、お主に切腹をさせうとしたに。こりや女はな、お主に口頭にては勸められぬ、死首見せて其心を勵ましてと斯う云うてな——三途で待ちをると斯う云うてな——自害のして果てたはや！　既に殿は其御意我等も醉うはせぬ心底、女は況てお主に心中を立て徹す。や、こりや兵庫、何だ些し云ふべき事あるぞ。こりや兵庫！」「これい喃、兵庫どの、今暫時……」附つ纏はる男女二人は、牧野と叫び、兵庫と喚ぶも、彼の耳は既やこれを納れぬなりき、其口は讐へぬなりき、彼は果して其の最期なる、殿の御意、喜太郎が心底、信夫が生死只同一と誓へる其言の末を全うしたる始終を聞き得しか否かは知らざるも、可怖しかりし眼は瞑ぢ、苦し氣なりし呼吸は斂りて、其軀を宮の胸に凭せ、其れに組しめられし合掌の手を依然に、點頷く如くにして僵れたりけり。

（百五十三）

奥州屋の奥の間には、彼の二人の亡骸を同牀にして屏風に圍ひつゝ、香花をば纔に手向たれ

ども、喜太郎も、宮も、猶ほ心の闇の行方なう、夢路を辿るむやうに覺えて、只腕を拱み、其首頸を俛れたるのみ、況て事情も知らで、唯手の裏の物を奪ひ去れたらむ如き心地せる母の姿をや、聲の限りを絞り、變り果てたる女の顏に己が頬を押當てゝ、道よと叫ぶ。其の哀れさを添へむとか、此時また雨の降り出でゝ、折柄なる夜半の鐘も悲しう響くめり。表の方には喜太郎が手の捕吏十餘人、これも流石にうち濕りて、額を支へたる十手の總さへ異しき露に霑ひたる、と有る時、店の格子を蹴破る如くに引披けて、破鐘の如き聲は起れり。「牧野は此家にか、兵庫はッ！」組子原は驚きたり、同一其頭を擡げて、甚麼者かと瞰仰れば、もとより其足場を故意に啼らせる、闇は黒白なし熟くは視えねど、雲突くばかりの大漢の三尺に餘れる大小門にしたるなりき。「御事らに問はう。此家に信夫たらいふ太夫は在るかつ。」と云ふ御主は甚麼人ぢや？」龕燈といふ忍び提灯、此時一度に取上げて此武士を照らしたる。其體に彼は一歩を退却きて身構へせり。「や、和主らは？」「御身は誰人？　其の太夫を問ふは。」「用事ある者。」「其用事は？」彼は益其不審の眼を圓くして、一斯う仔細に問ふ、御身らは公儀衆か？」「いや其れは名告いで可し、只御身が姓名と來訪の意趣を申され。」「公儀衆ならぬ者が此廓へ來て、然樣に人を吟味する、お主らこそぢやぞ、頭人出せ。」組下等はや其人と悟れり、其の姓名は未だ知らざるも豫て聞く彼の正雪が黨類、二條の寺町か、若くば今出川の館にをる兵庫を警衛の者ならむ、かゝる奴の後詰も有るべし、自然は其の用意せよとは先刻にも吉見殿より嚴重に申含められぬ、縱し捕拿よとの下知は無きも、此奴も拷訊かば甚麼のか種子は揚がるべし、殊には然りともと想へる兵庫の手も無く自滅して、手持不沙汰の本意なくも思ふ折柄、あはれ好い獲物、いでやといふ肚倹竟は逃に目を相喫して、其中の一人は故意に揉手しつゝ進み出たり。「これは此方近ごろの出損ねぢや、眞と我等は西國の或る家の家士、家中の人討て立退いたる者を狙けて偖樣に當所に網を張りをる。固より貴所には然る嫌疑は無し、頭人も今大門口へ去に申した。但し其の兵庫とやらむ信夫とやらむ云ふ太夫は、此家に在る在らぬも存ぜぬが、御用とあらば奥の間へ案内申そ。いざ斯う。」といふ先に立つ風は餘義も無げなり。彼も爭論は好まぬ、既や打解けて後に跟きつゝ中の間の暖簾を潛らむとする僅少の間隙を、獲たりとか、前後齊一く、「曳！　捕た！」組めりとは見えしが何とかは投げられたる、一番手なる二人は一間餘り蹈飛されて、一人は前なる柱に、一人は上框に、鼻と膝とを撲撞かれて起も上り得ず蠢動いたりき。「すは曲者！」ばら〳〵と蒐るを、彼は其の大の眼に撲地と睨めたり。「甚麼が曲者？　汝らこそ！」眼の光輝は、彼の龕燈の灼耀に映じて、百錬の鏡ともいふらむ如くなり。「やア汝は兵庫が黨加勢か、助太刀か。知らぬか奴めは早や此方が手に落ちて自滅しをつた。其の死骸を惜しいとも來たか。會ひたくば其腕を曲げい、一日は見せうは。」前後を圍繞てわや〳〵と噪げども、今の技倆に流石は怕れて、二番手として我組まむと云ふ者も無かりけり。其喘めきを聞て、彼の吐く息は炎焔と見えたり。「えい汝らが、あの馬鹿者を！　ちえ、無念。然るべい事も有らうかと……」彼は遽に其の奥間を目懸けてのし〳〵と歩みたり、組子原は今更に吉見が身上を危惧みて、紙襖を叩き、障子を鳴らして、吶と注進(？)の鯨波を颺げたりき。「噪がしい、亡人のある家に。こりや其處な仁いづれ〳〵御通りやる、我等は頭人吉見喜太郎ぢや。」恁く前路に立塞がられて、前なる漢も暫時は其歩みを停めぬ。

（百五十四）

吉見が態度は、有繋に彼の武士をして左右なう喔みも懸らせざりき。彼は只其眼を剝けて睨み詰むるを、「御身は牧野が朋友か、兵庫には何用おざつて？」「何用も何も無い。那奴を擊りに來申した。」「擊ずるべき兵庫は只今切腹して果て申したよ。」「其の切腹は誰がさせた？」斯く云ふ喜太郎が……」「其の喜太郎は甚麼人ぢや？」「紀伊國御内。」「紀伊國御内の喜太郎が、何故あつて兵庫を討つた？」「舊主に背く……」「さらば其の詰腹は、主の指圖か？」此の返答には些しく難かるべき所あり、今は唯半上落下にと、指圖とは無い。彼奴召捕へうと存じたりや自滅したぢや。」彼の武士は大に叫喚べり。「其の召捕へうとは誰が發意か。牧野兵庫、以前は紀州の家士であらうと、今は朝廷の公卿、織澤の三位が卿が庶腹の初子ぢやぞ。」朝廷の公卿、織澤の卿が子息といふ事、此一事に就ての最も禁忌の難題なりき。其は當時の制度として、公卿に關る成敗といふは專ら京都所司代の手の擔當る處、其れを外にしては假令柳營の御三家たりとも彼等の非分を檢斷すべき一毫の權力も無きなり。されば殿も、彼れ兵庫が生口は勿論、死首たりともこれを取らむは難事中の難事として、十分の機轉と手際とを要するものとして、彼の吉見を撰ばせ玉ひ、又喜太郎も一步を過錯たば殿の御大事、事萬一難かしからば、我腹一つ屠るまでとの覺悟の臍は疾く決着つるなり。果然來れり。なれど其來れる敵は我が危惧る方にはあらずして、然も此奴も、其身において、自然の退路あるべき奴と想へば然のみには驚かず、彼は倒りて斃ぶ如くに嘲笑りき。「ほゝう、其義は初めて聞く。なれど右には關繋は無い。當方は只、以前の紀州が家士、牧野兵庫として遇うたぢや。」「遇うた？好し、お主らは其れで遇へ、此方は又た此方で其の處存がある。但し其の死骸、一見せう。」「成らぬ。斷わる。」「呀、織澤の家司前波左近衞權少尉が其主の死骸の自殺か他殺かを檢むといふに。拒むとは？」彼が語氣の益根強きに、此方の胸も微しく逡巡ぎぬ。「其處退きされ！」彼の前波は喜太郎を推排るやうにして一室に入れり、其一室は彼の兵庫と信夫とが、敢へなき亡骸の同じ枕に横臥れる所なり。

これより先き、宮は戸外の方の喧噪しきに心愕かれて、竊に彼の室を出で、足を盜みつゝ紙襖の陰より覗へば、組子らが龕燈に照らされたる、眼鉾どに頬骨暴れたる天狗の如き人の姿は喜太郎に對ひて立てりき。其れが云ふ語の端、音吐の拗訛彼女が耳にも確に我師が黨の者、寺町か今出川に在る一人ぞとは聞ゆるものの、さりとて其中の誰なるべきかは想ひ當らず、熊谷はもとより、松田も死せり、前波と云ふ男は識らざるも同じく彼夜に討れしと云へば其者にも無う、と有りて其の器量骨柄、天晴れ一方の大將と見えて、我が熟知なる金川、鵜野、其等の猛者よりも立優りて凄しげなるは抑も誰なるべき。と想ふ端に彼は名告れり。「織澤家の家司前波左近衞權少尉某！」這、扨は此奴、要あるべき曲者、所司代の手より廻せる奴、江戸よりの細作として來れる奴、知らず彼、かく人の名を騙りて何樣の所爲をせむとか爲る。と猶息を凝し、眸を決めて覘ふとも知らでや、彼は、呆氣に取られて只其面を凝視る姿を瞥眼にも懸けず、死骸の上に覆ひたる、白無垢の小袖、彼の鮮血の痕跡多しきを披きて、兩個の死顏を屹と視たるが、其の怒れる虎の如き眼に忽地滴然との涙滴を見せて、天を仰きて長歎すること多時なりき。怪し、所司代の手とも有らむ者が、江戸よりの細作とも有るべき者が、彼の落涙は？其の愁傷は？と猶視る時、一個は什麼、愕くべし、彼が手中に副刀の光、晃りと閃めくと瞥

るも遅し、兵庫が死首は弗と斷れて、速くも彼が其の小脇に摧込れき。あらつ——と叫べる老婆が聲に先ちて、血相変たる喜太郎が形は既に疾く鑽り入りぬ。「汝、待て！」

（丙五十五）

彼れ前波も、同じく其聲を苛げたり。「喜太郎、好う失せた。千萬要らぬ。主に仇たる汝が素首も此首と一つに貰ふべい。」喜太郎ははや問答も無益と見たり、無益なるに非ずして實は其辭を得ぬなりき、毒喉はゞ皿までなる此の家司といふ奴を此場に討て、後日の口を滅し、倘し敵はずば當座の喧嘩に執做して、一分の生命を棄つる迄よと豫ての覺悟をこゝに決着ぬ。

「道理ぢや、主の首なりや汝も欲しからう。此方も亦た入用の首、汝に渡いては喜太郎一分が相立たぬ。欲しくば腕で取れ。此首も一所に與れうは！」吉見は我が首頸を叩けり。「好覺悟。其の頸！」抜かれたる前波が刀は、喜太郎が襟鬢かけて、其鋭利き刃鐵の味を現はさむとする石火の晃きに先ちて、やつと云ふ懸聲！一根九寸の短刀は紫電の空を馳る如くに飛來りて、彼が向臂にずばと立てり。急所の重傷に思はず其刃を取落して、驚きつゝ回顧る彼が耳元に、「首盜人！」「呀。」一大騙賊——兄者の名を詐稱る大盜人。其處退くなつ！」叫ひざまに弁り出づるは、什麼ならむ鬱憮いかめしき猛者かとも想ひの外なる、絲も可愛き處女なるに、前波は益〻愕けり。「和女は什麼……？」「やア猛々しい盜人。こゝや、汝はな〳〵、好うも好うも妾が兄さま少尉殿の名を騙稱て、何の遺恨か大事の左門様御首を其やうに酷う切りやつた喃。汝こそ若殿御身に刃を當てた主に仇。其處一寸も退かすまい。先づ名を名告りや。」「なにと和女は、あの孫八が妹、妹？」「おゝ驚くな、前波の少尉、孫八が妹のきのぢや。」「えゝい知らぬこと……」「知らぬとて、汝、兄ごは此ほど死亡なりやれたに、其名を詐稱る……。原來が其方は何處からぢや、京か？　江戸か？」彼は、其衣を咬裂て、腕なる傷を緊と結びつ、「むむ、江戸からぢや。」「江戸よりと云ふに、今しもきのと名告れる宮は、愈〻其の幕府の細作なることを信じて、些とも油斷せず、抜いて棄てたる自己が短刀を手快く拾ひて喑に其足場を計る、眼の動作の凡庸ならぬを瞥て、彼は呵々と笑へり、「きのどのか、何さまお主は……。いや、其の前波が妹とあらば怪しうも思ふな。我等も自ら然る方の者、兄ごの名を借りたも、兵庫が死首を手に懸けたも、何も物に祟らうでない、況て遺恨か、只願の好意ぢや、喃……扨て其の此の始末をお主如何する。差向つたる主の仇、喜太郎を討たでは置くまいが？」「勿論ぢや。主の仇は確に討つ。討つは討つが、其仇は今は兩個。」「其の一人は？」「然ういふ御身ぢや。何と陳うと死首摧いた意趣も云はず、名告れといふ其名も名らず、怪しう思ふなとて、好意ぢやとて誰が其れを眞實と信けう。其の意趣の次第によつては吉見か、御身か、孰方が先か？」彼女は軀を摺つくる許りに倚せたり。「お主！あ、扨て、後悔すな！」「なに後悔せう、後悔せぬ爲に斯う念に念を入る、ぢや。」彼女は只、此の奇怪なる漢子の身元と、姓名とを知らむとせり。其の知らむとする漢子といふは別人ならぬ、彼の丸橋忠彌なりき。前にも云ふ、忠彌は江戸の大將として箱根より西方に到らず、宮は又た駿河より西方を踐めども江戸へは行かず、これに由りて此兩男女、未だ相會するの期を得ずして、恁く口惜しき物の離離に、互に心を懊惱るなりき。なれども忠彌は、猾孫八が妹として、宮を我が荷擔人の一個として見ぬ。宮は有らず。只管彼を敵と視たり、敵と視られし忠彌が所爲は、亦た一々に其の敵たるを證據立てゝ、今出川の館を捜りては家司の前波が名を

騙稱り、丘庫が死首を奪ひては紀州が専横を所司代に訴へ、我に喜太郎を討せては、其身が當座の難を逃るゝ、總て組作の本色たる、賤しむべき卑劣と、憎むべき譎詐とをもて其身の周圍を包繞めるやうにも見られつ、最初に我黨？と想へる眼の、其力足らざりしを今更に悔い、且つ恨める程なりき。

（百五十六）

我も由井が道場にて古く其面を識れる前波孫八、其者が妹のきゝのといふに我が丸橋忠彌なることを告る、甚麼かあらむ。されども此處にて名告れぬは傍に聽耳立てをる這奴喜太郎を初め、組子原が、一人ともあれ遁歸りて主の大納言其人に云々と告むことの可厭きなり。彼の、かゝる事には自ら脫落無しと誇れる正雪も、此回訴狀につきては總て陰の武者として動作くなり。これは我も同意にて、去年の秋、彼が彼殿に松坂にて訣別し折も、挨拶好うして、重ねてとの詞さへのこして袂を分ちたりと聞く、其の會釋振よりするも恁く擧動はで協はぬ事にして、左右は今は、紀州か、織澤か、二道懸けたる其の間の風を乘るといふ太と難かしき船路なるに、其の正雪が陸一の黨たる我れが彼れ、兵庫の肩を持ち、其の死首をも奪ひて、紀州の手の者に敵對へりと云はゞ、揖も帆も無し、百日の彼が苦心も一朝にして水泡と消失せむ。それも敢なし、されば名告れず、此處にては丸橋といかで名告らむ。とは云へ、苟にも我が頼み蝮まれたる其友が、亡屍の恥を、遠國まで曝させむとするを見ては默止れず、彼が家司の名を借りてと思へるが、測らざる女の口よりして其は破れたり。されど其の敗れしも惜しうはなし。彼女にても誰にても只彼が死恥を隱すとならば其にしても可し。但し遁されぬは此の喜太郎なり、此の處女にして此者を討ずとならば、是非なし、我が手を下しても、と忠彌は其の左右の袖口まで搴り上げ、袴の股立摑取らむとする其體を見るより宮「逃るか、お主、逃うとて……眞直に其名を名告りや。」「可厭いは。味方撃すな。」「味方？　え味方！　お主は大方、江戸からの細作であらうがや？」忠彌は、彼女が執念く纏絆れる其の意味を初めて知り得たり。なれど物も物なり、人も人なり、其の江戸よりの細作、間諜、と看誤まられたりとは、と彼は實に愕然たりき。「返答ならぬは的切り然様なぢやろ？　江戸からは伊豆どのが手か　豐後どの人か、兎角は當處の所司代とも引合うて我々が樣子を搜り、兼ては紀州が行事を覩ふ曲者に相違ない。さ何とぢや。」言ふ尾に接き喜太郎も躙り寄れり、「前波が孫、善う見抜れた。江戸からの細作とは我等が目にも確に見ゆる。細作なりや細作と白へ。公儀のお人、紀伊國の士惡しうは當るまい。然らずば騙賊、盜賊として繩目に繫けう。」例の一轍、甚麼と耐るべき騙賊盜賊、繩目に繫けむと匐られて忠彌は俄に急立るが、然とては念へば赤た、我も自ら其罪は犯したり。勝負は時の運、這奴らが手に討たるべうは思はぬも、萬一討れば、我は此の兵庫が身の上より淺ましき盜賊の汚名を其死骸に附せらるべし、此は難義かな、と思へばはや彼は些しく其の勇氣の拔ぬ。と見て取る兩個は、「公儀衆か？　盜賊か？」逼るを睨つけて、「公儀衆なりや何樣とする？」「紀州へ伴るゝ。」「兵庫死骸は？」宮は首肯て、「妾が引取る。」「其の仇討は？」「吉見どのに頼まれた。和歌山へ歸りてまで延引て呉れいと。」忠彌は甚麼と案ぜしやらむ、右に左に彼等が顏色を熟視つ、「むゝ、其れも可からう。乃公が公儀衆も面白からう。紀州へ行て大納言殿にも會はう、然らば喜太郎、我等を伴れい。」

（百五十七）

此時、江戸市谷加賀屋敷の家にありて、目安

の一條に奔走油斷なかりし正雪は、京都の騷動かゝるべしとは哀れ夢にも知らざりけり。彼は兵庫を迎への爲に丈橋を出だし遣りて後、其の歸着の日を待つより外他事無かりき。日に日に品川に人を出して我が手船の帆影の見ゆるを候はす、當時の心中實に次の如くなりしなり、兎角にこゝにて假の本尊と賴むべきは彼の兵庫なり、其者が來らば例の一輸の彼が逸氣を更に指嗾して、彼の駈込の訴訟といふを爲すべきが。其の時機は又た我が弟子なる奥村八郎右衞門、七郎右衞門兄弟の者に委任すべし、彼等はかの伊豆殿（松平伊豆守、當時の老中）が公用人奥村權之丞が弟共にて、從前とても其等によりて殿中の評議の樣を探り得つるが、猶ほ今後も其れが口に就き、時期の恰も好しきに投じて內外より相應せば彼れ兵庫をしてあの帶刀の老爺と對決せしめむも難からじ、況んや彼の八郎右衞七郎右兩人より兄の奥村へ、紀伊國御謀叛との事は內々したゝかに嘘込せ置きつるをや、蓋ふに伊豆殿も其人より聽取れて、其胸には確と極印を打たれてや有るならむ、只今日まで謹愼の吟味の拂行かざるは、本人たる兵庫の出でざる證據なき片言の訴訟なると、今一つは、彼の帶刀が其の老功風を切りに吹かせて若手の執政らを叩き廻はす、此の二個條のみといふ。然る鼻へ、彼の兵庫の出現れて、有無虛實思ひの儘に云ひもて捲らば、いかな長久手の先陣も大阪の後殿も其效を失ひて、三十七條、其うちの何者か一條は其の返答に有窮らぬといふことの有るべきや。然らば其事にて彼の老爺は自滅、殿は遠流、和歌山五十五萬石は滅却たるべし。あはれ其れ、それが我が大事の時機到來の其日なり。其の沙汰を受けて彼の殿、是非なき謀叛とあるも可し、其の御腹を召されし後に家中の從輩の死狂ひに、籠城なんど爲むも可し、或は江戸三屋敷に火を放けて、彼奴らが切て出づるほど、我が爲には頗る妙ならね。兎角に其事一つあらば幾內、東海、南海の三路、別しては江戸の混雜といふ、唯豆を煎るが如くならむを、其虛に乘りて江戸驛府、名古屋、京、大阪、堺より和歌山と懸けて一手段せば、前途の成敗は知らず、一回は我が宿望も想ふに大概は成就るべき歟。かゝれば足矣、我が由井民部が名を末代に傳ふるには、あはれ時機は刻下といふ其の刻下なるを、と心切に苛立ちつゝ、又其手の達くばかんなる妄想の興に驅られて、只顧に其の手品の種なる兵庫の來るを今やと待つ。

折柄なりき。京よりの急飛脚は來りて書狀を呈せり、見れば丸橋が書通なり、忙慌しく封おし折きて讀み下せば、可憐、可憫、熊谷松田前波等が橫死、兵庫が墮落、用金費消の事までをも委細う書けるなり、さしもの正雪も、其事の寢耳に洪水、寧ろ斎狗に手を噬れし如きに呆れて、肚裏に、斎生——外道——と罵ること數回なりしかども詮も無きなり、たゞ丸橋が兵庫を伴ひて今夜に京を發ち、明日の正午に大阪を出船して歸府すべしとある其日取を僅指ふれば、着船の今日か明日なるに稍心を復しつつ、品川には遇纔の人を出だして、着とも云はば正雪自身出迎へに向ふべしなど其の支度も取り取りなる端へ、特に火急の要用とある時限の飛脚又た來たれり。加之其の書狀の主は忠彌にあらぬ寺町なる肝者の甲乙なるに、見ぬ先より先づ胸を擊たれし正雪、扨は急病か、兎角は丸橋か兵庫が變事、と讀めば敢なや、其の變事も這は什麼何たる珍事ぞ、和歌山の家士吉見某といふ者に逼られて、島原の廓にて兵庫は自滅し、其を追うて同じ廓に趨ける忠彌も同じく彼の吉見に取籠られて和歌山へと拘れぬ、丘庫亡屍は其家より今出川の館へと送り越せしが、其を御覽ずるより三位の胴は悶絕して其儘に命終せられたり、兎角は闇夜に燈を失へるが如

き周章、急ぎ然るべき仁一人を差遣はされて、とある狼狽たる體は其の書面の文字の亂次なるにても知られぬ。げにも彼等は闇夜に其燈を失へる如き心地も爲なるべし、山は頽るとも海は湧くとも毛髪ほどだも此膽をば動搖さじと念へる我すら、途方の闇に昏るゝやう覺ゆるぞや、此上の過錯せさせぬ爲め、半兵衞は疾う行きて寺町に殘れる者も、今出川の館なるをも引纏めよ、予は今は何事も擱きても忠彌を救はでは、と彼の出迎への供揃を俄の旅行にして、正雪は和歌山へと其夜發途ちぬ。

（百五十八）

這回ほどなる不愉快の道中は、あはれ彼は身に覺えぬなるべし。其は從前とても彼が旅行は、金銀持たる樂隱居の伊勢詣する如き心長閑なるものにてはあらざりき、夜の丑刻に江戸を發足て、夜曉ぬ前に川崎を過ぎ、神奈川に晝飯して提灯點ての小田原入などは、珍らしからぬ例なりき。なれども其等は、皆前路に面白き花の山あるを看込みてなり、宿望の階段を躋る心勇める旅行なり。今や否らず。胸の機關は今般外れて、剩さへ遁がれぬ災厄の不思議なるものは身に降下りぬ、嗟、月待つ夜半の風雨、然も其の風雨は暴れて我がたのめる稔實の秋を厭流さむとす、其急に趨かむとする彼が心事は想像るさへ憫然なるもの有るなり。雖然彼れ正雪が堅忍の本性は、此際に瀕みても些も其の狼藉しき態を視さざりき、彼は忠彌が身上を想ひては其身に羽翼も欲しきならむ、然るを彼は、出立をこそ急ぎたれ、道中をば悠々と打たせたり。曉寅刻に市谷なる家を出で、此日は行程六里にして川崎の宿に泊りぬ、宵には酒宴少し爲てやがて臥床に入りたるが、其の鼾息は折から吹く濱風より高かりき。此風は曉方より雨を誘ひぬ、雨は漸次に其の降を倍して、鶴見の浦の横頬吹には笠も桐油も堪り敢ず、神奈川の臺に着ける頃には行く足許も見え分ずして、此雨にては馬入、酒匂川も止らむといふ。此時六鄕の水量は增して五合との注進ありき。

今夜の宿は平塚と豫ては定めしも、六鄕の水量五合とあらば馬入も蓋たは止りたるべし、さらば先づ戸塚なりとも藤澤なりと行着かむ所まで行け、と云ひて道を急がず、直落着きつゝ此宿を出立てるが、果して藤澤の間屋場にては馬支の旅荷山をなして、馬入は今日未刻の川止と役人らは口々に叫けり。されども雨は歇ざりき、此夜より翌日までも降り徹して、辛くに三日目にして霽れたるが、猶川水は減ぜずして、空しく此驛に更に一日逗留せり。

卯月の末の日暖かに稍長き一日を、霖雨の初めて霽れて晴空拭ふが如き下に兀然として、川明の注進の未だ來らぬを所在も無う待つ蔓なさ、空に環を畫く鳶の聲も忘々しくて、煎豆の虛茶に空腹の張るさへも恨めしく、況て急用を抱へられたる飛脚の機嫌、さこそは不印の眼色さへ交りておはすかと覗へば、こは如何、南向なる日暮の窓に袷に坐して、見臺を控へたる、書見に餘念も無き態なり。

といふ端に日も稍暮れぬ。發足は明日かと各各も、京のやらむ、大阪のやらむ、晝寢に見飽きたる夢の纖足を更に見むとや、臥衾敷き設くる折こそあれ、驛内忽地吶といふ騷動して、川は明きたり、今御用物の一番が渡りしぞ、後れな、馳やよと駕、長持を我先きに擔ぎ出す、宿の亭主は飛で來りて、「これから御發足にならしやれますか？」「勿論ぢや。」と供頭の一人は云ひ棄てゝ、正雪が前に出で、大磯までも御越か、と指圖を待てば、「夜川は危險い、況て此際ぢや、發足は明朝にせい。」燈火を掻き立てゝ、邊てもせぬ其の書見の悠々然たるに彼等は呆れて、穿き懸けたる草鞋の紐を又た解き、擔げ出さむとせる乘輿の棒を再び棄てゝ、只往來の立

騒ぐを渠ましげに眺めたる、其の群集より、紀伊大納言殿家来由井民部介旅宿と打てる標札を望みて、門の内につか〳〵と入り来る処女あり。彼女は順禮姿に、一本柄杓を手にしたり。「もし些と頼みましよ。民部さま御供の衆がござるなら、殿様御知人の宮といふ女ぢやとて取次で下され。」供頭といふは例の鵜野なり、宮と見るより、「や、見えたか宮、何方からぢや。」「おう、西方からぢや。師匠様はや？」「ござらしやる。川止に其方も遇うたか。」「も、氣が迫いて、萬一上方へもござらしやるかと宿々も氣を注けて見たが、果然ござつた。先は嬉しや。」彼女は我が觀測の中れるを誇らし氣に、草鞋手快速く脫棄てゝ、蹤につきたる砂、腰より抜き取る破手拭の端にて二つ三つ拂きつ、遠慮も無げに上へと昇る、旅馴れたる動作と、其の快活なる擧止と、日焦の痕さへ目立たぬ眉目の優れて艶美きとは、其邊に集へる雲を名とせる者共の眼をすら驚かしぬ。

（百五十九）

「宮か、好う見えた。其方が身上は大抵予も案じた事でない。まゝ近う寄れ。兎角は好う見えた。」正雪は燈火も膝も一所に其方へ押向けて、我が愛女の旅歸りをも見たらむ如くに、其の息災の面を眺めつゝ、只顧心娯しげにほく〳〵と微笑めり、宮も久濶なる我が父親の膝下にも這ひ寄れるが如き心地、覺えず其眼を摩り紅めて、少時は彼が身體の安否を訊ふより他無かりき。色好まぬ彼が目にも、世ならず艶美しう見ゆる彼女が面と、肉親とても及ばざるべき親寳の籠れる其人が懇話とは、彼が此の四五日來なる胸臆の悶邪苦邪をやゝ忘了しめぬ、彼は先づ膝元の菓子箪笥より菓子を取り出て、更に宇治茶の芳香好きを煎じつゝ、彼女に與へ、自身も喫みて、打寛ぎたる、去年の秋松坂にて別れし以來の事、其れよりも先づ當面れる彼女が今回の恁う慌忙しき下向の用向を問はむとせる、其間に先ちて彼女は却りて問ひたりき、「師匠様、今門外の標札で見ましたが、御前は彼の紀州様御家來に何時成らしやれたえ？」師は此問を有らずもがなとの面色して、其笑を些しく苦めぬ、「いや、其れは其の些と仔細ある事ぢや。眞は去年あの松坂での……」「妾が彼の和歌山へ出向く折かえ？　其れはぢやがもう師匠様、紀州の殿様は此方の大望を疾く御承知で、御前が事をも散々に言はしやれましたぞ、其れが御前を其の御家來とは？」彼女が不審は、此方には猶不審なるなり、「散々に云うたとある、扨はお主は彼の大納言殿面へも出たか？」「出ましたよ、五度も六度も。」「甚麼として出た？」「和歌山の城下、吹上の觀音堂に寢てゐたを、彼所の町奉行吉見といふ人に見咎められて、安居の三四郎が妹といふを讒認られて。」「え、吉見に……喜太郎にか？　而て拘れたか、和歌山へ。」「あい、其の喜太郎どのゝ家に暫時は寄食てゐました。其折殿様が妾を召されて。」「な、甚麼と言はれた？　正雪細作とも其方を責めたか？」「あい。」師なる人は益急けり、「白状たか？　お主。」睨殺さむばかりなる氣色を見するも、彼女が笑顏は變ぜざりき。「ほゝ何のい喃、責られたとて白状るなんどの宮ではござんせぬ。彼方には散々物を言はせて妾は只聽たばかり……なれど妾は云はいでからが彼方では今云うた皆承知ぢや。殊には彼の兵庫どの事……」「おう其の兵庫、其れが仔細疾う語れ。」「未だ知らしやらぬ與？」「いや二埒は書通で見た。金井をば疾う遣たが猶心許無いに予も品に寄り京都へも行うと思ふ。」宮は遽にて手を掉れり、「危険い。今は火の中ぢや。」正雪は又た驚きたり、「火の中とは、其敵手は、紀州か、所司代か？」「甚麼の紀州！　其の紀州も今江戸からは御不審の目を注けられてぢや、現に吉見どの、此程

捕へて和歌山へと伴て行なしやれたも江戸からの隠目付ぢや。今御前が紀伊國御家來とて其地へ往なれたりや鵜の目鷹の目、其の徒輩に狙け廻されて。」彼女が猶手を揉りつゝ眞面に語るが、何やらむ其事かとも心許なきに、「むゝ、其の隠目付といふ其奴、江戸からと確に白うた奴？」「いや未だ其れは確には白ひませぬ。なれど其の人相、身装、言語、物の應對、全般の擧動まで妾が目にも蓋た其者とは。」「見ゆるといふ其の人相は？」「赭紅顔の鼻の高い、惣髪の、天狗見るやうな偉大な人。」「其の捕へられた其の場所は？」「島原の廓で兵庫の腹切て死なしやれた其場、然も其の死首を無慘に掻いて、初は兵庫どの家來ぢやとて彼の前波が名を騙稱り、後に其で無いが露顯れてから、種様の言うて逃うとしました。」「やア扨は、お主其場に在たのぢや喃！」「在た段か、妾も手傳うて捕へさせたぢや。」「お主、其の吉見に手を借して?!　ちえゝ無念！」「え！」正雪は此の宥恕すべからざる過失を犯しても猶平然たる處女の頬先を、撲曲むとして拳を握れる——其は辛に耐へ得たるも、忍ばむとして忍び切れざる憤怒の靡は其胸閣を衝破る如くに、「丸、丸橋忠彌ぢやはつ!!」

（四六十）

彼の曲者を丸橋と聞て、宮も一たびは喫驚きたりしが、又た覺束なげの眉を顰めて師の面を凝視りぬ、正雪が語氣は愈暴らかりき。「知らぬとあれば是非無いものゝ、然りとては汝が其目で其耳で、應對の言、人物の樣を視聽してからが其者が其の江戸の細作か丸橋かといふ、其れ程の鑒別は付うずものを。闇々と生擒して、加之自己が手傳うて予が片腕を捥ぐ。知らぬか予が此の道中も忠彌身を拯はう爲に是れより和歌山へと趣くぢやは。吁、沙彌が放た糞を長老が舐ぶる——さりとては心外ぢや。」其語氣の粗暴なき、愚癡も交れば、無理さへも搗加たる、平生の師とは非ぬやうなるに、宮は且つ疑惑ひ、且つ怪訝みて、悲しくも亦た腹立しくもありき。「其りや御前、何事云はしやります。妾が人相見か占者では無し、告へといふ名も名告いで、叩ら目を剝いて狼藉する、其人が此方の大將分なと甚麼知りませう？　殊には自個で何時の間にやら細作に落着て、自身と拘かれて去なしやれたも。お前の言はしやるのは皆無理ぢや。」我と自個して細作に落着たりとは、彼の耳に又た異樣の惑を與へぬ。忠彌たる者抑如是き腰抜與、彼は意地には不耐ぬ者、細作などいふ汚名の下に汚目々々と繩目の辱をば受くまじき者。多勢に無勢、刀折れ勢窮りて、自殺の間際も無く、組れて落ちて扨て後に搦められたりと云はゞ然も有らむも、我から降りて喜太郎連に拘れたりとは果して如何。嗟、彼も亦た兵庫に齊しき豫想しには似ぬ沒腸漢奴。と又た今更に人の憑まれぬ、我が目の達かぬ、寧ろ其口に欺惘かれたる如きを恚憤る彼が胸は、哀れ張裂なむ許なり。「宮、扨は忠彌は、刀にも手は懸いで奴？」「其れで妾も今以て其の不審に思ふ。音に聞えた彼の人が、最初の勢何處へかやらで、公儀衆か、首盜人か、公儀衆なりや惡しうは當るまい、盜人なりや繩目に懸けうと彼の喜太郎に威嚇されて、其儘くた〳〵とならしやつた體、到底が彼れが武藝の達者といふ忠彌どのとは……」聞けば聞く程其力も折け膽も落ちぬ、從前なる苛れていれて耐らぬ意の駒といふも、張りて〳〵堪られぬ胸の弓といふも、哀れ今は弦の斷れ、脚の痿えて、纖々となれる樣にも彼は覺えにき。抑我が此の苦心の道中、彼の夜中に慌忙しう江戸を發てたるを半途に悔いて、今は故意に其路次を急がぬ道中、心の迫くを表面に綽々たる餘地を視して、海道に間配れる紀州が細作の目を眩惑さむと籌る道中、かゝる大方

ならぬ配慮の道中も、只彼の忠彌其の者を術好く拯ひて此の宿望を他日に達せむと思ふにあり、然るを其の本尊たる忠彌にして如是くば、齋食なき法會に驅り出されたる和尚の勇みなきにも我心の似たるぞや。寧そは棄抛むか。屈辱を念はで生命を惜む、然る徒輩の頭顱を何程に揃へたりとも甚麼にかはせむ。さる奴の爲に心を焦刺て此の可愛き宮に無理と知る〳〵黒癡を云ひつる、今の振舞、想へば我ながら慚羞しきぞとよ。とは念ふも遣る方なき彼が遺恨は、中〻中に散ぜぬなりき。彼は天を仰ぎて大息せり。

「無念ぢや、宮。人といふものは憑まれぬ。熊谷松山前渡らが仲間討、是をこその手蔓と思うた兵庫が自滅、又た腕とも腹とも頼うだ丸橋が今の醜態。全般は恩も義理も無い。想へば無念ぢやよ。」些少くも同じ情の歎息に打萎るゝかと思ひの外なる宮は眞面目に、其膝をやゝ正しうせり。「師匠樣、其の御言は本心かえ？」「本心とは？」師は太くも愕けるなり。「兵庫どのを賴むと言はしやる、其れが其の本心かえ？」「不思議を言ふ。賴めばこそぢや、あの松坂から扶出いたぢや。」「彼時の兵庫どのはな、或る者とかに讒言されて、殿樣に棄られて、檢使も無い切腹をさせられうとするを氣毒とて救助さしやれた。其れは武士の義理、朋友の見繼、妾も好う合點ぢやが。其後の兵庫、御主の殿樣の有る事無い事書付にして訴訟を起した彼の兵庫めを、御前は猶も、あの賴まさしやれたかえ？」聞くより正雪は扨はとの氣色、電光の如き眼睛を激射かして、「其れで解めたは！　お主が先刻からの口、扨は殿に語らはれ、喜太郎と一所に、あの兵庫に自滅させた喃！」

（圖六十一）

宮は些しも鐵愕かざりき。「あい。如何にも兵庫めは妾が手で自滅させました。恩こそあれ恨の無い彼人に恁う腹切らせたも外ならぬ御前の御爲ぢや。」誇り顏なる如き彼女が容態に、飜りて愕れて返辭も能らぬ師の面を處女は猶視つつ、「御前は苛う腹立たしやる氣な？　妾は御前の御爲と想うたに。」「爲……爲も何も有るか、有るかつ！」堪忍てふ袋の緒の斷れて、擴開る如くに罵らむとせる正雪は、同時に屹と意の注きて、今は全然の紀伊國方なる此の小女郎が態を熟と視めたり、宮は猶自信を枉げずして膝摺り寄せぬ、「師匠樣、何故に爾う腹を立たしやる？　兵庫を討たが御心に協はぬかえ？　悪い事したと云はしやるのかえ？」「むゝ、いや、其許には手柄であらうよ！　恁く一句に云ひ放ちて、冷然たる脣を緊鎖ぬ。「分曉りませぬ師匠樣、扨は御前は彼の兵庫めを主に刃向ふ大不忠大悪人、恩知らずの犬畜生とも覺さゝやらぬ歟、え、もうし師匠樣、御前はいつも何と言はしやる、世に四恩といふが有る、師の恩、主親の恩、國土の恩、其の中に物教ふる師の恩が一致重大い、其次が身を養ひ身を産んで下された主親の恩、此の二つの恩を忘るゝものは犬猫ぢや、然る惡人を存在くは世の災禍ぢやとまで仰しやれた。それが妾は彼の兵庫めを其の主君の御恩に背く犬畜生、其の畜生を彼等の仲間へ入るゝは一同の汚辱、結句は御前の御面皮、成就てからが大望の瑕瑾と期う念うてな、詰腹を切らせましたは。其りや如何にも紀伊國樣から賴まれました。けれど其れは一通りの事。只彼奴に自滅させたは師の恩といふ御前の御爲を念うての妾が働きぢや、もし師匠樣、其事が悪いなりや悪いと言うて……妾は何の樣にも謝罪ります。謝罪ても濟まぬとならば、自害も爲ます。目前に死で陳謝もいたします。え、もし師匠樣！」」且つ泣き、且つ嘉ひ、且つ謝び、且つ說ける、愁霜の凜たる其口よりは淋漓たる慷慨の音を發して、春花の妍たるが如き其臉には堪へぬ眞實の涙滴を見せたり。正雪も、此の井々

として一絲紊れざる事理の前には、我慢の憤怒を納るべき餘地のあらずして、只呻吟きぬ。宮は漸く涙を拂ひて、「ちやが師匠様、萬一御前が彼の兵庫奴と同腹でをらしやれたなりや、其の熊谷松田前波、又た忠彌どのが恩も義理も知らぬといふを御尤めはなされぬが可い。其れは御前が其の恩不知義理不知の奴を朋友となされて惡い手本を出された過失ぢや。人は皆其の長上の所行に倣ふもの、御自分が惡うあつたと、恁う御諦念なされませ。其上に又た、」と彼女は更に其襟を掻合して、「名前だけでも御前は今紀伊國樣御家來ぢや。さらば其の大納言樣御身に仇する奴と親昵うはなされぬ義理のもの、其からが第一武士の忠義に虧げまする。」齒癢きまで馬鹿正直なる這の小女郎が所行と言語との憎くさよてふ、正雪が肚底には奈何なる毒燄をか燃しにけむ、雖然百の魔行も一の佛眼には敵する能はずして彼は只苦笑の、咳嗽の、我が潰れたる面目を補ふの手段にのみ急なりき。良少時して、「然樣に案ずるな予とても民部ぢや、彼等無しとて甚麼此の宿望に事虧かう。又た其の兵庫訴狀といふは予が夢にも知らぬ事、全般は彼奴が一存、自家が同腹なと假にも思ふな。只お主の爲た所行は總て道理、其の忠言は予は哭々も嬉しう思ふ。吁、持つべきものは子、其の子の無い予には弟子、別て其方が樣なもの。や、宮、以來は予を父とも思へよ、予は其方を娘とも思はう程に。」父とも思へと言ふ人の眼には釘の如き異彩ありけり、なれども其脣は快よう動きて、宮が耳には其頭を撫でらるゝ如き笑聲さへ聞ゆるに、嬉しさ比へむ方もなき處女は、今更ら無躾の謝びやうも無き慚羞しさ、恐懼しさ、又た娘しさ、涙の目許も勇々と、「師匠樣、御前のその娘の妾が、御肩でも叩きませうか。」

（百六十二）

宮が正雪の背に回らむとする折柄なりき、門前遽かに躁がしき人聲ありて、「此處ぢやゝゝ。」唯ならぬ聲と聽耳を聳立つる間も無く、鵜野は慌忙しく馳せ來れり、「事でおぢやる、紀伊殿家老安藤殿が御身に對面とて見え申した。」有繋に其思ひ懸なきに愕ける正雪は、屹と彼が面を視れば、「疾う取次げと申されます、何と御返詞？」九郎右衞門が心許なげなるに引反て、宮は平氣なり、「安藤殿は師匠樣御家老樣ぢや。妾も久々ぢや。」師は漸く頷きて、其女が口許を悽愴き後目に顧けたるが、「何さま……逢はう、但し人數は？」「徒士の者兩三人、別に用意の體も見えませぬ。」「む、。然りともあれ思ひ懸ぬに、其方等もぢや、京都なる者が二の舞すな。予も追附け出迎へう。」彼は鵜野に目配せせり。聞けば實にもと宮も胸を疎かしぬ。「師匠樣、妾はえ？」「む、其方か。其方は娘ぢや、次へ在れ。但し今言うた正雪が娘といふことを忘失なよ！」刺すが如き眼の光は此の奇異き語に伴へり、其れが難解しき意味を彼女は甚麼とか會みたりけむ、俄に眼に暗涙を見せつゝ、悄然として姿を隱せる、引違へに入り來るは弟子若黨なり、彼等は座敷に燭臺多くして、師に衣服を改めさす、其の衣服は白練の袷衣二つに、水色の浮眼袴、顯紋紗の華麗なる胴服なりき、支度をはりて、いでやと正雪は座を起むとする時。「帶刀ぢや。帶刀が參つたぞ。免せ。」のしのしと肉歩に來れるは其の帶刀なり、見るより若黨らは平伏して忽ち雲を霞と消えぬ。「こりや汝等弱い奴、此爺は鬼でも無いに。」鬼にはあるまじきも、眦限りの袖、脛限りの袴、手束にせし白髮の鬢を黎き日焦の額の皺紋にふり懸けたる、睨回す亘眼、吼るが如き哄聲、宛として見る第六天の老魔王が狗血を舐りて帝釋の部衆を罵る體！　彼は猶後方なる鵜野を疾視て、「民部は何方にぢや？」「其處に居られまするが

主人民部。」「うゝ此の矮漢か？　やア其處な者、其方が由井民部か。」悉皆が狂人の態度なるに正雪は又た呆れぬ。なれど、爰に疑ふべきは、此の狂態の馬鹿々々しきまで無作法なるが、此の老爺の眞面目か、否ぬ與なり。誠や此の惡垂爺は、主の紀伊殿をすら我兒の如くに叱咤して、江戸老中をも小沙彌遇ひに叩き廻はす、當代の頑張爺、殿中切つて持餘し者と豫て聞けるが、今見るが如くならば實に然もありぬべし。雖然、いかに小才覺の、小鍋炊の、小悧怜立する老中とて執政は執政なり、將軍の御口眞似をもする程の者が、老功ともあれ如是な狂者を狂者の儘にても通すまじ、況てあの畏怖しき紀伊殿をや、其人が大事の家老の首座に這奴を据られて、國政の相談、寧ろ其の指示を仰がるゝ如しといふも如是體にては有るまじき沙汰なるに、又彼の、人物をば流石に善う御覽じつる故大御所が、衆多き諸士より故々と撰て、箇樣の馬鹿者を最愛の御子の保傅とはなされも爲まじ。怱く考ふれば此の狂態は有意りての狂態にて、其の無作法も、傍若無人も例の傳なる、頂邊挫きに我を挫ぎ着け、有無を云はさぬ兵庫同樣の計腹をと與。然も其の瀨踏の間者に宮を先づ入り込ませし歟。と有らば、氣毒ながら、其は大きなる目算の違へるなり、正雪が三寸の舌、五尺の軀は、威力をもても來よ、辯舌をもても來よ、然る淺墓なる手段にて唖の一滴をも髮の一條をも、反させも率せも爲べきかは。あの狼狽者の兵庫忠彌らと一樣に御覽ずる、はゝ笑止なが然樣には參るまい——怱く腹裏に冷笑へる正雪は、此の老人が勢猛に立蒐れる態を、竹田傀儡の人形見るやうに爲做して、扇の蟹眼を膝の上に奔らかしつゝ莞爾々々と微笑て、只突い居たり。老人は立跨かれる儘、「やア民部、汝無禮者——禮義を知らぬか！」此の無禮なる老爺は、倒りて他の無禮を尤めぬ。なれども正雪は猶一言をも發さゞりき。「無禮者！　帶刀が參つたに何故出迎はぬ？」

（百六十三）

正雪は屹と視たり、「御身は甚麼人ぢや？」「甚麼人とは？　這奴が、耳は無いか。那程言うたに。」「安藤とか？」「目を清いて視い。帶刀といふ爺は乃公ぢやぞや。」「紀州の御家老か？」「田邊の城主——音にも聞つらう。」彼は忽地空嘯きぬ。「亭主が出迎はぬに他の座敷に押入て叫めき立つる、然る無法者は我等が紀州の家老には無い等ぢやが。」客は聞くより大喝せり、「其の家中が者として其の家老が面を見知らぬ、不屆の武士が世に有るか？」素破、我は貞門に墮ちぬ、失敗たりとは思へるも正雪は猶怯まで、「我等は大納言殿直參ぢや。軍有らば殿が御旗の下に立つ。田邊とやらの安藤殿が面を見る用は無い。」彼方は拔歯の、大口開て呵々と笑へり、「民部、窮つたな？　摑け。摑け。汝も由井正雪として一流を立つる奴、然樣には惡しう申すな。負惜みは武士の恥理ぢや。潔く謝罪れ。」此方も卽座に色を和して、「はゝゝゝゝ御家老の手剛、行懸りの御無禮は御容赦下され。民部改めて御禮申す、行末とも御見知り置かれ下され。」「あつはつは、善う言うた、流石汝ぢや。然るにても乃公が長々の在府中、何故に一度も訪來れなんだ、恨みぢやぞや。」客は言ひつつ、主人が眞向に摑乎と胡坐せり。茶色の革柄に朱潤みの海老殼鞘、寸延びの大小を十文字に打叉へて、雄松の瘤見るがやうなる日焦の毛腕の其柄半に掌せかけたる、齡は頽たるも背は屈まずして、但見る例の長久手風は其鞘の邊に戰げり。「ぢやが喃、正雪、聞いて哭りやれや。彼の兵庫といふ不心得の奴。むゝ、知らぬと與。」「存じませぬ喃。」「はて扨其方も記憶の惡るい。あの松坂で其方が捕へたといふ肚年の發狂者よ。な、想ひ出しつらう、其の發狂者め

が彼の城中を出奔いて、何う念うたか自己が大事の殿、お主にも今は大切の主なる此方の殿を對手に取つて、三十七ケ條といふ曠語を好うも排列て、目安として、大公儀へ出しをつたが、固よりはや執柄も無い不埒の言、讒言といふにも足らぬ虚構ぢやで、昨日殘らず御前も濟んで、それで予も此から和歌山へ歸らうとする其の途中ぢやよ。面さ見せなば、乃爺、一睨みに睨み挫いで、素首抽抜いて棄ても與れうと思うたに、素奴、京とかで自滅したので、其れで這面見せをらぬ。是れのみが遺恨いが、扨、の、世間には不思議な馬鹿者も有たものよ哂。聞けば其の兵庫めが腰押して、此方の殿を是非に謀叛に墮さうといふ、や、おツけも無い惡計を爲た奴が別に有ると哂。猶聞けば其の惡計の馬鹿者は、此方の殿にも些少御由緣ある奴ぢやといふ。然様の奴は御を與るゝ主の手を噛む犬猫にも劣つた奴。喃民部、爾うはお主は思はぬかな？」正雪は色をも動かさず、「いかにも然る奴は世の中の害物、疾う御成敗が可うござりませう。但し何故紀州家には、然様の御家來のみ多う出ますると？」「出るでは無いは、傍が皆忠義ぢやで然る惡黨の好う目に注くぢや。」主人は、這處ぞといふ如くに其膝を銳く前めり。「いや、然にもござりますまい。孔子が僅は禮を知り、盜跖が僕は盜を知る、主が謀叛を持たるゝから其家士も亦た逆意を念ふ……と我等は存ずるがの。」「呀？其言は、」と彼の拳は疾く刀柄に懸りて、「誰れ誰に言ふ？」「はゝ急がれな、此方には其の證據がある。」「紀伊殿御謀叛といふ其證據が？」「勿論ぢや。やア宮出い」

（百六十四）

客と主人が問答の始終を小陰に竊聞ける宮は、其の剛健在る胸も有繋に躍りて、一寸の先なる安否の程を測り難ねしに、潑汁は今や我が上にかゝりて、思ひも寄らぬ、紀伊殿御謀叛の證人といふものに爲られむとす。彼女は實に其身の進退に迷ふと與に、師の所爲の大膽なるに呆れて夢見る如くに感えたりき。其はもとより師の爲なり、言へとあらば我も和歌山にて見聞せし事許多く有り、無き櫛に柄も着げ、有らぬ枝に葉を添て、其も云々、彼も斯々との論證せむも難からぬが、其を云ひたりとて女子の我が推量の、片言の、此の大事なる爭論の證據となるべき歟。結句は彼の口剛爺に捲し附けられて、果ては現在の主を謀叛と誣ふる、不忠不義の者、家老の予が成敗なんど、彼奴が思ふ壺の陷穽に陷りて舌に及ばざるべき珍事の出來ることあらざるべき歟。然るにても師は我を喚びて、何事をか云はしめむと爲る？ 倘くは彼の行懸りの詮術なさに如是る事して其の一時を延べ玉はむと歟。然らば此處にて我が出でたるが好き歟、否ぬが好き歟。出でなば理非の端的に決着て、或は其の悲傷き目を當面に見む、出でずば其の證據を後日として、或は此座の事無くて治まるべき歟。さらば出でぬ歟？ 然なり、今は我面を現はすべき時ならず。と宮は其次の間を鼠路慄と起ちて紙襖の外に去でむとす。「宮、出ぬかつ！」激甚しき喚聲は我が師なり。同時に憎き爺公の聲も聞えぬ。「むゝ宮となゝ。あの小女郎か。小女郎が在るか。やア小女郎、疾う出い。逃るな！」逃避ると云はれては既や意地として去れぬなり。彼女は覺悟の臍を固めて其場に出でぬ。「帶刀どの久濶ぢやぞ。」「むゝ、果然汝ぢや、出來いたな汝は。何時來たか？」「出來しも爲ませぬ、今來ました。」「いや出來いた出來いた。那程の事出來さう奴と乃爺も思うて殿にも薦めたが、善う彼奴に腹を切らせた。今度は大出來ぢや。殿が御謀叛たらいふ證人に立ちをるとの。甚麼樣の事を師に話いた？」宮は覺こずして目を圓くせり、猝に師の面を覗むとする時、「宮其の腹を切せたいと

ふ、何者ぢや?!」正雪が眼は名狀すべからざる悽愴き光を放ちて、我睛を熟と射たり。宮は慌遽てぬ。「何者とて、あの兵庫‥‥」「誰が汝に、其の兵庫の腹切せた歟?」「殿様と此の帶刀どの。」「何様の罪兵庫にありて、其者に腹切せいと申された?」「殿様を御謀叛と誣ふる大罪人!」「而て其の罪人の討手に向うたは、汝一人か?」「いや町奉行の吉見どの。」正雪は然も爲得顔に打笑ひて、「はゝ御老人、證人の口は擧り申した。まづ此れ丈ぢや。」帶刀も亦た嘲ける如くに笑へり。「民部、其事が甚麼とした? 其の兵庫が自滅したのが。」「いや自滅したのでおりやらぬ。牧野兵庫は、これなる宮が手引によつて、紀伊國殿町奉行吉見某が詰腹を切せておぢやる!」「ふむ、其の詰腹を切せたのが‥‥?」「何故に拘引召されぬ?」「汝も武士の法に暗い。大罪ともあれ彼奴めも其以前は紀伊國の家老、況て殿が御傍近くも召された者、何かの御不憫を思し食されて尋常の切腹と沙汰せられたぢやは、其れが其の武士の情誰、一つは紀州家の外聞な‥‥」「厭はると歟? 否や其れは内々の事、此場には公の私は容れ申さぬ、況んや殿が御不憫とも御憐憫ともあるべきは、御家の祿を食みて御恩の下に在る者への沙汰、彼れ兵庫は今は天下の浪人おざる。浪人の進退は公儀の町奉行、其の町奉行を差圖かれての自儘の穿議は——はゝ正雪は、武士の法には暗いか存ぜぬが、天下の御置目には明るくおざる。」

(百六十五)

浪人は町方支配、其が支配の奉行が沙汰をも待たず手をも經ずして進退するは成らぬ事、此公儀御置目に違背の罪を何と申し開かるゝ歟、とはげにも紀伊國君臣が致命の急所に一針を下し得たるものにして、老功の口强馬も甚麼と此の鐵襷を術好う外づし得む、と想ふには引返たる老人が頗は脫れむ許りに高く笑へり。「うゝお主がよ、其の自讃の天下の置目には明るいか知らぬが、自己の主家の由緒には暗いは〳〵。正雪、汝は紀伊國を甚麼樣の御家と思量ふ?」正雪は此答に困めり、是れ其言錯らば、或る破綻を自家と暴露すべき懼れあるを虞りてなりき。猶彼は肚底に、此の老猾の强辯當るべからざる如きもの有るに驚きたり。「這馬鹿者めが、汝がやうなる奴は一つを知りて二つを知らぬ、一文字に今一畫足さば二文字となるといふをも知らぬ奴——紀伊國の御家を尋常の平大名なんど、同一に思ふか。」彼の狂態は又徐々と演じ出されぬ、其の落着の案ぜらるゝに、掌に汗を握るは、哀れ彼の宮なりけり。「こりや、紀伊國の家といふはな、諸事の仕置、柳營と同樣たるべしと故大御所の掟てさせられた。其事を汝未だ知らいで有る歟。其家として其の主家の由緒を知らぬ、隣が家の系圖を調査て自己が父の戒名を忘失るゝ癡漢と汝は同一の馬鹿者ぢや。」正雪も腹に据兼ねたり、況て其れ位の由緒といふを事々しく氣に、と彼は良居丈高に、「馬鹿か癡漢か、正雪存ぜぬが、其の大御所の掟と申すも大公儀御置目と紀州の式目と別樣ならぬと迄の義におざらう歟。公儀と紀州と兩樣! 個個別々の御制度とは、得も‥‥?」「分解ぬか! 未だ! 例はゞ公儀直參の武士が將軍に不足を構へて祿を還して浪人する、其浪人が更に將軍に野心を懷いて柳營の事を惡ざまに語ふ。此時將軍は甚麼とお爲やる歟。見當り次第召捕へて、斬罪にも、死罪にも、切腹にも其罪の輕重、其科の大小、其の舊功の有無とによつて思し食の沙汰あらう迄ぢや。其の成敗の振を、紀州も公儀同樣と大御所の格別に掟てられた、其の意趣は深祕とあつて汝等には言ふまじき事なれど、究竟は將軍の我儘を抑禁られうが爲め。其等の事の穿鑿もせいで、甚麼の汝が、彼奴を拘引

ぬの、搦めぬの、公の、私の、自儘の所爲のと、大それたる置目沙汰――其分ならば定めし汝は、紀伊國に後暗い事でもあらう、其故に生口にしては面倒ぢや、詰腹切らいて其口を滅せ、とでも云ふ如きものと邪推しをつた歟。其れで其の主が謀叛を持つなど云ふ歟。小雀の心を以て大鵬の腹中を量る。こりや此の宮に接引のさせて、吉見して那奴に自滅させつるは、別に繊澤といふもの有るに、其爺を關聯らすまいとの殿が別段の御配慮ぢや、すなはち京都を重んぜらるゝ、槐門の名家に疵つけまじとの思し食ぢやを、悪しう僻め見て！　其れに附ても汝に問はうず事が有る。汝は標札に紀伊國殿家來と書いたが、何時、誰が紹介で、自己が殿の家來となつた？」還す辭も無くてゐたりし正雪は此時に首を擡て、「異樣の御不審、某が大納言樣御扶助の者となりましたるは昨年の秋、松坂にての御目見の際：：」「誰が紹介か？」「村上彦右衞門。」「不審で有るぞ。浪人一人召抱ふるにも紀州の法として一應家老中の評議にかゝる。予は家老の上座として、たとひ和歌山へは出仕せいでも詰の同役、水野其外より書通を以て申し通ずる筈である。況て汝が如き世に名を知られたる者、其を不沙汰とは？」正雪は故を悉く悉くしつ、「迷惑の義、然も某のは雲出にて御家の士と津が者と合戰の際、參り合して仲裁仕つたる功に依て其節に御目見、親しう御懇の御意承はつて御内並とござありし者。」「家中並とて？」彼は一頻に其頭を傾けしが、憶ひ得たる如くに其膝を撲地と拍てり。「むゝ、然ありとも誓詞は爲つらう喃？」

（百六十六）

正雪は此言には躊躇せず、「いかにも神文は差上げました。」「筆元は誰が檢た！」「水野どの。」「其宛名は？」「大納言殿。」「扨こそ汝つ！」老人の腕は直地に擧りて正雪が馬手の拳を攫まむとせり、心得たりと彼は素早く身を退く時、阿呀と叫びて押隔てたるは宮なりき。「御家老樣。理不盡ぢや！」「何が理不盡。這奴は上を詐欺る、大納言殿御意を騙稱る、盜、盜人ぢやは！」盜人とあるに彼女は愕驚きて正雪が面を視れば、其色は稍交れり。帶刀を見れば、最初より期したるが如き兩魂、師の腕に繫くべしとか、其の用意の捕繩の端をも懷中より現はしたり。「其れでも理不盡ぢや。盜人なりや盜人で何故に其盜賊の理由言はしやれぬ。正雪殿ぢやとて身に覺えある事なりや尋常に繩に繫られう。然ないうちは師匠の大事、妾も御前に抗ひ致します。」「ナニ抗ひぢや！」辭色火の如き敵手が擬勢にも彼女は臆せで、身を其人の楯にしぬ、「おゝ無法者！　理不盡の無法者には妾急度抗ひ致します。」時に、突忽微笑の聲ありて、徐かに宮が名を喚べり、是れ正雪が膽氣の復せる其の脣邊より發でたるなり、「甚慶を無益の言爭ひ。女の其方が無禮をするは結句は此父が罪科にならうぞ。老人も亦た御年齡甲斐おざらぬか、かゝる小女郎を敵手になされて。」宮も此時意注きたり、「然うぢや、お前も父樣ぢや。無禮はせぬが、さ御家老樣、何故妾が父樣を盜賊などゝ云はしやれた？　此の妾は紀州樣御家來分、ぢやに依て御前と殿樣の御依囑を領諾いて彼の兵庫めが御成敗の御手傳も爲ましたぢや。其れ程の御由緣の者、手柄の者の父をとらへて怎地盜賊などの汚名を附けられた？　縱や身分の高下はあらうも御前も紀州樣御家來なりや妾も大納言樣御家來ぢや。犬も鷹も朋輩ぢや。御家老ぢやとて御主の御家來、自己が朋輩の者の其の親族を理由も云はいで叨に捕拿て濟みますか。たとひ父樣は捉へられうも、妾が勘辨なりませぬ。いや、勘辨如何あつてもなりませぬ。紀州の水を飮む程の者、汚辱の爲には一命も惜みませぬ！」一方には彼女の

精神の全幅を罩めたる、不惜身命の抗議を聞き、他方には正雪が從前の恐怖に引反りたる平然たる態度を視て、何とか爲たりけむ老人は些しく其首を傾けぬ。蓋ふに彼は、兵庫が目守を打破りたる餘勢に乘じて、其黨類にして然も巨魁たる正雪をも一網に搦盡さむと思へるならむ、雖然彼は公然ての面を出せる者ならぬに、老人は太くも慮を苦めたり、竊に其の細作を放ちて彼が動靜を疑はしめたるに、忽地にして報を得ぬ、彼は恣に大納言殿御家來との名を稱へて東海道を西方に上りぬと。此報は老人が爲に待てる海路の日和なりき、聽て此驛の逗留の場に追附けるが、猶彼は正雪の剛健者なるに苦心せり、因て最初は物の謎語に託けて其の語尻を捉へむとも籌りしに、事果して成らざりき。更に故意に狂意を演じ出しつ、彼が憤怒を激成して釣込むとせしものも、徒爾なる爭論の末に趨りて其機を失ひぬ。爰に最後の訊問をはじめて、有無云はさず縛縄むとしたりしもの、亦た其功の成るに垂むとして思ひきや宮なる奴の爲に妨げられたりき。なれど、其妨害は有力るものには非ざるなり、彼等が父子といひ、其女が主家の家祚分なりと云ふも甚麼あらむ、功は輕くして罪は重し、況んや其大姦を此に縛めば後來紀の海に風波絶えて、熊野の御山と君家も動きなくおはすべきをや、さらば彼が云ふ筆元檢めの其人ならざる、宛名の式に外れたる、其等を飽までに鞫問ひて、此場にて罪に服さむ歟。否、待て。と首を傾げしは此時の彼が思案なり。彼は什麼か尋思せる？　其臍は知らざるも彼は俄かにして色を和せり、「む、小女郎が、想も變らぬ口巧者な。但し其の紀州の水を飲むほどの者、汚辱に一命も惜しまぬといふ今の口狀が氣に協うた。因て此處では其方が親が繩をとゞめて國元へ召伴れう。如何ぢやな、異議なく參るか喃。」宮は早速に應へ難ねたり、正雪は冷笑つ首肯て、「何事かは存ぜず、固より紀伊國の御內の者、其の重職の御不審とあるに何處までも推參は勿論の事。はゝ何の異議。女義も確に召伴れまする。」

（百六十七）

大納言殿の御不例は尚全癒にいたらせられでか、御籠殿をば出で玉はねども、彼の「殿の御首無難」といふ驚くべく喜ぶべき注進を初めとして、追々に來る江戸よりの早馬は、將軍家の御氣色、帶刀が首尾、すべて宜しきを報げまゐらせぬも無し、之に加ふるに、最も御懸念に思し食しつる本人の兵庫も、喜太郎と宮とが働きにて、術好う自滅し、其父繼澤の三位殿すら敢なくも世を逝り玉ひたれば、生口の面倒も、死後の故障も今は全く根を絶ちぬ。奥州屋には大阪の藏屋敷より其事となく物許多を與せられ、信夫が跡をも懇切に弔はせて、總て內外を、情深う、微妙に處理せ玉ひし程に、黃なる金、白き銀の光る前には理も非も要らぬ此廓の習癖とて、苦情も起らず、難澁も申さず、哀れ死ぬ者貧乏なる、兩個が最期を嬉客と太夫が情死として主人より訴へたれば、其の內々を知れる所司代、又た町方よりも公然ては一言の掛合をだに和歌山に申し出づべき樣も無し。委曲を知し召したる大納言殿の御滿足は、只如意寶珠を御掌に握らせ玉ひたらむやうの御心地、世は早や我が有と思ほす御懽喜の最中に、帶刀は例の意氣揚々たる、紀伊國五十五萬石の米粒咬る蠹蟲めら、此の老爺が驕る馬の蹄の痕の土をも頂きて守護にせよといふ如き面色して下着せり。和歌山の追手の門も、今日の彼が面を入るるには餘りに狹隘かりき、御玄關の鏡板、其れが喰ひ反らせし頤鬚の影も映るばかんに淨拭へるを、撞々と泥足に踏み鳴らして、御白書院より中奥、御黑書院と打通れば、御小姓頭出で迎へて聽て御寢所へと案內す。其れと御覽ず

るより殿、「や、老爺か。日本晴ぢやな！」彼は突如に立寤りて、御夜具を剞ね除け、閉籠めたる御障子御紙襖瓦落々々と開け披げて、「日本晴といふ殿が寝てござるといふが有るものか。さアさア御起牀やれ。こりや面々、御夜具を除け。而して御髪を……。えゝ七十に餘る老奴が百五十里の江戸下だりから歸ッて來るを五十にも足らぬ御身が寝てゐて御濟みやるか。さア御起牀やれ。」殿は微笑ひて御牀より起せ玉へば。「此の厚衾！　五月中旬に蕈でも萌られうとか。甚麼の些ばアりの風邪さ感れたとて冷水の三桶も浴れば直ぐ癒る。這樣な輭弱な殿を捉らへて謀叛呼はりする奴も奴ぢやが、眞に信けて不審する老中も老中ぢや。こりや殿聞かれい。江戸の奴等はな、殿を怖がツて人喫ふ鬼のやうぢやと吐す。斯樣鬼なりや此の老爺が倒ツて捉て啖ふべいぞ。あツはゝゝゝ。」其の傍若無人なる語の中にも、自ら一種意味はあるなり、殿は疾くも悟らせて、「甚麼汝が、旗上うには軀體が大事ぢやは。然し此程は馬に騎るのも大儀ぢやよ。予が身の疲憊を思ふにつけて、老爺、這回は大儀ぢやツた喃。好う元氣で歸國て呉れた。」御睫毛に沿はれる感謝の涙滴には、彼が鐵腸も碎けて鎔る思なるべし、帶刀も多時暗涙に暮れたるが、「眞實を言へば、今回の義は、此の老爺なんども力には及ばぬ事。只日光の御神靈の殿を御冥護の御力と、二つには當御代（三代將軍家）の大腹量にて、叔父ごの殿を大切に思し召すからの御事ぢや。されば陣觸の附うやうない城内の御普請も、鹿狩も、雲出の事も、熊野の大船も、此の老爺が一途の強情と、出放題の申解にて、さしもの伊豆輩が鬼角に申すをただ好し〳〵と、上の醜りて御調停なさるゝ體。も、勿體なうて辱けなうて、又た嬉しうて、恁くてこそ德川の御家萬代と、歡喜涙やら有難涙やら老爺が袖は埒口もおざらなんだは！　其れにつけても紀伊國五十五萬石と此の老爺が皺腹は、上が御恩の拾物！　殿も此から仇等奴に思はしやれては眞實以て濟ませぬぞや。御身が一代だ、御宗家の末代、其骨を令利にされても忠勤の盡されでは協り申さぬぞ。噫、尊とや！　上が其御心も、偏に日光神靈の御感應。あら有難や!!」彼は涙の鼻を掀みつゝ、突と御前を起ち、御緣なる水盤にて口嗽ぎ、手を淨ひ、遙かに東方の空を望みて默禱に時を移せる態は、從前の頑固爺とは物の變れる、天晴れ此國誠忠無二の忠臣と、看る者の毛髮も坐ろ竦立ちて感えたりき。

（四十八）

良有りて帶刀は殿に對ひ、「拾ひ物といへば、今度途中で不思議の物を拾ひまいたよ。あの正雪と宮、其れを藤澤で拾うて來申した。」殿は微笑せて、「聞いた。其事は例の七里の者（七里目付とて街道七里毎に置かるゝ細作）から注進も有たが、彼奴が予が家來として往來するは今に初めぬ、疾からの義ぢや。」異しも爲たまはぬ御氣色に、帶刀は呆れぬ。「では其の、松坂でも抱へられた奴？」「いや抱へはせぬ。彼奴め自儘に名告りをるのぢや。」「其の自儘を制止もされいで奴？」殿は微笑ひつゝ、首頷せつゝ、「其義にも及ばぬ奴。是も後日の手段にならう？」「えい、手段ゞ」と彼は益眼を瞻るを。「然樣にも愕くな。彼奴が首に繩を繫くるぢや。」「又しても其樣な！　今度の事にも御懲りやらいで奴。御身が手段は每も〳〵、最初は物を手に執る樣にして後には爲損じて周章かるゝ、去年の鹿狩が好い手本ぢやを。其れにも目の醒めで又あの惡黨を手に飼ひ置く。何たらいふ仙人の虎を懷けて後に其れに喫れたといふ、話と同一ぢや。厄代も無い！」苦笑ともせぬ彼が此の强異見に、殿は逆忤もせられぬなり、然りとて其を承諾も爲玉はぬなり。「一通りは道理ぢやが喃、

其れには又予の考慮もある。結句は宗家への忠義ぢやよ。」「口の減らぬ！」と彼は言下に唾棄する如くして、纏き出だせり。「惡黨を飼ふが宗家へ忠義なりや、我等を初め忠孝に身を須ゝ士を養ふは不忠にならう。其れならば何故彼の兵庫を成敗召された？　兵庫より一層上の、然も今度の大將たる那奴を飼ひ置くを忠義なんどゝ……御身が其意なりや此の老爺が皺腹賭けて今回の出府も爲なんだものを！　但し其の忠義とは甚麼が忠義ぢや？　言ツしやい。」彼は勃氣なりき。勃氣なる彼には殿も其の御胸底の底なる、祕中の祕を明かし得玉はぬなり。と有りて彼が一旦口の外に發したる事、是非に徹貫さで置かぬ氣風を知り玉へば、甚麼が忠義ぢや？言ツしやいの一語を既に聞せし以上は、彼が首の捥ぐる迄は窮迫して措かざるべきをも知し食したり。然して又此の一義をば、彼に意得させ置き玉ふべきの要有るなり。勃氣なる彼、我が意を得さすべき彼、其の中間の適好處をとりて、逸らせず、駛らせず、騎手の意を好く知りて我が目的地に達らしめむとする手綱の捌き方は扨如何、と殿は少時案じさせたり。「いや、其義は此方よりお主に言はうか喃、お主は又甚麼樣の考慮で其の正雪を拾うて來た？」彼が胸中を先づ探問むとなり。彼は直地に、「成敗し申さうとて！」「何故又た其場で成敗せぬ？」「其義ぢやで。殿。眞實は江戸にて、彼奴め當家へ來の名を詐稱て海道を上ると聞き申したで、豫て目を注けつる奴、此等こそ有無を言はさず細縛うて成敗せうに外されぬ時機と直ぐ江戸を立ち、藤澤で追附いて扨て紕間の始めたに、流石の奴も詰詞の事から尻尾を出いて、松坂にて召抱の折、筆元を見屆けたは水野太郎作、宛名は殿なんどゝ暗きをる。固より筆元は物頭に目附兩人、宛名は家老中であるべいを怱く狼狽て、其れにても不安心と心附いたか覺束ない面色したを、這處ぞと絆捕に着手た時、支牾たてしたはあの宮ぢや。彼奴、正雪とは父子、其子たる妾は當家の家來分、其父が殿御家來と名告るに不思議かなどとも言ひ爭ふ。其の爭論は執るにも足らぬが喃、帶刀案じたは彼奴ら兩個が面魂ぢや。親父の奴めは沈着き拂うて如何にも丈夫に刀の柄をも握るべい體、女といふ奴は敵に遇うて確に耦刺へも爲べい態。惡しう成敗せば血雨も降らさう。然りとては今公儀の御不審の解けつる端に、又た此處にての騷動も世間への外聞、一ツた江戸への恐惶とも慮うて喃、扨て斯う當地へ兩人を召伴れた……が、いや心太い奴、道中の伽に父子交る〳〵老夫が身傍に來て、親父めは四方山の談話をする、女の奴は腰を摩む、肩を叩く、やも全然で帶刀を小兒扱ひに爲をり申した。其の惡黨、殿が術でも難かしい。此よりは其の父子といふ來歷を問ひ、其の詐稱の根元を鞫いて、正雪めは只敗ぢや。」彼は頻に殿が御意に不同意なる首掉を掉れり。

（四六十九）

此時近侍はおほく退りて、御傍には浪邊大學と童小姓四五人とのみなりき。殿は老人が始終の言上、其の意見、其の首掉ふる態とを聽つ視つし玉へるが、然も有らむとの御氣色、我が符に合へるを微妙とも思し召したらむがやうに、「其、其れぢや。其體ぢやでの、予も迂可とは手を下さぬぢや。彼奴が剛健なるは其方が視た通り。又其の腹中には甚麼樣の計畫があるかよも悟得ぬ。今の分、予を押立てゝ大將として、天下に旗を擧げうとの考慮とは知るも、亦た京都へ手を廻して織澤の卿を籠絡めたから案ずれば、萬一彼の關白殿など挑撥いて喃、事を起す、其の手段無いにも限らぬ歟。もとより烏原の殘黨なれば、九州にも一味はあらう、又軍學の師範として諸方へ出入れば、一城一所の主たる者

にも方人の無しとも言へぬ。然すれば、或は、予にして情無くば、彼奴自身に采配把って京都を笠に、天下にも號令する？　彼が先祖として世間に誇稱かす正成が二の舞なんど爲ぬにも限らぬよ。然ありてはと案ずるで……」「其れで諫言を寛徐うお爲やると雖。其れは世に謂ふ遠慮が不沙汰。むの何の御懸念の要るべい、引捕へて首切って棄てば、只其れ迄ぢや。」「が、喃、其れも唯予が推量のみぢや。推量で人を成敗する、其れも成るまい。」「成るまいといふ中に、急ねば成らぬ場合となツたりや如何お爲やる？　いや又た必然成る。成る奴ぢや！　嫩葉にして摘まざればぢや。後悔は先に立たぬは。」彼の苦諫は十分の理あるものなり、されど又頼宣卿が一生、一個の辜無きをも損はじ、刑は必ず其現はれたるに施して、罰は必らず其服せるに用ふ、臆斷、片言、拷掠をもて其罪を裁するは家國に幸ひするの所以に非ず、と深くも信じ玉へる御心には、斧を用ふるの勞はあらむも猶其の嫩葉のうちに殘害はむの、不仁を肯て爲玉ふに忍びぬなり、若し夫れ此をしも敢て爲むか、予は今日あるを待ぬなり、去年の夏松坂にて兎も角もして棄てなむも易かりしを其を抑けて今にいたりて其初志に違へるを爲す、人には家の爲め國の爲とも言ひて罷みなむ、良心の問はゞ何と嘘へむ、唯予は何時までも彼を我が羈絆の下に繋がむ哉、逸奔せしめず、躍獸せしめずば其れにて足なむ奴、其を彼が間遠しとして人を嗤み、物を蹶まば、其は固より其迄の事、彼奴に其の采幣を執らせて、日頃自讃の楠流の奥意を戰場に見むも面白かるべし、頼宣が老後の思ひ出には何事かこれに過ぐべき、只兎しても角くしても目今は未可し。と殿は故意に打斃けたる御笑顔して、「老爺、道理ぢや。其邊の注意は予もあるがの、然りとては多寡が浪人の正雪めに紀州が怖畏て拷問の鞭撻を當てたと言はるゝも無念、且は彼も一流の者、無下に遇ふも最傷しい奴……で喃、此處は予に委任せい。彼奴めを與れい。」帶刀は勃如たり。「協らぬ！　否ぢや。此の紀伊國を一頭の浪人に換へて、彼の正雪めと情死して果られう殿に一埒は委任されぬ。否ぢや！　彼奴めは我等拾うた物、他人には與れぬ。」「なりや、交換にせう。」「とは何者と？」殿は莞爾たり。「豫て書通の、此方も京都で拾うた物。」「えい其の島原でか？」「されば其奴ぢや。喜太郎は公儀衆ぢやと言ふなれど予が見た處は、いかな〳〵、浪人の武藝者、此奴も一流の者と見ゆる、予は未だ見ぬが喃、由井めが黨に丸橋忠彌といふが有る。偖や其者かと思量へむ、唯予は何時までも彼を我が羈絆の下に繋がむ哉、逸奔せしめず、躍獸せしめずば其れにて足なむ奴、其を彼が間遠しとして人を嗤み、物を蹶まば、其は固より其迄の事、彼奴に其の采幣を執らせて、日頃自讃の楠流の奥意を戰場に見むも面白かるべし、頼宣が老後の思ひ出には何事かこれに過ぐべき、只兎しても角くしても目今は未可し。と殿は故意に打斃けたる御笑顔して、「老爺、道理ぢや。其邊の注意は予もあるがの、然りとては多寡が浪人の正雪めに紀州が怖畏て拷問の鞭撻を當てたと言はるゝも無念、且は彼も一流の者、無下に遇ふも最傷しい奴……で喃、此處は予に委任せい。彼奴めを與れい。」帶刀は勃如たり。「協らぬ！　否ぢや。此の紀伊國を一頭の浪人に換へて、彼の正雪めと情死して果られう殿に一埒は委任されぬ。否ぢや！　彼奴めは我等拾うた物、他人には與れぬ。」「なりや、交換にせう。」「とは何者と？」殿は莞爾たり。「豫て書通の、此方も京都で拾うた物。」「えい其の島原でか？」「されば其奴ぢや。喜太郎は公儀衆ぢやと言ふなれど予が見た處は、いかな〳〵、浪人の武藝者、此奴も一流の者と見ゆる、予は未だ見ぬが喃、由井めが

（百七十）

丸橋忠彌は、吉見喜太郎に伴られて和歌山に來りてより後、空しく其の町奉行所なる一間の内に閉籠められき。蓋ふに天下の奇事を楽めば、此際に於ける彼が境遇も必ずや其の一奇として算まへられざるを得ざるべし。彼は或る者の不法の成敗によりて僵れたる其友の死恥を雪さむとして、飜りて其の非理の成敗者より曲者の名を得たり。彼は躬ら公儀衆と言はずして、他より公儀衆の稱を獲たり。彼は押送せらるべき理由毫も存らざるに、遙々和歌山まで拘引れたり。彼は自由なるべき身を有ちながら、窮屈なる幽居せり。彼は其の寃枉を訴ふべき舌を有たざる奴、其の包圍を蹴破りて身を逸るべき勇

と力とを具へざる歟、身に寸鐵をも佩びざる歟、抑亦たきのといふ宮に細作と疑はれ、喜太郎に騙盜盜賊と罵られて、細目に繋けむと脅嚇されたるに膽落ちたる歟、然りとては其一轍の氣象、鍛錬の武藝といふも亦甚だ頼み甲斐なきものなる哉。焉んぞ然らむ。彼は汚辱を疾む疫病を恐るゝが如き士なり、故に其の細作と喚れ、騙賊盜賊と怪まれし時は、餘りの不意なるに一回は驚きたりしが、亦た其の驚駭は渾身の勇氣を何時迄も沮喪はしむるものには非ざりき。彼は又た正直に過ぎて信義に厚し、時としては敵の言をも眞實として身の過失を省慮ること有るなり、卽ち首盜人と責められたる際、心太甚だ疚しと思へるが、其も暫時にして我が此の所爲の敢て非理ならざることを自覺したりき。既に彼は勇氣を復せり、亦た其身の正道を履みて亡友の爲に力を致せる、俯仰天地に慚ることと無きをも悟了れり、達辯ならざるも事理を論辯ふる程の口は持ちぬ、力は彼等十人を合するも好く敵すべし、腰間の白虹一たび晃めかば其れが百條の鎖千條の繩もこれを斷つこと草を薙ぐが如くして、紛々として毛髪の如く飛ばむ、猶甚麼の脅迫かあらむ、威嚇かあらむ。然るを彼、一も是を爲さずして、只喜太郎が言ふ隨に汚目々々と拘れて彼の一室に取籠められる。忠彌たるもの汝は果して癡か、狂か。爰にいたりて其奇は既に怪となれり。癡に非ず、狂に非ざる彼が所行の怪訝きは、亦た其友の爲に危險きを冒すものなりき。彼は以爲らく、馬鹿者の兵庫は色に溺れ、財に昏みて、剩さへ今や身を敵の手に喪へり、彼が父の卿、亦た卑吝の小人にして與に大事を謀るに足らず、然らば今後に我が兄として見る其人の大望を翼けて、其れが宿志を成さしめむもの、唯其れ紀州か。紀州は憑むべし。然れども予は未だ彼殿の風丰をも識らぬなり、其の政治の良否、武備の虚實、不、士民の上に懷けるや、國の富るや貧きや、山河の形勢、封内の險要、運漕の便利等をも未だ熟く知らぬなり、其等の事にして我意の如くば、こゝに初て我が丸橋忠彌なることを告て、松坂の再會を殿に勸誘むか、或は猶彼等が言ふ公儀衆として其心底を誘き見むか、其は姑く時の宜しきに隨ふとして、兎も角も好時機なり、若かず彼が言の儘に屡くまでも其地に臨み、可成的に其の内情を搜らむは、と可怖くも其臍を固めしなりき。

來て見れば、些しく其の所望は外れぬ、只一室所に閉鎖られて、一歩も其外へは出づるを得ざるなり。殿はと問へば、不例と應ふ。責て喜太郎をと尋ぬれど、これも公用繁しとて其後は面を見せぬなり。雖然、其の京都より大阪、大阪より堺、岸和田、信達、山中、山口と踰えて、和歌山へ來れる途中にて、岸和田、貝塚の古戰場をも訪ひつ、千石堀、積善寺、濱の城の殘墟をも見つ、山中越の地險には攻守の勢を繪りて、紀の川の天嶮には防禦の法をも案じたり、其を再び肚底に反復して右さまに思ひ左さまに慮ふる程に、太だ心に獲るものありき、其等の事に慰められて卯月の長日も徒然ならず、此上に猶ほ此城下を徘徊して民風を搜り、士氣を探り、兼ては城の繩張の樣をも視ばやと思ふ、彼は暗に其鬱を覩ひたりけり。

（百七十一）

突然として吉見は來りぬ、彼は殿が御不例の全癒にいたらせたる事を言ひ、右につき親しう江戸の樣子をも問せたう、客人に御逢との義を仰出だされぬ、苦しからずば今宵といふ、其辭もいと鄭重なりき。忠彌は内心の歡喜を匿して、只然るべうとのみ應へぬ。吉見は怱々にして去れり。忠彌が心は今しかすがに悸めきたりき、されど豫ての望みの一分を測らずも達する、今宵こそとの勇氣は其れをも壓して、只管

に其の案内の時刻の來るを待つ。手束ながら髪をも結び、湯浴し果つれば、用意の衣服とて社杯に袷小袖の新裁きを二つ、廣蓋して贈り來ぬ、其れを着替て儼然に座に着ける、勇士の身嗜み、美人が靚粧を凌らせるにも增して天晴れなり。「ほゝう、支度は出來申した喃。」と吉見は其の座敷に入れり、「就ては御前への御身が披露ちや、何と名を申さうか。」手輕く問へば、手輕く答へぬ。「權兵衞とも、八兵衞とも。」「はゝ權兵衞かな？　似合の名ぢや。はゝゝゝゝ。」老練なる吉見は、再度と彼に馬鹿にさるゝ程の馬鹿にはあらざりき、腹は立ちたらむも笑謔に紛らして、いざとて案内す。案内につきて來れるは城の追手なり、但見る此城、東西は七八町、南北は五六町もやあらむ、今の殿が身上に比べては敷地小さく、然も平城の、要害とても然ばかりは有らぬが、其の纒張は微妙くして江戸城のものに髣髴たりき、古傳には天正の末、桑山果報院の築くところと言ふなれども然にてはあらじ、堀、石垣、堀の上げ方、狹間の切り方も甲州流とは確に見ゆるぞや、然らば小幡（景憲）か、いづれにも其の一派の士の結構にてあらむなど、彼は眼を偸みつ覷ふに、橋にかゝりぬ。「權兵衞、急歩がれい。」喜太郎に急つかれて忠彌は驚きしか、早足に追附かむとして忽地爪先に小石を蹴つけぬ。石は轉々と轉がりて堀に入る、井といふ水音高し。「慶！」喜太郎が眼は電光の如くに彼を射たりき、忠彌は一言をも發せず、空知らぬ面して續けり。怎くて到り着きたるは、殿中にあらぬ例の築山の御茶屋なり。奥の方には御話の聲、又た打興ぜさせたる御笑も時に漏れぬ。待合の腰掛にやゝ待草臥れたる忠彌は、扨は予が外に猶客人やある、人ありては物惡しや。と思ふ折柄、喜太郎は又出で來りて、「權兵衞、此方へ。」可厭き權兵衞々々々は今は中々我耳にも觸犯るなり、半は不興の、應！　と應へて後に跟けば、此の意地惡き老爺は仔細らし氣に御前に出つ、一層高聲に、「御召によりまして例の者、權兵衞參上！」「むゝ、例の者か、權兵衞か。苦うない、其の權兵衞、近う。」御覽も交れる如き此の御意は、床の正面なる殿の御口より出でぬ。權兵衞さへも忌々しきに更に輪を加けたる例の者！　例の者とは江戸の細作とか、首盜人とか、扨は此の主從、我を捉へて彼の意趣晴しに調戲物にすと覺えたり、然もあらば片腹痛や、此方も忠彌、曲者の丸橋とは御存じ無きか。惡しう戲謔て後悔の日御覽ずな。と腹立つ隨につか〳〵と御敷居の際まで進みたる忠彌！　彼は什麼、此時何とか爲たりけむ、眩きまで點されたる燭火の影に、心許なげに此方を顧眄れる或る二人の面を見るより阿と逡巡きて、棒縛に遇へりし畑盜人の、眼のみ働くが如くに突立ちたりき。

（百七十二）

立竦みとなれる權兵衞の忠彌を見て、殿の身邊に控へたる老爺、これは又た喜太郎には夐に絶して面色嚴めしう、眼の光明星の爛たるが如き老夫は。突忽銅鑼を敲く如き哄聲して、「其處なる者、控へい。喜太郎、それ！」「權兵衞、御前ぢや。先づ其場へ。」彼は忠彌を正雪が隣席へと坐せしめぬ。殿は御座いと泰らかに、又た莞爾と、「權兵衞か、疾くに其方へも目通りを申付けうと思うたがな、不快ぢやで。如意ならなんだよ。此盃取らせう。」御盃を擧げ玉へば、大學は受けて彼に與へぬ。彼の明星の眼なる老爺は、「宮、酌せい。」唯と應へつゝ彼女は起ちしが、口惜くも臆れて、其の手許の戰へに慄へて、銚子の嘴の盃の緣に戞々とあたる音、我ながら淺ましと思ふ程なりき。其れをも殿は御覽ぜぬ體、「民部、其方が其の隣席なる新參の男。其人をば看識らぬ歟。」如是る御意の有るべきとは、彼は其の權兵衞なる者を瞥つる

時より肚裏に暗知り、毫も躙らはず、「面識りませぬ。」「權兵衞は如何ぢやな。其れなる民部を識らぬか喃？」彼が意氣は慨然たりき、彼は惟ひぬ、飽に忝くまで我が腹底の底までをも看透されたる以上は、我が權兵衞の丸橋忠彌なる事を知られぬとは得も有らじ、然りとも知らば斃ひなる假名など名告で實名明々地に告げ、天晴れ武士よと稱はさすべかりしにと思ふ程なるを、又今更に何を恐れて我が兄上と見る人を看識らぬなんどゝ詐謁るべき、況んや當時江戸において三歳兒だも其面を識る正雪、其を知らずと言はゞ益彼等に侮蔑れて、愈其の汚怯れたるを嘲笑るべきをや。と彼は其腕を扼り、更に下されたる盃、つらりと喫して、「存知でおぢやる。由井民部とは看認り申した。」白髪なる老爺は初めて微笑みて、「むゝ看識たか？好う看識た。宮、今一獻。それよ、其方は此の權兵衞とは馴染ぢやろ？」思ひ懸けなく調謔れて、彼女は只さし俛首ぬ。宮と喚ばるゝ此の處女、扨は其女かと忠彌は心に怪訝めるも、今は倘だ其を問ふに遑あらざるなり、唯彼は一途の悶邪苦邪に驚愕も危惧も忘れて、例の無遠慮の本性、醉ひて一番御意得むとや彼の盃を下に措き、脱むが如くに顧回して、「げに御事は彼夜の女ぢや、度々の酌も面倒いぢやろに其の銚子を與せ。」宮は錯愕て遽に正雪が面を偸視ば、彼が眼は、勿過飲しそ、と數瞬けり。「いや其の御遠慮には……。何程にても御酌しませう。」「はゝ、然らば兎てもが下賜れの御酒、今些し大盃でな。」斜めならざる殿が御氣色より、彼の老人は躍り上らむばかりにして滾悦びたり、「有爲々々、權兵衞天晴れぢや、面白い。大學、それ其の三組の下の盃、三合入か。可い可い、取らせ。」猩々の高蒔繪せる大盃は彼が手に在り、忠彌は滿面に笑を泛へて、いで酌をと突附たれども、宮は逡巡ひて起ち難ねたりき。げにも彼女は起ち難ねたるべし、此の巨大しき大盃、一盃を喫さば今一盃とあるべし、其盃を傾けば又一盃と强ひむ、三盃四盃と累ね、六盃七盃と過ごさば、彼什麼大酒とあらむも爛醉でやは。さらぬだに這奴の所爲たる渾て心底の濟めぬものなるに、其が醉はゞ抑も甚麼事をか饒舌り出すべき？彼方は固より其を自白すべき謀計とも見るを、其術と知る〳〵我が此酌に起むことは、好みて師の首に刃を擬るにも均しき歟。咄此の毒水我が師を毒する水！寧ろ此酒が眞實の毒ならば彼に與へて、端的に其禍害の根をも斷つべきを、と彼女は涙含むまでに思ひ屈したり。時に正雪は儼然たる面を正して言へり、「權兵衞どのとやら、其の大盃は御分別あるべきもの歟。此の御座敷は貴人の御座、自然に尾籠の事ござあつては御自分のお爲にも成り申すまい。由井民部意見を申す、屑捨め召されい。」

（圖七十三）

「其の遠慮は無用ぢや、給べ〳〵、予が容す。」「はゝ、殿が然は御免さるゝ、權兵衞喫れ。」「揖者御酌に立ち申さうよ。」と殿と老爺とが言の下に大學は起座ば、「珍客の見事の風、見せ申されい。」と喜太郎すら挑撥しぬ。多勢に言屈められて正雪が苦心も今は畫餅なり、彼は是非なき口を噤みて差控へぬ。「あはゝゝゝゝ由井どの案ぜられな、權兵衞といふ男、此れ程の小盃、五盃七盃傾けたとて醉て尾籠を振舞ふほどの腰抜でもおりやらぬ。然るにても江戸に名高い正雪老と、此の和歌山で御目に懸るも不思議の緣ぢや。地體和殿は、何用あつてか、此邊くだりへ渡せられた？」問ふ端に大學は宮の銚子を引取りて、隻手に突出したる忠彌が盃に泛々と酌せり。其を一睨せる彼は、鯨鯢の潮を吸ふ如くに苦も無く一呼吸に喫盡して、けろりと閑たりき。呆れて大學は又注ぐを、高野聖の

大般若繰る如くに息をも繼かず彼は乂た喫干して、平々乎たりき。愕きたる大學、意地にかゝりて這回は更に溢れて散るばかりに注て取らすを、彼は猶渇るし餓鬼が菩薩の功德水を得て競爭ひて飲む如くに、喉を鳴らして一滴も餘さじとばかりに傾け了り、舌鼓いと高らかなりき。此の荒涼じき體を見て、呆氣に奪られしは喜太郎なり、微笑ませたるは殿なり、故意に笑面を假粧へるは正雪にて、既に覺悟の眼を瀏るるは哀れむべき彼の宮なりき。其中に、小躍の膝を拍きて扇颯と開きたる彼の老爺は、「好氣味！　好氣味！　男振、盃振、天晴れぢや。今一獻喫るか？」既に大小四盃の酒、其量大約一升を喫して有繋に些しく眼邊の帶紅める忠彌は、高かなる舌鼓と與に其の脣端を舐回して、「えい、此の結構の御酒、喫めとあらば何程でも……但し御老人、肴が欲しい。」「むゝ望め望め。帶刀近頃に此れ程の小氣味好目見た事がない。何なりとも肴せう。望め〳〵。」帶刀と聞て、看得たり、赫と彼が其眼を瞰れるを。「扨は御身が安藤殿か！」「うゝ、身が安藤ぢや、其の帶刀ぢや。」「扨は江戸で、本意召された噺！」「本意も本意、十分の本意して歸國た。」彼は其膝を一押前めて、「むゝ、安藤殿なりや我等肴に所望がある。先づ喫う。」彼が氣色の變れるに、大學は其銚子を摑きて稍身構ふれば、喜太郎も素破とも言はゞと目を凝るぬ。宮も身を正雪が柄にして、此の不思議なる男の擧動を一向注視れり。其の者共が爲體を脅眼にも懸けぬ忠彌、再び盃を擧げむとするを。「お待ちやれ。」と扇して其手を駐めしは正雪なり、「さればこそ和殿、早や醉醒ぢや。御身も其の公儀衆とか言ふ。公儀衆なりや公儀衆だけの禮義作法も御守りやれねば成ぬもの。安藤殿は名こそ紀伊國御家老なれ、身柄を申さば五位の帶刀先生ぢや、殊には公儀の御附人、當殿の御保傳、故大御所の昵近の歷々、然も天下の古老として幕府の御待遇も從常ならぬ仁。かゝる御仁に肴の所望、其の居丈高の高聲、公儀人には不似合の上に盃の振も我等眼からはいと無禮ぢや。前非は是非なきも後罪を重ねぬ先に早や御退りやれ。民部實心忠告する。疾う御下りやれ。」目をもて吃されて忠彌も漸其心となれるか、把りたる盃を膝に堵き、首を俛れて打案ぜり。「さ疾う〳〵。」正雪は更に急立げて、顧て宮に目を注げば。「さ、妾がお供しませう。斯うござらしやれ。」「むゝ、由井殿が忠告は辱けないが、此れなる小女郎は甚麼者ぢや？　や、貴老、這奴は京で綴澤の家司前波某が妹というた奴、今見れば當家の奥をも勤むる模樣。……やア小女郎、汝は抑も何者ぢや。」執られたる手を振拂ひて、起つにも非ず起ざるにも非ざる忠彌は、徃懸の駄賃といふ如くに、其の不平の臀を宮が上に向けたりき。正雪は打笑ひて、「何者でもおりやらぬ、某が最愛の一人娘ぢや。」「えい御身が？」「さればこそ！　某も其等の緣で今は當家の御家來分ぢや。」「えい、賣たか！」彼は絕叫べり。「甚麼を？」と正雪も驚きて問へば、「某を！」彼の虎鬚は戰々と顫へり。

（百七十四）

正雪と忠彌とが爭論は紀伊國殿君臣には思ふ壺なりき、是れに依りて彼等が謀計の臍も知るべく、思はぬに得つる自然なる對決の場とおもへば、殿も帶刀も柢私に暗笑の目を逸しつ、其れが擧止、言語、行目までも一事も遺さじと矚視らるゝのみ。其の君臣の愉快なるだけ其丈に苦惱きは正雪なりけり、縱令其の途中に、遁れぬ、種樣の事情といへるが起れるにもせよ、江戸を發達たる初一念を討へば、只此の目前なる、慾々しき、我を悶死もせしむべき程の奴が窮阨を救はむとてなりき、其窮阨を救はむとする奴、次第によらば我が一命を賭けてもと思へ

る奴、豫ては兄弟とも契れる奴、大事の有る限りを打明つる奴が、今は中々我仇となりて、従前より癖悪きを警戒めつる其酒を使ひて、兎毫の末にかゝる繊塵をも看做くべき怖しき人の面前に、譫げたる酔酬の狂態を盡さむとす、若し其れ馴も舌に及ばずといふ一言をこゝに過失たば、我が宿志も其れ迄なり、悉くとも知らば俗に謂ふ大の蟲に小の蟲、這奴薬殺しにしても看過したらむを、隣人の火を救うて其身を焼亡へる愚を我から好みて演じたる落度は今更ら恨むも愚癡とは言へ、然りとては憎き奴かな、と餘んの憤怒を胸に包蔵み難ねたる正雪は、流石に其の面色も變りぬ。と見たる宮は、阿呀と愕きぬ。「父さま、甚麼たる事、御前……御前ぢや。此の一埒は御前は知らしやらぬ。まゝ全般は妾に任せて。」「いや、子の汚辱は父の汚辱、父は知らぬが其方が人を欺騙たとありては殿の御前、一分濟めぬ。不憫ながら其方を討つか又權兵衛と勝負するか、両個に一個ぢや。然意得い。」「好うござります、妾も御前の兒、殿様の御家來由井ぢや、悪性れた事はしませぬ。善悪が生命一つぢや！」彼女は健氣にも、愍然にも、軀を大望の犠牲にして、義父に代りて當敵と耦刺へてとは覺悟せるなりき。敵手取られたる忠彌は案外なり、彼は宮を快よしとは見ざるも、亦た其女と決闘ふべしなど懸けても思はぬなり、況んや鬢喰ひ反らせる大の漢子が、隻手にも足らざるべき此の處女を對手とする、日待の不動が童子を追うて鬼事する楽落扇の狂畫めきたる猿楽も得爲られぬをや、と彼は呵々と哄笑り。「摑つ！」「摑きませぬ。妾は何時御身を欺岡たか?!」「欺岡たで無いか、前には前波が妹といひ、今は、民部が女兒といふ……？」「はゝ其事ばかりか、前波が妹が由井殿の義女にはなられぬ歟。養女養子といふ事を御身は知られぬ歟？」一句の下に論伏せられて負じ魂の忠彌は些と急きぬ。「むにや其事ばアリで無い、お主、島原で何と言うたか……主の丘庫が仇討を和歌山でする！　其の仇討はお主何時爲た？」宮をばもとより、彼は喜太郎をさへ等分に睨めたり。喜太郎は今は默止されず、「其義は濟んだ。」彼は御前も憚からず、開き得るだけの大口開て、發し得るだけの笑聲を爲せり、「うあツはツはゝ紀州の仇討は小兒の飯事か、木偶坊舞しの切合か、濟んだ仇討の雙方が生存て物言ふ！　但し御身は幽霊か。いや腹筋ぢや！　あツはツはゝ。」「いや、權兵衛。」と喜太郎は色をも變へぬなり、「和主は先刻、追手の橋で爪突て、足元も悪いと見たが、目も病い、耳も聾いな。今宮は何と申した？　紀州の家來！　既に當殿の御扶持人、御扶持の下に立つとなりや仇討なんど有るまじき義ぢや。況て御事が當地へ見えたは其等の事に管からぬ義、只某が公儀衆として伴れ申したを、悪らぬ穿鑿ぢや。」喜太郎は悉く囘護し果れたれども、宮は有繋に其の一言の末の違へるが疚しきか、口惜涙を眼に湛へたり。

（百七十五）

「要らぬ穿鑿？　むゝ、然らば其義は隨意にもお爲やれ。ぢやが此方には些と要る穿鑿が有る。」二囘の候的は既に念無う身損じぬ、こゝ三度目の大事の際とて忠彌は滿を持して發せぬなり、少時は四邊を睨廻せるが、「喜太郎、和主は今公儀衆として某を伴れたと言ふ。公儀衆たる我等を何と爲うとて伴れ召された？」「和殿は又た何事を爲うとて伴れられた？」意外の反問に彼は太く愕きぬ。「何事を爲うとは？」「伴なはるゝ趣意無くば、縦令某が伴れ申さうとて伴れらるゝ其許で無い。十王が觀進もくはうが爲め、盗人の書寢も夜稼の目的、和殿は何事の見當をつけて此和歌山へは伴られた？」有繋の彼も度を失うて言句に塞れり、喜太郎は猶

疊み懸けて、橋から堀へ投石どもして遊戯ぶとか？」耳を澄せし正雪は突忽、「慶？」と喚かけぬ、「吉見どの、是れなる仁が御堀へ石を投げ申たとは？」問はるゝに潑と意注く時、殿も異様の咳嗽一つし玉へり。喜太郎は笑ひに執做して、「いや、物でもおりやらぬよ。只權兵衛が戯爲、小兒の様な、はゝゝゝ。」言ひ消されて口をば噤めるも、扨は這男？　と正雪が忠彌に注げる目の、彼が視る眼と屹と合へり。此の相合へる眼裏には什麼なる意味をか通じたりけむ、其の靈妙不可思議の機は、彼等二人が胸中の祕に索むるの外、決して他人の臆度し得まじきものなるべきを、飜りて殿と帶刀とが四隻の眼は彼の秦鏡の奴を照らすが如くに輝きて、彼等が其の刹那の日語を手に執る如く、耳に聽く如く悟られたりき。而して殿は其の失望の歎息を縫に泄らされき。失望せる君臣に引反て、忠彌は今や百萬騎の味方を敵中に得たる如くに勇み立ちぬ。「小兒の戯爲も要り申さぬ、爪突かば石も轉げう、轉がらば堀にも入らう、堀に入たが甚麼と有る？　殊樣に公儀衆の我等を懸念ある紀伊國衆、扨は何事かの思し食し立つ義どもが有りて御用心專一ぢ？　やア帶刀の御老人、權兵衛への御肴は未だ賜り申さぬ、其の御肴には右用心の仔細御語りやれ。公儀人とて然ばかりに烟たい者にもおりないよ。はゝ先づ喫う。」彼は盃を把りたるも、宮はもとより、大學も唯眼を瀲視るて、酌取らむともせざるなりき。彼は其を右視左視つゝ、「はゝ、御酌が無い？　紀伊國殿御前の獨酌、前代の珍事、然りながら多い寡いの不足も無うて好うおざらう。あツはゝゝ。」彼は手近の鉢子を取れるが、又た舌鼓して、「結句は醉ふが詮、盃も面倒いぢや。獨酌も氣の毒なに此物で賜らう。」無作法にも鉢子を搖取り、彼は其緣に口を着つゝ阿呀と見る間に、一升入、滴露も殘さず傾け竭して、しゆふうと息を吻き、「御免候へ。」老人は見るも猶見ぬ振なり、忠彌は躙りぬ。「御家老！　さ喫ツた。所望の肴は？」「遣れぬはツ！」大喝せり。なれど彼も應せぬなり、「仁體に無い！　武士が一旦口外したを。」「汝が汝なりや、已も已ぢやは！」「呀、では賜さぬか？　や、御酌も下されず、約束の肴も賜さぬ。奇怪の事！」「奇怪で無い。無作法の醜態。さる眞似する浪人風情は獨酌で過分なぢやは！」浪人と言はれて喫驚くかと思ひの外なる、彼が神色は自若たりき、「はゝゝゝ如何にも浪人。其の浪人が甚麼しまいた？」喜太郎は耐らぬなり、睨めたる眼に角を立てゝ、「こゝな騙賊！」「や、騙賊とは？」「公儀衆の、權兵衛の……何故最初から江戸の浪人丸橋忠彌と在體にせぬ？」彼は又た大いに哄笑へり。「やれ扨無念の事。其の公儀衆も權兵衛も、名附親は誰？　然ういふお主が勝手に附て……」と、言はるれば何さま、京にても、彼は公儀衆と躬ら告げざりき、權兵衛も亦た其の棄詞を我が拾へるなり、老練の喜太郎も爰に到りて些と赤面せり。

（百七十六）

吉見が赤面に御前は白けて、殿さへも良案じ煩はせ玉ふ體と見るより、如是る事には小鳩の如き素快き眼の正雪は透さず其問答を引取れり、「これは〳〵其許があの、御身が其の丸橋忠彌か、御茶の水なる御仁かや、これは〳〵。」と故らに座を改めて、「我等は今も御存知の市谷の由井民部介、御身が本郷の忠彌どのなりや鎌倉藏院の槍術の手は、未だ見ぬが、耳には雷のやうに聞えておぢやるぞ、好い場所で御意得た。然りながら最初より斯くは仰せで、はゝゝはゝ愚老に太く失禮を爲せ召された。一分免されい。但し以後は親親にな。」餘りに白々しき挨拶風には、傍若無人と跋扈り反れる忠彌すら烟に捲れて返答も頓には出でず、胡坐も掻き

かねまじき膝を窄めつ、いと赧顔たる、「義弟とも御看做されて……」「ほゝ兄弟か！　民部と忠彌、其れが兄弟とは車の兩輪ぢや。何と老爺、民部はやはや予が家來其の義弟とあらば忠彌も當家に由緣の者ぢや。召抱へうか？」可怖しきまでなる殿の御意に、大學喜太郎らは言ふに及ばず、事情を其か、と悟れる宮さへも、身に冷水を打浴けらるゝやう感えて思はずに毛髪を悚立たしめたりき。帶刀は讎りて事も無氣なり、「好うおざらうの。」「やア忠彌、其方は予が內に抱へられう噂？」「や、待ツしやれ、彼は未だ忠彌とも丸橋とも名告り申さぬ。此者果いて其の忠彌か、又た然る手者か、或は尋常の暴飲家か……」一方には殿を抑へ、一方には忠彌を脫めたる老人が眼中に、突忽彼が炬火の如き眼光を見たり。「やア御老人、忠彌は酒を差喫ひもする。醉もする。なれど前にも言ふ此盃の五盃十盃、其酒の三升四升、飮だとて舐たとて爛醉て不覺する程の骨無でない。視申され、此腕！此の腕節は鐵で鍛へて岩で固めた。十本の指、左右の臂、此れには開祖覺禪坊鳳榮法印から禪榮坊胤舜律師、覺舜坊胤清法印、覺山坊胤風瀧少僧都の流祖代々の精神が籠つておりやるは！　熟う視て其の物を申されい。」老人は打何首肯たり。「ふう、何さま鎌實藏院代々の系圖には明るい。ぢやが其の系圖は、他人の傳授一卷を偸視でも饒舌りは爲るゝ。又た其の鐵や岩で固めた腕、其れも乃爺には珍らしう無い、今でこそあれ既往の三河武士は、五體全身鋼鐵で固めて、胯は鞍摩れ、蹠は小砂利で塡めて師走狐が鳴く聲といふこん／＼鳴る。甚麼の其式の！」「では我等が腰拔とか？！」「腰は立たう、はは足も利かうは。其の小石を蹴轉ばかいた樣子では。」「技倆が有るまいと被仰るの歟？！」未だ見ぬうちは。」と首掉を掉れり。忠彌ははや爭論ず、徐に正雪を顧視て、「兄者、我等に就ての全體の不審は融けつらう？　今は見らるゝ通りの仕義ぢや。抱へらるゝ、抱へられぬの穿議は扨置いて、儕樣に申されては我等藝道の手前に對して一分濟め難い。なれど早や御身を義兄と立てた以上は諸事は御身次第、善惡裁判のしてお呉りやれ。」此問は正雪に取りて有らま欲しかりしものなりき、彼は數回首顏きて、袴の稜角を引立て、殿へ申上げむとして其の御氣色を窺へば、今や何やらむ御思案の爲體。序如何と差控ふる時、殿、「民部、忠彌の義を如何と存ずるの？」「餘義ない義とも存ぜられまする。」「では有るが喃、其の敵手ぢやで。」殿は又た御首を捻らせ玉ふ。正雪が肚底には、其の敵手と仰するに欲しき者一個あり、其は此の上座なる全般につきて愴疾しき老人にて、彼を忠彌が爭手に立たせ、散々に不覺させて以後何事の容喙をも成らぬ如くに恥面爬せむ、とは得ならず彌猛に思ふなるが、亦た彼が身柄といひ、今の殿の御意といひ、況て新參の我口より無二と然る事をば愛議さるべうもあらぬなり。喃。如是ば、忠彌、慾ひの禮義立せで、御身と勝負！と眞地にも言ひたらましかば、常に似ぬ優順しき心根と思へるものも今は中々其機を失へる仇となりけり、など彼は其の鬪慌しさに得耐へで、只管殿の、老爺起てとの御諚もあれかしと念じつ、御面をのみ注視き。

（百七十七）

一先づ型かな？　民部、忠彌に型をと申せ。實藏院の型は神妙の物ぢやと聲くに。」正雪は此の御意を得て心中の本意無さ限り無きも、然りとて其をもどかむ術の非ず、忠彌にそれよと目を咬すれば、彼は一言をも言はず、其儘身を起して飜然と御庭に下立てり。御座敷は俄に動搖き立ちて、御兄小姓らは手に手に燭臺を擡げつ、御緣に近く居うる程に、宵闇の庭の面も、芝生、飛石、隈も無う見えて、其中央にぬ

ツく起てる忠彌が形相は、天晴れ一個の大巖の地より湧き出たらむとも見えつ、或は大峯熊野の天狗の此處に舞ひ下りたる歟とも怪訝れつ。「見事であるな、好い男振ぢや。誰ぞ、彼に道具を取らせ。」意得たる大學は二間柄の華麗附きたる鎌槍を持て出でゝ、いざとて遽與せば、彼は受けて地下に置き、先づ躊躇うて、悄と會釋し、社杯の肩をちと緩弛め、袴の股立を高く揚り、胸を撫で、精神を鎮めて、頓て一聲の懸聲と共に起上れるが、其の突出だせりと見る槍は人の目にも留らぬまで快速くして、突忽文た以前の姿勢に復せり。「手際ぢや！　流星。善う使うた。」殿の御褒を得て、忠彌は屹と回顧りぬ。「御存知か？」「むゝ、奥允可八本の内の流星と見た。但し損じた歟？」忠彌は愕然たる其形容を正して、「恐れておざりまする、如何にも其の流星にござりまする。」「扨は損ぜぬな。今一手、十二本搦！　えい！」十二本搦とは、此も允可のものにして、敵の槍を打つ張つ、左右より隙なく搦めて突出だす間を得せしめざる、鎌槍の神妙を窮極し術なり。忠彌は益愕きて聖と蹈躇へるが、御詞の曳！　と懸れるに、物をと見れば、傍邊に垂枝梅の嫩葉濃く、其實の多く實りたるが一本あり。

彼はするゝと進み寄りて、槍の柄取り直す、と看る間に、「呀！」彼は此の垂下たる一枝を敵の槍にして、打張を懸けたるなり。打張は懸けたれども、眞正には懸けずして、枝との間隔一寸を指て懸けたりき。電光、石火、槍の穗尖は視る目も分ぬまで閃けども、觸らぬ枝は餘所を風の吹く如くに、葉も戰がず、枝も動かず、實の一顆だも墜ずして、危ふき鎌の其間に快よく眠れるが様にぞ見えたる。爲たり、爲たりの動搖きは此方に起りて、殿も御座に堪らせず、御緣の端に突立たせて、はや御現の、「出來たぞ忠彌、次は切鎌！」拍子をつけたる御聲は疾風のやうなり。敵の槍を鎌に搦みて、揉ひざまに冴をもて刎起すを、此流にて「切て棄」の手とはいふ、切鎌は其の微妙の神術を現はすものにて、彼が平日に最も得意とする其手の一つなり。彼は、仙流の試合といふ武術の修行者の來る毎に、自個の九尺柄の本も末も無き程なる太大なる短槍に、三寸の鐵の鎌の附けたるを持ち出でゝ、其が突く端を搦みつけ、切て棄れば、大方の槍は一刎にて其の梅檀卷より折るゝといふ。既に先年正雪との最初の手合せし時、彼が槍をば此術にて過たず折たれども、折るが否、彼が小太刀に眞甲を擊たれ、組むを其場に投伏せられて、遂に彼が義弟とはなりけるなり、雖然、槍は忠彌が技の勝れりとて、正雪は猶是れを七分三分の勝負とは稱ひて恐れき。如是る本事ある忠彌、其の最も得手たる切鎌の御所望に遇うて何かは猶豫ふべき、今方に其の演武の興に入れる十二本搦の手を遏めて、弓手に指出でたる松の下枝の、周圍三寸に餘れるものに立對へるが、「曳！」一つ搦みて、撲地と切れば、驚くべし、其枝はぼつきと折れて、凜たる穗尖は彼が睨める眼と共に其幹に向へりき。爰に到りて滿座聲無く、大學喜太郎も只其舌を戰かすのみ。

（百七十八）

既に我が十分の本事を視して、猶且つ人々が十二分の喝采を博し訖んぬ、今は是れ迄と氣色ばうたる忠彌は、彼の槍を小脇に挾みつゝ、徐々地と御緣の際に寄り來る時。「待て、忠彌！」喚ぶ往つ、閃乎と芝生に下立てる人のあり。扨は大學か、但しは御次なる若侍等か、兎角は優しや、と顧眄れば、思ひきや然はあらで、其人なりき。咄、我が日指せる其の老人なりき。然も老人の其手には、九尺柄の短き鎌槍あり、疑ひも無く彼は和と此場にての試合を望るなり。我れも固より望む處。先刻の氣色より察れば、正雪

も亦た此の憎疾き老奴を我に一突させばやと思ふ面色なり、旁以て願ふに得つる哉、素奴、あの持たる槍、一刻に躍飛して胸板を一つ突く程ならば、鐵壁としてなじかは！　と思ふ色はや眉に動きて、彼は覺えず力足を一つ踏締めたる、「御分、敵手に御立ちやらうと歟！」「うゝ、餘りに所作が面白いでよ。」「其技を我等に習はうと歟？」「うにや、太平の座敷槍、曲藝は其れが興多らう。戰場の死活の槍、其様な彫鏤い事では。」「人が突留らぬ歟？」「人は愚か、犬でもぢやは。はゝゝゝゝ。」耐らぬ忠彌は遣きに遣きたり、然言ふ頬桁を、と倚らむとするを。「忠彌、惡しいぞ！」慶と顧れば、其聲は正雪なり。正雪は眼を角にせり、「忠彌、御事は！大事の勝負に遣くとは何事ぞ。さればこそ御事は醉ひつるな？　此處にて不覺せば日來の名も其れ迄ぢやに。遣て可うか。ま、此水を喫め。」彼は御手水鉢なる柄杓に泛々と斟取りて、此の大切なる仕手に氣附を與へぬ。何さま急燥は我が稟性ながら、一つは酒の咎、げにも此處は遣るべき場所にあらず、疾く醉を醒してこそ、と彼は其の一杯の冷水に熱腸の耐難きを鎭降め、更らに臍下に氣力を充實さむとは試みたるが、生憎や、物前に遇へる掣肘の手と、自己が醉に注心ける戒懼の念とは、其の豬突の暴進を制し得たると同時に、亦た自ら後胄の顧らるゝ心地して、臆するとには非ざるも稍我が勇威の殺減たるを感えき。雖然、如法の剛強の僻者なり、彼は聞きつゝ呵々と哄笑て、「甚慶が、兄者、遣き申さう。結構の御敵手、其の被仰る戰場の槍とは、突くものか撲つものか、其も見たう。又た我等が座敷の槍では、猫も突ぬか犬も留ぬか、但し人には中らうと思ふ程に、些と其を御目に懸うと存じて喃。」一勿論ぢや、其方も一流の者、覺えの術は音にも聞き、今も見た。えい、其の氣力一杯に善う仕つりやれ。さらば、えい！」忠彌は遽てず、故らにのさ〳〵と歩みて、再び以前の圍裏に入れり。

此時の殿の御懸念は、また正雪が樣なるものにては非ざりき。彼の老人は、言ふにも及ばぬ當家御家老なり、御保傳なり、又た槍術の御師範なり、彼が鎌槍に巧て、既往の長久手の功名、其餘戰場にての數度の働きは親しう御存知の上ながらも、其は今より三四十年の以前にて、恁う皺も波らず、足腰も屈まざる際の事なり、今や七十、什麼氣力は衰耗へざらむも、登るのみなる老の坂には既や杖を力の爲體なるを、敵手たる者は三十左右の血氣の奴、然も其の武藝、其の力量、寄に聞けるよりも夥多しきをや、彼のあの雷の擊つ如き刃尖をば如何して停住め得む、住めずば軀も耐らじ。然りとて老爺も、敵の鑁隙を確に認め得て、我が必勝を熟知ての上とは思ふなるも、或は其の老心に惑ひしか、千鈞の弩を鼷鼠の爲に放てる愚には非ざる歟、老人の冷水とかいふ俚諺の嘲笑には陷ちざる歟、坂東一の猛者と聞えし實盛も、老ては手塚めに討たれしものを！　萬一然もあらば此の敵手たる奴を奈何とか爲む？　家の面目、師匠の仇、押取籠て討つべきか、其も究めて兒戲きたり、汚目々々と在らすも本意無し、扨甚慶とせむ、と千思萬慮苦悶ませ玉ふ御心には、自ら熊野三社、八幡、摩利支天も念ぜられつゝ、今更ら抑止め敢へ玉はぬ勝負如何と御覽ずる時。呀！　といふ懸聲は聞えて、兩條の槍は戞乎と合へり。

（百七十九）

合ひたる槍は、又忽地離れぬ、是れ忠彌が一歩を退却れるなり。彼は何故に退却れる歟。今の帶刀が形相は實に愕くべきもの有りき、其れが屈めりと見えたる腰の、生ひ立つ若竹の如くに伸びたる、踏みたる足の、鐵の柱の地より拔出でたらむが如き、其等は孰れにて有るべ

きも、一種名状すべからざる不可思議の神威は渾身間隙なく充溢て、剰さへ從前にすら怖ろしかりし彼が眼は、太陽に對へる鏡の閃くなんど言ふ如き類にあらず、是ぞ彼の兵法に言ふ、先づ勝而後進むといふものの歟と驚ける忠彌、逸早く一歩を退りて、彼が出る端の鬱をと狙へるなりき。退歩るを得たりと狙むとしたれども、彼も亦善く其密に藏れて、些の破綻をも見せざりけり、加之ならず彼が眼色、後先の先をと心黙る體の見えたるに老人も其勢に乗り得ずして、看る〳〵其が爲す隨に委せり。

今や雙方の吻く呼息は暴風の如くして、額より流るゝ汗は驟雨を浴みたる如くなり、此の悽愴じき勝負を視る者の眼も、同じく兩條の槍尖に釘もて釘着けたる如くとなりて、其の呼吸も喘げり。爲有れども彼等が四隻の眼、四個の眦、四根の脚は分寸も動かぬなり、最初こそ一聲二聲の誘引の懸聲といふを聞きたれども、後には只、忠彌が虎鬚の顫々と戰くと、帶刀が白銀なす髯毛の鬱々と動搖くと視るのみにて、一方の眼中は漸次に血迸り、一方の瞳子には益荒涼き光輝を加へつゝ、如是て在らば此の雨雄、但是れ兩座の巖石と化りて、立竦める儘に果てなむ歟と見る折柄なりき。何者をか發見されけむ、「見えた勝負!!」此聲は不思議にも殿と正雪とが兩つの口より、恰も同時の、其の刹那に出たりき。疾しや遲しと跳寄れる大學喜太郎、透さず其の兩條の槍を押へて、「御詮ざふ?」「何を御詮?　要らぬ世話、えい放せツ!」「いや老爺、好え〳〵、是れ迄ぢや。まゝ此方へさ斯う參れ。」殿は御手に額の汗を拭はせつゝ、胸を撫でつゝ、莞爾たる御機嫌斜ならず見えたるにも、老人の不興は收らずして、「殿、甚麼ぢやとて邪魔お爲やつた。武道の面皮お缺きやつた!」殿は其間をば其方退にして、「民部、勝負が見えたといふ……何と視た?」「御家老の御勝利にござりまする。」「むゝ、而て其の裁判は?」正雪は袖摇き合せつゝ、「老人が眼の据り、忠彌が眼の流れ。批判は箇樣にござりまする。」「むゝ善う視たが。」と殿には俄かに打案ぜさせ玉へる氣色して、「其の眼星の動く否ぬは予も同意ぢやが、忠彌眼の注け方は、老爺より少し早うは無きか。兎角は是れは對々のもの、予に言はすれば相突きぢや。然るにても忠彌本事は天晴のもの、老爺、彼を召抱へうに不同意はあるまいな。」彼は此の御批判に不足してか、益其頬を脹まして、非ぬ方を面向たりき、殿は窮めて御本意無げなり、正雪は其れと見て屹と忠彌に目を授せぬ、忠彌は聽て闕り出でたり。「殿、其義は御無用になされい。」「ふう、何故ぢや?」「御機嫌は太く損ぜり。其にも彼は頓着せず、「忠彌、突負けたとおざりまする。負けた忠彌に御用どもおざりますまい。又我等も負けての仕官は餘り面目とも存じ申さぬ。旁是れは御無用の方、好うござりませう。」膠も無く言ひ放つを、押返させて、「要らぬ遠慮ぢや。予が見込で召抱へうと思ふもの……但し主に不足な歟?」御聲は稍暴やかなり。

（百八十）

忠彌は倒りて呵々と笑ひて、「殿は御三家の御一人、當將軍家の叔父ご、從二位の大納言、御身柄に取つても御官位においても忠彌主と仰ぎ申すに何の不足かおざらう歟。只我等は。」「えい其のお事は?」「主取するが否でおざる!」「いや、然は言ふな、其の否ぢやといふ、定めて今の勝負であらう。勝負は運ぢや。況てお事の負というたは正雪が當座の會釋ぢや。予が見たるは、老爺が其方の面上を突かば、其方は老爺が胸部へとまろる、民部は眼の流れと申せども、予は却りて眼の動作と見つるぞ。兎角は相突、無勝負ぢや。凡そ既往の長久手以來、今の世に功名名だゝる槍取での老武者安藤帶刀と

相突とあらば、不足かは知らぬが、甚麼も其方が不面目とは有るまい。不面目ならずば其不足ない主と其方も言ふ予が家士となれ。な。其方が義兄といふ民部すら既に家来ぢや。其の義弟たる其方……。予は其方ら兄弟を竝べて、梅櫻として見たい。」身に餘り、心に餘れる御詞の有難さに、忠彌は感奮して、兩眼に溢るゝ熱涙を禁め敢へざりき。げに眞實、士は己を知る者の爲に死すと言へるも、今の我身に想當れり。恁くまでに我を熟知せて、我が面目を施眞たまふ此殿の爲には、忠彌が六尺の軀を唯今御馬前に拋出して、此の憎體の黥首、御用とあらば進らせなむも霽厚惜しからず、其のみかは、現に仰する、義兄と立つる正雪も其の御内たり、義弟たる我が同じ御恩の下に在らむも甚麼の怪しい事。寧そは！　とまで念へるが、否、と彼は又た飜念せり。待て暫し我心、義兄なる人の分別は知らず、此の忠彌は潔癖なり、恩を受けては其恩の爲に死せざる可らず、既に江戸を敵として一たびは天下に旗をと思ひ起てる身の、什麼然は貳くも、其の敵の一家たり親族たる此殿の御内とは名告らむや、忠彌は男兒なり、一回心頭に誓へる事は身を辛ふるまで渝じ、目下の辱けなさは骨節に徹りて覚ゆるものゝ、此の新恩の爲に、黨の舊盟は棄て難し、と彼は齒を切ばれり。

彼は漸くに感涙を拂ひぬ、「御意誠に殘る處なく、忠彌心魂に沁みて覺えまする、恁くまでの御諚の上は忠彌亦た心底隠まず申上げまする。原來が此の忠彌といふ奴、御覧ぜらるゝ通りの我儘者、頭の支ふる御奉公など身において到底が成りませぬ。憚りにはござりますれど、椀持ちて飯食ふほどの藝、母子に妻女、飢ず凍えず過ごしまする程の代は些少ながら身に有ちてござりまする。其れを活計に、主も持たず、家來も使はず、只思ふが儘に世を渡る、天下に苦勞知りませぬ浪人の氣散じが忠彌め身に相應かと存じまするで……折角の御意にはござりますれど……」殿は唯、御嘆歎のみ。彼が本性、果然其の閑雲野鶴の生涯に安んずべきものならざるは御存知なるも、亦た其の豪宕不羈の氣は、竟に摧ますべからざるを奈何せむ。「む、其れで其の主取は否、といふぢや喃？」「其通りにおざりまする。」「む、然りとては是非無いが、遺憾いぞ。忠彌、何か所望は無き歟？」彼は重ね〳〵の御芳志に、はや以前の「御用心の意趣」聞かうとも言ぬなり。只管感涙を拭ふ樣なるを、正雪、「忠彌、折角の御意、踟躕は恐惶ぢやぞ。」「も、何物も要り申さぬ。只此儘の御暇……」「彼奴は尚樣に申まする。恐れながら其身の面目ともござりまするに、御褒美の御狀など……」殿は首頷せて、「む、感狀、道理ぢや。老爺、如何ぢやな、其狀を取らすは？」彼も點頷きて、此事には然のみの故障をも言はざりき。然らば と殿は大學して其の御狀を書かしめらる。槍術一見之處、拔群之手竝感心淺からず、神妙に思ふもの也、年、月、日、とある其下に、御名、九橋忠彌へ。「恐れではござりまするが、何卒、御判の遊ばされて。」言ふ正雪が面を、殿は早焉と睨めさせたる、其れをも空知らぬ顔、「彼めが一代、子孫末代の家の寶物にござりまする、何卒、此の願意聞し食し入られて……」其言の道理あるに殿も否とは仰せ難ねぬ、御首は暫時傾けるが、蟋て虎といふ御判は据れり。正雪は忠彌に代りて二度額に押戴きぬ。此時、帶刀は用事に立ちて、御前に侍せざりき。

（百八十一）

天意の棄てざるか、人智の勝れるか、さしも一期の際と見えたる紀の關守が鰐の口を、たつかう、征矢のはづかに遁れ得て、正雪忠彌らは數

日の後大阪へと發途ぬ。甲斐無しとも、甲斐無かりしは紀伊國君臣が上なりき。大納言殿の御胸算にして、鞘刀の老人が計畫にして、倘か一致の運動を執らば、既に網裏なる魚を恣う易々と遁しも爲べからざらましを、君は臣に憚かる所あり、臣は君を危ぶむ所あり、遂に進退合期せずして、彼の檻に繫げる衆虎を看る〳〵野に放ち、其の一層の害毒を横恣にせしむるに到れること、抑天か、否、之を人爲と謂はむ哉。

殿の御恩し食は、最初より、彼の師弟たり、父子たり、兄弟たる男女三人を御手許に引附けさせて、俸祿の餌に饜せ、邸宅の檻に鎖閉て、御恩の桎械に手足を緊縛めむと爲たまふに有りき、如是して、彼の惡獸らの、首を低れ、尾を伏せて、生涯を委せ奉つらば扨て其儘にて措かれむ、然なくば既に君臣の名あり、主從の義あり、縱令其れが爪を張り、牙を磨がむも、之が肉を屠り、皮を剝がむに甚麼事のあるべき、とは思し沢め玉へるなりき。老人の慮ふ所は然は有ぬなり、我殿は今の世に兩個となき可怖しき人にておはす。其の御武略は父の子として、自ら故大御所にも肯させ玉ふに、又其の腹量の太大なる故太閤にも優れ玉へるもの有るやうなり、今こそあれ、我が亡き後、又た江戸將軍家に變事かのおはしませる時、果然不思議を思食立つこと有るまじき歟、否ぬ歟、龍となり蛇となるの變化は今よりして誰か善く之を豫測り得む。御一個でおはしてすら然あるを、況て彼奴らを御側に附け置くをや、猶に木天蓼、狂漢に刃物といふ俗の危險を言ふ比諭も中々に愚かなるべし。されど彼奴らを散々に窘みつけて、再度と此の紀伊國領へ足踏の協らぬやうに爲る、機會を見て殿に强便の强異見する、此の兩條こそ此の老奴が衆士の中より御見立にあづかりし故殿（大御所）への御奉公、予が亡後に長祿（大納言殿御幼名）が前途を輔むとありし御遺言に對する服務、天下の靜謐、海内の安堵、御宗家の長久、當紀州の繁昌を謀る我が職掌なれ、と一途に思ひ込める彼が一轍は、蓆ならぬ卷くべうも非ず、石ならぬ動かすべうも非ぬものなりき。此の君臣の齟齬は彼等に中分の利を得られたり、彼等は猶虎穴に入りて圖らざるに其が虎兒を獲たり。虎兒とは甚麼ぞ。名さへ其物なる殿が虎といふ御判なり。彼等は和歌山を發途て、山中の峠を踰るまではいと徐々に打ちたるが、驀て紀伊國の領を離れて和泉の堺界に入るが否、僕を急がせ人夫を驅り立て、堺住吉の見物をも爲で大阪に着き、船場の某處に潛みて、多時は其跡をも見せざりき。かゝる中に、正雪は、供なる鵜野に密意を含め、江戸に下して金井を喚上せ、又た若黨に打扮せたる腹心の弟子共を八方へ趨らせて、紀伊殿人數の御入用あり、一廉の者をば所望の祿にて御抱へあるべし、其の奉行として由井民部介近日當地に到着、との事を内々に觸させたれば、先年以來、飢寒に堪へで非ぬ農家に身を託せたる、町人の寄食人たる、夜は出でゝ辻講釋せる、賣卜者となれる、道中の上下の人夫、乞食、非人、强盜とまで落魄れる大阪の浪人、諸家の亡命者、沒收人名の有附き得ぬ武士、乃至天草島原の一揆の殘黨ら、此の風説を耦かに聞き傳へ、口より耳へと云ひもて觸して、あはれ由井殿御上りあらば、祿の多少には由べからず、只以前の身に引上られて殿の御馬前に奔り廻り、如是て飢凍えて死なむ生命を今一度檜の穗先に鮮血の花を咲させて賜はらばや、と手藥煉を引く者五百餘人、其れ其れの紹介を便りて彼の若黨にすら小腰を屈めつ、我が案内の日の他より先ならむことを頼み入る光景なりき。

（丙八十二）

鵜野して喚上せたる金井は來れり、彼は師の命の隨に五千金を護して來れり、正雪は此金を

得ると同時に、又彼の若黨らして豫ての浪人共を縞に招かせぬ、其等が者に逢ふ時刻として、彼は夜の酉の刻より亥の刻を撰みたるに、一夜に逢ふ者三人より七人を限りたれば、些少も他の日を卒くに到らず、其の百日に餘れる久しき間も、彼の殿が折角に心を籠られつる七里目付すら此事を聞き出さで、和歌山へは終に知れざりき。彼が祕密は善く保持たれけり、彼が殿の御名を藉りて此時に嚮集め得たる者、豫算ての人數より增して七百餘人に及べるが、彼は先づ一々に、其の素性、來歷、戰場に臨めることの有るや否や、又其功の有無、得手たる武藝、材能、技術等を委しく問訊て、人品を視、容態を覷、言語を聞き、應對を試みつゝも、其の程々に寄り、或は十兩、廿兩、五十兩、百兩と大鷲の檀紙に包めるを初見參の引出物として之に與へ、終りて更に奧まれる間に導くなり。此處には高麗といふ緣の淨き疊を幾十片か敷て、長捍には紫色の御紋の幕を走らせたり、其の上段の一段高き上疊に、椅の香鼻を貫くばかりなる巨大に新しき三寶を据て、これに殿より自己に賜はれりといふ御判の狀をいと恭々しう飾れり。正雪は、例の精好の其色雪の如き法眼袴に、黑き縮緬の御紋の脇、顯紋紗の胴服の胸紐袴にして、出し鮫に黃金の目貫せる小刀を前半に指誇らしたる、人品骨柄更に云ふべき方も無きに、彼の御判の狀を物々しう取卸し、謹みて拜見せしめて、其れより彼が遽てず躁がざる能舞もて、大納言殿の彼等を賴み思し食すよしを言ひ、御分ら彌〻彼殿に貳心なき御奉公せむとならば身命二つあるまじき誓詞血判、此の牛王の裏に、三世の御緣を結ばれよ、但し否とあるべくば、只今其旨眞直に申斷らるべしと言ふ、其の顏色嚴格なり。彼等も最初より其心なり、況んや轍鮒の水に遇へる如き先刻の引出物をや、此の神々しき場所に拜める偶りあるまじき御判をや、正雪の風采、辯口をや、自己らを軽むと仰するをや、いづれか一つ有りてもなるを、其の多くを具備たるをや、何條其の誓詞を否まむ、血判を餝せむ、梵天帝釋四大天王、伊勢春日熊野三社を驚かしたる神文に、指の血を濺ぎ懸けて、各〻額上の熱汗を拭ひつ差出だす者のみなるを、彼は受けつゝ、其れより更に彼の御判に對ひて改めて君臣の禮を執り、三度を拜せしめ、正雪御取次の役として盃を賜はすなり。畢りて再び演述す、其の演述は、紀伊殿御謀叛のやうにも非ず、亦た御謀叛ならざる非ず、只何事まれ天下に色目立つ變事あらば、尼崎、茨木、奈良、堺、凡そ攝河泉に大和なる者其は大阪に馳せ參じ諸事は正雪、又た其れが部下の大將が下知につきて進退を守るべし、其期とても速くば今年、遲くとも三年をば出づまじきに、各位其身を堅固にして詮として前途の榮耀を翼へよかし、勿論此事は祕中の祕ぞ、岩賢、樗へて親子兄弟たりとも漏泄すな、といふ一個々々を嚴重に警誡めたるが、神文にや懼れけむ、紀伊國といふをや憑みけむ、又は正雪が威望にや服しけむ、彼等は善く其が訓戒を守りて、然ばかりの多勢なるにも終に其等が口よりして、何事も世に漏脫ざりき。

偖くして彼は大阪を終ぢれり、彼は其れより京都に行きぬ。此處にて此年を暮らして、翌年の春より中國に越え、下の關より小倉に渡りて、福岡に趨き、久留米に過り、柳川に遊び、佐賀に逗り、唐津、平戶、大村、長崎と回りて、其年も亦た徂きぬ。此間の彼が艱苦は一々云ふべからざるもの有て、成功と失敗とは相半ばせり、然れど其の危難に遇ふ毎に、彼の膽は愈其大を加へ、其智は彌〻其の機敏を倍して、或は紀伊國殿御名を利用ひ、或は自個の武力に藉り、斷崖奔馬を驅るの危殆きを善く順風に帆を飜るの安易きに飜して、禍を轉じて福となし

たるも多かりき。今や彼が名は九州に轟けり、或る者は惡魔の襲來として恐れたれども、又或る者は菩薩の影向として歡び迎へぬ、就中特更に密使を發して彼が一行の疾く來らむを望めるは天草なり、其言に據れば彼の島人の彼を待つこと天有主の手を見るが如しと言ふ。噫神の手か、全智全能の此神の手にも太甚だ意の如くならざるに苦悶むもの一個あるなり。

憫れむべし、彼は此の二年の旅行を繼けて、其の嚢中は今や涸渇たり、然も衰々として竭ざるべしと暗に賴憑める源泉は、無情、一滴の惠露をも我に與へぬなり。彼は初めて窮しぬ、幾ど其の思案に昏れたり。

（百八十三）

彼は今、五畿兩道（山陽、西海）に黨與を得ること實に一萬に餘りき、されど又た是れが爲に費消せる金五萬五千兩——年來の貯蓄も今は全く其底を拂ひて、豫て我が非常準備の金穴と蚌憑みたる駿府の足洗村半左衞門らにすら若干の負債を生じぬ、然も其等の豪農富商が融通の途も、漸次に細痩り行かむとするに、彼の大膽不敵、物を物ともせざる彼も、幾と其の思案に餘して、今後の進退如何の胸に手を當てぬ。彼は嘗て、松坂にて、丘庫に設けりし時、其身の分限を誇りて、有金五萬兩、兵糧八萬石、人數十三萬とは云へりき、人數と兵糧とは其の有無の如何を知らざるも、當時の有金は確かに三萬兩の內外を有てりき、三萬兩の金銀、もとより寡きが如きを奈何せむ。

彼は果然此の些少の金を投じて、此の動天驚地的絶大の企望を做し遂げむと籌れる賊、倘し然りとせば、彼は三文の錢を賽げて、千萬の富を祈願る世の愚夫の爲に做へるものなり、如是くして容易く柳營三代の基業を顚覆し得べくんば、甚麼人か又た天下に覇たらざらむ、彼の無算も亦た甚太しい哉。

然れども、彼は當時の智ある者なり、蓋うて橡海の巨鰲を制せむとして獨繭絲を繰るといふの類には非じ、彼は十分に計畫せり、耕す者は其の來耜を具へざるべからず、賈ふ者は其の廛鋪を備へざるべからず、今の我たる者は、地位あり、名望あり、富且つ實にして、然も軽輙不遇なる人を撰擇ざるべからずとして、彼は洽く捜索せり。然して寛裕にして士を愛し、明決にして善く斷ず、其武、其勇、優に古を厭して今に匹儔なし、これに由て他の猜疑を得て、輒もすれば其の首領をだも保たざらむとす、然も其廩を見れば、粟實てり、其庫を見れば、甲冑旌旗充斥てり、其地位を問へば、柳營の一家、其官爵を問へば、從二位の大納言、其心事を問へば、甲駿百萬石たるべき人の今は僅に南紀の五十五萬石！　此れ豈我が爲の天造にして地設たる人ならざらむや。之に因りて彼は一たび說きにき、二たび說きにき、其の說く每に、彼は其人の我が說を容れ、我が才を愛するを見て、毫かも厭惡するを見ず、或は謀策を設けて其城を燒き、其士を竊むも、彼は罪せぬなり、或は其を誣ひて其罪に陷れむとしたるも、彼は問はぬなり、或は擅に其の家士の名を冒すも、彼は尤めぬなり、或時は其生父に均しき老傅の言を黜けても、我を庇護し玉へり、或時は其の不思議の罪を犯せる者をも、我友とあれば、許容させたり、然して我黨の心事は、蓋し其の熟知し玉ふ處、此の心事を熟う知り玉ひて彼が如くに厥遇さる、未だ嘗を刺し、血を啜りて、共に天地神明の冥慮をこそは驚かさざれ、此を既に我黨一味の仁として見むも誰か其を非ずと謂はむや。と信じて疑はざる彼は、可憫其の殿の外表のみを見て、其の內裏の、彼等に對する御計畫といふを看徹き得ぬなりき、唯殿の今容易く思し食し立ち玉はぬは、一つは彼の帶刀の在ると、二つには當時の將軍家（三代家光公）が

英明を憚らせらるゝとに過ぎざるべしと爲り、然も其の帶刀といふも、見る處僅命幾程もなき老人なり、殊に其の大事の際に例の似而非忠義の頑硬なる諫言どもせば、其を討て棄てなむも易きなり、又た第二の將軍家と申すも、近來は御不例勝にて、奥にのみ在はし、諸家より獻上の節、狂言に御餘念の無しとやらむ聞けばこれを計策るに難からず、只天下の人心の殿に屬望きゐますこと如是し、其を空にもし玉はむには所謂る天の與ふるを取らざるなり、御身の禍害測り難たしとも云はじ、彼の殿とて、やはか、と云ふ肚思一つと、猶其の和歌山を發途の折に、他知らぬ懇切なる御意ありたるとを賴憑にして、此の二箇年に彼の多勢を語合ひ、此の多額を散與るなるが、仇なりき、先頃も再度まで半兵衛（金井）して、御手許の金子拜借を願ひ出させしも終に御沙汰無く、加之ならず喜太郎をもて其の金子の費途なんどを鞫問させらるゝ、妥穩かならぬ爲體なるに彼も機を察て遁げ歸れるが、如是ては我が脾も太く狂ふなり、其れ許りかは江戸よりは、何程に誅求らるゝとも今は奈何とも協らぬなり、其方の難義は然あらむも、此方の苦痛をも察せられよ、兎角は一日も疾く歸府を待つといふ言效もなき狀のみなるに、神の手と崇敬はるべき正雪が腕は、あはれ拱れて、其の懸河の辯を弄ぶべき口も吐息のみに、「甚麼なるべき、此よりは駿府の家を！」、彼は其を沽却むとにや？

（百八十四）

寛永は前に改まりて、正保となり、其れも過ぎて此時は慶安の號とぞなれりける。抑年號に慶の字を用ふること、古に慶雲あり、元慶あり、天慶あり、延慶、正慶、嘉慶あり、近くに慶長あり、慶雲には御代めでたく、四海昇平なりしかども、猶此の年號に天皇（文武）は崩御ありき、元慶の帝（陽成）と申すは×××××××××××××××××××××（是經××の事）、これより藤氏の權勢は朝に薨りぬ（是經××の事）、天慶は云ふにも及ばず、將門純友の亂あり、延慶の改元の年は後醍醐院立太子の御時にて、元弘建武の亂は遠く此時に胚胎せり、正慶には鎌倉九代の執權も夢と亡び、嘉慶には南朝三世の帝業も有明方の燈火と消えぬ、慶長には人も知る關が原大阪の御陣あり、或は其方ざまにつきては之を吉祥の兆ともいふべきも、兎角は獦も新しきに變換て、且は死亡兵革に意を含める歟、されば只今の慶安の號、當時三代の柳營に取りてはめでたき文字といふべからず、など何者の云ひ出だしけむ、江戸京大阪その餘海道の諸國にても聞き傳へて、自ら顰めき合へるが、此時又た、將軍家の御病惱漸次に重らせて、今後百日との御存命覺束なき容態とはなれり、これに依て、尾張紀伊水戸越前等の御一家は勿論、加賀薩摩仙臺を初として、國主、城主、總じて十萬石以上の諸侯を召させ、御遺言ども有らすべしとの沙汰、同じく江戸にて取り囃せしものなるべし、麹町なる上舘より彼の時限の脚夫を驅て、此趣を和歌山へ注進せり。

此年は御暇の年にて、大納言殿は御在國なりき、豫て彼の忌はしき風說ども聞せて、將軍家の御容體を心許なく思し食す最中なり、今や其の御大切はや三月に逼れりとあるに今更の御驚愕は大方ならず、急ぎ渡邊大學を召させて、云々の始末なり、予は明年の參府なれども上の爲くおはすと聞ては一日も安んじて此の遠方に在るに堪へぬなり、其方疾く江戸に行て、老中に就き、予が參覲の免許を得て、又疾う歸り來よ、遲々りて御最期の際にも後れば賴宣一代の遺恨なるべし、疾く參れ、とある主命は一刻の猶豫をも與へ玉はず、かゝる急場の御使に馴れたる大學は、御制の狀賜はるとと齊しく身を起し、不斷に準備せる急籠に打乘て、其の和歌山

を發途たるより今回も又た晝夜三日に江戸に着き、江戸家老水野對馬に御判を示し、御意を傳へて、急ぎ其の免許を乞ひぬ。誰か知らむ、此の風聞も、其の取沙汰も、亦た彼の執念き彼者の殿を目指せる胸裏の機計ならむとは。

＊　＊　＊　＊

御本丸なる御黒書院は、大事の談合を行はるるとて今日は朝より人拂なり、但見る井伊掃部頭直孝を上座にして、堀田加賀守正盛其の次席たり、それに續くは松平伊豆守信綱、阿部豐後守忠秋、阿部對馬守重次、少し離れて酒井讃岐守忠勝あり、御紙繩四方を遠く明放ちて、隔見も縞聞も協はぬ如くにす、雖爲加賀殿が大聲、伊豆殿が其の甲走れる聲、豐後殿が底より響く調子太き胴聲とは、天井に觸れ、御疊に反響て、言の端々を斷續に、自然他に漏らすものありき。

先刻より取頻れる伊豆殿は、此時、其儘なる袴の稜角を撮み擧げつゝ、「……物怪でござらぬ歟、試み申すに……の事もあり、旁、な……許し申さう。」豐後殿は、自ら此れには反對の語氣なりき、首を傾げて、「ではおざるに、假初ならぬ……萬民に信義を失なはじ、向後の……敵ともあらざる歟……其敵ですら……上の御不爲……」扇を揚て、制へ止らるゝ如き態なるを、加賀殿、「……とあらば斟酌も要り申すまい、只押懸けて踏潰す……たとひ然はおざらうも天下の爲ぢや、豆州の評議……掃部殿、讃州にも御異議は……」終日の此の評議は抑も甚麼か。只其れが翌日に水野は召されて、大納言殿御參府勝手たるべしとの事、伊豆殿口上にて傳へられぬ。

（四八十五）

這回は御心急きの御道中とて、供立、宿割、恆例の式をも守らせず、幾と晝夜兼行の御爲體にて、和歌山を御發途の五日目に、大納言殿は駿河國府中の驛舍に着き玉ふ、御供の頭たる者は彼の大學一人なり。本陣に御座なされて後、急ぎ大學を御使にて、時の駿府城代を訪はせ、江戸表の左右如何にやと問はしめらる。萬一は將軍家御異變の早打ども當所に來れる歟を氣支ひ思し食しての義なりき。と、有る間も無く、大學は御城代大久保玄蕃頭と同道にて歸り來れり、其の面色喜憂相半して、兎角は平ならず。御返辭を申上ぐるや直ちに又其の仰として玄蕃を御座所に案内せり。蹙り出づるや、殿は御袖を半分外させて、「玄蕃か、近う。」「長途の御勞れもおはしませいで御元氣の體……」「いや其れよりも、」と其の半分なりし御袖を更に收ませつゝ、「上には御心地快い方に渡らせらるゝとな？　其狀は何時着いた歟？」玄蕃は低頭して、「昨夜丑の刻におざりまする。先づ以て恐悦の御義。但し其れにつき殿の御進退、玄蕃近ごろ氣の毒の事と存じまする。」「む、、今聞いた。先づ其の予への奉書を見せ。」彼は恭々しく其の懷裏にせし帛紗を解きて、中なる狀を進らせたり。殿は其が封押折かせ、熟と御覽じて、「む、、予が當地の着を待受けて手渡しにせいと有た喃？　而して其餘に何事かの下知もあつた歟。」「其の通りにおざりまする。又別樣の御下知もござりますれど、是は我等限り、御聞には入れられませぬ。」僞はらぬを武士の面目として、尾張とも紀伊ともあれ、將軍家の御代官たる時の執政の下知の外、其餘を聽みぬ三河氣質を殿は然もこそと、「道理ぢや、聞くにも及ばぬ。但し上の御快氣といふ、其方にも申し越した喃？」「上樣益御機嫌克とは筆の初におざり申した。」「む、、其れにて安堵ぢや。予も鱸て引返さう。」「御尤におざりまする。」異むべし、紀伊殿此地着を待つけて、玄蕃手して進らすべしとある江戸よりの書狀は、上樣御容體追々御快方渡らせらるゝにつき、御安心なさ

れ、先達て御願の參府の義は只今の處御無用なるべし云々といふ、伊豆守、豐後守、對馬守、三人連署の公然たる奉書なりき。もとより柳營御諚も未だ五十には到らず、御生得は剛健なる方ではあり、典藥の調劑、諸寺諸山の御祈禱、朝夕の御保養等閑なるべきやうも有ぬに、御快方とあること當然の御義とは思し食しなるも、亦た此程の參府の御願たる半月にも足らぬ前の事ぞかし、縱令此方より何樣の義を云ひ出で玉はむも、其を受容るゝ程の事情彼方に無くば免許の沙汰有るべからぬ次第なるを、倏忽に御重體、倏忽に御快方、倏忽に許容の沙汰して、又忽ちに之を差止む、況んや其れも新附、外樣の御心隔かるゝ者とも有らむをや、現在の一門、叔父甥の御中、病氣を案ぜらるゝからの御見舞とあらば歡びても御迎への事あるべきを、百五十里の道途を遙々と越えて、今兩三日して對面とある其際に恁う不思議を仰せ出だされる、其も上樣には甚麼事の御存知とて有るまじきが、只執政等が計ひ、其意を得ざるもの哉、との御不滿は蓋た其の御心にも思し食たるらむも、例の事とて御色目にも見せ玉はず、「兎角は安意ぢや。但し故々とも參詣らうものを好い折ぢやに、明日は久能へ詣でう。玄番許らへ。大學、今夜より潔齋をと申せ。」公儀と申せば、何事にても其通りと御沙汰あるが此殿の御平生、と聞きしにも違ぬかな、哀れ是如る忠信の叔父君を、江戸にては何故に然は忌まるゝやらむ、玄番、神文の面さへ無くば、江戸の御下知内々に御耳打して、前途の御用心をも爲せ申さむを、と彼は殿の御面を望みてはら〳〵と涙を流しぬ。時に、御旅館の門外に、早追の囂頻りて、駕は早く玄關に入りぬ。中より出づるは、江戸家老の水野對馬なり。彼、果して甚麼樣の急報を齎らしたる歟？

（百八十六）

江戸詰御家老水野對馬が早打とあるに驚愕かせたる大納言殿は、疾く〳〵と召されぬ。心ならざる玄蕃も座を立ち難ねたる、其席一息も喘しく入り來りて平伏せる對馬が面は、はや色も無きまでなりき。「やア、對馬、何事か？　心許ないぞ。」彼は左右を睨回して、「はつ、恐ながら御人拂を。」「む！」大學は御意をも待たず、突と起ちて、御座敷の前後、詰り〳〵へ眼を配れり。時に、玄蕃は、「對州、御人拂とおざる、殿御一家の御大事か、但し天下の御大事か。御一家の事とあらば遠慮申さう。倘か天下の御義とあらば我等も駿府御城代の身、密と承はりたい。勿論、誓紙御所望ならば……」其の凝眼なるを御覽ずるより、殿は遙早く御目を他方へ注がせて、「對馬、其義は？」「天下の御事……執政御下知にござりまする。」「其の執政の下知……倘かお事を予に討てとあるなりや甚麼と爲る？」磯と睨ませ玉ふにも彼は臆せぬなり。「御手に逢ひまする。玄蕃、此座で御手に逢ひまする。但し我等御手に逢ひますより、殿が物の日に御逢ひなされるが笑止とも存ずる際、我等に御聞せなされたが好うおざらう。」抑此の玄蕃忠成は故の七郎右衞門忠世の四男にして、此ほど死したる相模守忠輝が弟なり、天正年中より故大御所に奉仕（御書院番）して、去る夏陣にも其の拔群の功名を賞せられ、千石の御加增をさへ賜はりつる士、御家久しき譜代といひ、年來の御知人といひ、其身の武功といひ、又た其の氣質といひ、旁〻大事を漏されたりとてむさと慌遽たる所爲すべき者ならず、特に況んや唯今の甚麼やらむ物有り氣の言分をや、何とは無きも世の中の事心許なう思す時節、確と其口を緊縛めて扱て江戸よりの注進を聞かば、亦た自然我が心得ともなるべき件を彼が助言に獲ることの莫からずや、然らば、と首肯せ玉へる殿、「聞屆けた、玄蕃、我等へ誓詞！」一日光、

久能兩御宮、八幡摩利支天、伊豆箱根三島の三社、殿が御國の熊野權現、忠成、他言爲申すまい。」「よし、對馬、委細を申せ。」殿が屹と御覽じたる御面色を覗ひて、水野は近う躙り倚りぬ、玄蕃の膝も隱ひて前めり。「餘事ともござりませぬ、恐れながら上樣御容體已や兩三日内との御義にござりまする。」「えい？」と殿が瞰玉ふ御眼と、愕きて玄蕃が瞻上ぐる目と、期せずして撲地と合へりき、玄蕃は耐ずして軀を摺寄せたり、「對州、其は……其は誰人より御聞きやれた？」「伊豆殿が口達おざる。」「え！　伊豆殿？」覺えず絶叫ぶを、殿は止々と抑め玉ひて、「對馬、而て其後は？」「昨夜子の刻におざりまする。俄に我等を龍の口御用屋敷に召出されて密々に御面會の上、此義祕中の祕なれども他ならぬ紀伊國殿へ自分心注として申し進ずる。上樣御容體、今朝までは追々御快方と見申すところ、夕刻申の刻より俄の御發熱、平ならぬ御有樣との注進に登城しつれば、御侍醫五七輩より申し出でつる、御脈の體、御疲勞の樣、御大切こゝ許兩三日が内、御長くとも四五日が程と、箇樣に申す。我等を初め同列の苦慮は云ふまでも無きが、宗門いむ西丸樣御義は何ほ御幼稚のこと（四代家綱公、此時十歲）尾州家（義直卿）には此ほど逝去、御親族の御年長られたるは只紀州と水戸の兩家、就中紀伊殿をば當御代には一方ならず賴み思し食されたる御義とて、御諚語のやう在る中にも、紀伊國の登城は未だか、追懸の使者疾う進らせよ、一日遇うて、なんどゝも仰せらるゝ。恐察のところ、御生前に是非御對顏にて、天下の御置目、幼君の御補佐、旁全體の御遺言をも遊ばされたき、眞實に餘義なき御心中か。尤も此程の出府御願をば、右にいふ御快方の爲め差止め申し、其の奉書をば駿府城代手許よりして進達の手筈とは爲つれども、其れは恁うおはしまさざる際の事、只今は後悔も其期に及ばず、就ては其方、今夜にも急ぎ發途して此の仔細を殿に申し、明日にも引返して江戸着あるやう。此方よりの改めたる奉書、御使は明曉までに出立たせう。只今は先づ伊豆一分の意見として書通を進ずる。急げ。賴む。との御口達、他事もおざらぬに馳參じておざりまする。」と、彼は呼吸も繼ぎあへず、領に懸けたる袋より其の書狀を執出して、謹みて呈せり。

（百八十七）

對馬が言上の中より殿の御氣色はや御座にも耐らぬ如し。豆州が半の狀一通りさつと御覽じて、「對馬、遠路大儀であつた。然るにても伊豆が厚意……予はこれより打立たう。供の用意疾う！」「御發途とござりますか？」「勿論ぢや、上の御待兼、想へば然もあらう。予は一刻も在るに堪られぬ！」對馬は稍小首を傾けて御前をば立ち難たりき。「何故疾うせぬ。こゝ一刻の猶豫は千悔の基、急げつ！」御聲も些と暴う見えたり、「御意をもどいきまする、恐惶にはござりまするが、當地御發駕は其の再度の奉書到來の後と遊ばされまして……恁くては如何ござりませう？」「其れは其の方の遠慮道理ぢやが喃、又た賴宣が胸中も察して吳りやれ。公然ては上樣と申上ぐるも其内情を申せば只一人の甥の殿、其殿が只今の臨終御間近とあるに、見い、此處より江戸までは五十里、那麼に急ぐも二日半ぢや。其れに其の右に言ふ西丸は御幼稚、如何にも一門の年老分は予と水戸ぢや。旁後來の仕置、其餘萬端我等に逢うて御申遺されたき義、又た我等も申上げたき事山々ぢやを、老中が連署を待つなど其れは平日、無事の穿議ぢや。兎角は箱根まで參るうちには其の使者に途中で逢はう。只今は一刻も在るに在られぬ。對馬、急げ！」御膝をしと〳〵擊せて頓て御座をも起たすべき體。其の公に取り私に就

きての御道理は至極と言はむより外なきも、猶一歩を退けて熟く慮ふれば、前後の様、何とも以て腑に落ちぬ、心の済めぬ、物有り氣の事と、對馬は主への御請をはせで、「玄蕃殿、何とおざらう？　我等當所へ早打としての參向も、有り樣執政たる豆州御下知を守り申した迄の事、殿が進退の御是非に就ては甚麼たる分別もおざらぬか、老功の御思慮、御批判は？」「ヤア玄蕃、對馬が言ふも一理はあるが、先判を破つて後判に就くは鎌倉以來の慣例。予の申すに異議あるまい噺！」先刻よりうち傾聽けたる玄蕃は、其の白髪の頭を掉り起して、「御意御道理におぢやりまする、先判後判の御詮については、玄蕃も不思議と存じませぬ。」「對馬、玄蕃も然申すは、只急げ！」「いや、待せられ殿、我等批判は只其の先判後判の御沙汰まで……」急せたる殿は半分聞かせず、「で有らば奇怪はあるまい。伊豆が判狀……」「其物後判とおざりまする歟。承はりましたる處、其狀は一分の狀、松平伊豆守より殿へ逆上の音信の狀、私の書通と存じ申すが？」「むゝ。」「御心を鎭めさせられ。後判は何だ誰が手に在るか知り申さぬ。只今は右、我等から差上まいた御出府御差止の奉書、其れが後判におぢやりまする。」殿は御目を眠らせて只御思案なり。玄蕃は其時良居丈高に、「大方右にて御合點もまゐらう。縱し其の內情は何とおざるも、我等進上の後判を御破りやつて差止の御沙汰を御用ひ無う、強て御出府とも御座あらば玄蕃役目の表として人數を以ても差止め申す。な。されば對馬言分に御就きなされて、其の連署の奉書、到達を待れての御發途が好おざらう。猶申さば箱根の關が御大事——是れは御分別の要るべき處。や某は此れにて御暇。明日の久能御參詣は重ねての御沙汰次第。」彼は怱く言ひ棄てゝ、其座を退出ぬ。殿は猶御思案なりき、對馬も身の疲勞を忘れて一向に思ひ沈めり。

（百八十八）

「箱根の關が御大事、是れは御分別の要るべき處」といふ玄蕃が一言は、彼が曩の落涙に迎へて、其の胸中の幾微の一分を漏らせしと見るは非耶、兎角に一刻もと遑り玉へる殿の御胸に、一頓挫を與へて、其後は別に何せ出さるゝ旨も無く、深沈たる夜座、目に見るは隙間漏る風に燈燭の瞬くに、耳に聞くは次室なる數寄屋に松蟲の音をたつる御釜の沸聲のみ。手持なきに對馬も退出りぬ。怱くても殿は御衾に入り玉はぬなりき、其の兎つ逐つの御思案は、御胸裏を縱横に驅巡りて甚麼とも思し分く由の無きに、果は豆州が判の狀を御袖の裏に取り出でさせ、頭より尾、尾より又た頭へと幾回か〳〵打瞞し、繰翻し、猶裏面にもか、文字の間にもか、其の底意の認めある歟なんどゝも思す如くに、輙手、歌繪の判じ物捜すやうにも御覽じたるが、有らぬなり、上樣御大切、一刻も疾く御出府、等の目に見えたる文字より外の意味は見當らぬなり。抑是れが我を箱根の彼の關に誘引て、一家を破滅の掛罠に陷さむとする其餌か？　とは思すも看玉ふ處は彼が厚意の紙面に溢れて、御大切と云ふ僞りならず、御對顏と云ふ、僞りならず、御遺言と云ふ、僞りならず、總ては上樣御胸中と殿が御胸とを睨みもて量りて、臨機の計ひしたるものと御覽ずるよりは他あらぬをや。對馬の諫言といひ、玄蕃の異見といふ、愼宜身を念慮ひ呉るゝ其の芳志は仇ならぬも、亦た予が立場より論ずる時は、自然一家の計畫を先にし柳營の御大事を後にする、心疚しきもの有るを奈何せむ、洵か此の書狀、眞正の報に非ずして、柳營の御上、甚麼事なくておはしまさば拠其迄なるも、不幸、此狀が眞實にて、言甲斐なき猶豫の爲に御大切の場に合はずともあらむには如何？　連署の奉書到來せず、これに

依りて途中に稽留せり、頼宣が身の過失にはあらずと云はゞ人も無理とは云ふまじきも、心の問はゞ何と答へむ、向後の伊豆との面會は協ふべからずして、不忠、不義、臆病との批判を受けむにも、我は甚麼と言ひ解くべき。所詮目下の予たる者、御法に依らで身の忠を全うする奥、御置目に拘泥らひて心の未練を世人に爪彈きせらるゝ歟、其の一つ二つなり。法や重き、恥や重き？　恥や重き、法や重き？　此の曲ぐべからざる法の爲に、苦しき我心の節を屈して、紀伊國五十五萬石を一身の恥辱に換へむ乎。否らず、否らず。祿の爲に恥を棄つるは祿盗人なり、君を忘れて身を慮ふは人面にして獣心なり、頼宣にして臆病の譏罵を受けば大御所の御名を下すものなり、不忠にして不孝、祿盗人！　人面獣心！　其等の汚名を身に負はば今日の榮華は甚麼にかせむ。紀伊國五十五萬石！　父と君と身との大事に比べては塵芥の輕き如けむをや。誤れり、過てり、如是る汚名を身に持ちて、紀勢兩國五十萬の臣民が上に甚麼と立たむや。加之ならず、三家の一家たる紀伊大納言が柳營の御大事とありて出府せむに、何者か之を拒へむ。有らば踏破つて通らむに、何條事か！　執政の奉書、老中の連署、日下の急にして顧慮る所にあらず。と、奮然として御袂を投じ玉へる殿、御日を活と開かせて、「對馬！　大學！」召させたる御詞の下にあつと應へて畏まれる兩人を御覽じつゝ、「予は決心の旨あるぞ。疾う打立つ、用意のせい。」「何方へか？」「えい、言ふ迄も無い江戸へぢやは！」御眼の凝り、御聲の色も既や平ならず、殊には此の思慮ある殿が深う御分別ありての以上の御沙汰としては、愈ひに其の利害を反復さむも要無き義かと、對馬は爭はず、「御諚承はつてござりまする。但し其の支度のうち御目通り仕らせたい者のござりまする。右御逢を。」「誰ぢや。此の心急ぎの時節……重ねても申せぬ者か。」「由井民部にござりまする。先刻江戸より到着との趣にて何やらむ御大事の注進を持て參つたげにござりまする。」殿は御眉を顰せ玉へるが、「むゝ、逢はう。召せ」

（百八十九）

召されて出づる正雪は、殿の御顔を見まもらすより只管に落涙して、平伏せる面を擡げ難ねたるばかりなりき、「やア民部、何としつるぞ。其の落涙は？」「御運も限りと存じ做うまして……」愕ろける君臣の眼は疊えず合へり、もとより御油斷あるまじき者なれども、時も時、折も折なり、先刻の玄番が一言さへ今更ら想起されて、世間滿き彼が耳に什麼なる大事の隱密を聞出だしたる歟と、對馬は低聲の、いと慌忙しく、「御運の限りとは大方ならぬ事件、何樣の祕密を御聞きやれた？」「嚴樣御切腹。和歌山御滅却。家老の貴殿らは重科の御成敗……」黒白もなき彼が涙の曇穿り聲は、其の言葉の眞實を表白す如きに、對馬が問は彌嶮し、「えい御切腹御滅却、我等が重科とや？　而て其は甚麼たる義！」「何も彼もおざらうか、只奴臣の所爲！」讒言とや。其讒人は？」「執政の出頭、伊豆殿おざる！」呆れて舌をも發し難ねたる對馬を撲地と睨めさせて、殿の御聲は雷霆と轟けり、「民部！　胡亂！　苟にも天下の執政を然は申す、過たば容さぬぞ！」承はるより彼は腰なる小刀を遙か後邊に抛却り棄て、御前に突と出でぬ。「過たば御成敗、民部覺悟にござりまする。但し過たずは日光、八幡、熊野權現の御加護とも思し食しませ。民部此事が一代の御奉公。なれど御前へは恐惶、見ますれば御座は皆御心易い衆、對馬どの大學へまで急度申入れます、我等出立は一昨日の夜の事、其夜に一大事を聞きまいて……」殿は御眼を瞑り玉へば、對馬は聽耳聳て、大學は堅唾を嚥めり。正雪は

其の精神の全力を面上に攢めて、猶且つ其悲憤と見ゆる涙を瞼に溢らせ、頻りに其鼻を打掀みぬ。「其の聞き申したるは極めて正確の。伊豆殿公用人奥村が口にござりまする。」殿の御色は俄に動揺けり、一待て、其の奥村とお事とは甚麼様の由緒がある？」「されば御意、彼れ權之丞が弟七郎右衞門八郎右衞門兄弟は、私兵法の門弟にござりまする。彼等は生得堅固の者、これに依て私機密を打開ましして、恐れながら公邊に就きましたる殿様御身上大小に管はらず善悪に由らず、是非取交へて注進のさせまいたるに、其者が兄の權之口より不思議の大事聞いたりとて取敢ず通知せ呉れまいたる……其れが其の諸神諸佛の御冥加とは。と申すは、別義でおりやらぬ、伊豆殿も腹壔る覺悟、其の領地、家名とも抛出いて儕りながら殿様と組で落ち、柳營の御前途に害物たる紀伊國を滅却せしむるの結構とござりまする。あはれ扨も世中に、此程の不思議……否、殿様御身上に是程の御大事がおざらう歟?!」彼は云ひ罷して一座を覷ぬ。殿すらも御聲無かりき、況て他の両人をや。其の手段と趣意との如何は未だ聞ぬも先づ其心を戰寒して、面色の變るも知らざりき、正雪は更に語を繼ぎ、猶其の流るゝ憤涙を拭ひぬ、「想へば無情うおざりまする。殿様御心胸微塵曇輩のおはしませいで、一向御宗家御忠誠とござりまする、此は御家中の士のみならで天下に在りと在る程の者、皆存知の前！でおぢやりまするを彼の智慧の眼の肥えたる豆州、甚麼と物を錯見りてか、殿が這回の御參府を別條ない御野心と見申された。とござある其の意趣は、御存知の西丸様は御幼稚、上様には近年御不豫勝にまし〳〵て誰が見申ずも來年までの御壽命はおぢやされまいと言ふ。此際に參府年にも無い殿が俄に其の御願を上げられて御出府ある、是は果然御血分られたる水戸殿とも引合ひ、又た御譜代、外様、其餘古老の御心易い衆中とも御談合にて、天下に君を立つるは長ぜるを尊ぶ、御十歳にも足らさせられぬ西丸様を御繼嗣として萬一國内國外に變事ばしありたる際に那麼と召さるゝ、天下は天下の天下、一人の私有に非ず、なんどゝの理を眞額にして御同志を募らせ御宗家の御跡續ともあるべきの結構歟、倘し然もあらば嬉しの亂、御家の滅亡、海内の爭亂と斯う黒白なうも見させられて、扨て右、殿と組で落つる！其の志は殊勝でおざるも眞實甚麼と申さう様も無い御錯見、其の謬見から生み出された手段といふ、其も仔細ひぬ、「想へば無情うおざりまする。殿様御心胸微塵曇輩のおはしませいで、一向御宗家御忠誠とござりまする、此は御家中の士のみならで天下に在りと在る程の者、皆存知の前！でおぢやりまするを彼の智慧の眼の肥えたる豆州、甚麼と物を錯見りてか、殿が這回の御參府を別條ない御野心と見申された。とござある其の意趣は、御存知の西丸様は御幼稚、上様には近年御不豫勝にまし〳〵て誰が見申ずも來年までの御壽命はおぢやされまいと言ふ。此際に參府年にも無い殿が俄に其の御願を上げられて御出府ある、是は果然御血分られたる水戸殿とも引合ひ、又た御譜代、外様、其餘古老の御心易い衆中とも御談合にて、天下に君を立つるは長ぜるを尊ぶ、御十歳にも足らさせられぬ西丸様を御繼嗣として萬一國内國外に變事ばしありたる際に那麼と召さるゝ、天下は天下の天下、一人の私有に非ず、なんどゝの理を眞額にして御同志を募らせ御宗家の御跡續ともあるべきの結構歟、倘し然もあらば嬉しの亂、御家の滅亡、海内の爭亂と斯う黒白なうも見させられて、扨て右、殿と組で落つる！其の志は殊勝でおざるも眞實甚麼と申さう様も無い御錯見、其の謬見から生み出された手段といふ、其も仔細う聞ておざるぞ。此より申さう。」

（百九十）

夜は益闌け、人は愈靜無くして、折柄なる丑刻の鐘は更に御座敷の蕭寂さを添へぬ。正雪が談は今や彌歩を進めり、手段を申せば我れ等毛髪も悚立ちまする。先づ殿様御出府の義を公然たる奉書を以て差止め置き、更に別儀の使者をまゐらせ、自身一個の判状をもて殿を誘致き、箱根の關を御越あらむ時……」對馬は耐らず、「關破りに爲申さむと歟？」「如何にも其の關破り……差止の御奉書あるをも用ひさせられず、強ての御出府、剩さへ大事の關所破らせられたりとの題目をもて……」「其義然もおりやらうず。然りとは我等も心附いたで。然りながら此儘殿が御歸國あらば？」覺束なき氣に問ふ語尾に接て、彼は躊躇ず應へぬ。「其れが其の右の覺悟、殿様と組で落つる、根深う巧まれた彼人の魂膽、領地も家名も自己が腹も抛出いたといふ可怖ましい分別おざる、豆州判状の文體未だ承はりはしませぬが、定めし將軍家御大切、生前の御對顏、最期の御遺言？……いづれ上様を笠に被られた、御病惱逼迫れりとの御義ともとも察しまする。右を殿様御領取にて其儘にて御歸國ある。其處ちやでおざる。彼人は直ぐ

御謀叛と言ひまする、執政の我等申通じた自判の狀の表に據らず、上樣御大切と御存知ながらに御歸國ある、是れ疑ふべうもあらぬ御在所に就かれての御謀叛、天下に御旗をと思し召す御野心、然無からむにも上樣御口眞似をも仕まつる我等老中が申す旨に附かれず、自儘の御振舞ある驕慢の御所爲、兎角は、古への岡崎樣（信康）近く上總樣（忠輝卿）駿河樣（忠長卿）御同樣の御義なんどしも申做して、彼の出頭、身の才覺、威權と智慧とをもて頭甲揃ぎに、御陳謝も聽かず、御論辯も容れず。殿樣は是非もない御切腹、御領土は滅却、御身ら重職の向は重々の罪科！　恁くて彼人は依然世に在る奴。某が胸算では同列にも談合せず、私の判狀、殿に進らせ、其上にも假初ならぬ上樣御大切云々と申たる咎を申して身を退くか。然らずば自滅か。或は平常の出頭振を嫉む者もござある程に、家名斷絕、領地沒收とも沙汰せらるゝ奴。左右は穩便とはあるまじきと其は其の最初より彼方では覺悟。只御傷はしうと、申すも恐惶は殿樣が御運の末！　進退とも協はせられぬ御身の果！　敢もなき御最後！　對馬どの、熟との御分別！」其言は、鐵騎夜枚を銜みて敵營を襲ふが如く、音激し、節鯵しけれども、其容は悄然として、淚は其臉に滂沱たりき。對馬は今更に、此の御使に立ちたるが身の落度とも思ふ如くに、首を俛れたり。大學は胸に餘んの疑問を默止すべき時に非ずとや、恐る〳〵「御辭は實にもぢやが、不審もおざる、彼人御一人こそ然はおはさうも、掃部殿（井伊讃岐殿（酒井）加賀殿（堀田）豐後殿（阿部）これ等の衆中が皆一同して然樣の無成敗せられうとも存ぜぬ。況て御分も今言はるゝ、彼人の出頭振を日來嫉うも思はるゝ仁の有りとやらむ、然あらば此方さへ理非明白ならば右樣の作略、自然に消滅もし申さう奴、還著於本人の名文も冤處、然無くては神も佛も……」「えい神佛か！　凡夫熾んに神祟らずぢやは。」「とはおざらうも御主家にも等しい當家。」「其の御主に等しいから、彼等も日來に目を注け申すぢや。如是る際には君臣上下一同して其敵たつ者を鏖さでは已ぬが御家の質、三河の風ぢや。船を同くして風に遇ふ時は吳越の人も善く力を戮す、其の朋輩の嫉み媚みも目今は彼の衆の眼にあらぬ。掃部殿、讃岐殿、加州ぢやとて豐州ぢやとて甚麼が此方の依賴にならう。悉皆が敵ぢや。讐と見られい。」彼は御前を睨回せり。と見る時對馬は其面を擡げ、然りとの氣色せる問を發しぬ、「段々の論議隙間も無い、實、我等も吐息とでおぢやる。就ては此際での貴老が胸裏は？　先刻の申された日光、八幡、熊野權現の御加護といふ、其の御加護の意趣を密と……」「言へとおざる奴？」彼が巨眼は、俄に愕くべき光輝を放ちて、御脇息に凭らせたる殿の御面を熟と射たり。此時の殿は仕麼？　隈日、沈思、御口は一文字に緊結ばれて、御呼吸も有るか無きかの如し。

（二五八頁參照）

（百九十一）

此時殿が良儇聽の御氣色を現はし玉へるを、斷えず其方に注れゐたる正雪が眼睛は遑疾くも看認め得て、同時に快然たる色を面に見せぬ、洋々たる彼が辯は、將に其の轡に脂さしたる事の如き舌より回轉されむとせり、「善う申された。然らば我等も胸臆を開まで申さう。申さう前に、先づ我等が兵法の奧意として弟子輩に傳ふる道歌といふを御耳に入れう。其は樒尾の明惠上人が悟樣の歌ぢや。山河の末に流るる穢穀も、身を棄てゝこそ浮ぶ瀨もあれ。な。意義は改めて申さでもぢや、が、只其處へ臍をお居やれ。身を棄てゝこそぢや！　何事も只身を棄てゝこそ！　彼の孫子に曰ふ、亡地に投じて後に存し、死地に陷りて後に生く、九郎殿が

鵯越、楠判官が千刃破、皆是れ九死して一生を得る、兵家の話として奇勝を制するの道おざる。扨て右は、三軍相會うて死生を賭し、勝敗を決するか、槍を執り馬を跳らせて一騎の勝負を挑む上に就てゞ申すが、又一身一家の事、存亡興廢の運に於ても其の道理は同一いぢや、扨て其の運の事。此れより些と運を申さう。運の類に二種おざる、一つを世の運といひ、今一つを身の運といふ。世の運とは世上の運ぢや。是れは其位に在らぬ、其分に不相應ぬ者の左右としても協らぬもの、只智あり能ある者は、其の到來せる世の運を我有にして、捉住て放たず、脫落ず身の運を延へて行く。見られい、故太閤にもおはせ、又日光の御宮にもおはせ、皆此の是非なき世の運を利して御自身御發達の資となされた。雖然、其の運を利すると言ふも、晝眠してゐては協り申さぬ、皆身を棄てゝぢや、扨て後に浮む瀬を得られたのぢや。卽ち太閤は明智が世の變を利せられて山崎に身の運を造られた。大御所は、太閤が晩年の驕奢を利し、石田井に大阪の野心を利せられて覇府の御運を開られた。もとより運の字は軍に走を加けたるもの、軍は世の危殆い所爲、其の危殆い軍に走を加へたぢやで、運ほどの危險いものは又と無い。所以に最初は身を棄つる、後に浮む。覺悟のして亡地、死地に入る、後に存する。扨て其の浮み、存生て見れば、運ほどの赤た容易い、めでたいものはない。禍を轉じて福と爲る事を踰えて尊きに進む、皆其の刹那の運の機を利して家國太平の基礎を開く。な、古今天下創業の英雄たるものは大概其爲ぢや。恁く申さば自然に我等が申す意味も暗知れう。只其の身を棄てゝ、運に御乘りやれ。其機は目下ぢや。」彼が眼は右を睨み、左を覷ひ、其手なる扇は東を指し、西を示し、遽てず、噪がず、訥々として說き去り說き來る如き態をば裝ふなるも、一世の浮沈を此時に期したる聲音は自然異常のものありて、彼が額上に津々として湧く青汗は、折節に拭ふ疊紙にも餘りて見えたりき。聽き悶りたる對馬はと見れば、其れが面色も太く變れり。「亡地、死地、九死一生、身を棄てゝ運に乘れと仰るゝ、其の意趣は好う解せ申たが扨て其の手段は未だ其意を得ぬ。何さま殿の目下の御身、貴老昔はるゝ如くとあらば其の亡地でもおはさう、又た死地に立たるゝでもおりやらう。なれど其の亡を變じて存となし、禍を轉じて福となす！　今の進退協はせられぬ上から申せば其の手段たる只、御旗上られいと……申すより外無い歟！　貴老果然て其の意見か？」彼は其の凝眼をもて詰寄りぬ、大學も、豫てより目を注けつる彼、倘か然あらば同じく其座を起せじとの勢もて後を詰めたり。と御覽じたる殿は突如に御聲を懸させぬ、「控へ、對馬。大學、茶を一服！」思ひも寄らぬ御所望なるに大學は我にもあらで狼狽へき。殿は呵々と笑はせて、「大學、疾う立てい。や、對馬、人各、其心あり、十人寄れば十色といふは、な、其方が予を見ると、民部が予を見ると、亦た各、其の鑒察が違ふ、なれど予を案じ呉るゝ其の忠信は唯一つぢや。然て予はいかう滿足ぢや、但し予にも亦た考案の些少はある。其の考案と彼が申すと合はゞ可し、合はずば只棄つるぢやまで。躁ぐな。其方は予の重職、國政の料理をこそは任したれ、罪人の捕方をば言ひ附けぬぞ。先づ夜は長い。緩々と一服して熟と其の心胸をも話し合うず。大學、對馬にも民部にも取らせ。睡氣の覺むるやう微と濃うせい。」正雪は此の御意を得て、少時御面を注視しが俄ちはら〳〵と落涙せり。

（百九十二）

御茶喫了て後、殿は徐ろに問はせぬ。「民部、扨て其手段はや。」あツと應ひつゝ彼は正面に

御前に向ひぬ。嚢の虚涙に引反へて、彼は今、實に殿の御意の忝けなきに感泣たりき。想へば窮鼠の境界におはす殿、其の境界に陥いれ申したるは我が所爲なるも、知らせ玉はねば是非も無き、哀れ我を賴むべき眞の神の使者としも御覽じてかや。さしもに對馬らが氣色立てるを制し玉へる御腹量の巨大きなるは言ふにも足らず、猶其御諚の日常にも似ず其趣を異にしたるは、或は我が今云へる轉化の運といふを利して、屹とも思し召し斷らせ玉へる歟。窮鼠が反噬の牙を現されむと歟。或は豫てより可怖しき此殿が御胸中、如是る時機の到來をも待ちつつおはせし歟。然らば我は不知不識に殿の爲に此の好機を造れる歟。暗合默契なるもの歟。知らず其は今は姑く措くも、兎角に殿が我を庇護し、我に依賴し、我を語合ふべき者として、年來の人々よりも厚う寄遇し玉ふやうなるが忝けなき、眞に是れ千載の遇、風雲の會、水魚の契、優曇華の花とも、三千歲に實るてふ桃とも、今宵ぞ我が胸の春に遇ふ其時、と勝へぬ歡喜と感謝の涕涙とに摧暮れたる正雪は、跳躍るばかりなる心を壓鎭め、纔にうち咳嗽きて、「御諚、只恐入れ……全體は御胸に……」「予の胸に？　とは有らうも、先づ仔細を云へ。」「別の義ともおざりませぬ。對馬どの只今申し當られてござりまする。」「むう——旗上とか！」殿の御首は、低く、斜めに傾きたりき。是を御狂言と見たる彼は、間も透さず、「思し食し立られませい、御利運は眼前、海内の人心は憚りながら殿樣御身に皆蒐集りて居りまするぞ。其の居りまするからして今回の如き御難義。殿は御存知おざらしやれまいも江戸老中等は疾に目の註けて、何事ぞは有れかし、有らば、といふ猜疑嫉妬は只御身一つに雨の降蒐るやう、其中に徒立せられて、如是て在して甚麼御前途の好うおざらう。いや御前途……扨置て、目下と申す目下、其の惡嫉の彼等が雨は火雨となりて毒焰は御身を燒きまする。其れも其の御身に過失のおはしてこそ、何咎もおはさぬ御身——其の御身を彼等豺狼の牙に委ねて……こりや御身は恐ながら其の御腹一つ居された丈にて濟みませうも、御簾中樣方、御附隨の御家來、上下十萬に餘る人數の路頭に迷うて飢ゑ、凍え、敢ない、墓ない死を致しまする、其れ御目に見て在らしやれますか。抑や君側の姦を掃うて四海の靜謐、萬民の安堵を籌りまする、古にも多く其例おざる、遠くは源右府が平家追討、近くは織田殿が三好退治、誰か其を非と申ませう。右も其の將軍に對せられての咄か御如在あるではなし、只殿樣にも御家來筋なる老中執政らが惡を禁め、非を抑へて、天下の騷動を御鎭定なさる。名正しく言順にして、天晴れ柳營の御基礎と申すを萬歲に固めさせらるゝ、憚りながら是が日光樣甚深の御神慮、尾紀水の三家を御立て置かれたるいとも尊い御趣意、其の御趣意を御奉行あらせらるる故大御所樣へ莫大の御追孝、御宗家へ無上の御忠勤とも存じ上げまするに——さ、右にて理非は明白、甚麼の御疑惑かおはしませうや、疾う疾う思し食し立ち——然あらば私も右申上げましたる一萬三千人、國々の要所々々へ間配りまして、御旗を賜はり、彼の姦臣らが一味の輩が城地を踏潰し、上府を遮斷り、野合ひ、山踰え、海に、陸に、粉骨の合戰を仕つり、御本意めでたう、必ず其の首尾いたしまする。天晴れ時機や……」彼は膝前なる扇を執りて御疊を二つ三つはたと擊ち、殿が御氣色より初めて、侍座の兩人が面上をも睥睨ゑ睨めぬ。其の眼中に、彼れ兩人が、醉るが如き容姿は映れり。殿の御肱は今や脇息を放れて、御膝も共に進むを見たり。「道理は然も……但し事の成敗は謀略の善惡、人數の多寡、其餘全般の差によりて甲乙ある。先づお事が其の大事を企つる最初の手筈

は。」「其の事おざる。」彼も御傍へと進前れる、其の意氣や得々たり。

（百九十三）

進前れる正雪は扇の鐶眼にて疊に畫きつゝ、「其事おざる。先づ大體の順序を申せば、殿樣は明曉の御發途、當地より直さま京都へ御上りになりまする。恁くて其の一夜の中に所司代を御踏潰し、同時に參內御座なされて關白殿御初め百官有司を、動亂の鎭りまする其間の御事とて叡慮へ御登せ、此處に朝廷を居ゑまする。彼山には豫てより御風呂焚料として多分の御寄附もござりまする、座主を初め衆徒一同は皆弐無き御味方……」「待た、お主、其の人數は？」「是れは容易い事。只今御召伴の御人數は大概百四五十人。民部御供仕りますれば五百餘人は二日が中に彼處にて揃へまする。總じては七百人。此程の勢がござりますれば帶紐解けの所司代以下を討取りまするに何條事もござりますまい。扨て、恁くいたして次に手を着けまするは彦根。」「むゝ、其の彦根は？」「翌日、直さま、其騷動の聞ゆるか聞えませぬ間に、令旨に添へ御教書を下されまする。其の御使に差副うて僧兵五百餘、私の手兵三百餘、取合して一千が程の軍勢を堅田より船して送りまする。此の大將は私に下されませ。地理は存知、船着は案內、否とも申さば三時が程に彼城の櫓に火手を上さして御覽に入れます。斯くてまづ東海、木曾、北國の三街道を塞ぎまする。」驚ける兩人に引反りて、殿は只莞爾との御笑顏なり。「むゝ、京都を取り、彦根を潰いて、街道を切塞ぐ。其れにて近間の膝所、大津、伏見、水口、龜山、高槻より丹波に懸けて一圓に手に附うとな。扨て大阪は？」「是れは猶隙も入りませぬ。狼狽てたる城內、倘か人數の召伴まして所司代の加勢とも參りませうなら、其の城を出ぬに御城は殿樣御所有にござりまする。其手筈は前年より。」「附けたとある歟。むゝ。扨は先づ兩日が中に畿內の五國、丹波、近江、伊賀伊勢までも其の令旨と予が敎書と其方が軍配とで平均せうとな。其れで藤堂を追落し、尾張を下して、美濃越前をも手に入れ、日本の中央を中斷うと言ふは。扨其の江戶は奈何と爲る？」「其れは燒擊——、私祕藏の火術を以て……」「えい、扨こそな？　扨は汝其の謀叛ぢやな？　宗家を僞いて賴宣が天下奪ふ反逆ぢやな？」「えッ。」失敗ねたるか、扨は殿に——と其目色を変ふる正雪を撲地と睨させて、「君側の姦を掃ふと云ふ、其の言既に汝等が分に出來過ぎたる事を云ふ奴かなとは思うたれど、猶予が家來として予が身を思ひ呉るゝ忠義かとも免じて聞き居れば。有るべき事か。賴宣に、勿體なき朝廷を挾みて海內に號令せい、叡山に取登りて彦根を襲へ、所司代を討ち城代を逐うて海道を塞げ、剩さへもや柳營御所在たる江戶を燒けとは、汝什麼何たる言——予を然る謀叛反逆の曲者、虎狼の野心を逞しうする惡徒、古の將門純友にも劣らざる賊臣とも看做すか。えい！　汝。賴宣、君側の惡を除かむと思はゞ只幾回も諫言を上げ、又素奴ども叱り懲いても其非を矯正う。甚麼の汝が云ふやうなる、此靜謐の天下に旗を擧げ、兵を動かし、恐れある朝廷を驚駭かし奉つりて、可愛き農商らに憂い目を見する、然る無道の手段——其れを汝は猶日光神靈の神慮といふか！　可憎い奴め！！」百錬の鏡とも見る御眼の光に射竦められて、さしも物を物とも爲ざりし正雪も全體が戰きて動くを得ず、舌根も震へて陳るを得ず、平伏したる背と腋とに滴々として滴る膏汗は、五臟を搾木に懸けたる如く、色も交り、息も喘へぎて、肉も石と硬化れる、此儘にや枯死せむかと傍の看る眼にも怪まれにき。恁くても殿は御眼をば寬させ玉はぬなり。「民部！　陳謝く言はあるか……」「恐れ入てお

ざります。兵法者の生智慧只管殿様御身上のみ案ぜられまして……斯くもせばとて……」「一二も要らぬ。腹を切れ！」

（百九十四）

萬事は休矣。我が廿餘年來の辛苦も、經營も、此の一宵の蹉跌の爲に悉皆水泡と歸し訖んぬ。命の非なる歟、時機の違らぬ歟、抑亦我が明の足らざる歟、智の及ばぬ歟。恁くまでに纂なき運を有たる我は、只潔よく此腹、此場に掻切て、責てもの健氣を此の人々に見すべき歟。とは思ふも、惜みても猶餘りあるは、我が生命なり。抑此殿を擁立むとせし初一念は那麼？只錦の上に花を添へ、木佛に箔の光を加へむとてなり。花無くも其錦の美麗きは有らむ、箔無くも木佛の靈驗は交らじ、美麗きを衒ひ、信仰の念を增さしめむと企望てつる其花、其箔にして、錦の美を奪ひ、像の面目を損はゞ、これを剝ぎ、これを除くも甚麼か有らむ、況んや其物と質とを併せて之を失はしめむと爲るをや。見よ、倖ひなる夜陰、剩さへ御前は隙きたり、我が腹切るやうに見せて御油斷を覘ひ、一刀に御首を落して返す刀に兩人を切伏せ、恁くして此場を遁れむ歟？否、危ふし！此殿の御手の利たる、御心の敏、正雪ほどの者に腹切らせて得も御油斷はなさるまじ。御油斷無きを我術にても討つこと難し。況て予は今一介の浪士由井正雪かは、一萬餘騎の大將！然る危殆き所爲して元をも子をも失はむかは。要こそあれ、今少時躊躇ひて、何事かの間隙を！と、今は其胸稍沈着きたる正雪、猶鑒くまでも其瞻を太らさむとや平伏したる儘に身動きさへせぬを。「民部、見醜しや、惡怯れて見え申すぞ。」「言ふ對馬どの、然言ふ御分は？」「某を？我等が奈何とした？」「神文よ——日本大小の神祇を懸けた其誓詞は那麼と召された？」彼は耐らで詰寄せたりき。

「血迷うたか、神祇は懸けたる殿様御爲とある事なりやと顚つたを……」「顚られた。我等確實に記憶てをる。」「記憶てをらば破却とは言ふまい、其方がやうなる殿様御爲にならぬ事……」「御不爲とや？　殿様御胸はいざ知らず、某は只殿の御爲と存じて言うた。恁くもせば目前の御難義も救はれうと存じて言うた。人各、其事ふる所に忠、天下が奈何、御宗家へ甚麼、海内の動亂、朝廷への恐懼、御謀叛が如何か其等は知らぬ、唯我等は主として仰ぐ殿様御前途を好う籌算り申して言うた。其の御前途好いやうにと存じて言うたが、御不爲か？」憎くき强辯、其の横事やはか押通さすべきと言ふ息込も、大學も進めり。「勿論ぢや。御不爲！　忠臣は其君の非を正すとこそ言へ、御言がやうなる御非望の御觸告——大罪も大罪、君を不義に陷いる……八裂にも爲すべき奴！」「はゝ、君を不義に陷いる、何さま其は不忠か存ぜぬが、又安閑と手を束ねて主に寃罪の腹切らする、其れ忠臣とも申されまい。正雪が手段を惡しいと被仰る、御身が好い手段、密と此座にて承はりたい。はゝ如何とぢやな？」嘲笑る如くに詰問られても應へ得ぬ彼は、倏忽に赤面せり、追風に帆なる正雪は獲たりと猶蠟み懸けて、「事、御不爲とあらぬ上は、神祇に懸て誓はれた對馬どのも某と同意。又た目前の御危難に迂濶々々とある大學も御奉公を等閑の大不忠者。殿の御叱責にて正雪も腹切る以上は對州、御不祥ながら同じ死出に伴立たれい。大學も又た恁くては武士として相濟めまい。不忠の咎を身に悔いて騙をお棄てやれ。」言ひ了りて彼は疾視ぬ。此方も共を睨み反して無念の齒をば切れるも、道理ならぬ其道理に詰られる如くとなりて、遺恨の涙を徒爾に拳頭に揮ふのみ。

瞰ははや近づきて、鎚々として耳に響く寰堂院の鐘に寅刻を報げり。此の一埒は夜明けぬ

中に甚麼とかの御沙汰無かるべからず、殿も今更に困じ玉へり、御手は虚しく胸に拱れて、例に無き御顔色も平ならず、膝に乗れる正雪は、憎きまで心地快げなり。「笑止、御雨所。夜明も間近……はゝ、見醜しや、惡怯れても見え申すぞ。」

（百九十五）

小角力に小股を掬られて大角力の浮足となれるに似たる、始末の協らぬ御座敷は、際涯なき睨競に時刻のみ移るなり。血氣の大學は此時看然として、腕を掉てり、松坂以來殿の御懸念ある正雪、御眼鏡に違はず今夜初て其の化尾を露はせる以上は最早や容赦のならぬ奴。一つは殿の御爲。身の遺恨。朋輩の恥辱。天下の禍の根を除くと云はむはずほけ無きも、誘引ふを倖ひ、いでや其に耦刺へてと……「一民部、不忠の講釋、腹切れとの指南、近ごろ嬉しう聞き申したぞ。兎てもの労志に其の冥途への案内、先達も頼み申さう。いで——」扶攣くる小脇指の未だ鞘を放れぬ間に。「殿、御城代玄蕃樣、只今此れへ御伺候にござりまする。」兒小姓の一人、走り來りて劇たゞしく告る後より、城代の大久保玄蕃、老眼に涙を泛めし愁傷の體、履む歩も力無く御座に入りて、畏まりつゝ、「上樣、昨晝彌御大切……」嗟——薨御か、豆州の判狀は果して實か、將た其時に際會したるか、凶兆か、前識か、其は知らず、柳營三代の將軍家光公は、實に慶安の四年、卯月廿日に御他界ありて、其の早打、疾くも此時駿府には着けるなりき。

成敗も、切腹も、刃傷も、總ては曉方の殘燈と共に撲消されたる、東方は白めるも御座敷は闇夜の如く、烏の啞さへ心裏悲くて、人々は只恐懼の涙を其瞼に拭ふのみ、然も此朝に雨さへ降れり。

* * * * *

危ふしとも、殆かりつる正雪が生命の、不意なき薨御の沙汰に一時を助かりて、其後は只謹愼とて江戸表へ召伴られき。是れ幕府の御喪の中、百日が間は、輕罪とても行はせられざるが先例なればなり。生命だけは助かりつるも、彼が失望は言むにも餘りあるもの有りけり。只彼の殿を後楯なる、人數は實に一萬の餘を鳩合め得たれども、其れが爲め年來の貯蓄は、以前にも言ふ皆無となりたり。皆無のみかは餘義なき負債さへ出來て、彼の神の手と戴かれたりし九州の我も、江戸にては翻りて惡魔の手に墮ちて、債鬼等が苛酷き逼責は、宛然其肉を搓り、骨を剉まむとする如きものあり。加之ならず、彼の國々の者共よりは、御旗上や何時？　大納言殿御上洛は何れの日？　御約束の半年の日も既や疾に過ぎつるに御沙汰無きは何故ぞ、但し其は猶時節を待つと有らむには强ては言はじ、只差向ての逼迫なる金子なり。御預りの金は何くれの準備の爲にはや消費たるに、跡々の御見繼なくば、此の前々甚麼とあらむも立ち行き難し、疾く御飛脚にて五十兩、百兩二百兩……なんといふ口、夜に日に雨の降るが如きに、其を和し、延べ、言賄むる金井、鵜野、杉、田代等が役も亦大概のものならず。彼等も後には怱くてはと言ふ。言うたりとて無き袖は什麼して振られむ、駿府の家なる什具器財、目欲しきは既に九州の折り竇排へるを、猶我が身の周圍、家の内外に、五百兩、千兩の料はあらむも這は正雪が面目とて手放されぬなり、雖然、其も今暫時が、間ぞ、將軍家の御不豫、右につきたる南方（紀州）の御肚裏、天下の亂に遠かるまじ、今にして捭折けば三年の法座、百日の喪、從前の苦心も水泡ぞ、武士は喰でも高楊枝とさへいふを、云甲斐なうや、など勵責すが、勵責ッ師匠の胸裏は督勵さゝ各位にも倍して苦惱かるべし、我等も今は摺りたる、好なる酒も疾く慶

めぬ、母にこそ折角には魚もおますれ、我等丼に妻子どもは朝夕は麥粥なり、されども金鐵の心腸は撓まぬぞ、方々も勇士、此の大事に荷擔せられし其の初一念にも反省みて、辛防あれ、見られよ女子ながらも彼の宮が健氣の態を、と慰藉めつ、慷恥むるは忠彌にして、其の引合に出されし宮は、今は諸事の漏泄るを虞るゝと、活計の苦しきに端婢をも雇かぬ屋敷の、煮焚よ掃除、夜は衣服の縫繰りに可憫彼女は眠る目も睡ぬなり、原來の肌理雪白、日には焦けぬ、今が娘の盛りといふ十九廿歳の、其手は畔、足は胝！可惜眞玉を泥裏に埋めたる無慘と謂も愚かの態なりき。

鐵は振づべく、石は卷くべきも、正雪が融通は今や全く動かす可らざるものとなりぬ。折しも伊豆殿の事あり、紀伊國の御發途あり、彼は彼を聞き此を探りて、足を最後と駿府へ出立てり、然も策略は未然破れぬ、猶且つ右の爲體とはなれり。今は殿の御沙汰なくとも自身と腹切るか、無理ながらも大事を擧ぐるか、陷阱なる虎の射處決を急ぐべき場面には墮ちたり。

（百九十六）

將軍家の薨御に、物の音を遏められたる此夏は、大川の涼舟も出でず、堺町の歌舞伎も木戸を閉鎖して、富士を前面に連山の趣を見するといふ親父が許への遊客が編笠さへ、今繁昌の江戸橋に影を斂めぬ、況て人目より草の芽しげき山の手をや、奴が柴垣もう一つ蝉の殼、粉雪の振袖ふり立つる聲も聞えで、哀れを河田が寐の蟲の音にとゞめつるは、有る中にも加賀屋敷の正雪が住居なりき。これは猶主無き家の荒涼じさ、白晝すらも魔魅物の出づるとなむいふ如くに荒れ破れつ、内には人の有りや無しや、さしも今まで訪ひ寄りたる百に餘れる弟子も離れて、多かりし家内の男女も散り失せぬ、只交らぬ門に聳ゆる一本の巨槻、其れにも夜は怪異しき鬼の影さすとて、此頃の青葉涼しき日陰にも途行く人は避けてぞ過ぎぬる、其怪かあらぬか八幡山の丑三つの鐘、耳近きながらも雨氣を帶て朧ろに響く時、彼の下枝に手をかけて閃然と塀越に入るものあり。

「宮、宮、在るか？」遑早く聞つけたる宮は、其のほと〳〵と叩ける庭口の雨戸の際へ身を倚せて、戸の隙間より外面を窺見せしが、突如に戸尾の栓外す手も覺えねばかりに、「師匠樣！」

「おう、こりや靜にせい。留守は無事かや！」恁く尋問るは麹町の上館に在りと見し正雪なりき。と聞て、曩の物音に、一時犀を竊める座敷は、倏忽に障子を開くる、紙襖を排く、物の慌遽しき響は聞えしも亦倏忽にして寂然となれり。其の慌遽しき響とは什麼ぞ。彼黨が、今夜も打集りて、大事の計議を凝らせるなるが、師が今歸家れりと聞きて驚喜して迎へしなり。其座には忠彌のありき、忠彌は先づ正雪に席を讓りて、

「兄者、無事の對面は何倚りぢや。扨も今度は。」苦笑すれば、正雪も首を掉りて、「いや散々ぢや、一代の不覺、面目も無い、が時節は來たぞ。留守中に支度お爲やつたか？」其問を意外と聞做せる忠彌の臉は看る〳〵膨れぬ。「何が！支度！御存じの體、我等此の三十餘人日々夜々に寄合うては只御身が上を案ずると、歎息を吻くのみぢや。先度に打たいた百挺の弓其の代金も得う拂はねば催促は矢のやう。又、九州の奴輩に向け送つた百兩の金も彼の屋代めに一時というて借受けたが、期が切れたで、手代をおこいてわや〳〵と云ふ、支度は愚かぢや、足も手も出ぬ。現に今も、恁くては我黨無念の餓死するのみぢや、よし然らば生死を契つた御分と一所に兎も角もならうと云ふのでの、明日の晩紀州屋敷へ踏込んで憎い殿を斬り、館に火を放けて一同腹切ると覺悟のしたぢや。右の

爲體ぢやに甚麼とかならう。些は御察しやれ。」其の愁歎は實に無理ならぬも、如是る際に然る女々しきと、正雪忽ち氣色を変て、「聞たうも無や泣言、其れが其の丸橋忠彌とある勇士の性根か、腑甲斐なや。然る程ならば我等はやはり彼の館に在て腹切て果てたが增ぢやを。此方は又留守中の支度、江戸の大將たる御身がおやれば脫落も無からう、況て我等が豫て云ふ將軍家は御他界、御家督は幼君、堀田を初め然るべき執政等は追腹切る、大名は外に疑ひ、役人は内に惧る、幕府の基礎の動搖といふも大方ならぬに、此ぞ我等が事として望む、諸侯未だ會せず、君臣未だ和せず、溝壑成らず、禁令施さず、三軍勾々、前むと欲して能はず、去むと欲して敢てせざる其時節ぢや。百戰するも殆からざる其時機ぢや。假令正雪は不在であらうも隙間なく旗を御擧ぎやる、今日か、明日か、今夜か、明曉かと待つるも音沙汰なし。軍とも云はぬに肝のみ煎れて忍び出て來て見れば、呆れ果てた！　嬰兒輩が母親に箸もつて飯粒埋めらるゝを待つ如き念議。餘人はあらうも、忠彌、半兵衞、御分等は思ふに似ぬぞ。然る程にて此の大望最初に好うも思ひ立たれたな。こりや正雪今日俘ひに生存て在ればぢや、途中に病死せば其儘に默止さるゝか。言甲斐もおざらぬ。頼もしうも無い。」

（百九十七）

如是る不足は彼が平生を知る者にして最も異むところならむ、彼は嘗て其の能はざる所を他に責めたる事あらず、能ふべき事の齟齬てるすら猶且つ其情にし酌量むべきもの有る時は、是を尤めぬなり。況んや今の云ふ其の脫落の如きをや、草鞋一足、握飯一塊とて、錢無くて調達はれぬ今の世中に、外に受くべきの俸祿無く、内に翻ふべきの口多く、所有の財嚢は既に全く其底を拂ひて、頼るべき銀主は憎く冷かなる白眼をもて彼等を遇ふる今日をや、彼が天稟の威容、得意の雄辯をもてすらも其の融通の門戸を打破ること難きに、猶何の忠彌を責めむや、半兵衞をか懲むや。如是る無道理の言を近頃の驗河殿とても得う爲じ、況んや其情を抑へ、怒を忍ぶに妙なる彼正雪をや。其の慾を矯るに妙なる彼は、亦た此時に於ても其の情に忍べるなりき。彼は其席に入りて一座を看渡すが否、先づ愕けるは彼等が氣勢なり。忠彌、半兵衞を初として、鵜野、奥村、林、日來は其の猪武者をもて自ら許して、火にも水にもと罵る河原十郎兵衞、僧の廓然すら、寂しき顏色は萎縮に萎縮て、我が歸家れるを歡びは喜ぶも、然りとて此を機會に大事を！　など發言はあらず、忠彌は纔に明日の夜紀邸の襲擊）といふ、其れすらも彼等は應ぜし歟、否らざりし歟、徒爾として手を束ね、茫然として首を俛れたる、唵々たる容貌の神氣滿たざるあるが如き、敗形など謂はむは扨て措て此儘ならば離散にやならむ、裏切もせむかと思はるゝに、彼は愕きたり。愕きたる彼は無理と知る〳〵例の手段なる取敢ずの一喝を令喫て、死水を汲りて活波を見むと試みたり、此の死期の獨參湯は什麼彼等を刺戟したる歟。耐へぬ忠彌は目を剝出しめ、彼が虎髯は鬖然として戰ぐを見たり。「頼もしう無い？　我等、其の腰が抜たとお言やる歟。腰の抜た…頼もしう無いは我等より御身樣ぢや。驗府の醜態はよし彼の殿の手管に陷て、腹底まで看破されて、叱り飛されて、腹切れと窘責まれて、其腹も切り得ず、汚目々々と當地へ拘れて、幾と五十日、進もならず退もならず、其等の失損柵へ上げて留守の我等をお叱りやる。兄者とて云はれた義理かや。我等こそ聞きたうも無い。」と云ふを抑へて金井は慌忙しく、「無用！　甚麼事おざる兄弟の喧嘩。只今は恙る場合か。但し師の仰せも曲も無い、頭の無い蛇の

我等が此の五百に餘る府内の黨與を好う壓へたを御賞もなされいで。丸橋どの苦心、幷に此座衆中が骨折も大抵のものではおはさぬぞ。夜々の會合も人目を忍べば此邊に往來の絶ゆるやう有らぬ奇怪の說までも云觸らいての……」彼は猶語續けむとす、正雪は其を聞むともせず、見るより彌肚に堪らぬ忠彌、「叱！　云ふな、半兵衞。兄と立て師と敬へば野放圖も無い。耳も無い目も無い人に物云ふも無益。其の無益の口叩かう隙に此ハは此方で覺悟のせう。御分も爲い。」正雪は喫驚きたり。「覺悟とは？」「えいお主に云はぬ。お主は其の所望通りに紀伊殿へ行で隨意にもせられい。此方は此方で所爲がある。」其の語氣を察すれば、彼は彼にて其の大事を爲遂むとも爲るが如きなり、訴人かと懾れ……正雪は、肚裏に驚愕の胸を撫でつ、脣邊に暗笑の色を見せたり。とも悟り得ぬか、鵜野、林等は、齊一く忠彌に眸を注ぎて、其膝を前めたる、中にも金井は、「心得ぬ忠彌の仰せや、御身は御身で所爲がある、此の半兵衞にも覺悟せいとは何樣の意趣？　唯二人のみの大將が其樣の御確執では手に屬ふ我々は迷惑しまする。もとより根葉も無い……」「いや有るよ！」「何を然う御腹立たれた？」「嬰兒が飯粒哺ませらるゝと！　御分も我等も正雪目からは嬰兒ぢやげな。其の嬰兒で有るか無いか、踏歩ト行の墓ない脈に此の江戸の土、獨歩して蹈で見るも興多らうで喃？」彼が片臉には猶嫉き笑ありき。「扨は御分一人の旗上な？」「勿論ぢや。」と云ひも了らぬに、正雪は驚歎けるが如くに突と起て、忠彌が手を我額に戴きつ、「誤つた、丸橋どの、正雪見損れた。今迄の無禮お免しやれ。天晴や勇士、大將軍！　いかにも江戸は御分の隨意に……」

（百九十八）

如何になり行く事やらむと今迄は息を呑みたる宮も、此時さし出でゝ、我が頼憑める師の恁く速かに我執を棄てたるを喜ぶと、又忠彌の此の不滿を後日に遺存さゞらむやうにの配慮とにて、案ぜる人の恙無かりし祝賀を兼ねたる取敢ずの盃を持ち出でぬ。此頃の憲所の淋しき、酒菜とては新瓜の酢に和へたるを一種のみなるが、猶此の夕方、市谷の小溝に草寄して漁り獲たりとて鵜野が持て來れる小雜魚の些少あるを、是れもめでたき尾頭附よと、煮浸にして正雪が前に故とに勸めたる、箸にも足らぬ物なれども志の眞實々々しきが毎に交らぬを、彼とても嬉しとや見しならむ。一座の面色も稍復れるに、忠彌とても何時までも膨れたる臉してはゐられぬなり。「然謝罪られては此方も挨拶に究るが、今は實に此腹さの立ち申したよ。心さへ解られたりや我等も水にぢや、あはゝゝゝ。」と初めての高笑なり。正雪は改めて、「忠彌料見濟ませたりや、扨て是れからぢや。我等が身も喃……」其の「身」と云へるが人々の第一に案ぜしものなり、此の夜中に如是る爲體して斯う忍びつゝ復歸らるゝ、決して靑天白日のものならぬは勿論なり、彼の番士が目を竊み、戸を破り垣を踰えたるは云ふにも及ばず、或は人を殺め、其血をも流されしか、然らば追人も來るべく、捕吏も向ふべく、恁くといふ其間にも防戰の準備せでは、といふ其の面色の變れるが彼方には那麼と見えたるやらむ、不意ぬ爭論に腰を折られて默止せしものゝ、今や其人の口よりして此の問ふに違あらざりし疑問の答を得むとは爲なりけり、人々の膝も覺えず前みて眼光も自らに炫きたりき。彼は噪がず、「……眞實、一時は忠彌、右云ふ通りに散々の不覺して腹切らで協はぬまでの陷目に陷ちたが喃、今に初めぬ彼殿が不思議の配慮で、其後何といふ沙汰もせられず、御咎の身にあるまじき折節も下され物の數々、番人とては朝夕の給仕を兼ねた

る小坊主二人切り、湯浴もなる、用便も足る、眞個結構身に餘る御手當ぢや。なれど公儀御喪中百日も終了なば一旦仰せ出されたる切腹、是れば是非ないと覺悟の處に、聞かれい。今宵、戌の御時計轢つた後」と、彼は云ひ懸て、其の感謝にや有らむ目を拭ひ、囁くが如く口を濳めて、「殿御自身して我等座敷へ成らしやれた。仰するやうは、幕府執政の料見愈〻見る處其意を得ぬ、就中伊豆守我意に募りて幼稚の將軍を私し、御政治も總て非ぬ方にのみ成り行くは、頼宣身も今は前途の測られぬに駿府にて其方が云ひつること今更のやうにも思ふ、これに依て予も思ひ立つ事のある、其方も此より一心予を頼けて豫ての望む處をせよ、但し此方に在らば對馬大學ら其餘に對して成敗の沙汰せでは協はぬに、疾う落ちよ、然して先陣の仕つれ、何處にもあれ三月ほど堪へう間には予も名を設けて歸國して旗をも上げ、其方をも見繼がう、疾う僞よ、重ねての對面は敵革の上にあらうぞ、と、な、仰せ棄てゝ入せられた——其れで我等も恁く、喃、歸家た、何と是れが……時節の到來、優曇華の花ではあるまいかり」歡喜しき色は眉宇に溢れて、涙は見ゆるも屹と看回したる眼中に、宿望の達せる、天下も既や我所者との勢の躍れる如きに、前みたる一座の膝は益〻進まれて、氣支れたりし呼吸の喘ぎも今は四邊に靄しき鼻嵐とはなれりける。正雪は其を熟と視て、「されば軍議ぢや、此よりは手等の決めう。但し我等が脫け出つるを殿こそは御存知、彼人輩は然る事とも知らで今頃は定めて騒動しつらう。此處は長談の席にあらず、いで退去らう、方々彼の場所へ。……宮も供せい。」云ふ間に彼女は衣の裾端折りて、忍びの短刀を帶に挟める、小薙刀掻い込うで家の内一遍看歷りたるが、聽て座敷へ來つ、小膝を跼めて、一火を放けますか？」「否、其儘ぢや。座敷を擾亂すな。見醜しき物は無いかや。」引取りたる金井は彼女が背を撫で、はゝと微笑て、「其れは此の女子。何時如何樣の事變おざらう與と掃除は日々、打水は朝夕、恐らく此の廣屋敷に庭の草一つ一本、落葉一枚もおざるまいかな。賞て取らしやれ。」「おゝ過分ぢや。流石お主ぢや。いで然らば。」肚裏は知らず、彼は悠然として盃を納め、箸を投て、晴なる衣服身支度十分にして其座を起ち、門を出でゝ四五町も來つらむと思ふころ、喧噪しき人聲は其方に聞えぬ。蓋し紀州の捕吏ならむ。衆は皆其の手後れを恥笑ふ中に、宮のみは獨り其小首を傾けぬ。

（百九十九）

彼等は巧みに形を潛めて、俾ひに夜行の町方が眼にも觸れず、市谷より船河原に出で、本鄕の大通を東北に進みて、やがて道灌山に來にけり。是れ正雪の云ふ軍議の場なり。頃しも六月の短夜とて、東方は既に微白を漏らせる、里遠き此邊りには鶏の聲すら聞えぬなり。入る方近き下弦の月、今や千住の森林より出づる曉の明星、樹下の露を玉と摩きて、青く碧に紅う美しう色彩れるを、樹杪におとす曉東風はさらさらとの音立たせて、又た其を村雨と降らすめり。袖にかゝるを打拂々々、脚にからむ茅草が根の蟲の音踏しだきて、船繋といふ巨松の畔に倚れる正雪、先づ其の根方に腰打懸むとすれば、如是る際にも目端の利ける宮は、暑熱を避けつる旅人もや置き忘れけむ雨避けの絲楯てふものゝ古きがあるを逸早く掻取りて、泥土を拂きつ、「御服が汚れます。」「ほゝう、御侍み笠とまをせにも優りたる風流ぢやな。」師は快よく打笑ひて、敷きたる上に無手と坐せり。「いや其の御笠より此方の目下は、天が下には隱れ家もないみの上ぢや。兄者、手等は？」叫べるは忠彌なり。此の秀句の面白きに衆も笑ひぬ。正雪は首肯きて、「先づは然ぢや。扨て其

の人數配り、右ににもいふ忠彌は江戸の大將軍として當地に殘りやれ、其手に屬ふは河原十郎兵衞、林理右衞門、芝原又左衞門以下大將分廿五人、手兵は有合ふ連判の五百餘人、加藤（市郎右衞門）和殿は京都の大將軍。半兵衞は大阪にて采幣をお取りやれ。扨て我等は。」些しく案ずるを。「御分は？」と忠彌は急立げぬ。「されば我等は、先づ東西の中央として駿府に在らうかな。其の場所は久能か喃？」半兵衞は聞くより其眉を顰めて、「む、久能？　何さま彼山は眞個天險の、然も案內は熟う御存知ぢやらうも、形の如き絕地、敵としては西に名古屋、吉田、濱松、東には小田原、甲府。縱し其れ迄もなう近隣の大名四五頭二三千の兵を出だして是を圍まば、味方甚麼に守らうとも端的に兵糧にも盡き申さう。東西の消息通ぜず、其中に御身に變ばしおざらうならば京大阪も其れ迄ぢや。是れは猶熟考との義。な、忠彌どの。」忠彌を喚べるが正雪が耳にや觸犯りけむ、彼は例ならず色を損じて、「甚麼とや御分、然言ふ程のことを我等が知らぬとな。但し彼山の東方一里が間に淸水といふ港あるをも御分忘れてか、兵糧は自由、況て地の民は我等に服きたり、彼處に籠りて用物ども取り入れ、扨て搦手の裏山より海道を切塞ぎ、一方は府中を襲はゞ、西は大井川、安倍川、東は興津川、富士川、皆我が城地の外濠ぢやは。其の近く寄すべき敵は沼津、小島、田中の三所より外に無し、此等の隊を破らうに我等まで有らうか。然る中には忠彌が江戸、例の殿が南紀にての旗上げ、東西南北色の起らば小田原とて甲府とて、名古屋、吉田、濱松とて、何かは我が城地足長に離れて彼山に寄せうぞ。理論は斯うぢやも其の御分が異見といふは嬉しう聞く。御事只今胸算として我等が何方に在り、又た何樣に運動はゞ善いとか想ふ？」眼には睨めつ、口には問ふ言を熟々と聽て、金井は更に打傾けぬ、「げに御際間なくは承はるも、猶我等愚存を申せば、師匠には江戸……當地におざつて丸橋どの兩旗で御城を乘取らるゝ……。」「半兵衞、忠彌一手で御分に不足なか！」「いや不足なと言ふではおざらぬが、兎角は此地が根本ぢや。南紀の御旗とて此地を好う奪られいでは和歌山にも立つまい。然らば大事の上にも大事の取られて……」正雪は冷かに笑ひぬ、「然る配慮か。然らば無用ぢや。忠彌一手で見事此城の踏破らるゝ其の手段といふ。我等胸臆に有る。」彼は腰なる軍扇を徐ら拔出だして其の祕策といふを說むとす、一座の目は驚き、胸は躍りて、其の咽喉には唾を嚥む音あり。

（二百）

靜り返れるに、露に集鳴く蟲の音は又た聞え初めぬ、なれど人は其れにも耳の着かぬなり。正雪は徐に看亙して、「手段といふ、其の祕策は……河原どの、御身父子が涯分の肝煎を賴まねば事の濟ぬぢや。今更ら貳心はあるまい、賴まれうが喃？」「何事なりとも御下知と有らば……身力の限り！」彼が血氣は目個先づ其名を指されしを當座の面目と、躊躇なく其決答を爲さしめたり。「大慶ぢや。餘の義とおざらぬ。父ご　目今御預りの烟硝は幾計駄おぢやる喃？」「三萬駄と聞き申す。」「其の三萬駄の倉庫の鑰は、父ご手許におぢやらうかの？」「如何にも手許。所在場所も我等存じてをる。」「重疊ぢや。」

此の河原が父勘右衞門は、當時小石川御烟硝藏の奉行たり、當時御烟硝藏所在の地今詳かならず（寬永の江戶圖に據れば、白山御殿の脇、今の植物園近傍にも有りしが如し、猶穿鑿して追記すべし）武勇には長けたれども强慾の曲者、御家人に有るまじき非望を起して其子十郎兵衞の勸誘る隨に、何時しか由井の荷擔人とはなりけるなり。「兄者、其の河原が烟硝如何お

爲やる。重疊御過分も要らぬ、式代拂いて疾うお言やれ。」急立つる忠彌を、彼は忌はし氣に一睨て、「何分がならぬ。大事の話合を其樣にお急きやれて……腑にも落つまい。御分は江戸の大將軍ぢやぞ。」「大將が何？　如何爲申した？　大將が問うて惡いか？」「いやさ些と重重と御居やれと申すのぢや。假初にも生死の大事……」「生死の大事ぢやから疾う聞きたいと云ふ。聞く耳に重々も輕々も有るまい。御身は兎角に我等申すと二語目には御叱尸しやる。口癖こそ不恙なれ、槍執ては丸橋忠彌ぢや。誰にも負けるか！」正雪は其鼓舌せる舌を鎖して少時は弁默れるが、「何とか思ひけむ、「むゝ可は。我ながら枝葉。然らば御分も其の槍取て大敵に對ふ心して熟乎とお聽きやれや、言ふ迄も無い、此の合戰は、彼等が不意を襲ふともあれ寡を以て其衆を擊つぢや。然れば尋常の手段して旗鼓相對ふといふ戰法の取られぬは云ふにも及ばぬ。只、奇兵ぢや。な、其奇を用ふるの最も奇なるは彼の火攻ぢや。火を以て人數と爲るぢや。火攻の奇勝を制するは孔明の赤壁、木曾殿の俱利加羅、和漢ともに其例多いに今一々は云はぬが、さればとて此等は皆、味方も二萬三萬の人數、又た其の攻むべき地といふも一所の彊域を限つてある。然るに今は江戸四里四方ぢや。目的の城といふ、是も周圍は內廓のみにて二里にも餘る。然もその其を攻る味方といふは僅か五百餘。十なる則ば之を固め、五なる則ば之を攻めよとある其の法にも則にも該當らぬ無理の合戰ぢや。只彼の、善く攻る者は九天之上に動く……な、敵をして左右を救ふ能はず、前其後を救ふ能はず、其守る所を知らざらしめて、我が無形を以て彼が有形を擊つとある、其の祕策に藉るのみぢや。拠其策の手段たる、餘にもあらぬ、右の火攻！　火を役うて敵の耳目を先づ奪ふぢや。とは云へ、其の廣い江戸、何と何處を目的として燒立てう？　況んや今は六月の大風とて無い時節ぢや。此處に一ケ所彼處に二ケ所と手兵を奔らかいても、衆の警驚く我が軍氣を興奮つる……炎焰の下より切て廻る……敵に度を失はしむる、といふ程の大火事を爲出來さう樣も無い。處で右の烟硝ぢや、加之三萬馱！」金井は師の說を卒ふるを待難ねて、「發爆させますか？　而て府內殘らず黑土に爲まする歟？」正雪は寂しく笑ひぬ、「むゝよ。玉石共に焚く、是非も無いかよ！」「而て、其の箇所は？　又其の爆發さする手段と申すは？」「箇所は限らぬ、右の三萬馱、多い任せぢや。場所は御城の近間、見附々々、本町、堺町、柳原、本郷の通、番町、麹町、總じて家竝の繁い所。猶云へば、大名の明長屋、旗本の明屋敷、其等が所へ忍び入りて藥に火を點すが專とも想ふ。運送は馬、車、長持、總ては有り隨ひ。其の馬も車も長持も、借るも可し、奪ふも可し。人夫は牢獄の惡徒を役ふ、其の方便に破牢するも放火には物好い歟。導火は各位も知る我等が工夫の雨火繩、其も足らずば線香も可し、蠟燭も可し。其藥は樽、瓶には詰めたいも、此は手廻らぬ歟。いづれは臨機ぢや。」

（二百一）

十三萬の人家、五十萬の人口を有せる江戸全府を、半夜の一爆に焦土と化し了んぬべき慘絕、亦た壯絕の祕策を聽きて、或は勇み、或は駭ける三十餘人、千態萬狀に聲を呑み、息を鎖めて、各、其の後談を渴望せる中に、獨個宮のみは、一向に打沈みつ、其心竊に懼るゝ如く、其憂に堪へざる如く、身を此團居の裏に置くすら快からざる如くにも見えき。とも知らぬか、正雪は、其談愈興に入れるが如くにて、「次に言はるは、人々が働きの手筈……當夜の期ぢや。忠彌には豫て其の用意として紀伊殿が御紋の手丸、高張ども（幕府、尾紀水三家、越前、會津

等、其の紋章は同じ丸に三葵なるも、其葉の條數には各多きと寡きとの相違あり、門衛の士は皆熟く知る事なり）數十張を調製り置かせて、扨て右出火と見ば、彼の五百人の中、屈強の者百人を勝りて、大納言殿登城々々と呼はらせて、眞一文字に大手から三の御門、中の御門、御玄關と御進みやれ。烟硝の爆響、出火の騷擾に動顚しつる門々の番士、狼狽た眼には提灯の紋は見やうも人の面の然る歟非ぬ歟は辨別けまい。怎くて御玄關に進まば直ぐ火をお放きやれ。用意した四五樽の火藥を大廣間にも積上げて火をお點しやれ。狼狽ゆる坊主を片端より引捉へて殿中の案内御爲しやれ。其を案内に奥へと切入らば、番士とて堪るまい。將軍は十一の御幼稚、御下知もなるまい。御庭から山里へも成らせられうを、待受けて、な。忠彌、其邊は御自分の機轉にある事ぢや。奥は其れ迄！　扨て城外は、殘つたる四百人を四隊にと分くる。其の二百人は大手、百人は櫻田、五十人宛は平河と半藏ぢや。其の大手に向うたるは水戸殿初め、酒井本多、溜、帝鑑、柳の間の大名、奉行ともあれ、役人ともあれ、駈つくる、登城する、其の手に當るを斬り、目に觸るゝを打放せ。其の櫻田なるは井伊掃部、松平伊豆、此の兩人を討留るが詮、其餘の働きは大手に同じ。其の平河口は御門を破つて、御廣敷を燒立てい。半藏なるは萬一將軍、手に漏れさせて、搜し當らぬを探る準備。此隊には鐵砲をおほく持せて樹立叢林へ搜銃を擊たす、日暮の利たる、奔り廻りの達者なるを撰ばれい。かくて城も落着し、執政役人らが追伐も終らば、忠彌は直ちに上野に參つて輪王寺宮を捕り奉つるぢや。其後は、寛永寺を城として取籠るも可し、西丸の炎上なくば、其處へ遷しまゐらすも可し、時宜次第。」「當夜に殿樣は如何爲しやれます？」突如として問を發せるは宮なりき。「むゝ、殿か。其の……其殿はな。當夜は赤坂の御館に御座なされて物色の鎭まるを御待なさるゝ……」「御待なされて上樣とも爲らしやれます歟？」今想ひ得たる如くに、正雪は撲地と其小膝を拍ちて、「おう、其れぢや。差詰は彼殿が上樣ぢや。其方も御懇の彼殿が將軍家となならせらるゝ、嬉しいか？」「些も嬉しい事ござんせぬ。再甥の上樣を亡物にさしやる……蜘殺し！　いや主殺しの罪人にならしやれます！　假令上樣が宮樣でも妾は嬉しい事ござんせぬ。」思ひも寄らぬ彼女が言は、愕ける人々が心を剜れり。就中慌遽たる正雪、其眼には石をも洞貫すべき可怖しき異光を發して、直射に彼女を睨つ、更に顧みて一座を覩たり。睨まれたる宮は、日頃の孝順に似ず、剛情なりき。「師匠樣、御前が今言はしやれた事、當座の戲言も交つてをりや爲ませぬかえ？」「何と言ふ、正雪が戲言しつると？」「されば、紀伊國殿御旗上げ……眞實然樣と、判然と、御前言はしやること成りますかや？」

（二百二）

益驚ける正雪は、彼女が窮詰の意味を解し難ねて只疾視めたる、其面を宮は倒りて沁々と注視りて、情に堪へざるが如き聲音もて、「其の今の手管といふを聞きますると、妾は御前の御本心が疑はれます。御前はあの松坂以來何樣と言はしやれた？　當將軍家は御代々皆明君ぢや、日光樣は言ふに及ばず、二代樣、今の上樣とも下々を御憐愍、百姓町人を好う愛惜せらるゝ。只其の執政衆が然で無い。中にも出頭の伊豆殿は上に阿諂ひ、下を苛虐ぐる惡人、謂はゞ此人は天下の讐、上樣の御敵、幕府の賊、現に其方が兄といふも彼の伊豆殿らに殺されたぢや。其方も其事が口惜いなりや彼の伊豆殿らを恨め。自家も上下諸人の爲に此讐を除かう、其れには我が手一つでは足らぬ、豫て御懇の紀

伊國殿を大將にして大事を擧げう。其れに就ての策略は斯う、手段は云々。但し其等を我が慾と想ふな、右にいふ幕府の御爲、萬民を安堵の爲ぢや、と恁う言はしやれた。其後、妾は紀州へ往き、あの殿の御側へも出て御容子を窺うたが、何さま御前が言はしやる通り江戸執政衆には何角不足も在らしやるやう見ゆるものゝ、上樣へは無二の御忠義ぢや。將軍家の御上とあれば、涙翻さぬばかりにして何事も御意なさる。月の十七日（東照宮御忌日）には御潔齋、廿四日（臺德公御忌日）には御精進、諸般の萬事が其通りぢや……を、其の今言はしやれたを聞きますれば、其の殿樣が、如何やら御前と御同腹で當上樣を亡物になされうやうな！　彼程の忠義の御方が、假令天魔が魅入ればとて、御身の御前途が危ふいとて、有らう事かや、尙だ十歲か御十一の和子樣を然樣無情う遊ばすといふ……抑もや此事が出來た事かや！　其義が妾の一の不審ぢや。次に御前は、江戸中を燒擊……玉石共に焚く、是非無いとやら今言はしやれたが、伊豆殿等諸役人こそ然は有らうも、江戸町々に何咎がござりまする？　宿寃舊讐もない人達を其の烟硝で其の黑煙しにする！　何たら殘酷い事！　伊豆殿が惡人ぢやとて、得も江戸中を引くるめて火坑に陷さうと迄の醜謀は爲やなさるまい。上下諸人を安堵の爲といふ御前が其を爲さるとは御本心かや？　大廣間に火を放けて山里とやらの御庭で上樣を兎角と言はしやる、平河口から亂入して、御廣敷を燒立てゝ、女中衆御局を燒殺すと被仰る。御本心かや？　其樣な無慈悲な、恐れ多い、惡逆無道を振舞うて甚麼が天下の爲になります？　其れが忠義か？　御前が平生言はしやる事とは全然の反對ぢや。もとより本心では……妾は不審ぢや。」彼女が、師の叛賊に陷らむを恐るゝと、無辜の上下の損敗れむを傷むとの熱心は、覺えず口端の炎焰となりて、最も此談を聞くを厭ふ其人の面前に迸りぬ。看る看る蒼白き其人の面は茜を染めたる如くとなれるが、突如にして、「呆氣め！　時宜をも知らで頑硬に師の非を擧ぐる……」單簡なる此の一語も彼が所思を解するには餘りあるなり。彼女はわツと泣伏したり。「馬鹿者！　時宜といふを知らぬ奴！　勢の來る處は聖人も之を奈何とも爲る能はぬ。成湯の桀を亡し、周武の紂を伐つ……」彼女が泣顏は屹と擡れり、「今の上樣が其惡王の樣な眞似なされましたか？」「や、何と言へば角と言ふ。汝、乃公が娘で無き奴。父に抵抗ふ奴！」「抵抗やしませぬ。只不審をいふ……」「え、そ、其の其れが父に敵對ふ。不孝者！　不孝の奴！　謝罪れ！　謝罪ずば……」阿呀手討と見えたるに躍り出でたる半兵衞「謝罪りまいた、半兵衞代ツて謝罪まする。宮仕故に其許も謝罪申さぬ。何事も父の命、理の過ぎたるは非の百倍ぢや。況て只今の時の勢、時宜といふ、至極の御沙汰ぢや。此の時節に兎角を論ふ奴。虎に騎る者の途中にして下るれば咥るゝぢやまで。其れ知らぬお主ともあるまい。さ、疾う謝罪申され。」彼女は漸くに其泣聲を遏むると見えたるが、其の涕淚を拂ふかと看る手を忽倏懷中に指入れて、彼の小刀を拔くより疾く、丈なる黑髮根元より毟ると齧りて、其處に棄て、再び嗚咽りて聲も得立てず。彼女に代りて、世の憂きに堪ぬを歎くは、彼の啾々たる蟲の聲のみ。

（二百三）

「復右どの御在やれてか。」と門に立つ深編笠の武士の聲を、內にては疾く聞つけて、「あゝ其聲は御茶の水の御仁か。折柄ぢや、此より愚老音づれ申さうと存じたるところ。」言ひつゝ出迎ふる其人は、五十七八、六十にもや老りたるらむ、頭顱は此頃の日中の陽と、眩きまで赤う滑こう照り輝きて、後腦窩といふ邊にのみ消

残る暑陰の雪と、總に圍けう幾條かの振分髪の記念と見ゆるを嬴したる、棄てぬべき世を棄られぬ淺猿しき羈絆の看牌にや。身には手織木綿の單衣の糊硬なるを着て、腰には髪稚もなき諏訪平袴の、膝頭のわたり蹴鞠の如くに膨だみ上れるを穿ちたり。此ごろ下る深草團扇の緣のそゞけしを、手細工の粟飯糊もて不器用に修繕へるに胸の白髪を戰がせつゝ、藤柄に眞鍮の鐲打ちたる、木佛の手かと怪訝まるゝ小脇差前反りにして、一本脫けたる門齒の口に惜氣もなき高笑を聞せ、「はゝゝ、さ、先づ斯う御通りやれ。」「御免しやれ。」と弓手に取る編笠を式臺に棄て、額上なる汗馬手の袖に掻い拭ふ、御茶の水の御仁と呼ばれし其客は、別人ならぬ忠彌なりき。「暑は過ぎ申したも今年は別て熱いでの、いや老人意氣地もござらぬ。…冷水なと喫るかの？」「何さま渇く。一杯賜さろ。」老人は手を鳴らして、出で來る小奴に其を命ずれば、彼は甕て水桶に泛々と、小茶碗を副て持ち來れり。但し其の水桶は、腐朽たる底を截上げて銅の箍をはめ、茶碗には裂繻の痕あるものなり。「さ、何程なと喫れ。夏は茶々より冷水ぢや。されば宅では暑分は誰人にも御茶は勸さぬ、はゝ些細の事のやうでもな、其れで炭代薪代が年分とすれば餘程違ふぢや。總て儉約は當様な處にある。は天道の下された結構な飲料、それを差措て、や、茶で候ふの湯で候ふの、悉皆が驕奢の沙汰、神佛の冥慮に叛るゝ。…や、御分、其桶を皆喫したの！　いかに人の振舞へばとて…無錢ぢやとて…」彼は、忠彌が一桶の水を喫盡したるに、且つ驚き、且つ怨惜き面色したり。「清きりと爲申した。」「いや大事無いかの、腹も身の内、古釘も金の内、無錢の水とて然樣粗忽には爲られぬものぢや。然りながら、まゝ可い、氣丈な事ぢや。流石は一流を立つる御仁ぢや。其腹で無うては喃、扨、今日渡せられたは豫ての金子返辨かや？」

愛に知る、此の老人は、前に忠彌が正雪に語れる本郷の金貸屋代復右衞門其人なるを。彼は元と都近き何某家に仕へしが、仔細ありて祿を辭し、江戸に出で、浪人の活業として高分の金銀を貸出だして貨殖したるが、積めども散ぜざる其利は年々に累積りて、今は數萬兩の分限といふ、大富裕の有德人とはなれりき。雖然如是る人の常として、有れども無きが如き吝嗇と、盈れども虛しきに似たる慳貪とは、庫に餘り家に贏る黃なる金、白き銀にも猶慳かぬなり、折節は人の肉を殺ぎ、骨を剝む如き所爲のあるに、世間は、有財の餓鬼、養壺の蚯蚓と卑視つ、途に遇へば鼻を掘み、其名を聞くも爪彈きする如く厭ふなれども、亦た然る輩も、苦しき時は神と崇めて、手を擦り膝を屈め、其門に立ちて其憂を依らむと賴むも歟なからぬなりき。忠彌も亦た然り、彼は彼を憎惡むこと從前は蛇蠍のやうなりしも、鼻をも殺ぐべき時の用の是非なさに、同じく其の叩くべからざる額を叩きて、彼に百兩の金を借りたるなり。借りたる金は一日が間に散り失せたるも、目的とせる方にては其期となりても一金の工夫すら附かぬなり。期日はや過ぎぬ、疾く取揃へて、返辨をと手代の來て日毎に纏くが可厭きに、此の盆までと言ひ延へしが、其盆とても物の的とては無きなりき。已むを得ず留守といふ。其の留守も後には利かで、彼奴等は玄關に居催促なり。身さへ惜まずば、素奴等、斬ても棄てむものとは幾回か想へるも、兎角は江戸の大將軍たる大切の軀、然りとては唯一人の老母、妻女の手前も面目なし、有るべからぬ心配を懸くるも不孝、と彼は其の不差の口を荅め、紀伊國殿にすら好うは御會釋申さゞりける其頭を、剃剝せし青野郎の小奴が前に下げつ、明日までをと懇願みたるは昨日の晝時にて、其の契約れる翌日とは今日！　彼が自ら其

日、此家に來れるは、其の幾分の才覺の成れる歟、否歟。但見る彼は對等の座を下りて慇懃に手を支へぬ、然して其口は囁嚅れり。

（二百四）

「成……成り申さいで……」語尾までも言ひ斷らで俯向ける忠彌が面上は、苦汗の流るゝ滂沱たりき。聞くより主翁は目に角立てぬ「成り申さぬと？」「は、奈何と才覺し申したも……」六尺に餘れる大漢の聲も、悲しう寂れて、秋の蚊の鳴くより細し。可憫彼が牲牛の如き咽吭も此の酷暑に枯渇ける歟、今喫盡せる半桶の水も此の咽吭を潤すには足らざる歟、想ふに其水は枯渇を醫するには非ずして其熱を消さむとてならむ、されど其熱は竟に消し得ず、水は蒸されて湯氣とやなれる、全身の汗は流れに流れて、突たる腕の毛の尖にも露と應へて消ぬべき玉を結べり。「金持たぬ和殿が何と思うて渡せられたか？」「餘りの懈怠、面目もおざらぬに……責て御謝なと……」言ふ面を脫つけたりし主翁は俄に冷かに笑ひて、「いや措かれい。……などと言うて我等を哄誑て、散々に腹立たした跡で金出いて、我等に面目無がらすとか。術が惡いぞや。こりや老人は性急ぢや。疾う持參の金見せて安心為しやれ。さ、其樣な狂言廢めて。」彼は懷中より眼鏡を出だして鼻梁に懸け、傍邊の帳箪笥に立て掛けたりし算盤を膝に斜に構へて、手ずさみながらにぱち〳〵と彈ける、前の言を更に續けて、「さ、疾うぢや。如何でおざる喃？　呀、返答お爲やらぬは、扨は無錢の……手ぶらでお在つたか？　えい、忠彌、お主は昨日甚慶というたか？　武士に二言無し、お主は其の武士を廢止たか！　え、乞食か。水貰ひにか、足憩めにか。え、此方は攝待の茶屋では無いぞ。何爲に見えた。謝疏？　其樣な事ははや疾うの昔ぢやぞ。何爲うとて來た。」如是る雜言の耳に入れるは、生、來、彼は今が其の最初なり、彼が熱腸は實に爆發せむとせり、低下たる頭、突きたる手は猛然として起ち、遽然として膝上に在り、居丈高なる彼が肩頭は飢饉の野兎を搏むとする如くに聳立ちぬ。「はゝ何を其樣な臉。他に借りたる金を返却さず、今日の明日のと出放題三方虛言のみ吐きをつて、些ばかり催促されたとて怒れた義理かや。其樣に腹が立つなりや寢た勘定を先づ起せ。言分があらば此の算盤の桁を斯うさらりと清淨に拂うて後に言へ。お主が其の菜蝶の拳頭も乃翁が證文で一撲ち撲たば支牾がなるまいが。はゝ馬鹿面な！　勘忍の袋も今は裂けたり。覺手、大喝、起上がる忠彌が腕を。「待た客人。」簀戸の陰より躍り出でゝ牽制めしは、主翁が子の復十郎、引揩られながらに聲振絞りて、「短氣ぢや御分、談合は什麼もなる、怪我ばしさせられば御身が非分ぢや。非理に陷るな。」彼が憤怒は前後の辨別をも闇とせり、「厭はぬ、放せ、非理も管はぬ！」「いや謝罪る、無禮は謝る、御分の面の起つやうに爲る。先づ、ま、我等へ……」主人の翁は此時に既や逃入りて此座に在ぬなり、忠彌は虎の眼を瞋りて、「此上は御分が敵手ぢや。いで立合へ！」「む立合もする、御手にも合ふ、但し根元が金錢ぢや。」「いや金錢で無い、無禮の沙汰、今は武士の意地……」「ぢやから我等が其無禮は謝る、御面についた汚泥も拭ふ。恁うまで言ふを言募られば我等も町役の者を呼ぶ。然あらば理非は何方にあらうか、熟う分別あれ。御分面皮を……」忠彌は其處へ挫乎と坐して、言は無くて人を睨めたり。復十郎は既や我物と遽はしく手を鳴しぬ。「肴は無くも先づ御盃……。いや丸橋どの、兎角は謝びまする。一獻申して緩々と談合しませう。いざ御安坐……。」

（二百五）

「忠彌、酒は大嫌ひぢや。」「え？　御身が？」嗤つ着く如くに言放ちて、苦笑ともせぬ彼が面を差

覗ける復十郎は嘲笑ふ如くに舌を吐て、又更に、「ではおざらうも折角の盃ぢや。受けて賜され。」「否ぢや。お主が様な者の手に觸れた盃、受くるは否ぢや。」「はゝ、扨て無道理な。我等手にした盃は受けられぬも、金ならば借受けらるると。然様な不通な無道理は言はれぬものぢや。」忠彌は此の返答に差塞りてか無言に復れり。彼は獨自首傾きて、「何事も可え、喫されねば喫されぬまで……。むゝ可は、さらば我等は獨酌とも仕つらう。然りながら聞えぬは丸橋どの、御身も一流を御立ちやる仁ぢやに、六十に餘る……還暦は子供も同様といふ我等老父を捉べて。お敵手か？　然も其の意趣も、金を貸す、金を借る。期日が過ぎても返却さぬに、催促をする。催促されても済されぬに、責め迫る。其語句が無禮ぢやとか言ふ。原來の根本から推斷ば何方が無理ぢややら？　喃忠彌どの、恥は爬いても腹は餒らぬ。活業の資を失されては、飢て死ぬ。え、丸橋氏。老父が金貸すも慰みや惡戲ではおざらぬ。御身が一所の道場立てゝ、弟子取して、其の束脩、二季の謝禮に世を過さるゝと同様ぢや、此れが御身にせよ、格別の入魂と無きに、槍術の手のみ習ひ覺えて、禮物の進上無沙汰とあらば何と爲申さる？　破門か。縱し其れ迄ならぬも餘り心地快い方にもおざるまい。義理、意地を所詮の武藝の上ですら然おざらうを此は尋常の金貸ぢや。金を生命と頼む者ぢや。其の生命の金の損德に管はる、一期の際ぢや。況て百兩といふ大金、老父が腹立つと言過ぎたも、味方身贔屓ではおざらぬと然ばかりの無道理とも有るまい歟？　雖然、謝罪まする。御身様の面皮を損ねた惡口の段は子の我等が代つて謝罪まする。箇様に手を突て頭を下ぐる。喃、御機嫌直されて、其の一盃、はゝ如何おざらう喃？」彼は言ひつゝ、我と手酌に傾けては又た傾くる、此の陳謝の間に既に銚子二つを換て、舌鼓の口いと輕かりき。其とは反りて、彼が醉癖に言竦められて、いと沒興く、いと眞面目に、いと手持無げに見えたる忠彌は、惘れ逆上の色鎭降ると與に、絕て久濶しく懷慕しき酒香に、針もて刺さるゝ如く我が鼻孔を衝かれぬ。同時に、我が腸裏なる酒蟲は、咽管より跳躍り出さむばかりに鼓躁ぎぬ。此の小敵を制し難ねて口に唾をのみ湛へし彼、今は甚麼やらむ目の眩むやうに感えて、我すらも知らず、然りともと覺えぬ隙に已が手は何時か彼の盃の緣にかゝりつゝ、と看る〳〵其盃中なる酒は、磁石に吸はるゝ鐵の如くに牽引られて味も香も未だ其れぞとも知られぬ間に、一盃は快く喉内に入れり。「あゝ甘露！」堪らで叩く彼が額を、此方は睨視に瞻上げて、「喫したでおざらぬ歟！」「いや面目も無い。御分が餘り甘氣に喫るゝで我等も不圖の……」「嫉ひではお在らぬな？」忠彌は唾を嚥下て、「有り様は大好物ぢや。其の好物も近來は手許不如意なで斷盃ぢや。實命根も細るやうにも思ふものゝ、想へば他人に借銀のある軀體、其の濟方の了めぬ中に身の保養でもおざらぬと目を瞑つて居る、いや苦患の事、其様に存ずる我等を今のやうに言はるゝて惡い癇蟲も不圖出申す。なれど御身の講釋で忠彌身が非分を悟つた、無禮は御互ひ。たゞ此上は今暫時待て下され。好い風も其中には必ず吹かう。長うとは申さぬ、此處半月が程……一向頼む。」打て變れる大漢の萎縮れしが憫然とや、又怎くして奪るが彼等の術か、復十郎は其の同感の色を滿面に現して、「ふう。好物なるを斷盃！　其れは扨て近頃の笑止ぢや……が、不躾ながら御身様は當時江戸で一と屈指て次の無い御師匠、見申す處が弟子衆も四五百はおざらう。御家内は小人數。其の門弟衆から一人一季に白銀一枚と平均に見ても御生計には餘りて返る。寢酒の五合一升を縱し喫され

たとて然のみも有るまいを、讌盃とまで……はア解つた、賭戯でもお爲やるか喃？」「慰みには小鼓を打ち申す。」彼は其の沒分曉を哄笑て、他を問むとせり。

（二百六）

「浮世狂ひとも有るまい。其の御年齢で……」「え、浮世……？」と忠彌は其目を圓くせり。復十郎は驚がず、彼が衣服、形裝を又更に熟々と視て、獨語く如くに、「汗染みたる細布の帷子、葛布の袴、綺羅を張り世間を飾りて無い身代を有りと見する、金堀、山師の人體とも見えぬ。甚麼樣にも合點が行かぬ。あの繁昌の道場所有て右にいふ家内は少人數で、其樣に窮乏らるゝ……朝夕の御膳には何物を喫がるか、鯛比目魚でも喫？　飲食道樂かな？」彼が棄臺譜の謔口を此方は眞に受けて、颯と赧顏ぬ、一面目もおざらぬ。他言は無用ぢやが、其の朝夕は麥粥ぢや。老母にこそ折節は小鰯一尾も膳に附くれ、我等に妻子、其れ等は皆生鹽を舐め申す。眞實に恥かしい。道樂などの穿議かや。」有繋の彼れも、此の返答の思ひ懸ざりしには喫驚きて、再び其の衣服、身裝、腰にせる大小刀にまで眼を注ぎたり。欵誠よりも今は鞠問の口調もて、「御分、其言は眞實か？」「甚麼の虚僞を申さうかや。實、面目はおざらぬも眞實ぢや。」彼は眞額に膝を進めぬ。「眞實なりや實に奇怪ぢや。丸橋忠彌ともあらう御人が朝夕に麥粥とは何樣事ぢや！御分眞直に御申しやれ。さ、何故に其の麥粥生鹽と迄に零落れられた！　然も其の零落た身で何故に我等が方の高分の金子百兩とまでの高利の大金を借られた？　其の仔細無うては協はぬ、次第によりて實にもとの得心行たりや、我等其の發起となりて御身樣が身の立行かるゝやう、弟子衆にも賴まう、出銀も爲せう。然はなくて只理由も無う此方の金借たとあらば、こりや最初から返辨せぬ……蹈倒さう氣で借られたぢや。然らば騙賊ぢや。騙賊なりや騙賊で又處置もある。氣毒ながら其の腰の大小刀、老母、内儀、兒童衆の衣服手道具、悉皆先づ引上げて、不足な分は番所へ懸る。故障言はれば盜賊として縄にも繋くる。其は先づ是非ない後の場目として、道樂も無う、遊戯も無う、あれ程の弟子衆を持て、諸家諸方へも出入らるゝ御身樣の然迄の難義とは判底も腑に落ちぬ。仔細を御言やれ。是非に聞かう。」彼が同情と脅迫とは兩面の大板となりて他を搾めたり、搾めらるゝ忠彌が苦惱の膏汗は全身を浸して、量らば斗をもても算へつべし。噫、曩の老奴が讒罵は、其面を拭ひ其胸を撫りても猶忍耐ぶべし。此の壯者が情に綿み理を責ての鞠訊は、口訥に情脆き我には到底殺脫け得べしとも思はれずと彼は難めり。「是れ迄に申ても得解せられぬか。地體御身は、他人に對ひて虚僞を言はれぬを質とお爲やる、又我等も其を信けて、祿も扶持もおぢやらぬ仁に百兩といふ大金を用立てた。何の此が尋常の貸借に……期日が切て此程待ちますか。最初から抵當も取らいで貸しますか。此方には其程の好意がある。いや猶其よりも不義理の御身が前途の立ち行くやうにと肝迄を煎らうといふ……」愚癡交りに列擧てしが、彼は風と、「……が、今方、今暫し待て、好い風も必ず吹く、こゝ半月が程と申された喃。其の好い風をば那麼な風か？」想ふに彼が目下の手段たる、這の錢無くして名と面とのみなる豪傑の、其の所有物件を利して、我が貸金の一錢たりとも餘分の回收を獲むとは爲なるべし、故に百方、其の些少なる關繋の有らむ方をも訊問ひて、脚を掛りても證文の反古たらざらむことを冀へるならむ。とは知らぬ忠彌は又も困ぜり、假初ながら我を虚僞をば言ふまじき者と信じたる其人に對ひて、此の好風の消息を明かさでは協はぬ場となれり。然りとては其を甚麼と言ふべ

き。言ざらむには苟にも其人の信に背くの罪、縦や一時の方便たりとて我心に於て百年滅すべからざるの苦悩たり、と正直なる彼は又更に病めりき。雖然、其は口に爲べからず。彼は漸くに熱鐵を呑むの苦思して言ひ出せり。「眞實は紀州殿。そ、其の紀州殿から我等を、高祿を以て召抱へうとの、其の實は、御沙汰おざつた。有り樣は右の百兩も手許の逼迫と、其の肝煎を賴み申す人々への……其等の費用で。」いと彼が重き口を、猶盤石を引摺る如くに、息を喘がし唾を嚥みつゝ、額の汗を拭き〳〵言へり。其態度を異しと見たる復十郎が眼は、口と等しく逸早く働きて、「虛言をお言やれ。我等は紀伊殿は上館も下館も一杯ぢや。なれど役々の誰が口からも御分が名など毫末も聞かぬ。我等が好意で斯う迄に申すを、飜つて御身は虛言をお吐きやる。心にも似ぬ。」彼は謀言を構けたるなり、其虛僞は量らずも眞實となりて忠彌は見醜しきまで周章狼狽せり。

（二百七）

「外見に寄らぬ。愛も想も盡き果てた。此上は御分言ふこと一言も信用申さぬ。待ちも申さぬ。約束通り、證文通り、唯だ今目前にて淸算お爲やれ。先づ其の大小與せ。」猛虎も頸元を壓へられては野鼠にも制せらるゝなり、忠彌は此場の爲損じを自ら悔い、自ら恨みて、恁く罵らるゝも默爾として首を俛れたりき。這奴彌脈の斷りし貨物と見たる復十郎、先づ家内の老壯どもを喚集めて、萬一の虞に備へ、豫以上が價値ありと目を注けつる彼が雙刀を捲き上げむとか、遽だしく手を鳴さむとするを。一暫時お待ちやれ。」忠彌は此時、不圖其の胸裏に、今日は是れ七月の廿三日なる事を想起しぬ。正雪もはや既に一昨日の夜に啓行せり、察するに今頃は箱根をも踰えもぞしぬらむ、然れば彼が、其の諸方手筈恰好きを告越して、我が當府に旗を擧ぐるも今十日とは過ぐまじきに、這奴稍其の機密の端緒といふを說き示して、影法師ほどに仄かさむも露顯の虞といふ！　有るべきかは況て、事成らば重く酬いむ、辨金は原額の十倍にも、と利をもて啗さば、原來慾に眼も鼻も無き奴、大概は加擔もせぬ歟。但し斯く告て後左右を云はゞ、其れで素奴が一命を我に與るゝ時節、一刀の下に討放して棄てむも我心に於て疚しからず、所詮目下の此の汚辱を遁れて武士の義理と面目とを全うせむこと、此餘に無し、と彼は想ひき。復十郎は可厭げに、「待てとは？　何事を待つ？」「恁くまでの仕合、忠彌、本心を明かし申さう。但し他言、決してお爲やらぬといふ誓詞が欲しい。」「いや本心も誓詞も要らぬ。然樣な面倒事より只貸金……其金が成らずば其の大小刀先づお與しやゝ！」忠彌は尋思せり。「然程に言るゝなりや其通り進上申すが……然りとては我等も丸橋ぢや、其樣に一涯に蔑視れたもので無い。倘か此の返金、今廿日……」「こりや此方其りや何事を言しやる。今迄は半月、又た十日、其れも待れぬ、今此場といふを廿日とは何事ぢや。夢をお見やるか、囈語か、但し其の麥粥腹に一盃の酒に醉されてか。他を呆氣に爲た！」脣上りの聲高なるを、彼は半途に掩覆せて、「ま、先づ聞かれい。倘し其の廿日待れうならば彼の金子、十倍にして返却す。百兩を千兩にして御身に進ぜる。」「え！」と、果然、彼が眼睛は凝れり、「甚麼と、御分、十倍……千兩と？」言懸けしが、忽諸其を苦笑にして、「否ぢや、陷るまい。枝の十羽より手の一羽ぢや。やはり其腰の刀が好え。第一が其の麥粥の御身が手で、千兩などゝ……」「其れがぢや、其處が丸橋ぢや。馬は騎て見い。御身も我等に騎て見もされ。千兩ぢや！」彼が耳なる千兩は、野狐の目なる油揚の鼠のごとし、「むう、而て其の仔細？」「誓言ぢや。」「誓言した！　他言せ

ば天雷に身を砕かれう！」「む、天雷に身を砕かれう喃！」「勿論ぢや！」「耳を借せ。」忠彌は彼が耳朶を牽きて、耳語くこと少時なりしが、看る〳〵彼は面色を變じて、手を戰かし、肩を震はし、其態中風の症に罹れる病者の、自個が身にして自個が隨意ならぬ、舌さへも運作ぬ如くとなれるを、彼は猶善く念じて、然あらぬ體を辛くも假粧ひつ、「其事は、御身、眞實か！」「言ふ迄もあらばこそ。他言たらばお主が身上ぢやが、其れ覺悟ぢや喃！」「覺悟は勿論、然、聞くからは……」彼は胸を力めて鎭定め、呼吸を調整へ、我さへも異しと聞くまで亂紊れたる聲音を脩飾ひて、「……我等も其の徒黨に入らう。や、忠彌どの、此上は一命もぢや、況て金銀！我等家に所有ほどの額此の大義の爲に進上せう。」忠彌は彼が決心の潔き、意外のもの有るに驚きたり。彼は熱誠の口氣を續けぬ、「左右は猶委細を承はらう。先づ其前に前祝の盃、一つ進られ。」

（二百八）

銀河西に流れて、星斗爛たり、飄颻たる天風袂を吹きて、胸襟の爽かなる洗ふが如し。既に身を剄らるゝが如き借銀も不意に濟了つ、其の久しく涸れたる腸には飽くまでの酒を濺ぎつゝ、測らざる金銀も爾來は思ふ儘になりぬべき、其の吶たる口には名狀すべからざる快感の全身に溢れて漲れむばかりなる忠彌は、本郷の屋代が家を辭してより、仰ぎては此の涼風に諮ひ、俯しては其の前途に笑み、蹌々踉々、高き醉歩は今其の那處の地を踏むを知らず、歡々喜々、多年の宿望も業已に其掌裏に弄ばれ得るが如き心地して、不覺に出づる獨語の間に節亂次なる熊野の論義、子安の塔を過ぎ行けば此の……「や、我が家ぢや。はゝ、今戻ッたぞ。」紙燭して迎へたる彼が妻女は、沓脱の板金剛に跌きて顚倒むとする我夫の手を逸早く扶けつ、と同時に眼をもて奥の方を暗示して、甚麼にかの注意を乞むとせり。「何事ぢや？誰が在るか？」醉漢の聲は彌高きに、今は是非なき妻女、「藤、藤四郎どのの見えられてござります。」「甚麼、藤四郎？はゝ、藤四か藤四か、酒顚どうしが參られたか。大江山の鬼でも大事ない。怖くはないぞ。」曷ぞ知らむ、此の藤四郎は、妻女が身には、其の大江山の童子よりも可怖しき、索債の鬼なりけるを。

我が待つ人の聲と聞て、座敷なる男は其場へと出でたり。「これは旦那、はゝ此れは好い御機嫌で。藤四郎先刻より御待ち申してござります る。」「おう藤四、好う見られた。はゝア又た例の弓代かな？」言ひつゝ、會釋もせで、つかつかと座敷に入り、床の前に摏乎と胡坐せる人の後より、藤四も再び以前の席に立復れる、挨拶も未だ終らぬに、「こりや酒を！えい酒を！酒をと言へば！」妻女は呆れ顏するを。「……えい酒をと申すに！藤四郎、宵から待せて、空茶ばアりで歸さるゝか？一獻勸せ。こりや疾うト——む？料物が無い？無いと申すか。えい此物なと持て。えい此の小柄、出成ほど、持て。はゝ、飮めえばあ甘露も斯くやらむとぢや。心も晴やかにぢや。あはゝゝゝゝ。」「いや旦那、我等は御存知の一向にてござります、我等爲なりや……」「えい、無用……無用にせいか？はは虛言を吐きやれさ、弓師藤四郎ともある男が此の甘い酒を喫ぬといふ法あるか！敵の家でも來た口は濡らすと言ふ。はゝ、ま、可はさ。」彼は主人が目下既に、十二分の爲體と見ゆるですら心苦しきに、猶此上に、十三分、十五分の酒醉ともならば、醉ひ爛くるか、然ずば顚狂ふか、兎角は今まで待に待ちつる其要談の烟と化りて了らむことを恨るゝと今一つは、物こそ諱はね、投出されたる小柄を手にしつる儘立つも得やらず、涙含める妻女が胸裏を想察りて、此の

理由なき辭盃を只管に辭せむとせり、「いや、平に御無用になし下されませ。其れよりも……」「えい、又た催促か、製作料の百金か。大事ない！　御分に毛頭損は掛けぬ。はゝゝ、ま、其事は後として一盃喫れ。忠彌、今夜は些と嬉しい事が有る。心祝ひの吉事がある。二升三升の酒振舞うてからが大事ない。や、これ、疾うせぬか。諸事は先づ喫酒でからの上、えい、疾うせい！」醉眼に疾視られて、妻女は是非なく座を起ちぬ。心許なきながらも藤四郎は、奥に花ある荊棘の路を辿る心地、先づ其を疾く確めてと、一膝寄せぬ。「御吉事とござりまする、何寄りも日出たい御義ぢや。某家樣かへ御有附にも？」忠彌は喜色滿面に溢るるも、然も其の爛醉に他愛なき眼を瞬りて、「吉事ぢや。ま、其等よりずんと好え大吉事ぢや。」「それは扨て日出たい。而て、お可厭い氣にはござりませうも彼の御拂は？」「む、明日にも遣る。」「今夜の所は？」「今夜は無い。祝ひ酒買ふにも今の始末ぢや。」彼は忽地其の不安心の首を傾けたり、是れ如斯くにして驅逐すが從前にも二三度有りし儘なればなり。

（二圖九）

「困りまするな、明日にもと仰られます、其の明日が毎も〳〵十日廿日三十日とも延びまして、あの百兩も今日まで唯た一錢の御拂金も戴きませぬ。見ますれば此處に御弓もござりまする、倘し御調達成り難ねますなりや、貨物なと……。」膝を四角なる藤四郎に對向ひて、忠彌は沒成儀く軀を頽せる、弓手をば其の支柱にして、馬手を扛げて左右に掉りぬ。「可えさ、ま可えはさ。はゝ明日は遣る。遣ると言へばよ。多寡が百兩ばアリの金。」「然う容易うは仰しやりまするも……」「えゝ、言ふな！　と言ふに、忠彌は、斯う見えても、三萬兩の、今夜から、大……大分限……ぢや……ぢや。」瞻ると見えし醉眼も何時か朦朧に、こくり〳〵と座睡りせり。「こりや協りませぬ。旦那の到底が叶らぬ。もし醒覺なされ。」「うにや、大、大分限の……御大名……大、大將軍……」「大將も可うござります。大將なりや最些と確乎と……。さ、今の御談合を。」彼は夢を見るにやあらむ、含糢せる口腔裏より漫ましう寢惚れたる聲、「談合は、可え。正雪のお言やる通り……兄者は久能。加藤は京。金井は大阪……乃公は江戸……」「え！」と、藤四郎は、俄に傍邊を顧眄しぬ。夜は既や子刻に近かるべき、世間は寂然として、遠吠する犬、藪垣に鳴く蠐螬の聲より外耳に音なし。囈語とは云へ、餘りなる薄氣味惡さに、彼は悄と搖覺さむとて肩へまで手は上りしが。いな待て暫しと、身を蹈せ、其人が寢顏を差覗くに、あはや垂れて墜なむとする熟柿の如き面より、臭き酒香は紛々として、轟々たる鼻息は暴風に似たりき。要こそあれと耳元に口さし寄せつ、「え、江戸を何と爲されます？　江戸を。え？」「むゝ、宮か。其方は言うたも……嬈撃……伊豆どの……う、上樣……うゝ。」愕然として毛髮を悚立たる藤四郎が耳元に、突如瓦落利！　との物響あり。目下の彼には、此響は、百雷の耳根に震ふらむやうに感えき、あッと飛退きて其方を注視ば、是れなむ妻女が酒を偸び得て、今歸り來て慌忙しく門の戸を引明けたるにてぞありける。なれど、猶熟睡せる忠彌は、此の物音にも其夢をば破られで、何時の間にか横に顚けたり。「ま、宿は！」といふ聲は、銚子片手に盃を折敷に載せ、猶一種の肴をも添て徐かに持て出でたる人の口に叫ばれき。我が所夫と輒む人の此醜態！　無念にも有らむ、無慙にも有らむなれども、小心翼き婦人と見えて、此の驚愕を忽ち客前を粧ふ假笑に轉しぬ、「これは〳〵御無禮な。何家で過飮されましたやら餘程利きましたと見えまして。さ、お起な

されませ、酒が來ました。」揉起られても彼が性根は醒ぬなり、尚曩の夢を見繼くるにや、「う……上樣を討たと言ふか……平河口……半藏の兵は、御殿の火を消せ……」「何事言しやります。何を寢惚て！」妻女は突如に其袖をもて夫が口を覆ひたる、其れを掻除て、「も、可は。可厭い。勝、勝閧……」恁く口籠り出せる儘、彼は再び仰に向きつ、踏反らす足の礎乎といふ響と與に、鼾息の聲は雷の如し。「ほゝ何事ぢやゝら他愛も無い。もし、妾が留守の間に甚麼事ぞ口弁しやりましてか？」「いや、何事も。」「言はしやれてからが曖昧ぢやが、兎角は酒も一流の仁、酒に醉うて有らぬ言いうたと有りては弟子衆の前も恥かしい。依てな、何卒、然る事は沙汰無しにな。」三十路をば過ぎたるべきが、美しき婦女の鐵漿黑なる脣を萎めて、紅色の變れる面の上に凄き微笑を見せられたる、夜半燈前、冷水を背に浴せられしが如き藤四郎は更に慄然として、「いや何として。夢には斗瓢と無い事を好く見まする。旦那には今夜は御弟子方へなと行なしやれまして寅學の御講釋でも有たものと見えまする。其れで軍の御夢。こりや道理ぢや。」「それぢや。此ころ太閤記を好て讀れます。大概今のは本能寺合戰の所でもあらう。其れは兎に角、平に沙汰無しには賴みますぞや。さ、折角ぢや、御酌はしませぬが一盞把られて。」

（二百十）

藤四郎は、針の筵に在るが如き思ひ彌が家を辛く遁れて、今自己が宿へと歸らむとは爲なりけり。其の門の戸を潛れる迄は、氣も心も力めて確には持ちつれど、戸外へ出て吻と一息吐くが否遽に物の怖氣立ちて、逐るゝ如く、我も知らず、堀端五六町を直弁りに弁りつ、但見る人家の軒燈に漸くに我に復りて、何地かと視れば、筋違の見附外なりき。振顧れば、彼等は遂うても來ざりけり。雖然我胸は猶大濤と跳りに躍りて、呼吸喘きに耐らぬなり、靈時佇立みて目を瞑れば、眼に映ゆるは彼女の凄き微笑、耳に聽ゆるは忠彌が可怖しき囈語なり。甚麼とせむ、此より本鄕の我家へ歸らむか。彼人目醒さば或は我方へ踏込みても來む、五人十人の弟子はありとも彼の健腕にて薙立てられなば一堪りもあるべからず。君子は危きに近づかず、今夜は麴町なる親戚の方へ行て一夜を乞はむか、嘻、兎角は命が物種！彼は咄嗟に分別して、見附を入り、猶多く人の往來の絕ざらむ街衢をと撰りて、大通りを本町まで來れり。此の途次にも彼は深く尋思たりき。物種の命一つは今夜は恁くして際疾きを免れたれども、明日よりの夜を奈何とかせむ。否、其の物種の命もなれど、赤た物資の百兩の拂金といふを看す〳〵棄ては惜るまじき歟。彼の資本も他所の金なり、其の拂金を棄つるなれば、折角助かりし此首に我と我手で繩を繫けでは濟むまじき歟。否、其首より猶怖ろしきは彼の囈語なり、合戰！撫切！燒撃！……血の海！屍の山！焦土の丘！一夜が内に此の江戸も滅却すべし、我等が妻子、親族、家藏も武藏野の曠原と失なるべし、阿呀！と彼は獨り其舌を震はせしが、然りとては何故に父た其樣なる企謀をせられしもの歟。謀叛か、意趣か。或は全くの意も無き太閤記の平の囈語か。其の尋常の囈語を物有り氣に聞て我が鬼胎れし歟。いや〳〵、然樣ともあるまじき彼の內儀が顏色、殊には彼のまざ〳〵しき、江戸の大將……上樣……伊豆殿……！彼は、何やらむ我さへも夢見る如き、此の思案の中に、いつか本町より常盤橋を步みて、辰口の但有る長屋下に來にけり。折しも或る窓を漏れて出づる咿嗽の聲に耳朶を擊たれて、不圖氣附きし如くに停住るが、其の寢待といふ月影に傍邊を透視して、「あ、然樣ぢや。これが今の伊豆樣の御用邸ぢや！　此の伊豆殿が邸も

彼が出入場の一軒なりき、別しては公用人の彼の奥村には目を懸けられき。彼は此の邸を見、其の出入場なるを考へ、其の日頃より入魂に爲らるゝ奥村が身上を想起でつ、我や今此の天下の大變たるべき謀叛の訴人と爲るべきか？　とは此時初て其の念頭に泛べりき。「……ではあるが、何しろ巖語ぢや。巖語を證據に訴人するのも……？」彼は猶、其身の職業に對ひて躊ぢたり、此が尋常の商人ともあらむには、巖語の訴人、何條か苦しからむ。雖然、彼は不幸にして武士の表藝たる其の道具師たり。過錯て狼狽たる擧動をも爲ば、其身のみかは、其の製作たる物品上にも瑕瑾くなり。況て百金といふ其の代物の取れざる爲に、我が一命を助からむといふ其の卑怯の心より、有るまじき證を據ろとして懇親の仁を訴へしなど言れむには末代までの恥辱なるべし、此は迂濶とは！　低徊少時、彼は竟に其の羞惡の心に制せられて、此の場所を去らむとして、行くこと四五十歩、不圖瞻仰ぐる眼前に、巍々たる幾座の城樓の、月光に映じて、皺ける瓦は綠珠の如く、連れる壁は白玉の如きを見たりき。彼が感慨の念は其刹那に、亦た勃如として奮起せり。佇立して又た行きも得やらず。「えゝ、名も忠義から！」看る看る、彼は取て返して、彼の邸の通用門の潛戸に走り着きぬ、鎖せる扉も破るゝ許りに、「弓師藤四郎、火急の用事で奥村殿方へ通ります。御開け下され。」門は開きたり。彼は轉がる如くに入れり。時に櫓なる太鼓は丑刻に響きぬ。

（二百十一）

藤四郎は今、寢衣の儘に脇指一つなる主人奥村が面前に在り。什麼事ぞ、彼は太く外げて見えたり。「左樣の深い御鞠問では恐入ります。只私は右申上げましたる自身承はりの儘を御耳に入れました丈の事。唯、其の、天下の御大事と存じましてな。」謝るが如く揉手する態を、主人は見遣りつゝ、打俛けたる首を幾回か頷せぬ。「いや甚麼も其方を訊問む、其樣な次第毛頭あらう理由は無いがの、只右の巖語では些と困却る。兎角は其方もいふ天下の御大事、と有りて其の證據が又た、俚諺にも夢を繪に畫くといふ其の夢話の巖語とありては、執扱ひがいかう難義ぢや。況て彼奴も名にうてた武藝者、無三ともなるまい。過錯たば公儀の御恥辱ぢや。然りながら聞棄には勿論ならぬ。これは究つた。」拱みたる腕を徐ら解きて、主人は儼と容を正せり。「藤四郎、爲うして與れぬか？」「へえ。」「明日の夜參つて、其の百金の負債を催迫る……」「へえ。」既に一頓挫を來せる彼が心には、堪へ難く此の役目を難義と思へりき。彼は今忠彌夫婦を、身を咬ふ惡鬼とも怖れたり。「……では、私自身にも參りませいでは？」「勿論ぢや。其負債を催迫て、倘か拂はゞ其金の出處を探索る……」「へえ。出處を？　何と申して？」「何として、其れは臨機ぢや。其金に刻印あらば、其印に就て。乃至其の包紙、何等にも目を注る。猶其の自白した三萬兩。三萬兩とては當時拂底の旗本は申すに及ばず、十萬石以下の大名にも容易うは無い大金ぢや。其の大金を彼奴は什麼とて猥たか。又其の支拂の百金も其の三萬兩の內か否か。縱し三萬兩ならずとも、十分が一、百分が一でも素奴の手許に有るか、無きか。其等は其の金銀の出し振、執扱の粗忽なと、丁寧なとでも注意れば直ぐ知るゝ、而て、彌彼奴の其の手許に然る大金の有ると見ば、渥分の骨折て其の出處を探れ。猶其折に其弓……其の百棲といふ弓を何用に爲るかといふをも熟ら糺せ。」「いや、其れは、も、其の最初の際に熟ら問ました。簡樣に久しう手許に置いて、良製のを見て、諸家樣、又た弟子衆の所望に應じて御肝煎なされまするとの……。」「然言

うたか？　むゝ、其れは先づ其事。扨其の負債を拂はなんだりや　」彼は獰たりと、「戻りましても好ござりませうな？」「いや、中々、此からが肝門ぢや。故意に腹立と見せて、番屋へ拘く……」彼は忽地舌震ひせり、「然様な事申たりや直ぐ睨殺されます。私とても其の命が。」「物種と言ふか。然らば是非も無い。さらば番屋から彼奴夫婦を喚べ。」「夫婦の衆を喚びまして、私が其處で詰開きまする？」「むゝ、其方は其所で詰開け。成らずば身代を取らうと言へ。其れを合圖に其留守宅には當方から手を派て家内を探す。物の書類、間好くば連判など有らうも知れぬ。」彼は撲地と感心の横手を拍てる、其手を繼して額上を撫でつゝ、「な、な、何さま。いや其の御穿議なりや……そりや其れ迄にも及びませぬ。忽忙さに竟申し外くれましたが、其の同類はな……」「え、其の徒黨？」「此とて囈語ではござりまするも、有り〳〵と、極、極確正に。」「申した歟？」「えい。江戸の大將は乃公、正雪は久能、佘井は大阪、加藤は京都と……」「彼の正雪が？！」主人が面色は遽に變りて、舌根も戰く如く、厭潰すが様に押返して、「確と正雪？」「然、聞まして……」「えい、お主、其處に在れ。立は成らぬぞ！」沈着せる主人が恁う俄に狂せる如きに、何事かと彼は狼狽ぬ。奥村は愈眼中を血迸らせたる、押取刀に突と起て廊下へ出でたり。

（二百十二）

「七郎右！　八郎右！　起きろ。起ぬか！」兩個の壯者が臥したる枕頭に立顯りて、熟睡の夢を遽だしう喚醒せるは、兄の奥村権之丞なり。兩人は俄破と蹶起きぬ。「兄者、何事ぢや？」「何事ぢやで無い。こりやお主等は！」何かは知らず、是れぞ眞個の寢耳に雷を聞ける兄弟は太く愕きぬ。「甚麼と爲された？　我等が什麼ぞ爲申したか？　兄者。まゝ御心の熟う沈着けて。」「沈着くも急くもあるかや。第一がお主等が眼に、權之丞、兄と見ゆるか！　一腹の兄……」愈烟に捲れたる兩人、直呆れに呆れ果たる其眼を凝して熟と視れば、恁く罵ふ人の面上には血色も褪せて、押取れる刀の柄には戰慄ける拳も懸りぬ、然りとて其の狂氣にあらず、泗酬にも非ざるべきは、堆ぬ暗涙を其瞼に泛へしと、激昂せる聲音も調は低くして、倏邊の聞えを憚かる如きにても知られぬ。扨は彼の大事か、と末弟の八郎右衞門、既や面色の動搖き初むるを、仲兄の七郎衞門は磯乎と睨附けて、「やア八郎右、兄者が奈何と仰れうとも、お主、末弟の分際として我等を掴て口返答相成らぬぞ！　いや兄ご、我等兩人素行惡しいこと、人の口の端に懸ること、然様の義もあらば何卒御折檻……父の亡い後は兄。頼み申すが。」と、言ふ身近くに彼は片膝を突着けて、「其兄に何故祕密す。」「え、何事を？」「えいお主が口から自白さうとすりや……自陳て其罪を輕めうとすりや、汝は飽く迄も此兄が眼を欺瞞かしをる。汝等兩人、先刻我等へ何と言うたか、師の正雪肝煎られて不意も紀伊國殿へ三百石宛に有附いた。これに依て明日當地を發途する。途中の用意、身裝全體、厄介の貯蓄もおざらぬに百五十金を惠まれい、一期の所望ぢやと恁う言うたな！　汝、其の正雪を何者とか思ふ。其の正雪は兄より親いか？　當殿よりも尊いか？　紀伊殿事は姑く措くも、其の今の百五十金は汝、何用に爲る？　有らう事かや汝、其金を以て……三十年春長伴いて下された其の御恩を忘失て。其の御主君を……いや其の主の又た御主君たる上樣を……其の御居城たる江戸を……其の御仕置ある日本國を！……えい其後は言ふまいにお主等疾う自白せ。仔細は既や訴人あツて知れつるぞ。忠彌口から露顯しつるぞ。」「えい忠彌！」「正雪は駿府、佘井

は大阪、加藤は京、彼れ忠彌は江戸を燔撃の大將とまで知れつるは！」「忠彌口から白しまいた歟？」「言んでも無い！　今汝ら兩人が訴人すりや第二番の汪進ぢや。倘か汝等が事他人の口より訴されなば其身かは、我等とて、御祟りは殿までぢやは。殿に腹召させ、父といふ兄の首に繩掛けても汝等は謀叛の惡徒たる正雪に荷擔人するか。其れも露顯せぬ中ともありや……恁く事の發覺れたるを。迷ひを執るな。執らば是非ない、兄が手に綱縛さうぞ！」驚愕窮りて聲をも發し得ぬ兩人と、愈〻彼等が謀叛の其れと知れたるに、一刻の後をも氣支ふ兄が眼とは、異しき光輝を互に射交して！　少時は其語も斷切たる時、曉の風に冴えたる寅刻の太鼓は鼕々として、此處なる六個の耳を撲てり。已や夜も明るなり、夜の明けば、と遽つる奥村の再び彼等に迫らむとする際なりき。若侍の宿直したるが寢惚聲を慌たゞしく、「御町奉行石谷左近將監どの、御入來におざりまする。」町奉行との案内、然も時ならぬ此の入來は、と兄弟三個は覺えず、一所に目を合せぬ。

（二百十三）

町奉行石谷左近將監の、老中伊豆殿が役邸に來れるは同じく此の一大事に就てなりけり。彼は此夜の子刻に、彼の本郷なる屋代復右衞門父子が、丸橋忠彌、由井正雪、其餘甲乙なる徒黨の大非望を企圖てる急訴を受けたり。蓋なき浪人原が分際として世に絕無ぬ、幾と眞實と思はれざる迄の大望なれども、亦た其れが口狀中に紀伊國殿御名あるを慮へば、自ら思ひ當る節の無きにもあらず、殊に其の大事の日といふも四五日が程に迫れるかの如く聞ゆるに、兎角は素奴、先づ搦め取りて、と一方には我が部下の與力同心の中にも傴強の腕利を勝り寄せたる、卽時に集まる者三十餘人、其等の古兵らが評議によりて、如是る大事の捕物は夜中は危ふし、朝駈にこそと言ふに就きて、忠彌が方は廿四日の未明、卯刻の討入といふに決定つ、一方には又彼れが同僚神尾備前守が許に諜じて、其れが隊を市谷加賀屋敷なる正雪が私宅に向はしめぬ。此等の手筈脫漏なくして、扨て月番の老中伊豆殿方へ馳せ、猶其の下知を乞むとして彼は今來つるなり。來て見れば思ひも懸けぬ、這處にも弓師藤四郎、幷に奥村七郎右衞門、八郎右衞門兄弟の急訴あり。これに依りて彼等が隱謀今は一點の隱れなく、猶正雪は久能をと志して廿一日に江戶を發ち、京大阪の大將たるべき金井半兵衞、加藤市郎右衞門、其餘の黨類はこれに先ちて、去月道灌山にての會合の後、七八日して、各其の指す方へ發途てる趣も知られぬ。然も甲が口、乙が口ともに、紀伊殿、正雪に御同腹、五代の將軍家に御直りあらむとの御結構、とは衆皆一樣の自白なりき。驚愕きたるは伊豆殿なりき。是の如くば忠彌緝捕は大事のものなり、或は彼が居所の周圍に其方より如何樣の手當あらむも知れ難きぞ、市谷の奴が明屋敷に向ふなる備前が手は急ぎ途中より引返して御茶の水の二番手として後詰を爲せよ、將監は此より直さま其場に出馬して下知の脫落あるべからず、予は直ちに急登城して、上を守護申し、諸事の手配すべきなり。馬牽け、疾う！　とて座を起たる。夜もほのぼのと明け渡る頃、大手、櫻田、平河口、半藏の門々を見れば、警衞の番士の數は昨日にも倍して、大手先なる大腰掛には諸役人が供廻の影毎よりも許多く、例ならぬ水戶殿、越前家の登城さへあり。目附衆は目を瞠らし、小姓衆は奔走し、奥表の坊主どもは此の光景に、御廊下の隅、御衝立の陰に集りつ、目引き鼻引き、早朝より開かれたる焚火の間の評定といふ其を什麼事かと、茶筅の握柄すら手にも附かぬ、側立つる耳に漸々にして聞き出だしたるは左の一事なり

き。曰く、御禁制切支丹宗門の徒、駿府の町に徘徊して愚民を眩惑す、これに依りて御使番駒井右京どの火急の御用として差遣はされ、御成敗……！

＊　＊　＊　＊　＊

「はゝ、火事は遠いは。何事ぢや狼狽た！」誰か知らむ、其火元は、近く本郷にあらむとは。四隣に起る失火との叫號は、夜來の醉夢未だ醒めざる忠彌が耳朶を愕かしたり。彼は周章ぬ、突如に門の戸蹋開きて、「火事は何處ぢや？」彼が腰間には刃劍無かりき。一人の曲者は、と見るより其手なりし十手を棄てゝ小蔭より飛で出で、「捕た！」それが弱腰に無手と組みたり。同時に四五人の、手襷、鉢卷の紺色の股引に草鞋穿せる捕吏と見えたる黨共はら〳〵と躍り出でたり。「御用！　御用！　忠彌、御用！」「えい、御用とは？」「御用！　町奉行石谷左近將監どの御用！　忠彌神妙！」彼は猶組せながらに、「石谷どのは面識人で無い。忠彌用事も嘗でおざらぬ。」「言ふな、汝、執政衆よりの御指圖ぢや。神妙！　神妙！　神妙せずば組で捕うぞ。」「むゝ、組で捕る？　成らば手柄に！」彼は其腰を一振振れば、組たる者は其手を外して狗兒の如くに投られたり。「呀、抵抗ふ！　それ！」押取圍て擊むとする二番手三番手が十手を、彼は無造作に、左右等しく掻繰奪りて、猫面に競うて進む四番手五番手兩人が鼻眼が間を丁と擊ぬ、大力に擊れて彼等は目や眩めきけむ、次なる味方の突棒の上に撲地と僵れて、機に突棒を刎落しぬ。獲たりと彼は捉むとす。原來の槍執ての名人、捉らせては敵はじと透さず組む二番手三番手六番手の同心を、彼は其足をも堪させず、横さまに薙倒して、手快く其を掻取りつ、小脇に挾み、一足退りて、「えい、公儀衆とて、忠彌身の咎をも申されで、無法！　無法！　無法の網目には得う繫るまい！　さ、何萬騎でも！」彼が小鬢は風あらざるに戰ぎたちて、其眼は、這處にも一個の明星を現ぜるかと許りに耀きたり。

（二百十四）

彼が睥睨はす怒眼の裏に突忽映じ出せる一個の人ありき。其の打裝、九曜を金にて三所に打たる黒漆裏銀の陣笠に、淺黄縮緬の同じ紋章を染抜きたる割羽織、桐檀卷に角菱角鍔の雙刀して、踏込といふ短袴の下には花田色の脚絆を着け、武者草鞋を穿ちたり。水色に磨ける紅總の十手を逆に把りつゝ、徐々と進み寄りたる、軀の長さも腕の太さも群に拔いでゝ、四下を拂ふ威風また尋常ならねば、暴猪と呼れる忠彌も左右なるは打懸り得で只顧に其樣を覷ぬ。「忠彌、何とて然は躁ぐぞ。汝ほどの者召捕るに奉行の予が向うたるは面目では無き歟、など神妙に爲ぬ。」奉行と聞て、忠彌は小躍りしぬ、「や、扨は石谷殿か？　奉行とならば忠彌聞かう。浪人とこそおざれ忠彌も武士ぢや。鞠紕さるべき義あるとなりや何故其れ〳〵の作法を以て參られぬ。無法の手籠、近頃の奇怪！　然る奇怪の網目には……。」「繫らぬと歟、えい汝耳聾か！　御用の聲は？」「如何にも聞いた。其の御身が用、執政が指圖といふ……。」「甚麼と言ふ。將監が私用の執政衆の公然ならぬ指圖に御用といふ歟。御用、とは上樣の御用、將軍家の御用を言ふぢやは！　汝、其の武士……武士たる者が然る程の義を辨へぬ歟。天下の武士の棟梁たる柳營の御用に其の武士たる奴が應ぜぬ歟！」疾視けられて、彼は言下に塞りたれど猶其弱味をば見せぬなり。隙もあらば這の重圍を殺開きて、と八方へ眼を配れる、牙を嚙み、髯を振はせ、小脇なる突棒を押取直して、「柳營ともあれ、御用ともおざれ、物の是非をも申されで……」「えい、未練の！　是非の當否は白洲で申せ。今は只縄……」與力同心は口々に叫喚きたり。

「いや受けまい。一向我等を首にお爲れい！」
益〻息巻たる忠彌は引扱きで突出さむとす、將監は其鉾先に日を注ぎて、狙入りに彼が眉間をと勢ひ込む。龍未だ躍らず、虎未だ搏ざる其刹那の間に聲有りて、「侈、惡いぞ！」「呀？」回顧る背後に出で來れるは、彼が母と妻なりき。彼等は既や物の覺悟したりけむ、肌には白帷子の潔きを着て、頭には黃楊の櫛一片を插したり。猶妻女は今年二歲なる獨兒の男子を抱きたるが、什麼支度を鎭靜めてや爲つらむ、彼は懷裏にありて餘念なう、すや〳〵と眠れり。「母者、其の容態は？」「え〻惡いぞ。未練に見ゆるぞ。如是なりてお事甚麼と爲うぞの。身に咎あらば御法の隨にせい、罪無くば軈て白洲で申し解け。今も仰せのお事ほどの者搦めらるゝに、上樣の御沙汰として奉行衆自身の御向ひあるとは面目天下に餘りたるものでは無いか。我も嫁女も覺悟しました。無益の罪作り、墓無い醜態に召捕られなよ。さ〻尋常にの……。」敵に幾許の勢ありとも手に立つと見ゆるは此の眼前なる大漢一個のみ、其れとても我が日常の本事の蘊奧を顯はさば鐵壁とて堪らすまじきを。恁て後は烟硝藏に取籠らむも、同志が後を追うて東海道を西に馳むも易かりなむと想へるも、畫餅なりき。彼は母の爲體を見つ、其言を聞て、深雪に壓さるゝ松の如くに、骨節も折れて、碎けむばかりに感えたりき。彼の純良なる、其の外見に肖ざる心は、如是る際にも其母の命に違ふを敢て爲ざるなり。我單一個の危難を遁れて母を豺狼の牙に委ぬる如きを爲すに忍びぬなり。母の爲には十年の宿望も棄つるに易し、母亡くば百萬の利祿も物かはとは、彼が平生の心なりき。今や其母は死を決しぬ、然して我に示諭する處あり。縱し其人は疾に其覺悟を斷めたらむも、我にして其敎示に違ひて、眼前に其の淺ましき結果を見むは、友には背かむも、義理には虧むも、後世の名は下さむも、我が目下の此時に於て得堪ふまじきものなりと、彼は敵手を背向にして、手を拱みぬ。「忠彌どの、御思案にも及びませぬ。たゞ母樣の思し食し通りに爲されませ。家內の見醜しき物の始末は殘り無う。既や甚麼樣に爲られましてから後々の大事ござりませぬ。」其の大望に關れる文書の處置了れるを暗示して、決然として面色をも變ぜぬ妻女が語は、彼をして竟に、其手なる兵器を棄めたり。「噫。是非もおざらぬ!!」

（二百十五）

正雪は、道灌山にて會合の後、小石川御烟硝藏なる河原父子が方に潛みて、猶折節に黨與を集めあつめ、世間の樣を覗ひたりしが、時機既に熟せりとて、七月廿一日の夜明方に微行て江戶を發で、東海道を駿府へとて旅立ちたりき。其の伴へる人々は鵜野九郎右衞門兄弟三人、由井三左衞門、熊谷六郎右衞門、僧廓然等、下僕を合せて以上十人。多年の宿望漸く成就むとする日の近きて、人は皆其の功名の空想に驅られつ、首途を祝ふ盃酒、準備に油斷なき馬鞍の慌忙しき中に、單獨彼のみは幽鬱として樂まず、靴もすれば薄暮の庭を凝視て、物も無き空に歎息を漏らす事さへありき。其の何故に恁く樂まぬかは、傍なる人は勿論なり、正雪自身にすら此を解くに苦病めり、或は其の、某的ならむ歟と想ふ由あるも、然る事は目下の三軍の司命たる我口よりして女々しうも言出さるべくもあらず。雖然、猶ほ手に持たる花の暴風に敢なう散らされたらむやう、不意ぬ遺憾さの堪ぬ心地するなるを念じて、軍議の席にも臨むなるも、傍邊の憐悪き濁聲の中に、從前は耳にするすら快う娛しかりける、機警の、親切の、思慮周到なる考案を、金鈴の如き澄冷たる聲もて發言す、其聲の徹後には絕て聞ゆること無きを、慶かず、口惜う、異しきまで恨めしと思ふ折もあり

けり。其の、手にせる花とは、金鈴に等しき聲とは、宮か？　宮は實に世に越て、彼が愛惜うせし女なり、然れど彼女一人の去りたる爲に此の傲岸屈せざる彼の、物も無き空に歎息を漏らすと迄には得もあらじ。彼が此の懊惱せる原因とは果然其事而已か。蓋し猶他に有らむ。想ふに彼が多感の性なる、其の耳に觸れ、目に映じ、手に來り、口に接する、森羅せる萬象は一々其れが心胸を刺撃するの具たらざる無し。然はあれど從前に善く之を壓服て、其を喜怒に見はさざりしは、只彼の企望の熱血に充されたる全身の氣力に藉りてなりき。然るに今や其れが最後の輸贏といふ紀伊殿を說き損じて、絶望の失敗を駿府に見ぬ、之に因りて五分の氣力を沮喪へり。殘存たる其の五分は、此の敗衂を覩りて、自ら我に慚つく如き忠彌が擧動と、今一つは女兒と見つる宮が怪しからぬ意地立をして去れるとに因りて更に其の一半を減耗ひぬ。哀れ其の一人ならず、二人ならず、三人までの無二の味方と賴めるに背かれし彼、其の控制の力を幾と失へる彼が性情は、宛も韁索を逸せる騏馬の再び駕馭す可らざる如くとなりて、他の瞋恚を幾んにし、他の愛慕を誘かし、他の憎惡を亢らしめて、終に彼は、彼すらも其の理解に苦むべき懊惱を其心に畫き出だしつ、我と我手に我が胸臆を剜らむとは爲るなりき。雖然、傍ひに、彼の沈深にして其言ふを漫に爲ざる、萬解の思慮を胸に湛みて、嘗に尋思ふ處あるが如き、其の擧止と其の風貌とは此の怫鬱を掩蔽むに適當のものなりければ、傍人も此を怪訝むは稀にして、猶彼を神と瞻つ、佛と仰ぎつ、此の首途を其の利益に繫る一步として、發途てる日は戶塚へ迄もと急ぎしが、彼は途中より腹痛の氣味ありとて、神奈川へ泊りぬ。もとより世を忍ぶ道中なり、此より先の紀伊殿御內由井某と標牌高かに打たるとは事變りて、宿をも人目立たぬ驛舍處に取りつ、東國武士の有馬の溫泉に湯治すると主人には言もて瞞へて、夕餉も卒忽々々に、酒も喫まず、濱風に吹拂はれて蚊の呻吟の耳に遠きを何寄りの馳走よと、木枕取る下僕が獨語も物哀れに聞えにき。

正雪は、又た甚麼事を尋思でゝか蚊帳へも入らず、團扇片手に端居して兀然と考へ入れる、折からぽつり〳〵と降る雨脚の空を仰ぎて、千草が蔭にそぼ濡れて鳴く鈴蟲に耳を傾けつ、「鈴蟲の誰にふらるゝ夕かな！」二三度打誦ぜしが、其事とも無くて突居るを。「御疲勞が出來申した喃。」勃起々々と蚊帳を擡げて出來れば九郎右衞門なり。「鵜野か、聞いた歟。」「聞き申した。鈴蟲の誰にふらるゝ夕かな。御趣向は面白いも、何やら忌はしい。誰にふらるゝ其の誰とは、抑も誰人おざる？」

（二百十六）

正雪は只苦笑せり。其れに代りて此の不審に答へ顏するは、旅憊れの人々が鼾息と、彼のふり立つる鈴蟲の音とのみ。鵜野は傍下に氣を注りぬ、「さ、ふらるゝ其鈴蟲とは誰？　其の鈴蟲をふるものとは誰？　愚存で見ますれば一句の上にて鈴蟲は主、卽ち御身樣ぢや。其の御身樣をふる、棄る、誘惑かす、過失らす……とは近頃の怪事ぢや。師弟の分、次第に因て其儘には擱き難い。言うて下され。分別も有る。」彼は脇指の柄を丁と叩けり、なれども正雪は猶取合ぬなり。「甚麼を狼狽てた。假初の言葉の句を……。」「いや、慕ない言語とて皆胸臆より出る。況て此一句を形成れたものに御心の詠み出られぬといふは無い。箇樣申すも我等日來の不審がある。」返辭は無くて正雪は睥睨と睨めたり。其れにも臆せぬ鵜野、「師匠。御身樣は彼の夜以來、兎角御氣分の勝れぬ樣に見えまする。特に此月に入りてよりは御顏の色も恒で無い、折節は歎息なども吐かしやれまする。大事

の前に此の怪異をと、我等は念じて傍人には申さぬが、内心は實憂たうおざる。許多の御弟子衆もある中に我等をば別して御目懸られる、我れ等も亦た忠勤は人一倍の覺悟でをる。されば何地の御出行とても我等のみは御供に外れぬ、望んでも出ます、御跡をも追ふ、這回も亦たさりぢや。箇樣の御心知り、無二の我等に御隱蔽も詮無うおぢやる。御言やらずば、我等から指摘申さうか？」正雪は猶無言にて、鼻頭に冷笑を見せぬ。「蠡を以て海を測るといふ、語には似ておざらうも、一念の我等には御胸とてやはかぢや。其の讎懷の第一は、紀伊國殿かな？　其の御違約かな？」師の顏色は忽諸動きぬ。「第二には、忠彌會釋の理で無いこと……然もおざらう歟？」正雪は覺えず其眼を張開り。鵜野は猶、「第三は、」言ふを制して。「擱け、擱け、已や其次は聞くに及ばぬ。然るにても、然までにも予が顏色の不平なんぢやか！　嗟、我ながら……」天地鬼神とて我が胸臆の祕藏をのみは、と慢ぜし彼れも、其の平日小兒の如く喪視れる彼に顏奥の底までを看徹されて、初て四知の警誡の侮るべからざるに愕きたり。同時に彼は、此祕を知れるは、眼前なる此の壯佼のみか、而已ならざる歟。彼のみとすれば目下の危難は無からむも、否らずとせば亦其れが應急の手段といふを施さざるを得ず。況んや猶其よりも我が腑には、祕中の極祕、機中の大機密と言ふが有るをや。彼にして倘し其事をしも悟了りとならば、千丈の堤なる蟻穴の譬喩、日來の奉公、不憫とは思ふなれど、是非も無き目を瞑らでは！と、猛惡うも彼は咄嗟に決意せり、「……我ながら、知らぬとは愚かで有ッた。が、お事、其の予が胸中を悟ッた者は……他には誰ぢや？」「いや、誰もおざりますまい。傍人は皆此の首途をのみ待焦れて……」「むゝ、お事のみ？　善う看徹いた。如何にも予は南方の殿には陷られた！忠彌には不快の會釋を受けた……」「其の耐へぬ御身が、陷られて……受られて、好う堪忍なさるゝ。など一刀に……」「えい、癡氣た！」と師は言棄てたり。「とは被仰ても、誰にふらるる！　御無念は萬々おやろ。推察申す。御道理ぢや。師の汚辱は弟子の羞辱、御眼下さらば江戸へ戻つて我等御無念を晴いて進ぜう。御免しやれ！」彼の詞は節短く、其聲はいと急に、熱誠は面上に見はれたりき。師は其樣を熟視つ、「厚意は過分ぢや、が、忠彌無くして江戸の大將は誰が爲る？」「えい、其りや御身樣が、御自身の采幣！」「むゝ馬鹿なッ！」彼は覺えず口奔れり。

（二百十七）

其聲の餘りに侮蔑に過ぎたるに九郎右は喫驚て、「馬鹿とは？　え、癡呆と被仰るは？」此方は遽に心附て其口を含模せり、「むゝ、其りや協らぬこと。」「協らぬとて、大將無い合戰が出來申す歟。況て此程の軍議にも、此の大義たる江戸が第一の根元ぢや、根元を巧うせでは枝葉の京大阪が何樣に肝煎たとて什麼なるべい、江戸が大事ぢや！　關東が大切ぢや！　とて二度も三度も彼人に御注意けられた。其の大事の江戸！　關東の大將ちふを餌に彼人御渡しやるさへ我等存意は、何とやらむ仕手を奪られて御身樣が連、脇ともお成りやれたかの樣に遺憾うも存ずるに。其の大將が今御手に入る。其の采幣を馬鹿ぢや、癡呆ぢやと！　我等一圓合點がまゐらぬ。何故其の江戸燒撃の采幣が馬鹿おざる？」正雪は困ぜり、「馬鹿の理由か？」「えい、其の馬鹿の理由？」「餘でも無い、彼の燒撃はな厮殺の合戰ぢや、同じ敵を討つにもせよ、名告り合うて槍つけてこそ手柄にもなれ、猛火の逆る烟の下から飛出いて、誰とも知らぬ首取てからが勇士の本意として面白う無い。仍てに予は可嫌ぢやといふ……」「扨は、彼の獻捷

錄の火攻の一段は？」獻捷錄とは、彼が著はせる兵書の名なりき。彼は孫吳が粹を拔き、楠武田が奠を摘みて、猶且つ自家が創見といふ和漢古今の合戰成敗の理を參へ、集めて廿卷とし、號けて獻捷錄といふ。其文の妙、其理の精、延扇復た出づるとも一字を加へじと日來に誇れる書。彼は是れを以て普く諸侯に說き、門生にも授けき。其中に火攻の一篇を特に其れが得意とす。凡そ寡を以て衆を擊ち、衆を以て寡を征し、敗を轉じて功と爲し、功の小なるを大と爲す唯夫れ天火、地火、人火の三者乎、蓋し火の前には、勇者其勇を逞しくすること能はず、謀者其謀を運らすに遑らず、守者其守を固うすることを得ず、攻者其力を施すに所なし噫火乎、火乎、將にして火の用を知らざるものは、未だ俱に兵を道ふに足ざるなり、とまでも說けり。然して鵜野は今之を以て彼を難ぜむと爲るなりき。彼は空途惚けたり、「一段とは？」「あれ程に御賛めなされた火攻といふを、今、那樣御說きやれる？」「むゝ其の火攻か？」「三軍の勝を制するは將の策にありて、其勝を制するものは火に在り、とまで仰られたが……」「はは、其れはの、勝敗の大體ぢや、一騎前には喃……」「いや我等は大將の采幣について論じます。一騎の働きは、」正雪は獰たりと笑へり。「愚かや、お事、大將ぢやとて一騎の働きを心懸いで甚麼ならう。既往の八幡殿は六騎を以て貞任を破り、九郎殿は七騎を以て高松の城を落された。此等皆大將が一騎の働きを目に懸けて大功を得た本の證據ぢや。はゝ、其は先づ措てな、江戸は、ま、其儘ぢや、お主のもぢやが、見た處、忠彌を除けて彼處の大將なる者は自餘に無い。我等に對うて理で無い挨拶する程の剛健兒、其れ程の器量で無うては僅か五百の人數を役うて那れ程の大事に當らうとは得も言ふまいよ。先づは依然、まゝ形勢を見い。」「形勢を觀るうち此方が二の町になりましたりや？」「大事ない、忠彌に總大將を與るまでぢや。手柄は仕勝！　氣支ふな。全般は予が胸臆ぢや。」爰にいたりて彼も再び其問を發さむとする由なきなり。然はあるも、其の忠彌に總大將の地を讓りて屑ともせぬ、做屓を脫ぐ如くともある人の、甚麼を不快に我眼にも怪訝めらるゝ迄其の平生を變へたる歟。紀伊殿の手に陷り玉はざりしをも那程に正々しう言ふ其人。其が胸中の進退操縱、果して是れ什麼樣の手段ある歟。嘻、鈴蟲の誰にふらるゝ夕かな！　我もはや其鈴蟲とは化りける歟。彼は、籠れたる力瘤も、今や幾と脫たらむ樣に投首せり。其の失望の面を薄白う、仄に見せたる、海邊近き宿の曉夙し。

（二百十八）

蚊帳の中には纖入れるも、夢も結ばれぬ木枕に痛き耳根を、已や啄き立つる軒の烏と、戸外に噪ぐ長持唄とに驚かされて、正雪が一行は此宿を出でぬ。彼の期日も贏すところ既に多からず、一日も疾く駿府に着きて、と急立つる人々が口よりも、猶深く念ふ由ある正雪が肚裏の焦燥は、煎らるゝ豆の躍り立つらむが如くなり。雖然、奈何せむ、他の目立ぬを旨せる道中には、物に附け事に就ての不自由てふも亦た大概ならぬなり。笠も滑らぬ日中の炎暑には、人並に立場に休憩て、心太啜る人足が懸鍾の上り下りも算までは愒らぬなり。漸くに夕日影傾き初て、旅人の脚底も輕げなる頃には、既や堵急ぐ鳥の翼も、宿引てふ婢女の手と與に忙しきなり。夜行は結句涼しくて路捗取るべし、恁くては何時迄か、支子の刻までも、と正雪は言ふなれども、彼が江戸發途る際より發作れる腹痛は、水變りてふ爲にや下痢さへも加へたるに、夜冷の氣に感ぜられては如何あらむ、大事を控へたる御身は千金とても換へ難きをといふ

に、彼も其言を強てとも否ひ難きなり。如是る碍道に路次も豫算へるよりは進まず、廿五日の申刻近きころ、辛く興津の海邊まで來にけり。浩る處に、一艇の早打駕あり、東方より來ると見えたるが、曳さ塵さの人夫が噪聲、隣く間に耳を貫く許りとなりて、正雪が駕人足の息杖を立てつゝ、路の傍に避くる隙に、砂を蹴立て、汗を揮ひて、看る〳〵一團の黒影と化しつゝ、松原遠く消失せぬ。「九郎右、彼の早打は？」山駕の避日筵を掲げつゝ、其の行方を遙に凝視て、回顧て正雪は怎く鵜野に問へり。「されば。甚麼ござりませうか喃？」「輿中を窺たか？」「いや看申さぬ。其暇もおざらいで。」誰か知るべき、彼の駕輿の中なるは、昨日（廿四日）未明に江戸を發足たる御使番駒井右京ならむとは、然して彼の行先や何處に？　駿府。其齎らせる用向や甚麼？　前にも言へる彼等の捕捉なり。捕捉せらるべき彼等と、其命を帶びたる彼とは、單避日筵一重を隔離てたる而已にして、袖を摺合さむ許りにして別れたり。正雪も原來彼を識れり、彼も亦た正雪が人相書を懐裏にせり。其の四方髪、髪黒く、色白く、眼くりくりとして、額短く、脣朱く、厚し、とある其者を瞥ば、彼の駕輿は、或は此處にて駐停つべし、駐まらば一場の珍事は翌日を待ずして、疾く此の白砂青松、うち出でゝ見れば眞白なる富士の高峯を前面にしたる怒濤巨巖を噬む邊にや演ぜられなむ。正雪、或は影を匿さむ。騒動は其大を加へむ。然して今は、彼も知らず、我も亦た知らぬなりき！

疵有つ艫に篠原を奔れる、駕輿の迹を彼は猶沁々と注視りしが、突如に、「兎角は急げ。彼の駕輿に追及かう。」例ならず彼が慌忙しき有體に、愕きたる鵜野、「何と被仰るゝ、那の駕輿に？　既や五町の餘も行き過ぎまいた、追及けとて此方の徒歩で……」「いや追及くと迄にはあらぬも、疾く駿府に入れ。人々も江尻にて早駕の用意して夜川とあらぬ内安倍川を越え、明日の黎明に大井川を渡して吉田まで行く覺悟せい。怎く言ふうちも急く、疾う參れ。」益呆れたるは一行なり、江戸より此處までは四十餘里、其を五日路に旅行たる者が、此處より吉田までは三十四五里に近き遠路を明日までに行着けと言ふ、倘くは師は、發狂せしには非ずや、と彼等は疑惑ひぬ。堪り難ねたる九郎右衛門は、「奈何被仰らうとも其の吉田迄などゝは協りませぬ。第一が我等は駿府まで……駿府の用向は後段に廻す。其は重ねて言ふ。今は唯予が行くといふ地まで行け。奉公の等閑か否ぬかは只此時に見えうぞ！」氣色の實に平ならぬに、且つ懼れ、且つ疑ひ、且つ危みたる人々は、今は異議を介まむにも暇なきなり。傍邊の山崖に清水を掬びて、霎時の息をと休めたる人足を遽はしく喚び立て、先づ江尻へまでと急ぎに急げるが、傳馬所に懸りて駕をと言へば、個は什麼、舁くべき人夫は一人も無かりけり。

（二百十九）

事有る際には、街道の人馬の繼立を停め、續で往來の旅人を禁め、宿の上下の關門を鎖すといふは當時の掟なり。其を熟知る正雪は、人夫拂底との報知を得て驚きたり。扨は？　と傳馬所の邊り、本陣の街隈、其邊一遍探檢りたれども、別に異しと見る物も無かりき。さらば眞實に人夫の足らぬ歟、さりとて此先に參覲の諸侯の往來ありとしも聞かざるになど、思惟ひつゝも、兎角は思ひ寄らぬ隙入りしぬ、酉刻までには是非安倍川を越さで協ぬに、急げ、とて自已も草鞋の紐を結び、追分村より草薙、小吉田の立場にも杖をば立てゞ、三里の道を驀直に駿府の町の棒端てふに來れる頃は、雀色時はや近し。急ぎ鵜野を再び問屋場に走らして、西上

の駕十梃をと誂へさす。一行は故と後れて横田町をやゝ半途までさし懸れる時、「師匠様！」思ひ懸けぬ…耳に馴れつる！　否幾と寐る間さへも忘れぬ聲は、突然として我が傍近くに在り。彼は覺えず、「宮か？」看回らせるも、其影すら見えぬなり。雖然其聲の正々しきに、不思議の耳を聳立てたる！　正雪、「宮か？」再び喚べば、「あい。這處にぢや。」聲する方を透し視れば、軒廡白はに壁破れたる、月はもとより雨さへ漏らぬ氣なる茅屋の毀戸の陰に、小手招きする人の有り。彼は我にも有らぬまでに走り寄りたり。「宮かよ！　其方は？」言ふ聲の高やかなるを、彼女は遽だしく手を掉りて、其の脣を壓へむ許りに禁止ぬ。「師匠様、御大事ぢや。覺悟の時ぢや。其れにしても好う此處までは！」語ふ端に、殘れる八人も早く集ひぬ。視れば、彼女は、道灌山にて截れる髻を依然にして肩うつ程に斷下げたる、鼠色の單衣、汚う破れたる誰が着古しかの腰衣一領をなむ纏へりける、目下は如法の尼法師なり。久濶やの挨拶も口に出ぬ彼等は、肩摩るまでに此の女菩薩を圍繞みて、爭ひて其慈口の音を聞むとせり。妙音は甚低かりき。「知らしやらぬか、今の先から當地は騒動ぢや。切支丹の邪宗徒を穿議するとて……。」「甚麼ぢや？　邪宗徒ぢや！　奇しうも無い。其の穿議は江戸京大阪、其外にも毎く有る事ぢや然樣の穿議受けたとて淨土門の愚僧が口で辯解かうには手間隙も懸らぬぢや。何の過大な！」「いや然は言ふな。而て其の穿議は甚麼樣に爲る？」無口の廓然も、法師頭の役目とてか、已が知る儘を打出して頭粉碎に撲消すを、正雪は制して、打潛めて容子を問へり、宮が聲も益潛みぬ。「第一不審なは、江尻町の御屋敷の討手といふぢや。妾は其の騒動聞くと其儘、駈つけて見ましたが、彼の明屋敷の四方の辻々、町方と城代衆の人數で固めて往來を通しませぬ。其上に久能にも加番衆の秋田殿手が百人餘り、小馬印に旗二本で押出すを其の歸路に見ました。馬印の出たより見れば大將の安房殿も出馬されたか？　是れが邪宗徒の穿議くらゐで然樣の騒動せられう筈が無い。殊に御前の見えさしやる期日にも合ふ。的切其事と思うてな、妾は先刻から倘やと此家で覗てゐました。が、途中では何物も見はなされぬかや？」扨は然樣かや！　然らば先刻の早打は、名を邪宗徒の穿議に藉りて我等を捕拿せむとする江戸よりの御急使かや！　然りとも知らば彼の場所にて討果して、我等も兎も角となりけむものを。とは言ふも不思議なるは、其の手配なり。果然味方の變心歟。或は過錯て捉へられ、其れよりして破口の綻ける歟。其は兎まれ今は既や此の海道は上らるべからず、急ぎ引返して、龍爪を甲府に踰ゆる歟。梅が島の間道を信州に越え、木曾路より我が指す方へ行くより外道の無からむ歟。然るにても此女子に此處に遇るは我が運命の盡ざる處、偏に八幡の御冥助！「宮、辱けない。謝禮は追てぢや。無事で居よ。」彼れは一同に目授して、戸外の方へ出むとす。忽地に人馬の聲あり。是れ加番西尾が手の海道の出口を塞がむとて出向へるなり。

味方は縱し其勢に對して人は什が一なるべきも皆覺えある腕利なり、彼等が油斷して押通るを造り過し、拔連て切出でなば、是れ九死一生を得るの道、或は此の虎口を遁れ得たらむも、飽く迄も今は穩便を旨とせる正雪は、一面には此駿府に於ける間道を熟知つ、一面には今問屋場へ遣したる鵜野が歸りを待むとして、一向に躑躅へるが、看る〳〵此勢に紛れて其の九郎右衞門は歸り來れり。

人々の在るを見つけて彼は率爾に走り入れり。「大事ぞや。路次は皆、間道迄もが塞りまいた！」

（二百二十）

彼等は嚢裏の鼠となれり。今は或る二途を辿るより仆道無かるべき有無の場なるも、有繋生死は大事とて、今更ら迷惑つ、悔い且つ呆れたる眼と眼を合せて、咄嗟の分別に苦悩みき。其の二途とは什麼ぞや。進みて屍を敵刃に曝すか、退きて自ら屠るか、單這個の二事のみ。雖然、怱くして腹切むとて這處までは來ざりしものを、猶傍に方やあるとて狼狽つる人々を、如是る際にも宮は甲斐々々しかりけり、諫めつ、勵ましつ、一甚麼の今めかしい。生死は原來の御覺悟でおはさうものを。但し遁るゝ丈は遁れて、敵はずば潔よう御腹召されや。敵の手配りとて瞬間の事、沓谷の方、大岩の方、宮が崎の方、此の三方は未だ其手の廻らぬも知れぬ。幸が一走り見て來ませう。其中にも討手向はゞ此家での御最期は醜しい。幸ひの御存知の梅屋、那家へおはせ。然して兵燹の用意ども喃。」彼女の言葉てゝ馳せ去ぞと引違へに、但見る一群の人數、府中町會所と筆太に認したる弓張の提灯を手々にして、皮袴の腰つき覺束なき町役人五六人、棒持てる壯者十餘人を警護にしつ、戸々の戸を叩き、家内を喚びて、追つけ檢視の役人衆が御出向きやらうぞ。寺證文用意して紙問の節に狼狽へたる振舞すな、泊り人あらば關所手形を御目に懸て、何國郡何村町の地主か、店子、浪人衆ならば前主人の誰殿かをまで明細に御申し立ちやれよ失敗ねて會所の迷惑さすな。と叫嘯き立つる濁聲も間近に聞えぬ。人々は素破との氣息せり。「靜に！」と言ふ聲々は闇黒を破りて響きぬ。「九郎右、油團の提灯持て。」弓を張り、火を點ずれば、火袋には紀の字を一字、墨黒に書せしが見はれぬ。是れ紀伊殿御印なり。看る〳〵正雪は、彼の四方髪を取り上て茶筅に結ひ、躬ら彼の提灯を手にして眞先に進めるが、故らに彼等を喚び止め、其聲を粗かにして、「役人、犯人は獲たか？　口々の支度は？」彼等は此の提灯に畏敬たり。「いや未だ。諸口だけは殘りなう手當しておざりまする。」「むむ、好うせい。脫落るな。」彼は怱く戚し棄てて、悠々として茶屋町なる梅屋に入りぬ。

* * * * *

駿府城代大久保玄蕃が奥書院には、御使駒井右京を脇座にして、大番頭山口備前守、御目付井戸新右衞門、町奉行落合小平治、神保三郎兵衞の人々列座せり。其中に落合は、今、手の眞力が復命せる正雪取調の樣を告むとして座を前めし所なり。小平治、其齡四十一二、骨格逞ましく、眉太く、言舌はきッぱ〳〵と瓜を截る樣になむありける。「與力どもの申しておやる。紀伊國殿御印にて町役人どもを戚し、茶屋町の梅屋が方へ止宿しつる上下十人の士、右京御申しの正雪人相に紛れ無き奴も在るとにおざる。此上は有無もなく踏込み申す歟、但し猶拵へて誘き申す歟、玄蕃殿御指圖次第。」と、彼は屹と看回せり。彼の物に堪ぬ玄蕃は雪花を撩亂すが如き其頬髯を左右に震はして、「何條猶豫か！　假初ならぬ紀伊國殿御印を盜みて兎角を言奴、一刻も疾う蹈込みませい。但し素奴は過るころ某も面識りの奴、殊に兵法においては名にうてた者、廿九日に久能へ取籠るとか言へば其準備も等閑のものであるまい。其の眼色もげに一癖の奴と見え申すに。旁、用心は堅固にお爲やれい。」小平治は意得て急ぎ其の座を起むとす。先刻より打傾けたりし右京、「いや、小平治、些と御待ちやれ。此は大事の捕物ぢや。先づ其の手配りは。」「えい、其の梅屋が二町四方は大提灯を取廻して、蟻の這ふも見ゆる如くに爲ておざる。其の西北は安房殿が手、加番秋田安房守、南は脇町より東南には玄蕃手と新右殿（井戸）士、表木戸へは我等が支配の與力同心を押懸させて一左右次第と含

めておざる。」

（二百二十一）

「表の手配は隙間も無い。然りながら家の内は如何おざらう哺？　夜深では。」城代の老人は、右京が此の注告を聞くも、猶自説を棄ざるなり、「仔細もあるまいよ。夜深なりとて表裏より押取圍て一時に蹈入らば！　殊には物の猶豫の中に奴原が徒黨の加勢の案じもある。旁、猶夜明けぬ前に……」「其の加勢とは？」「されば、加勢も有うで有るまいか。廿九日に久能へ籠る。如何に御山が堅固であらうと彼奴が召伴れた其の小勢、上下僅に十人ばかり甚麼様にかなり申すべい。執れにも此の近間に其の徒黨の者……いや大分の兵の潛み居ると見申すも僻目とは無からまい。然れば猶豫は大事の根本ぢや。一刻も疾うと斯う申すのぢや。」忽く言ふ玄番が肚裏には、目に見えたる正雪を第二段にして、未だ目に見えざる、更に其者より二層三層も可怖かるべき此加勢といふを氣支へるなり。卽ち其の胸中に描ける處は、久能周圍の村民の蜂起にて、其の蜂起は更に或る向の教唆、否、若くは既に其の首謀人の手なる兵の闖入み在りて、鍬鎌を手にせる蓑笠の後より、彼の正雪が今夜使用ひしとはいふ其の提灯の影、濱風にゆらめきつ見え來む歟といふに在りき。されば猶豫は大事の根本、一刻も疾うと言ふ？　言を聞き、其色を見たる小平治も、いでやと兩び起むとするを。「いや、其案じも御道理ぢやが、」と右京は怪異きまで懸念せり、「今も被仰た彼奴は名にうてた兵法者ぢや。殊に江戸での手段といふも姻硝の火攻といふ。其れ程の奴。萬一其の投火、棒火なんど言ふ火術を以て討入るを惱まし、廊下の盡處、納戸の隅に待懸けて切りもし、突もせば、可惜ら味方を損ずるのみで果は手に餘る様の事おざらうかや。夜中の捕物は其れが大事ぢや。然も彼には息賂を與れて其の無用心を計てさへ、將軍、中々の骨折と聞き申す。況て是れは人數も多し、用心は堅固、思ひ切たる敵の取籠つたを擊つは只一所の城宕を攻むるでがなおざらう歟。夜合戰は危ふい。是れには種様の法のあるもの。無禮ぢやが落合殿手に夜合戰の進退存知の者ござあるか哺。不案内なりや、攻る、蹈込む搦むるとの擬勢を視せて、今三時を待たれい。今の、奴原が加勢といふも是れは未だ色目に見えぬもの、其れが準備に口々の警固もある。浪人の五十三十縱し寄すればとて甚麼程の義があらう。此方の一は一つ損ずれば眼前に天下の大事ぢや。」用心はげに然る理ならむも、亦た武邊を以て世に許されし胸井右京其人にして、然とては餘りに度の過ぎたる入念ならずや、或は窮鼠の猫を噛むと言ふべきも、猫に遁るゝ鼠として甲乙か窮鼠ならざらむや、反噛を怖れて捕へずとならば、猫の用は竟に廢すべし、天下の大事を企圖る者、其れ程の奴を搦めむに手負の十人二十人、討死の五人七人、其れはもとより覺悟の前なり、然るを今更ら、事新しげなる、意得ぬ夜合戰の穿議立てや、と小平治は憤慨みたるが、此人も亦た然る者なりけり、否、此の大切の御使承はりて來し程の男子、斯く言ふは又た那麼様かの有ること歟、此處は無三とは。と霎時は座敷の體に目を注りき。小平治は善く觀たり。天晴の目利なり。右京は眞個に或る人の密旨を領けて出向へるなり。其の或る人とは？　別にもあらぬ井伊（直孝）にして。其の密旨とは？　祕中の祕なる、正雪に自滅させよ、といふなりき、彼が彼の朝、此の御使を承はりて出立つ時、井伊殿は彼を一室に招かれて一言せられき。濁る水を攪立てなよ、天下の安堵に意を注めよ、洗ふことは、只其の見えたる汚穢を去りて、衣服の用を全からしむるに在り、熟う意せよ、と申されき。元老の一言は深く彼が心に沁めり。紹伊殿と正雪とが云々

とは此日も殿中にて聞ける處、然れども、枝を截て樹を枯すは、種樹に拙なる者の爲す業なり唯其枝に纏絆り着く蔦蘿の纒累を除けば足れり、と彼は其處に臍を決めぬ。

（二百二十二）

城代が方はこの論判の最中なり、一方なる落屋が奥には、鵜野兄弟、熊谷を初として九人の者、各早手襷に袴の股立、布鉢巻して、刀の鯉口を切懸けたる、中にも正雪が弟三左衛門は血濺げる怒眼に、無念の牙を嚙鳴して、「兄者、此上は分別も御思案も要り申すまい。只奴原切拂うて……えい、今の此際に坐睡でも……疾う御指圖。兄者！　えい。」立竦りつ、其が袖を引攫みて扯起てひとす。曩より、其背を床柱に凭せ懸けて他目を靜穩に坐睡れる正雪は、此時漸くに其眼を開きぬ、雖然、語調も平生に變らぬ、太と悠々たりき。「喧噪しい、何事ぢや。取擾られたりとて其樣驚くか。計手は原來の覺悟。何を今更ら……」再び其の眼を瞑むとするに、九郎右衛門も堪り難ねたり、「覺悟は仰す迄も無い、一命も惜みませぬ、なれど由井正雪とも有るべき仁の御最期には餘りに事の不檢束て見えますぞ。自殺なりや自殺、切死なりや切死、何樣とも……。」礑と睨れば、師は首領つゝ、徐かに微笑へり。「うむ、道理ぢや。固より自殺ぢや。但し、先づ然は其臍を決め置いてな、敵の樣を熟と視い。今に物の注進も來う、兎角は其の注進次第ぢや。慥く臍を固むれば、周章るにも當らぬ。恐怖しう恐怖しう無い。」「いや、恐怖し恐怖しと言ふではおざらぬが、自殺なりや自殺の儀式、後代の手本とある樣の御腹居されたい。如是る際に奴等に無下に蹈込れたりや。」「其樣な遠慮も要らぬ。正雪ほどの者の座敷へ奴等とて得も無下にはぢや。又た踏込まば此の一嚢ぢや。此火に爆裂さいて！　扨て結果了ぢや。は、好個此事が自殺の手本であらうがや。」視れば、彼が眩近に、毎も見る錦嚢あり、其の重量のいと重きと、彼が其を猶る間とても手離さぬを見て、九郎右衛門すら、或は師が這間の用途にとて何方へか貯蓄へ置ける、砂金入の嚢にや、なども疑へるが、此言に藉りて之を思へば、過矣、初て解せたり、是ぞ火藥の袋なり。今が死ぬべき生命なれども、有繋に其の爆發の猛勢を想ひては、人々も湊ろ其胸を跳らす時、「微妙い御覺悟、今は只其の……」喘げる、噎れたる、突然たる聲は入口にありて電光の如くに閃き入る法衣の影は、今まで師が遲しと待てる宮なりけり。と看るより彼が睡氣の眼、愼げなりし聲は遽に冴て、優長に見えたる胡坐の膝さへ儼然正されぬ。「甚麼とぢや？　宮！」「も協ひませぬ。蟻の這ふ隙間も無い。……只御覺悟……。」彼女は、其の鼠衣の袖を瞼に押し當てゝ、忙しき辭も斷續に、潸然とばかりに泣きにき。「むう！　然樣か！　正雪が運も此迄か！　然りながら、一方の打破るべき口、蹴散らさう隊！　此も無いの歟。」有る段でかや、此町の四方は皆突棒刺叉、提灯は白晝のやう、町奉行の落合殿、御使の駒井どのと今小具足に自身の槍で表町に出馬と聞きました。到底が遁れさしやらぬ御運命。是非も無い。」彼女が耐ずして泣俯したる、其肩を攫み起すが如くにせる正雪は聲稍苛く、「泣くか、其方。えい泣く處で無い。言甲斐ないぞ。えいこりや、敵は何とか言ふ？　正雪が露顯は誰人の口からぢやと言ふ？　訴人か？　間諜か？　聞ぬか其方、其の口の樣によつては予に方便がある。や、聞かなんだか？」一同の呼息も益暴ぎて、此の涕泣文もなき尼の回廊を圍繞めり。「聞きました。」「えい聞いた？　そ、そ、其は誰ぢや？」「忠彌どの……」兩個は愕きて覺えず叫喚べば、「變心奴！」と正雪は粗猛に彼女が腕を扯起せり。驚愕、狼狽、憤怒の狀は種樣なれども、

一座齊しく其眼を瞻り、其手を戟にして、此の忠實なる尼の、彼の不義奴に與みしたらむが如く、一言を過錯たば、八裂にもと言ふ擬勢もて疾視へ詰めたりき。然して其の二十の耳朶は、噴出せる火山の障壁の如くに聳立られたり。

（二百二十三）

當時の駿府の光景を言はゞ、此日申刻過るころ江戸よりの早打駕御城へ着きたり。時ならぬ急使は、抑も何事か、と人々の訝怪める端へ、加番の秋田が手は逸早く久能へ向ひて、其れと同時に街道の關門は鎖されぬ、猶續きて戸々の人數檢めは行はれぬ。されど此時は、切支丹邪宗門の徒、江戸にて人討て此の駿府へ立越えたるなり、身元確かに、寺證文持たる者は、別段の御吟味も無しといふに、恠ぬ胸も猶立躁ぐまでには到らでありけるが、軈て甲夜過ぎて子刻にもなり、夜半近くなりける頃、町々一時に吶と騷動して、老を扶け、幼きを負ひ、資財を荷ひ、雜具を手にして、大濤の寄するが如く、鼎の湯立つ如く人を突退け、我を先にと城の大手へ頽れ顯りて嘯きつ叫びつ救助を乞ふ。事由を糺せば、何物か言ひ出しけむ、那の茶屋町に取籠れるは卽ち彼の切支丹の大將、先年の島原の殘徒にして、彼が手には鐵砲五十挺、騎馬廿騎、徒歩の足輕二百人あり、明曉當市中を燒倒きして、烟の紛れに財寶を掠めて、引返して久能の御山の要害に楯籠らむと巧圖るもの、其の徒黨の返忠によりて恁う討手をば向らるゝが然りと其の人數は彼の家にあり、今にも彼處より討て出でなば、市中は黑烟ぞ、我々は撫切ぞ、疾う城内に入り塀裏に取附きても、命一つを助かれといふ、其の風說暴風よりも鋭市内を捺りて、此の騷動に及べりと正確に知られぬ。此時、猶夜合戰の是非、討入の利害に就きて議論決着せでありし人々は、事の注進に驚きつ恨れつ、先づ其の脚下なる此の擾亂を鎭めではと、扨て御使たる駒井、町奉行たる落合の兩個、小具足に槍執て橋際に出で、江戸にての模樣、謀叛の徒黨逮捕の始末を言語明晰に說き聞せて、當座なるは彼等が殘黨、頭無き蛇の如きものなり、素奴ら甚麼程に働かむも其の多寡も知れたるものなり、合戰の燒擊のと、然樣の大事ゆめ以て有るべからず、人數は上下纔か十人、今の程に搦め取て江戸表へ差立つべきに、構へて騷ぐな、騷ぐなとて猶彼等が安堵を買むとか、率いたる馬に飜然と騎り、二騎打駢びて彼の場所へと出でたるなれ。思ひきや、此の光景が奇怪の者に疾く見られて、其の演說は不思議の者に聞かれたり。其者とは宮なりき。彼女は宵よりして沓谷、大岩、草深の町、淺間下、片羽、安西の盡處々々まで、倘か走路やある、覺隙やあると狙ひもし覗ひもし、潛りつ脫けつ足手をはかりに奔走れども、行く處として警固、見張、番卒の誰何、騎士の巡邏、兎毫ほどの油斷も無きに、然しもの彼女も氣力の脫つ、恁くては縱ひ彼の人數にて切て出むも前途を甚麼となるべきや、只疾く此樣を彼人に告げて、生ての汚辱を見玉はぬ其の覺悟を、と走せ戻る途次に測らずも此の演述の場に遇ひぬ、此れにて彼女は忠彌が事、河原が事、屋代父子、藤四郎が急訴までも逐一に知りぬ、是れに依て彼女は今、其の聞くが儘を彼等に語りぬ。威嚇み懸れる九郎右衞門三左衞門等は言ふにしも及ばぬなり、正雪さへも呆れ果てゝ、攫みたる彼女が腕を覺えず放しぬ。然も其手は胸の上に挑れたり。憶ひも懸けぬなり。想ひも寄らぬなり。九仞の功一簣に到りて、彼れ忠彌が、自ら求めて其の破綻の口を啓かむとは。嗟、實に愕ひも懸けぬなり。天乎、命乎、抑人乎。否、人に非ず、天なり。彼の蒼々たる的は他に還すを好むもの、我は今其の所好たる還復の戲技にや、弄ばれぬる。と彼は憮然として其の首を俛れ

たり。「嗟、悔むまい。今日の此の窮境は正雪自ら爲したる身の咎ぢや。忠彌所爲で無い。天道の御罰ぢや。是非もない。」言ひつゝ彼は一座看渡して、俄に微笑つ、「現世の名殘、予は今懺悔せう、九郎右衞門、宮も聽け。時は尚だ有らう。寓いで聽け。」

（二百二十四）

懺悔とは？　悔悟とは？　と人は皆眉を動かし、息を潛めて、彼が喙に目を注ぎぬ。彼は飜りて、徐々として說出だせり。「想へば夢幻ぢや。何事も只夢の中の遊戲ぢや。唯、從前は、其の夢を夢とは爲いで、其遊戲を遊戲とも思はいで、無益の事に肝煎たぢや。想へば、はゝ、いかい癡呆な！」彼は、其の劈頭一番、人世の無常と、人事の泡沫に等しきとを唱ひて、我と我が多年の經營を嘲けれり。「然りながら、物には各稟性が有る。飛ぶ禽、這ふ蟲、走る獸、皆各其の天に受けた稟性によつて一生を送る。正雪が稟性は謀叛ぢや。はゝ。これは凶い稟性かな？　雖然、是非ない。凶うても稟性ぢや。倘か此の稟性を壓抑たりや、今頃はやゝ疾うに狂人とも做たであらうよ。其れが當年四十二、此齡まで壯健で、其の死際にも彌陀よりも尊い征夷大將軍家の御迎使を受くる。本望ぢや。先づは當地の紺屋の倅たる由井龜之助が前途として、冥加至極ぢや。其の冥加も、只予が稟性を戇直に爲て行たからぢや。」彼は我が行爲につきて、其事の實に已むべからざる的有るを辯疏せり、然して談は良本題に入らむとす。其の顏色、其の言語は、愈〻沈着して曩の躁暴、急に驚ける如き態は、些の痕迹だも見えざりき。「然りながら、其の名譽も、冥加といふも亦た夢幻と言はゞ夢幻。其の夢幻の大夢幻といふに齷齪と爲初めたは、あの臨濟寺に在た時節ぢや。年齡は十二か、十三か喃？　太平記と太閤記を好いて讀んでな、王公將相何の種あらむやと長老に聞せられたが、根本ぢや。予は爾時、斯う考へたよ。太平記の楠、太閤記の秀吉、此の二人を併せたりや恐らく天下に敵はあるまい。いでや我、此の二人を一個にして天下に旗を樹てうといふ。はゝゝゝゝ、這が其の起因ぢやよ。烏原へも加はつたが、是はや論ふにも足りぬ。其れから四方を經歷ツて、江戸へ出て、師の不傳（楠）に就て、傍ら武田と北條との規模を覩うて、牛込の榎町に予が一流の道場を始て開いたは、三十に近い年齡ぢやつたか？　忠彌とは其頃から懇親した。」彼は、此時大嗟歎しぬ。「と、有る前に、予も許多の人を見た。が、其の武藝といひ、膽力といひ彼奴ほどの者は見ぬ。予は當時から恁う想うた、浪人では丸橋忠彌、大名では紀伊國殿、將軍では今の上樣（三代公）主上では恐れながら當今樣（正保帝）此れが日本四つ物揃の、往古にも有るまい名物、と斯う見たは！　で、其の一人の忠彌は既に我が義弟、紀伊國殿は自ら物有り氣。あはれ微臣正雪が意表を彼方に奏上する人もがな、其の日本の四物揃の三個が今其所とならば、殘る一個を壓碎かむも、何條事か！と斯う案じてな、其等の紹介、此等の方便、二途かけての役に立てうと、綾澤の三位が庶腹の子、紀伊殿が重臣といふ兵庫を緒けた。も、其れは父た此方が未だ見果てぬ夢の、其夢の夢幻とはなつたよ、あゝはゝゝ。」安坐の膝を丁と拍ちて、宮を見遣れば、彼女は俛首て太息しぬ。時に三左衞門は座を前めたり、「破仰る通りは我等もおろ〳〵に存知の前ぢや縱令其れが中庸の道に外れうが、亂臣賊子と申さうが、其れは其の腐儒の見、敵方から申さう言。素浪人の我等が分、米一粒の扶助にも與ぬ、頭の壓て無い身を以て、腕壓で天下を奪る。何事が疚しい？　聞たいは其の今の懺悔といひ、天道の御罰といひ、此の窮境も御身が做された咎ぢや

とある。何ともの不審ぢや、甚麼が御罰ぢや？甚麼が咎ぢや？　其れとも忠彌に對して濟めぬ事爲された歟。其れが聞きたい！」「まアさ急きやるな。今語うぞ。如何にも予は忠彌めを殺しに懸けた！」其の眼は俄に炫灼て、勃如たる色は起れり。其眼光に射竦められたらむが様に、一座の口は皆鎖されて、物の不思議に只凝唖を呑りき。

（二百二十五）

「予は眞實に彼を殺した！　江戸の大將といふ名を好餌にして棄殺しにした！」正雪は、容され難き心中の罪を訴ふる如くに反復して叫びたり。其語尾に接て直地に疑問を起せるは九郎右衞門なり。「と許りでは未だ我等贓に落ちませぬ。忠彌御不快の段々は神奈川にても話の巨細はおざつたも、彼の夜には尚だ其處までは仰せられぬ。其義は其後の御分別か。但しは祕された歟。兎角然る程の御決定なりや何故我等忠告を容れさせられいで、今日の窮境に御墜なされた？　御身にして江戸の進退なされうなりや……」「露顯も爲まいと歟。露顯は知らぬが、江戸の采幣を甚麼で執られう！」「大事の江戸の、何故執られませぬ？」「其れが不審か。愚かの問條や！　此の一義に就ての江戸の地は所謂る死地ぢや、疾く戰ふ則んば存し、疾く戰はざる則んば亡ぶ、卽ち攻るに可しくして守るに可からざる合戰には難義の地ぢや、味方、縱令一旦の勝には乘るとも十日との籠城も叶らぬ、謂はば無用の地ぢや、只此處にては敵の膽を奪ひ、氣を挫まし、根本を搖撼して、枝葉に手足を使役ふことを得せしめざれば足れりとするぢや。彼の三百の大名、八萬騎といふ旗下、味方いかに彌猛に思ふも敵對が協るべきかは！　如是る土地に忠彌を置いたは、古諺にいふ、馬を捉ふるに馬を以てし、毒を制するにはいはゞ、毒を以てすぢや。」突然として閃き出でたる陰火の影に、闇中に潛める妖怪の面を始て看得しが如くなる鵜野は、他の詭祕の測るべからざるに今更ら驚悸きて、我師ながらも其人の面を覺えず嫉視たりき。三左衞門は飜りて頷きて、「扨は忠彌を血祭にぢや喃？　敵の手に與いて討死をさせうで喃？　何さま其故で御身が彼地の采幣を御執りやれぬ……あ、解せた。解せ申した。但し、何故に然までは忠彌を御惱惡しみやつた？」其れまでは、有繋に慚ぢて、彼も口には出し得ぬなり。彼が友に信、母に孝、妻子に愛ある、あはれ人としての人間たる道に虧缺る無き丈夫たるは彼も認め得て疑はぬなり。只其者が剛愎、嘲罵、他の過失を毫も假さざる、我を其の屑ともせざる、直情にして經行たる、餘りに其の正直過ぎたる、寧ろ其の膽無く、愛想無きが、多感にして猜疑に富める彼が意を損せじと言ふなれども、其は縱ひ此際に臨めるとても、正雪其者の死後の名に對ひても、懺悔をまでは得了ぬなり。雖然、一念の善に向へる、既に夢幻の大關を良透徹し得むとする彼が心は、我が屢までも隱蔽はむとするの勇無きなりき。

「夫れが予の做した罪科天道の御罰といふぢや。深うは問ふな。」苦笑は彼が脣頭に見ぬ。其を引取りて廓然の法師頭は搖めき出でたり、彼は燃去らむとする蠟燭の心を摘棄て、「微妙い事。既に其れ迄の御回心なりや滅罪は眼前ぢや。此上の御懺悔も無用、但し豫ては久能へとの御沙汰が遽に京都筋へともおざる樣なと、忠彌事につき紀伊殿の甚麼の御作略もおざらなんだげに見ゆるは、尚僞不審ぢや。此事にも密藏の奥義ばしおざるかな。御胸が聞きたいが。」「流石ぢや、好う問うた。甚麼の久能がぢや！」「扨は御旗は、和歌山かな？」「はゝ、和歌山か？　和歌山は今、一の敵ぢやは！」彼は九郎右衞門を顧みつゝ、我が愚を哂ふ如くに言ひ消しぬ。「ほゝう、其れも方便かな？　こりや愚僧の株を奪ら

れた。」彼は圓顱を撫で回せば、「御僧に教化せられての。」と正雪も微笑ぬ。「では大阪に據らるゝ歟。彼の太閤の迹を追はれて？」「其の脆殼の土地へ甚麼行かしやりませう。師匠様の御化る處は確に京都ぢや。是は先刻の御話の兵庫どの事から見ても知れますは。」宮は念佛の口を住めて、老洋師の耳に教へぬ。

（二百二十六）

「京都？　扨は朝廷を歟？」靡然が嘯けば、三左衞門、作左衞門、六郎右衞門も、漸くに師の意衷を解み得て、宮の慧眼に今更ら歎服の唸きを起しぬ。彼女は、此等の驚駭を微笑みて、「何のいの其れ程の事知らしやらぬ御身様方とも有ろまいに其様に魂消さしやるは。ほゝゝ今の世に如是る大事を企圖てらるゝ人！　凡そは江戸の將軍様御敵に引受けられて、天下に旗をと思ひ立つ程の御人で、朝廷といふ字に眼を着さしやれぬ、其様な愚がござりませうかや。御威勢こそ微々たれ、御領地こそ僅々なれ、人間の種にましまさぬ現神の尊さは、紛れない天下の御主……。其の御主を首に戴いて海内に號令する、遠き王朝の藤原氏、續いて平氏、幕府を樹てゝ六十餘州の總追捕使とまでならしやれた賴朝すらも皆同一轍ぢや。尊氏の不臣ですらも、天位の恐惶きに對ひて弓挽きまゐらすることの難義を思うて、同是其の謀叛を皇統の御爭ひに執做された。綾田といひ、豐臣といひ、自個が遺恨も、我が私己の爭ひも、勝手の爲には勅命を仰ぐ。背けば違勅ぢやで讐も敵も皆々冑を脫ぎまする。されば此の勅命の文字の前には、人數の多いも恃むに足らぬ。要害の堅固も用をば做さぬ、弓鐵砲の長兵、太刀槍の短兵、皆朽たる木腐れたる繩も同然ぢや。只是の勅命の二字を戴くものは勝ち、戴かぬものは敗る、之れを戴き之を得る者は、挺を作りて秦楚の堅甲利兵を伐たしむべしとある。想ふに師匠様は其れを疾うに御覽じたぢやろ？　猶尼が目で見ますれば、縱令紀伊國様、全然師匠様に御荷擔なさればとて、只の和歌山、僅か五十五萬石の御身上、多寡が六萬に足らぬ御家中ぢや、其れで天下を敵になされて御運の開くといふ、其様な道理甚麼がおはさう？　又師匠様が、十年以來聚め給へられた人數とても、物の一萬、謫ふにも足らぬと方纔被仰れた島原の一揆に比せて見まするも只其れが三分が一つぢや。大阪の秀頼様が、彼れ程の金銀兵糧と、彼れ程の御官位と、彼れ程の親御様御餘光と、彼れ程の城地と、彼れ程の名將智者、勇士猛卒とを有たしやれてからが、御最期は、彼の墓ないぢや。無躾ながら今の師匠様、秀頼様ほどの御身上は有たしやれぬ。味方は島原ほど一致して在りませぬ、其れで彼の天上の鳴雷も音を停止むる彼の將軍様敵になされて、梱附かうとは、其の鳴雷にも……否其の音を停止むる將軍様にも勝ッた御味方が無うては協はぬ。無うては愜はぬ。只其れが有りやこそぢや、紀伊國が思し召す儘にならいでも、忠彌どのに御不快でも、簡様に金銀に逼められても、此處までは出て在したぢや。其の御目的が無うて何のいの、師匠様ともある御人が、府中邊りへ——久能邊りへ、百姓一揆同樣の御眞似なされう歟。こりや其人の御身分にも寄りまする。一ほゝと微笑ふ其口許の匂はしきは、灌として秋水を出る蓮花の莟を破る如きあるにも管らぬなり、其れが堅說橫說、幽を闡き、隱を索り、他の肺腑を透見して寸毫の微をも過錯たざるには、物に動ぜぬ正雪も些しく狼狽て、覺えず其膝を前むとす。恁有る處に、「物申さう！」驚破！　との面色は人々が眉に動きて、這處のみにぞ秋夜の寂寥を見せたる從前の座敷も、喧濁たる殺氣、看る〳〵充盈てり。就中、三左衞門、六郎右衞門、清兵衞らの壯俠は、遲早く押取腰の刀の鯉

口切り懸て、「蹴散し申す歟！」正雪は阿呀と禁めぬ、「周章つるな。何をお主等。案内を乞ふでは無きか。」「案内とて、油斷のなり申す……」「油斷せいとは誰が？　案内とあるを討つ、然様の法武士に無い。作左衞門、えい、應對せい。」鵜野が弟作左衞門は、命餘義なく、其の鉢卷を取り、手襷を脫し、袴の裾目尋常にして戸口へ出でぬ。來れるは落合が與力なり。「奉行落合殿申せとおざる、江戸にて人討たる者、當地へ狙け込み申せしに依て旅人宿をば一々に檢分申す、主從を言はず、御入りある程の人數は只今此れへ御座なされい。奉行も今ほど此處へ見え申す。や、既や馬の見え申した。」落合小平治、自身此處へと向へるなり。

（二百二十七）

檢分の義は心得たり、暫時待たれよ、追附けと言ひ棄て、作左衞門が引入れる後は、家内は騷黑く、寂閑として、人の在らむ氣勢だも無きまでなる、颺手との物響もあらざりき。其れとは反りて戸外には、當所の町奉行落合小平治、與力五騎、同心十人、足、城代足輕三十人にて既や犇々と押詰めたり。彼は前にも言ふ小具足に身を固めき、九尺柄の短槍を馬の平頸に引着けたり、鍬附の陣笠に、黃平の陣羽織、武者擧嚴めしく、「やア誰か、疾く案内へ。町奉行の自身出向うたるに紀伊殿御内とやらむ言ふ主從の士、疾う出でよと言へ。家主なる奴は在らぬか、町役人は此家の案内存知であるべきに、彼等が座敷へ此義疾う〳〵申入れい。」奉行の下知は暴風の如く激しけれども、兩個無き命は誰も惜しかりけむ、曩の與力を先頭にして同心二人、町役人四五人、物申う、物申う、案内を賴まむとは頻に繞きつ叫べども鬼一口といふよりも可怖しき暴猪の籠れる其の路次の口、廊下疊處の黑闇所にまでも進み得ずして只一所に動搖く時、突つといふ闇中の燭は其の眼を射たり、一聲高き咳拂は其耳を鑿てり、人々は又更に阿呀と絕喚ば、戸外にても之に應じて素破と絕叫り。這の急遽なる現象の中に、奇異きまで緩徐なる音は響きぬ。嗄乎！　楷乎！　と此聲は、今出で來し人の路次下駄の音なりき。其の音の主や誰？　正雪なりき。肩頭過ぐるまで截下げたる四方髮の鬢るを掻上て、稍曛て色着きまで白き面上に、明星を竝べ懸たらむが如き凜しく、瞭けく、鋭き雙眼を儼と瞰出でゝ、又た莞爾と微笑める、凄愴じさ、氣高さ、再とは正眼に瞻上ぐることも協はざるべき其の威容、天晴れ實に百萬騎の大將とも見えたる。彼は、躬に、練帛の薄紅色の裏打たる帷子を穿て、菊水の形を散らせし唐綾の丸括帶し、蠟塗高蒔繪の小脇指前下りに反して、弓手に座敷衣を景色ばかり衝きたりき。雪を欺く白綃の數寄屋襪の其下より、彼の雙乎楷乎といふ其音なむ、路次の圍板に響へつゝ、天井高く反響くにぞありける。刀をば、今出でし作左衞門持ちたりき、其れが左右に、又前後に、鬼かとも見る個强の壯士以上七人、眼を配り、鼻嵐を强く吹かせて、跋扈り出でぬ。是等皆、一以て什に當るべき猛者とは見えき。餘りに爲體の心憎きに、馬上にては如何とや思ひにけむ、落合は纔然と下り立てり、與力も同心も居流れたり。此曉は、雨雲濃く、空黝みたれば、今頃は入る方の光爽かなるべき弦月の影も見えねども、二町が先に焚き續けたる遠篝、提灯の火は、纔りて此雲に映じ、彼空に射て、地獄の猛火を變相の圖に見るが心地しつ、恐怖しと戰、かゝる〳〵町役人らが面も赤々と隱れず顯はれき。恁有りけれども正雪は、其等には目も與れぬなり、微笑の面を依然に、「只今の御名告にて承はる、御手前は當所の奉行落合殿な。是れは紀伊殿御内におざる由井民部。扨て如何樣の御用にて自身の御出馬な？」「委細は先刻申入れつる。切支丹邪宗門の徒、江戸

にて人計て當地へと遁れたるを狙込申した。其許らには然る仔細も有るまいと御使の旨趣、御法の表目ぢや。先以て御分より其肌を袒ぎ、其背を見して、軀内の傷の有無を疾う見せられい。其の檢分の爲の出馬とおざる。」彼は焦く言ひて、彼の意裏を誘き見たり、其答は果して彼が意を得たり。「是れは扨思ひも寄らぬ、紀伊殿御内とおざる士が、公儀衆ともあれ、其面前にて素肌を袒ぎ、其背を見せ申すことの協るべきか、はゝ、悉皆降人の法。協り申さぬよ！」「協らずとて、御法ぢやが？」正雪は猶自若たり、「武士の面目を潰さる御法、然様な御法は有る様が無い。」「無いとて有るとて公儀御下知、右に故障お言やるが其の御法違犯。遁犯の輩は奉行役として先づ其科を以て搦め捕うが…。恁有ても歟！」彼は其の決意を暗示せりき、正雪は良色を作しぬ。「強々の沙汰。奇怪の義。可矣此上は……」「えい迷疑をお執りやれるな。由井とも有るものが！　御法、遁れぬ場と覺悟お爲やらぬか。其れが江戸よりの御沙汰と言ふに。」落合は撲地と睨めたり。

（二百二十八）

小平治は遮て念ひぬ、倘か正雪、一時の命を助からむとして、形態醜しうも、命ふが隨に其肌を討手たる予が面前に袒ぎ、其背を敵たる多衆が眼に曝らして恥ずとあらば、是れ意地も義理も無き尋常の鼠猫狗盜の輩、憫れむにも足らぬ奴なり、然る程ならば縦し右京は甚麼と言はむも、即座に我が役所に拘き來り綱縛して江戸へ護送らむ、何の猶豫かと手藥煉引きたるも、有繋に然は無かりけり、彼は其れが、飽くまで沈着ける態度、率爾ならざる言語、屈すべからざる節、侵すべからざる威容とに、自ら畏敬と愛慕との念を生じて、漫ろ其人の憫然に感えぬ。奈何ならむも箇程の好漢を拷掠の責苦に遇さむは忍びずと思ひたり。これに依りて彼れは其の駒井と談合へる自滅の意裏を微白しき、心敏き正雪は其旨を快くも悟了ぬ。「はは、御奉行の御注告、近ごろ辱けなう、御禮申す。如何にも遁れぬ場、御法の通り軀内の様をも御目に懸けう。但し某、途中より風邪の氣味にて湯も浴かず、垢膩いたる肌膚の醜しうおざる。幸時の御猶豫を。」「心得た、いかにも好う整理て扱て見せられい。」兩人は式代して、小平治は將几に凭れば、正雪は又た愛乎楷乎と入りぬ。

* * * * *

待難ねたる宮は走り迎へぬ。「師匠様、妾は那様なるかと案じたに、まゝ其れでもな。」胸を叩けば、正雪は嘆げる色もせず、「おう、有繋は奉行ぢや。予に自滅せいと言ふ。過分の芳志ぢや。や、方々、聞く通りの事情、いで其夢を見果さう。噫、然るにても人々が厚志は生々世々しようでもあため礼謝する。忠蝋其餘も追附け來うに、死出の山にて待合さう。宮、お主は倖ひの其姿。我等初めへ一句を授けて、死後の追弔を好う頼むぞ。千僧の供養とあるよりも其方が其の一遍の念佛、予も人々も嬉しう聽かうぞ。」彼は一面には恁く語りつゝ、一面には矢立の墨壺執り出でゝ、最後の遺書一通をさら〳〵と書認め了り、飯糊して床柱に粘り、銚子を、と命ふ。永訣の盃を酌むとや。

昨夜よりして恁くとは思ひ設けつれども、目下としなれば流石名殘の惜まれてや、猛く勇める九郎右衛門、三左衛門、六郎右衛門、廓然等を初として、供若黨に到るまで、皆首を垂れ、眼を瞑て、其をすら持て來らむと言ふも無きなり。獨り甲斐々々しきは宮なりき、彼女は瞬手に走り入り、銚子盃、搜し出して師が言ふ儘に座敷に据ゑつ、「さ、先づ召しませや。然て其の御盃、一番に妾に下されや。」正雪は其の意を解し得ぬも、先づ首頷きぬ、「導師というて

歟、其の會釋の盃歟？」「いや導師は廓然どの、其れが相應しい。妾は冥途の露拂ひ、御先に立ちますで！」といふ眼には涙あれども、凜たる聲は露も濁らで霜吹く旦の風響にも似たりけり。此言に興奮られてか人々が息も出でたる、其れに先ちて正雪が眼は苛ぎぬ、「甚麼を汝！師の命令を背く曲者。正雪ほどの者が切腹の場に青尼など！」「麼！」「汝は曩に道灌山で、其毛髪と共に師弟の緣、父子の緣、斷たで無き歟！棄恩入無爲の尼法師が俗人に殉じて、自害するなど、協らぬ事！　えい協らぬ、協らぬ事！強ても言はゞ再度の勘氣ぢや、出て失せい！」彼が怒れる暴々しき聲、人の泣聲、排出だす、去じと爭ふ、其等の物音の外にや漏れけむ、突然與力の一人は其の廊下の口に來りぬ。「物申さう。御間隙の餘りに入り申すに奉行不審を立てられます。疾く御整備。」曳！　との衆聲は忽諸として座敷に起りて、繼いて撲々々の太刀音も冴う響きぬ。愕きて駈入れる彼は、何物にか脚を奪られて頭顱倒と鷄居際に打倒れぬ。是れ豫て彼等が張り置ける牽繩に足を絆まれたるなり。再び蹶起て、紙襖を開けば、煙たる腥氣は面を撲て、暴くれたる僧俗十個の亡體は算を亂しぬ。「呀！　自害ぢやッ！」

（二百二十）

彼等は噫、自殺せり、然も見事に自殺せるなりけり。試みに想へ、書劍十年、跋涉數百里、東に簫り西に說き、衆を鳩むる一萬、金を散ずる數萬、壯圖方に成るに垂むとして、此の口言ふべからず、舌說く能はざるの悲境に沈落す、其が胸中の遺恨什麼幾許なりけるぞ。蓋ふに彼れ正雪たる者、其腸や斷れ、胸や碎けて、心狂せずしては已さらむ。然矣、狂の一字、彼が今當然に餘くべきの運命のみ、順序のみ。雖然、彼が氣力は猶這の熱腸を壓抑て、破裂せしめざるの重力ありき、便ち彼は全般の失敗を已が躬に率て、天をも怨みず、亦人をも尤めざりき。猶人生の夢幻を悟了し、大觀して、落々然、月に面し花に對して一盃の酒を喫ぶが如くに這の一大事の因緣を解脫しき。其の解脫せる彼が亡體の仆臥又た見事なりける歟！　彼は、彼の遺書を粘り置ける床柱を其の背後にして、肌をも袒ず、其襟を些か緩げたるばかりにして、腹一文字に掻切れるが、瞑れる眼は寬に閉して、曩に見し微笑を猶其の脣邊に見すらむ樣なりき。これに續きて、由井三左衞門、鵜野九郎右衞門兄弟三人、熊谷六郎右衞門、僧の廓然、泛々の供若黨、小者にいたるまで、或は其肚を屠き、又は互に其胸元を耦刺へたる、惡怯れたる形態は亡屍の上にも些見えずして、彼の遽しう聞えし聲たも、一齊なる最期の合圖とも今更ら思はれぬ。踏入りし小平治も、此の爲體の潔きに感じてや、多時は下知の話をも出し得で漫ろ暗涙に咽ぶのみ。與力、同心、心無の町役人らも、我組頭めて殊別たる恩賞に與からむ、此町の騷動如何あるらむ、と勇みし心も、悸えし胸も、今は失せて、鼻うち掀むもあり、聲低く念佛を唱ふるもありけり。血の腥臭ならでも、衆は些其面を背けぬ。

＊　＊　＊　＊

江戸御城なる焚火の間には、大老井伊掃部頭、酒井讃岐守、老中阿部豊後守、松平伊豆守の四人ありて、團欒に居列ばれたる、互に頭を衝合はし、聲を潛めて、物言はるゝ氣色も平ならぬは、今や彼の大事に曾る御用談の最中なるべし。看る、其の中央には、二枚の鼻紙に書認めたる書附の其の端方に鮮血の痕遺存れると、別に、下知の奉書めきたるもの數十通とは、堆高く積累られぬ。最も熱心に、最も心急きたる如き伊豆殿は、彼の血痕狀を執上げて、「掃部殿は然は仰せらるれども、彼奴が此の遺書に、私にして人數を催さむと欲するも敢て一人も其催に應

應せざらむ、之に依て紀伊頼宣公の御名を借り、御扶持を蒙むるの由披露す、全くは誰人よりも一人の扶持を受用せず、天の照覧他無き者歟、云々と書き申たは頭隠して脅隠さぬ、否、問ふに落いで語るにといふ淺々しい分別とも存ずるぢや。現に當夜も、彼の殿の御印の物をもて一時衆目を欺瞞さむと謀れる事、右京言上によりても明白おざる。況て追々徒黨の輩より差出いたる此の下知狀の判といふ、紛れも無い彼の殿のもの……。」言ひつゝ其の書附と、彼の奉書とを引披き、井伊殿が面前に差置きて、更に扇もて其膝を打鳴しつゝ、「我等は何とも、遁れぬ證據と、判斷申す。」爰に知る、此の血痕狀は、正雪が遺書にて、其を小平治が收り、右京が携へて歸れる物、又た他の奉書は、正雪が嘗て紀伊國殿御名を以て諸浪人を招きたる折に授與せる、彼の贋筆の御判の狀なるを。然して此は、豆州が許に急訴せる奥村七郎右衞門、八郎右衞門兄弟を初にて、其後追々諸方の浪人の返忠を申立つる輩が手より差出せる物なりき。言へば實に其の道理あるなゝ、彼者の故らに紀伊國殿御名を借りと書遺せること、死後までも迭に秘て漏洩さじとの固き盟約を含うせむずると、猶想へば、其身運盡きて其處に死なむも、其が首領たる彼殿にして無難ならば、早晩は再度殿なり、其れが額に刻まれたる皺の間より、良居丈高なる人の面を覩へば、此方は甚麼の會釋もなくて、「何義がおざらう？　御大叔父ともおざれ　紀伊國ともおざれ、見る體では謀叛の發頭ぢや。家老の者召喚いて仔細を訊問し、其容子によりては假に殿の官位を停め！　扨て根を斷ち源を塞ぐ、其れが外に何樣の處置がおざらう歟。」可怖しき眼は彼を睨めり。睨まれたる豐後殿は遽てし口に、「扨は、大義親を滅する……？」「勿論ぢや。政道の前には親疎貴賤の別は無い。それにより、彼の殿が、御先々代樣御以來から日上の巨魁、下世話の、臭い物に蓋を爲つゝも今日までは來申したが終局には此の爲體ぢや。大阪の内府（秀頼）の其人ですら、那樣體でおかせば、有らぬ徒輩の附着申て天下の靜謐を擾亂さるゝ、然るを此方は御存知の剛健者、簾中は加藤（清正）が娘、御内には福島初めの諸家諸方の浪人共も夥多しい。帶刀が存在たる時にこそ其奴等が頭を壓抑て、無事に橋をも通らせたぢや、前年の物故の後は家中は只洪水の暴れ矢第、檢束もおざらぬげに言ふ。現の證據が彼の前上樣が御他界の日ぢや、御途中の驗府に御座なされた際り其の正雪を夜盜に召さといふ、悄と御申しやれ。」喙を容れたるは豐後

（二百三十）

「ではおざらうも、是は大義ぢや。申さいでもの彼殿は御上樣の御大叔父、過錯たば人倫の大變ぢや。此は熟考ぢや。」掃部殿が平上落下ぬ挨拶を、悶かし氣なる豆州は、今打鳴らしたる扇を遣回は膝に突立てぬ、「大老の御遠慮、尤も其の道理はおはさうも、其の人倫の大變よりも是れは天下の大變おざる。天下の上には縱令肉親の御仲とても。……」鋭く歇語て、屹とばかりに一座を看回せる。問題は、測らずも、彝倫と政道と其の執方か重大かを評の目に爭ふ如くとなれり。年壯氣鋭に智慧逞ましき老中は、温厚沈着、世味の辛酸を咀嚼し盡せる大老と、あはや衝突むとはするなり。「實に是れは如法の大義ぢや。而て豆州分別は甚麼樣に爲られう

れてな、何事かの密議に其夜の明くるも知られなんだと確に聞き申す。其のみかは、此ほどの、未だ御百箇日とも経ざる大切の御喪中に、御遠慮もあるべきものを、正雪めが加賀屋敷の私宅へ多人数の士道はされて合壁を騒動さす、是れは正雪を召捕の為なんど訴人は申すが、扨て其の意趣は果然て甚麼やらむ。縦しんば其の彼奴が、何様の曲事あらむも支配たる町方へ一應の断りをも立られで私の御人数遣ひ、兎角は御自儘の沙汰、上を憚らざる御仕向、第一が其の一事を以ても正雪と御入魂におはせし迹は明白ぢや、旁、何分、此儘には差置き申されぬ埒と此の伊豆は確に存ずる、否、猶其の依然とありや、右の大阪、駿河様なんどより可怖しい御家の痼疾とも存ずるぢや。一も二も要り申さぬ、結句は雨降つて地固まる、家老共召喚いて伊豆自身に鞫問の仕つらう。御家の為の害物を除く、損せば我等が腹一つぢや！　想へば先年の兵庫めが訴訟の折、さしも我等が遮つて申た事を方々の拒否まれて……今更ら無念ぢや！」彼の突立てられし扇は、再び緊く其柄を握られてはたと〳〵と強く其主の膝を拍りき。義朝の父を弑し、清盛の叔父を殺せる、輿に我國の青史の面を糞土に瀆せるものとして世の博士輩は論ずるなれども、此は其れには倣るべくあらぬ、三代相恩の君家の為に、否、四海の安寧を其任とする幕府の為に、我が一命を賭して其の不逞の徒を誅せむとは籌るなり。此點よりして言はゞ志の切なる、理の純なる、誰か忠臣豆州の為に一掬の感涙を濺がざらむや。然れども、事若し協ふを得べくんば、と井伊殿は首を傾けたり。「残る處なくは承はるも、此の御仕置が當上様の御手初ぢや。御手初に大叔父たる殿をとあらむは？……甚麼と今一應、御分が分別・練り返して賜らぬか。」「然ればぢや。」と讃岐殿も其を賛けたり、「恐れは多いも御先代様御時に、駿河様御成敗も、人は善きには為し申さぬ。御日下でも既に爾うなる是は尚御目上、然も日光様、御愛子といふ旁以てぢや。指圖ではおざらぬが今一應の分別な。」「では、此の沙汰、ひつたりと罷め申すか？」其の異見に唾吐く如くに豆州は言へり。「いや、爭でか直たとは。然らば、御様にも致さうなりや？」温順しき豊後殿が口頭よりして、重げなる意見は出でぬ。其聲は低くして聞くを得ざるも両大老が首頷く影は遙に見えぬ。

（二回三十一）

大納言殿は、其の以来、太と甚う楽まずして おはしき。もとより世間のなべてなる前将軍家の御喪の中なり、嚴格なる御諚慎は、此の忠信なる殿として當然き御事なるも、猶其の御胸裏を覗へば、其れよりも他に一條の堪へ難う恨めしう、躬ら愧い思し召すの理由ありて然るなりき。其の御後悔は正雪なりけり。什麼ならむ人咬ふ馬も、騎手の技倆にして優れば其が悪癖は出さぬものぞ、箇程なる野心の奴も、我手に附けなば、終には眞正の武士と化ることの有りなむ、化らば天晴の家の重寶よ、其迄ならぬも其者が得たる奥義どもを我が肚倹幸に伝へさせなば、其猶愈剛愎くあらば、其時にこそ成敗もせめ、兎角は此れ程の奴を無惨々々と、とある海如す御心を斟み得でや、故意に其守衛を寛緩うせられしを物得つとして、彼は汚なうも遁げたるなり。封じたる毒龍は逸れぬ、それ、とある濘だしきに役人は慌忙て、前後の勘辨の間隙も無う其者が私宅へ人数を向けぬ。雖然空虚なりき。引返して言上すれば、殿は太くも驚かせて、目下の折柄に然る暴立てる沙汰、其方共は此の大切なる御喪中を何様にか心得るぞ、怪しかる次第かな、捕ふるとて別に手段の有るべきものを、心憂や、と難らせ玉ひしが、悠ては孜て已むべからず、忠蘭方へも潜みけむ、

捜れ、との御意なりけれども、亦飽までも祕密を旨趣との命なるに町方の手を借むにも能はず、左や右やの雑擾の紛れに何時か日の經ちて、七月も末旬なる、彼の事件は端無くも世に起れりける。遺む方なき御遺恨は今更ならねき。恁うとも知らば疾く町奉行にも告げ、其が支配を使ひてなりとも召捕へて成敗も爲つべかりしを、此の騒動こそ眞個に賴宣が身を慢じ、事を紛うせし、一代の過錯！　故御所樣には申すに及ばず、我心を熟く知せで、亡からむ後をと依囑せ玉へる前代の御靈位に對ひまゐらせても那麼と申し俯くべきや、憎きは彼等なり、愚かなるは我身なり、協るべからむには此が陳謝に、我腹一つ搔切て失せたきが、又遺せる、其れが中には予が身上をも有るべからぬ樣に書けりと言ふ。素奴が恨める心としては然も有るらむ。但し賴宣、躬の過錯を自ら責て腹居らむな易けれども、彼奴等に語はれ、御恩ある宗家に對ひて弓率き損じて、其れが爲に惜しき命を棄てたりとあらば亡魂の上までの無念なり。要こそある、今暫時を待て、御使を受けて、心中の樣眞直に申て抑後にこそ！　恁く思し食し斷らせ玉へる殿の御心は、倒々に淨潔て、燈るが如き炎熱の空に一頻せる驟雨の、熱塵に紛れし樹葉を洗ひて、猶且つ夕月の薄き光を散り行く雲の端に微白う出しやらむが樣なりける。物の哀れも世の懐しさも恁有る際とや、朝夕は只御歌をのみとなむ聞えたる。如是て四日五日と過ぎぬ、其の六日の日に御城よりの御使は來ぬ。明日巳半刻の御登城、上樣御對顏！

* * * * *

其夜における館の内の騒動は、震へる地震に崩壞れむとする家屋の下にも在るやうなりき。人は皆決死眼なり。其眼は彼處に集ひ此處に寄れり、其の口には、其舌には、此頃の忌々しき雜說！　明日の御登城四半時！　此程の忠彌が際にも、水戸殿は召されたれども此方には不沙汰なり、彼を思ひ此を思へば殿の御運も此時を限り歟！　兎角は紀伊國の水を飲たる程の者、かゝる場合に遇うて闇々と在るべきかは、先んじて討てや出でむ？　御先途の樣を見て追腹をや切らむ？　但しは殿を今宵にも急立て申て和歌山へ走歸り、眞個の御旗を擧げさせ申さむ歟？　如何、如何、といふ衆議は、いつしか家老水野馬が口を經て、殿の御耳に入りたりける。「好いは、然りとも相恩の奴予が下知もせぬ内に無三ともあるまいよ。只彼等にも、予が將軍家に有らむやうに、汝等も予に有れといへ。寃を含み、恥を忍ぶも、時としては忠義の一つぢやよ。」歌膝に頬杖突かせて、秋夜の靜穩なる御面地、明日の風雨の如何ならむも御念頭に無きもの、如し。

（二百三十二）

一昨日の八朔の餘波をうけたる今日は、日出づる候より俄然に空暴れて、天翔る魔の車乘かと見る叢雲の、安房上總の山々より、秩父淺間の峯々へ、前後に、左右に、追續け、引繼け、轂を列ねて推行くやうなむ看えたる後より、其が神軍の呼喚かとばかりなる東南の風、突然吼と落し來て、品川の海は、今か八百街を一呑に呑むが如きの可怖しき音を起てたる。夜は明けたれども、市中の家々は、此の光景に戸を鎖固めて、忠彌正雪らが殘黨の、再度の焚撃の其日かとも怖れたり。御城の内外なる見附々々は、近日來の戒嚴なる上にも戒嚴して、何處よりか鳴り出づべき報急鐘の、未だ聞かざる聲音に其の衆多の耳を聳立てたり。況て、麹町、赤坂、四谷、市谷なる紀伊殿が上中下の御館に近き大小の旗本家人をや、大納言殿が今日の御登城は、容易ならざる事情のもの有るをも知りぬ、萬一の變に自然の不覺せば、と心逸きは昨夜より御館の近所へ目星を附けぬ、温順き

は其れと無う討出の準備をなしぬ、其の支度も心構も取り〳〵なるに上下を論はず、士民を擧りて、知れるも、知らざるも、驚て起らむずる雷撃の、先づ電光を見たる如くに、此の天變と人異とを恐怖れたりき。如是る中に、昨日總登城と觸られたる諸役人は、辰の上刻より出仕せり。大名も、溜衆、帝鑑間、雁間、柳間なるは登營せり、其の下刻に尾張殿、水戸殿も御登城ありき。但し御供は常に倍して、御駕脇は特に嚴重に固められたる、鎖衣をも襲ねたらむが體とも見えぬ。劇搖を作れる大手先なる供待の大廳掛には、猶此時一種奇怪の風說なむ弄ばれき。其は此の日、不時に吹上なる山里の御殿に御直の白洲を啓かるべしといふ事にて、其の發頭と目指されたるは、衆目の見る處、紀伊殿とは誰が口にも唱ふるなれども、猶其の澁液の如何なる邊にや及ぶらむ、假にも正雪忠彌らに出入をさせつる、彼等が一味に其嫌の家來を出せし其等が向までにも祟らるべき歟、兎角は連判の狀は、忠彌が女房の捨棄たりとも、又は石谷殿が取りて御用部屋へ差上げたりとも言ふなれば、黨類たる者の穿議孰れとしても無くて已ざらむ、況んや返忠せる輩の日に五人十人と今も無間斷をや、其等が、有らぬを有る樣に白ふ口を一々取られなば、我が主とて、我が屋敷とて、何時、如何ならむ御煞度の舞ひ來らむも測り難き歟、否、今日の殿中にて不慮の御咎は受け玉はぬ歟、と大手に聞ゆる呼應の制止聲、一丸の茂林に吹荒るゝ暴風の音にも驚破といふ彼等が眼光は運ばれて、半日には其の貯方の吝嗇を嘲つ腰辨當も、此日のみは其多量に飽倦つ、心痛の胸に湯茶さへも快くは通らぬなりき。總て、人は目下の一時を危めり、天は其兆を暗示し顏に、暴れに暴れたり。

* * * * *

城外は如是きに、殿中の氣色は什麼。御表と中奥との境界なる御三家御休息の御間には、尾張中納言光友卿を上座に、次座には水戸中納言賴房卿ぞ在したる、其前に謹みて控へたるは彼の井伊、酒井の兩大老と、伊豆殿、豐後殿、其餘三人の老中とにて、彼の數十通の判狀と、正雪が遺書の寫とは御前に披露せられつつあり。御披見は有りたれども、兩卿には甚麼とある御沙汰も無し、豆州は御傍へ稍進まれぬ、「御判の證據、儕樣に明白とござーある上は有無も無き御成敗とは存ずるも、亦同列にも彼是の評議もあり、上樣には猶更に御大事の義と再應の御沙汰おはします。これに依て今日御前に仔細の御訊問もおはさうずる、御陣謝の旨も聞し食さうずるとの御義にて、御兩家樣にも御列座との御事にござりまする。但し眞直の御中腑滯りなくましまさば公私の幸ひ！ なれど、偖か御容體の醜うおはして連坐紛れ無うおはさむか、眞に以て御據ろ無き義、恐れはおざるも征夷の御任の御面表に對せられて相當の御處置遊ばされいでは……。自然に不祥の振舞とも御目に立ち申さむも、其邊は豫て。」此の言上に先づ驚かせたる兩卿は、「伊豆、不祥とは？」「取固め申す義にござりまする。」「譬中にてか？」「御廊下の詰りにて、……既や番士の者數十人、其手組を申付てもおざりまする。」其が決心たる聲音、目下の急に迫れる形勢、類瀾の既に回すべからざるも猶其を萬一に防止て、と水戸殿は扇笏に執り直し玉ふ時、「紀伊殿御上りにおざりまアす！」坊主の此聲は今日の殿中を愕かせり。御時計の間の四半時は此時轢りぬ。

（二百三十三）

但見る、紀伊大納言殿は、近江麻の水色の御帷子に、同じ麻の社衿を召し、手には細竹の白扇を尋常に把らせたり、遽てたる態も、異める色も無くておはせるが、只此日の此腰間には、

故御所様より拝領とありて身にも換へじと思し食す、頼宣が萬一の時節にはと日頃御諚の、倶利加羅正宗の御小刀なむ金覆輪の鍔かけて佩せたる。

莞爾との御笑顔、徐かに御座に着き玉ひて、「ほう、これは兩卿には御早い事ぢやの。扨、上様には、愈〻御機嫌好うおはすか晴な。御疳氣もあらせられいでか。」御傍なる豐後殿を回顧り玉へば、阿部豐後守、「御氣色殊御麗しう渡らせられまする。追對の御對顏。御三家様とも其の御用意あらせられまするやう。」申し訖りて一同に目を換すれば、大老、老中、これを機會に其座を起ちぬ。殘れるは尾張殿、水戸殿なり。尾張殿は御腹こそ異へ、御血統より申せば、大納言殿は御叔父なり、況て水戸殿は紛れもなき一腹の御弟にてましますをや。血緣より言へば目上、門族より推せば長者におはします此殿の、凡下の輩に看す〳〵擧め取られむとし玉ふを、知らせずば扨在らむ、知りて、然も注告の協はせざる、倒々に釘の筵に自個と座ますらむやう苦惱に堪へ玉はぬか、御年壯き尾張殿は、不覺御疊の紙を御目に當てさせぬ。分別の盛りにおはす水戸殿は、其の救護の方を案じさせぬ。大納言殿も別に仰する由も無くて、其の扇の蟇目、穩かに膝の上に走らかしつ、手弄ぐり玉ふ時、水戸殿は突如、「あ、謀書！」獨語き玉ふ御聲の高きに尾張殿は驚きて其方を瞻たまへば。「いや、何條事もおはすまい。如是る淺どい事はゝゝゝゝ何を老中が周章して！　や、紀伊國殿、今日は執政輩が面白い狂言のして人々に見せ申すげぢや。但し殿には初終見物人として只御覽じておはせ、尾州と我等が總て捌かう。尾張殿も其の狂言の仕手にお爲りやれ。はゝはゝゝ。」水戸殿は俄に御心地快げの、御面色も爽げり。大納言殿は只微笑てのみおはします。

＊　＊　＊　＊　＊

大廣間の上段、黑漆の御框の奥の御座には、倚ほ御裲襠のみにて、將軍家は出御なし。向ひて右の方、桃果の繪ある御袋棚の下なる中段には、紀伊大納言殿御座なされぬ。其れより下段となり、御座敷にうつりては、津山、福井の御一門方、加賀、薩摩、仙臺、長門の國主方、次に城主、十萬石以上以下の面々、譜代を論ぜず、中將、少將、侍從といひ、諸大夫といふ、官位の高下と、其家の格式の順序とに依りて整々として居流れたる、鎌倉山の星月夜といふ當時の光景は見ぬ代の昔なり、其れには倍せる百を以ても算ふべき今の柳營の繁昌、大小名、諸有司の員數の夥多しき、唯是れ武藏野の秋草に榮ゆる千種の花、尾花が末なる湛露の繁にも似たらむ歟。好個、看得て好個、驚の如くに列なり、鵜の如くに班べる彼等は、此の翳然としてあるを、林木の蔭きが如く、鱗焉として夏雲の襲れるが如き御座敷の爲體を見ては、今更に幕府の威勢に慴れたり。然して同時に、正雪忠彌らが、姦片を以て洋海を量るといふ其身の程度を知らざる匪謀の愚かなるに唾吐けり。其れと父た時を齊くして、所有る衆瞳は、其の中段の首座におはす紀伊國殿の御身の周圍に攢りき。恁る處に、警蹕の聲は御廊下遠く聞えて、萬衆一齊額を埋め、息を凝せる頭の上を、簇々との御袴の響、亙るかと思へば。「御禮、申上げませい！」誰殿にや有らむ、執政の一人は、叫べり。一同は再び其額を衝きぬ。千疊に近き、廣き、濶き大廣間も、水打たる庭の塵一本だも動かぬ如し。窺に瞻仰れば、上様には、上段の彼の御裲襠に裃に在します。今年は御十一と聞ゆるも、御丹は偉大く、御威容の具備りて、白茶宇の御袴に、黑き御紋附の羽織人々の御禮を受けさせて纔に御首を頷かせ玉ふやうなるも、天晴れ四代の御世繼とは見まゐらせぬ。

同じ中段の左方なるも、御三家とは少し下り

て執政の七人は列座せり。時に、掛り老中、松平伊豆守は、稍中央に其席を進めて、将軍家を背向に、取閙ふやうに爲まるらせつゝ、懐中より四五通の書附を出しぬ。言ふにも及ばず、是れ正雪が遺書と、彼殿が御判の状といふものなり。

（二百三十四）

伊豆殿は、徐時、御座敷に向ひて、威儀厳重に、「上意！」峻急なる聲は高からねども、靜り返れる御廣間には、遠く響き、近く響へて、突然疾雷の一聲山谷に震ふやうなりき。凜たる衆は、三たび、其角を崩すが若くに稽首しぬ。「此度、浪人、由井正雪、丸橋忠彌等、徒黨を語ひ、諸國を、亂暴いたすべき結構の處、急訴の者これ有つて、露顯に及び、それに依て正雪は駿府において、忠彌は江戸において、或は自殺、若くは召捕られ、相濟み訖んぬ。然る處猶右逆坐のもの有無につき、御不審の廉これ有り、今日御前において、老中阿部豊後守、松平伊豆守兩人がはり、御訊問の事あらせらる。右、一同、上意、存はりませい！」伊豆殿が語尾昇なる當席の演述を了れば、掛りの一人、阿部豊後殿、座を前まれぬ。「紀伊殿、上意！」大納言殿は、あッと仰せて、畏懼れ、且つ恭敬みて、御手を支へらる。「正雪事、前年以來、御手前様御頼みとの趣を以て、其の御判の状、諸浪人共へ與へておざる。此義、極めたる曲事、千萬御心許無き埒とござ有て、屹度承はり糺せとの御詮、先づ其状、熟と御披見。贋て眞直の御陳述、御尤も無。」伊豆殿が手より受取りて、阿部殿は彼状を殿が御前に推遣らる、看る、兩人が眼は、其の一人の眼よりも瞬りて血迸りて、状を執らす御手の戰ふや什麼。御呼吸、御面色の様、果然其れか否ぬ無と、右より睨つ、左より睨つ、些微にても其氣勢のおはさむには、と皮肉を剖けたる御胸の裏にも其心を配れりき、列居る面々は、阿呼とも恐怖て言ひ敢へぬ、彼の執政等が法を執るの峻なる、非を鞫すの嚴なる、親疏も貴賤も其嘯中にあらぬ如くなるに戰慄きたり。況て彼の正雪忠彌らに一面の識ありと言ふ人々をや、我にもあらぬ冷汗の平伏せる額の上、腋の下にたく〳〵と滴るを覺えず、頓ては我上か、彼殿の御應答は如何と狼狽つる耳を側てたる、時に御庭なる風は盆暴れて、雨さへも加れり。大納言殿の御容景は、豆州が眼には、蓋し憎きほどに沈着て見えたるなるべし。殿は彼状を悄と取らせて、謹みて一應御覽あり、漸くに御脣を綻ばさむと爲玉ふ時、御隣席なる尾張殿は横合より、「豊後、右は謀書と見るぞ！」伊豆殿は驚きて手を擧げぬ、失禮と心づきて遽に其手もて衣の襟をば摺合されしが、猶些と逡巡ひて見えたりき。阿部殿は透さず、「御口入は少時。御本人の先づ御陳述ありたる後に、思し附の義とおはさむには、扨。」「いや、紀伊國の胸中は存ぜず、某が見たる處は謀書に紛れ無い。謀書と見つるは！」豆州は微笑みぬ。「これは扨て御壯年の御一轍、思し召す儘の御申しとはおはさうも、是れは天下の御大事、別しては御前とおざる。其證だもこれ無き事を無三と御口外ござありては……。」「甚麼といふ其證とや？」證とや、とはの玉ひたれども、水戸殿が曩の御獨語を、年少の血氣、魁けて仰出されたるものなれば、其蘊奥の底までには未だ考慮の及ばせで、御口も忽諸痞塞りぬ、御赤面と見えたるを、水戸殿は騒がず、「證もある。某も其は謀書と見つる。」衆は駭けり、御家格こそ三家の末位にておはせ、柳營の副將軍として、沈深寡默、然も發すれば必ず中る、水戸殿の御詞として、其證據ありと仰せらる。此の發揮たる御詮には然しもの伊豆殿も良二の足なりき。「證とござる。如何なる證

おざる？」「紀伊國が旗を擧うに、其の浪人を賴まるゝか？！」鐵案は下れり。人々が耳には熱嶺を過るの鈴聲とも聞えぬ。豆州も其首を稍傾けたりしが、今一通の御判の狀を引拔きて驅て水戸殿が御前に指附けぬ。「御諚にはおざあるも、此の御判をば？」甚麼樣に斷じて、恁麼樣に撰滅さるゝかと、豆州は問へるなり。

（二百三十五）

水戸殿は些しく御居丈高の姿勢なり、「伊豆。當代の分別者と聞く其方が言としては些と不穿議かとも覺ゆるぞ。其判が餘人の物とあらば何と爲る？」「はッ。」恁う申す賴房が判とあらば、其方は猶某を疑ふ歟？」「一應は其義を申進ぜまする。」「むゝ、然らば、我等が物にもあらで、松平伊豆守、其方が判形とあらむには何をか致す？」「はッ。」一人を驅るは腹をもて察い。假令其方が判とあらむも忠義を無二なる其方、執政に私無き伊豆が平生を知る以上は、賴房は、只其狀を狂人が所爲、若くは讒姦の輩が所業として毛頭も懸念せまいぞ。紀伊國とて其通り、御前代には御叔父、當上には御大叔父、一門の長者として、紀勢兩國五十五萬石の大名として、柳營の御待遇、世人の崇敬、何の不足か只今の靜謐の御代を攪亂して然でも無き浪人共を語はるゝなんどの事あるべきや。況て平日の忠厚、無二の御心懸諸事只宗家の御爲を一途とのみ存ぜらるゝ、此等は上樣御賑代をも仕つる其方等が油斷無き吟味を爲いでは協はぬ義とあるべきを、心にも似ぬぞ。伊豆！」層に熱心なる尾張殿は此御言に續きて其足らざるを補はせぬ。「段々は實に隙間もおはせぬ。猶我等申さうなりや、紀伊國にして眞實其の旗とあらうに、現在の一腹の兄弟、又近れざる血緣の我等共へ一度の談合の無いとの事おざらうや。然るに無い！　只其の賴憑とせらるゝは錄み凍えみ、今日を送りて明日をも知らぬ一所不住の浮浪原といふ、恁る無道理の事世間に有るべき理由歟、殊に其判狀の謀書たる正雪めも其の死際に書遺しつる。死人に口無しとは言へ、人の死むとする時其の言ふことや善しと聞く時は、其の遺書の一つ、紀伊國の寃名を雪ぐにおいて十分の證據であるべきを。やア伊豆、豐後、光友の恁く言ふが非理歟。恁くても紀伊國殿御不審と申做す歟、眞直に申せ。申せ！　血氣の殿は膝に乘られし、御前も忘れて御疊をすら叩かせ雜ねまじき御氣色なるを、暫くと停めさせたるは紀伊國殿なり。紀伊國殿は、これより先き、我が庇護を任とし玉ふ如き兩卿の御芳志、又た執政等が幼君を補佐の其の手段として、特別に恁る糺彈を公然にしたること、眞正に水際離れたる微妙の計畫やなと、彼れを感じ、此れを喜び、漫ろに暗涙さし含むまでにおはせしが、此時漸々御口を啓かせたりき。「是れは／＼、尾州と申し、水戸と申し、我等意表の奧の底までを御存知にての御陳述、近頃の過分ぢや、只此上、我等一言申し添うは此の一埒たる最早や何との御氣遣とて在らせられぬ、當上樣御治世千歲、めでたしとも中々、と斯う申上げうずる其外には何もおはさぬぢや。伊豆、豐後、何と然は思はぬ歟。」思ひも懸けぬ、いと御打解けたる御會釋には、階上階下、彼の御廣間に在りとある其の三百に近き面は呆驚に呆驚れたり。猶ほ、其の御言の意味を繰に解せしは百の二三にて、許多は猶此殿の御膳の剛傲なる、近れぬ場所の負じ魂にもやなと、且つ惑ひ、且つ嘲笑ひぬ。豐後殿は儼と居直られき。「めでたしと御沙汰におはす、甚麼事の御めでたさにて御座あるやらむ。一埒、御氣遣おはしまさぬと申す其の御仔細は？」殿は微笑せぬ、幾回打頷せて、「其義であるよ。仔細と言ふはな、彼の惡徒輩倘か外樣の人々が判を似せ、謀書ともせば、畏こし三代の御恩を忘れ、氣ばし狂うて然る逆

心を企圖てつる歟との御疑念もはさむ。然るに倖ひなは此方判を似せつること、物怪の義で無き歟、尾州、水戸の申しの如く賴宣未だ浪人を語ひ、其の力に藉りて思ひ立たう抔いふ程の甲斐無さでも無し、又た御恩の宗家に弓牽まゐらせて天下をといふ如き獸心も有たず、其等は先年、兵庫といふ狂者の有らぬ事訴せし際に故帶乃して委細を申述べ置せつる、我等心底、當時も今日も毫差違はぬ、是れは日光も御照覽、偽らば的面の御罰、何の疑ひの有るべきや。但し、恁くは申せども……。」と、仰せ懸けて上段におはします愛々しき上の御容粧を沁々と瞻仰させしが、忽地はら〳〵との御落涙に少時其の御舌も濕みぬ。

（二百三十六）

良有りて、殿は、落る涙を掻き拂はせ、一面には上の御座に、一面には老中に指向はする如くに在しつ、御言も打續りたる、「とは申せ、如是る徒輩に判偽造らせ、苟にも天下の人の耳を驚駭かし、御幼少の上に、暫時ともおはせ、御胸を痛めさせまゐらせしこと、全く賴宣が不肖、何と御謝辭を申上げて宜しきやらむ詞の品も辨まへず。所詮は唯今、御預りの紀勢兩國五十五萬石を返上仕つり、和歌山の城地滅却いたさせ候はむ、然でも猶御心許なく思ぼし食さば、如何樣にも某を仰せ付られ下され候へ。賴宣が所願は、只天下の靜謐、人民の安堵、柳營の御威勢の奕灼うおはしまさむより外はござ無く候ふ。やア伊豆、豐後、其餘の人々も熟う聽き候へ唯今我等が、御治世は千歲、一埒は御氣遣あらせられぬ、めでたしとも中々、と言ひつるは此の覺悟よ。賴宣世に無くば甚麼か有らむ。とは申せ。此の御殿愛氣の上樣御前途を見奉つらず、愁ひ三家の一家として、事有らむ際其一方をと豫ては念ひつる、所望も空しう、闇々と此世を看終てむな、何ぼうの無念！遺恨は此事のみよ！　南無三寶！」撲地と御掌を組み合せて、御目を瞑させ、覺悟の御臍を決めさせたる御容態、白き御鬢自然に震ひ動きて、金輪より生ひし大磐石に迅き山風の霜華を吹くにも似たりけり。滿座は塞からざるに慄けり。然も徒死默せり。「伊豆、其の遺書を。」爽かなる御聲は忽地上段の御褥の上にあり。伊豆守は恐惶として進らせぬ。「紀伊國の爺、疑念ははや無いぞ。今が尾張、水戸の兩家も申しつる、予も彼の正雪めが遺書、其方が名を僞りしとある段は眞實と思ふぞ。御父樣の、亡い後は賴めと仰せつる其爺が、何の予に謀叛など爲るものぞ。疑念は些とも無い。先づ此書を見い。」彼の遺書を御手からに與させ玉ふ。紀伊殿の御驚きと、御喜びとは、夢中に喜夢を御覽するやうにも傍目に見えき。「高聲に讀め。」「はッ。」とは仰せしが、其文字には、猶慄るべき言の多きに、闕はするを。「遠慮すな。人々にも聽かせい。」噫御腹量の宏大なる、御十一の、是れが御意か？　と殿は只嬉しさの遣つるばかりに驚かせしが、癪て其書を引披かせて、御聲は高う聞えぬ。「今度讒奸の人有り、某謀叛を企つるの由台聽に達するの間、討手を下さるゝの段至極仕り畢んぬ。但し賤卑愚鄙の身を以て、何爲ぞ四代の天下を亂破せしむるの事叶ふべけむや、須らく圍り給るべし、螳螂が龍車を遮るの譬にしも足ざることを。然りと雖も天下の御政法無道にして、上下困窮せしめぬ、誰かこれを悲まざらむや、然も適賢慮を以て、松平能登守諫を爲よ世を遁るゝ所、却て狂人の沙汰ありて忠義の志空しくなる、是を不思議と謂はざる可むや。某不肖の身と雖も、天下を困窮せしむる所の奸人、酒井讚岐守等を遠流せしめむが爲め、僞謀を企て、人數を催し、籠居せしめ、右の趣段々言上せしめ、其上は奉行所の差圖に任せ、身の安否を定めむと相謀るの所

成就せずして殘覺滅亡し畢んぬ。又、私にして人數を催さむと欲するに、敢て一人も其催促に應ずべからず、依之て紀伊頼宣公の御名を僞り、而も御扶持を蒙るの由披露す、今くは誰人よりも一人の扶持を受けず、天の照覽他無き者歟。申達するの旨繁多と雖も、時急なるの間之を申し殘す。恐惶謹言。慶安四年辛卯七月廿六日。由井正雪。」讀み了りて、御氣色を覗ひ玉ふ。其の御氣色は麗はしかりき。

一嘯、爺、其通りぢや。正雪めも謀書の判とは確正に白うた。ぢやが嘯、其他は皆取るにも足らぬ。掃部もあり、讃岐もあり、豐後も在り、伊豆も在り、天下の政道は何か無法ぢや？　能登は、あれは發狂ぢや。讃岐を奸人なんどゝいふ、憎い奴ぢや。自滅したは惜しい。活て予が面前で其の惡口の舌を抜せても見たうあったぞ。伊豆、其の擧めた奴原に、今の政道何事が惡るい、と確に問へ。座敷も是れ迄ぢや。皆大儀！」仰せ棄て突と其座を起せ玉ふ、御言辭の凛々しさ御容體の老成し、從外の恐怖は去りて又新らしき畏懼を加へたる御座敷の大小名らは小草の風に偃伏す如くに首を垂れて、衆心一樣に、此の幼稚なる將軍家の御前途に戰慄をなしき。此時、雨は驟み、風は收まりて、亭午に耀やく陽光、御簾下の端に晃々きたり。喜びの御餘りにや、將た正雪が有繋にも斯うと書遺しつる其の健氣さの感慨の御涙にや、搔暮れてましまず紀伊殿が御傍に、尾張殿、水戸殿あり。「殿、扨殘る方もおはさぬ。我等ともに日本晴ぢや。」「げにも日本晴！　總ては只日光の御光り！　我等此の老年に及びて如是き嬉しい日を見るも、總ては日光の御光り。あら尊くや！」

＊　＊　＊　＊

安部川の畔、名におひて吹く木枯の森の此方に、此冬の初め、一宇の庵室は結ばれたりき。扁漏る看經の初終には、必ず此の歌なむ誦して、其の詠人の佛果菩提を禱るといふ。其歌は——

秋はたゞ馴れし夜にさへ物憂きに、
いづく宿りの門出なるらむ。

是れ正雪が最期の一首なり、此の一首を志ざす人の名に換へて念誦する其庵主は、年若き尼とかや。年若き尼、正雪が辭世、噫、彼女は果して宮か。

（百九十一）

彼が今言はむと爲なるは、實に彼が此の年來、此の月來、其の胸臆に蓄へ、其の心頭に煉りたる、有一微妙、無二亦無三てふ證たりき。雖然、これを口に爲むには、赤た先づ己身の生死を賭せざる可からず、其は、彼が放てる舌頭の箭尖にして念ふ敵の胸腔を射洞ば可し、過ぐたば其場を去らず、可悟しき彼が首は其の三尺の劍先に懸けられなむ、便ち是れ虎口裏に殘を奪ふもの、凡は彼が一代の大手腕は、實に此時に於て現されむとしつゝ有るなりき。其の說話とは那麼ぞや？　言ふ迄もなき御謀叛の勸告なり。

彼は暗開きたる眼を半ば瞑ぢて、うち鎭め玉へる殿の御息と呼吸を合せぬ。嬲て語調いと徐かに、此方を顧りて、一對馬どの、大學、凡そ神佛の擁護と申すも、其の祈禱者の信心、不惜身

大意はその唯一の單行本たる『德川實紀』由井正雪（明治四十年左久良書房發行）が底本とし、明らかに誤植脫落と認められる箇所のみ、發表當初の「東京日々新聞」（自明治三十年九月至三十一年七月）に依りて訂正せり。尙右紙は第百九十一回として左の一文を載せ、以下一回づつ『德川實紀』のものと相違せり。故意か否か推するに由なければ敢て本文中に加へず、こゝに掲錄す。（編者）

命といふ境にいたりて初めて冥の慈眼といふも有るものぢや。日光、八幡、熊野權現の御加護とて、水無きに月は宿らぬ。先づ某が胸裏の祕を御聞きやれうず思し召さば、正雪を其の神の使者、申す口を其の示現とも思されて、扨て後の事。いかに其信を御執られうかな？」彼は故らに微笑みつゝ問ひぬ。對馬は思ひ難ねたる肩を顰めつゝ、「其れは勿論信をも執らう……雖然、先づ御申しやれ、否は聞き申しての以上の事。」「はゝ然らば未可しぢや。苟初にも神の示現を然、容易うは口外されぬ。但し、恁う申す民部介を神の示現受くべき者か、將た受くまじき者か、如何と思しやる？」驚くべき問に、此方は困じぬ。「其れは御分が、受くべき者か、受くまじいか我等は知らぬ。先づ只今は其の示現沙汰後にして、如何にせば殿が此の御難義除けられうか、紀伊國御安堵召されうか、其の分別の聞きたいぢやまで。御分も故々早打として殿樣御爲に當所までも渡せられた仁、忠義の程は我等とて感心いたす。其の心底に對せられても御爲の意趣は一刻も疾う御聞にも入らるべき理由、今更らの猶豫の體は何とやら御如在のある樣にも見え申して……曲もおざらぬ。」大方ならぬ不興の語にも彼は念じて感ぜぬなり、猶其頭を左右に掉りて、「兎角は我等を猶危險い者やうにも思ぼす。右にては申すも無益ぢや。然りながら熟う思うても御覽ぜ、祿高こそ、役柄こそ、又た御官位こそ貴所は正雪に勝りておはせ、善く古今の成敗を視、國家の盛衰、人心の歸嚮を考へて、時の宜しきに投じて躬の武運を全うする、憚りながら其は某を百にして其の一にだも及ばれぬ。民部、決して自讃でおりやらぬ。民部、名のみは御當家の御家來、なれど俸祿は一口も戴きませぬ。以前の儘なる浪人！　されど門弟として我等腹心股肱たる者三千人、其餘心を同くし、志を通はす者、總じては一萬に餘りて有ちをりまする。鶴翔の器量ござある士、縱し御家來とおぢやらしやらぬも、如是る節には故意々々の御招き、御談合どもも有りて然るべき道理。見申され、故大御所樣伊賀越の御難（本能寺の變）の時も甲賀の多羅尾輩召させられて御賴ませ有たればこそ彼の危險いをも免れさせた。目下の御有樣、太平と戰國、文と武との差異こそあれ進退ともに協はせられぬ御危難は同一。爰處は一番當時の本多殿（忠勝）勇斷を發されて、殿の御身御泰安を計畫らせらるゝが老職たる御身が任でもおざらうを、故々にも及ばぬ、遙々と馳參じて殿樣御先途に立たうと申す我等を疑慮はれ、左や右との御逡巡ひ、近ごろ田舍なう見え申すぞ。古の聖人は猶美の者にも諮る、況て是は正雪おざるぞ。曲無いと言はゞ此方こそ曲無うおざれ。只、信を御執りやれ。神の使者として我等申すに就せられい。萬に一も御過失はさせ申さぬ。」滔々たる雄辯、洪水の堤防を決して一瀉千里の猛勢をもて進む如きに、彼方も面を向け難ねたりき。少時くは猶躊躇へるが、終に是非なき彼が呼吸に捲込れて、對馬「然らば、兎角に……殿樣御爲に惡しう無き限際なりや……」「勿論の事、兎てもに御誓言！」「大小の神祇……水野對馬、貴老が敎示を受け申さう。」

年譜

嘉永元年
三月一日、江戸市ヶ谷合羽坂上に生る。幼名直太郎、後靖と改む。縦死、澁柿園、又しかまと號す。
家は代々幕臣たり。

元治元年
九月、京都に赴き、二條城の定番となる。間もなく辭して大阪に赴き、御目附木城安太郎の許に寄寓す。

慶應二年
木城安太郎に從ひて東上、相模、武藏、上野の諸地の開墾、水理、河川改修測地等に從事、十二月末、江戸に歸る。

慶應三年
奥儒者小林柔太郎に就き論語、孟子等の輪講を事とせしも、尊王討幕の時世に卽戰せられて書筆を捨て柔劍の道に勵む。爾後二十一歳に至るまで兵馬倥傯の人として寧日なし。

明治元年
靜岡藩士となり駿州田中に移る。

明治二年
沼津兵學校に入學。後、靜岡の鞫學校に入る。

明治三年
藩命を以て薩摩に遊び、歸來靜岡の集學所に入り武技を修む。集學所の解散するに及んで某地方の小學教員となる。

明治七年
横濱毎日新聞社に入る。

明治十一年
横濱毎日新聞社を辭し、東京日々新聞社に入る。

明治十五年
韓國京城の變あり、東京日々新聞社より特派せられて渡韓、『入韓紀實』を著す。歸來同紙の小說欄を擔當す。

明治二十二年
一月『曼府叛亂』を『萃錦』に、八月『書學校濫衣の卷』、九月『くされゆび』を『國のもとゐ』に發表。十一月『條約改正』を上梓。十二月『號外附錄』を『都の花』に發表。

明治二十六年
六月『丸と釘貫』、十一月『長篠合戰』を『東京日々』に揭載。

明治二十七年
一月『山中源左衞門』、五月『山崎合戰』、九月『碧巖錄』を『東京日々』に揭載。

明治二十八年
一月『出征留守宅』を『東京日々』に、五月『他流試合』を『太陽』に、六月『北條早雲』を『東京日々』に發表、十二月『最上川』を上梓。

明治二十九年
一月『淨瑠璃坂』を上梓、三月『密告』を『太陽』に、四月『伊達政宗』、九月『小牧合戰』を『東京日々』に發表。

明治三十年
三月『島左近』、四月『小牧後日』、九月『由井正雪』を『東京日々』に、十月『大風乾之介』を『明治小說文庫』に發表。

明治三十一年
一月『滅切主』を『世界日本』に、『二度相撲』を『大日本』に、『三千石』を『太陽』に、五月『島勘左衞門』を『文藝倶樂部』に、八月『惡遁』を『天地人』に、同月『六連錢』、十一月『大島逸平』を『東京日々』に發表。

明治三十二年

二月『五月女坂』を「文藝倶樂部」に、五月『印地』、『幡沼』、九月『脱走兵』、十一月『でれ醫者』を「東京日々」に發表。

明治三十三年

一月『八千代丸』を「東京日々」に、二月『罰あたり』を「文藝倶樂部」に、四月『一命』を「東京日々」に發表。

明治三十四年

二月『妻の心』を「文藝倶樂部」に、三月『石井兄弟』を「東京日々」に、五月『聚樂殿』を「文藝倶樂部」に、七月『別木騒動』、十月『其覺悟』を「東京日々」に發表。

明治三十五年

二月『俠足袋』、六月『三郎殿』を「東京日々」に、意地組合『盃』を「つり忍」に、七月『片桐且元』を「文藝倶樂部」に發表。

明治三十六年

一月『一本槍』を「東京日々」に、『地縛組』を「文藝界」に、三月『天下茶屋』を「東京日々」に、『鐵火』を「文藝倶樂部」に、九月『釣天井』を「東京日々」に發表す。

明治三十七年

一月『馬渡し』を「文華」に、二月『虚無黨』、六月『功大』を「戰爭文學」に、十月『軍財布』を「新聲」に、『暗撃』を「文藝倶樂部」に、『大石良雄』を「東京日々」に發表。

明治三十八年

五月『宮くづれ』を「文藝倶樂部」に、七月『淀殿』を「東京日々」に、『赤穂城』を「太陽」に發表。

明治三十九年

一月『割り淀殿』、五月『天草一揆』を「東京日々」に、『釜煮』を「文藝倶樂部」に、六月『眞の武士』、十月『鬼武藏』を「武德」に發表。

明治四十年

六月『碧玉盆』を「大阪毎日」に、『新粧法』を「文藝倶樂部」に發表。

明治四十一年

一月『猿冠者』を「大阪毎日」に、二月『眞田幸村』、四月『水戸光圀』を發表。五月『水野越前守』を上梓。同月『家康公』を「毎日電報」に、『不老術』を「文藝倶樂部」に、『石川五右衞門』を「大阪毎日」に、八月『是非もなき』を「文藝倶樂部」に發表。

明治四十二年

一月『振武軍』を「新小説」に發表。六月『俠足袋』を上梓。七月『親の面』を「文藝倶樂部」に、『幡隨院長兵衞』を「毎日電報」に、十月『村井長庵』を上梓。

明治四十三年

一月『犬の皮』を「毎日電報」に、三月『ではどんな物』を「文藝倶樂部」に、五月『三代景清』を發表。

明治四十四年

一月『賤ヶ嶽』、『桔梗の笠』を「大阪毎日」に、三月『藤江』を「太陽」に、六月『西郷隆盛』、七月『錢屋五兵衞』を「實業倶樂部」に、『うしわか丸』を「日本少年」に發表。

大正元年 明治四十五年

二月『茶磨丸』を「中學世界」に、四月『佐倉宗五郎』を發表。五月『戀の秀吉』を上梓。

大正二年

『孫子講話』上卷を上梓。（中卷は翌三年三月、下卷は五年七月上梓。）

大正四年

『歷史の教訓』を上梓。

大正六年

二月東京日々新聞社退社。四月『新說龍金五人男』を、大阪毎日に掲載。六月五日『烈女さつ』を執筆中逝去。

昭和三年五月二十五日印刷
昭和三年六月一日發行

現代日本文學全集　第三十四篇

著作者代表　中村吉藏

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一一一番
二二二二番
三三三三番
四四四四番

改造社

精文堂印刷所